西新町遺跡Ⅶ

－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第17次調査報告書－

福岡県文化財調査報告書 第208集

2006

福岡県教育委員会

県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告書6

西新町遺跡Ⅶ

－福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第17次調査報告書－

福岡県文化財調査報告書 第208集

2006

福岡県教育委員会



7 号竪穴住居跡石錘出土状況

巻頭図版２



１．１区全景（南から）



２．１区東壁土層（北西から）



３．２区全景（北から）



１．３区古墳時代遺構全景（西から）



２．３区古墳時代遺構全景（南西から）

巻頭図版 4



1．3区古墳時代遺構全景（北西から）



2．3区古墳時代遺構全景（北東から）



3．3区東端古墳時代遺構全景（北から）



4．1～3号竪穴住居跡土層（北西から）



1．1 号竪穴住居跡カマド（南西から）



2．37 号竪穴住居跡（南西から）

巻頭図版６



１．１・２号住居跡



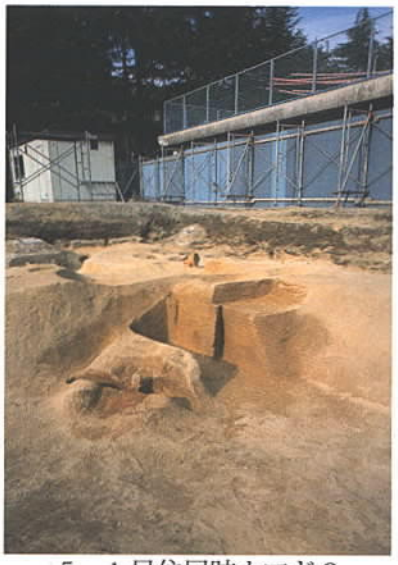
２．１号住居跡東部



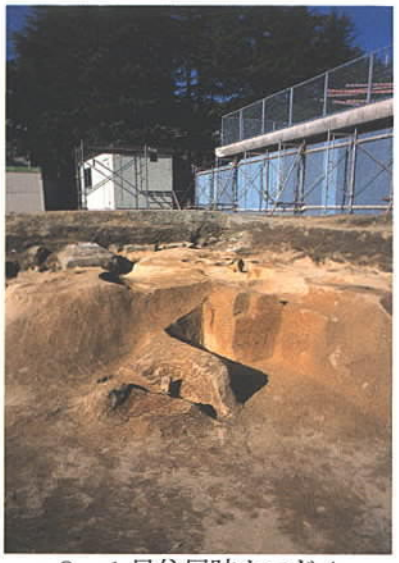
３．１号住居跡カマド１



４．１号住居跡カマド２



５．１号住居跡カマド３



６．１号住居跡カマド４



７．１号住居跡カマド５



８．５・22 号住居跡



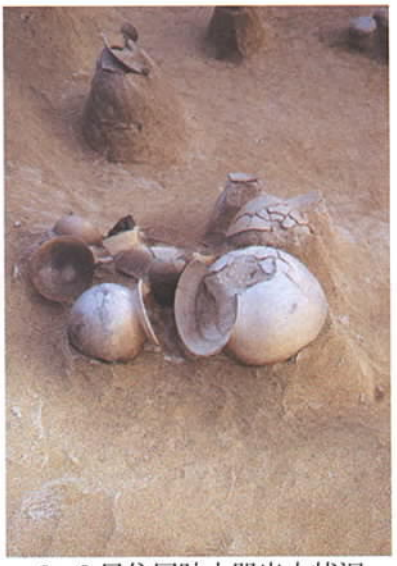
９．７号住居跡



1．8 号住居跡



2．9 号住居跡



3．9 号住居跡土器出土状況



4．12 号住居跡カマド



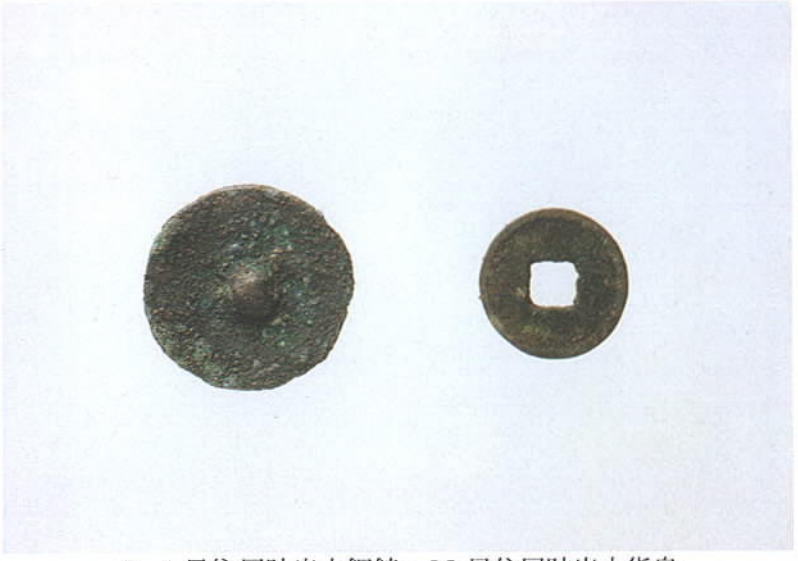
5．13 号住居跡カマド



6．37 号住居跡



7．38 号住居跡



8．1 号住居跡出土銅鏡・38 号住居跡出土貨泉



１．17 次調査出土朝鮮半島系土器



２．１号竪穴住居跡出土土器



１．７号竪穴住居跡出土土器



２．９号竪穴住居跡出土土器



1．21 号竪穴住居跡出土土器



2．37 号竪穴住居跡出土土器

序

本書は県立修猷館高校の改築事業に伴い発掘調査を実施した福岡県福岡市早良区西新に所在する西新町遺跡の発掘調査報告書第６冊目にあたります

西新町遺跡では修猷館高校の改築事業に伴い平成10・12・13・14年に発掘調査を実施しましたが、調査の結果、朝鮮半島との関連の深い土器、ガラス玉鋳型、竈付の竪穴住居跡などが発見され、日本国内はもとより、韓国の考古学会にまで広く知られることとなりました。

本書は平成15年度に実施した発掘調査の報告書であり、これまで指摘されてきたような古墳時代初頭における西新町遺跡と朝鮮半島の交流の存在をさらに裏付ける多くの資料が発見されました。また、高校内の調査でもあり、高校生及び教職員とも調査の見学等を通じて成果を共有することができました。アジアの門戸としての福岡県の将来を担う若人たちに、福岡県の歴史を考える材料のひとつとして、西新町遺跡の存在が強く印象づけられたのではないかと考えられます。

報告書作成の時間的制約もある上、遺構・遺物も多量であり、十分な調査報告書とは言えませんが、本書が福岡県の国際交流の歴史を考える資料として、学術研究・生涯学習等に活用されれば幸いです。

最後になりましたが、調査に御協力いただいた県立修猷館高校の関係者の皆様及び関係諸機関の皆様に深く感謝する次第です。

平成18年3月31日

福岡県教育委員会教育長

森山　良一

例　言

1．本書は平成15年度に福岡県教育委員会が県立修猷館高校改築事業に先立って発掘調査を実施した福岡県福岡市早良区6丁目1－10に所在する西新町遺跡の第17次発掘調査の報告書である。なお、福岡県教育委員会がこれまで刊行した西新町遺跡の発掘調査報告書は下記のとおりである。

柳田康雄・赤司善彦 1985『西新町遺跡』福岡県文化財調査報告書第72集

重藤輝行・森井啓次・大庭孝夫 2000『西新町遺跡』Ⅱ　福岡県文化財調査報告書第154集

重藤輝行・森井啓次・大庭孝夫・唐木田芳文 2001『西新町遺跡』Ⅲ　福岡県文化財調査報告書第157集

吉田東明・宮地聡一郎・三辻利一 2002『西新町遺跡』Ⅳ　福岡県文化財調査報告書第168集

吉田東明・宮地聡一郎・西中川駿・小山田和央・三辻利一 2003『西新町遺跡』Ⅴ　福岡県文化財調査報告書第178集

岡寺未幾・坂元雄紀・岡寺良・岸本圭 2005『西新町遺跡』Ⅵ　福岡県文化財調査報告書第200集

2．本書に掲載した遺構写真は調査担当者が、空中写真は空中写真企画に委託した。遺物写真は石丸洋・北岡伸一が撮影した。

3．掲載した遺構図は調査担当者のほかに、天野玄晋氏（現都城市教育委員会）の協力と福岡県文化財保護課職員の応援を得た。遺物は土製品・磨製石器を坂本真一、打製石器・金属器を重藤輝行が実測し、土器実測図を重藤・坂本の他、平田春美・田中典子・棚町陽子・久富美智子・坂田順子・橋之口雅子・堀江圭子・若松三枝子・中村洋子・栗林明美・寺岡和子・荒川妙が作成した。

4．製図は豊福弥生・原カヨ子・江上佳子・重藤・坂本が行い、土山真弓美・安永啓子・山田智子・辻清子がこれを補助した。

5．使用した方位は主として座標北である。

6．本書の執筆は第3章第3節（7）を坂本が、他を重藤が担当した。編集は重藤が行った。

7．出土遺物は九州歴史資料館及び福岡県教育庁文化財保護課で管理している。

目　次

巻頭図版
序
例言
目次
図版目次
挿図目次
表目次
第１章　はじめに…… 1
　第１節　調査に至る経緯…… 1
　第２節　調査の経過…… 2
　第３節　調査・整理報告書作成の組織…… 4
第２章　西新町遺跡の位置と環境…… 6
第３章　調査の内容…… 9
　第１節　遺跡と調査の概要…… 9
　第２節　弥生時代以前及び古墳時代後期～奈良時代の遺物…… 12
　第３節　古墳時代の遺構と出土遺物…… 13
　　（１）竪穴住居跡とその出土土器 …… 14
　　（２）包含層・遺構検出面出土の土器 …… 201
　　（３）青銅器 …… 203
　　（４）鉄器 …… 204
　　（５）その他金属器 …… 206
　　（６）土製品 …… 206
　　（７）石器 …… 208
第４章　考察…… 214
　第１節　西新町遺跡 17 次調査の遺構と遺物…… 214
　　（１）はじめに …… 214
　　（２）17 次調査の竪穴住居跡と集落展開上の位置付け…… 214
　　（３）竪穴住居跡のカマドについて …… 217
　　（４）朝鮮半島系土器について …… 218
　　（５）その他の遺物について …… 219
　　（６）小結 …… 220
　第２節　西新町遺跡出土土師器の器種構成と製作技法について …… 221
　　（１）はじめに …… 221
　　（２）器種の分類について …… 221
　　（３）器種構成比率について …… 227
　　（４）各器種の製作技法 …… 228
　　（５）小結 …… 232
　第３節　西新町遺跡と早良平野の古墳時代渡来人 …… 233
　　（１）はじめに …… 233
　　（２）渡来系の遺構と遺物の抽出 …… 233
　　（３）早良平野における様相 …… 236
　　（４）西新町遺跡における渡来人に関係する資料の様相 …… 242
　　（５）小結 …… 244
第５章　おわりに…… 246

図版目次

巻頭図版１　７号竪穴住居跡石錘出土状況
巻頭図版２　１．１区全景（南から）　２．１区東壁土層（北西から）　３．２区全景（北から）
巻頭図版３　１．３区古墳時代遺構全景（西から）　２．３区古墳時代遺構全景（南西から）
巻頭図版４　１．３区古墳時代遺構全景（北西から）　２．３区古墳時代遺構全景（北東から）
３．３区東端古墳時代遺構全景（北から）　４．１～３号竪穴住居跡土層（北西から）
巻頭図版５　１．１号竪穴住居跡カマド（南西から）　２．37 号竪穴住居跡（南西から）
巻頭図版６　１．１・２号住居跡　２．１号住居跡東部　３．１号住居跡カマド１
４．１号住居跡カマド２　５．１号住居跡カマド３　６．１号住居跡カマド４
７．１号住居跡カマド５　８．５・22 号住居跡　９．７号住居跡
巻頭図版７　１．８号住居跡　２．９号住居跡　３．９号住居跡土器出土状況
４．12 号住居跡カマド　５．13 号住居跡カマド　６．37 号住居跡
７．38 号住居跡　８．１号住居跡出土銅鏡・38 号住居跡出土貨泉
巻頭図版８　１．17 次調査出土朝鮮半島系土器　２．１号竪穴住居跡出土土器
巻頭図版９　１．７号竪穴住居跡出土土器　２．９号竪穴住居跡出土土器
巻頭図版 10　１．21 号竪穴住居跡出土土器　２．37 号竪穴住居跡出土土器
図版１　１．１区遠景（南西から）　２．１区全景（西から）
３．１区東壁土層（北西から）
図版２　１．１区全景（南から）　２．１Ｂ区全景（東から）
３．２区全景（北から）
図版３　１．３区近世遺構全景（南西から）　２．２区西壁土層（北から）
３．３区北部近世遺構全景（西から）
図版４　１．３区近世遺構全景（西から）　２．３区近世遺構全景（東から）
３．３区北部近世遺構全景（東から）
図版５　１．３区古墳時代遺構全景（西から）　２．３区南東隅近世遺構（西から）
３．１Ｂ区・３区古墳時代遺構全景（南西から）
図版６　１．３区古墳時代遺構全景（南西から）　２．３区古墳時代遺構全景空中写真（上空から）
図版７　１．３区古墳時代遺構全景（北西から）　２．３区古墳時代遺構全景（北東から）
３．３区東端古墳時代遺構全景（北から）　４．３区西端古墳時代遺構全景（北から）
図版８　１．３区東部住居跡集中部（南から）　２．１～３号竪穴住居跡土層（北西から）
図版９　１．１・２号竪穴住居跡土層（北から）　２．１・３号竪穴住居跡土層（南から）
３．１号竪穴住居跡土器出土状況（南から）４．１号竪穴住居跡東部（南から）
図版 10　１．１号竪穴住居跡カマド発掘状況１（南から）
２．１号竪穴住居跡カマド発掘状況２（南から）
３．１号竪穴住居跡カマド発掘状況３（南から）
４．１号竪穴住居跡カマド発掘状況４（南から）
図版 11　１．１号竪穴住居跡カマド発掘状況５（南から）　２．４号竪穴住居跡（南から）
３．５・22 号竪穴住居跡（南西から）　４．５号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版 12　１．６号竪穴住居跡全景（南から）　２．６号竪穴住居跡カマド燃焼部付近（南東から）
３．６号竪穴住居跡カマド支脚（南東から）　４．６号竪穴住居跡カマド煙道（東から）
図版 13　１．７号竪穴住居跡全景（東から）　２．７号竪穴住居跡土器出土状況（北西から）
３．７号竪穴住居跡石錘出土状況　４．８号竪穴住居跡（南東から）

図版 14　1．8 号竪穴住居跡（西から）　2．9 号竪穴住居跡（北西から）
3．9 号竪穴住居跡土器出土状況（南西から）
図版 15　1．9 号竪穴住居跡北東部土器出土状況　2．10 号竪穴住居跡南半部（北西から）
3．11 号竪穴住居跡（南から）　4．12 号竪穴住居跡（南から）
図版 16　1．12 号竪穴住居跡カマド（南西から）　2．12 号竪穴住居跡カマド煙道断面（北から）
3．13 号竪穴住居跡（南から）　4．13 号竪穴住居跡カマド（南東から）
図版 17　1．14 号竪穴住居跡（南西から）　2．15 号竪穴住居跡（南東から）
3．16 号竪穴住居跡（南東から）
図版 18　1．17 号竪穴住居跡（北東から）　2．19 号竪穴住居跡（南から）
3．20 号竪穴住居跡（南東から）　4．21 号竪穴住居跡（南東から）
図版 19　1．23 号竪穴住居跡（東から）　2．24 号竪穴住居跡（東から）
3．24 号竪穴住居跡タコ壺出土状況（南西から）
4．25 号竪穴住居跡（北西から）
図版 20　1．26 号竪穴住居跡（南東から）　2．28 号竪穴住居跡（北東から）
3．30 号竪穴住居跡（北西から）　4．31 号竪穴住居跡（南西から）
図版 21　1．32 号竪穴住居跡（西から）　2．33 号竪穴住居跡（北東から）
3．34 号竪穴住居跡（北東から）
図版 22　1．35 号竪穴住居跡（東から）　2．35 号竪穴住居跡カマド（南東から）
3．36 号竪穴住居跡（北東から）　4．37・38 号竪穴住居跡（東から）
図版 23　1．37 号竪穴住居跡（南西から）　2．37 号竪穴住居跡土器出土状況（南から）
3．37 号竪穴住居跡カマド発掘状況 1（東から）
図版 24　1．37 号竪穴住居跡カマド発掘状況 2（東から）　2．38 号竪穴住居跡（西から）
3．39 号竪穴住居跡（北西から）　4．40 号竪穴住居跡（北から）
図版 25　1 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 26　1 号竪穴住居跡出土土器（2）
図版 27　1 号竪穴住居跡出土土器（3）・2 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 28　2 号竪穴住居跡出土土器（2）・3・4 号竪穴住居跡出土土器・5 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 29　5 号竪穴住居跡出土土器（2）
図版 30　5 号竪穴住居跡出土土器（3）・6 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 31　6 号竪穴住居跡出土土器（2）・7 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 32　7 号竪穴住居跡出土土器（2）
図版 33　7 号竪穴住居跡出土土器（3）
図版 34　7 号竪穴住居跡出土土器（4）・8 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 35　8 号竪穴住居跡出土土器（2）・9 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 36　9 号竪穴住居跡出土土器（2）
図版 37　9 号竪穴住居跡出土土器（3）
図版 38　10 ～ 13 号竪穴住居跡出土土器・14 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 39　14 号竪穴住居跡出土土器（2）・15・17 ～ 19 号竪穴住居跡出土土器・21 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 40　21 号竪穴住居跡出土土器（2）
図版 41　22 ～ 25 号竪穴住居跡出土土器
図版 42　25 ～ 27・30 号竪穴住居跡出土土器・31 号竪穴住居跡出土土器（1）

図版 43　31 号竪穴住居跡出土土器（2）・32・34 ～ 36 号竪穴住居跡出土土器
図版 44　37 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 45　37 号竪穴住居跡出土土器（2）
図版 46　37 号竪穴住居跡出土土器（3）
図版 47　37 号竪穴住居跡出土土器（4）・38 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 48　38 号竪穴住居跡出土土器（2）・39 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 49　39 号竪穴住居跡出土土器（2）・40 号竪穴住居跡出土土器（1）
図版 50　40 号竪穴住居跡出土土器（2）・近世遺構・遺構面等出土土器・24 号竪穴住居跡出土沈線文土器
図版 51　1．17 次出土朝鮮半島系土器　2．5 号竪穴住居跡出土陶質土器
3．23・25・26 号竪穴住居跡出土軟質土器
図版 52　1．1 号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器　2．5 号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器
3．7 号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器
4．9・10・12・14・17 ～ 19・30 号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器
図版 53　1．37・38 号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器
2．近世遺構・遺構面等出土朝鮮半島系土器　3．1 号竪穴住居跡出土無文銅鏡
4．38 号竪穴住居跡出土貨泉　5．5 号竪穴住居跡出土鉛片
6．31 号竪穴住居跡出土管玉・37 号竪穴住居跡出土土製模造鏡
図版 54　1．竪穴住居跡出土鉄器　2．7 号竪穴住居跡出土手鎌
3．土製品（1）　4．土製品（2）
図版 55　1．弥生時代以前の石器　2．石錘（1）
3．石錘（2）　4．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（1）
図版 56　1．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（2）　2．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（3）
3．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（4）　4．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（5）
図版 57　1．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（6）　2．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（7）
3．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（8）　4．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（9）
図版 58　1．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（10）　2．7 号竪穴住居跡出土自然石石錘（11）
3．石器（1）　4．石器（2）
写真 1　西新町遺跡第 12 次調査出土の各種朝鮮半島系の土器 …… 1
写真 2　福岡県教育委員会・福岡市教育委員会発行の西新町遺跡の発掘調査報告書 …… 1
写真 3　発掘調査作業風景 …… 3
写真 4　報告書作成（写真撮影）風景 …… 3

挿図目次

第 1 図　福岡市と西新町遺跡の位置 …… 2
第 2 図　西新町遺跡 12 次 81 号竪穴住居跡実測図（1 ／ 80） …… 5
第 3 図　西新町遺跡 12 次 22・93 号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器実測図（1 ／ 6） …… 5
第 4 図　西新町遺跡 16 次出土トンボ玉実測図（実大） …… 6
第 5 図　西新町遺跡と周辺の遺跡（1 ／ 50,000） …… 7
第 6 図　発掘調査区の位置と周辺調査地（1 ／ 4,000） …… 8
第 7 図　調査区周辺地形図（1 ／ 1,500） …… 9

第８図　１区東壁・２区西壁土層図（１／80）…… 10
第９図　１・２区近世・近代遺構配置図（１／200）…… 折込
第 10 図　３区近世・近代遺構配置図（１／200）…… 折込
第 11 図　３区古墳時代遺構配置図（１／200）…… 折込
第 12 図　西新町遺跡 17 次調査出土弥生土器・須恵器・弥生時代以前の
石器実測図（15 は１／２、16 は２／３、他は１／３）…… 12
第 13 図　１～３号竪穴住居跡土層実測図（１／60）…… 14
第 14 図　１号竪穴住居跡実測図（１／60）…… 15
第 15 図　１号竪穴住居跡カマド実測図（１／30）…… 16
第 16 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（１）（１・２は１／４、他は１／３）…… 19
第 17 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（２）（１／３）…… 20
第 18 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（３）（１／３）…… 21
第 19 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（４）（１／３）…… 23
第 20 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（５）（１／３）…… 25
第 21 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（６）（１／３）…… 26
第 22 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（７）（１／３）…… 27
第 23 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（８）（１／３）…… 29
第 24 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（９）（１／３）…… 31
第 25 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（10）（１／３）…… 33
第 26 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（11）（250～253 は１／４、他は１／３）…… 35
第 27 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（12）（１／３）…… 37
第 28 図　１号竪穴住居跡出土土器実測図（13）（１／３）…… 39
第 29 図　２・３号竪穴住居跡実測図（１／60）…… 40
第 30 図　２号竪穴住居跡出土土器実測図（１）（１／３）…… 41
第 31 図　２号竪穴住居跡出土土器実測図（２）（１／３）…… 42
第 32 図　３号竪穴住居跡出土土器実測図（１／３）…… 44
第 33 図　４号竪穴住居跡実測図（１／60）…… 45
第 34 図　４号竪穴住居跡出土土器実測図（１／３）…… 47
第 35 図　５号竪穴住居跡実測図（１／60）…… 48
第 36 図　５号竪穴住居跡カマド実測図（１／30）…… 48
第 37 図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（１）（１／３）…… 49
第 38 図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（２）（１／３）…… 51
第 39 図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（３）（１／３）…… 53
第 40 図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（４）（１／３）…… 55
第 41 図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（５）（１／３）…… 57
第 42 図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（６）（１／３）…… 58
第 43 図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（７）（１／３）…… 59
第 44 図　５号竪穴住居跡出土土器実測図（８）（141・154 は１／２、他は１／３）…… 61
第 45 図　６号竪穴住居跡実測図（１／60）…… 62
第 46 図　６号竪穴住居跡カマド実測図（１／30）…… 63
第 47 図　６号竪穴住居跡出土土器実測図（１）（１／３）…… 65
第 48 図　６号竪穴住居跡出土土器実測図（２）（１／３）…… 67
第 49 図　６号竪穴住居跡出土土器実測図（３）（１／３）…… 68

第 50 図　6 号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）…… 69
第 51 図　7 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 71
第 52 図　7 号竪穴住居跡石錘出土状況実測図（1／20）…… 71
第 53 図　7 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1・2 は 1／4、他は 1／3）…… 73
第 54 図　7 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 75
第 55 図　7 号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）…… 77
第 56 図　7 号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）…… 79
第 57 図　7 号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（1／3）…… 80
第 58 図　8 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 81
第 59 図　8 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 83
第 60 図　8 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（10 は 1／4、他は 1／3）…… 85
第 61 図　8 号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（30 は 1／2、他は 1／3）…… 86
第 62 図　9 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 87
第 63 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（3 は 1／4、他は 1／3）…… 89
第 64 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 91
第 65 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）…… 93
第 66 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）…… 95
第 67 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（1／3）…… 97
第 68 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図（6）（1／3）…… 99
第 69 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図（7）（1／3）…… 100
第 70 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図（8）（165 ～ 167 は 1／2、他は 1／3）…… 101
第 71 図　10・11 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 102
第 72 図　10・11 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 103
第 73 図　12 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 105
第 74 図　12 号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）…… 105
第 75 図　12 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 107
第 76 図　12 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 109
第 77 図　12 号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（58 は 1／2、他は 1／3）…… 110
第 78 図　13 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 111
第 79 図　13 号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）…… 112
第 80 図　13 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 113
第 81 図　13 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 115
第 82 図　14 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 116
第 83 図　14 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1 は 1／4、他は 1／3）…… 117
第 84 図　14 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 118
第 85 図　15 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 119
第 86 図　16 号竪穴住居跡・カマド実測図（1／60・1／30）…… 120
第 87 図　15・16 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 121
第 88 図　17・18 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 121
第 89 図　17 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 123
第 90 図　18 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 124
第 91 図　19 ～ 21 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 125
第 92 図　19・20 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 127

第 93 図　21 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 129
第 94 図　22 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 130
第 95 図　22 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 131
第 96 図　23 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 133
第 97 図　23 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 134
第 98 図　24・25 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 135
第 99 図　24 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 137
第 100 図　25 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 139
第 101 図　25 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 140
第 102 図　26・27 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 141
第 103 図　26 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 142
第 104 図　26 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 143
第 105 図　28 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 145
第 106 図　27・28 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 145
第 107 図　30 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 146
第 108 図　30 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 147
第 109 図　30 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 148
第 110 図　31 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 149
第 111 図　31 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 151
第 112 図　31 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 153
第 113 図　31 号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）…… 155
第 114 図　32 ～ 34 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 157
第 115 図　32 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 157
第 116 図　33 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 159
第 117 図　34・35 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 161
第 118 図　35 号竪穴住居跡・同カマド実測図（1／60・1／30）…… 162
第 119 図　36 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 162
第 120 図　36 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）…… 163
第 121 図　37 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 165
第 122 図　37 号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）…… 165
第 123 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 167
第 124 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 169
第 125 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）…… 170
第 126 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）…… 171
第 127 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（1／3）…… 173
第 128 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（6）（1／3）…… 175
第 129 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（7）（1／3）…… 177
第 130 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（8）（1／3）…… 178
第 131 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（9）（1／3）…… 179
第 132 図　38 ～ 40 号竪穴住居跡実測図（1／60）…… 180
第 133 図　38 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1 は 1／4、他は 1／3）…… 181
第 134 図　38 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 183
第 135 図　38 号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）…… 185

第 136 図　38 号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）…… 186
第 137 図　39 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）…… 187
第 138 図　39 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）…… 189
第 139 図　40 号竪穴住居跡出土土器実測図（12 は 1／2、他は 1／3）…… 191
第 140 図　遺構面・近世遺構等出土土器実測図（1）（1／3）…… 193
第 141 図　遺構面・近世遺構等出土土器実測図（2）（1／3）…… 195
第 142 図　遺構面・近世遺構等出土土器実測図（3）（1／3）…… 197
第 143 図　遺構面・近世遺構等出土土器実測図（4）（1／3）…… 199
第 144 図　遺構面・近世遺構等出土土器実測図（5）（140 は 1／2、他は（1／3）…… 201
第 145 図　青銅器実測図（実大）…… 203
第 146 図　鉄器実測図（1／2）…… 204
第 147 図　鉛片実測図（2／3）…… 205
第 148 図　土製品実測図（1 は 2／3、8 ～ 10 は 1／3、他は 1／2）…… 206
第 149 図　石錘実測図（1）（1／2）…… 208
第 150 図　石錘実測図（2）（1／2）…… 209
第 151 図　石器実測図（1）（1／2）…… 211
第 152 図　石器実測図（1）・玉実測図（37 は実大、他は 1／2）…… 213
第 153 図　西新町遺跡における竪穴住居跡変遷図（全体は 1／2000、17 次細部は 1／500）215
第 154 図　西新町遺跡 17 次調査カマド平面図（1／30）…… 216
第 155 図　西新町遺跡 17 次調査出土朝鮮半島系土器（1／6）…… 218
第 156 図　西新町遺跡土師器の器種分類（1）…… 222
第 157 図　西新町遺跡土師器の器種分類（2）…… 223
第 158 図　17 次調査出土布留系甕の法量…… 224
第 159 図　1・9・37 号竪穴住居跡出土土器の器種構成比率…… 226
第 160 図　1・9・37 号竪穴住居跡出土土器の各系統別比率…… 227
第 161 図　甕・壺の製作技法関連資料（1／4）…… 229
第 162 図　その他の器種の製作技法関連資料（1／3）…… 230
第 163 図　福岡市西区吉武古墳群の渡来系遺物・遺構 …… 235
第 164 図　福岡市西区吉武遺跡出土土器等 …… 236
第 165 図　福岡市城南区梅林遺跡周辺の渡来系遺構・遺物 …… 237
第 166 図　早良平野周辺の渡来系遺物等 …… 239
第 167 図　西新町遺跡における朝鮮半島系土器の模倣土器・折衷土器 …… 241
第 168 図　玄界灘沿岸地域における首長墓系列 …… 243

表目次

第 1 表　西新町遺跡調査一覧 …… 1
第 2 表　西新町遺跡 17 次調査出土弥生土器・須恵器観察表…… 13
第 3 表　1 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 18
第 4 表　1 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 22
第 5 表　1 号竪穴住居跡出土土器観察表（3）…… 24
第 6 表　1 号竪穴住居跡出土土器観察表（4）…… 28

第7表　1号竪穴住居跡出土土器観察表（5）…… 30
第8表　1号竪穴住居跡出土土器観察表（6）…… 32
第9表　1号竪穴住居跡出土土器観察表（7）…… 34
第10表　1号竪穴住居跡出土土器観察表（8）…… 36
第11表　1号竪穴住居跡出土土器観察表（9）…… 38
第12表　2号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 42
第13表　2号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 43
第14表　3号竪穴住居跡出土土器観察表…… 45
第15表　4号竪穴住居跡出土土器観察表…… 46
第16表　5号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 50
第17表　5号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 52
第18表　5号竪穴住居跡出土土器観察表（3）…… 54
第19表　5号竪穴住居跡出土土器観察表（4）…… 56
第20表　5号竪穴住居跡出土土器観察表（5）…… 60
第21表　6号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 64
第22表　6号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 66
第23表　6号竪穴住居跡出土土器観察表（3）…… 70
第24表　7号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 72
第25表　7号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 74
第26表　7号竪穴住居跡出土土器観察表（3）…… 76
第27表　7号竪穴住居跡出土土器観察表（4）…… 78
第28表　8号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 82
第29表　8号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 84
第30表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 88
第31表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 90
第32表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（3）…… 92
第33表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（4）…… 94
第34表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（5）…… 96
第35表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（6）…… 98
第36表　10・11号竪穴住居跡出土土器観察表…… 104
第37表　12号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 106
第38表　12号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 108
第39表　12号竪穴住居跡出土土器観察表（3）…… 111
第40表　13号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 114
第41表　13号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 115
第42表　14号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 116
第43表　14号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 118
第44表　15・16号竪穴住居跡出土土器観察表…… 120
第45表　17・18号竪穴住居跡出土土器観察表…… 122
第46表　19・20号竪穴住居跡出土土器観察表…… 126
第47表　21号竪穴住居跡出土土器観察表…… 128
第48表　22号竪穴住居跡出土土器観察表…… 132
第49表　23号竪穴住居跡出土土器観察表…… 133

第 50 表　24 号竪穴住居跡出土土器観察表 …… 136
第 51 表　25 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 138
第 52 表　25 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 140
第 53 表　26 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 142
第 54 表　26 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 143
第 55 表　26 号竪穴住居跡出土土器観察表（3）…… 144
第 56 表　27・28 号竪穴住居跡出土土器観察表 …… 144
第 57 表　30 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 146
第 58 表　30 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 148
第 59 表　31 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 150
第 60 表　31 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 152
第 61 表　31 号竪穴住居跡出土土器観察表（3）…… 154
第 62 表　32 号竪穴住居跡出土土器観察表 …… 156
第 63 表　33 号竪穴住居跡出土土器観察表 …… 158
第 64 表　34・35 号竪穴住居跡出土土器観察表 …… 160
第 65 表　36 号竪穴住居跡出土土器観察表 …… 164
第 66 表　37 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 166
第 67 表　37 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 168
第 68 表　37 号竪穴住居跡出土土器観察表（3）…… 172
第 69 表　37 号竪穴住居跡出土土器観察表（4）…… 174
第 70 表　37 号竪穴住居跡出土土器観察表（5）…… 176
第 71 表　38 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 182
第 72 表　38 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 184
第 73 表　39 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）…… 188
第 74 表　39 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）…… 190
第 75 表　40 号竪穴住居跡出土土器観察表 …… 192
第 76 表　遺構面・近世遺構等出土土器観察表（1）…… 194
第 77 表　遺構面・近世遺構等出土土器観察表（2）…… 196
第 78 表　遺構面・近世遺構等出土土器観察表（3）…… 198
第 79 表　遺構面・近世遺構等出土土器観察表（4）…… 200
第 80 表　遺構面・近世遺構等出土土器観察表（5）…… 202
第 81 表　石錘観察表 …… 207
第 82 表　7 号竪穴住居跡自然石石錘観察表 …… 210
第 83 表　石器観察表 …… 212

第1章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

県立修猷館高校は、福岡市の西部、早良区西新6丁目1－10に所在し、周知の埋蔵文化財包蔵地「西新町遺跡」の中に位置している。西新町遺跡は弥生時代の集落・墓地、古墳時代前期の集落からなる複合遺跡で、弥生時代終末の北部九州の土器様式である「西新式」の名称の由来となった資料は必ずしも周知の埋蔵文化財包蔵地「西新町遺跡」の範囲から出土したわけではない［久住 1999］が、「西新式」の標識資料が多数出土したことで考古学史上著名である。また、弥生時代終末～古墳時代前期においては日本国内の他の遺跡に例をみない量・頻度で朝鮮半島系の各種遺物、カマドを設置した竪穴住居跡が検出されたことでも、しばしば言及される遺跡である。

修猷館高校は校舎の老朽化にともなって、平成10年度から全面的な改築を実施することとなった。福岡県教育庁総務部文化財保護課では同高校が西新町遺跡中に位置することから、教育庁教育企画部施設課、修猷館高校と協議し、建設に先立ち必要な個所の発掘調査を実施している。また、改築により、既設建築物が除却され、それに伴う基礎撤去が遺構面にまで到達する範囲も発掘調査の対象に含めている。福岡県教育庁文化財保護課では平成10・12・13・14年度に発掘調査を実施し、5冊の発掘調査報告書を刊行済みである（福岡県文化財調査報告書第154・157・168・178・200集）。

この全面改築工事の一環として、平成15年度は高校敷地の北側に位置する体育教官室・小体育館・弓道場・武道場が取り壊されることとなった。これら建築物の跡地にはプール・弓道場・講堂が新築される計画であるが、建築工事が平成16年度以降の着工であるため、解体後平成15年度中に必要な範囲の発掘調査を実施することとした。平成15年度の建物解体工事の対象地は敷地の北壁沿い、体育教官室から武道場にかけての東西約130m、南北約30～40mの範囲である。ただ、過去の調査のから工事予定地西側では遺構面が深い上、近世の遺構は存在するが、古墳時代の遺構の分布は希薄であると予想された。そこで、工事地西側では小体育館跡地を1区、体育教官室跡地を2区として部分的に先行して調査し、古墳時代の遺構が予想外に分布するなど、調査を面的に実施する必要があれば、調査区を拡張する計画で望んだ。一方、工事予定地東側は古墳時代の遺構が存在するため、講堂建築により影響を受ける範囲を3区として広く面的に調査することとした。



写真1　西新町遺跡第12次調査出土の各種朝鮮半島系の土器



写真2　福岡県教育委員会・福岡市教育委員会発行の西新町遺跡発掘調査報告書

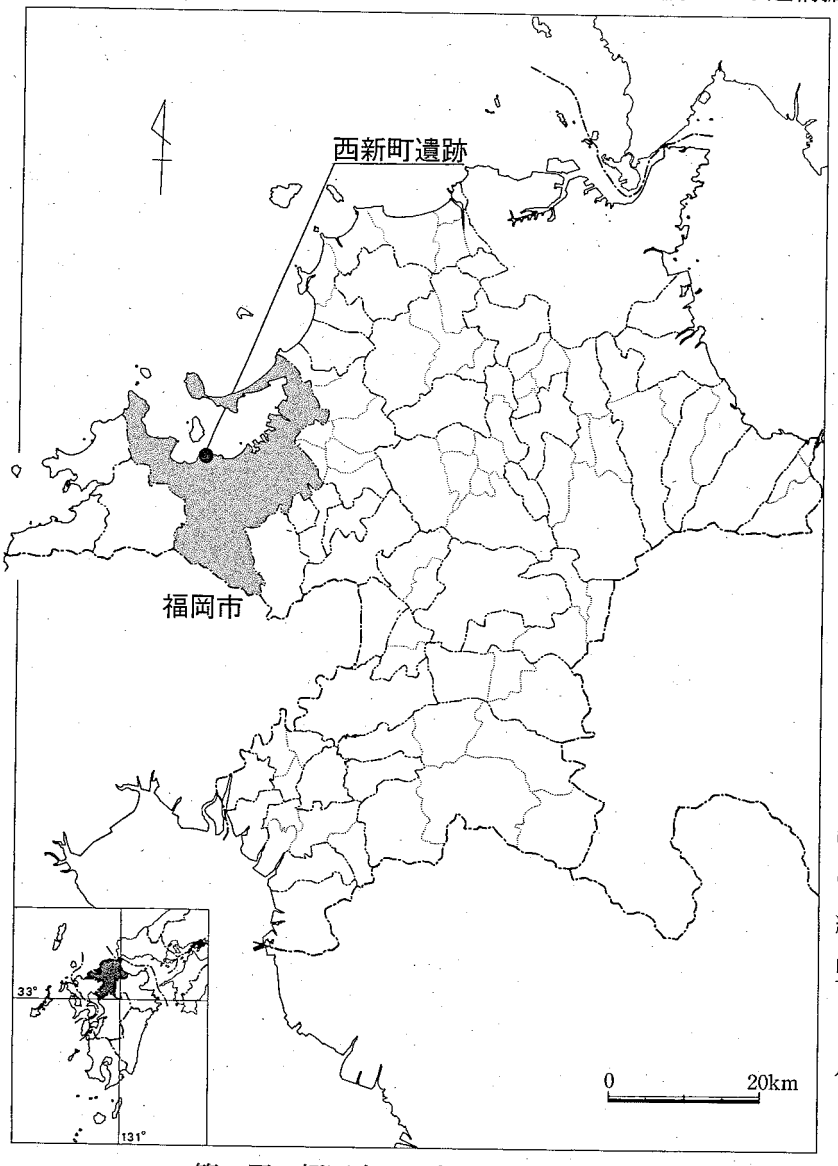
第２節　調査の経過

平成15年度の調査は、８月26日に重機を入れて、１区の表土剥ぎを開始し、９月３日には文化財保護課甘木事務所より機材を搬入した。９月５日には作業員の雇用を開始した。

この後、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が設置した西新町遺跡周辺の３級基準点より、９月４日にはレベルを行い、９月11日には基準点を利用して調査区周辺に閉塞トラバースを設定して、国土座標を移動した。調査においてはこの国土座標に基づいて実測を行うこととした。

１区の遺構をおおよそ掘り上げた９月21日に台風15号が接近したため、日中、強風に襲われ、砂が運ばれて遺構が埋まってしまった。10月７日にはおおよそ完掘でき、空中写真及び排土の山の上、校舎５階から全景写真を撮影した。10月10日には実測も完了して、１区の発掘調査を完了した。

その後、解体工事などがあり、しばらく調査を中断し、10月27日から重機を入れて２区の表土剥ぎを始め、ほぼ同時に作業員による遺構掘削を開始した。なお、その間の10月22・23日に１区出土の土器洗浄・整理を行った。２区は100㎡程と狭かったため、10月29日には遺構掘削がほぼ終了した。同日には引き続いて３区・１Ｂ区の重機による遺構掘削を開始し、その排土により１区の埋め戻しを行った。11月４日には２区の完掘状況の写真撮影を行った。



第１図　福岡市と西新町遺跡の位置

11月５日には３Ａ区南東隅より撹乱及び近世の遺構の掘り下げを開始した。11月５日には撹乱の掘り上げから３Ａ区の発掘調査を開始した。11月６日には文化財保護課進村真之の助力を得て、国土座標を１Ｂ・２・３Ａ区に移設し、11月11日には２区の調査を完了した。その後、３Ａ区の撹乱の掘り上げに続いて、近世遺構の発掘を進め、12月４日にはローリングタワー、校舎５階、３区の東に隣接するプールから近世遺構の全景写真を撮影した。引き続き12月５日より古墳時代竪穴住居跡の発掘調査を開始した。年末年始のため、12月26日に年内の作業を完了し、１月６日には作業を再開したが、その間も数日、実測

を行った。1月21日午後から1月23日にかけては、降雪が激しく、作業を中止した。また、1月26日には1Ｂ区の遺構検出、遺構掘り下げを行い、1月27日にはその写真を撮影した。2月5日には3Ａ区の古墳時代遺構の発掘がほぼ完了し、足場、高校校舎5階からその全景写真を撮影し、2月9日には（有）空中写真企画に委託して、気球による空中写真を撮影した。

その後、3Ｂ区、3Ｃ区、3Ｄ区の表土剥ぎ、引き続いて近世遺構の発掘を開始し、2月16日には3Ｂ区近世遺構、2月18日には3Ｃ区近世遺構の全景写真を撮影した。さらに2月19日には3Ｂ区古墳時代遺構を完掘し、その写真を撮影した。また、2月26日には1区の北西にダメ押しのため、1トレンチ、2トレンチを設定した。3月2日には3Ｃ区古墳時代遺構及び3Ｄ区の全景写真を撮影した。その後、実測・埋め戻し等を完了させ、3月15日には機材を搬出した。

なお、1区・2区及びその間に設定した1トレンチ、2トレンチのいずれにおいても古墳時代の遺構は検出されず、遺構面の標高も低かったため、当初予定どおりの部分的な調査にとどめた。

これら発掘調査の記録は基本的には調査区全体を国土座標に方眼をあわせた1／20大図を作成し、必要に応じて竪穴住居跡の1／20大個別図、竪穴住居跡カマド・土坑等の1／10大個別・細部図、各種土層図を作成した。また、各遺構の写真は4×5モノクロ、35mmモノクロ・カラーリバーサルで撮影し、必要に応じて4×5カラーリバーサルも撮影した。なお、調査区内に移動式の撮影台が設置できない場合も多かったため、個別遺構は三脚・脚立の高さから撮影したものも多い。

ところで、本調査に着手する直前、平成15年7月19日未明には福岡県内を梅雨末期の集中豪雨が襲い、御笠川が氾濫し、博多駅が浸水するなどの大きな被害があった。文化財では太宰府市周辺や筑豊地域で史跡の土砂崩れ等が発生したが、文化財に関してとりわけ深刻な被害が起こったのが太宰府市・宇美町・大野城市にまたがる特別史跡大野城跡である。

調査担当者の一人である重藤は当時、福岡教育事務所生涯学習室に籍を置き、太宰府市・宇美町・大野城市を管轄としていた。そのため、教育庁文化財保護課職員及び関係市町教育委員会職員とその被害状況調査を行うとともに、関係諸機関との調整も発掘調査と平行して行うこととなった。しばしば、特別史跡大野城跡をはじめとする史跡の現状変更工事に伴う現地協議及び立会のため、発掘調査を中断せざるを得ない場合もあった。そのため、発掘調査が必ずしも円滑、迅速に実施できなかったこと、調査内容にも不十分な点が残ったことは、遺憾ながらは認めざるを得ない。

当初、平成16年度に発掘調査報告書作成を実施する予定であったが、出土遺物が多量であること、調査担当者が他の報告書の作成で余裕がないことから、一部の整理と報告書作成を平成17年度に実施することとなった。



写真3　発掘調査作業風景



写真4　報告書作成（写真撮影）風景

第３節　調査・整理報告書作成の組織

発掘調査は福岡県教育庁総務部文化財保護課が福岡県教育庁教育企画部施設課から予算の執行委任を受け、福岡県教育庁福岡教育事務所生涯学習室文化財担当職員を主たる担当職員として実施した。また、必要に応じて福岡県教育庁文化財保護課調査第一係職員の支援を受けた。

発掘調査と一時期、平行して実施した解体等の工事との調整は、施設課、修猷館高校および福岡県建築都市部営繕課、福岡土木事務所と随時、協議を行った。

発掘調査および整理・報告書作成の関係者は次のとおりである。

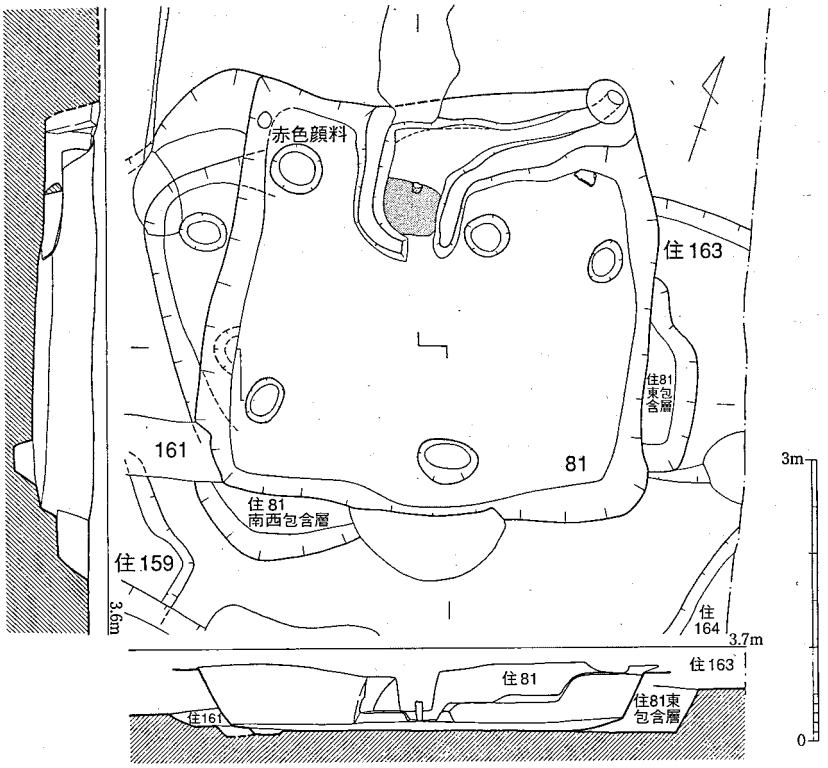
		平成 15 年度	平成 16 年度	平成 17 年度
総括				
福岡県教育委員会	教育長	森山　良一	森山　良一	森山　良一
	教育次長	三瓶　寧夫	清水　圭輔	清水　圭輔
	理事	海老井　悦子	末永　照元	鐘江　茂光
教育企画部	部長	黒見　義正	楢崎　洋二郎	楢崎　洋二郎
	副理事	楢崎　洋二郎		
施設課	課長	杉光　誠	杉光　誠	大津山　泰
	課長補佐	釘丸　義和	辰田　一郎	辰田　一郎
	課長技術補佐	平　信二	平　信二	奥園　正美
	施設係長	舩越　美智雄	石塚　康弘	石塚　康弘
総務部	部長	清水　圭輔	中原　一憲	中原　一憲
文化財保護課	課長	井上　裕弘	井上　裕弘	久芳　昭文
	副課長			川述　昭人
	参事兼課長補佐	久芳　昭文		安川　正郷
	参事兼課長技術補佐	川述　昭人	川述　昭人	木下　修
		木下修	木下　修	池辺　元明
	参事		新原　正典	新原　正典
	課長補佐		安川　正郷	
庶務	参事補佐兼管理係長	古賀　敏生		稲尾　茂
	管理係長		稲尾　茂	
	主任主事	末竹　元	末竹　元	淵上　大輔
調査・整理	参事補佐兼調査第一係長	小池　史哲	小池　史哲	小池　史哲
	参事補佐	飛野　博文	飛野　博文	
	技術主査			吉村　靖徳
	主任技師	進村　真之	岡寺　未幾	岡寺　未幾
		岡寺　未幾	坂元　雄紀（整理）	
		辻田　淳一郎		
	技師	坂本　真一	坂本　真一	
	参事補佐兼調査第二係長	中間　研志	中間　研志	飛野　博文
	技師			坂本　真一（報告書作成）
	大規模遺跡対策・災害復旧班			
	主任技師			重藤　輝行（報告書作成）
福岡教育事務所	主任技師	重藤　輝行（調査）	重藤　輝行（整理）	

調査の円滑な進行においては様々な面で末永照元校長・和田健作事務長をはじめ修猷館高校教職員の皆様に御配慮いただいた。また、調査にあたっては作業員の手配、基準点成果の提供及び調査方法、調査結果の解釈等様々な面で福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課の皆様に御協力をいただいた。作業員の皆様には熱心かつ安全に配慮して数々の作業にあたられ、無事調査を終了することができた。

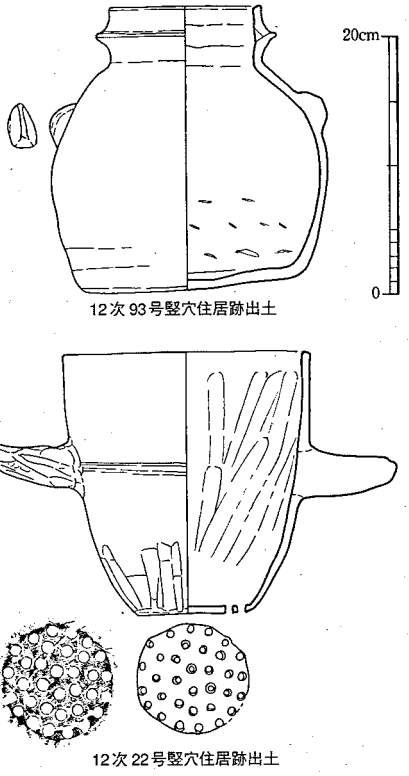
調査期間中には西南学院大学高倉洋彰教授、九州大学田中良之教授、慶北大学校朴天秀教授、橿原考古学研究所青柳泰介氏、川上洋一氏、橿原市教育委員会文化財課桝田治氏、財団法人大阪市文化財協会寺井誠氏、韓国文化財研究所劉銀植氏、慶尚南道文化芸術課金煬煥氏、慶尚南道咸安郡咸安博物館白承玉氏が来訪されて現地で御指導いただいた。

報告書の作成にあたり、伊都歴史博物館西谷正館長（九州大学名誉教授）、福岡大学小田富士雄名誉教授、福岡大学武末純一教授、岡山理科大学亀田修一教授、埼玉大学高久健二助教授、韓国国立中央博物館李健茂氏、金武重氏、韓神大学校權五榮氏、江原文化財研究所池賢炳氏、忠清文化財研究院柳基正氏、高麗大学校李弘鐘氏、全北大学校金承玉氏、湖南文化財研究院李暎澈氏、嶺南文化財研究院朴升圭氏、東国大学校安在晧氏、慶南考古学研究所金賢氏、江陵大学校李盛周氏、全南大学校林永珍氏に御教示をいただいた。

この場を借りて感謝申し上げます。



第２図　西新町遺跡 12 次 81 号竪穴住居跡実測図（１／80）



第３図　西新町遺跡 12 次 22・93 号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器実測図（１／６）

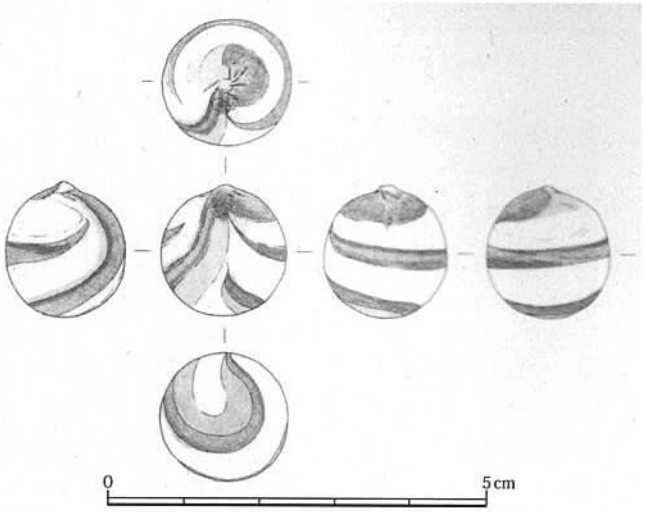
参考文献

久住　猛雄 1999「北部九州における庄内式平行期の土器様相」『庄内式土器研究』19　pp.62-143

第２章　西新町遺跡の位置と環境

西新町遺跡は福岡市の西部、早良平野の東北端、室見川・金屑川の右岸に立地する。

本書冒頭でも述べたように、遺跡は北部九州の弥生時代終末の土器様式「西新式」の標識資料がまとまって出土するとともに、弥生時代終末～古墳時代前期の朝鮮半島との対外交渉を示す資料が豊富なことで著名である。遺跡に対しては平成17年度末の時点で18次の調査が実施されており、それについては第６・７図、第１表のとおりである。



第４図　西新町遺跡16次出土トンボ玉実測図
（実大、松浦2005より転載）

対外交渉を示す資料の存在は、遺跡の中心時期においては博多湾の浜堤砂丘上に遺跡が位置するという立地が大きく影響をしていることはもちろんである。西新町遺跡の位置する砂丘の形成等の地理的環境については『西新町遺跡』Ⅱ（福岡県教育委員会2000、福岡県第154集）に詳述されて

また早良平野を含む博多湾沿岸域は弥生

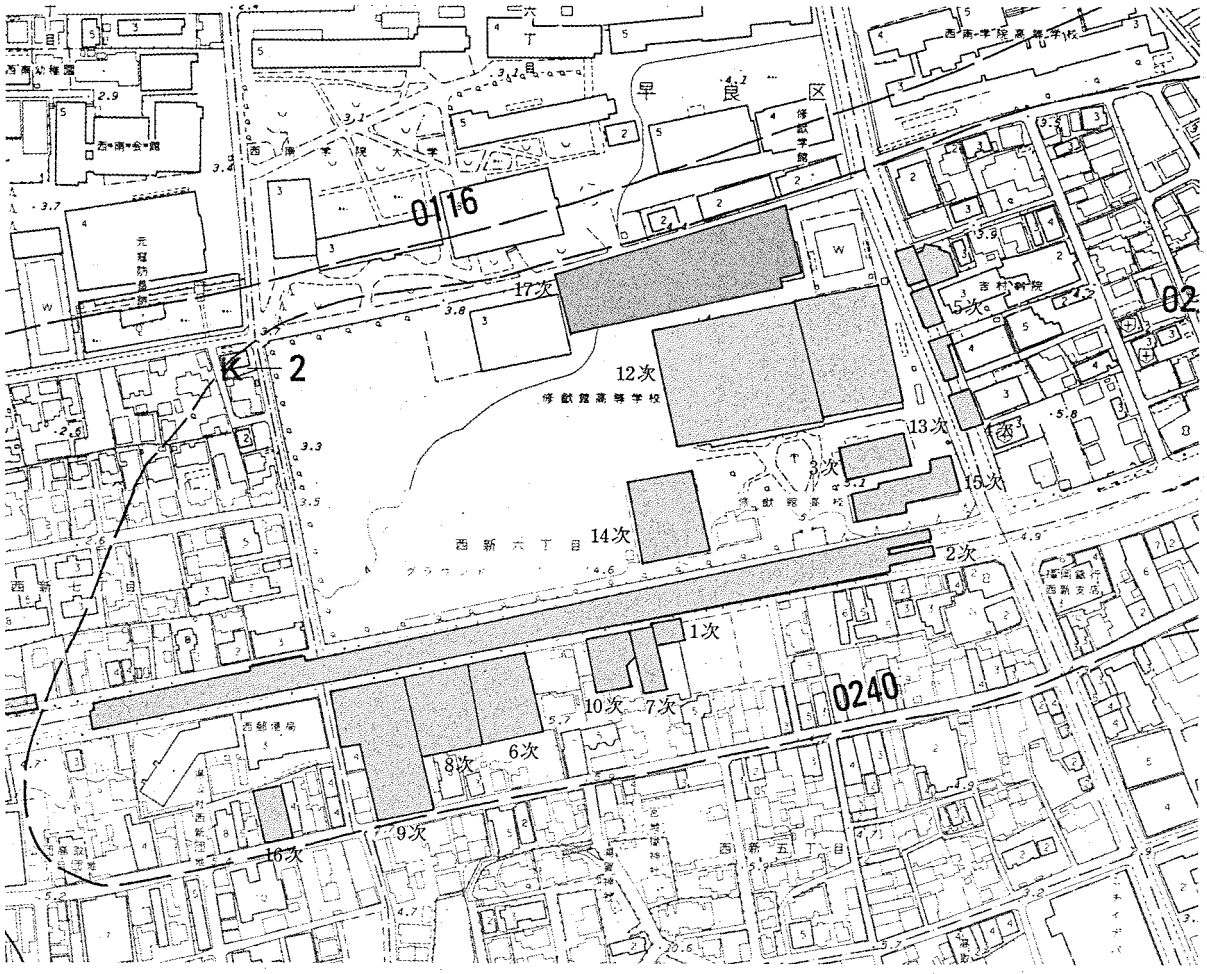
第１表　西新町遺跡調査一覧

調査次数	所在地（福岡市早良区）	調査原因	調査主体	調査面積（㎡）	調査年月	報告書	特記事項
1		民間開発					
2	西新６丁目	地下鉄建設	福岡市	6,230	1976.8-1978.4	市第79集	弥生終末～古墳初住居跡57棟
3	西新６丁目１－10	高校改築	福岡県	700	1984.8	県第72集	古墳前期住居跡７棟
4	西新３丁目	道路拡幅	福岡市	800	1986.6-1986.10	市第203集	古墳前期住居跡８棟
5	西新３丁目606－４	病院増築	福岡市	303	1992.11	市第357集	弥生終末～古墳初竪穴住居跡９棟
6	西新５丁目643－４外	民間開発	福岡市	1,041	1994.3-1994.6	市第483集	弥生終末～古墳初住居跡２棟他
7	西新５丁目638－９	民間開発	福岡市	369	1994.4-1994.5	市第483集	弥生終末～古墳初住居跡９棟他
8	西新５丁目644－１・２	民間開発	福岡市	610	1994.9-1994.11	市第683集	弥生終末～古墳初住居跡３棟、弥生時代中期住居跡１棟等
9	西新５丁目594外４筆	民間開発	福岡市	920	1995.1-1995.4	市第505集	弥生終末～古墳時代初竪穴住居跡８棟、弥生時代中期住居跡12棟
10	西新５丁目641－３外	共同住宅建設	福岡市	462	1995.10-1996.2	市第683集	弥生終末～古墳時代初竪穴住居跡７棟
11	西新５丁目632－６	店舗建設	福岡市	52	1997.10		遺構検出されず
12	西新６丁目１－10	高校改築	福岡県	5,214	1998.4-1998.12	県第154・157集	弥生終末～古墳前期竪住居跡158棟
13	西新６丁目１－10	高校改築	福岡県	2,800	2000.7-2001.2	県第168・178集	弥生終末～古墳前期住居86棟、井戸１基
14	西新６丁目１－10	高校改築	福岡県	1,110	2001.10-2002.3	県第200集	弥生終末～古墳前期住居29棟・井戸１基他
15	西新６丁目１－10	高校改築	福岡県	1,800	2002.9-2002.10	県第200集	近世遺構
16	高取１丁目105	共同住宅建設	福岡市	395	2003.5-2003.8	市第846集	弥生中期住居22棟・弥生中期ガラストンボ玉
17	西新６丁目１－10	高校改築	福岡県	1,990	2003.8-2004.3	本書	弥生終末～古墳前期住居39棟他
18	西新５丁目572外	共同住宅建設	福岡市	345	2005.9-2005.12		



1．西新町遺跡
2．藤崎遺跡
3．元寇防塁
4．西皿山窯跡推定地
5．東皿山窯跡推定地
6．姪浜遺跡
7．五島山古墳
8．拾六町ツイジ遺跡
9．橋本一丁目遺跡
10．有田遺跡
11．原遺跡
12．飯倉遺跡群
13．梅林古墳
14．野方久保遺跡
15．野方中原遺跡
16．羽根戸古墳群
17．吉武遺跡群
18．田村遺跡
19．金武遺跡群
20．都地遺跡
21．四箇遺跡群
22．重留遺跡
23．東入部遺跡
24．重留古墳群
25．野芥遺跡
26．山崎古墳群
27．クエゾノ遺跡
28．七隈古墳群
29．大谷古墳群
30．倉瀬戸古墳群
31．鳥越古墳群
32．能古焼窯跡

第５図　西新町遺跡と周辺の遺跡（１／50,000）（破線は縄文海進ピーク時の海岸線）



第６図　発掘調査区の位置と周辺調査地（１／4,000）

時代においては北部九州の文化の中心とも言うべき位置を占めている。「西新式」の標識資料を出土することは、このような弥生時代以降の考古学的遺跡の展開とも合致するが、早良平野の各時代の遺跡については『西新町遺跡』Ⅱ・『西新町遺跡』Ⅲ（福岡県教育委員会 2001、福岡県第 157 集）、博多湾沿岸部の遺跡の展開については『西新町遺跡』Ⅳ（福岡県教育委員会 2002、福岡県第 168 集）で触れられている。また、考古学的遺跡を除いた歴史的事象については『西新町遺跡』Ⅴ（福岡県教育委員会 2003、福岡県第 178 集）で言及されている。一方、西新町遺跡を特徴づける朝鮮半島の交流に係る各種資料については、対馬海峡を挟んだ両地域の交流史において重要な位置を占めるが、関連する遺跡については『西新町遺跡』Ⅵ（福岡県教育委員会 2006）でまとめているので御参照いただきたい。

参考文献

池田・久住猛雄 2004『藤崎遺跡』15　福岡市埋蔵文化財調査報告書第 824 集

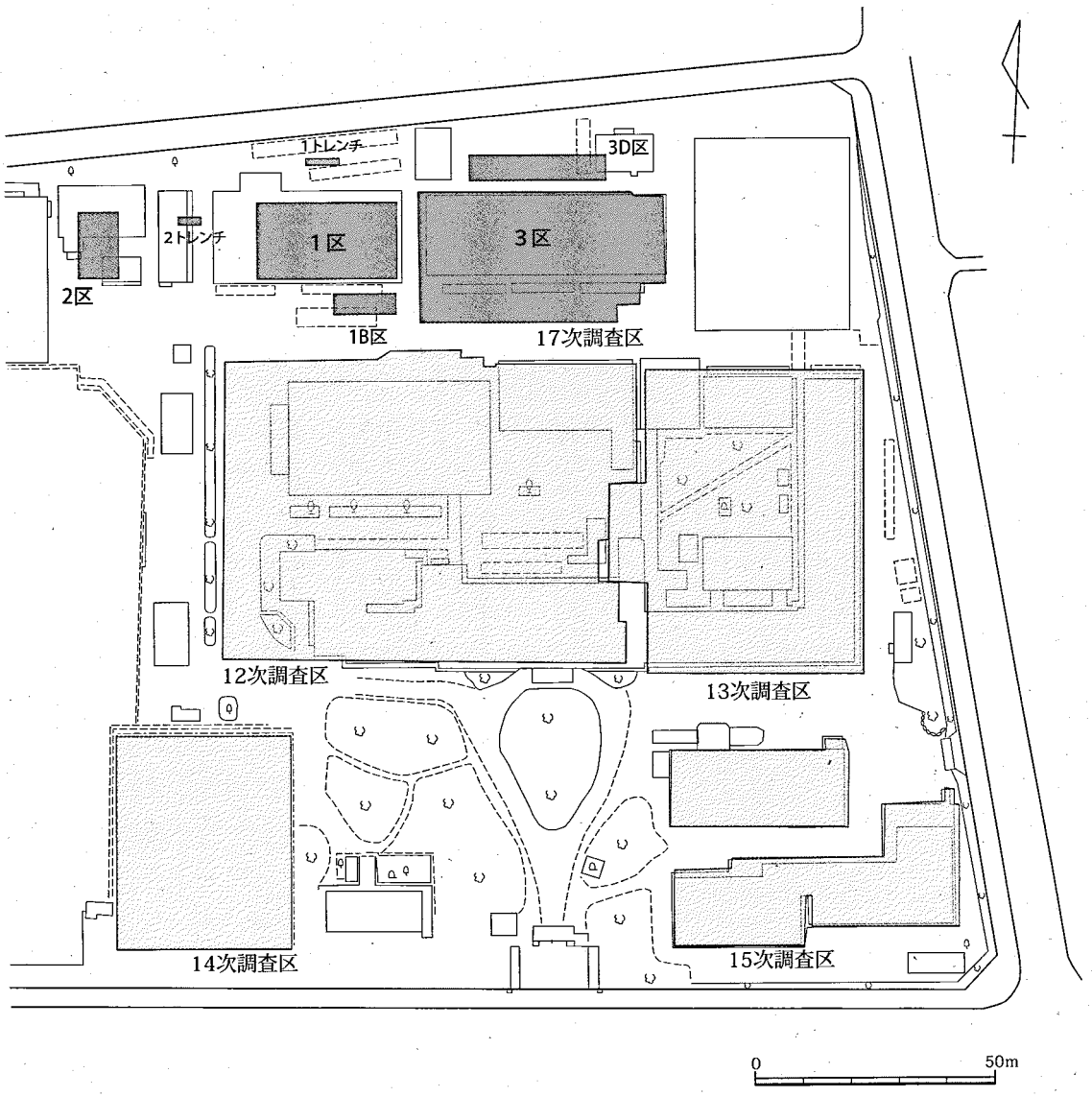
松浦一之介　2005『西新町遺跡』8　福岡市埋蔵文化財調査報告書第 846 集

第３章　調査の内容

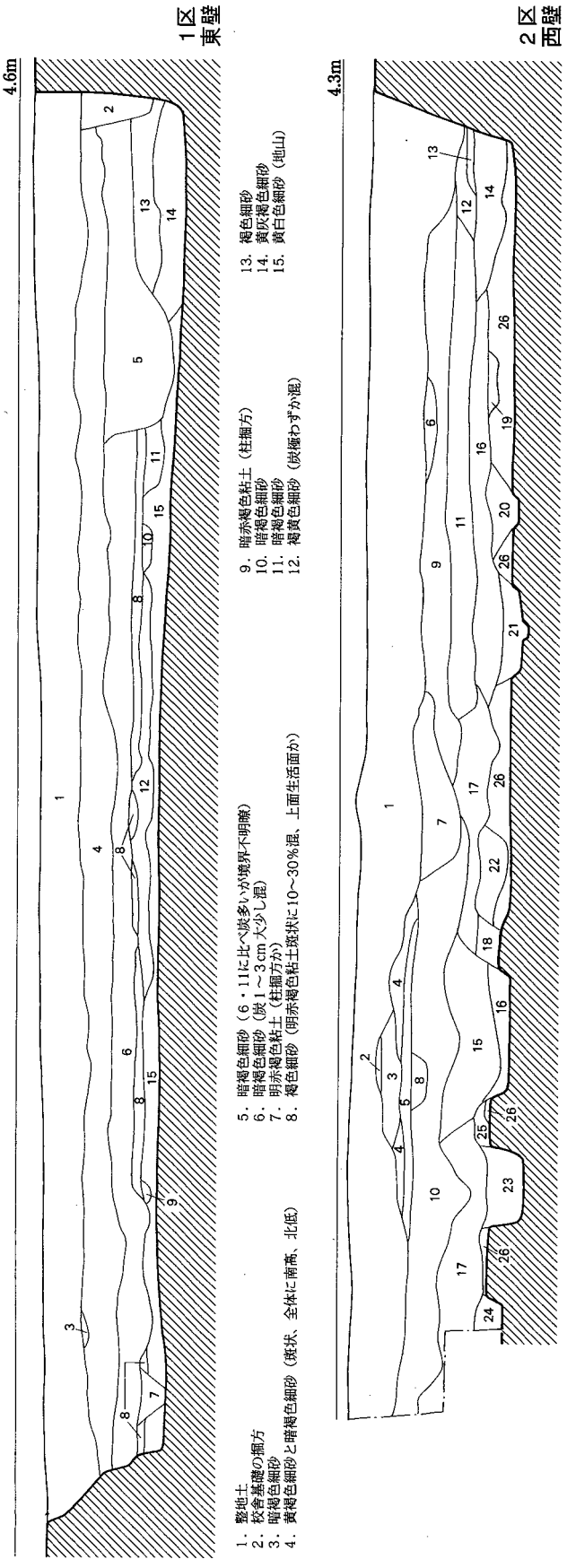
第１節　遺跡と調査の概要

今回の改築工事予定地は、高校敷地北側の広い範囲に及んだが、１区 500 ㎡、１Ｂ区 40 ㎡、２区 100 ㎡、３Ａ～３Ｃ区 1200 ㎡、３Ｄ区 150 ㎡に分割して調査を実施した。

１区は高校敷地北側のほぼ中央部、小体育館の跡地に設定した調査区である（図版１・２、第９図）。調査区は長方形を呈し、遺構検出面は調査区北西隅 2.5 m、北東隅 2.9 m、南西隅 2.5 m、南東隅 3.0 mを測り、緩やかに西に向かい低くなる傾斜を呈す。第８図には本調査区西壁における土層を示したが、その第 15 層上面が遺構面となり、約 1.2 m程の近世・近代の整地層・包含層が遺構面上に堆積していた。検出された遺構としては土坑 15 基（井戸と考えられるもの２基を含む）、溝 11 条等があるが、いずれも近世～近代のもので、古墳時代に遡る遺構は検出されなかった。遺



第７図　調査区周辺地形図（１／1,500）



第8図　1区東壁・2区西壁土層図（1／80）

構面および近世遺構等から出土する古墳時代遺物も極く少量であり、1区は古墳時代初頭集落域の外側にあたるものと考えられた。

1B区は1区の南、1区と12次調査区北西部との間に設置した（図版2、第9図）。調査区は長方形であり、近世遺物等を含む、整地層包含層を掘り下げて現れるきれいな黄白色細砂の上面を遺構面として捉えた。遺構検出面の標高は調査区北西隅2.9m、北東隅3.1m、南西隅2.8m、南東隅3.1mである。検出遺構はピット等であり、北に隣接する1区と同様に古墳時代の遺構は検出されなかった。南に位置する12次調査区北西隅でも竪穴住居跡が分布しておらず、この周辺が古墳時代集落分布域外になることが確認できた。

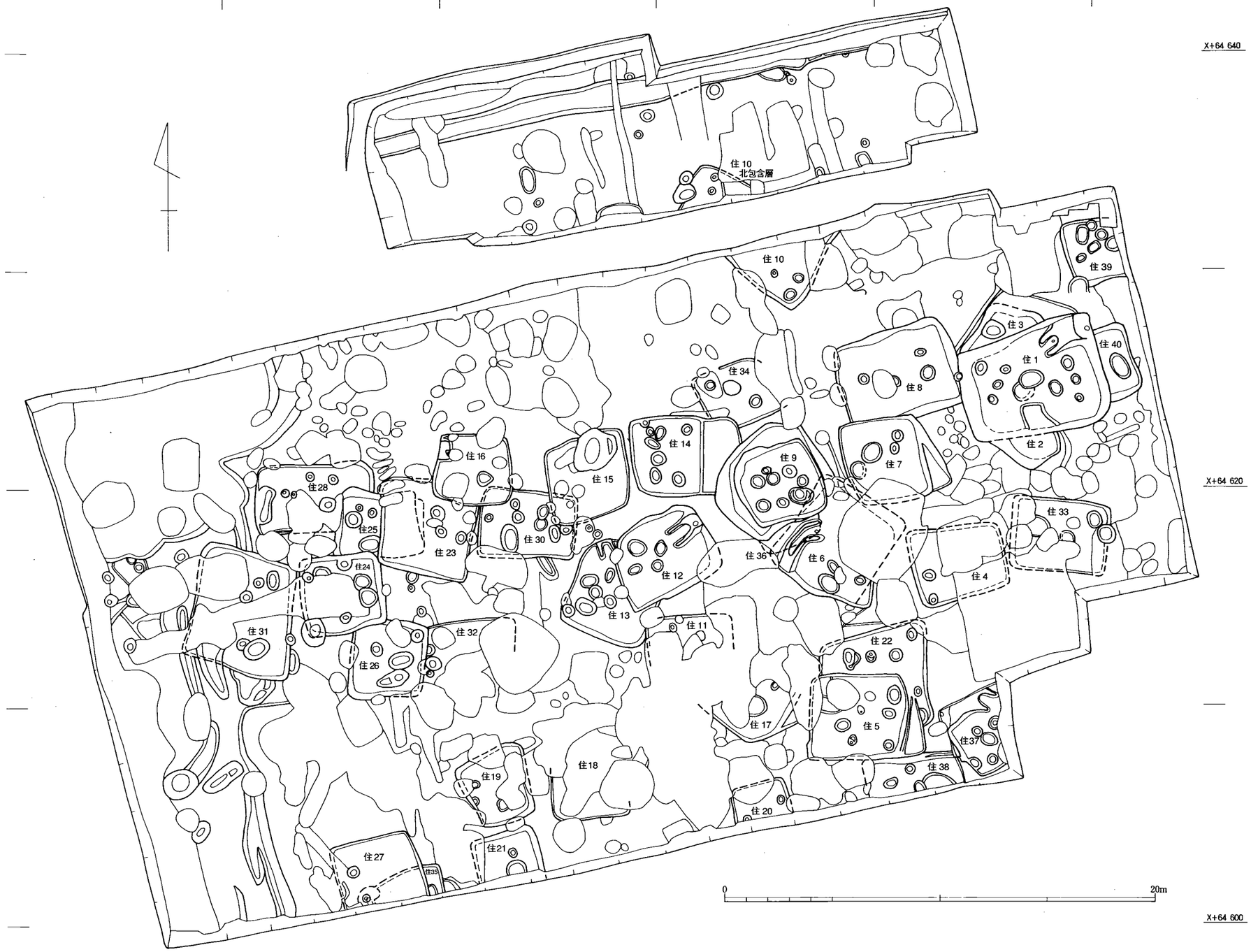
2区は高校敷地の北西から、体育教官室の跡地を対象として設定したものである（図版2、第9図）。調査区は長方形を呈し、近世遺物等を含む、整地層包含層を掘り下げて現れるきれいな黄白色細砂の上面を遺構面として捉えた（第8図）。遺構検出面の標高は調査区北西隅2.4m、北東隅2.5m、南西隅2.5m、南東隅2.5mであり、1区東部と比較して遺構面は0.5m程、低くなる。第7図には2区西壁の土層を示したが、遺



第９図　１・２区近世・近代遺構配置図（1/200）



第10図　3区近世・近代遺構配置図（1/200）



第11図　3区古墳時代遺構配置図（1/200）

構面の上には厚く整地層が堆積している。砂丘の北西方向の傾斜面に相当していた場所が、高校敷地の造成によって、厚く客土整地され、現在見るような平坦地となったと考えられる。検出された遺構としては溝２条、ピット等があるが、いずれも近世～近代のもので、古墳時代に遡る遺構は検出されなかった。

３Ａ～Ｃ区は高校敷地北側のやや東より、武道館の跡地に相当する（巻頭図版３・４、図版３～８、第 10・11 図）。調査区は南東隅に未調査地があるが、東西に長いほぼ長方形を呈する。検出された遺構は古墳時代の竪穴住居跡 39 棟、近世～近代の土坑７基、溝 17 基等がある。古墳時代の遺構面の標高は北西隅 3.0m、北東隅 3.7m、南西隅 3.3m、南東隅 3.8m 程であり、全体として南東から北西方向に緩やかに低くなる。

古墳時代の竪穴住居跡は北西隅には分布せず、調査区の南東側では竪穴住居跡の遺存状況が良好であった加えて北西に向うにつれて竪穴住居跡の壁がわずかしか残らないなど遺存状況が悪くなる。したがって、ちょうど古墳時代集落の縁辺部近くに調査区が位置することになる。

３Ａ～Ｃ区の北側には、水道管を保護するための未調査地を挟んで、東西に長い調査区３Ｄ区を設定した（図版４、第９図）。地山の黄白色細砂面を遺構面として調査し、その標高は北西隅 3.3m、北東隅 3.4m、南西隅 3.35m、南東隅 3.5m である。３Ａ～Ｃ区の北壁にかかる位置にある 10 号竪穴住居跡が３Ｄ区まで連続していた可能性があるが、他には古墳時代の遺構は検出されなかった。近世以降の遺構としては溝 10 条などがある。遺構面、近世の遺構・包含層には古墳時代の土器をわずかながら含むが、いずれも細片であり、ローリングを受けているものも多い。遺構の様相とこのような古墳時代遺物の状況から考え合わせて、３Ｄ区近辺は古墳時代集落域のほぼ外郭線上に位置すると考えられるであろう。

なお、１区の北、西に設定した１トレンチでは地表下 110 ～ 120cm、２トレンチでは地表下 170 ～ 180cm で近世の遺構面となるきれいな黄白色細砂層が検出された。しかしながら、古墳時代の遺構はほぼ皆無の状態であったため、１区と２区の間を発掘調査の対象から除外した。これらの調査に伴って出土した遺物は古墳時代初頭の土師器等各種遺物、近世～近代の陶磁器等各種遺物あわせて 221 箱であった。

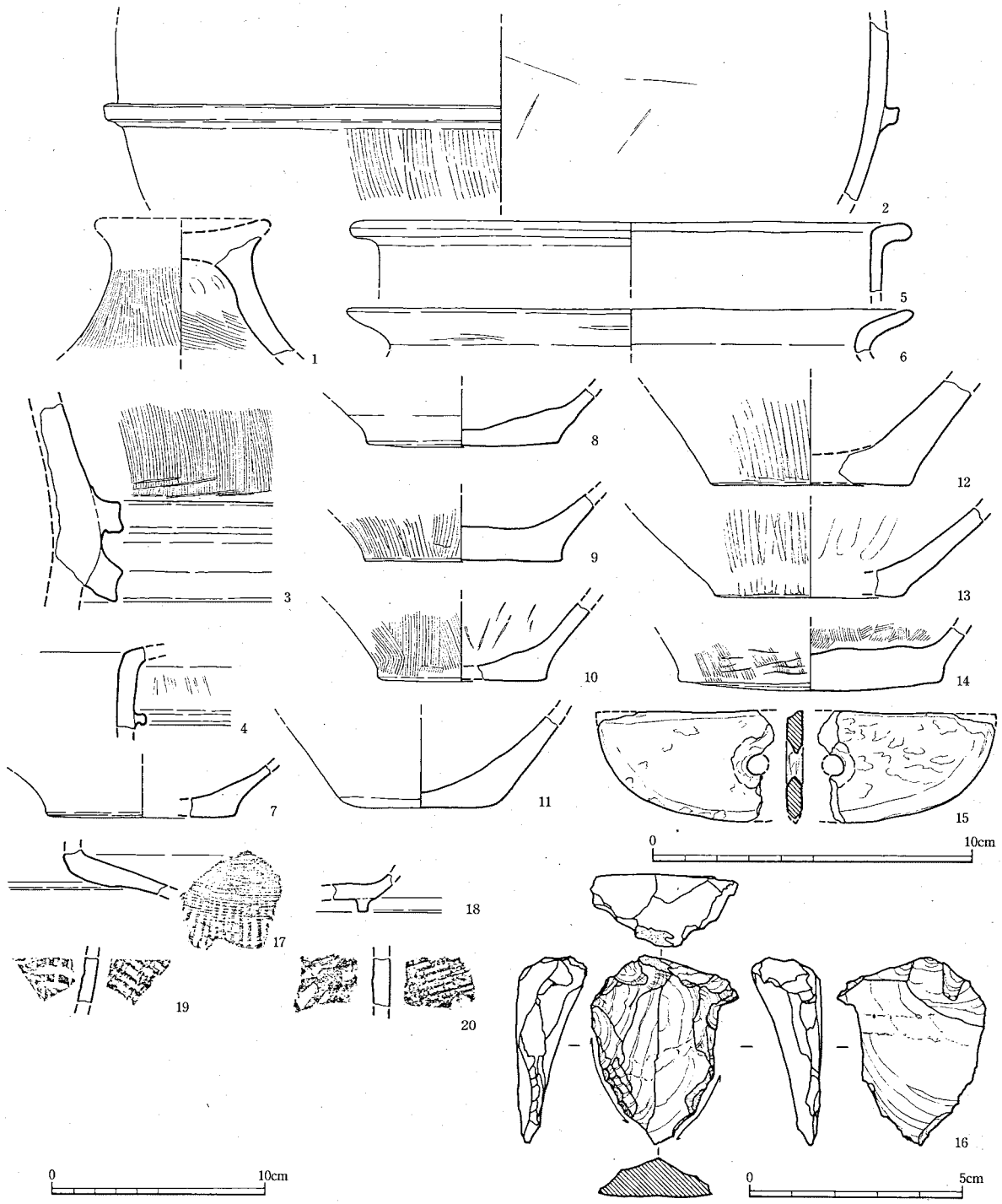
西新町遺跡の古墳時代集落については 12・13 次調査の結果などから、南西～北東方向に伸びる砂丘上に分布していることが指摘されている。第６図に見る修獣館高校内敷地内の現地表面の等高線に現れた南西～北東方向の高まりともほぼ合致している。今回の調査ではちょうど古墳時代集落域の縁辺部に位置することになるが、これまでの調査から推定された分布範囲を追認すること結果を得たと考えられる。

このように今回の調査では古墳時代の竪穴住居跡と近世～近代の遺構が検出されている。近世～近代の遺構も陶磁器を一括して出土した土坑、井戸もあり、詳細に報告すべきものも少なくない。しかしながら、本書では時間的な制約、および紙幅の関係で主として古墳時代初頭の集落に関係する遺構と遺物を中心に報告することにしたい。

第２節　弥生時代以前及び古墳時代後期～奈良時代の遺物

第 12 図１～ 14（第２表）は調査区各所から出土した弥生土器破片で、全体的に弥生時代中期のものが多い。調査区内には弥生時代の遺構は検出されていないので、遺跡南側の弥生時代集落・甕棺墓地に伴うものが二次的に移動したものが多いのではなかろうか。１は弥生時代中期の蓋と考えたが、弥生時代終末の器台の可能性もある。

15 は３Ｄ区の包含層４下層出土の片岩性石包丁片である。残存高 35mm、残存幅 55mm、厚さ



第 12 図　西新町遺跡 17 次調査出土弥生土器・須恵器・弥生時代以前の石器実測図
（15 は１／２、16 は２／３、他は１／３）

5mmを測る。全体的に摩滅し、刃も丸くなるが、裏面には敲打痕と思われる浅い凹みが残る。16は漆黒の黒耀石の剥片であるが、側縁に小さな剥離を加え、基部も礫面を剥ぎ取っているので、道具として使用したものか。石材は不純物を含み粗雑である。長さ45mm、幅35mm、最大厚17mmを測る。

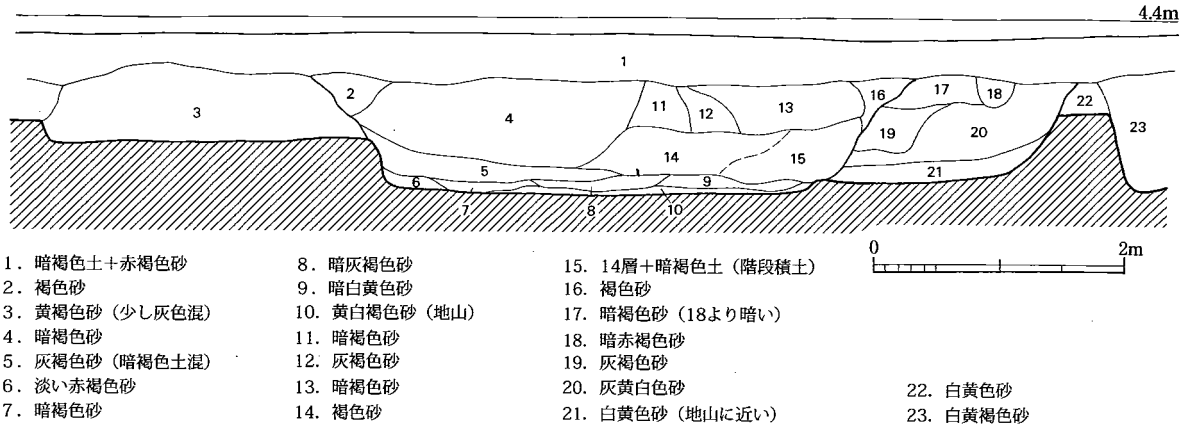
17～19は須恵器である。17は須恵器壺肩部小片、18は高台付杯底部小片、19・20は甕胴部小片。今回の調査区で出土した古墳時代後半～奈良時代の須恵器と思われる破片は以上で全てである。今回の調査区からも多量の古墳時代初頭前後の陶質土器が出土したが、須恵器そのものが極めて少量であるために、古墳時代後半以降の須恵器を陶質土器と誤認した可能性は小さいものと思われる。

第3節　古墳時代の遺構と出土遺物

古墳時代の遺構には3A～C区（以下3区とする）で検出された竪穴住居跡39棟がある。古墳時代の竪穴住居跡の調査としては近世以降の遺構及び、最近の撹乱坑を掘削した後に、遺構面まで検出し、平面形および 近世以降の遺構・撹乱坑の壁面に観察される床面及び壁の立ち上がりを観察しながら、切合いを確定し、掘削をすすめた。通常の竪穴住居跡の発掘調査では遺構の覆土等を土層として図化することが一般的であるが、本遺跡においては竪穴住居跡の重複が多いことに加え、地山、住居跡覆土とも砂質土で崩落しやすく、土層壁を垂直に掘削し、観察・図化することが困難であった。そのため、覆土の状況は文字記録に留めることとした。また、住居跡床面には柱穴掘り方が存在するはずであるが、砂質土のためそれを確実に抽出するには無理がある。そのため、主柱穴の抽出は断念して、調査を行った。

第2表　西新町遺跡17次調査出土弥生土器・須恵器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
12-1		住8覆土下部	蓋頂部付近？	括れ部66、残高55	粘土やや粗、1～3mm石英少し混	良好	黄褐色	外縦ハケ、内上部ナデ、内下部斜めハケ。	1／3	弥生終末の器台の可能性あり	1424
12-2		住12覆土下部	大形壺胴部	胴径360、残高84粘土粗	粘土粗、1～5mm大石英多	良好	外淡褐色、内暗灰褐色	断面コ字突帯。外突帯上ナデ、下ハケ、内板ナデ。	1／12	径、傾き不安	
12-3		住9覆土下部	大形壺胴部		粘土かなり粗、1～3mm大石英多	良好	淡褐色	高い断面コ字突帯2条貼付。外ハケ、内剥離。	小片	傾き、天地不安	943
12-4		住10	甕口縁部？		粘土粗、1～3mm大石英かなり多	やや甘い	赤褐色	口縁より下に低い突帯貼付。内外摩滅、外ハケメ残。	小片	傾き、天地不安	3
12-5		住14P1	甕口縁部	口径262、残高32	粘土かなり粗、1～3mm大石英多	良好	外暗褐黄色、内黄褐色	口縁短く外折。口縁端部丸い。内外摩滅で調整不明。	1／8		987
12-6		3区遺構面	甕口縁部	口径264、残高33	粘土やや細か、1～3mm大石英少し混	良好	橙褐色	口縁外傾し、端部丸い。内外摩滅するが。口縁外面に水平の工具痕あり。	1／8		2100
12-7		3D区溝35	壺底部	底径88、残高25	粘土やや粗で、長石・石英極多	良好	淡黄褐色	内外摩滅し調整不明。	1／4		2215
12-8		3D区溝35	壺底部	底径90、残高28	粘土やや粗で、長石・石英極多	良好	淡黄褐色	内外摩滅し調整不明。	1／3	12-3と同一にも見えるが、器表摩滅度に差あり	2214
12-9		住1覆土中部	壺底部	底径92、残高43	粘土粗、1～5mm大長石・石英多	良好	外褐黄色、内黄褐色	外面雑なハケ、内面板ナデ。	底部全周		1548
12-10		住8覆土下部	甕底部	底径78、残高37	粘土粗、1～3mm大石英少し混	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	外面ハケ、内面板ナデ。	1／3		1405
12-11		住8覆土下部	甕底部	底径68、残高43	粘土粗、1～3mm大石英多	やや甘い	内淡黄褐色、外黄褐色	底・胴部境界の稜甘い。内外摩滅し調整不明。	2／3	弥生後期の甕か。	1406
12-12		住9覆土下部	甕底部	底径90、残高50	粘土かなり粗、1～3mm大石英多	良好	外暗褐色、内暗褐灰色	器壁厚く、大形品か。外面粗い縦ハケ、内面ナデ。	1／4		947
12-13		住33覆土	壺底部	底径86、残高43	粘土粗、1～3mm大石英かなり多	良好	外淡赤褐色、内淡黄褐色	外面粗い縦ハケ、内面ナデ（指頭圧痕あり）。	1／6	外面二次的に熱により赤変？	572
12-14		住7覆土下部	壺底部	底径104、残高30	粘土かなり粗、1～3mm大石英多	良好	外黄褐色、内褐灰色	底部厚く大形品。胴・底外面ハケ、内面ハケ。	2／3	弥生時代終末に降る可能性あり	1355
12-17		3区溝18北半	須恵器壺肩部			良好	暗灰赤色	外擬格子タタキ後カキメ。内ナデ。	小片		2168
12-18		3区近世包含層7南部	須恵器杯底部			良好	灰褐色	高台付杯の高台付近破片。高台は低い。内外ナデ。	小片		2413
12-19		3区中央遺構面	須恵器胴部片			良好	暗灰色	外面擬格子タタキ、内面同心円当て具痕。	小片		2121
12-20		3区P296	須恵器胴部片			良好	暗灰色	外面格子タタキ。内面同心円当て具痕。	小片		2414



第13図　1～3号竪穴住居跡土層実測図（1／60）

なお、現地においては40号竪穴住居跡まで番号を付していたが、29号竪穴住居跡は6号住居跡の一部を誤認して独立した番号を付していたことが調査の進行によって明らかになった。そのため、29号竪穴住居跡は欠番とした。

（1）竪穴住居跡とその出土土器

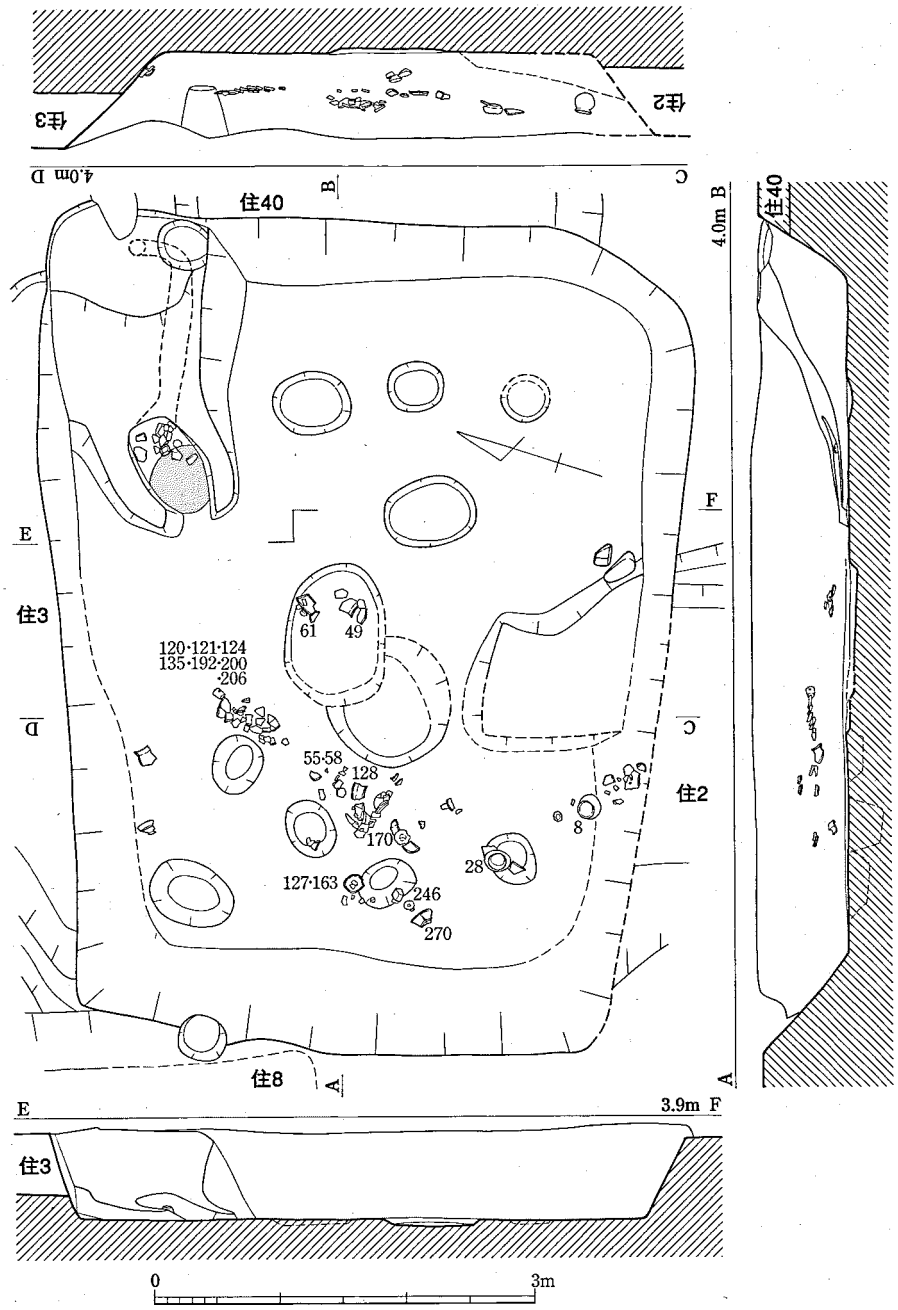
1号竪穴住居跡（巻頭図版9.10、図版8・9、第14図）

3区の東部に位置し、1・2・8・40号竪穴住居跡を切っている。1～3号住居跡の覆土の堆積状況は第13図に示した。5cm程掘り下げるまでは1号竪穴住居跡と2号竪穴住居跡の切合いを逆に考えていた。また、住居跡南壁西側は2号住居跡との切合いが不明瞭であったため、土層図および東側2／3の壁ラインを考慮して復元的に図示している。加えて、調査工程の関係で先に住居跡西側1／3程を発掘し、その埋戻し後に残り2／3を発掘したため、写真も分割して撮影せざるを得なかった。このような問題はあるが、壁の高さ0.75m前後で、遺存状況の良好な竪穴住居跡であり、8・40号住居跡との切合いも間違いない。

東西に長い長方形の平面形を呈する竪穴住居跡で、長軸をN－73°－Eに向け、上面で長さ6.4～6.6m、幅4.3～5.2mを測る。南壁の略中央に東西1.2m、南北1.6mの灰白色細砂と極めて薄い暗褐色粘質土を互層に積んだ段を設置している。高さは土層図から復元的に図示しており、床面からの高さ10～30cm程であるが、入口の施設と推測される。床面では11基のピットが検出されたが、いずれも深さ10cm内外であるとともに、規則的な平面配置も抽出できないため、主柱穴は不明である。住居跡の北東隅床面にはカマドが設置されている。

住居跡規模が大きく、遺存状況も良好であるためか、覆土中の遺物は多量である。特に西1／3の範囲では床面から20cm程浮いて、水平にまとまって遺物が出土した。土器の他に小形の倣製鏡（第145図）が出土したことが特筆される。

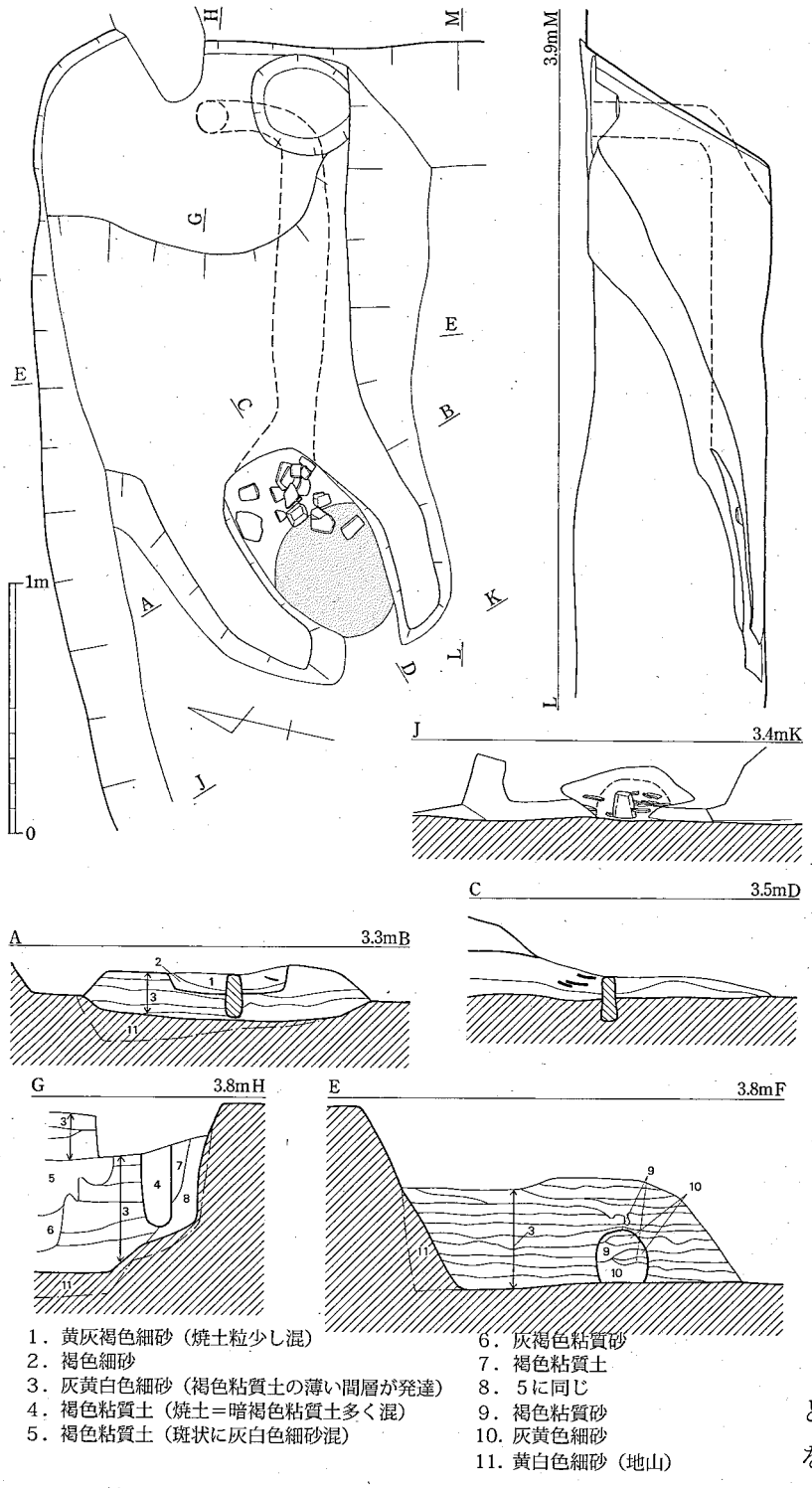
カマド（図版10・11、第15図）　住居跡北壁中央やや東寄りを燃焼部とし、北壁に沿って東に煙道を延ばし、東北隅で煙道が立ち上がる。住居跡隅、煙道先端部付近では、遺構検出面でカマド構築土が露出し、床面からの高さ70cm程まで遺存する。しかし、構築土の上面を露出させていくと、次第に低くなり、燃焼部を取り囲む袖部は、床面からの高さ10cm程であった。したがって、袖上部は住居跡廃棄時に、意図的に壊された可能性が高いのではないかと推測される。カマドの構築土は5～10cm前後の厚さの灰黄白色細砂と1cmに満たない厚さの膜状の褐色粘質土を互層に積み上げている。



第 14 図　1 号竪穴住居跡実測図（1／60）

住居跡東壁上面から 1.9m、北壁上面から 1.0m の床面に太さ 0.1m 前後で、床面から高さ 0.1m 程突出したカマド支脚石が遺存する。その前面が 0.45 × 0.5m の範囲で床面が暗褐色に変色しており（第 15 図網かけの範囲）、燃焼部と考えられる。燃焼部とそれを取り囲む袖の主軸は N－45°－E であり、北壁に沿って伸びるカマド煙道の軸線とはずれている。支脚の周辺からは図示できなかったが、土師器甕胴部片がまとまって出土した。なお、燃焼部の床面から袖下部は 10cm 程掘り込み、カマド構築土と同様の土を積んで整地している。

住居跡東壁から 0.3m、北壁から 0.7m の所に直径 0.15m の範囲で円形に焼土（暗褐色粘質土）をブロックで含んだ褐色粘質土が検出され、煙道端部と推測された。そこで、カマド袖内の堆積土からの連続、煙道端部の覆土の連続を検出するために、カマド燃焼部近くでは煙道主軸に直交する方向で、断ち割りながら断面を観察し、煙道の方向、規模を調べることとした（図版 10・11）。



第15図　1号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）

第15図に図示したE－F方向断面では、住居跡壁から0.7m程離れたところの床面上に高さ0.2m、幅0.2mの範囲で略円形に積土土層が乱れる部分があり、これを煙道の断面と推測した。そのような部分を断面で探しながら煙道を復元的に図示したのが、第15図平面図、側面図の破線である。これに基づくと煙道は支脚から東に1.5m程、北壁上面と1.0m程の間隔をおいて平行に延び、東壁近くでほぼ直角に屈曲して北に曲り煙道端部・上面に至ると推測される。

ただ、E－F方向断面で推定した煙道堆積土は、G－H断面の煙道堆積土と比べると、焼土・粘質土の割合が小さく、基本的には煙道・カマド袖の構築土に類似する。また、東壁近くの屈曲の様相も平面的に検出したものではないため、煙道のラインが確定できたとも言い難い。そのため、燃焼部から煙道へのつながりの部分も推測の域をでない。

このように煙道のラインを確定するまでに至らなかったという問題はあるが、煙道付近を中心として遺存状況が良好なことに加えて、規模が大きいため、西新町遺跡の初期カマドを代表する事例と言えるだろう。

出土土器（巻頭図版8、図版25～27、第16～28図、第3～11）　1は在地系の大形壺で、2は同一個体の底部か。3～5は在地系の直口壺口縁部で、6は在地系壺頸部片。7は在地系の二重口縁壺になるか。8は口縁内外縦ミガキ、胴部内外粗いミガキ仕上げのやや粗製の中形直口壺。

9～26は山陰系二重口縁壺である。10は外面の屈曲部の突出が他に比べ弱い。16は肩部外面に櫛描直線文を巡らし、頸部内面に稜が形成される。多くが口縁端を上、外につまみ出すが、17は

器壁が厚く、端部は丸く仕上げる。23は口縁が大きく開き、内面に縦ミガキを施したもので、頸部の直立する二重口縁壺となるか。24～26は口縁部小片。

27は長くわずかに内傾気味に立ち上がる頸部から、外傾して大きく口縁が開く壺で、東部瀬戸内系のものか。28は頸部が短く、口縁部の内傾が強い二重口縁壺で、西部瀬戸内系のものと推測される。胎土も角閃石を含み在地の土器とは異なる。

29～49は畿内系直口壺。35は内外ハケで口縁端部はやや凹み、あるいは在地系か。42は口縁端の内への肥厚、外の横ミガキ、口縁内の縦ミガキ、胴内面のハケメ仕上げが特徴的で、色調も含めて他の畿内系直口壺と異なる。46～48は頸内の指頭圧痕が顕著であり、47は口縁端部を外につまみ出す。48は胴外のハケの切合いがよく観察できる。

50・51は畿内系の二重口縁壺の口縁部～頸部破片、52は畿内系二重口縁壺肩部破片か。50は器壁が厚く、51は口縁部の接合面に、接合を補強するために施されたハケメ工具刺突が観察できる。52は肩部に2単位の櫛描波状文と、櫛描直線文を隙間なく施文する。53は口縁の長く伸びる山陰系中形二重口縁壺であり、口径が小さく、頸部が短い54～56も山陰系となるか。

57～59は畿内系直口壺で、60・61はその胴部か。いずれも精製で、58・59は口縁内面に暗文風のミガキを施し、60・61は胴部外面を下部ケズリ、上部ハケ後、横ミガキで仕上げる。62は小形の畿内系二重口縁壺肩部片か。

63～72は小形丸底壺。63はやや大きく、口縁部が短く直立する。71は脚付で、胴内面にも放射状のミガキ暗文が残る。72は外面縦ミガキ、内面粗いハケを施したもので、他と調整が異なる。

73・74は在地系甕と考えたが、74は山陰系器台口縁などの他の器種の可能性も残す。75～79は五様式系甕か。76は口縁端外に凹みが巡り、頸内接合痕が残る。78は頸部外面に粗いタタキ痕を残し、本遺跡の主体となる土器の色調とは異なり、褐色を呈す。80は外面を細かいタタキで仕上げたもので、庄内系甕か。

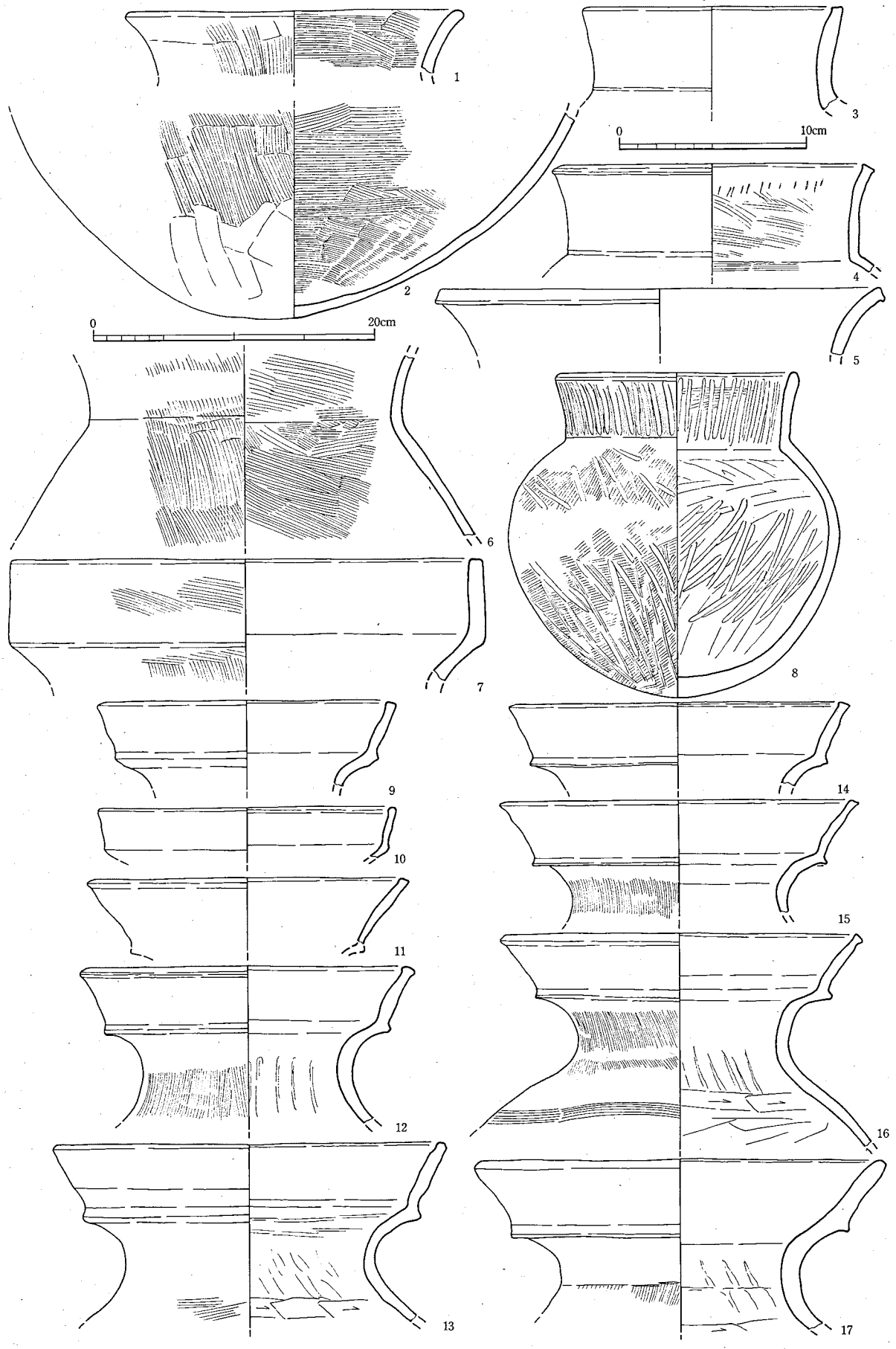
81～124は布留系甕。81・118は肩に櫛描波状文、82はハケメ工具小口刺突文、85は列点文、92・108は沈線波状文、94・112は沈線直線文を施す。82・84・91・99・109は胴外面のハケメの切り合いが良く観察できる。87は口縁外面に棒状工具の刺突のような痕跡があるが、意図的な文様かは不明である。94は口縁端の内へのつまみ出しが顕著で、頸部内面に接合痕を残す。95は頸部内面に工具痕と思われる凹みが見られる。109・121は胎土に土器片粒らしき混和材を含む。110は胴外を縦ハケのみで仕上げ、横ハケを施さない点が特殊である。112は口縁、胴肩外面に、120は胴部に粗いタタキ痕らしき条痕を残す。116は頸部内面にケズリを施したかのような面が残り特異であり、123は口縁端部をわずかにつまみ出す。

125・126は布留系甕底部と推測される。126は内面ケズリ痕が良好に遺存し、指頭圧痕の部分では爪圧痕も観察できる。127は甕底部と思われるが、布留系甕に比べ器壁が厚い。128・129は大形で器壁の厚い甕である。内面ケズリで仕上げるが、厚い器壁、口縁部の形態等は布留系の甕と異なる。

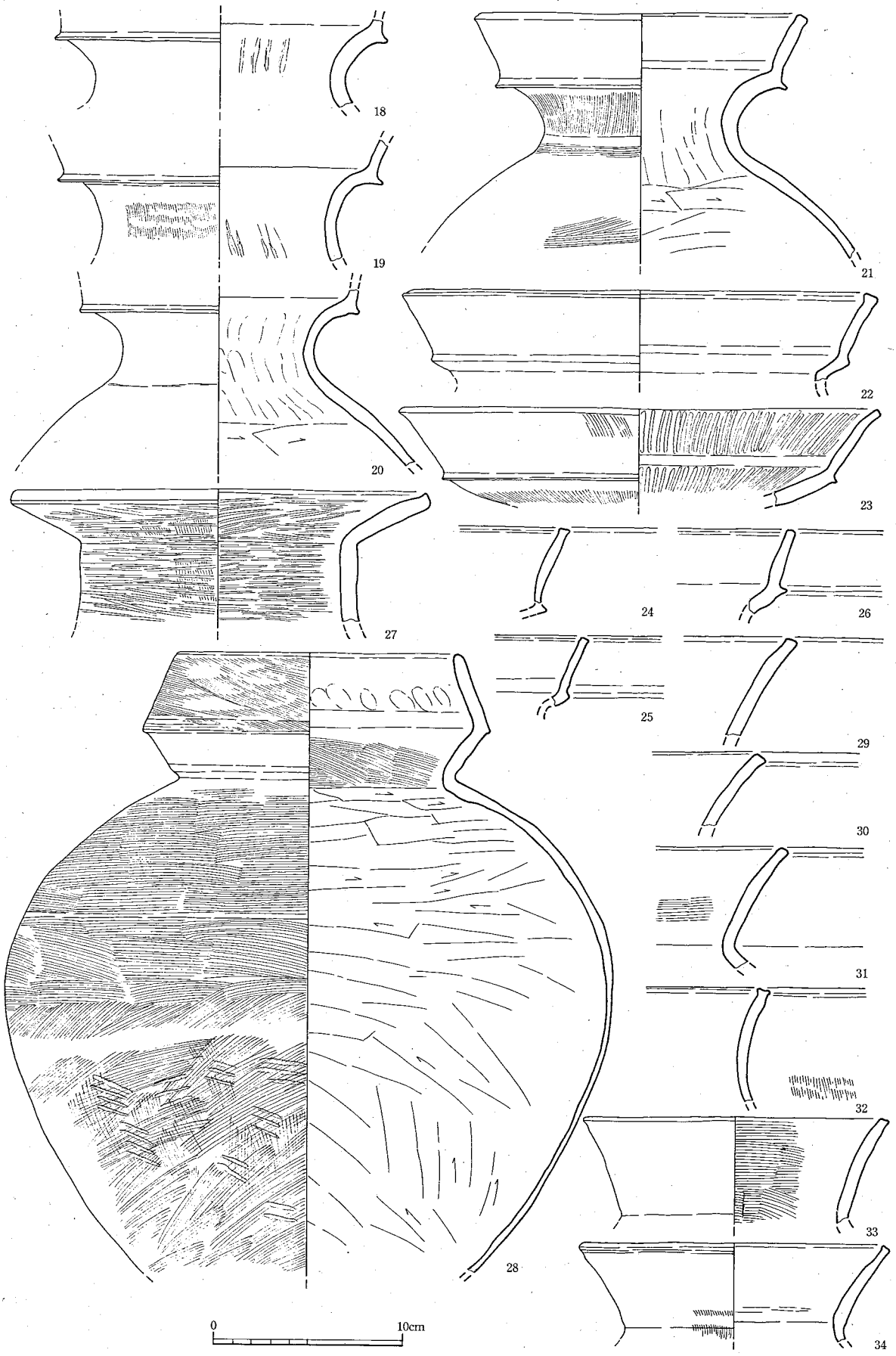
130・131は図上で完形にできたミガキ仕上げの精製高杯。いずれも脚部に半乾燥時の穿孔が2個所に施される。132～159はミガキ仕上げの高杯杯部片で、口縁内面に暗文風の縦ミガキを施すものが多い。外面にも縦ミガキを施す148・156・158・159は在地系高杯と考えられる。146は口縁内面に接合痕を残す。148は口縁端が角張り、端部中央が凹線風にわずかに凹み、156は器壁が薄く、口縁をわずかに上方につまみ上げる。

第３表　１号竪穴住居跡出土土器観察表（１）

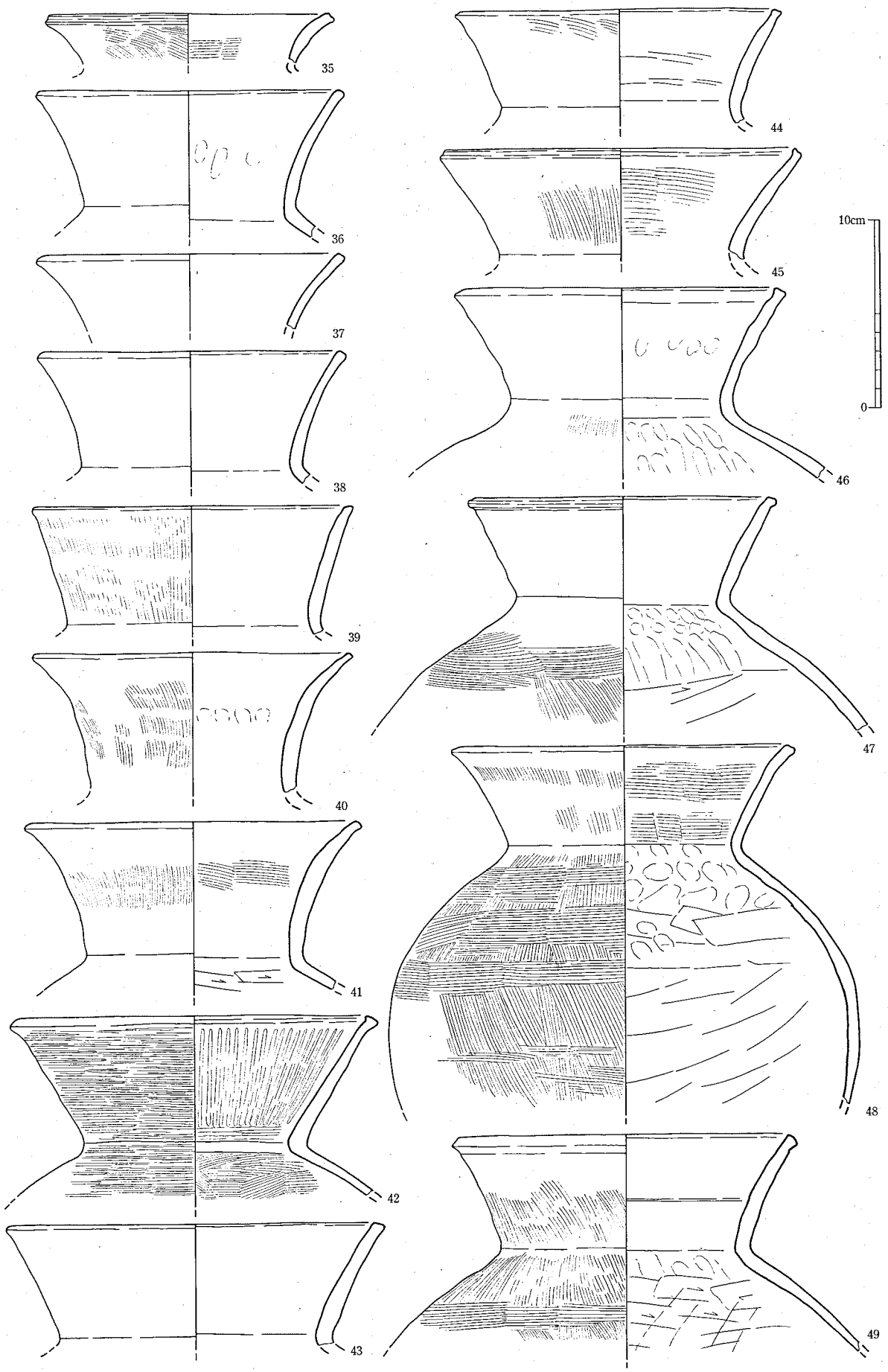
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
16-1		住１覆土下部	在地系大形壺	口径232、残高44	粘土粗、１～８mm石英極多	良好	褐色	口縁緩やかに外反、端部丸い。内外ハケ。	１／６		1472
16-2		住１覆土下部	在地系大形壺	残高146	粘土粗、１～８mm石英極多	良好	褐色	内外ハケ後、胴下部外板ナデでハケを消す。	全周		1473
16-3		住１覆土	在地系直口壺	口径136、残高54	粘土粗、１～３mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁緩やかに外反、端部角張る。頸部外面強いナデの稜あり。内外ナデ。	１／４		1628
16-4		住１覆土上面	在地系直口壺	口径160、残高57	粘土粗、１～５mm石英多	良好	淡黄褐色	端部やや外に拡張。外摩滅、内ハケ、口縁上部内工具の当たりらしき条痕。	１／４		1486
16-5		住１覆土下部	在地系直口壺	口径232、残高36	粘土粗、１～３mm石英多	良好	淡褐灰黄色	内外ナデ。	１／８		1635
16-6		住１覆土	在地系壺頸部	頸径168、残高96	粘土粗、１～５mm石英少	良好	淡黄褐色	肩の張り小さい。内外ハケ、胴部ハケは上から下への切り合い。	１／４		1733
16-7		住１覆土上面	在地系二重口縁壺	口径236、残高65	粘土粗、１～５mm石英少	やや甘い	黄褐色	頸部の括れ小さく口縁直立。外ハケ、内摩滅。	１／８		1651
16-8	25	住１覆土中部	中形直口壺	口径126、頸径120、胴径172、器高172、胴高138	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内淡褐黄色	口縁部直立、端部丸い。胴外斜めハケ、胴内ケズリ後太めミガキ。口縁外縦ハケ、口縁内横・斜めハケ後縦ミガキ。	口縁１／２、胴全周		1655
16-9		住１覆土	山陰系二重口縁壺	口径150、残高45	粘土粗、１～３mm石英・長石多	良好	外暗灰黒色、内淡黄褐色	内外ナデ。	１／８		1749
16-10		住１覆土上面	山陰系二重口縁壺	口径154、残高26	粘土粗、１～３mm石英・長石少	やや甘い、器肉黒変	褐灰色	屈曲部の突出弱い。内外ナデ。	１／８		1792
16-11		住１覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径162、残高35	粘土粗、１～３mm石英多	良好	淡黄褐色	内外丁寧なナデ。	１／８		1720
16-12		住１覆土上面	山陰系二重口縁壺	口径168、残高83	粘土粗、１～３mm石英・長石少	やや甘い、口縁外黒変	白黄褐色	頸部外縦ハケ、頸部内絞り痕をナデ消し。口縁内外ナデ。	１／３		1479
16-13	25	住１覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径200、残高84	粘土粗、１～３mm石英・クサリ礫少	良好	淡褐色	胴外ハケ、胴内ケズリ、頸部外～口縁内ナデ、頸内ハケ・指頭圧痕残。	１／６		1645
16-14		住１覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径170、残高45	粘土粗、１mm長石・石英少	良好	外淡黄褐色、内褐黄色	内外ナデ。	１／８		1755
16-15		住１覆土上面	山陰系二重口縁壺	口径184、残高60	粘土粗	良好	淡黄褐色	頸外ハケ、口縁外～内ナデ。	１／６		1480
16-16	25	住１覆土中部	山陰系二重口縁壺	口径186、残高114	粘土粗、１～３mm石英・クサリ礫少	良好	外灰黄褐色、内淡黄褐色	肩外面櫛描直線文。頸部外ハケ、頸部内絞り痕、胴外ナデ、口縁内ケズリ。	口縁３／４、胴１／３		1546
16-17	25	住１覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径212、残高91	粘土粗、１mm長石・石英多	良好	淡黄褐色	器壁厚く、端部丸みを帯びる。頸内ハケ、胴内ケズリ、頸内ナデ。	１／６	口縁内面煤が厚く付着。	1463
17-18		住１覆土	山陰系二重口縁壺	残高46	粘土粗、１～３mm石英・長石多	やや甘い	淡黄褐色、器肉暗黄灰色	内外ナデ、頸部内面絞り痕残。	１／８		1783
17-19		住１覆土	山陰系二重口縁壺	残高63	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	外褐黄色、内淡黄褐色	頸外縦ハケ、口縁外摩滅、内ナデで、頸内絞り痕残。	１／８	外面煤付着。	1631
17-20		住１no.6	山陰系二重口縁壺	頸径102、残高94	粘土粗、１～３mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	胴外摩滅、口縁内外ナデ、頸内指頭圧痕、胴内ケズリ。頸下外にハケメ工具あたりらしき微かな段あり。	口縁１／４、胴１／８		1452
17-21		住１no.6	山陰系二重口縁壺	口径168、頸径102、残高128	粘土粗、１～３mm石英少	やや甘い、器肉中央灰変	外灰黄褐色、内淡黄褐色	頸外縦ハケ、胴外横ハケ後、外～口縁内ナデ。頸内に絞り痕残。	１／４		1450
17-22		住１覆土上面	山陰系二重口縁壺	口径238、残高45	粘土粗、１～３mm石英・長石多	やや甘い、器肉中央灰変	淡黄褐色	内外ナデ。	１／12	小片のため径不安。	1797
17-23		住１覆土中部	山陰系二重口縁壺	口径250、残高51	粘土粗、１～３mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁大きく開く。頸部の直立する二重口縁壺か。内縦ミガキ、外ハケ後ナデ。	１／４		1561
17-24		住１覆土上面	山陰系二重口縁壺	残高39	粘土粗、１～３mm石英・長石少	やや甘い	外灰黄褐色、内淡黄褐色	内外ナデ。	小片	内面一部煤付着。	1808
17-25		住１覆土上面	山陰系二重口縁壺	残高36	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	外褐灰色、内淡黄褐色	内外ナデ。	小片		1808
17-26		住１覆土	山陰系二重口縁壺	残高44	粘土粗、１～３mm石英多	良好	淡褐黄色	内外ナデ。	小片		1787
17-27		住１覆土下部	壺	口径112、残高69	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外暗褐赤色～褐色、内黄褐色	わずかに内傾気味の頸部から外傾して口縁開く。外縦ハケ後内外横ミガキ。	１／３	破損後火を受けたためか一部煤付着	1573
17-28		住１no.１・７	二重口縁壺	口径154、頸径152、胴径222、残高305	粘土細、１～３mm石英・角閃石少	良好	淡黄褐色	頸部が短く、口縁が強く内傾。口縁端丸い。口縁・胴外面丁寧な横ハケ、頸部外面ナデ。肩やや下に微かな段、胴下部にハケ前のタタキ残。口縁内外ナデ。頸内ハケ、胴内ケズリ。	口縁全周、胴１／３	胎土在地の土器とは異なる。胴部は上下で接合せず、器形やや不安。	1459
17-29		住１覆土下部	直口壺	残高52	粘土粗、１～３mm石英・長石少	やや甘い	淡黄褐色	内外摩滅。	小片		1745
17-30		住１覆土下部	直口壺	残高37	粘土粗、１～３mm石英・長石多	良好	淡黄褐色	内外強い横ナデで、器表の凹凸顕著。	小片		1721
17-31		住１覆土中部	直口壺	残高63	粘土粗、１～３mm石英・長石多	良好	外淡黄褐色、内黄白褐色	内外ナデで、口縁内にハケ残。	小片		1712
17-32		住１覆土上面	直口壺	残高60	粘土粗、１～３mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁端部を内につまみ出す。内外ナデ。	小片		1500
17-33		住１覆土上面	直口壺	口径154、残高55	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外黄灰褐色、内淡黄褐色	内横ハケ後内外ナデ。	１／８		1577
17-34		住１覆土上面	直口壺	口径176、残高50	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。頸外に縦ハケ、頸内に工具痕と思われる断続的凹みあり。	１／３		1484
18-35		住１覆土中部	直口壺	口径146、残高26	粘土粗、１～３mm石英少	良好	暗褐色	内外ハケで口縁端部やや凹む。あるいは在地系か。	１／６	外全面煤付着	1714
18-36		住１覆土上面	直口壺	口径152、残高77	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	淡灰黄褐色	内外ナデで、内に指頭圧痕残。	１／６	口縁外面二次的に汚染され暗灰褐色	1576
18-37		住１覆土上面	直口壺	口径152、残高38	粘土粗、１mm石英・金雲母少	やや甘い、口縁部黒変	外淡黄褐色、内灰褐色	口縁端やや肥厚。内外ナデ。	１／８		1801



第16図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1・2は1／4、他は1／3）



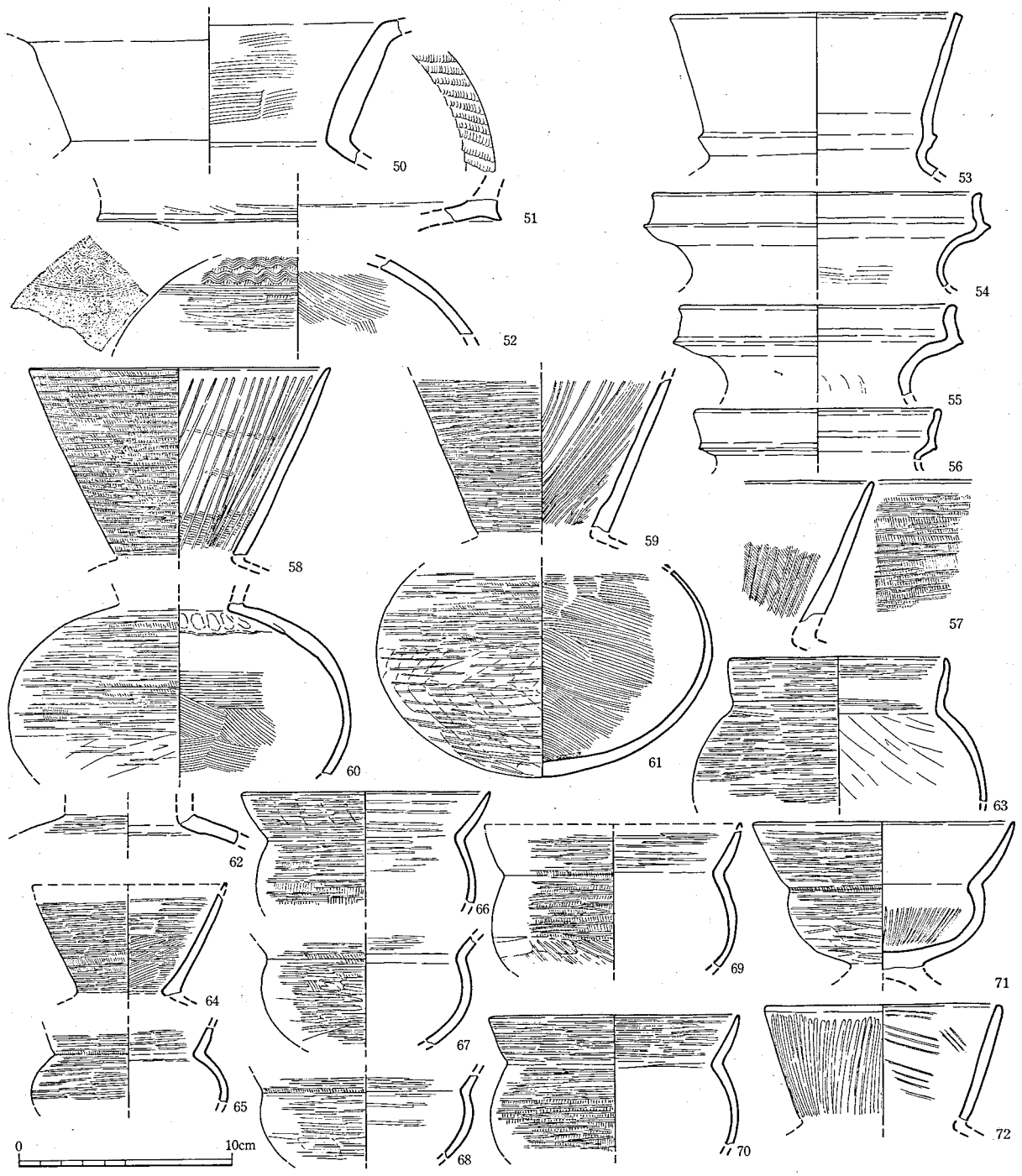
第17図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）



第18図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）

第４表　１号竪穴住居跡出土土器観察表（２）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
18-38		住１覆土上面	直口壺	口径152、残高69	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外淡褐灰色、内淡灰黄褐色	内外ナデ。	１／８		1578
18-39		住１覆土中部	直口壺	口径166、残高67	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外淡黄褐色、内褐白色	外縦ハケ後内外横ナデ。頸内指頭圧痕巡る。	１／10		1557
18-40		住１覆土下部	直口壺	口径162、残高73	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外灰褐色、内褐灰色	外縦ハケ後内外横ナデ。口縁内指頭圧痕巡る。	１／６		1579
18-41		住１覆土下部	直口壺	口径166、残高89	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	外褐黄色、内淡黄褐色	口縁外縦ハケ、口縁内横ハケ後内外ナデ。胴外ナデ、胴内ケズリ。	１／２		1644
18-42		住１覆土上面	直口壺	口径180、残高93	粘土粗、１mm長石・石英少	良好	淡橙褐色	口縁端内に肥厚。外横ミガキ、口縁内丁寧な縦ミガキ、胴内縦ハケ。	１／６	内器表の剥離進む	1475
18-43		住１覆土	直口壺	口径204、残高63	粘土粗、１～３mm石英少	やや甘い	外淡褐黄色、内淡灰褐色	内外ナデ。	１／12		1629
18-44		住１no.10	直口壺	口径184、残高59	粘土粗、１mm長石・石英少	良好、口縁外面黒斑	外淡黄褐色、内淡褐色	内外ナデ仕上げであるが、口縁端外、口縁下内ハケ残。	１／６		1462
18-45		住１覆土下部	直口壺	口径182、残高58	粘土粗、１～３mm石英少	やや甘い、器内黒変、口縁端内外黒斑	淡褐黄色	口縁端つまみ上げ。外縦ハケ、内横ハケ後内外ナデ。	１／８		1643
18-46		住１覆土上面	直口壺	口径182、残高99	粘土粗、１～３mm石英・クサリ礫多	良好、堅緻、器内黒変。	淡黄褐色～淡褐色	胴内指頭圧痕、胴外ハケ残。口縁内外ナデ。	１／４		1485
18-47		住１覆土	直口壺	口径152、残高122	粘土粗、１～３mm石英少	良好、口縁・胴大黒斑	淡黄褐色	口縁端外につまみ出し。口縁内外ナデ。胴外ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	口縁１／３、胴１／４		1627
18-48		住１覆土中部	直口壺	口径170、頸径122、胴径244、残高187	粘土粗、１～５mm石英少	良好	外淡黄褐色、内褐色	口縁外縦ハケ、内横ハケ後内外ナデ。胴外縦ハケ後横ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	１／４		1544
18-49		住１no.８	直口壺	口径170、残高114	粘土粗、１～３mm石英多	良好、口縁端外面黒斑	外淡黄褐色、内淡褐色	胴内ケズリ後に軽く右上がりナデ？。口縁内外横ナデで、外にハケ残。口縁内横ナデによる沈線が巡る。	１／４		1461
19-50		住１覆土上面	二重口縁壺	頸径130、残高66	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	褐色	器壁が極めて厚い。外横ナデ、内横ハケ。	１／４		1788
19-51		住１覆土	畿内系二重口縁壺	残高10	粘土粗、１～３mm石英少	良好	暗褐色	内外横ハケ後横ナデ。接合面にハケ工具刺突あり。	１／６		1610
19-52		住１覆土下部	畿内系二重口縁壺	残高34	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	外淡黄褐色、内暗灰褐色	肩部に２単位の櫛描波状文と、櫛描直線文を隙間なく施文。外ハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	１／８		1649
19-53		住１覆土上面	山陰系中形壺	口径128、残高74	粘土粗、１mm石英少	良好	外黄白褐色、内淡黄褐色	口縁端をやや内につまみ出す。内外ナデ。	１／２		1483
19-54		住１覆土下部	山陰系中形壺	口径150、残高42	粘土粗、１～３mm石英多	良好	外淡黄褐色、内黄白褐色	口縁わずかに外反。頸部内ハケ後内外ナデ。	１／８		1750
19-55		住１no.6	山陰系中形壺	口径128、残高41	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外淡黄褐色、内白褐色	口縁わずかに外反。内外ナデ。	１／６		1453
19-56		住１覆土下部	山陰系中形壺	口径112、残高24	粘土粗、１mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	口縁端丸い。内外ナデ。	１／８		1748
19-57		住１覆土中部	畿内系直口壺	残高63	粘土細、１mm石英少	良好	淡橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ後暗文ミガキ。	小片		1717
19-58	25	住１no.6	畿内系直口壺	口径138、残高86	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内ハケ後暗文風の斜めミガキ。	３／４		1451
19-59		住１覆土	畿内系直口壺	頸径60、残高70	粘土細、１mm石英・長石少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内暗文風の斜めミガキ。	小片		1607
19-60		住１覆土下部	畿内系直口壺胴部	頸径58、胴径158、残高77	粘土細、１mm石英・長石少	良好	外淡橙褐色、内淡黄灰褐色	外下部ケズリ、外上部ハケ後外横ミガキ。内下部ハケ、上部ナデ。頸部内面に指頭圧痕、接合痕残。	１／３	二次的に火を受け、いくつかの破片は灰色・褐色に変色	1587
19-61		住１no.９	畿内系直口壺胴部	胴径155、残高96	粘土細、１mm石英極少	良好、胴外10cm大黒斑	橙褐色	外下部ケズリ、外上部ハケ後外横ミガキ。内丁寧な放射状ハケ。	２／３		1588
19-62		住１no.５	畿内系二重口縁壺	頸径60、残高14	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡褐色	外ミガキ、内ナデ。	１／６		1708
19-63		住１覆土	小形丸底壺	口径100、頸径98、胴径136、残高66	粘土細、１～３mm石英少	良好	赤褐色	外・口縁内横ミガキ、胴内ケズリ。胴外ミガキ前ケズリの可能性。	１／４		1624
19-64		住１覆土	小形丸底壺	頸径48、残高47	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内斜めハケ後横ミガキ。	１／４		1608
19-65		住１覆土上面	小形丸底壺	頸径70、胴径90、残高34	粘土細、１mm石英・クサリ礫少	やや甘い	橙褐色	外・口縁内横ミガキ、胴内ナデで、頸部内面に接合痕残。	１／３		1481
19-66		住１覆土上面	小形丸底壺	口径114、頸径90、胴径102、残高52	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	口縁外指頭圧痕、胴外縦ハケ後、内外ミガキ。	１／８		1482
19-67		住１覆土上面	小形丸底壺	頸径90、残高50	粘土粗、１mm石英極少	良好、堅緻	赤褐色	胴下部外ケズリ、胴上部外縦ハケ後外ミガキ。口縁内ミガキ、胴内ナデ？。	１／６		1572
19-68		住１覆土下部	小形丸底壺	頸径96、残高38	粘土細、１mm石英少	良好	橙褐色	外下部ケズリ、頸部外ハケ後外ミガキ。胴内ミガキ。	１／８		1753
19-69		住１覆土中部	小形丸底壺	頸径100、残高63	粘土細、１～３mm石英少	良好	橙褐色	外下部ケズリ、外上部ハケ後外ミガキ。口縁内ミガキ、胴内ナデ。	１／６		1555
19-70		住１カマド積土内	脚付小形丸底壺	口径112、頸径100、胴径114、残高60	粘土細、１mm長石少	やや甘い	橙褐色	外下部ハケ後外～口縁内ミガキ。胴内摩滅。	１／６		1642
19-71	25	住１覆土下部	脚付小形丸底壺	口径120、頸径92、胴径94、残高67	粘土粗、１～３mm石英少	やや甘い	橙褐色	下部は脚との接合部より剥離。胴外下部ケズリ、頸外ハケ後外ミガキ。口縁内摩滅、胴内ミガキ。	１／２		1566
19-72		住１覆土	小形丸底壺	口径1106、残高53	粘土粗、１～３mm石英多	良好	橙褐色	外縦ミガキ、内粗いハケ。	１／８		1502
20-73		住１覆土上面	在地系甕	口径212、残高48	粘土粗、１～３mm石英少	やや甘い	外淡橙褐色、内暗褐灰色	内外ナデ。	１／８		1493
20-74		住１覆土下部	在地系甕	口径240、残高33	粘土粗、１～３mm石英・クサリ礫少	やや甘い	白褐色	山陰系器台口縁の可能性もあり。外横ナデ、内摩滅。	１／６		1574



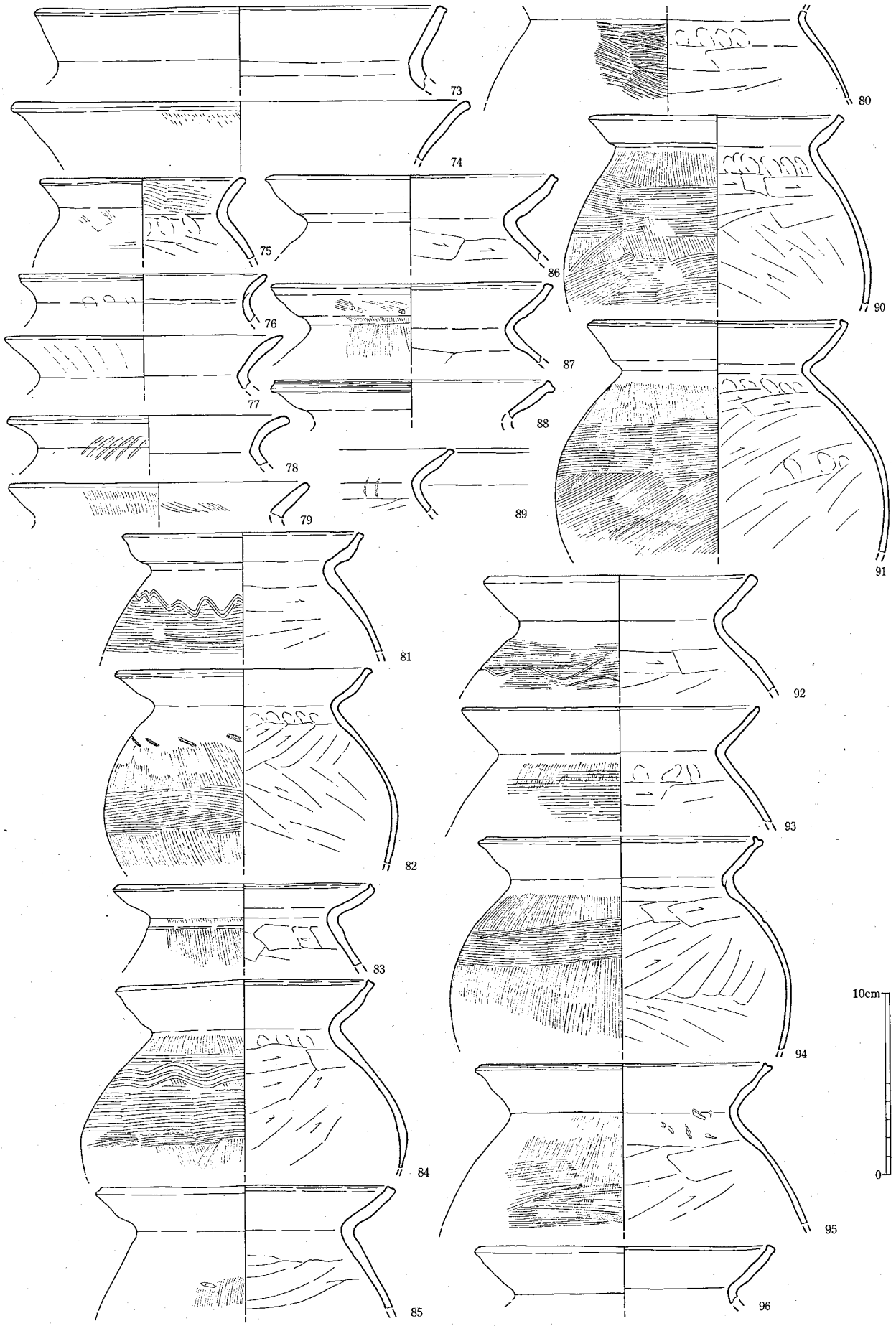
第19図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）

160～163は高杯杯底部片、164～169は高杯脚柱部片。164は脚内頂部に軸痕を残し、166・168・169は脚柱上部に粘土を充填して、杯部と接合したと推測される。170～175は高杯脚部片で、175は在地系高杯と推測され、0・3時の2方向に乾燥前の穿孔が残る。171～173は乾燥が進んだ段階で穿孔したためか、穿孔部周辺の内の器表が剥離する。176～183は高杯脚裾部片。176は乾燥前に、177は半乾燥時に穿孔したものか。178・181は外面縦ミガキを施し、山陰系と推測される。179は裾の広い範囲にケズリを施し特異である。

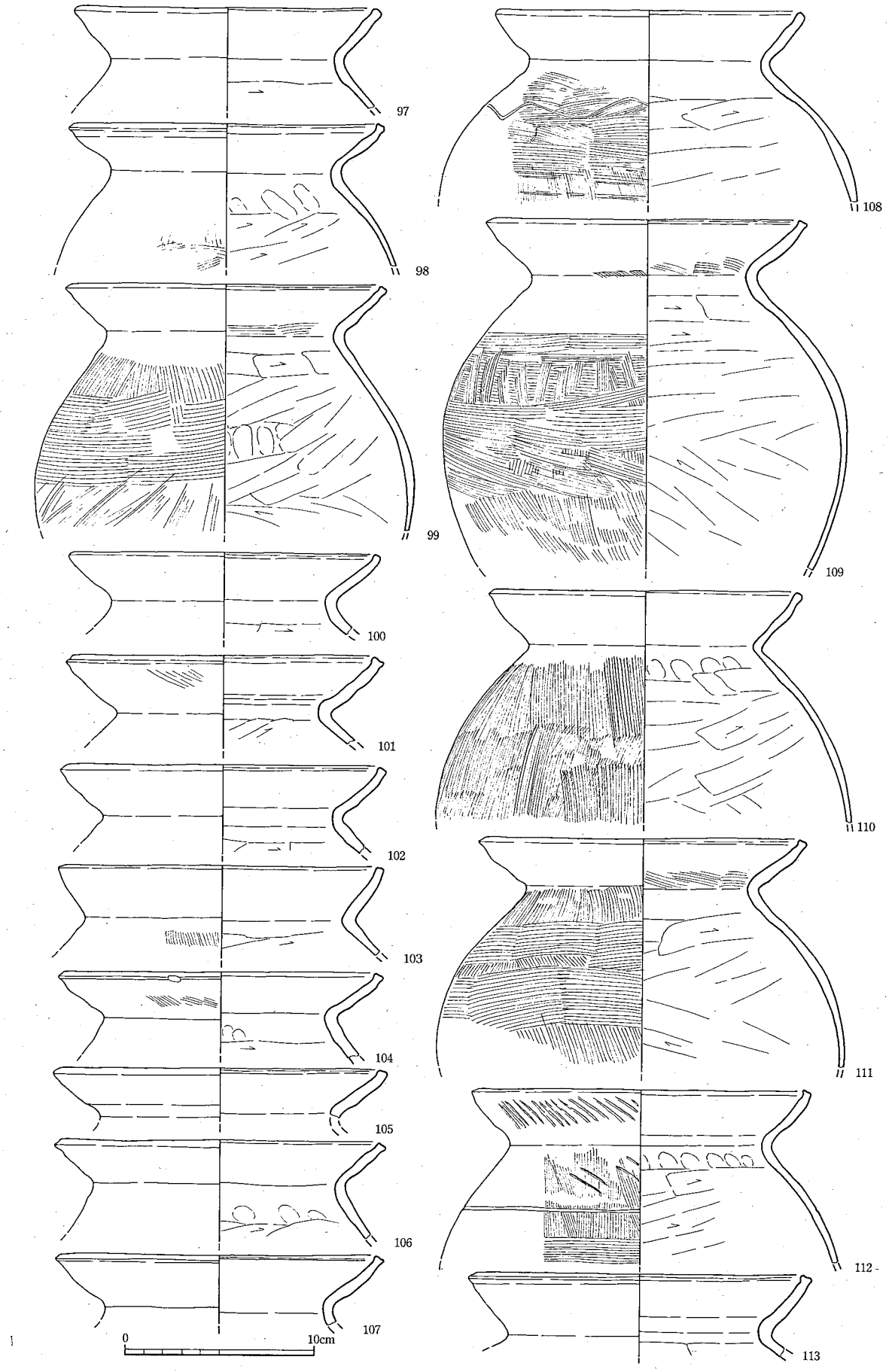
184～207は外反口縁鉢で、摩滅でミガキの観察できない207以外はミガキ仕上げの精製品。187は外面に縦ミガキを施し、器壁も薄く、他と異なる。201は口縁内面にナデに先立ち化粧土を

第５表　１号竪穴住居跡出土土器観察表（3）

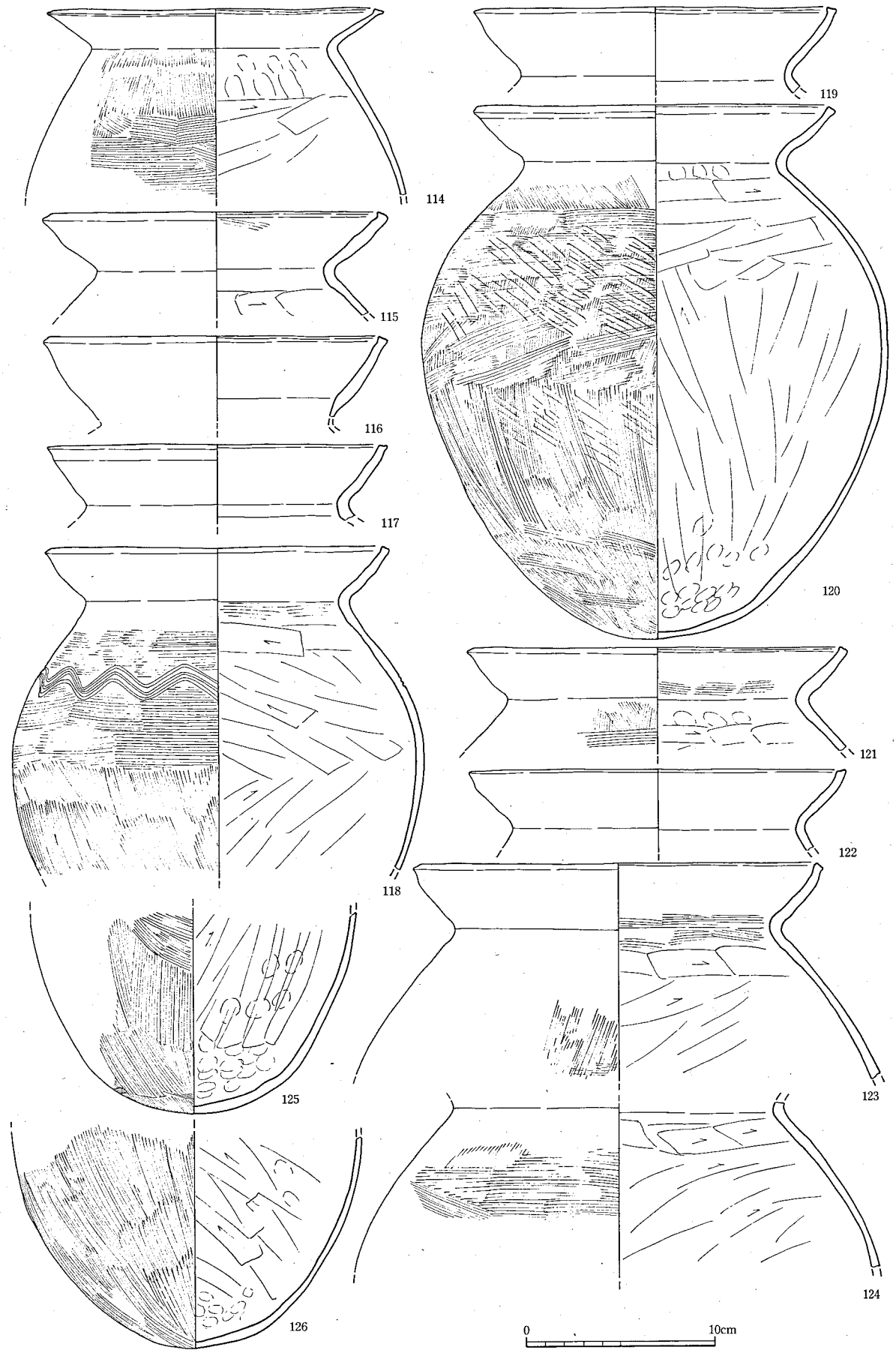
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
20-75		住１覆土上面	五様式系甕	口径108、残高44	粘土細、１～３mm石英・長石少	良好	褐色	胴外ハケ、口縁内ハケ後胴外～口縁内ナデ。胴内指頭圧痕後ケズリ。	１／４		1794
20-76		住１覆土下部	五様式系甕	口径130、残高26	粘土粗、１mm石英極・金雲母極少	良好	黄褐色	緩やかに口縁外反し、口縁端外凹みが巡る。頸内接合痕。内外ナデ。	１／６	外面煤付着	1718
20-77		住１覆土	五様式系甕	口径148、残高28	粘土細、１～３mm石英・長石少	やや甘い	外淡黄褐色、内淡橙褐色	口縁内外ナデ。口縁外に縦ハケ工具紺らしき条痕残。	１／８		1630
20-78		住１覆土	五様式系甕	口径146、残高27	粘土粗、１～３mm石英多	良好	褐色	頸外粗いタタキ後内外ナデ。	１／６	他の在地土器とは色調異なる。	1786
20-79		住１覆土下部	五様式系甕？	口径156、残高19	粘土粗、１mm長石・石英多	良好	外暗褐色、内褐黄色	外縦ハケ、内斜めハケ後内外ナデ。	１／10	外面煤付着	1724
20-80		住１覆土上面	庄内系甕	頸径146、残高47	粘土粗、１mm長石・石英少	良好	淡黄褐色	外細かいタタキ、内指頭圧痕後ケズリ。	１／６		1771
20-81		住１覆土上面	布留系甕	口径122、残高63	粘土粗、１～３mm石英・クサリ礫多	やや甘い	外灰黄褐色、内淡黄褐色	肩部櫛描波状文。胴外ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	１／４		1487
20-82	25	住１覆土下部	布留系甕	口径130、頸径100、胴径162、残高104	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外淡黄褐色、内黄褐色	肩部ハケメ工具小口刺突文。胴外は肩縦ハケ、胴部横ハケ、胴下部縦ハケの順。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁全周	外胴最大径より下に煤付着	1590
20-83		住１覆土上面	布留系甕	口径134、残高42	粘土粗、１～３mm石英・金雲母少	良好	外黄褐色、内褐黄色	口縁端つまみ上げ。頸部ナデによる段あり。胴外縦ハケ、口縁内外ナデ。	１／６		1795
20-84	26	住１覆土中部	布留系甕	口径132、頸径102、胴径173、残高101	粘土粗、１～３mm石英・クサリ礫少	やや甘い	淡黄褐色、口縁内外灰色帯びる	口縁端つまみ上げ。胴外ハケは頸下縦ハケ、肩横ハケ、胴下部細かい横・縦ハケ。	３／４	胴外面煤付着	1543
20-85		住１覆土上面	布留系甕	口径152、残高66	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐黄色	肩部棒状工具刺突文残。胴外縦ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	１／４		1552
20-86		住１覆土中部	布留系甕	口径150、残高45	粘土粗、１～３mm石英少	良好	褐灰色	外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	１／６	破損後火を受けたためか一部煤付着	1551
20-87		住１覆土上面	布留系甕	口径142、残高42	粘土粗、１～３mm石英少	良好	淡褐灰色	胴外縦ハケ、口縁外斜めハケ後口縁内外ナデ。口縁外棒状工具刺突。	１／８		1799
20-88		住１覆土下部	布留系甕	口径144、残高20	粘土粗、１～３mm石英・長石少	やや甘い	外黄白褐色、内淡褐色	口縁を上下に拡張し、強いナデによる条痕残。口縁内外ナデ。	１／８		1746
20-89		住１覆土上面	布留系甕	残高34	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外黄褐色、内褐灰色	頸部工具によるナデ上げの痕跡残。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	小片		1800
20-90		住１覆土上面	布留系甕	口径132、頸径110、胴径164、残高101	粘土粗、１～３mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁内外ナデ、胴外ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。頸外にハケ工具あたりの段あり。	１／２	胴内外使用のためか、褐変、黒変	1465
20-91	25	住１覆土上面	布留系甕	口径134、頸径100、胴径180、残高124	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐黄色	口縁端につまみ出し。胴外は頸下縦ハケ、肩横ハケ、下部斜ハケの順。口縁内外ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	全周	胴最大径より下に煤付着。	1523
20-92		住１覆土上面	布留系甕	口径140、残高63	粘土粗、１～３mm石英多	良好	外淡黄褐色、内黄褐色	胴外横ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。頸外縦ハケ残。口縁端丸い。	口縁１／６、頸部１／４		1467
20-93		住１覆土上面	布留系甕	口径144、残高62	粘土粗、１mm石英・金雲母・角閃石少	二次的に火を受けたためか甘い	黄褐色	口縁端部摩滅のため形態不安。口縁内外ナデ、胴外縦ハケ後横ハケ。	口縁１／８、頸部１／６	使用のため内外褐変	1492
20-94	25	住１覆土上面	布留系甕	口径172、頸径120、胴径202、残高114	粘土粗、１～３mm石英多	やや甘い	黄白褐色	肩直線沈線文。口縁端のつまみ出しが顕著、頸部内面に接合痕を残す。胴外肩頸下縦ハケ、肩横ハケ、下部縦ハケの順。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	胴２／３、口縁１／２		1522
20-95		住１覆土上面	布留系甕	口径150、残高86	粘土粗、１～３mm石英少	やや甘い	外淡黄褐色、内黄褐色	頸内に工具痕と思われる凹みあり。胴外縦ハケ後横ハケ、胴内外ナデ。	１／６		1473
20-96		住１覆土中部	布留系甕	口径152、残高31	粘土粗、１～３mm石英多	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	１／８		1716
21-97		住１覆土中部	布留系甕	口径152、残高52	粘土粗、１～３mm石英・金雲母多	やや甘い	白黄褐色	外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	１／８		1711
21-98		住１覆土下部	布留系甕	口径156、残高79	粘土粗、１～３mm石英少	良好	黄褐色	胴外ハケ（摩滅）、口縁内外ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	１／６	外面全体に煤付着	1575
21-99		住１覆土上面	布留系甕	口径162、頸径124、胴径200、残高130	粘土細、１～３mm石英多	良好	外黄褐色、内淡黄白褐色	胴外頸下縦ハケ、肩横ハケ、下部板ナデ風の縦ハケの順。口縁内ハケ後口縁内外ナデ。胴内指頭圧痕後ケズリ。	口縁１／２、胴全周		1477
21-100		住１覆土	布留系甕	口径156、残高42	粘土粗、１～３mm石英多	良好	白黄褐色	口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	１／８		1782
21-101		住１覆土	布留系甕	口径156、残高45	粘土粗、１～３mm石英少	良好	淡黄褐色	器壁厚く特徴的。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。口縁外にハケ？残。	１／８		1784
21-102		住１覆土	布留系甕	口径162、残高45	粘土粗、１mm石英・長石少	良好	外黄褐色、内淡褐黄色	口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	１／８		1806
21-103		住１覆土上面	布留系甕	口径162、残高45	粘土粗、１～３mm石英少	良好	淡黄褐色	胴外縦ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	１／８	口縁外面煤付着	1490
21-104		住１覆土中部	布留系甕	口径162、残高43	粘土粗、１～３mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁端工具のあたりらしき凹み残。胴肩縦ハケ、胴内ケズリ。	１／８	二次的に火を受け一部赤変	1715
21-105		住１Ｐ２	布留系甕	口径166、残高25	粘土粗、１～３mm石英少	良好	淡褐色	内外ナデ。	１／４		1640
21-106		住１覆土上面	布留系甕	口径166、残高50	粘土粗、１～３mm石英・金雲母少	良好	黄白褐色	胴外摩滅。口縁内外ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	口縁１／８、胴１／６		1488
21-107		住１覆土中部	布留系甕	口径164、残高35	粘土粗、１～３mm石英・長石多	良好	暗灰褐色	内外ナデ。	１／８	淡黄褐色化粧土を内外に施す？	1713
21-108		住１覆土上面	布留系甕	口径156、残高98	粘土粗、１～３mm石英多	やや甘い	外淡黄褐色、内黄褐色	胴外縦ハケ後横ハケの順。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	１／６		1466
21-109	26	住１no.10	布留系甕	口径158、頸径156、胴径212、残高182	粘土粗、１～３mm石英・クサリ礫・土器片少	良好	外褐白色、内淡黄褐色	胴外肩横ハケ、肩下縦ハケ、胴下横斜めハケ、胴下縦ハケ。口縁内横ハケ後胴内ケズリ。頸外ハケ残。	口縁全周、胴１／２		1589
21-110		住１覆土上面	布留系甕	口径158、頸径122、残高120	粘土粗、１～３mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁端部やや丸み帯びる。胴外縦ハケ。胴内指頭圧痕後ケズリ。	１／２		1464



第20図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（1／3）



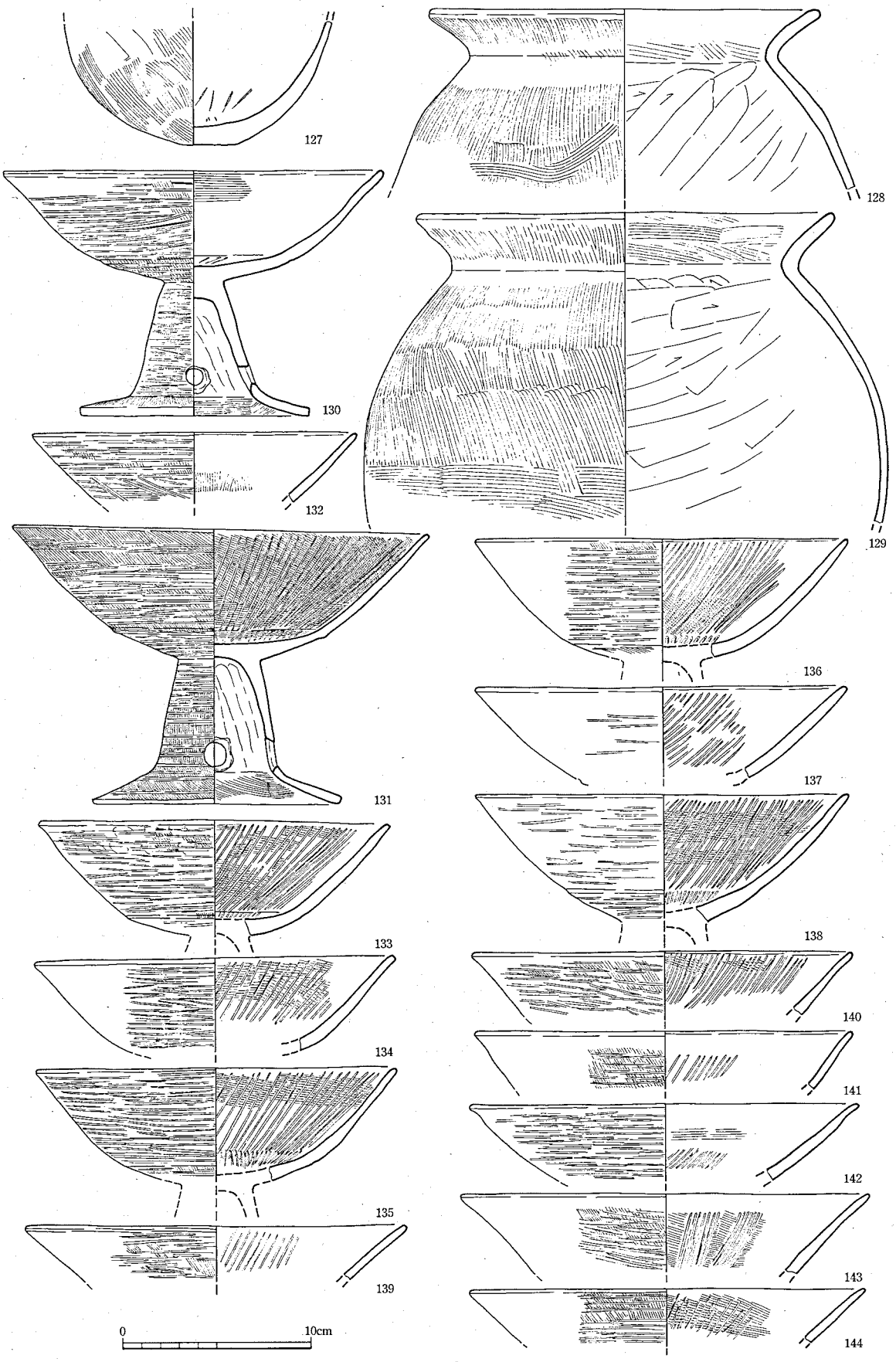
第21図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（6）（1／3）



第22図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（7）（1／3）

第６表　１号竪穴住居跡出土土器観察表（4）

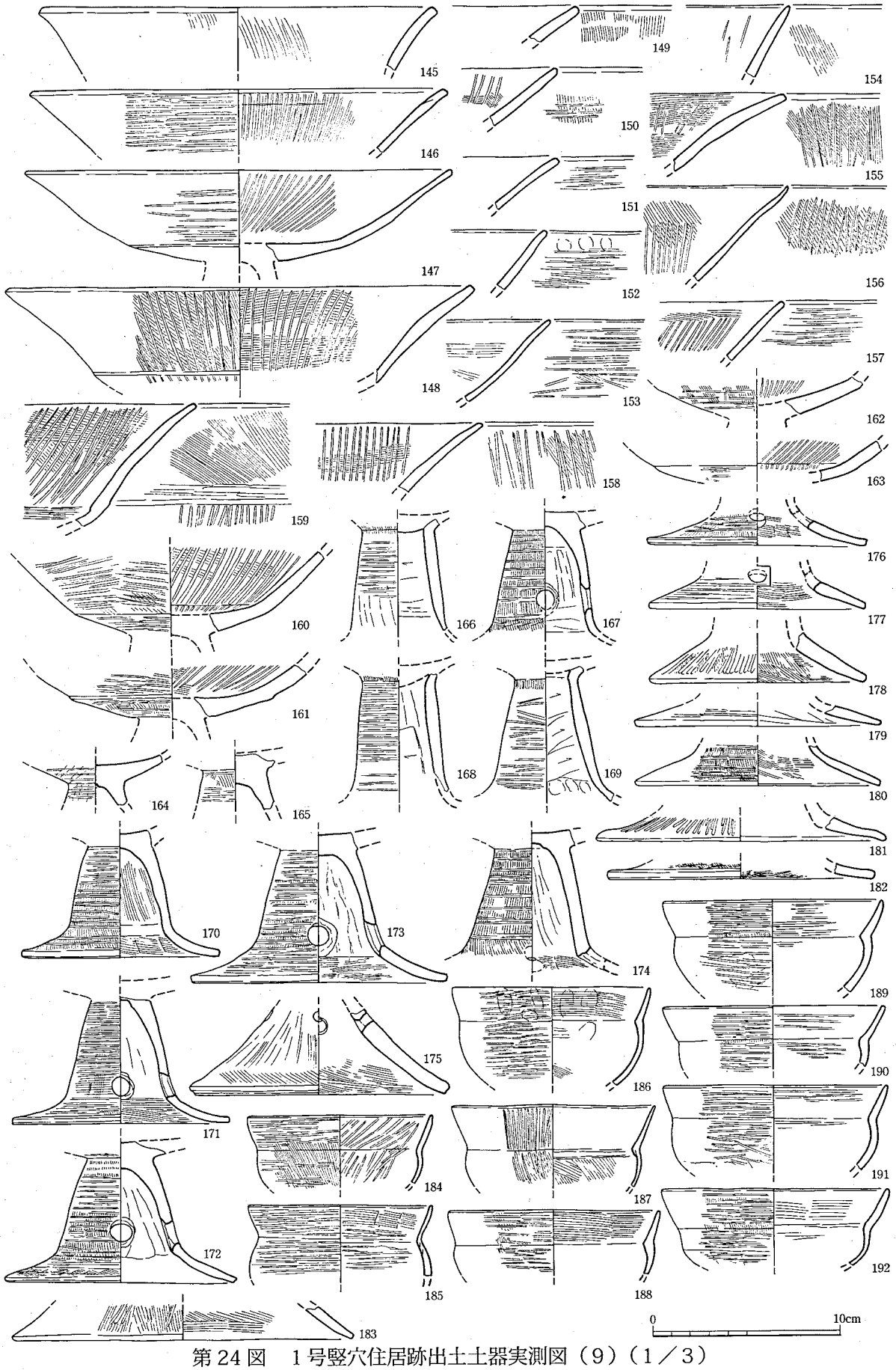
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
21-111		住１覆土中部	布留系甕	口径164、頸径122、胴径214、残高118	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外黄褐色、内淡黄褐色	内はケズリ浅く切合い、輪郭不明瞭。胴外縦ハケ後横ハケ。口縁内斜めハケ後口縁内外横ナデ。	１／２	胴外最大径より下に煤付着。	1545
21-112		住１覆土上面	布留系甕	口径170、残高90	粘土粗、１～３mm石英多	良好、堅緻	暗褐色	口縁外、胴肩外タタキ痕残。胴肩縦ハケ後横ハケ。胴内指頭圧痕後ケズリ。	１／３		1474
21-113		住１覆土上面	布留系甕	口径170、残高43	粘土粗、１～３mm石英多	良好	淡黄褐色～黄灰褐色	内外ナデ、胴内ケズリ。	１／10		1791
22-114		住１覆土上面	布留系甕	口径166、残高108	粘土粗、１～３mm石英・玄武岩少	良好、堅緻	淡黄褐色	口縁端わずかにつまみ上げ。胴外縦ハケ後横ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	口縁１／８、頸部１／６	径、傾き不安	1468
22-115		住１覆土中部	布留系甕	口径170、残高53	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	口縁内斜めハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	１／４	内外二次的に火を受け褐変、黒変	1553
22-116		住１覆土上面	布留系甕	口径170、残高42	粘土細、１～３mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	内外ナデ。頸部内にケズリを施したかのような面が残る。	１／８		1501
22-117		住１覆土上面	布留系甕	口径166、残高38	粘土粗、１～３mm石英・金雲母多	良好	灰黄褐色	内外ナデ。	１／６		1476
22-118		住１覆土中部	布留系甕	口径172、頸径138、胴径216、残高170	粘土粗、１～３mm石英多	やや甘い	外淡黄褐色、内褐色	肩外櫛描波状文。胴上部横ハケ、胴下部縦ハケ、口縁内外ナデ。頸部内ハケ？、胴部内ケズリ。	１／４	破損後火を受けたためか内外煤付着	1542
22-119		住１覆土下部	布留系甕	口径182、残高45	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	淡灰黄褐色	内外ナデ。	１／４		1636
22-120	26	住1no.７	布留系甕	口径184、頸径138、胴径243、器高280、頸高250	粘土粗、１～３mm石英・長石多	やや甘い、内外黒変個所多	灰黄褐色～淡黄褐色	胴外にタタキ残。ハケは頸下左上りハケ、肩横ハケ、胴下部縦ハケ、胴中部右上がりハケの順。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁全周、胴下部１／２、完形復元		1634
22-121		住1no.７	布留系甕	口径194、残高54	粘土粗、１～５mm石英・クサリ礫・土器片少	良好	黄白褐色	胴外ハケ（摩滅）。口縁内ハケ後口縁内外ナデ。胴内指頭圧痕後ケズリ。	１／６		1470
22-122		住１覆土上面	布留系甕	口径188、残高42	粘土粗、１～３mm石英多	良好	外灰黄褐色、内褐黄色	口縁端わずかに内傾。	１／８		1491
22-123		住１覆土上面	布留系甕	口径208、残高113	粘土細、１～３mm石英多	良好	外灰黄褐色、内黄褐色	口縁端外わずかであるがつまみ出し。	口縁１／６、胴１／８		1469
22-124		住1no.７	布留系甕	頸径174、残高86	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	褐色		１／４	色調他と異なる。外面煤付着。	1456
22-125		住１覆土上面	布留系甕	残高106	粘土粗、１～５mm石英多	良好	褐灰色	内ケズリ痕良好に遺存。指頭圧痕の部分爪痕？残る。外ハケ、内ケズリ。	全周		1805
22-126		住１覆土上面	布留系甕	残高109	粘土粗、１～３mm石英多	良好	淡黄褐色	外ハケ、内ケズリ。	全周	外面煤付着。	1524
23-127		住1no.５	甕底部	残高65	粘土粗、１～３mm石英・長石多	やや甘い、10cm大黒斑	褐黄色	外ハケ、一部板ナデ風で条痕残らない部分あり。内剥離、一部工具痕。	全周		1448
23-128		住1no.6	甕	口径202、残高94	粘土細、１～３mm石英多	良好	外褐黄色、内明褐色	口縁外縦ハケ丁寧。口縁内ハケ後ナデ。胴外縦ハケ、一部波状文にも見えるハケ。胴内ケズリ。	１／２	胴外最大径より下に煤付着。	1454
23-129		住１覆土上面	甕	口径216、頸径184、胴径276、残高162	粘土細、１～３mm石英多	良好	外黄褐色、内褐黄色	器壁厚く、口縁緩やかに外反し、端部丸い。口縁外縦ハケ、口縁内ハケ後内外ナデ。胴外縦ハケ後横ハケ、胴内ケズリ。	１／４	外に煤付着、二次的に火を受け赤片。	1478
23-130	26	住１覆土中部	高杯	口径196、裾径121、器高128、脚高70	粘土細、１～３mm石英少	良好	橙褐色	脚２個所半乾燥時穿孔。杯外縦ハケ後横ミガキ。脚外縦ハケ後横ミガキ。杯内摩滅するが、口縁内に横ハケ、杯底内に工具痕残。脚内ナデ、裾内ハケ。	口縁１／６、脚全周。	脚裾外面ミガキ少ない。	1547
23-131	26	住1no.２	高杯	口径216、裾径130、器高147、脚高76	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	脚２個所半乾燥時穿孔。口縁外斜めハケ、杯底部外ケズリ？後杯外横ミガキ。杯内斜めハケ後暗文ミガキ。脚外縦・斜めハケ後横ミガキ、脚内ナデ、裾内ハケ。	脚裾１／２、杯全周。完形に復元		1471
23-132		住１覆土上面	高杯口縁部片	口径168、残高46	粘土細、１～３mm石英・長石極少	良好	淡黄橙色	口縁外ハケ後横ミガキ、内縦ハケわずかに残。	１／８		1510
23-133	26	住１覆土下部・P３	高杯口縁部片	口径170、残高60	粘土粗、１～３mm石英少	良好、口縁外少黒斑	橙褐色	外斜めハケ・指頭圧痕後横ミガキ。内斜めハケ後暗文ミガキ。	３／４	破片により二次的に火を受け褐変。	1599
23-134		住１覆土中部	高杯口縁部片	口径186、残高48	粘土粗、１mm石英少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内斜めハケ後暗文ミガキ。	１／８		1601
23-135	26	住1no.6・７	高杯口縁部片	口径186、残高58	粘土細、１～３mm石英・長石極少	良好	橙褐色	杯底外ハケ後外横ミガキ。内斜めハケ後暗文ミガキ。	１／２		1449
23-136		住１覆土下部	高杯口縁部片	口径194、残高62	粘土細、１～３mm石英少	良好	淡橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ後暗文ミガキ。	１／８		1593
23-137		住１覆土下部	高杯口縁部片	口径192、残高48	粘土細、１～３mm石英・長石少	やや甘い	外淡橙褐色、内淡褐黄色	内外摩滅、外横ミガキ、内斜め暗文ミガキ残。	１／６		1592
23-138		住1覆土	高杯口縁部片	口径194、残高67	粘土細、1mm石英・長石少	やや甘い	外橙褐色、内黄橙褐色	外横ミガキ、内横ハケ後暗文縦ミガキ。	１／６		1622
23-139		住1覆土	高杯口縁部片	口径176、残高28	粘土細、１～３mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内暗文風ミガキ。	１／12		1710
23-140		住１覆土下部	高杯口縁部片	口径198、残高33	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ後暗文ミガキ。	１／４		1591
23-141		住１覆土下部	高杯口縁部片	口径196、残高30	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内暗文ミガキ。	１／８		1734
23-142		住１覆土下部	高杯口縁部片	口径202、残高39	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内摩滅するが横ハケ、暗文ミガキ残。	１／４		1595
23-143		住1Ｐ11	高杯口縁部片	口径214、残高42	粘土細、1mm石英・金雲母少	良好	褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ後暗文ミガキ。	１／12	他と色異なる。煤のため内黒変。	1758
23-144		住Ｉ覆土下部	高杯口縁部片	口径206、残高28	粘土細、1mm石英・長石少	良好	褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ後暗文ミガキ。	１／10	他と色異なる。煤のため内黒変。	1731



第23図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（8）（1／3）

第７表　１号竪穴住居跡出土土器観察表（５）

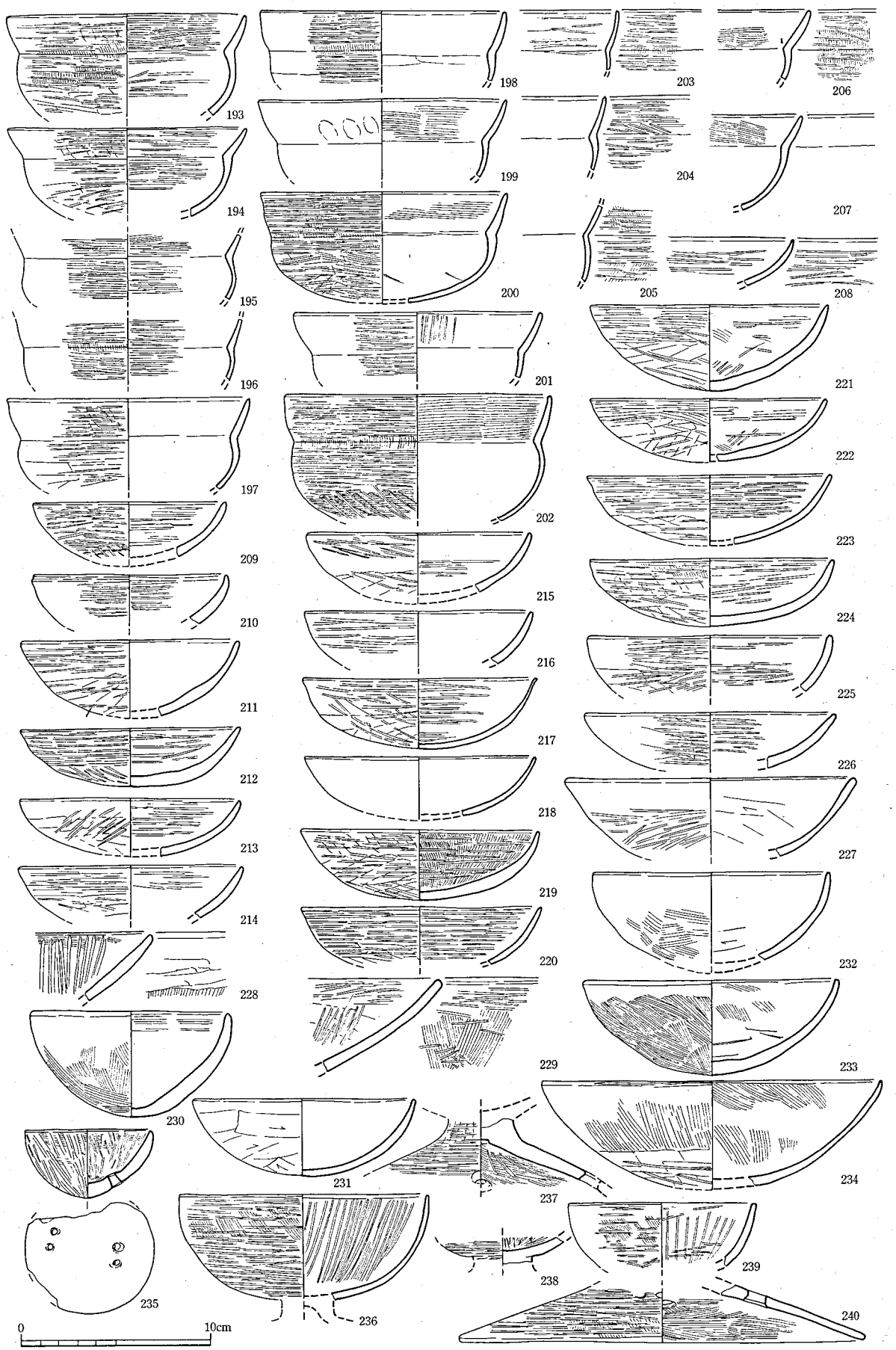
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
24-145		住１覆土下部	高杯口縁部片	口径202、残高34	粘土粗	やや甘い	淡黄白褐色	外縦ハケ、内暗文風の縦ミガキ。摩滅進む。	１／10	山陰系鼓形器台の可能性もあり。	1722
24-146		住１覆土	高杯口縁部片	口径214、残高33	粘土細、１mm石英・長石少	良好	外灰褐色、内褐黄色	外横ミガキ、内斜め・縦ミガキ。口縁部内面に接合痕残。	１／12		1632
24-147		住１覆土下部	高杯口縁部片	口径222、残高48	粘土粗、１mm石英少	良好	灰褐色～淡褐色	外横ミガキ、内暗文風斜めミガキ（摩滅）。	１／３		1597
24-148		住１覆土中部	高杯口縁部片	口径242、残高51	粘土粗、１mm長石・石英少	良好	褐色	口縁端角張る。外斜めハケ、内横ハケ後内外暗文風縦ミガキ。	１／８		1558
24-149		住１覆土下部	高杯口縁部片	残高20	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	内摩滅、外縦ハケ。	小片		1737
24-150		住１覆土下部	高杯口縁部片	残高29	粘土細、１～３mm石英・長石少	良好	淡橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内斜めハケ後暗文風斜めミガキ。	小片		1757
24-151		住１覆土	高杯口縁部片	残高28	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外横ミガキ、内摩滅。	小片		1736
24-152		住１覆土下部	高杯口縁部片	残高30	粘土粗、１mm長石少	やや甘い	淡黄褐色	外口縁端下指頭圧痕後、横ミガキ。内摩滅。	小片		1723
24-153		住１覆土下部	高杯口縁部片	残高43	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内摩滅するがかすかに横ハケ残。	小片		1594
24-154		住１覆土下部	高杯口縁部片	残高37	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	外淡黄橙褐色、内橙褐色	外斜めハケ、内暗文風のミガキ（摩滅）。	小片	中形直口壺口縁の可能性もあり。	1735
24-155		住１覆土中部	高杯口縁部片	残高50	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外斜めハケ後暗文風縦ミガキ。内横・斜めハケ後暗文風縦ミガキ。	小片		1558
24-156		住１覆土上面	高杯口縁部片	残高31	粘土細、１mm石英・長石少	やや甘い	淡灰褐色	外斜めハケ後暗文風縦ミガキ。内斜めハケ後暗文風縦ミガキ。	小片	外～口縁内面火を受け黒変	1498
24-157		住１覆土上面	高杯口縁部片	残高36	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄灰褐色、淡橙褐色	外横ミガキ、内横ハケ後暗文風斜めミガキ（摩滅）。	小片		1802
24-158		住１覆土下部	高杯口縁部片	残高42	粘土細、１mm石英・長石少	良好	橙黄褐色	外斜めハケ後暗文風縦ミガキ、内横ハケ後暗文風縦ミガキ。	小片		1609
24-159		住１覆土上面	高杯口縁部片	残高66	粘土粗、１mm石英少	良好、口縁外面黒斑	淡橙褐色	口縁外斜めハケ、屈曲部外横ミガキ、杯底部底縦ミガキ。内横・斜めハケ後暗文風縦ミガキ。	小片		1514
24-160		住１覆土下部	高杯杯底部片	残高43	粘土粗、１～３mm石英・クサリ礫少	やや甘い	淡黄橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ。内斜めハケ後暗文風縦ミガキ。	１／６		1639
24-161		住１覆土上面	高杯杯底部片	残高26	粘土粗、１mm長石・石英少	良好	淡橙褐色	杯底外ハケ後外横ミガキ。内横ハケ後暗文風ミガキ。	１／８		1615
24-162		住１覆土下部	高杯杯底部片	残高19	粘土粗、１mm石英・金雲母少	やや甘い	淡橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内縦ミガキ。	１／８		1740
24-163		住１no. 5	高杯杯底部片	残高22	粘土粗、１～３mm長石少	良好	淡褐色	外摩滅するがわずかに横ミガキ残。内暗文風ミガキ。	１／８		1706
24-164		住１覆土下部	高杯脚柱部片	残高27	粘土粗、１mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	脚内頂部に軸痕残。外板ナデ後横ミガキ。脚内ナデ、杯内摩滅。	全周		1742
24-165		住１覆土	高杯脚柱部片	残高30	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、脚内ナデ。	全周		1616
24-166		住１覆土上面	高杯脚柱部片	残高57	粘土粗、１～３mm石英多	良好	外黄灰褐色、内淡灰褐色	脚柱上部に粘土を充填し、杯部と接合か。外板ナデ後横ミガキ、内ケズリ。	１／２		1518
24-167		住１覆土中部	高杯脚柱部片	残高68	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内上部ナデ、下部板ナデ。半乾燥時穿孔残。	脚上部全周		1563
24-168		住１覆土上面	高杯脚柱部片	残高62	粘土粗、１～３mm石英少	良好	黄灰褐色	脚柱上部に粘土を充填し接合。外横ミガキで、脚上部にハケ残。内ケズリ。	１／４		1765
24-169		住１覆土上面	高杯脚柱部片	残高71	粘土粗、１～３mm石英少	良好	黄褐色	脚柱上部に粘土を充填し接合。外横ミガキで、脚上部にハケ残。内ケズリ。	１／４		1767
24-170	26	住１no. 8	高杯脚部片	裾径142、残高66	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	褐黄色	外縦ハケ後横ミガキ、脚柱内縦ハケ、脚裾内横ハケ。	１／４		1460
24-171		住１覆土上面	高杯脚部片	裾径112、残高65	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	黄橙褐色	半乾燥時穿孔１個所残。外縦ハケ後横ミガキ、脚内縦ナデ、脚裾内横ハケ。	１／２		1516
24-172	26	住１覆土	高杯脚部片	裾径118、残高74	粘土粗、１mm石英・長石少	やや甘い	淡黄褐色	半乾燥時穿孔２個所残。外ハケ後横ミガキ、脚柱内板ナデ、脚裾内摩滅。	脚裾３／４、脚柱全周		1612
24-173		住１覆土	高杯脚部片	裾径130、残高78	粘土細、１mm長石極少	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。０・７時方向に半乾燥時穿孔残。	脚上部全周、脚裾１／３		1614
24-174		住１覆土	高杯脚部片	残高73	粘土細、１mm長石少	良好	黄橙褐色～淡赤褐色	半乾燥時穿孔１個所残。外縦ハケ後横ミガキ、脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	脚柱全周		1562
24-175		住１覆土	高杯脚部片	裾径122、残高45	粘土粗、１mm石英・長石・角閃石少	やや甘い	明褐色	外縦・斜めハケ（摩滅）。内斜めハケ。０・３時方向に乾燥前穿孔。	１／４	色調・胎土他と異なる。	1613
24-176		住１覆土	高杯脚裾部片	裾径112、残高14	粘土細、１mm石英・長石少	やや甘い	外黄褐色、内明褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内横ハケ後ナデ。乾燥前に穿孔？。	１／４		1610
24-177		住１覆土下部	高杯脚裾部片	裾径112、残高18	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	半乾燥時穿孔１個所残。外横ミガキ、脚裾内横ハケ。	１／８		1727
24-178		住１覆土	高杯脚裾部片	裾径112、残高36	粘土粗、１mm石英少	良好	褐色	外縦ハケ後縦ミガキ、内斜めハケ。	１／４		1615
24-179		住１覆土	高杯脚裾部片	裾径128、残高11	粘土粗、１mm石英少	良好	淡黄橙褐色	外横ミガキ、内ケズリ。	１／８		1796
24-180		住１覆土上面	高杯脚裾部片	裾径126、残高22	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外ハケ後横ミガキ、内ハケ。	１／８		1819
24-181		住１覆土上面	高杯脚裾部片	裾径146、残高12	粘土粗、１mm石英・長石少	やや甘い	淡褐色	内外横ナデ後外縦ミガキ。	１／12	外面の縦ミガキから、山陰系か。	1764
24-182		住１覆土下部	高杯脚裾部片	裾径140、残高８	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄褐色	外ハケ後横ミガキ、内ハケ。	１／８		1730
24-183		住１覆土下部	高杯脚裾部片	裾径216、残高17	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外縦ハケ後縦ミガキ、内斜めハケ。	１／12		1744
24-184		住１覆土上面	外反口縁鉢	口径94、頸径86、胴径86、残高36	粘土細、１mm石英・長石極少	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内斜めミガキ。	１／６		1571



第 24 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図（9）（1／3）

第８表　１号竪穴住居跡出土土器観察表（６）

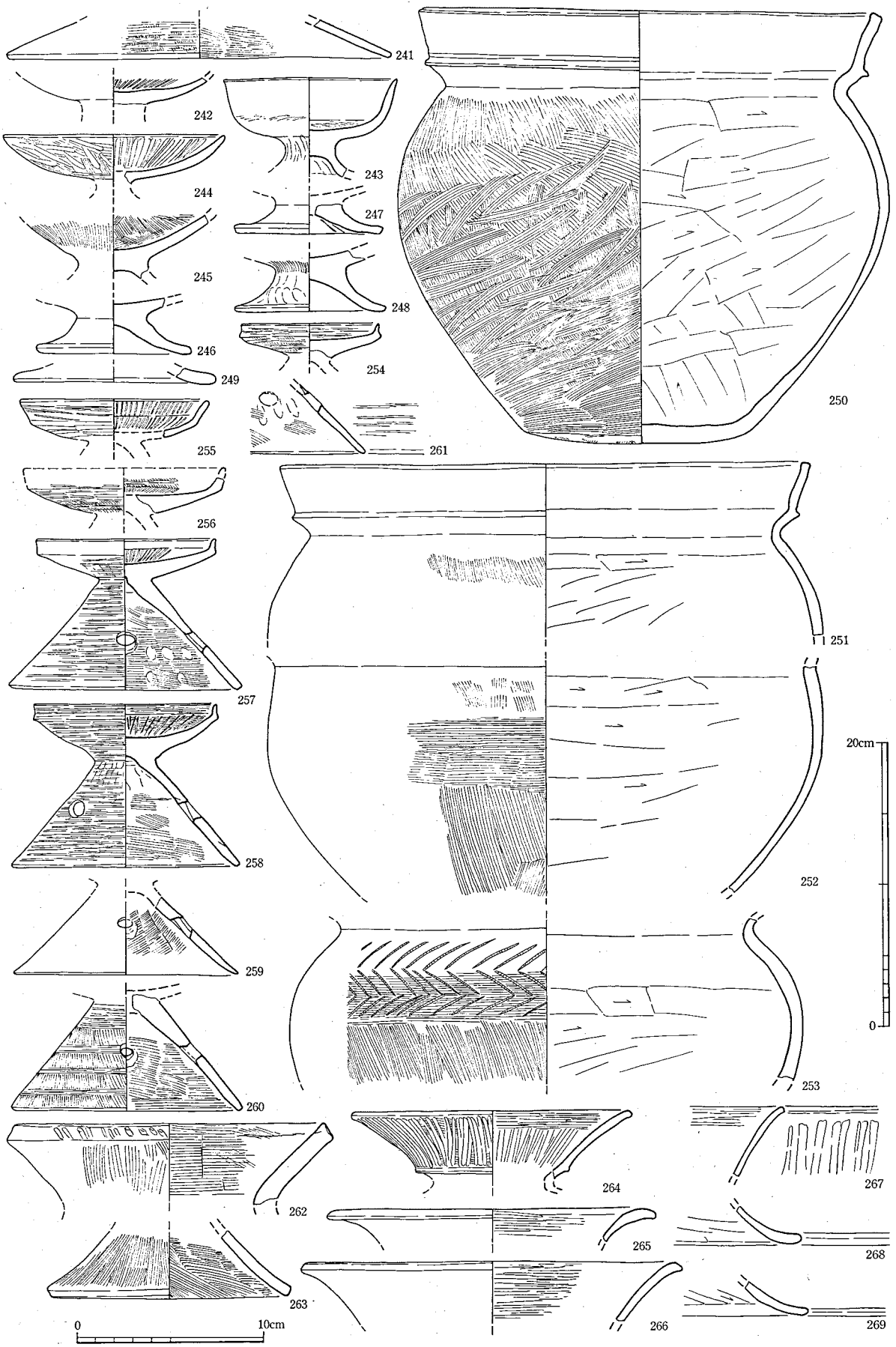
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
24-185		住１覆土上面	外反口縁鉢	口径94、頸径86、胴径102、残高38	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	橙褐色	外横ミガキ、口縁内ハケ、胴内疎らな横ミガキ。頸内接合痕。	１／４		1497
24-186		住１覆土上面	外反口縁鉢	口径102、頸径96、胴径97、残高50	粘土細、1mm長石・クサリ礫少	良好	外褐黄色、内淡橙褐色	口縁内外指頭圧痕残。外横ミガキ、口縁内ハケ、胴内ミガキ、ハケ残。	１／６		1570
24-187		住１覆土上面	外反口縁鉢	口径106、頸径90、胴径92、残高43	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	淡橙褐色	器壁極めて薄い。胴外斜めハケ後外縦ミガキ、口縁内ナデ、胴内ハケ。頸内接合痕残。	１／８		1773
24-188		住１覆土下部	外反口縁鉢	口径110、残高34	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色、器肉は黄褐色	外縦ハケ後横ミガキ、口縁内ハケ、胴内ナデ。	１／８		1752
24-189		住１覆土下部	外反口縁鉢	口径114、頸径102、胴径104、残高49	粘土細、1mm石英・金雲母少	良好	淡橙褐色	胴外下部ケズリ、頸部外ハケ後外横ミガキ。内横ミガキ（摩滅）。	１／８		1751
24-190		住１覆土	外反口縁鉢	口径104、残高44	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	頸外ハケ後外横ミガキ。内横ミガキ。	１／６		1780
24-191		住１覆土	外反口縁鉢	口径116、頸径108、胴径110、残高45	粘土細、1mm長石極少	やや甘い	淡黄橙褐色	胴外下部ケズリ後外横ミガキ、口縁内疎らな横ミガキ。	１／８		1556
24-192		住1no.７	外反口縁鉢	口径1116、残高41	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外橙褐色、内黄褐色	胴外下部ケズリ、頸外縦ハケ後外横ミガキ、内疎らな横ミガキ。	１／８		1457
25-193		住１覆土下部	外反口縁鉢	口径124、頸径112、胴径116、残高54	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴外下部ケズリ、胴上部縦ハケ、口縁外指頭圧痕後外横ミガキ。口縁内横ハケ後口縁～胴内疎らな横ミガキ。	１／４		1567
25-194		住１覆土下部	外反口縁鉢	口径124、頸径110、残高47	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	明褐色	胴外下部ケズリ、口縁外指頭圧痕後外横ミガキ。内疎らな横ミガキ。	１／６		1569
25-195		住１覆土上面	外反口縁鉢	残高34	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	褐色	内外横ミガキ。	１／12		1777
25-196		住1覆土	外反口縁鉢	残高36	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	橙褐色	頸外縦ハケ、内外横ミガキ。	１／８		1779
25-197		住１覆土上面	外反口縁鉢	口径126、頸径114、胴径116、残高46	粘土細、1mm石英・長石・クサリ礫少	良好	橙褐色	胴外下部ケズリ、口縁外指頭圧痕後外横ミガキ。内摩滅。	１／８	口縁外面褐変	1496
25-198		住1覆土	外反口縁鉢	口径128、残高35	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外橙褐色、内淡黄褐色	頸外縦ハケ後外横ミガキ。頸内板ナデ？（摩滅）。	１／８		1781
25-199		住１覆土下部	外反口縁鉢	口径128、残高42	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡黄橙褐色	外摩滅、口縁外指頭圧痕。口縁内横ハケ、胴内摩滅。	１／８		1568
25-200		住1no.７	外反口縁鉢	口径128、頸径118、胴径120、残高55	粘土細、１～３mm石英・クサリ礫少	やや甘い、器肉黒変	外橙黄褐色、内淡黄橙褐色	胴外下部ケズリ、頸～口縁外縦ハケ後外横ミガキ。口縁内横ハケ、胴内工具痕（摩滅）。	１／３		1455
25-201		住1覆土	外反口縁鉢	口径128、頸径110、残高34	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外横ミガキ、内ナデ。内ナデに先立ち化粧土を塗布したような痕跡残。	１／８		1775
25-202		住１覆土下部	外反口縁鉢	口径138、頸径130、胴径134、残高66	粘土細、１～３mm石英・長石極少	良好	淡黄橙褐色	胴外下部ケズリ、頸外縦ハケ後外横ミガキ。口縁内横ハケ、胴内ナデ。	１／８		1637
25-203		住１覆土上面	外反口縁鉢	残高31	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	褐色	頸外縦ハケ後内外横ミガキ。	小片		1776
25-204		住１覆土上面	外反口縁鉢	残高39	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外横ミガキ、内ナデ？。	小片		1772
25-205		住１覆土上面	外反口縁鉢	残高39	粘土細、1mm長石極少	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内摩滅。	小片		1774
25-206		住1no.７	外反口縁鉢	残高36	粘土細、１～３mm雲母・クサリ礫少	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、口縁内横ハケ、胴内ナデ。	小片		1707
25-207		住１カマド積土内	外反口縁鉢	残高50	粘土細、1mm石英・長石少	やや甘い	外黄橙色、内橙褐色	口縁横ハケ残るが、内外摩滅。	小片		1756
25-208		住１覆土上面	直口鉢	残高25	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	明褐色	内外横ミガキ。	小片	内面煤付着。	1769
25-209		住1覆土	直口鉢	口径100、残高29	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	内外ミガキ。	１／４		1623
25-210		住1覆土	直口鉢	口径100、残高26	粘土細、1mm長石極少	やや甘い	赤褐色、器肉は黄褐色	口縁端外凹み巡る。内外横ミガキ。	１／８	器表の赤褐色は化粧土のためか	1772
25-211		住1覆土	直口鉢	口径112、残高39	粘土細、１～３mm石英少	やや甘い	外黄橙褐色、内明褐色	外下部ケズリ後外ミガキ。内摩滅のためミガキの有無不明。	１／４		1508
25-212	26	住１覆土上面	直口鉢	口径114、器高30	粘土細、１～３mm石英・長石少	良好	橙褐色	器壁やや厚い。内外ミガキ。	ほぼ完形		1537
25-213		住1覆土	直口鉢	口径114、残高29	粘土細、1mm石英・長石極少	やや甘い	橙褐色	胴外下部ケズリ後内外ミガキ。	１／６		1621
25-214		住１覆土上面	直口鉢	口径118、残高28	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好、堅緻	明褐色	胴外下部ケズリ後内外ミガキ。	１／６		1603
25-215		住１覆土上面	直口鉢	口径116、残高32	粘土細、1mm石英少	やや甘い	橙褐色	胴外下部ケズリ後内外ミガキ。	１／４		1559
25-216		住１覆土上面	直口鉢	口径120、残高28	粘土細、1mm石英・長石少	やや甘い	橙褐色	外横ミガキ残るが、内外摩滅。	１／６	二次的に火を受け褐変、黒変、煤付着	1507
25-217		住１覆土下部	直口鉢	口径122、器高37	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴外下部ケズリ後内外ミガキ。	１／２		1586
25-218		住１覆土上面	直口鉢	口径120、残高31	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	褐黄色	内外摩滅。	１／８	径不安	1505
25-219		住１覆土上面	直口鉢	口径122、器高36	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	淡褐色	胴外下部ケズリ、口縁外指頭圧痕、内放射状ハケ後内外ミガキ。	ほぼ完形		1525
25-220		住1覆土	直口鉢	口径124、残高30	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴外下部ケズリ後内外ミガキ。	１／３		1620
25-221		住１覆土下部	直口鉢	口径124、器高45	粘土粗、１～３mm石英少	良好	淡橙褐色	胴外下部ケズリ後内外ミガキ。	１／８		1739
25-222		住１覆土下部	直口鉢	口径124、器高33	粘土細、１～３mm石英多	良好	淡橙褐色	胴外下部ケズリ、口縁内横ハケ後内外ミガキ。	１／４		1738
25-223		住１覆土上面	直口鉢	口径126、器高36	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡黄橙褐色	胴外下部ケズリ後内外ミガキ。	１／３		1527



第25図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（10）（1／3）

第９表　１号竪穴住居跡出土土器観察表（７）

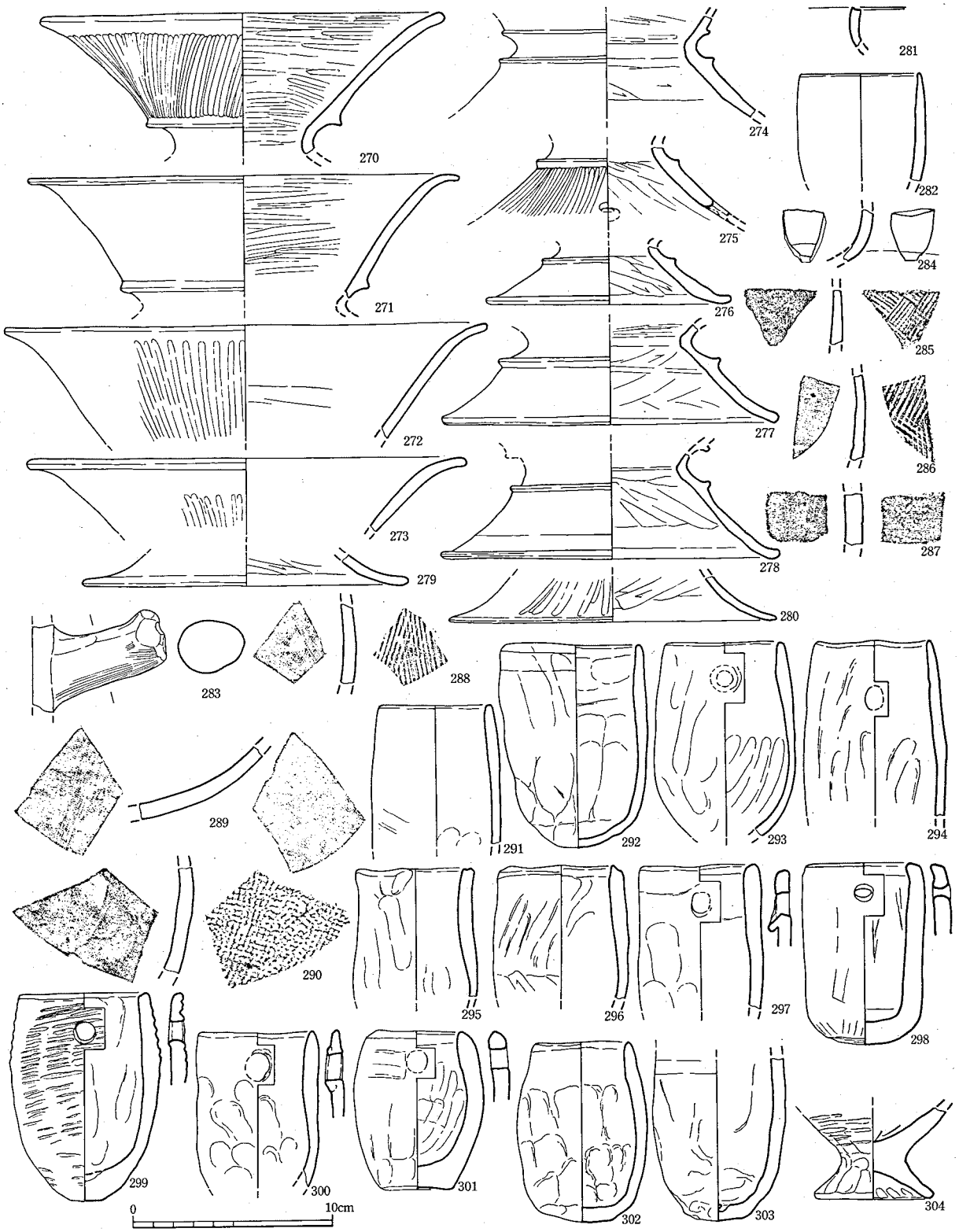
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
25-224		住１覆土下部	直口鉢	口径 128、器高 35	粘土細、１～３mm 石英多	良好、外大黒斑	橙褐色	胴外下部ケズリ、胴外中部指頭圧痕、口縁外ハケ後内外横ミガキ。	２／３	破片によっては二次的に火を受け褐変	1585
25-225		住１覆土中部	直口鉢	口径 126、残高 30	粘土細、１mm 石英少	良好	淡橙褐色	胴外下部ケズリ後内外ミガキ。	１／10		1560
25-226		住１覆土	直口鉢	口径 132、残高 29	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴外下部ケズリ後内外ミガキ。	１／８		1770
25-227		住１覆土上面	直口鉢	口径 152、残高 41	粘土粗、１～３mm 石英少	やや甘い	淡黄橙褐色	口縁内外ナデ、外下部ミガキ。胴内摩滅するが、ケズリ後ミガキか。	１／６		1504
25-228		住１覆土上面	直口鉢	残高 36	粘土細、１～３mm 石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	外下部縦ハケ後ケズリ。口縁端内斜めハケ後縦ミガキ。	小片		1768
25-229		住１覆土下部	直口鉢	残高 49	粘土粗、１～３mm 石英少	良好	外褐灰色、内褐黄色	外斜めハケ後雑なミガキ。内ケズリ後口縁内横ミガキ、胴内縦ミガキ。	小片	外煤付着	1604
25-230	26	住１覆土上面	直口鉢	口径 102、器高 56	粘土粗、１～３mm 石英多	やや甘い、１／３黒斑	外褐色、内淡黄褐色	胴外斜めハケ、口縁外横ナデ、胴内横ハケ？、胴内ナデ。	１／２		1541
25-231	26	住１覆土中部	直口鉢	口径 118、器高 40	粘土細、１～３mm 石英少	良好	外灰黄褐色、内淡黄褐色	外ケズリ、内ナデ。	２／３		1540
25-232		住１覆土上面	直口鉢	口径 124、残高 46	粘土粗、１～３mm 石英少	やや甘い	黄白褐色	口縁内外ナデ、胴下部外縦ハケ、胴下部内ケズリ。内摩滅進む。	１／８		1506
25-233	26	住１覆土上面	直口鉢	口径 132、器高 50	粘土細、１～３mm 石英少	良好	淡黄褐色	外ハケ、内ハケ・板工具痕後ナデ。口縁内外横ナデ。	２／３		1526
25-234		住１覆土中部	直口鉢	口径 180、残高 55	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好、外５cm 大黒斑	外褐黄色、内明褐色	外ハケ後胴下部ケズリ後一部ミガキ。内ハケ。	１／４		1696
25-235	26	住１覆土上面	直口鉢	口径 36、器高 36	粘土細、１mm 石英・長石少	良好	淡褐色～淡褐灰色	小形で底部近くに４個所、半乾燥時に穿孔。口縁内外横ハケ後内外縦ミガキ。	口縁２／３		1528
25-236		住１覆土下部	脚付鉢鉢部	口径 130、残高 54	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外褐色、内赤褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内暗文風縦ミガキ。	１／４		1598
25-237		住１覆土中部	脚付鉢脚部	残高 35	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	半乾燥時穿孔１個所残。上部は接合面より剥離。外縦方向板ナデ稜後横ミガキ。内斜めハケ後縦ハケ？。	上部ほぼ全周		1600
25-238		住１覆土下部	脚付鉢脚部	口径 98、残高 34	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	明褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内暗文風縦ミガキ。	１／８		1602
25-239		住１覆土下部	脚付鉢鉢部	残高 13	粘土細、１mm 雲母・クサリ礫少	良好	褐色	外横ミガキ、内放射状ミガキ。	残存部全周		1729
25-240		住１覆土下部	脚付鉢脚部	裾径 212、残高 30	粘土細、１mm 長石少	良好	橙褐色～黄褐色	半乾燥時穿孔１個所残。穿孔部の横に穿孔を試みた同心円上の擦痕あり。外斜めハケ後横ミガキ、内ハケ。	１／３		1606
26-241		住１覆土下部	脚付鉢脚部	裾径 198、残高 20	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	暗褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	１／８		1732
26-242		住１出入口施設積土	脚付鉢鉢底部	残高 13	粘土細、１～３mm 石英・長石極少	良好	淡褐色	外摩滅、内放射状ミガキ。	３／４		1754
26-243	26	住１覆土	脚付鉢	口径 90、残高 51	粘土細、１～３mm 石英多	良好	淡灰黄褐色	外ナデ、鉢屈曲部ハケ、脚外板ナデ痕残。口縁内ナデ、鉢底内ミガキ、脚内ナデ。	口縁１／２、脚全周		1619
26-244		住１覆土上面	脚付鉢鉢部	口径 114、残高 26	粘土細、１mm 石英・金雲母少	良好	外淡黄褐色、内淡灰褐色	外斜めハケ後粗雑ミガキ、内縦ミガキ。	１／８		1512
26-245		住１覆土上面	脚付鉢鉢部	残高 34	粘土細、１～３mm 石英多	良好	外灰褐色、内淡黄褐色	外縦ハケ、内斜めハケ。	鉢下部全周		1539
26-246		住１no. 4	脚付鉢脚部	裾径 78、残高 29	粘土粗、１～３mm 石英多	やや甘い、内面黒変	白黄褐色	内外摩滅気味のナデ。	全周		1447
26-247		住１覆土下部	脚付鉢脚部	裾径 74、残高 17	粘土粗、１～３mm 石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ、内縦ハケ？残。	１／６		1743
26-248		住１覆土上面	脚付鉢脚部	裾径 76、残高 31	粘土粗、１～３mm 石英少	良好、器肉中央黒変	淡黄褐色	括れ部外縦ハケ、脚外指頭圧痕。内ナデ。	接合部全周		1517
26-249		住１覆土	脚付鉢脚部	裾径 104、残高 8	粘土粗、１～３mm 石英・長石多	やや甘い	褐色	内外ナデ。	１／８		1766
26-250	27	住１覆土上面	山陰系大形鉢	口径 332、頸径 294、胴径 350、底径 156、器高 307、胴高 247	粘土粗、１～８mm 石英多	良好	黄褐色	口縁内外ハケ、胴内ケズリ、胴外ハケ。外ハケは、頸～胴中部左上り粗いハケ、胴下部右上がり細かいハケの順。	２／３		1536
26-251		住１覆土上面	山陰系大形鉢	口径 360、残高 123	粘土粗、１～３mm 石英多	良好、口縁外面大黒斑	外暗灰黄褐色、内淡灰黄褐色	口縁内外ナデ、胴外ハケ残（摩滅）、胴内ケズリ。	１／12		1489
26-252		住１覆土下部	山陰系大形鉢	頸径 380、残高 165	粘土粗、１～３mm 石英少	良好、堅緻	淡黄褐色	外頸下縦ハケ、中部横ハケ、胴下縦ハケの順。胴内ケズリ。	１／８		1580
26-253		住１覆土	山陰系大形鉢	頸径 290、残高 103	粘土粗、１～３mm 石英多	良好	褐色	肩外にハケメ工具刺突綾杉文を３段に施文。頸内ナデ、胴内ケズリ。	１／６		1633
26-254		住１覆土下部	小形器台	口径 72、残高 19	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	赤褐色	外縦ハケ後、内外横ミガキ。	１／２		1638
26-255		住１覆土	小形器台	口径 96、残高 20	粘土粗、１mm 石英少	良好	外橙黄褐色、内褐色	受部底外ケズリ後外横ミガキ。内縦ミガキ。	１／６		1554
26-256		住１覆土下部	小形器台	残高 19	粘土細、１mm 石英・金雲母少	良好	外橙褐色、内淡黄褐色	外ハケ後横ミガキ、口縁内ハケ後横ミガキ、受部底内放射状ミガキ。	１／８		1741
26-257		住１覆土下部	小形器台	口径 112、裾径 112、器高 79、脚高 58	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	脚２個所に半乾燥時の穿孔。口縁内外横ナデ、受部底外ケズリ後横ミガキ、受部底内放射状ミガキ。脚外縦ハケ後横ミガキ。脚内指頭圧痕後斜めハケ。	脚全周、口縁１／８		1605
26-258	27	住１覆土上面	小形器台	口径 114、裾径 116、器高 85、脚高 56	粘土細、１～３mm 石英極少	良好	橙褐色	０・４・８時の３方向に半乾燥時穿孔。外横ミガキで、脚上部外縦方向稜残。受部内横ミガキ後放射状ミガキ。脚内斜めハケ。	脚全周、口縁１／２		1549



第26図　1号竪穴住居跡出土土器実測図（11）（250～253は1／4、他は1／3）

第10表　1号竪穴住居跡出土土器観察表（8）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
26-259		住1覆土下部	小形器台	裾径116、残高41	粘土粗、1mm石英・長石少	やや甘い	淡黄褐色	半乾燥時穿孔1個所残。外摩滅、内斜めハケ。	1／6		1728
26-260		住1覆土上面	小形器台	裾径114、残高58	粘土細、1mm石英少	良好	橙褐色	半乾燥時穿孔1個所残。外斜めハケ後横ミガキ。内斜めハケ。	1／8		1513
26-261		住1覆土	小形器台	残高37	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	褐色	外横ミガキ（摩滅）、内ハケ後指頭圧痕。	小片		1763
26-262		住1覆土下部	在地系器台	口径160、残高43	粘土粗、1mm石英少	良好	外淡黄褐色、内黄褐色	口縁端棒状工具？、ハケメ工具角？による刻目。外縦ハケ、内横ナデ。口縁内に接合痕残。	1／8		1747
26-263		住1覆土	在地系器台	裾径124、残高34	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	褐色	外縦ハケ、内斜めハケ。	1／3	裾径が小さく高杯脚裾の可能性を残す	1611
26-264		住1覆土	山陰系鼓形器台	口径144、残高35	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外灰黄褐色、内褐黄色	外横ハケ後縦ミガキ。口縁端内横ミガキ、口縁内縦ミガキ。	1／4		1618
26-265		住1覆土上面	山陰系鼓形器台	口径160、残高19	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端外反強い。外ナデ、内横ミガキ。	1／8		1494
26-266		住1覆土	山陰系鼓形器台	口径212、残高32	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外ナデ、内横ミガキ。	1／8		1785
26-267		住1覆土上面	山陰系鼓形器台	残高38	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐白色	外ナデ後やや太い暗文風縦ミガキ。内ナデ後口縁端内横ミガキ。	小片		1793
26-268		住1覆土下部	山陰系鼓形器台	残高20	粘土粗、1mm石英少	良好	淡橙褐色	内ケズリ（摩滅）、外ナデ。	小片		1719
26-269		住1覆土上面	山陰系鼓形器台	残高18	粘土粗、1～3mm石英少	良好、堅緻	外淡橙褐色、内淡黄褐色	内ケズリ、裾端内外横ナデ、外摩滅。	小片		1803
27-270		住1no.3	山陰系鼓形器台	口径192、括部径68、残高69	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	やや甘い	褐灰色	口径に比べ括部径小さい。外縦ミガキ、内斜めミガキ、括部内外横ナデ。	1／4	二次的に火を受け煤付着	1446
27-271		住1覆土上面	山陰系鼓形器台	口径208、残高61	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	外淡黄褐色、内淡褐白色	外横ナデ、内横ミガキ。	1／6		1503
27-272		住1覆土上面	山陰系鼓形器台	口径232、残高56	粘土粗、1～3mm石英多	良好、器肉黒変	外灰黄褐色、内淡黄褐色	外縦ミガキ。内ケズリ後摩滅（ミガキ？、ナデ？）。	1／12	径、傾き不安	1790
27-273		住1覆土上面	山陰系鼓形器台	口径210、残高37	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄白褐色	外縦ミガキ、口縁外～内ナデ。	1／10	径、傾き不安	1495
27-274		住1覆土上面	山陰系鼓形器台	括部径88、残高50	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	外ナデ、受部内ミガキ、括部内ナデ、裾内ケズリ。	1／6		1519
27-275		住1覆土	山陰系鼓形器台	括部径54、残高36	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内灰褐色	裾部1個所半乾燥時穿孔。括部外横ナデ、裾部外縦ミガキ、裾部内ケズリ。	1／4		1565
27-276		住1覆土上面	山陰系鼓形器台	裾径114、残高29	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	白褐色	外～裾端内横ナデ、内ケズリ。	1／6		1798
27-277		住1覆土上面	山陰系鼓形器台	裾径160、括部径80、残高48	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外ナデ、裾内ケズリ、受部内横ミガキ。	1／6		1538
27-278	27	住1覆土上面	山陰系鼓形器台	裾径162、括部径74、残高51	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外黄白褐色、内淡褐灰色	裾外面に微かな稜あり。外～裾端内横ナデ、裾内ケズリ。	全周		1520
27-279		住1覆土	山陰系鼓形器台	裾径154、残高15	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄褐色	外～裾端内横ナデ、裾内ケズリ。	1／10		1709
27-280		住1覆土上面	山陰系鼓形器台	裾径156、残高22	粘土粗、1～3mm石英・金雲母少	良好	褐灰色	外横ナデ後暗文風の浅い縦ミガキ。裾内ナデ後ケズリ。	1／8		1789
27-281		住1覆土上面	半島系土器壺口縁	残高20		陶質	灰色	内外ナデ。	小片		
27-282		住1覆土下部	半島系土器鉢	口径58、残高52		陶質	灰色	内外ナデ。	1／6		2326・2327
27-283		住1覆土上面	半島系土器脚把手	長65、太26×33		土師質、黒斑あり	黄灰褐色	外一部ハケ、他はナデ。	全周		2320
27-284		住1覆土下部	半島系土器胴部片			陶質、堅緻	灰色	内外ナデ、下部外手持ちヘラケズリ？。	小片		1725
27-285		住1覆土中部	半島系土器胴部片			陶質	暗灰色	外網代状の平行タタキ、内ナデ。	小片		2328
27-286		住1覆土上面	半島系土器胴部片			陶質	灰色	外平行タタキ、内ナデ。	小片		2321
27-287		住1覆土	半島系土器胴部片		粘土細、1mm石英・長石少	軟質	鈍い褐色	外格子タタキ（摩滅）、内ナデ。	小片		2322
27-288		住1覆土	半島系土器胴部片			陶質	黄灰色	外平行タタキ、内方向不定のナデ	小片		2324
27-289		住1覆土中部	半島系土器胴部片			陶質	灰褐色	外ケズリ後ナデ？、内方向不定のナデ。	小片		2323
27-290		住1覆土中部	半島系土器胴部片			軟質	黄灰色～灰褐色	外格子タタキ。内ナデ、凹凸顕著なため一部ケズリ？。	小片		2325
27-291		住1覆土上面	タコ壺	口径52、残高70	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外黄白褐色、内淡黄褐色	内外ナデ、内指頭圧痕残。	1／2		1533
27-292		住1覆土上面	タコ壺	口径65、器高100	粘土細、1mm石英少	やや甘い	外淡黄褐色、内灰褐色	内外ナデ。外面のナデは極めて粗雑。	口縁1／6、底全周。		1534
27-293		住1覆土	タコ壺	口径57、残高95	粘土粗、1～3mm石英少	良好、外大黒斑	淡黄褐色	内外ナデ。	1／2		1625
27-294		住1覆土下部	タコ壺	口径54、残高87	粘土細、1～5mm石英少	やや甘い	黄白褐色	内外ナデ。	1／2		1581
27-295		住1覆土上面	タコ壺	口径46、残高65	粘土粗、1mm長石少	良好	外黄灰褐色、内淡黄褐色	口縁端角張り、中央凹む。内外ナデ。	1／3		1532
27-296		住1覆土下部	タコ壺	口径50、残高64	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外黄灰褐色、内淡黄褐色	内外ナデ。	1／2		1583
27-297		住1覆土上面	タコ壺	口径54、残高71	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／2		1531



第 27 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図（12）（1／3）

塗布したような痕跡が認められる。

208 ～ 229 はミガキを施した精製直口鉢。227 内面は他と異なり、ケズリの後ミガキを施した可能性がある。228・229 は外面の調整が粗雑で、内面に縦ミガキを施し、山陰系の可能性がある。

230 ～ 234 はミガキのほとんど観察されない粗製品。235 は小形で底部近くに 4 個所、半乾燥時

に穿孔を施したもの。口縁内外横ハケ後内外縦ミガキ仕上げ。

236～242は畿内系の精製脚付鉢破片である。236・239は深い器形をなすことから脚付鉢鉢部片か。238は脚付鉢鉢底部片、240は脚付鉢脚部片である。半乾燥時穿孔1個所残るが、穿孔部の横外面に穿孔を試みた同心円状の擦痕が観察できる。そこから半乾燥時の穿孔は管状の工具を外から回転させて穿孔したと推定される。

244は山陰系脚付鉢鉢部。243は口縁部が直に近い角度で立ち上がる特異な器形の脚付鉢。245は脚付鉢底部片。

246～249は脚付鉢脚部片で、丁寧に内外をナデ仕上げする246は山陰系と推測される。

250～251は山陰系大形鉢で、252・253はその胴部か。253は肩外にハケメ工具刺突の綾杉文を3段に渡り巡らす。

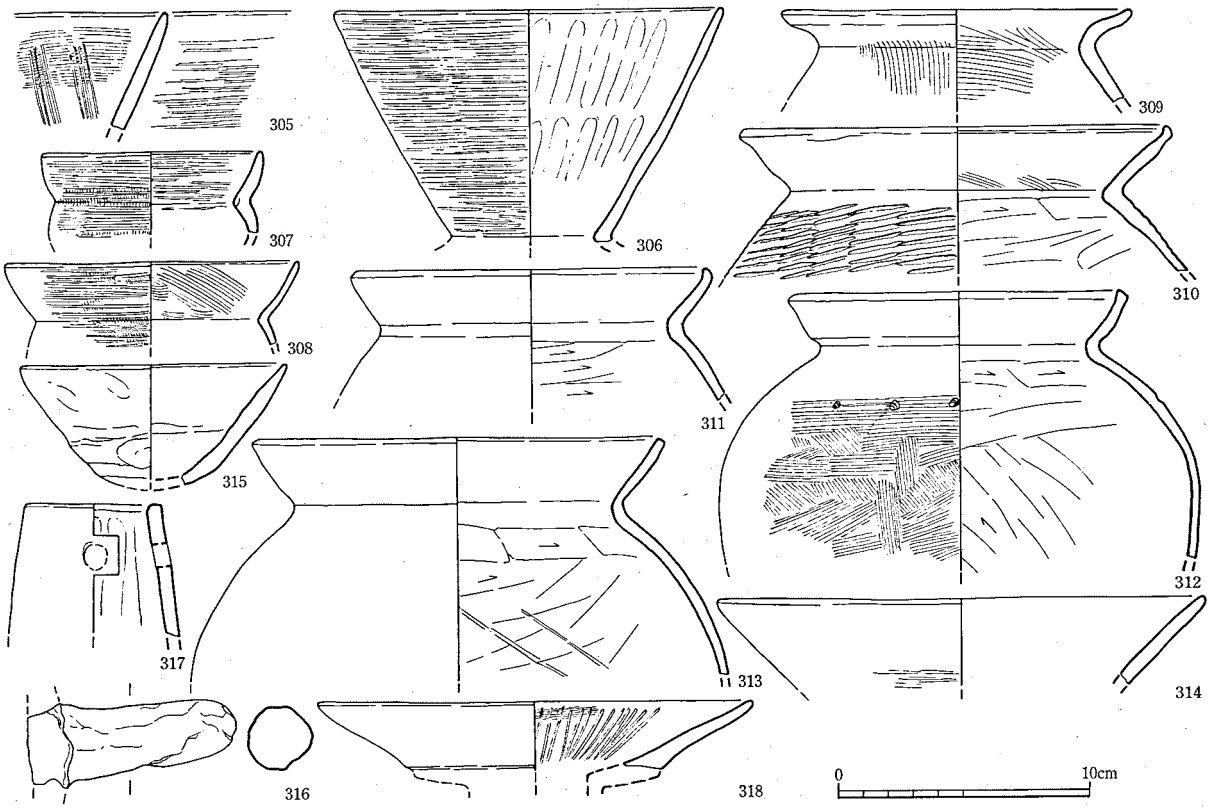
254～261は畿内系小形器台。257・258は完形に復元され、257は脚部に2個所、258は脚部0・4・8時の3方向に粘土の乾燥が進んだ時点で、外側から穿孔を施す。254～256は口縁部片、259～261は脚部片である。

262・263は在地系の器台として図示したが、263は裾径が小さく高杯脚裾の可能性を残す。262は口縁端部に棒状工具ないしはハケメ工具角による刻目を施す。

264～280は山陰系鼓形器台。270は口径に比べ、括部径が小さい。275は裾部に1個所、半

第11表　1号竪穴住居跡出土土器観察表（9）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
27-298		住1覆土上面	タコ壺	口径45、器高88	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好、外黒斑	褐色	内外ナデで仕上げるが、底外板ナデ痕、内縦方向工具痕残。	1／2		1530
27-299		住1no.1	タコ壺	口径60、器高102	粘土粗、1～5mm石英多	良好	赤褐色	外タタキ、内ナデ。	1／3		1626
27-300		住1覆土下部	タコ壺	口径54、残高77	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡灰黄褐色	内外ナデ。	1／4		1582
27-301		住1覆土上面	タコ壺	口径42、器高78、底径35	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	外褐灰色、内淡褐色	安定した平底。内外ナデで仕上げるが、外板ナデ痕暗。	ほぼ完形		1529
27-302		住1覆土下部	タコ壺	口径46、器高91	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	底1／2、口縁1／8		1584
27-303	27	住1覆土上面	タコ壺	残高79	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好、底大黒斑あり	淡黄褐色	内外ナデ。	底全周		1535
27-304		住1覆土中部	製塩土器脚部	裾径56、残高44	粘土粗、1～5mm石英多	良好	赤褐色	胴部外面タタキ、脚部内外粗雑なナデ。	脚1／3		1564
28-305		住1～3上面	直口壺口縁	残高47	粘土細、1mm石英・金雲母少	良好	外淡黄褐色、内淡橙褐色	外横ミガキ、内横ハケ後暗文風斜めミガキ。	小片		1817
28-306		住1～3上面	直口壺口縁	口径148、頸径62、残高90	粘土細、1mm石英少	やや甘い	外黄橙褐色、内橙褐色	外横ミガキ、内ナデで指頭圧痕残。	1／8		1509
28-307		住1～3上面	小形丸底壺	口径84、頸径76、残高31	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	淡橙褐色	外縦ハケ後外～口縁内横ミガキ。胴内ナデ。頸部内面に接合痕残。	1／6		1648
28-308		住1～3上面	小形丸底壺	口径112、頸径90、残高33	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外縦ハケ後ミガキ、口縁内斜めハケ。胴内ナデ。	1／8		1807
28-309		住1～3上面	五様式系甕	口径136、残高36	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好、口縁内外黒色	淡黄褐色	口縁の外反強い。胴外縦ハケ、口縁内外横ナデ、胴内横・斜めハケ。	1／6		1646
28-310		住1～3上面	庄内系甕	口径166、残高57	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色～淡黄褐色	口縁端つまみ上げ。胴外右上がりタタキ、胴内ケズリ。口縁内外横ナデで、内にハケ残。	1／4		2257
28-311		住1～3上面	布留系甕	口径134、残高52	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内褐灰色	外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	1／12	径不安	1816
28-312		住1～3上面	布留系甕	口径126、頸径108、胴径184、残高104	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い	淡黄褐色	肩部外面にハケメ工具の角を押し付けた列点文施文。口縁内外ナデで端部つまみ上げ。胴内ケズリ、胴外ハケは左上り斜めハケ、横ハケ、右上がりハケ・縦ハケの順。	1／6	内外褐変する個所が多い。器形復元時に歪む。	1652
28-313		住1～3上面	布留系甕	口径156、残高93	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	外黄褐色、内淡黄褐色	口縁内外横ナデ、胴外摩滅、胴内ケズリ。	1／6		1521
28-314		住1～3上面	高杯口縁部片	口径188、残高34	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	黄褐色	内外摩滅、外面横ミガキ残。	1／12		1818
28-315	27	住1～3上面	鉢	口径104、残高47	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好、底内黒斑	淡黄褐色	内外ナデ。	口縁全周		1650
28-316		住1～3上面	半島系土器甑把手	長81、太25	粘土粗、1～3mm石英少	土師質、良好	淡褐黄色	内外ナデ。	完存		
28-317		住1～3上面	タコ壺	口径44、残高51	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	橙褐色	内外ナデ。	1／3		1649
28-318		住1～3上面	畿内系二重口縁壺	口径166、残高30	粘土粗、1mm石英少	良好、堅緻	赤褐色	外ナデ、内横ハケ後放射状ミガキ。	1／8		1511



第 28 図　1 号竪穴住居跡出土土器実測図（13）（1／3）

乾燥時穿孔を施し、特異である。275・280 は裾外面にも縦ミガキを施す珍しい個体であり、280 は裾内面のケズリがナデよりも新しいことが確認できる。

281 ～ 290 は朝鮮半島系土器。281 は壺口縁、282 は深い器形の鉢口縁、283 は土師質甑把手で、他は胴部片である。

291 ～ 303 はタコ壺。299 は外面タタキで仕上げ、301 は安定した平底を呈する。304 は赤褐色を呈し、胴部外面タタキ、脚部内外粗雑なナデ仕上げの製塩土器。

305 ～ 314 は 1 号竪穴住居跡と、隣接する 2 ～ 3 号竪穴住居跡の上面から出土し、いずれに帰属するか区別できないもの。

305・306 は精製直口壺口縁部、307・308 は小形丸底壺口縁部である。318 は内面にミガキを施し、径が小さいことから畿内系二重口縁壺口縁か。309 は五様式系甕、310 は庄内系甕。311 ～ 313 は布留系甕。312 は肩部外面にハケメ工具の角を押し付けた列点文が見られる。

2 号竪穴住居跡（図版 9、第 29 図）

3 区の東部、1 号竪穴住居跡の南に位置する。第 13 図土層図に示すように 1 号住居跡に切られるが、上面では 1 号住居跡との切合いを逆に考えていた。そのため、2 号住居跡として図示した遺物の一部に 1 号住居跡に帰属させるべきものが含まれると考えられる。

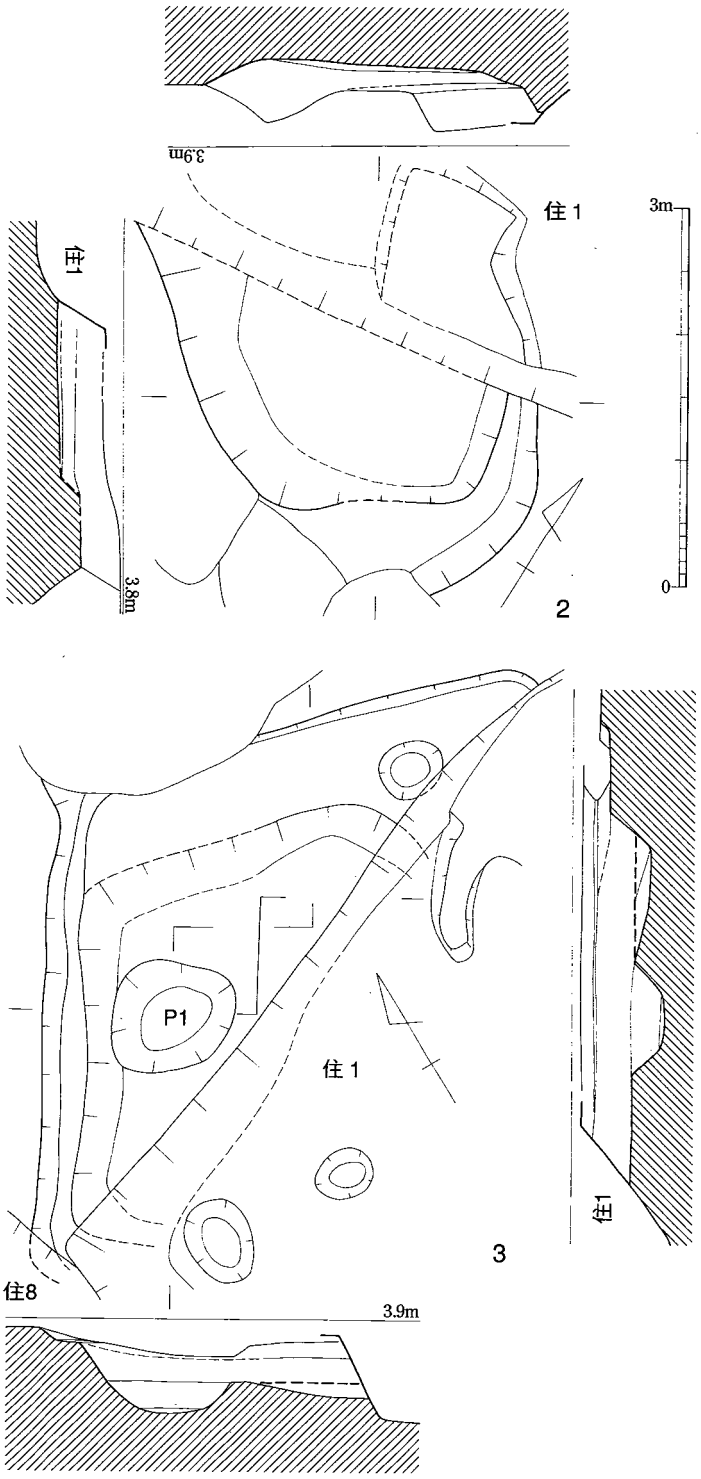
1 号竪穴住居跡に北側を大きく壊されるため、遺存するのは南壁と、東西壁の南部の一部のみである。東西壁が平行しなかったり、東南部壁の検出時の誤りにより不自然な段が生じるなど、輪郭の把握が確実でなかったが、主軸を N － 32° － W に向けた長方形住居跡の南部のみが遺存するのではないかと考えられる。

長軸方向に 2.1m 程が遺存し、幅は南壁で 1.8m、現存部分の最大幅は 2.7m を測る。床面は緩や

かに西側が低くなるが、西側を掘り過ぎたと解釈するならば、床面は標高3.3m前後で、検出面から深さ0.5m程である。

出土遺物（図版27・28、第30・31図、第12・13表）　1は口縁外面の縦ミガキが特徴的な甕に近い器形の直口壺で、在地系のものかと推測される。2は口縁端部が角張り、在地系の大形壺口縁と推測される。

3・4は山陰系二重口縁壺であり、一般的なものに比べ、3は口縁屈曲部の突出がほとんどない。



第29図　2・3号竪穴住居跡実測図（1／60）

5～9は五様式系甕で、10はその胴部片と推測される。6以外は外面に粗いタタキ痕を残す。5は小さな平底をなし、胴外右上がりの粗いタタキの後、縦・斜めハケを施し、胴内面は頸部までケズリが及ぶ。10は極めて小さな平底をなす。

11は在地系高杯口縁、12は在地系高杯杯底部である。

13は精製外反口縁鉢、14は精製直口鉢。15は内外縦ミガキで仕上げた脚付鉢鉢部で、16・17は脚付鉢脚部片。18は山陰系鼓形器台。

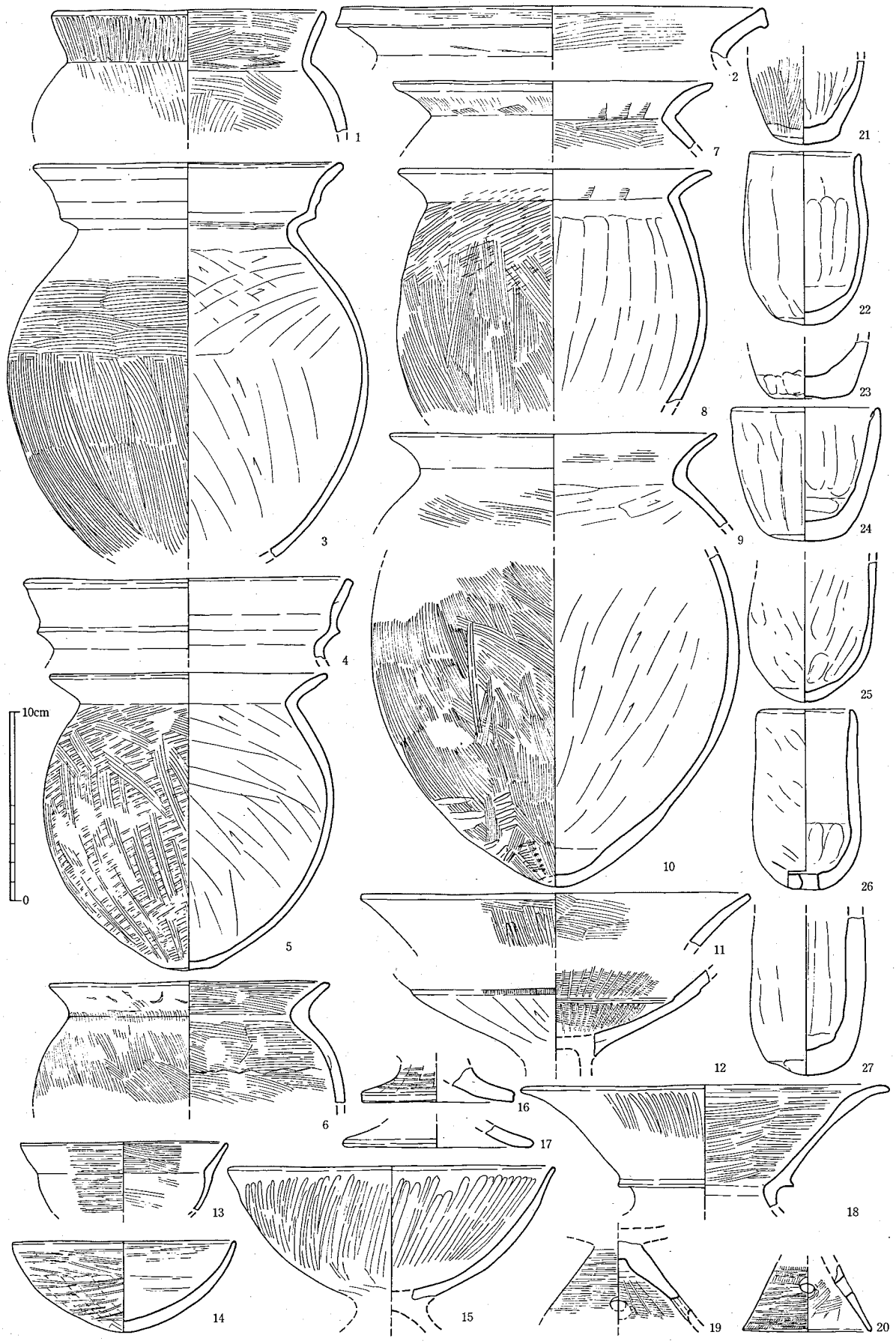
19・20は精製の小形器台。19は0・5時の2個所に半乾燥時の穿孔を施し、20は特に小形品で、裾部に1個所、乾燥前に穿孔を施す。

21～37はタコ壺。24は低く平底気味の器形をなし、26は底にも穿孔を施す。29・33は胴部の強く張る器形をなす。31は精良な胎土で、小形精製器種に近い印象を受ける。37は2号住居跡周辺の遺構面からの出土品である。

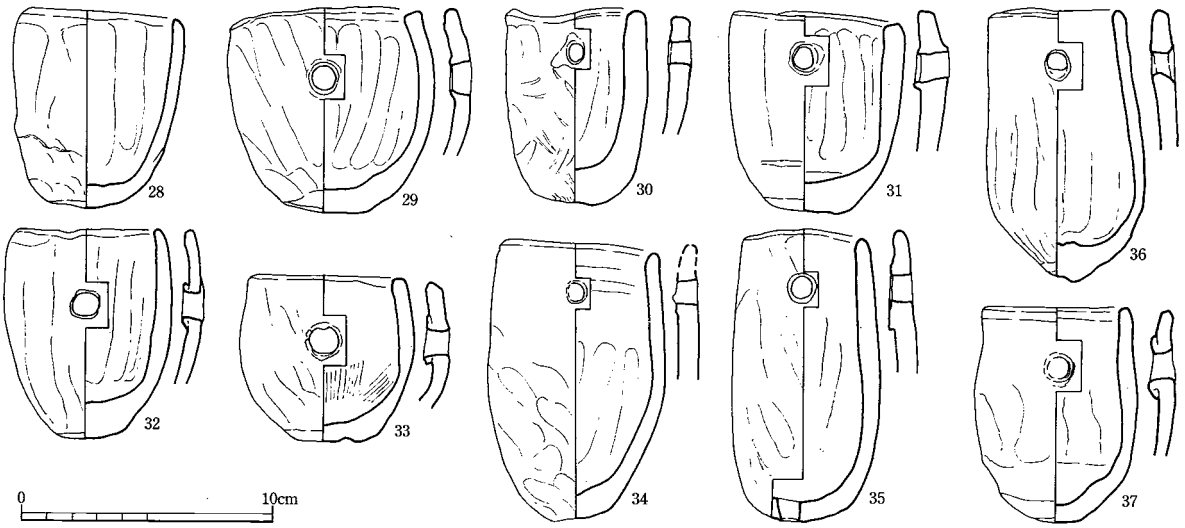
3号竪穴住居跡（図版9、第29図）

3区の東部、1号竪穴住居跡の北西に位置する。覆土は黄褐色細砂を少し含む灰褐色細砂で、1号竪穴住居跡に切られることは確実である。

住居跡西側の壁上面は段を形成するが、内側が本来の上面と考えられ、直線的で確実である。一方、北壁はやや乱れている。西側の壁を基準に主軸を取れ



第30図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）



第31図　2号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

第12表　2号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
30-1		住2覆土中部	在地系直口壺	口径142、残高65	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	橙褐色	胴外縦ハケ、口縁外縦ハケ後縦ミガキ、口縁内横ハケ、胴内斜めハケ。	口縁1／4、胴1／8		1681
30-2		住2覆土上部	在地系大形壺？	口径222、残高27	粘土粗、1～3mm石英多	良好	橙褐色	口縁端角張る。口縁端外横ハケ、胴内横ハケ後内外ナデ。頸部外に微かな凹み残。	1／12		1665
30-3	27	住2覆土中部	山陰系二重口縁壺	口径160、頸径116、胴径190、残高208	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁屈曲部の突出なし。胴外ハケは肩横ハケ、下部縦ハケの順。頸部内にハケ残。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／2	胴外肩より下煤付着。胴内肩より下コゲのため褐変	1667
30-4		住2覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径166、残高42	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ナデで、口縁内に接合痕残。	1／10	外面煤のためか褐変	1811
30-5	27	住2覆土中部	五様式系甕	口径144、頸径114、胴径152、底径24、器高155、胴高139	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	やや甘い	灰褐色～淡黄灰褐色	径の小さい平底をなす。胴外右上がり粗いタタキ後縦・斜めハケ、胴内頸部までケズリ。口縁内外ナデ。	口縁2／3、胴1／2	器形は復元時の歪みが顕著	1666
30-6		住2覆土最上部	五様式系甕	口径140、残高64	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色～褐色	胴外縦・斜めハケ、胴～口縁内横ハケ。口縁部外に皺あり、胴部内に接合痕残。	1／2		1658
30-7		住2覆土上部	五様式系甕	口径166、残高35	粘土粗、1～3mm石英・長石極少	良好	淡黄褐色	口縁外反強い。外～口縁内ナデで、口縁外ハケ、胴外横方向工具痕、口縁内ハケ残。胴内ハケ。	1／4		1659
30-8		住2覆土中部	五様式系甕	口径166、頸径132、胴径164、残高124	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	褐色	肩外タタキ後胴下部外縦ハケ。口縁内外ナデで、内に横ハケ残。胴内縦方向ケズリ。	2／3	外面煤付着。	1730-1
30-9		住2覆土中部	五様式系甕	口径168、残高49	粘土細、1～3mm石英少	良好	外淡褐灰色、内淡黄灰褐色	口縁内外ナデで、内に横ハケ残。胴外タタキ、胴内ケズリ。	口縁1／4、胴1／8		1680
30-10		住2覆土上部	五様式系甕	底径14、胴径196、残高176	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	胴外下部タタキ後、胴外縦ハケ。胴内ケズリで下部に指頭圧痕残。	2／3	30-8と同一の可能性あるが決定できず。下部外煤。	1730-2
30-11		住2覆土中部	在地径高杯口縁	口径204、残高28	粘土細、1mm石英・長石極少	やや甘い	橙褐色	外横ハケ後縦ハケ後縦ミガキ、内斜めハケ。	1／8	煤の付着、および破損後火を受け褐変	1812
30-12		住2覆土上部	在地径高杯杯底部	残高45	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外器表のあれ顕著。屈曲部外縦ハケ、杯底部外ケズリ。内斜めハケ後暗文ミガキ。	1／6	径、傾き不安	1815
30-13		住2覆土上部	外反口縁鉢	口径106、残高36	粘土細、1mm石英極少	良好	淡黄褐色	外横ミガキ、口縁内横ハケ、胴内ハケ？。	1／8	内外汚染のため褐変・黒変	1814
30-14		住2覆土中部	直口鉢	口径118、器高48	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	橙褐色	外下部ケズリ後外ミガキ、内疎ら横ミガキ。口縁端内外横ナデ。	1／4		1668
30-15		住2覆土最下部	脚付鉢鉢部	口径170、残高68	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	褐色	下部は接合面より剥離。口縁端内外横ナデ。胴部内外太めの粗いミガキ。	1／3		1660
30-16		住2床面下層	脚付鉢脚部	裾径78、残高18	粘土細、1mm石英極少	やや甘い、器肉黒変	橙褐色	外板ナデ後横ミガキ、内ナデ。	1／6		1809
30-17		住2床面下層	脚付鉢脚部	裾径96、残高11	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	橙褐色	内外摩滅。	1／6		1810
30-18		住2床面下層	山陰系鼓形器台	口径186、括部径76、残高65	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐白色	受部外縦ミガキ（摩滅）、受部内横ミガキ、括部内外ナデ。	1／3		1656
30-19		住2床面下層	小形器台	残高39	粘土粗、1mm石英極少	良好	橙褐色	0・5時の2個所半乾燥時穿孔残。外横ミガキ、内頂部ナデ、内下部ハケ。	上部は全周		1657
30-20		住2覆土下部	小形器台	裾径66、残高34	粘土細、1mm長石少	良好	橙褐色	1個所乾燥前穿孔残。外縦ハケ後横ミガキ、内板ナデ後一部ハケ。	1／4		1653
30-21		住2覆土上部	タコ壺	残高43	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐色	やや平底気味。外ハケ、内ナデ。	底全周		1663

ば、N－58°－Wに主軸を向けた長方形ないしは方形竪穴住居跡の北、西壁を検出したことになる。西壁の南端近くで屈曲が認められるため、これを住居隅とすれば、北壁・南壁の間は2.9m程に復元される。

北東壁と南床面を掘り過ぎたため、北東側の床面が若干、低くなっているが、本来は床面標高3.4m程である。西壁壁際の大形のピットＰ１の覆土は灰褐色細砂。

出土遺物（図版28、第32図、第14表）　１は頸部が直立し、口縁・頸部内面の暗文風のミガキが特徴的なもので、畿内系二重口縁壺と推測される。２・３は在地系甕口縁で、４は五様式系甕か。４は胴部外面をタタキ後板ナデで、胴部内面を板ナデで仕上げる。５は布留系甕で肩外に沈線波状文を巡らし、胴部外面のハケメ切合いが良好な状態で確認できる。

６・７は高杯杯部片で、６は屈曲部の稜・段は不明瞭であるが、在地系高杯杯部と考えられる。８は高杯脚柱部片で、裾の０・４・８時方向に乾燥前、粘土の比較的柔らかい時点で、穿孔を施す。９・10は高杯脚裾部片である。

11はタコ壺底部のような器形であるが、内面にハケメを施すことから、鉢と考えた。12は器壁が薄いもののミガキは施さない粗製直口鉢。13は精製小形器台と考えたが、上部の剥離痕は半球状に凹み、一般的な畿内系小形器台とは接合痕が異なる。14は陶質土器胴部片。

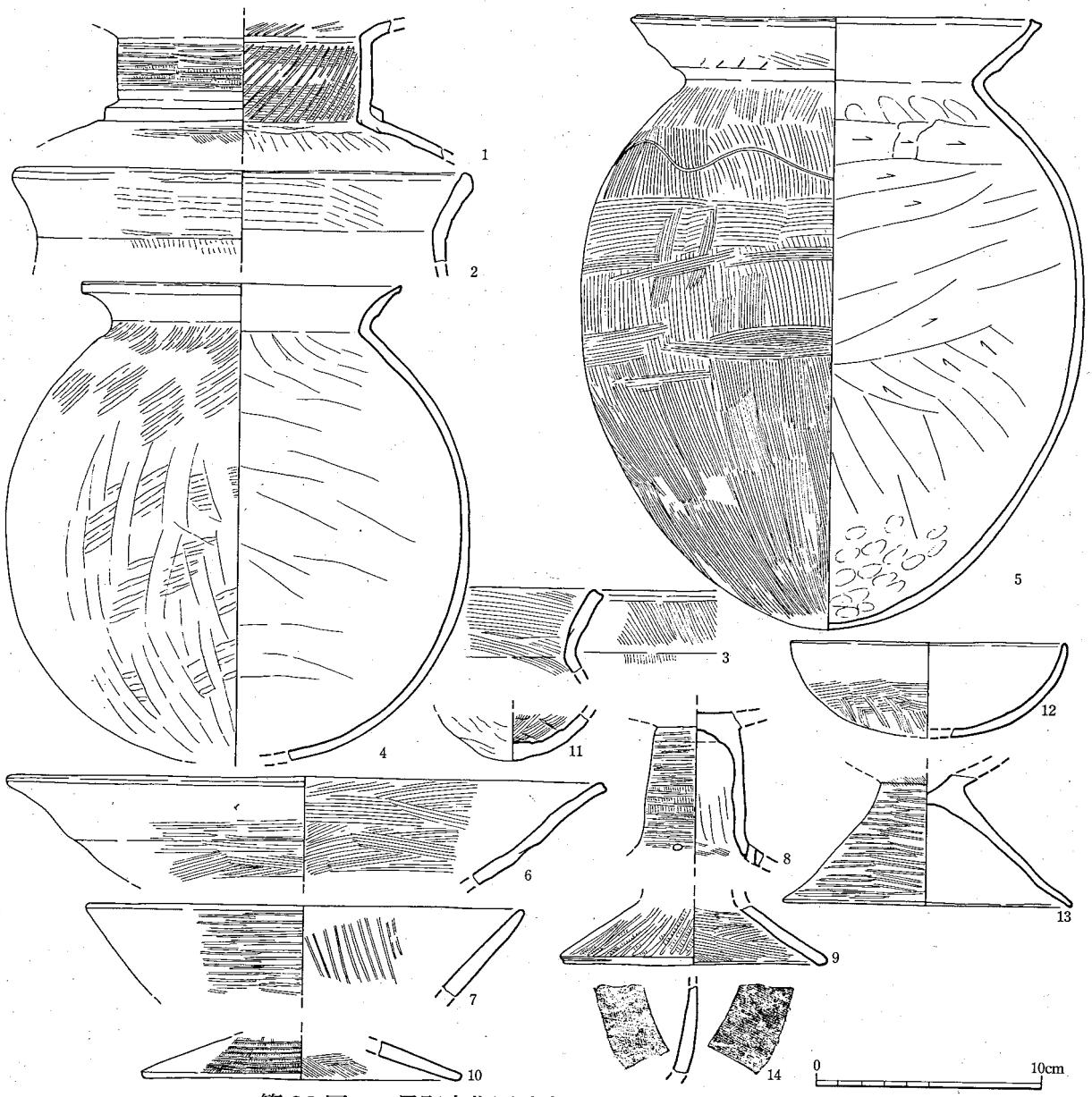
4号竪穴住居跡（図版11、第33図）

３区の東南部に位置する。覆土は灰褐色細砂で、西南隅付近、わずかに残る北壁のラインはほぼ確実であると思われるが、東は若干掘り過ぎたためか、輪郭は不明瞭であった。

住居跡東部を大きく撹乱に壊されるため平面形は歪になるが、ほぼ東西方向、N－73°－Eに主軸を向けた長方形竪穴住居跡と復元される。復元すると、東西4.3m、南北3.0～3.7mを測る。中

第13表　２号竪穴住居跡出土土器観察表（２）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
30-22		住２覆土上部	タコ壺	口径58、器高79	粘土粗、１～３mm石英・長石多	やや甘い	淡褐色～赤褐色	内外ナデ。	口縁２／３、底全周		1662
30-23		住２覆土	タコ壺	残高30	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外淡黄褐色、内灰褐色	やや平底気味。内外ナデであるが、かなり雑で凹凸顕著。	底全周。		1762
30-24		住２覆土上部	タコ壺	口径76、器高73	粘土細、１mm石英極少	良好	橙褐色	低く平底気味の器形。内外ナデ。	１／４		1664
30-25		住２覆土中部	タコ壺	残高74	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡褐色	器壁やや薄い。内外ナデ。	底全周		1674
30-26		住２覆土中部	タコ壺	口径47、器高95	粘土粗、１～３mm石英少	良好	外淡黄褐色、内黄白褐色	底に穿孔施す。内外ナデであるが、下部外工具の当たり条痕残。	１／４		1679
30-27		住２覆土中部	タコ壺	残高83	粘土粗、１～３mm石英少	良好	淡褐色	内外ナデ。	底全周		1675
31-28		住２覆土中部	タコ壺	口径56、器高78	粘土粗、１～３mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	１／４		1678
31-29	28	住２覆土中部	タコ壺	口径66、器高81	粘土細、１mm長石極少	良好	橙褐色	胴部強く張る。内外ナデ。	完形		1671
31-30	28	住２覆土中部	タコ壺	口径43、器高77	粘土細、１mm石英・長石極少	やや甘い	灰白褐色	外工具の条痕残。内外ナデ。	完形		1672
31-31		住２覆土中部	タコ壺	口径56、器高79	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	内外ナデ。	１／２	胎土、色調小形精製器種に近い。	1669
31-32		住２覆土	タコ壺	口径46、器高106	粘土細、１～３mm石英・角閃石少	良好	暗褐色	内外ナデ。	完形		628
31-33		住２覆土中部	タコ壺	口径54、器高82	粘土細、１mm長石極少	良好	暗褐色	内外ナデ。	１／２		1677
31-34	28	住２覆土中部	タコ壺	口径52、器高65	粘土細、１mm長石少	良好	暗褐色	内外ナデであるが、内下部は板ナデか。	１／２		1676
31-35	28	住２覆土中部	タコ壺	口径56、器高110	粘土粗、１～３mm石英少	良好	褐色	内外ナデ。	口縁３／４、胴全周		1673
31-36	27	住２覆土	タコ壺	口径44、器高113	粘土粗、１～３mm石英・長石多	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	口縁２／３、胴全周		1670
31-37		住２周辺遺構面	タコ壺	口径52、器高84	粘土粗、１～５mm石英少	良好	外淡褐黄色、内淡黄褐色	内外ナデ。	１／４		1654



第32図　3号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

央から東南部にかけて大きな撹乱があったが、P1は均質な灰色細砂、P2は暗褐色細砂を覆土としていた。

なお、東南部の撹乱から土師器が1箱ほどまとまって出土しており、本住居跡に伴うものと思われるのであわせてここで報告しておきたい。

出土遺物（図版28、第34図、第15表）　11～23は4号住居跡内の撹乱からまとまって出土したものであるが、4号住居跡に帰属すると考えてほぼ間違いないと思われる。

1は布留系甕、2・3は庄内系甕である。2は口縁端部をややつまみ上げ、胴内ケズリは頸部まで及ぶのに対して、3は口縁端部が丸く、ケズリも頸部まで及ばない。

4は杯底部と口縁の境に段をなすため高杯杯部と考えたが、脚部から直線的に外傾する点は特異である。5は口縁と底部の間が丸みを帯びることから、山陰系の高杯の可能性がある。6・7は高杯脚部片。6は0・6時の2方向に半乾燥時の穿孔を施し、7は0・3時の2方向に乾燥前穿孔を施す。

8は直口鉢で、やや口径が大きい。9・10はタコ壺。

11・12は小形丸底壺であるが、12はやや口径が大きい。13～20は山陰系二重口縁壺で、15・17・18・20は口縁内端が肥厚、突出する。20は口径が大きく、大形の二重口縁鉢となる可能性もある。22は布留系甕で口縁端をわずかに外につまみ出す。23は五様式系甕と推測されるもの。口縁部の屈曲が強く、胴外面には極めて粗いハケ、胴内面にはナデ後ハケ後ケズリを施す。

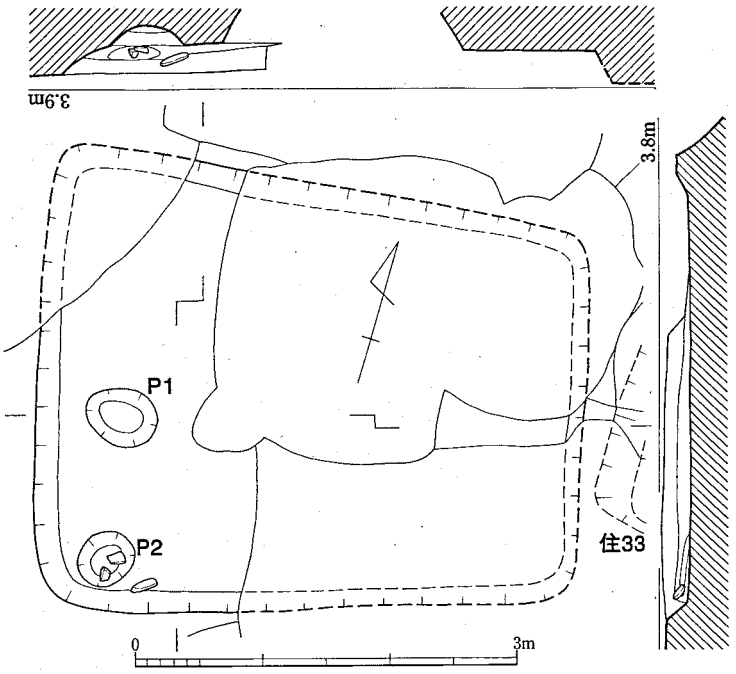
24・25は高杯脚部片で24は0・6時方向に半乾燥時穿孔を施す。

5号竪穴住居跡（図版11、第35図）

3区の東南部、38号竪穴住居跡の北に位置し、22号竪穴住居跡を切る。覆土は褐灰色細砂を主体としていた。

遺構検出当初、覆土上面に広がる土器が多量であったため、北東の22号住居跡の範囲も含めて、1基の住居跡と考えていた。少し掘り下げた後に、両者の切合いが判明したため、5号住居跡東北部・東部出土の遺物には本来、22号住居跡に帰属するものを含んでいる可能性が高い。

このような問題はあるが、平面形は明瞭であり、主軸を東西に向けた長さ4.6m前後、幅3.9m前後の長方



第33図　4号竪穴住居跡実測図（1／60）

第14表　3号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
32-1		住3覆土	畿内系二重口縁壺	頸径108、残高60	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	頸部直立。外縦ハケ後横ミガキ、口縁内暗文風斜めミガキ、頸部内横ハケ後暗文風斜めミガキ、胴内ナデ。頸部内に接合痕残。	1／2		1704
32-2		住3覆土上面	在地形甕口縁	口径192、残高39	粘土粗、1～3mm石英少	良好、口縁端外面黒斑	淡黄褐色	端部丸み帯びる。胴外縦ハケ、口縁外粗いタタキ、口縁内斜めハケ、胴内ナデ。	1／12		1687
32-3		住3覆土	在地形甕口縁	残高36	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好、口縁外面黒斑	淡黄褐色	外縦ハケ、内斜めハケ。口縁内に接合痕残。	小片		1822
32-4		住3覆土上部	五様式系甕	口径138、頸径112、胴径200、残高206	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い、内面黒変	黄褐色～褐黄色	口縁器壁薄く、端部はシャープ。胴部外タタキ後板ナデ、胴部内板ナデ。	口縁1／6、胴1／6	胴歪み大きく器形不安。	1684
32-5	28	住3覆土中層	布留系甕	口径172、頸径130、胴径218、器高265、胴高237	粘土細、1～3mm石英・長石多	良好、胴中部外面大黒斑	外淡黄灰褐色、内褐灰色	肩外に沈線波状文。口縁内外ナデ。胴外ハケは肩下縦粗い縦ハケ、胴中部粗い横ハケ、胴下部細かい縦ハケ、胴中下部細かい横ハケの順。	口縁1／3、胴1／3	外面煤、底近くの内面コゲ付着	1683
32-6		住3覆土	高杯杯部片	口径254、残高45	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い	淡橙褐色	屈曲部の稜・段不明瞭。外下部ハケ後一部横ミガキ。口縁外ナデ。内横斜めハケ。	1／8		1685
32-7		住3覆土最下部	高杯杯部片	口径186、残高38	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	内外器表はかなり荒れる。外横ミガキ、内暗文風の斜めミガキ。	1／12	径不安	1820
32-8		住3覆土中層	高杯脚柱部	残高63	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内淡橙褐色	裾0・4・8時方向に乾燥前穿孔。外縦ハケ後横ミガキ、脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	全周		1689
32-9		住3覆土最下部	高杯脚裾部片	裾径136、残高17	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好、器肉黒変	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	1／8		1705
32-10		住3覆土最下部	高杯脚裾部片	裾径110、残高25	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	脚端一部沈線状になる。外斜めハケ後、縦ミガキ。内斜めハケ。	1／3		1821
32-11		住3P1	鉢底部？	残高20	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡褐色、内淡褐黄色	外板ナデ？、内ハケ。	全周		1688
32-12		住3覆土	直口鉢	口径116、器高41	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫極少	やや甘い、口縁外黒変	黄白褐色	胴外下部ハケ、口縁外～内ナデ。	1／6		1686
32-13	28	住3覆土上部	小形器台	裾径124、残高56	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	褐色	上部の剥離痕は半球状に凹み特徴的。外ミガキ、括部外面縦ハケ残。内ナデ。	全周		1682
32-14		住3覆土上部	半島系土器胴部片			陶質	灰色	内外ナデで、外面は凹凸顕著。	小片		2329

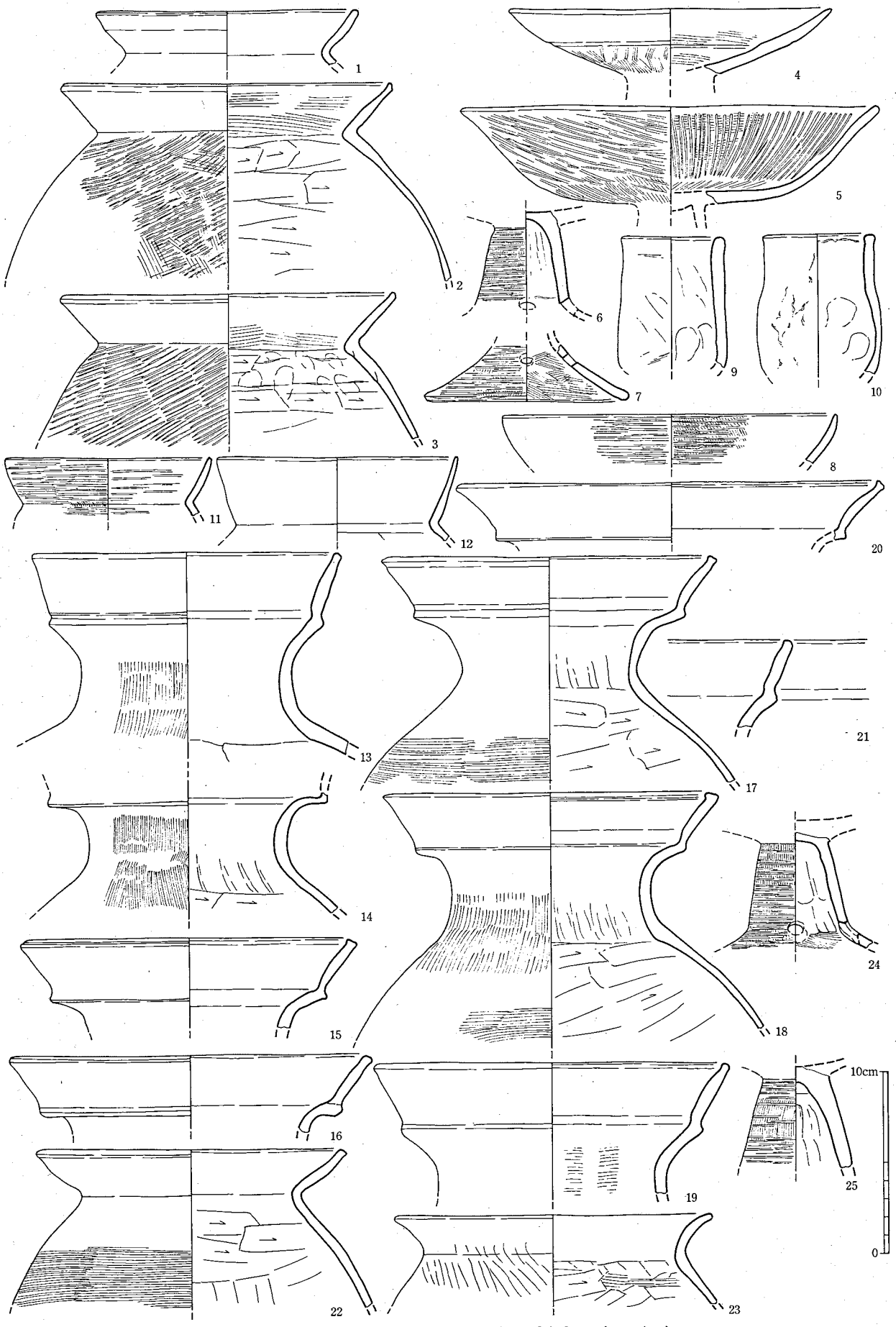
形に復元される。東側の住居跡壁に相当する箇所では壁は検出時の誤りにより、段が生じているが、遺存状況が比較的良好であり、床面からの高さ 0.2m 余り、東南部隅近くでは高さ 0.3m 前後を測る。

住居跡の南西部を中心にまとまった量の土器が出土している。また、住居跡の北東隅には撹乱により大きく壊されるが、カマドを設置していたことは確実である。

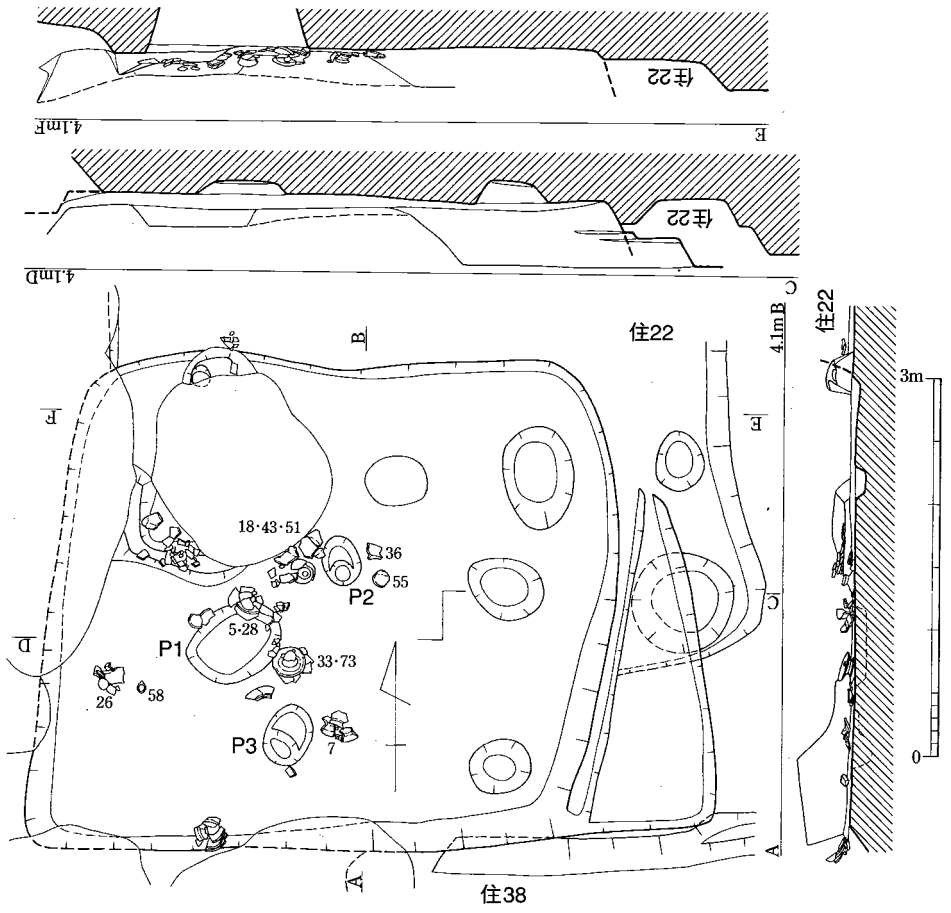
カマド（図版 11、第 36 図） 中央部を撹乱に壊されて、わずかに北壁沿い西壁推定線近くに屈曲する積土が残るのみである。西壁沿いではほぼ直角に屈曲する幅 0.3m、高さ 0.1m 程の積土が検出されている。この部分がカマドの袖と煙道の連接部と考えられ、この北東側に燃焼部が位置していたものの、撹乱により失われた可能性が高い。一方、北壁沿いには西壁から 1.0m 程離れたところに半円形にカマド積土が遺存していた。そのやや西寄りには褐色粘質土が平面円形、断面逆台形に堆積しており、煙道の立ち上がり部となる可能性が高い。したがって、煙道は袖との連接部から

第 15 表　4 号竪穴住居跡出土土器観察表

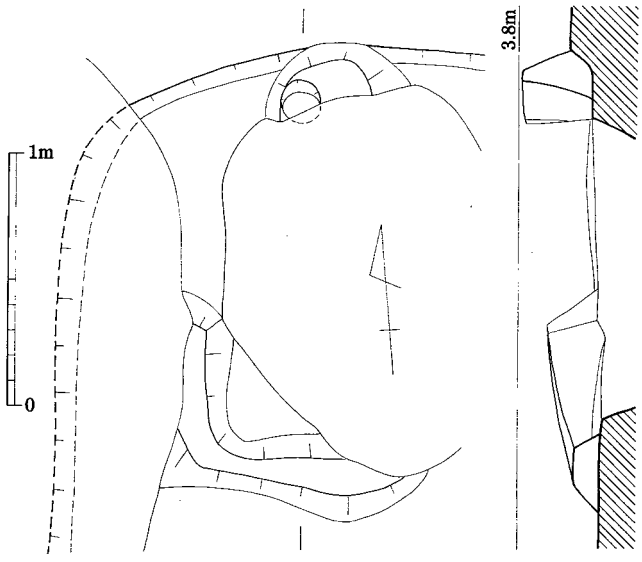
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
34-1		住 4 覆土西部	布留系甕	口径 134、残高 30	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	やや甘い	淡褐黄色	内外ナデ。	1／8		312
34-2		住 4 覆土西部	庄内系甕	口径 176、残高 106	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	淡褐色	口縁端部ややつまみ上げ、胴内ケズリは頸部まで及ぶ。胴外右上がり細かいタタキ後疎らなハケ。口縁外ナデ、口縁内横ハケ。	口縁 1／4、胴 1／2		310
34-3		住 4 床面	庄内系甕	口径 176、残高 79	粘土細、1 ～ 3 mm 石英少	良好	淡黄褐色	口縁端部は丸く、ケズリも頸部まで及ばず。胴外右上がり細かいタタキ、口縁内横ハケ後口縁内外ナデ、頸内指頭圧痕後胴内ケズリ。頸内に接合痕残。	1／4	内外褐変個所あり。口縁外面煤付着。胎土・色調在地土器と共通。	318
34-4	28	住 4 覆土上面	高杯杯部？	口径 170、残高 35	粘土細、1 ～ 3 mm 石英・長石少	良好	明褐色	杯底部と口縁の境に段をなすが、脚部から直線的に外傾。口縁内外ナデ、杯底部内外ハケ。	1／3		314
34-5		住 4 覆土西部	高杯杯部	口径 220、残高 52	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英極少	良好	外黄灰褐色、内淡褐色	外下部ハケ後斜めミガキ、内横ハケ後縦ミガキ。	1／4	山陰系高杯？	313
34-6		住 4 覆土西部	高杯脚柱部	残高 50	粘土細、1 mm 石英・長石極少	やや甘い	淡橙褐色	0・6 時の 2 方向に半乾燥時穿孔。外縦ハケ後横ミガキ、内ナデ。	全周		315
34-7		住 4 覆土西部	高杯脚裾部片	裾径 108、残高 30	粘土細、1 mm 長石極少	良好	褐色	0・3 時の 2 方向に乾燥前穿孔残。縦ハケ後横ミガキ。内ハケ。	1／6		314
34-8		住 4 P 2	直口鉢	口径 178、残高 28	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好、口縁端黒変	外橙褐色、内黄褐色	口径大きい。外ミガキ、内斜めハケ後横ミガキ。	1／8		567
34-9		住 4 覆土東部	タコ壺	口径 46、残高 71	粘土粗、1 mm 石英少	良好	橙褐色	内外ナデ、下部外工具痕残。	1／4		316
34-10		住 4 覆土東部	タコ壺	口径 46、残高 75	粘土粗、1 mm 石英少	良好	淡橙褐色	口縁端粘土巻き込む。内外ナデで、外に皺あり。	1／4		317
34-11		住 4 内撹乱	小形丸底壺	口径 106、残高 31	粘土細、1 mm 長石極少	良好	橙褐色	頸外縦ハケ後外ミガキ。内疎らミガキ。	1／6		304
34-12		住 4 内撹乱	小形丸底壺	口径 128、残高 46	粘土粗、1 mm 石英少	やや甘い、器肉黒変	淡黄褐色	口径やや大きい。内ナデ、外摩滅。	1／6		305
34-13		住 4 内撹乱	山陰系二重口縁壺	口径 162、残高 108	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・クサリ礫少	やや甘い	白褐色	口縁内外～頸部内ナデ、胴内ケズリ、頸部外縦ハケ。	1／8		301
34-14		住 4 内撹乱	山陰系二重口縁壺	残高 65	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	外淡黄白褐色、内褐白色	頸部外縦ハケ、頸部内ナデで絞り痕残、胴内ケズリ。	1／4		302
34-15		住 4 内撹乱	山陰系二重口縁壺	口径 170、残高 49	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英多	良好	外黄白褐色、内淡黄褐色	口縁端わずかに凹む。内外ナデ。	1／6		564
34-16		住 4 内撹乱	山陰系二重口縁壺	口径 186、残高 42	粘土粗、1 mm 石英少	良好	褐白色	内外ナデ。	1／4		303
34-17		住 4 内撹乱	山陰系二重口縁壺	口径 172、残高 122	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	内淡褐色、外淡黄橙褐色	口縁端をわずかにつまみ出す。口縁・頸部内外ナデで、頸部内に絞り痕残。胴外横ハケ、胴内ケズリ。	1／6		300
34-18	28	住 4 内撹乱	山陰系二重口縁壺	口径 170、残高 133	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英多	良好	淡褐色～淡黄褐色	口縁内端肥厚顕著。口縁内外ナデ、頸部内絞り痕、頸部外縦ハケ、胴部外横ハケ、胴部内ケズリ。	口縁 3／4、胴 1／2		298
34-19		住 4 内撹乱	山陰系二重口縁壺	口径 186、残高 70	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	やや甘い、口縁外黒斑	淡黄白褐色	外～口縁内ナデ、頸部内ハケ後ナデ。	1／8		306
34-20		住 4 内撹乱	山陰系二重口縁壺	口径 224、残高 31	粘土粗、1 mm 長石・石英多	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／6		566
34-21		住 4 内撹乱	山陰系二重口縁壺	残高 49	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英多	良好、口縁端外面黒斑	外淡黄灰褐色、内淡褐色	内外ナデ。	小片		565
34-22		住 4 内撹乱	布留系甕	口径 150、残高 86	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好、口縁・胴外黒斑	外黄褐色、内褐色	口縁端外にわずかにつまみ出す。口縁内外ナデ、胴外横ハケ、胴内ケズリ。	口縁 1／8、胴 1／6		299
34-23		住 4 内撹乱	五様式系甕	口径 166、残高 49	粘土粗、1 mm 長石・石英・クサリ礫多	良好	外淡黄褐色、内灰黄褐色	口縁部の屈曲が強く、胴外極めて粗いハケ、胴内ナデ後ハケ後ケズリか。	1／6		307
34-24		住 4 内撹乱	高杯脚柱部	残高 61	粘土細、1 mm 石英・長石極少	良好	橙褐色	0・6 時方向半乾燥時穿孔。外縦ハケ後横ミガキ、脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	全周		309
34-25		住 4 内撹乱	高杯脚柱部	残高 54	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内ナデ。	1／2		308



第34図　4号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）



第 35 図　5 号竪穴住居跡実測図（1／60）



第 36 図　5 号竪穴住居跡カマド実測図
（1／30）

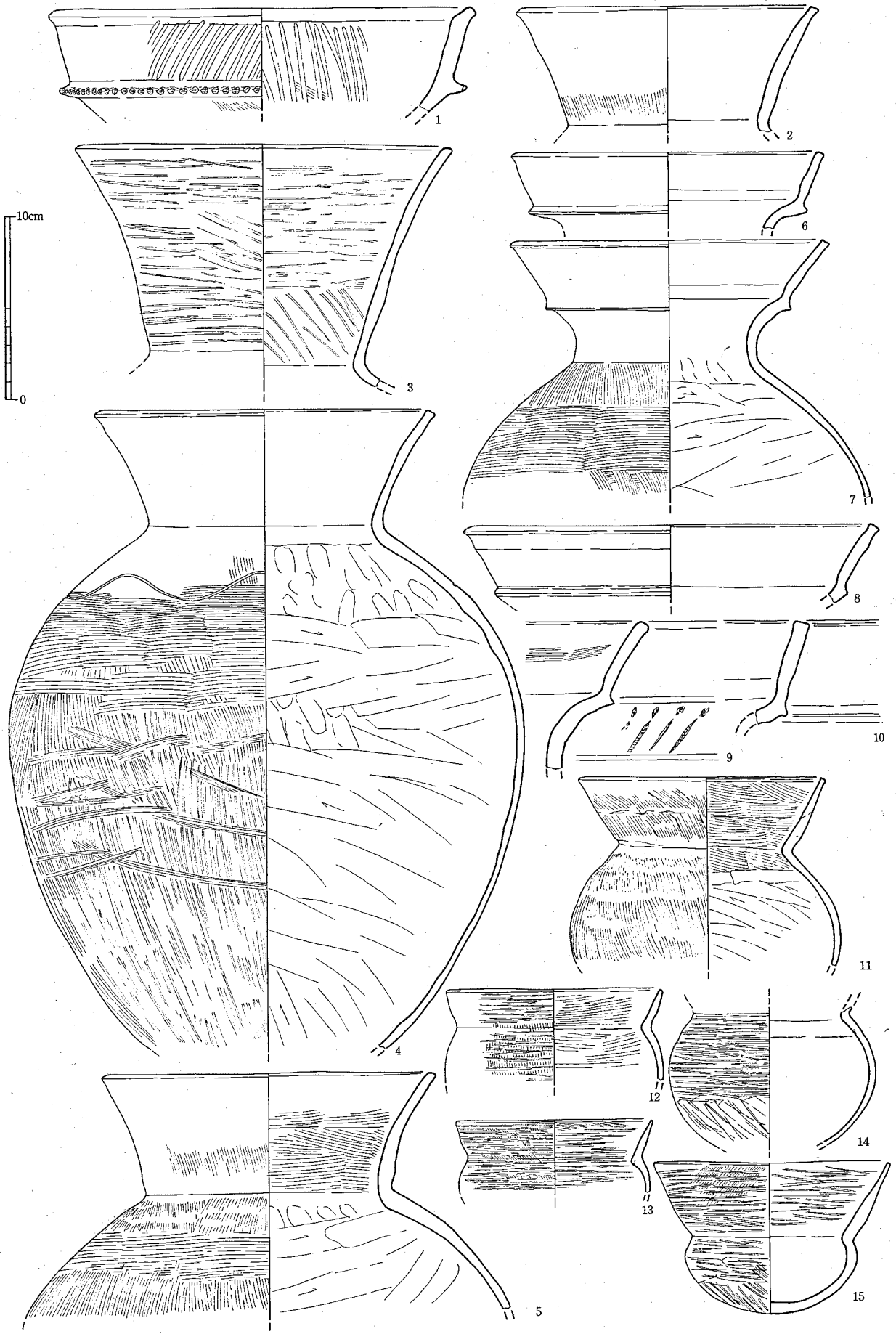
北に 1.3m 程伸びていたと推測される。カマドの積土は厚さ 1 ～ 5 cm の灰白色細砂と厚さ 0.2 ～ 0.5cm の暗褐色粘質土の互層となる。

カマド南側、カマド袖と推測される積土の上面からは図示できないものの土師器甕胴部片が出土した。

出土土器（図版 28 ～ 30、第 37 ～ 44 図、第 16 ～ 20 表）　1 は在地系複合口縁壺で、屈曲部が突帯状に突出し、端部にハケメ工具による刻目を施す。2 ～ 5 は畿内系直口壺。3 は内外に疎らにミガキを施す珍しい例である。4 は肩外面に沈線の波状文を施し、胴下部外面は板工具によるナデか、ハケメか区別できない調整である。

6 ～ 10 は山陰系二重口縁壺で、9 は頸部外面にハケメ工具刺突文と沈線文を巡らす。11 は中形の直口壺で、口縁内外に接合痕が残る。12 ～ 16 は小形丸底壺。

17 は庄内系甕か。18 は口縁がやや長く伸び、口縁内外にハケメを残した甕。



第37図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

19 ～ 42 は布留系甕。21・42 は肩部に沈線波状文、36 は肩部に沈線直線文を施文する。26・35・36・41 は口縁・胴部に粗いタタキ痕が残り、37 はハケメの及ばない範囲に水平にタタキ痕が残る。43・44 は甕底部。

45・46 は高杯杯口縁部片、47 ～ 49 は高杯脚部片で、49 は 0・4・8 時方向に乾燥前に穿孔を施す。

50 は外面の縦ミガキが特徴的なもので、山陰系二重口縁大形鉢口縁部か。51 は大きめの平底をなすことから、山陰系二重口縁大形鉢底部片である。52 は大形の外反口縁鉢の口縁部か。53 ～ 57 は直口鉢である。53・54・57 は内外ミガキ仕上げの精製品で、55 内面にも縦ミガキを施す。57 は安定した平底、58 は片口状の口縁をなす。59 は底部高台状になり、例の少ない器径であるが、鉢と考えた。60 ～ 65 は外反口縁鉢で、60 ～ 64 はミガキ仕上げの精製品、65 はミガキを施さない粗製品で、口縁形態は甕に類似する。66・67 は精製の脚付鉢脚部。66 は内面にミガキを施し、67 は内中央部をケズリによって半球状に凹ませる。

68 は在地系器台の裾と考えたが、天地は不安である。69 ～ 71 は小形器台の脚裾部片としたが、69 は天地が逆となる可能性もある。70・71 は受部に底を形成しない。

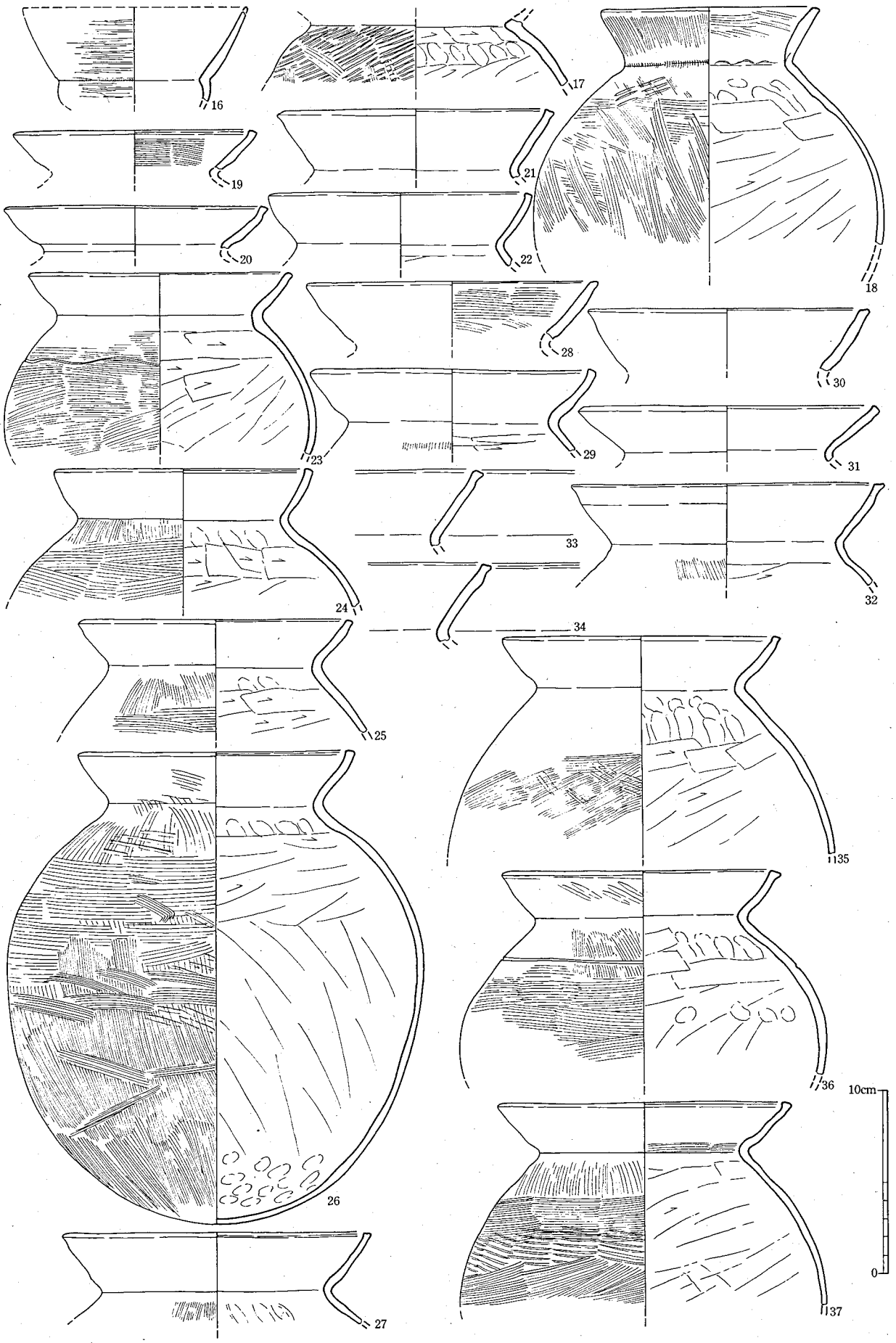
72・73 は山陰系鼓形器台で、73 は特に大形の部類に属する。

74 ～ 81 は半島系土器。74 は器壁が厚く大形の陶質土器甕の口縁部であるが、同一個体と思われる胴部片が、本住居跡のほかに、1 号住居跡上面、7 号住居跡、33 号住居跡、38 号住居跡からも出土している（図版 51）。また、76 は同一個体と思われる破片が、本住居跡の外に 17 号住居跡、20 号住居跡、38 号住居跡からも出土している。82 ～ 84 はタコ壺である。

覆土の東部、北部から出土品として取り上げた 85 ～ 138（第 41 ～ 43 図）は、22 号住居跡に帰属するものが混入する可能性がある。

第 16 表　5 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

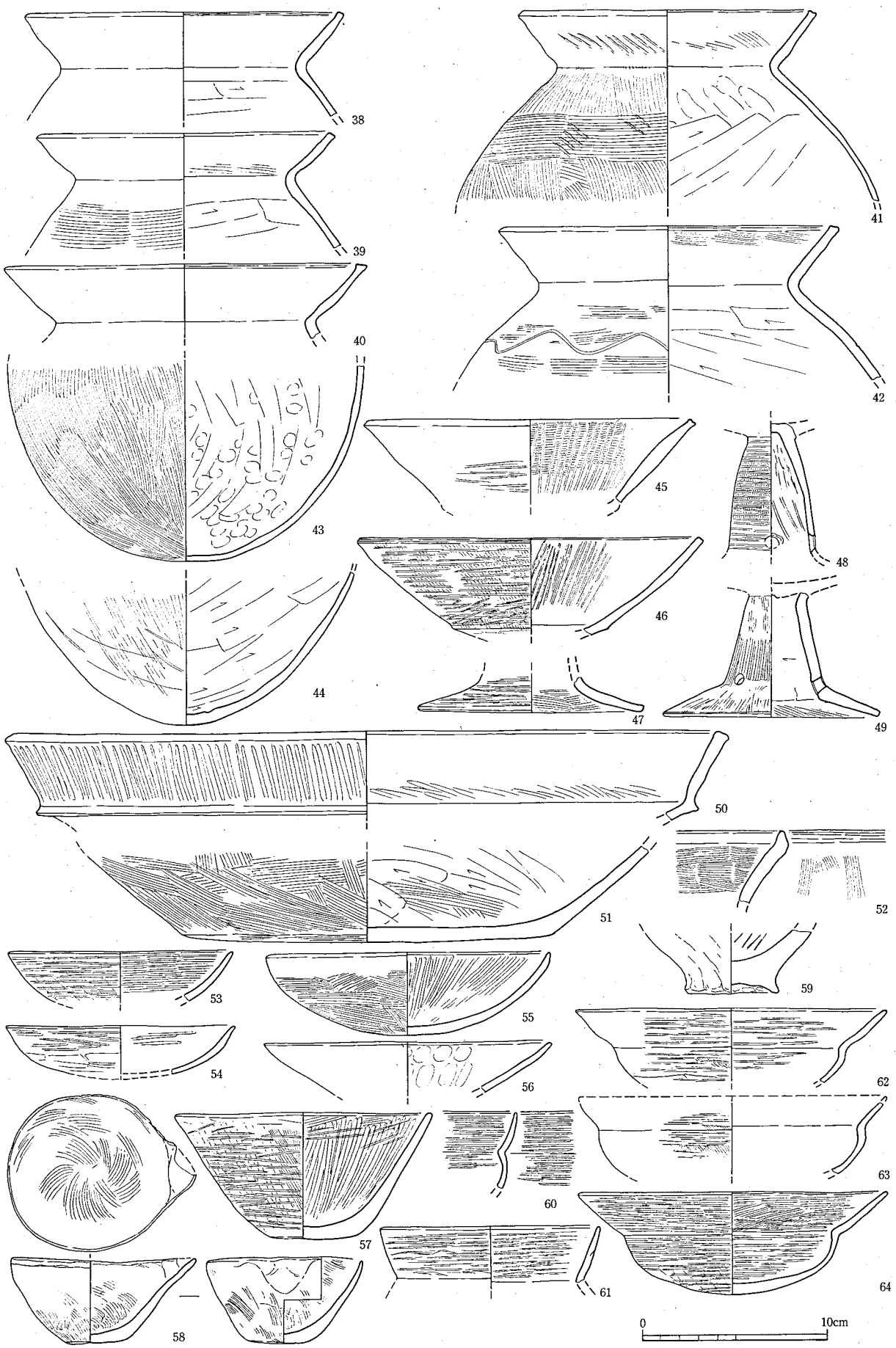
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
37-1		住 5 覆土西部	在地系複合口縁壺	口径 220、残高 55	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	褐黄色	口縁部外反、屈曲部突帯状に突出し、端部にハケメ工具による刻目。口縁外ミガキ暗文、内ミガキ暗文、頸部外ハケ。	1／12		386
37-2		住 5 覆土西部	直口壺	口径 154、残高 67	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・長石少	良好	外褐黄色、内淡褐色	頸外縦ハケ後口縁内外ナデ。	1／8		387
37-3		住 5 覆土	直口壺	口径 192、残高 130	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	甘い、外面 1／4 黒斑	淡黄褐色	内外疎らにミガキ。	ほぼ全周		375
37-4	28	住 5 覆土西部下部	直口壺	口径 172、頸径 126、胴径 176、残高 290	粘土粗、1 ～ 5 mm 石英少	良好	淡黄褐色	肩外沈線波状文。胴下部外は板工具によるナデか、ハケメか区別できない調整。口縁内外横ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／2		429
37-5	28	住 5 no.10	直口壺	口径 172、頸径 130、残高 125	粘土細、1 ～ 3 mm 石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	胴外は頸下縦ハケ、肩横ハケ、胴中部縦ハケの順。口縁外縦ハケ、口縁内横斜めハケ後口縁内外ナデ。	1／3	二次的に火を受けたためか内外煤付着	268
37-6		住 5 覆土西部	山陰系二重口縁壺	口径 158、残高 40	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・クサリ礫少	やや甘い	白褐色	内外ナデ。	1／8		384
37-7	28	住 5 no.12	山陰系二重口縁壺	口径 166、残高 137	粘土細、1 ～ 3 mm 石英少	良好	淡黄褐色	胴外ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	5／6		336
37-8		住 5 覆土	山陰系二重口縁壺	口径 210、残高 42	粘土粗、1 mm 石英・金雲母少	良好	淡黄褐色	内外ナデで、屈曲部外は強いナデにより段をなす。	1／8		509
37-9		住 5 カマド周辺	山陰系二重口縁壺	残高 88	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	淡褐色	頸部外面にハケメ工具刺突文と沈線文。口縁内ハケ後内外ナデ。	小片		2083
37-10		住 5 覆土	山陰系二重口縁壺	残高 55	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英多	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	小片	大形二重口縁鉢の可能性あり	508
37-11	28	住 5 覆土西部	中形直口壺	口径 122、頸径 90、胴径 140、残高 101	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	黄褐色	外縦・斜めハケ。口縁～頸内横斜めハケ後胴内ケズリ。	口縁ほぼ全周、胴 2／3		376
37-12		住 5 覆土	小形丸底壺	口径 112、残高 49	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴外縦ハケ後外横ミガキ。内ハケは口縁部と胴部で工具異なる。	1／8		413
37-13		住 5 覆土西部	小形丸底壺	口径 112、残高 39	粘土細、1 mm 石英・長石少	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内横ミガキで、頸部内に接合痕残。	1／6		379
37-14	28	住 5 覆土西部	小形丸底壺	残高 73	粘土細、1 ～ 3 mm 石英少	良好	橙褐色	外下部ケズリ後ミガキ、内ナデで頸部内に接合痕残。	1／4	一部破片は破損後火を受け煤付着	377
37-15	28	住 5 覆土	小形丸底壺	口径 126、頸径 88、胴径 92、器高 81、胴高 40	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・長石少	やや甘い	橙褐色	胴下部外ケズリ、口縁外斜めハケ後外横ミガキ。口縁内横ミガキ、胴内摩滅。	ほぼ完形		410



第38図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

第17表　5号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

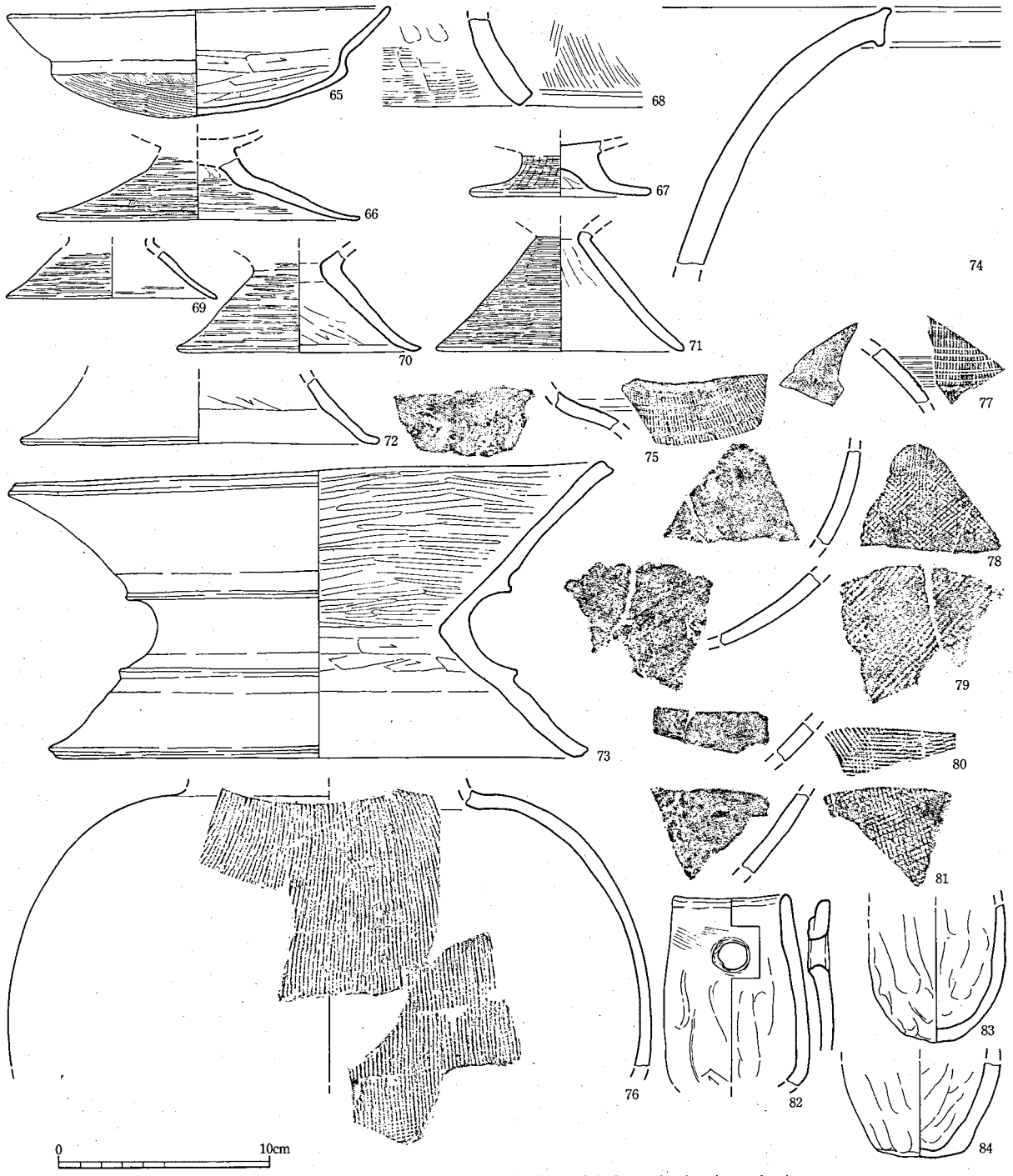
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
38-16		住5覆土西部	小形丸底壺	残高48	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴下部外ケズリ、頸部外縦ハケ後外横ミガキ。内摩滅。	1／8		515
38-17		住5覆土西部	庄内系甕？	残高36	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外灰褐色、内淡黄灰褐色	外右上がりタタキ後斜めハケ。内指頭圧痕後ケズリ。	1／4		426
38-18	28	住5no.9	五様式系甕？	口径114、頸径90、胴径186、残高127	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内黄褐色	口縁外縦ハケ、口縁内横ハケ。胴部横ハケ後縦ハケで、一部粗いタタキ残。胴内ケズリ。	全周	頸部以外の外面に煤付着	333
38-19		住5覆土	布留系甕	口径124、残高21	粘土粗、1mm石英極少	良好	淡褐白色	口縁内につまみ出し。口縁内ハケ、外ナデ。	1／8	外煤付着	510
38-20		住5覆土西部	布留系甕	口径132、残高23	粘土粗、1mm長石少	良好	褐灰色	内外ナデ。	1／8		517
38-21		住5覆土西部下部	布留系甕	口径138、残高37	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外淡黄白褐色、内淡黄褐色	内外ナデ。	1／8		526
38-22		住5覆土西部	布留系甕	口径132、残高39	粘土粗、1mm長石・金雲母少	良好	淡黄褐色	口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8		525
38-23	29	住5西部床面	布留系甕	口径134、頸径110、胴径166、残高98	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外淡黄褐色、内淡褐色	肩部に振幅の小さい沈線波状文。口縁内外ナデ、胴外ハケ、胴内ケズリ。	1／2		394
38-24		住5覆土西部下部	布留系甕	口径130、残高75	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い、内面一部灰変	淡黄灰褐色	外ハケ、口縁内外ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／6		397
38-25		住5カマド周辺	布留系甕	口径140、残高59	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い、内面黒変	淡黄褐色	内外ナデ、胴外ハケ、胴内ケズリ。	口縁1／4、胴1／8		420・405
38-26	29	住5no.17	布留系甕	口径142、頸径114、胴径222、器高252、胴高222	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	やや甘い	淡黄褐色～黄白褐色	胴外ハケは頸部下縦ハケ、胴肩部横ハケ、胴下部細かい縦ハケの順。胴・口縁外の一部にハケ前のタタキ残。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁3／4、胴2／3		341
38-27		住5覆土西部	布留系甕	口径154、残高49	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄白褐色	胴外縦ハケ、口縁内外ナデ、胴内絞り痕残。	1／4		383
38-28		住5no.10	布留系甕	口径144、残高32	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	外黄白褐色、内淡黄褐色	口縁端を外につまみ出し、器壁がやや厚い。外ナデ、内横ハケ。	1／8		561
38-29		住5覆土西部下部	布留系甕	口径146、残高44	粘土細、1～3mm石英少	良好、口縁端黒斑	褐色	胴外ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／8		524
38-30		住5覆土	布留系甕	口径142、残高34	粘土粗	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／8		507
38-31		住5床面	布留系甕	口径154、残高30	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡灰白褐色、内淡黄褐色	内外ナデ。	1／6		556
38-32		住5覆土西部下部	布留系甕	口径174、残高56	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐黄色	口縁端わずかに凹み、端部を外につまみ出す。内外ナデ。	1／8		523
38-33		住5no.11	布留系甕	残高42	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	小片		562
38-34		住5覆土西部下部	布留系甕	残高42	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	小片		527
38-35	29	住5覆土	布留系甕	口径126、残高117	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄白褐色	口縁内外ナデ、胴外タタキ後斜めハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	口縁1／2、胴1／3		411
38-36	29	住5no.7	布留系甕	口径138、頸径112、胴径196、残高110	粘土細、1～3mm石英・長石多	やや甘い	淡褐黄色	口縁端外につまみ出し。肩部沈線文巡る。口縁外タタキ残。口縁内外ナデ、胴外ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	口縁3／4、胴2／3		330
38-37		住5覆土西部下部	布留系甕	口径146、頸径112、胴径196、残高108	粘土細、1～3mm石英少	良好、口縁内面黒変	淡褐色	口縁端内につまみ出し。胴部はタタキ後、頸下縦ハケ、肩横ハケ・胴下部斜めハケの順。頸部内ハケ後、口縁内外横ナデ。	1／3	胴外面煤付着	398
39-38		住5カマド周辺	布留系甕	口径162、残高55	粘土粗、1mm石英極少	やや甘い	淡黄褐色	胴外、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8		550
39-39		住5覆土西部	布留系甕	口径150、残高62	粘土細、1～3mm石英少	良好	褐灰色	外横ハケ、口縁内横ハケ後内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁1／4、胴1／6		396
39-40		住5カマド周辺	布留系甕	口径182、残高40	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	黄白褐色	内外ナデ。	1／8		553
39-41		住5覆土西部下部	布留系甕	口径148、残高101	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端内につまみ出し。口縁外タタキ、内ハケ後口縁内外ナデ。胴外はタタキ、頸下縦ハケ、肩横ハケ、胴下部縦ハケの順。	口縁1／2、胴1／4		395・399
39-42	28	住5カマド周辺	布留系甕	口径172、残高83	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い、内面黒変	外淡黄褐色、内暗灰黄褐色	胴肩沈線波状文。口縁内横ハケ後口縁内外ナデ。胴外横ハケ、胴内ケズリ。	口縁1／4、胴1／3		339
39-43		住5no.9	甕底部	残高103	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡褐色	外ハケ、内指頭圧痕後ケズリ。	1／2	胴外面煤付着	332
39-44		住5覆土西部下部	甕底部	残高81	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外褐灰黄色、内黄褐色	外ハケ後方向不定のナデ、内ケズリ。	全周	外煤付着	401
39-45		住5覆土	高杯杯部片	口径150、残高43	粘土細、1mm長石少	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内横ハケ後暗文風縦ミガキ。	1／8		414
39-46		住5覆土西部	高杯杯部片	口径176、残高51	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡黄橙褐色	外斜めハケ後横ミガキで、杯下部にハケメ工具静止痕残。内暗文風縦ミガキ（摩滅）。	1／8		398
39-47		住5覆土西部	高杯脚部片	裾径118、残高20	粘土細、1mm石英極少	良好	淡黄橙褐色	外横ミガキ、内横ハケ。	1／6		393
39-48		住5覆土西部	高杯脚部片	残高69	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	1個所穿孔残。外縦ハケ後横ミガキ、内上部絞り痕、内下部ハケメ工具痕残。	1／2		391
39-49	29	住5no.15	高杯脚部片	裾径110、残高65	粘土粗、1mm石英・クサリ礫少	良好	淡褐黄色	外縦ハケ、脚柱内ケズリ、脚裾内斜めハケ。	全周		340



第39図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）

第18表　5号竪穴住居跡出土土器観察表（3）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
39-50		住5覆土	山陰系大形鉢口縁	口径372、残高46	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐色	外縦ミガキ、内ハケ後横ナデ。	1／6		415
39-51		住5no.9	山陰系大形鉢底部	底径190、残高51	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡褐白色、内淡黄褐色	外ハケ、内ハケ後ケズリ。底外面は摩滅。	2／3		334
39-52		住5覆土	鉢口縁	残高39	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	外縦ハケ、内横ハケ、口縁端外強い横ナデによる条痕。	小片		511
39-53		住5覆土西部	直口鉢	口径116、残高26	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外下部ケズリ後内外横ミガキ。	1／6		381
39-54		住5覆土西部	直口鉢	口径118、残高25	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	明褐色	外下部ケズリ後内外横ミガキ（摩滅）。	1／8		518
39-55	29	住5no.8	直口鉢	口径146、器高44	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い	淡黄褐色	外ハケ、口縁端内外ナデ、内縦ミガキ。	3／4		331
39-56		住5カマド周辺	直口鉢	口径146、残高27	粘土細、1～3mm石英極少	良好、黒斑あり	淡灰褐色、内黄白褐色	内指頭圧痕、外摩滅。	1／8		552
39-57	29	住5覆土	直口鉢	口径134、器高66、底径44	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	底部安定した平底をなし、口縁部は直線的に立ち上がる。外ハケないしは板ナデ後横ミガキ、内縦ミガキ後横ミガキ。口縁端内ハケ残。	完形		409
39-58	29	住5no.14	直口鉢	口径98×83、器高45	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ハケで、内面は放射状にハケを施す。片口部ナデ。	ほぼ完形		337
39-59		住5覆土西部	鉢底部？	底径46、残高33	粘土細、1～5mm石英多	やや甘い	外淡灰褐色、内褐白色	底部高台状になり、内外粗いナデ仕上げ。	3／4		389
39-60		住5覆土西部	外反口縁鉢	残高41	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	内外横ミガキ。	小片		516
39-61		住5覆土西部	外反口縁鉢	口径112、残高29	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	内外ミガキ。外に接合痕と見られる蛇行する皺あり。	1／6		380
39-62		住5覆土西部	外反口縁鉢	口径162、残高39	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄橙褐色	胴外下部ケズリ後、胴外上部ハケ後内外ミガキ。	1／6		378
39-63		住5覆土西部	外反口縁鉢	残高38	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外黄褐色、内淡橙褐色	外ハケ後横ミガキ、内摩滅。	1／8		520
39-64	29	住5覆土西部	外反口縁鉢	口径162、器高53	粘土細、1～3mm石英極少	良好	外橙褐色、内黄橙褐色	外下部ケズリ後横ミガキ。口縁内横ハケ、胴内横ミガキ。	1／2		400
40-65	29	住5床面	外反口縁鉢	口径176、器高	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁形態は甕に類似。口縁内外ナデ、胴外ハケ、胴内ケズリ。	2／3		421
40-66		住5覆土西部	脚付鉢脚部	裾径146、残高29	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	黄橙褐色	外斜めハケ後、内外ミガキ、内頂部近くナデ。	1／4		403
40-67		住5覆土西部	脚付鉢脚部	裾径80、残高25	粘土細、1mm石英・長石少	良好	橙褐色	外縦方向の稜あり、板ナデ後横ミガキか。裾内ナデ、脚内中央部半球状にケズリ。	脚柱全周、裾1／8		392
40-68		住5覆土	在地系器台裾？	残高41	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外灰黄褐色、内褐白色	外縦・斜めハケ、内下部横ハケ、上部ナデ。	小片		412
40-69		住5覆土西部	小形器台	裾径116、残高23	粘土細、1mm長石極少	良好	橙褐色	天地不安。外ミガキ、内ナデで一部ミガキ。	1／6		382
40-70	29	住5覆土西部下部	小形器台	裾径106、括部径38、残高47	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色	受部底なし。外横ミガキ。括部内摩滅、裾内ケズリ後ナデ。	全周		402
40-71	29	住5no.11	小形器台	裾径140、括部径36、残高55	粘土細、1mm長石極少	良好	橙褐色	受部底なし。外横ミガキ。裾上部内ケズリ後ナデ、下部内横ナデ。	2／3		335
40-72		住5覆土	山陰系鼓形器台	裾径162、残高31	粘土粗、1～3mm石英少	良好、端部灰変	外淡褐黄色、内淡褐灰色	外～裾内横ナデ、裾内ケズリ。	1／6		385
40-73	29	住5no.1・11	山陰系鼓形器台	裾径242、括部径145、口径272	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	大形品。口縁端・裾端ナデで凹む。外ナデ、受部内横ミガキ、括部下内ケズリ、裾内横ナデ。	ほぼ完形	口縁内面灰褐変。	319
40-74		住5覆土	半島系土器大甕片	残高120		陶質、内に自然釉付着	灰色	口縁端上下に拡張。内外ナデで内面は水平方向に凹凸顕著。	小片	同一個体破片が住1・7・33・38からも出土。	
40-75		住5P1	半島系土器壺肩部	残高18		瓦質	灰黄色	外平行タタキ後極細沈線、内ナデで凹凸顕著。	小片		2331
40-76		住5覆土下部	半島系土器壺肩部			陶質、堅緻	外黒灰色、内暗茶褐色	外縄席文タタキ、内ナデ。	1／6	歪みあり、径、傾き不安	2425
40-77		住5P2	半島系土器胴部片			陶質	灰黄色	外平行タタキ後沈線、内ナデ。	小片	同一個体破片が住17・20・38からも出土。	2333
40-78		住5覆土西部	半島系土器胴部片			瓦質、やや甘い	灰黄褐色	外上部平行タタキ、外下部格子タタキ、内凹凸顕著なナデ。	小片		2334
40-79		住5覆土上面	半島系土器胴部片			瓦質、やや甘い	黄灰色	外格子タタキ、内ナデ（内外摩滅）。	小片		2421
40-80		住5覆土西部	半島系土器胴部片			瓦質	灰褐色	外平行タタキ？、縄席文タタキ？。内ナデ。	小片		2335
40-81		住5覆土西部	半島系土器胴部片			瓦質、やや甘い	黄灰色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2336
40-82	29	住5覆土	タコ壺	口径46、残高89	粘土粗、1～5mm石英多	良好	褐色	外ナデで、上部にハケ残。内ナデ。	全周		416
40-83		住5覆土	タコ壺	残高64	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好、外面黒斑	淡黄褐色	内外ナデ。	全周		417
40-84		住5覆土	タコ壺	残高44	粘土細、1～3mm石英多	良好、外底黒斑	外橙黄褐色、内褐赤色	内外ナデ。	1／2		390
41-85	29	住5覆土東北部	大形直口壺	口径187、頸径145、残高228	粘土粗、1～3mm石英多	良好	褐色	頸部に低い突帯を貼付し、ハケメ工具刻目施文。胴部外ハケ後頸部下外疎らなミガキ。口縁外縦ハケ、口縁内ハケ後上端近く横ミガキ。胴内縦ハケで、接合痕残。	口縁1／2、胴全周		398



第 40 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）

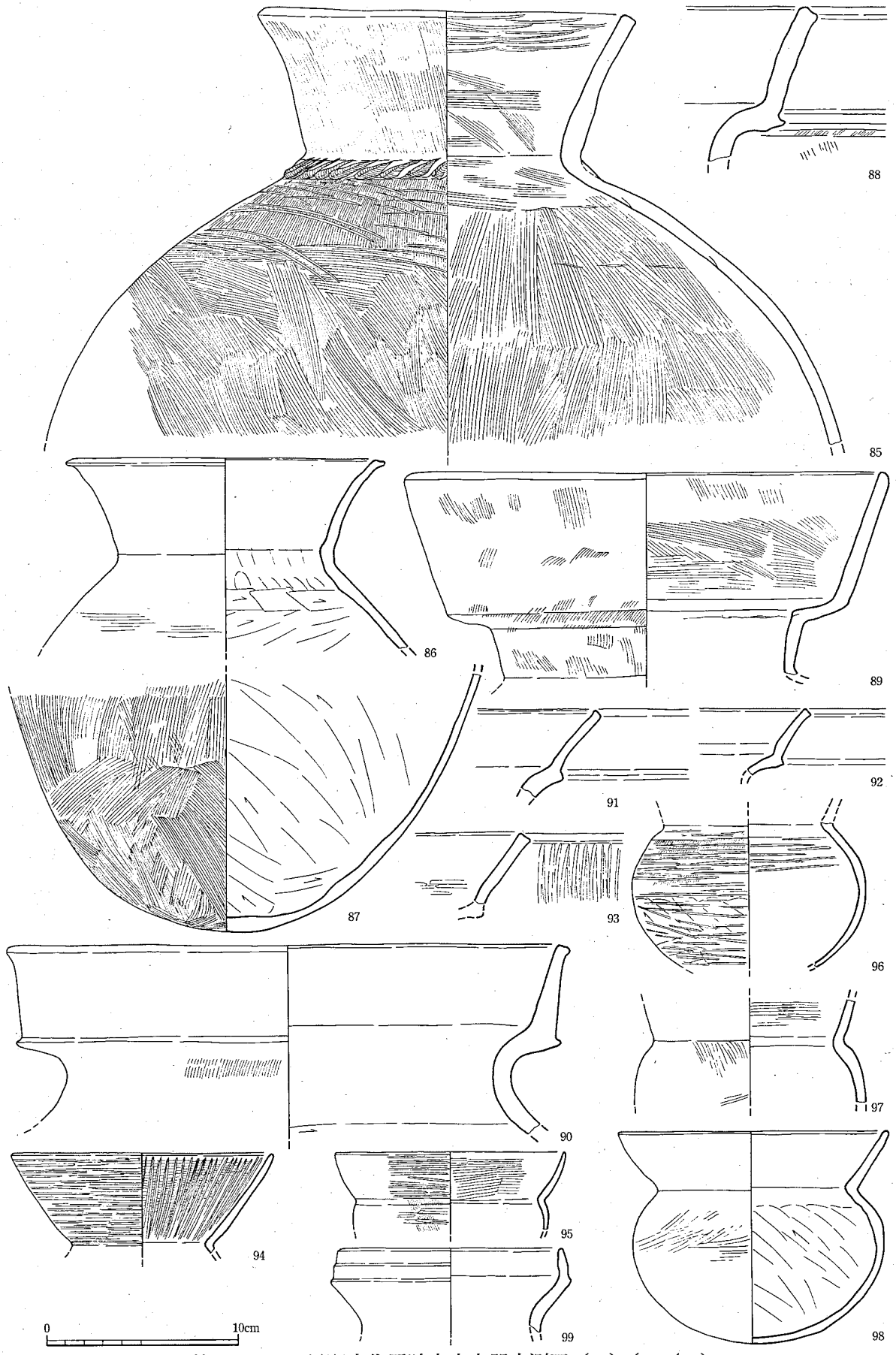
85 は大形の直口壺である。頸部に低い突帯を貼付し、その頂部をハケメ工具で刻目施文する。胴部内面は縦ハケを残す。86 はわずかに端部を外につまみ出した直口壺である。87 は壺胴下部片。

89 は頸部が短く直立し、口縁部の伸びの大きい二重口縁壺。88・90 ～ 93 は山陰系二重口縁壺。88・90 は器壁が厚く大形品と推測され、93 は内外にミガキを施すことから大形鉢口縁部の可能性もある。94 ～ 98 は小形丸底壺。97・98 はミガキが観察されず、98 はやや大きめの器形をなし、外に煤が付着することから火にかけて使用したものか。99 は小形の二重口縁壺で、山陰系か。

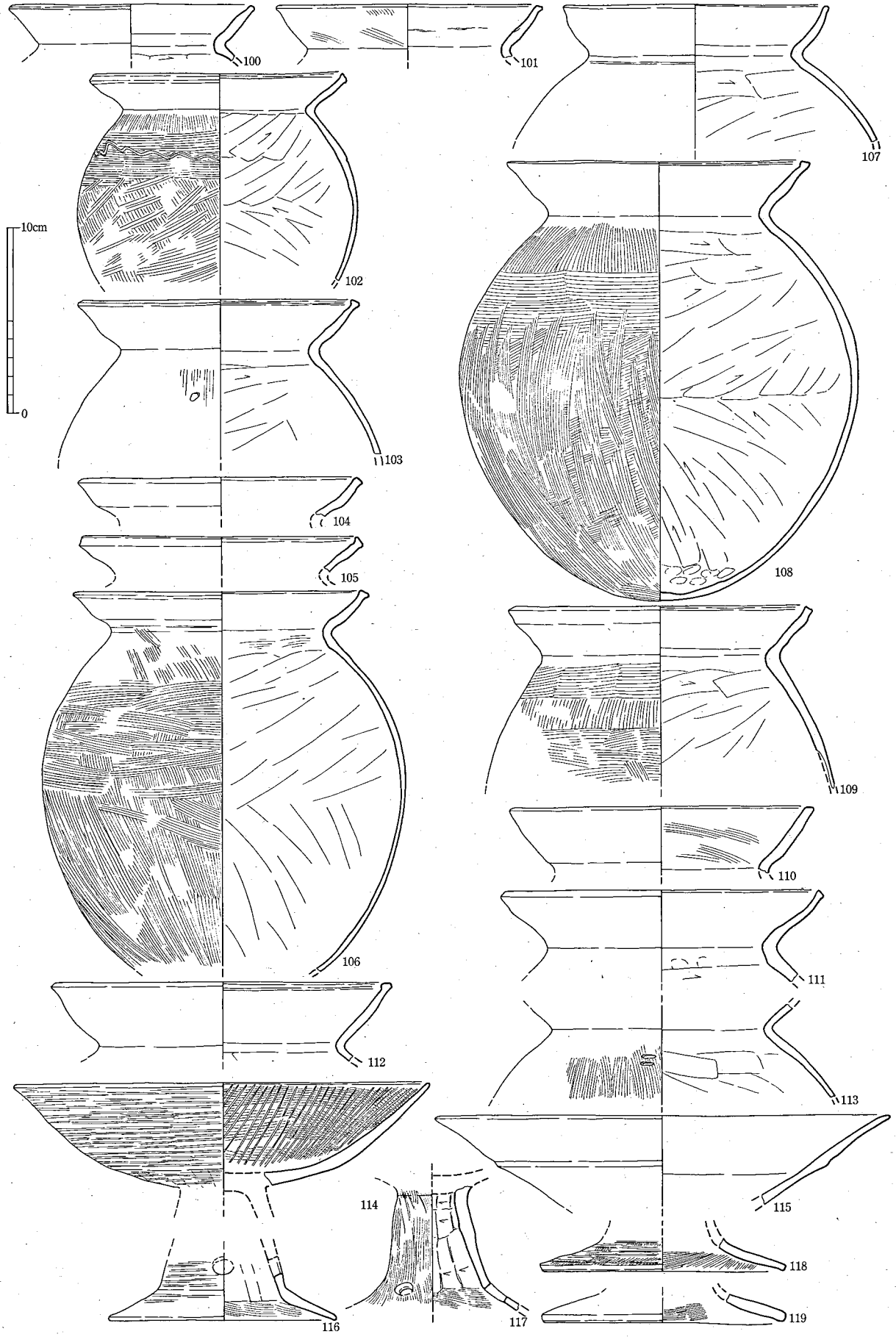
100 ～ 113 は布留系甕である。102・103・105 は端部を上に、101・106・107 は端部を外につまみ出し、108・112 は端部内面を内に肥厚させる。102 は肩部に 3 条 1 単位の櫛描波状文、

第19表　5号竪穴住居跡出土土器観察表（4）

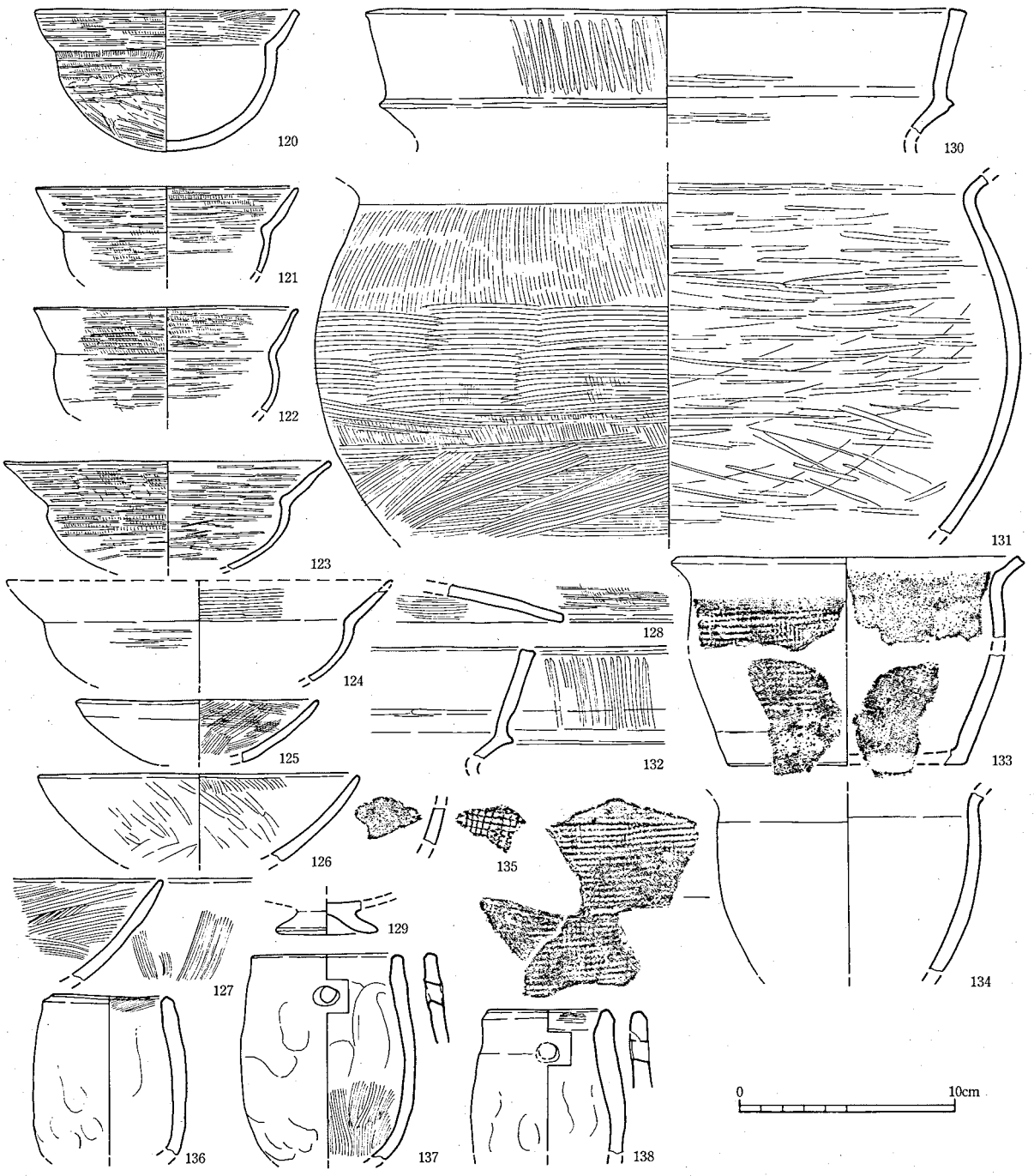
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
41-86		住5覆土東北部	直口壺	口径176、頸径112、残高99	粘土粗、1～3mm石英・長石多	やや甘い、器肉黒変	淡褐黄色～淡黄褐色	口縁端外につまみ出し。胴外ハケ（摩滅）、口縁内外ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／3		352
41-87		住5覆土東北部	壺胴部	残高135	粘土細、1～3mm石英多	良好、内黒変	淡黄褐色	内ケズリ、外縦・斜めハケ。	全周		349
41-88		住5覆土	山陰系二重口縁壺	残高82	粘土粗、1mm石英少	良好、外面黒斑	外灰黄褐色、内淡黄褐色	器壁厚く大形品か。	小片		2081
41-89	30	住5覆土東部下部	二重口縁壺	口径246、残高109	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	頸部が短く直立し、口縁部の伸び大きい。	全周		372
41-90		住5覆土東北部	山陰系二重口縁壺	口径280、残高99	粘土細、1～3mm石英多	やや甘い	白褐色	内外ナデで、頸部外面縦ハケ残。	1／8		354
41-91		住5覆土東北部	山陰系二重口縁壺	残高45	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄灰褐色、内淡灰褐色	内外ナデ。	小片		537
41-92		住5覆土東北部	山陰系二重口縁壺	残高43	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	小片		539
41-93		住5覆土東北部	山陰系二重口縁壺	残高36	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄褐色	外暗文風の縦ミガキ、内ナデで一部にミガキ施す。	小片	大形鉢口縁部の可能性もある	532
41-94		住5覆土東北部	小形丸底壺	口径134、頸径74、残高51	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	赤褐色	外横ミガキ、内横ミガキ後暗文風縦ミガキ。	1／6		362
41-95		住5覆土東北部	小形丸底壺	口径118、頸径98、残高42	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴外縦ハケ後外横ミガキ、口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／6		534
41-96		住5覆土東北部	小形丸底壺	頸径88、胴径122、残高75	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	淡橙褐色～淡黄褐色	胴外下部ケズリ、外上部縦ハケ後横ミガキ。胴内ナデ後、上部横ミガキ。	1／2		350
41-97		住5覆土東北部	小形丸底壺	頸径100、残高55	粘土細、1mm石英・長石極少	やや甘い	橙褐色	胴外縦ハケ、口縁外ナデ、胴内ハケ、胴内ナデ。	1／6		361
41-98	29	住5覆土東北部	小形丸底壺	口径140、頸径110、胴径138、器高111、胴高81	粘土粗、1mm石英多	やや甘い	明褐色～黄橙褐色	胴外ハケ、胴内ケズリ、他は摩滅。内外の摩滅顕著。	口縁1／2、胴全周	外煤付着	344
41-99		住5覆土東北部	小形二重口縁壺	口径112、残高45	粘土粗、1～3mm石英少	良好	白褐色	口縁内外ナデ、頸部内摩滅。口縁外に強いナデによる微かな段あり。	1／6		360
42-100		住5覆土東北部	布留系甕	口径128、残高29	粘土粗、1～3mm石英・長石・クサリ礫少	やや甘い	淡褐白色	口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8		533
42-101		住5覆土東北部	布留系甕	口径134、残高29	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	口縁外ハケ後内外ナデ。口縁内接合痕らしき皺残。	1／8		541
42-102	29	住5覆土東部下部	布留系甕	口径132、頸径102、胴径146、残高111	粘土細、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内黄褐色	肩3条1単位の櫛描波状文。胴外ハケは頸下縦ハケ・胴下部左上りハケ、肩横ハケ、胴下部右上がりハケの順。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	2／3	外面煤付着。	346
42-103		住5覆土東北部	布留系甕	口径142、頸径104、残高82	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端を上につまみ上げ。肩部に刺突文。胴外ハケ残、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8		356
42-104		住5覆土東北部	布留系甕	口径144、残高22	粘土粗、1mm長石・金雲母少	良好	外淡黄灰褐色、内淡黄褐色	内外ナデ。	1／8		542
42-105		住5覆土東北部	布留系甕	口径146、残高19	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／8		530
42-106	30	住5覆土東北部	布留系甕	口径150、頸径118、胴径198、残高202	粘土細、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁端外につまみ出し。胴外ハケは頸部下・胴下部縦ハケ後胴中部横ハケか。口縁内外ハケ、頸部内にハケ残。	口縁2／3、胴全周		343
42-107		住5覆土東北部	布留系甕	口径134、残高71	粘土細、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	口縁内湾強い。頸部外ナデにより沈線状になる。胴外ナデ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／6		355
42-108		住5覆土東北部	布留系甕	口径150、頸径118、胴径210、器高230、胴高202	粘土粗、1～5mm石英・角閃石多	やや甘い	外黄褐色～褐色、内橙褐色	口縁内に肥厚。胴外ハケは頸下縦ハケ、肩横ハケ、胴下部斜めハケ、胴下部縦ハケの順。胴内ケズリ。	口縁1／4、胴1／6	胎土、色調在地の土器と異なる	347
42-109		住5覆土東北部	布留系甕	口径154、残高97	粘土細、1～3mm石英多	良好	外淡褐色、内淡黄褐色	胴外ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／4		353
42-110		住5覆土東北部	布留系甕	口径152、残高35	粘土細	良好	外淡黄白褐色、内褐白色	内ハケ後内外ナデ。	1／6		531
42-111		住5覆土東北部	布留系甕	口径164、残高47	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	外白黄褐色、内淡黄褐色	口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	1／6		540
42-112		住5覆土東北部	布留系甕	口径176、残高41	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内褐白色	口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	1／8		374
42-113		住5覆土東北部	布留系甕	頸径116、残高50	粘土粗、1～3mm角閃石・長石・クサリ礫少	良好	褐色	肩部に板工具の角を押し付けた刺突文。胴外縦ハケ、胴内ケズリ。	1／6	胎土、色調在地の土器と異なる	543
42-114		住5覆土東北部	高杯杯部片	口径216、残高64	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外淡橙褐色、内淡黄橙褐色	杯底外ケズリ？後外横ミガキ。内斜めハケ後暗文ミガキ。	1／6		363
42-115		住5覆土東北部	高杯杯部片	口径236、残高47	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡褐黄色	口縁部と杯底部の境の屈曲なし。内外雑なナデ仕上げ。	1／8	器表灰変する個所多	364
42-116		住5覆土東北部	高杯脚部片	裾径118、残高31	粘土細、1mm石英少	良好	外淡黄灰褐色、内暗褐色	穿孔1個所残。脚柱外ミガキ、脚裾外ナデ、脚柱内ケズリ、脚裾内ハケ。	1／6	色調他と異なる。	366
42-117		住5覆土東北部	高杯脚部片	残高65	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	白黄褐色	0・4時2方向に乾燥前穿孔残。外縦ハケ、脚柱内ケズリ、脚裾内横ハケ。	脚柱全周、裾2／3		368
42-118		住5覆土東北部	高杯脚部片	裾径128、残高16	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫極少	良好	淡黄褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	1／6		367
42-119		住5覆土東北部	高杯脚部片	裾径126、残高15	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	褐色	外ナデ、内ハケ。	1／8		536
43-120	30	住5覆土東北部	外反口縁鉢	口径116、頸径100、器高65、胴高46	粘土細、1～3mm石英多	良好	褐色～淡褐色	胴外下部ケズリ、胴外上部・口縁外ハケ後外横ミガキ。口縁内ハケ、胴内ナデ。	ほぼ完形		345



第41図　5号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（1／3）



第 42 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図（6）（1／3）



第 43 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図（7）（1／3）

103・113 は肩部に刺突文を施す。102・108 は胴部外面のハケメの遺存が良好で、108 は胎土・色調とも在地のものとは異なる。

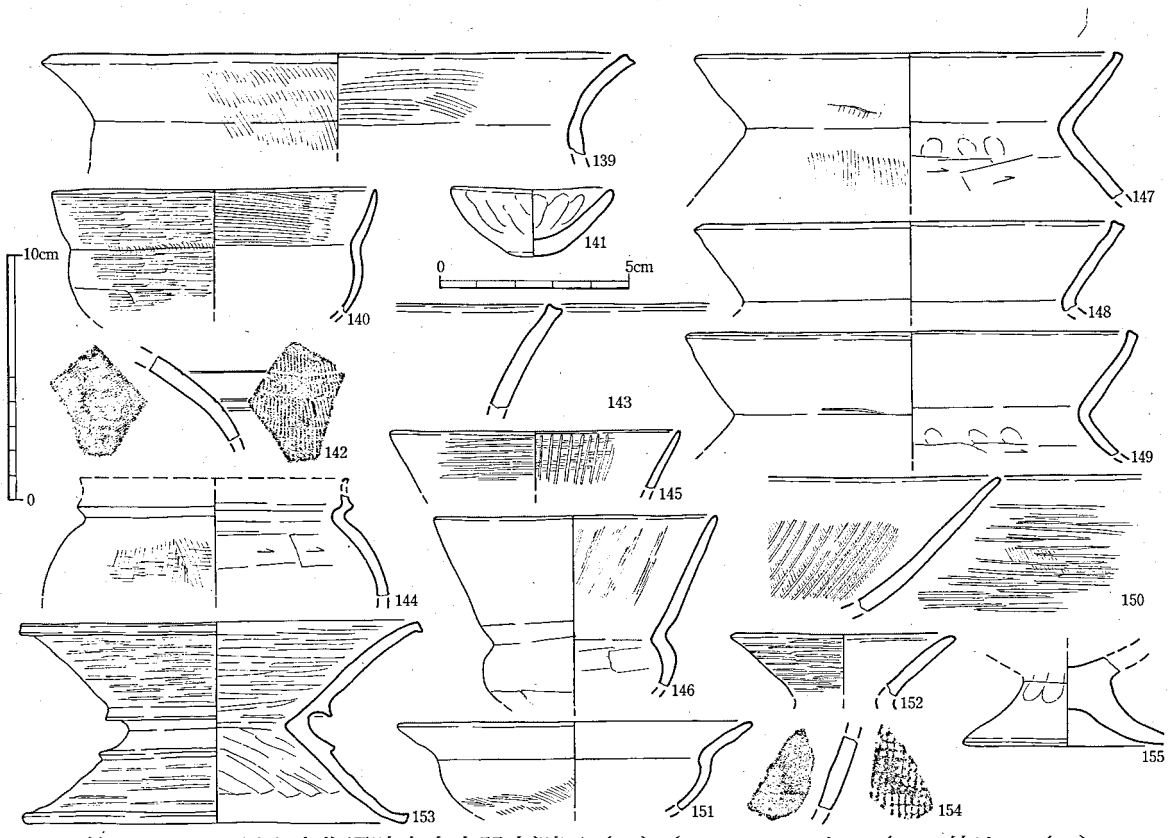
114・115 は高杯杯部片。116 ～ 119 は高杯脚部片。115 は口縁部と杯底部の境の屈曲がほとんどなく、内外を雑なナデで仕上げ、高杯としては特異であるが、段により口縁部が区画されることから高杯と考えた。117 は外面を縦ハケで仕上げ、0・4 時の 2 方向に乾燥前の穿孔を残す。

120 ～ 124 は精製の外反口縁鉢である。125 は直口鉢で、126 は内外に粗いミガキを施すが、他は粗製品である。128 は精製脚付鉢の脚裾片である。129 は山陰系脚付鉢の脚部か。130 ～ 132 は山陰系大形鉢の破片とおもわれるもので、131 は胴部内面にもミガキを施す。

133 ～ 135 は朝鮮半島系土器で、133・134 は外面小さな格子タタキの軟質平底鉢。

第20表　5号竪穴住居跡出土土器観察表（5）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
43-121		住5覆土東北部	外反口縁鉢	口径118、残高39	粘土細、1mm長石極少	良好	橙褐色	外ハケ後横ミガキ、口縁内縦ハケ後横ミガキ、胴内ナデ。	1／6		357
43-122		住5覆土東北部	外反口縁鉢	口径118、残高47	粘土細、1mm石英少	良好	橙褐色	胴外下部ケズリ、口縁外縦ハケ後外横ミガキ。口縁内斜めハケ後内横ミガキ。	1／8		358
43-123		住5覆土東北部	外反口縁鉢	口径146、残高49	粘土細、1mmクサリ礫少	やや甘い	外淡黄橙褐色、内橙褐色	胴外下部縦ハケ、胴外上部縦ハケ、口縁外縦ハケ・指頭圧痕後外横ミガキ。内横ミガキ。	1／3		359
43-124		住5覆土東北部	外反口縁鉢	残高41	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	明褐色	外摩滅、一部ミガキ残。口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／8		535
43-125		住5覆土東北部	直口鉢	口径108、残高29	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡褐黄色	外ナデ、内斜めハケ。	1／6		365
43-126		住5覆土東北部	直口鉢	口径144、残高40	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	明褐色～明褐黄色	外ケズリ後粗いミガキ。内ハケ後粗いミガキ。	1／6		546
43-127		住5覆土東北部	直口鉢	残高47	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	淡黄褐色	内外ハケ。	小片		529
43-128		住5覆土東北部	脚付鉢脚部	残高17	粘土細、1mm長石極少	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内ハケ。	小片		538
43-129	30	住5覆土東北部	脚付鉢脚部	裾径42	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	橙褐色	脚内外ナデ、鉢内ミガキ？。	脚全周	山陰系か	351
43-130		住5覆土東北部	山陰系大形鉢	口径156、残高57	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外暗褐黄色、内灰褐色	外縦ミガキ、内ナデ後一部ミガキ。	1／12		373
43-131		住5覆土東北部	山陰系大形鉢	頸径280、胴径322、残高164	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内灰黄褐色	胴外ハケは頸下縦ハケ、肩横ハケ、胴下部右上りハケの順。内ケズリ後疎らにミガキ。	1／3		348
43-132		住5覆土東北部	山陰系大形鉢	残高50	粘土細、1～3mm石英多	やや甘い、内面灰変	外黄褐色、内暗灰褐色	外縦ミガキ、内ナデ。	小片		528
43-133		住5覆土東北部	半島系土器鉢	口径154、底径56	粘土粗、1～3mm石英・長石少	軟質	黄灰色	口縁短く端部角張る。口縁内外ナデ、胴外小さい格子タタキ、胴内ナデ。	1／6		2422・2337
43-134		住5覆土東北部	半島系土器鉢	頸径120、残高82	粘土粗	軟質、甘く手に粉がつく	灰黄色	胴外小さい格子タタキ、胴内ナデ。	1／6	使用に伴い色くすむ	2423
43-135		住5覆土東部	半島系土器胴部片			軟質	褐色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2338
43-136		住5覆土東北部	タコ壺	口径46、残高73	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄褐色～淡褐黄色	内外ナデで仕上げるが、口縁端内にハケ残。	1／4		371
43-137		住5覆土東北部	タコ壺	口径58、残高94	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡褐白色	外ナデ、内下部縦ハケ、上部ナデ。	1／4	外面汚染により褐変する個所あり	369
43-138		住5覆土東北部	タコ壺	口径46、残高65	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ナデで仕上げるが、口縁端内にハケ残。	1／4		370
44-139		住5P1	在地系甕	口径228、残高40	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	外褐灰色、内淡灰黄褐色	口縁緩やかに外反し、端部角張る。外縦ハケ、口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／8		432
44-140		住5P1	外反口縁鉢	口径126、頸径116、残高49	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外橙褐色、内黄橙褐色	胴外下部ケズリ、頸部外ハケ後外横ミガキ。口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／6		422
44-141	30	住5P1	手捏ね鉢	口径40、器高18	粘土細、1mm長石極少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	ほぼ完形		424
44-142		住5P1	半島系土器胴部片			軟質	灰黄色	内ナデ、外平行タタキ後沈線。	小片		2330
44-143		住5西部撹乱	直口壺	残高42	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外黄白褐色、内淡灰黄褐色	口縁端部わずかに凹む。内外ナデ。	小片		563
44-144		住5南遺構面	小形二重口縁壺	頸径104、残高39	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	頸部短い。胴外ハケ、胴内ケズリ、頸部内外ナデ。	1／6	山陰系か。	425
44-145		住5・22付近遺構面	小形丸底壺	口径112、残高22	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	赤褐色	口縁外横ミガキ、口縁内横ミガキ後暗文風縦ミガキ。	1／8		428
44-146	30	住5・38間包含層	小形丸底壺	口径112、頸径68、胴径76、残高75	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁伸び大きい。外摩滅するが、胴下部にケズリの稜残。口縁内板工具によるナデ上げ、胴内板ナデ？。	全周		419
44-147		住5西部撹乱	布留系甕	口径164、残高57	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内淡褐黄色	胴外縦ハケ、胴内ケズリ。口縁内外ナデであるが、外にハケメ静止痕残。	1／6		557
44-148		住5西部撹乱	布留系甕	口径164、残高36	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	内外ナデ。	1／6		407
44-149		住5西部撹乱	布留系甕	口径172、残高50	粘土細、1～3mm石英多	やや甘い	淡黄褐色	胴外～口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／6		558
44-150		住5・38間包含層	高杯杯部片	残高53	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ後暗文風の斜めミガキ。	小片		559
44-151		住5西部撹乱	外反口縁鉢	口径136、残高35	粘土粗、1mm石英少	やや甘い	外杯黄褐色、内淡橙褐色	胴外ハケ、口縁外ナデ、内摩滅。	1／6		406
44-152		住5西部撹乱	小形器台	口径86、残高25	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	甘い	淡黄橙褐色～橙褐色	口縁部直線的に外傾。外横ミガキ、内摩滅。	1／6	脚の可能性も考えられる。	408
44-153		住5西部撹乱	山陰系鼓形器台	口径157、括部径72、裾径150、器高80	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡褐黄色	外ナデ後横ミガキ。口縁外面に接合痕状の皺あり。受部内太めのミガキ、裾内ケズリ、裾端内ナデ。	2／3		404
44-154		住5西部撹乱	半島系土器胴部片			軟質	暗褐色～暗灰褐色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2332
44-155	30	住5・22付近遺構面	製塩土器脚部	裾径52、残高23	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄橙褐色	内外ナデで、外には指頭圧痕残。	全周		427



第 44 図　5 号竪穴住居跡出土土器実測図（8）（141・154 は 1／2、他は 1／3）

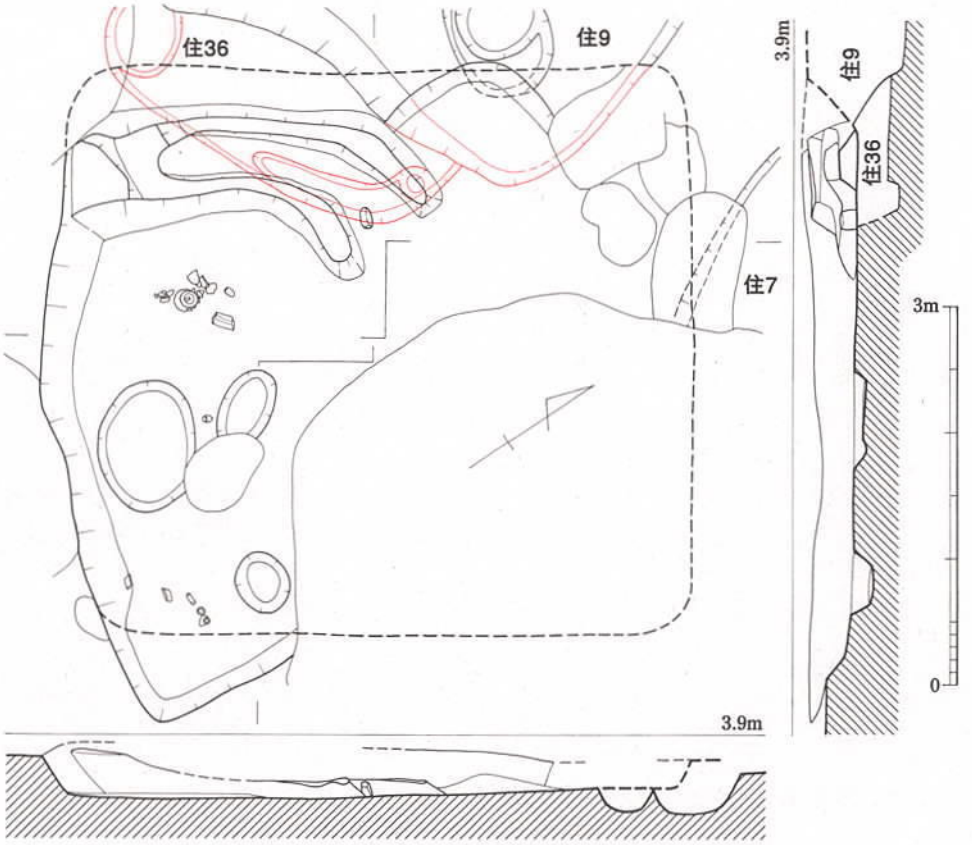
136 ～ 138 はタコ壺である。

139 ～ 142 は 5 号住居跡 P 1 よりまとまって出土したもの。139 は在地系甕、140 は外反口縁鉢、141 は手捏ねで小形の鉢、142 は瓦質の朝鮮半島系土器壺胴部片である。

143 ～ 155 は 5 号住居跡内の撹乱あるいは 5 号住居跡周辺の遺構面から出土したもの。143 は直口壺。144 は小形二重口縁壺で、山陰系か。145・146 は小形丸底壺で、147 は摩滅するものの、ミガキが観察されず、胎土・色調も粗製品に近い。147 ～ 149 は布留系甕口縁部。150 は高杯杯部片。151 はミガキを施さない粗製の外反口縁鉢、152 は小形器台口縁部、153 は山陰系鼓形器台。154 は格子タタキを施した半島系軟質土器の胴部片である。155 は粗雑なナデ仕上げの脚部片で、製塩土器と考えられる。

6 号竪穴住居跡（図版 12、第 45 図）

3 区の中央やや東より、5 号竪穴住居跡の北、9 号竪穴住居跡の南に位置するカマド付竪穴住居跡である。カマドは煙道部分が高い位置まで残存していたため、発掘当初、カマド煙出し部とカマド燃焼部を別のカマドと考え、前者を 29 号住居跡、後者を 6 号住居跡と番号を付して掘り下げた。また、本住居跡北西側には 9 号竪穴住居跡が位置し、さらにその下層には 36 号竪穴住居跡が存在するため輪郭の検出が難しく、住居跡主軸を南北に長軸を向け、カマドは煙道の長く伸びない住居跡壁に直交するタイプのものと誤認して発掘調査を進めた。南北方向に主軸をもつ竪穴住居跡と誤認したまま 6 号住居跡を完掘し、当初 29 号竪穴住居跡としていた煙道部部分を掘り下げる過程で、長軸を北東－南西方向に向けた住居跡で、カマドは煙道の長く伸びるものであることに気がついた。そのため写真は不十分なものしか残しておらず、住居跡南東部では住居跡隅を掘り過ぎた一方で、北西隅では隅を十分に確定しないまま、9 号住居跡を掘り下げて失ってしまっている。



第 45 図　6 号竪穴住居跡実測図（1 ／ 60）

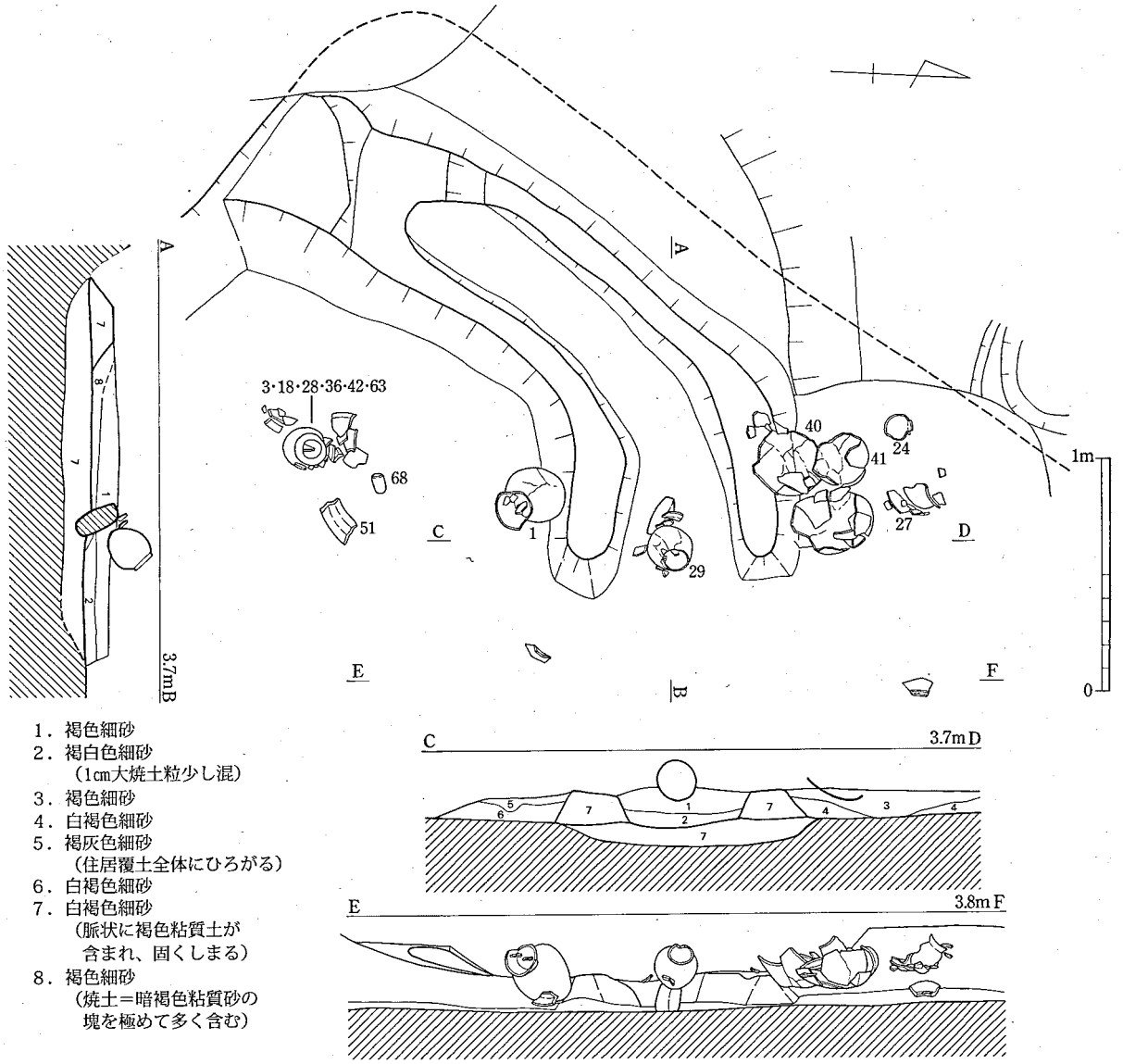
平面図にはカマドの位置と、南西壁の方向から復元的に住居跡平面形を図示しているが、本来は長さ 5.2m、幅 4.2m 程で、北西壁の中央近くに燃焼部を配置し、住居跡の西隅で屋外へと排煙するカマドを設置していたと思われる。住居跡南東部隅は不自然な形で張り出しており、本来、若干、内側にコーナーがあった可能性が高い。

このような問題から出土遺物は隣接する 7 ・ 9 ・ 36 号住居跡に本来、帰属するものが含まれる恐れがあるが、カマドの前面から出土した遺物は良好な一括関係を保つものと評価できる。

カマド（図版 12、第 46 図）　石製の支脚が遺存し、その上からはカマドに設置していたと思われる甕が出土した。煙道も遺存しており、本来は良好な状態を留めていたと思われる。しかしながら、上述したように煙道部分と袖部分を別のカマドと考えて発掘調査を行ったという問題があるため、十分な調査と記録の作成を実施できなかったことが悔やまれる。

カマドは燃焼部をほぼ東西方向に向け、燃焼部の奥で屈曲し、住居跡南西壁に平行するように煙道を伸ばして、西隅で屋外へと排煙していたと考えれる。燃焼部の床面の変色は発達していなかったが、太さ 10cm、長さ 20cm 程の石を 10cm ほど床に埋め込んで支脚としている。支脚の直上にはカマドにかけられていた土師器甕（第 48 図 29）が土圧で倒れたような状態で出土した。支脚の部分では袖間の幅は 0.42m を測る。支脚から 0.5m 程奥でカマドは主軸を折り曲げ、竪穴住居跡隅の方向に向って住居跡壁に平行し、煙道が約 2.0m 程伸びる。

カマド袖の左右からは完形及び完形に近い状態で多くの土器が出土した。このうちカマドの右から出土した第 48 図 24 ・ 27、第 49 図 40 ・ 41、カマドの左から出土した第 47 図 1 は完形及び完形に近い破片であり、カマドの脇に据え置かれたまま住居廃絶とともに放棄されたと思われる。このうち第 49 図 41 は底部を焼成前穿孔し、甑としておりカマドで使用された可能性が高い。一方、



第46図　6号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）

カマド左袖から1m程南で出土した第47図3・18、第48図28・36、第49図42、第50図63は流れ込んだ状態であり、住居廃絶後に投棄されたか、棚から転倒して流れ込んだものであろう。

出土土器（図版30・31、第47～50図、第21～23表）　1～3は直口壺で、1は肩部に沈線波状文を施文。4～8は山陰系二重口縁壺。4は内面ハケを丁寧にナデ消すが、頸部内面の指頭圧痕凹みに横ハケが残る。6は頸部が短く、急激に外反し、7・8は口縁部が直立に近い角度で立ち上がる。9は小形の粗製壺胴部。10は二重口縁で、口縁部外面に縦ミガキを施した山陰系小形丸底壺。

11・12はやや大振りの小形丸底壺。13は中形直口壺の頸部破片。14～20は小形丸底壺である。16は胴部内面をケズリのまま仕上げ、ケズリにより生じた粘土片が付着する。21は口縁部が短く立ち上がり二重口縁となる小形丸底壺。22・23は壺底部か。23は平底で、弥生土器の可能性もある。

24・25は小形甕で、24は吉備系甕か。胴部外面は下部板ナデ、中央よりやや下は棒状工具のナデで仕上げるようである。26は布留系甕の肩部と推測されるものであるが、何を表現したものかは不明でるが、沈線による絵画風の線刻が見られる。27～39は布留系甕。28・36は肩部に刺突列点文、29・34は沈線波状文、33は4本1単位の櫛描直線文、35は5条1単位の櫛描波状文、38

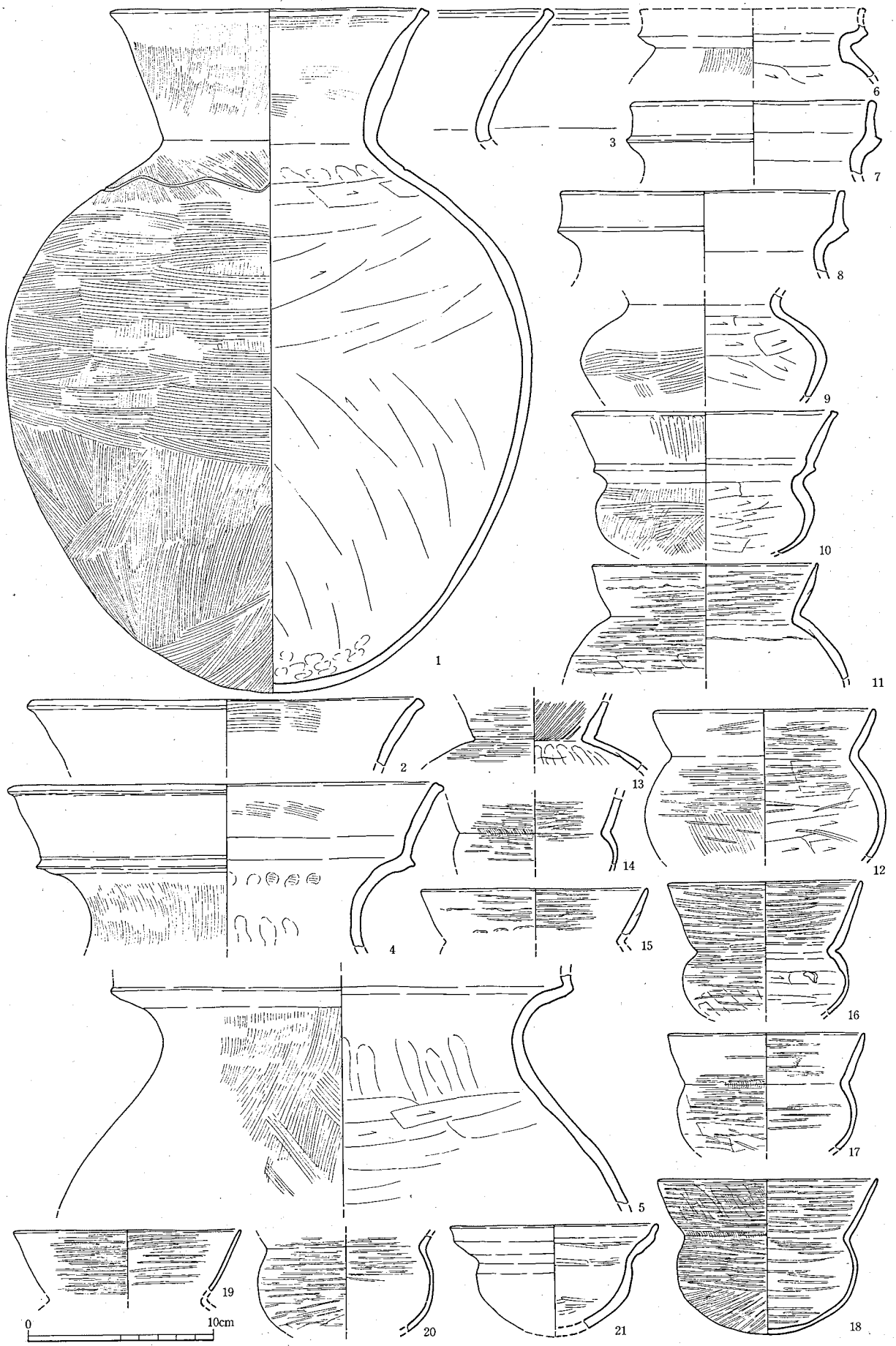
は櫛描直線文を施文する。28は口縁端部の肥厚が顕著で、30・32～34は口縁端部を上につまみ出し、31は外につまみ出す。29・38は胎土に土器片らしき混和材を含むことが特徴的。39は口縁の伸びが長く、直口壺と甕の中間的形態を呈す。40は甕ないしは壺の胴部片。41は布留系甕とほぼ同じ器形を呈するが、底部を焼成前、ハケメ調整後に穿孔し甑とする。42は布留系甕胴部片と考えられるが、肩部に横ハケを施さずに特異である。

43は在地系高杯口縁端部、44・45は精製の高杯杯部で、44はこの種の器形にしては砂粒を多く含んだ粗い胎土を用い、外面のミガキの範囲も狭い。46・47は高杯杯底部片。48・49は高杯脚柱部破片。48は0・6時の2方向、49は0・3・6時の3方向にいずれも粘土の軟らかい時点で穿孔を施す。50は高杯脚裾で、1個所、半乾燥時の穿孔が残る。

51は山陰系大形鉢。52～54は精製の外反口縁鉢であるが、52のミガキ仕上げは頸部外面の狭い範囲のみにとどまる。55～57は直口鉢で、55・56はミガキ仕上げの精製品であるが、56は口縁外面にタタキ痕らしき調整が認められる。58は内外ミガキ仕上げの脚付鉢脚部片。59は小形器台裾部、60は山陰系鼓形器台。61は器壁が厚く、極めて粗製の土器。内外を雑な板ナデで仕上げる調整も含め、本遺跡の同時期の土器に例を見ないもので、用途、製作地とも不明である。屈曲部

第21表　6号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

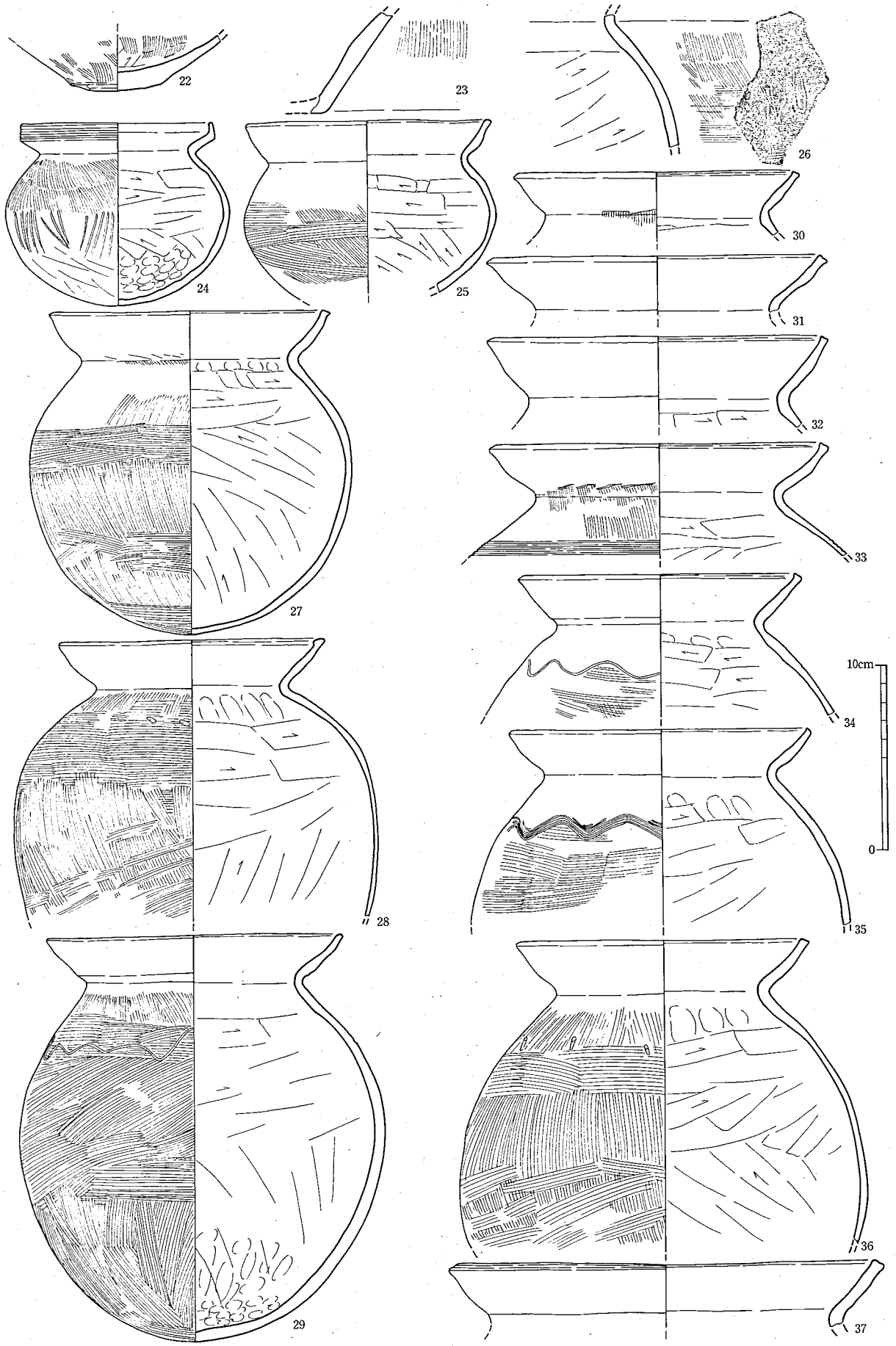
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
47-1	30	住6no.6	直口壺	口径158、頸径112、胴径277、器高361、胴高291	粘土粗、1～8mm石英・クサリ礫多	やや甘い、胴中部20cm大黒斑	黄白褐色	肩部に沈線波状文。口縁部内にやや肥厚。胴外ハケは肩部縦ハケ・下部縦ハケ後胴中部横ハケ。胴内ケズリ。口縁外縦ハケ、内横ハケ後口縁内外ナデ。	口縁1／2、胴全周	胴は完存するため、内面の観察難しい。	786
47-2		住6覆土	直口壺	口径106、残高37	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内横ハケ後内外ナデ。	1／8		1096
47-3		住6no.17	直口壺	残高69	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外黄褐色、内淡黄褐色	内外ナデ。	小片		794
47-4		住6覆土	山陰系二重口縁壺	口径222、残高86	粘土粗、1～3mm石英少	良好、口縁端黒斑	外淡黄褐色、内淡橙褐色	頸外縦ハケ、内横ハケ後内外ナデ。頸部内指頭圧痕凹みにハケ残。	1／6		826
47-5		住6覆土下部	山陰系二重口縁壺	頸径190、残高122	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	明褐色	外縦ハケ、内ナデ上げ指頭圧痕後ケズリ。	1／6		796
47-6		住6P2	山陰系二重口縁壺	頸径104、残高28	粘土粗、1～3mm石英少	良好	明褐色	頸部短い。胴外ハケ、胴内ケズリ、頸部内外ナデ。	1／8	二次的に火を受け黒変、桃変。	806
47-7		住6カマド覆土	山陰系二重口縁壺	口径124、残高39	粘土細、1～3mm石英・角閃石少	良好、外面黒斑	黄白褐色	内外ナデ。	1／6		1158
47-8		住6P2	山陰系二重口縁壺	口径144、残高42	粘土細、1～3mm石英少	良好	外淡褐灰色、内暗褐灰色	内外ナデ。	1／8		1092
47-9		住6覆土下部	小形壺胴部片	残高55	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	褐白色	外ハケ（摩滅）、内ケズリ。	1／6		797
47-10	30	住6カマド煙道上面	山陰系小形丸底壺	口径134、残高75	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐色～黄橙色	口縁端内につまみ上げ。口縁内外ナデ後口縁外縦ミガキ。胴外ハケ、胴内ケズリ。	1／2		838
47-11		住6覆土	小形丸底壺	口径118、残高62	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	淡黄橙褐色	胴下部ケズリ後外～口縁内横ミガキ。胴内ナデ。口縁外、胴内接合痕残。	1／4	器表一部橙褐色の部分あり。	820
47-12		住6覆土	小形丸底壺	口径116、頸径100、胴径126、残高79	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外暗黄褐色、内暗褐色	胴下部ハケ後外～口縁内横ミガキ。胴内ケズリ後ミガキ。	1／6		809
47-13		住6覆土	中形直口壺	頸径64、残高37	粘土細、1mm石英極少	良好	淡橙褐色	外横ミガキ。口縁内暗文ミガキ、胴内指頭圧痕で、接合痕残。	1／4		822
47-14		住6覆土	小形丸底壺	頸径80、残高38	粘土細、1mm石英・クサリ礫少	良好	橙褐色	頸外縦ハケ後外～口縁内横ミガキ。胴内ナデ。	1／6		1093
47-15		住6覆土	小形丸底壺	口径116、残高26	粘土細、1～3mm石英極少	良好	橙褐色	頸部外に指頭圧痕状凹み、口縁外面に接合痕状の皺あり。内外ミガキ。	1／6		1095
47-16	30	住6覆土下部	小形丸底壺	口径112、頸径74、胴径88、残高71	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡橙褐色	胴外ケズリ後外～口縁内ミガキ。胴部内ケズリで、ケズリの粘土片付。	3／4		828
47-17		住6覆土	小形丸底壺	口径102、頸径86、胴径96、残高62	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	頸外ハケ、胴下部外ケズリ後外～口縁内ミガキ。胴内疎らにミガキ。	口縁1／8、胴1／6		821
47-18	30	住6no.17	小形丸底壺	口径114、頸径86、胴径96、器高82、胴高51	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	器壁薄い。胴下部外ケズリ、頸部外縦ハケ、口縁外ハケ・指頭圧痕後、内外ミガキ。	2／3		805
47-19		住6覆土	小形丸底壺	口径118、残高33	粘土細、砂粒ほとんどなまず	良好	橙褐色	内外横ミガキ。	1／8		819
47-20		住6カマド煙道上面	小形丸底壺	頸径84、残高50	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	淡橙褐色	胴下部外ケズリ後外ミガキ。胴内下部ナデ、胴内上部ミガキ。	1／4	焼成時器表剥離した円形凹み目立つ	1143
47-21		住6覆土	二重口縁小形丸底壺	口径106、頸径80、残高55	粘土粗、1～3mm石英少	良好、堅緻	淡褐色	胴外ケズリ後ナデ、口縁内外ナデ、胴内ナデで一部ミガキを施す。	1／8		818



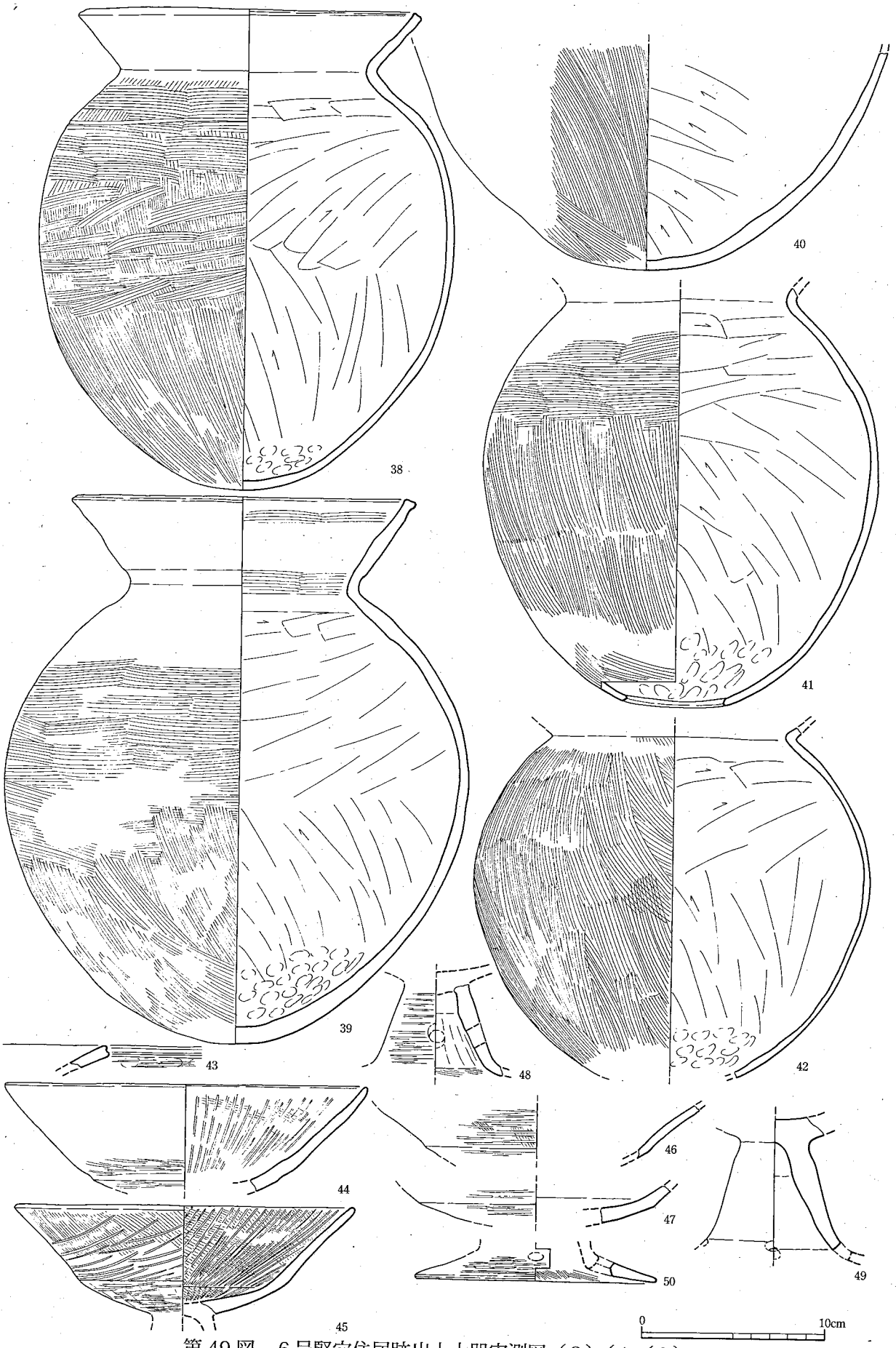
第47図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

第22表　6号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

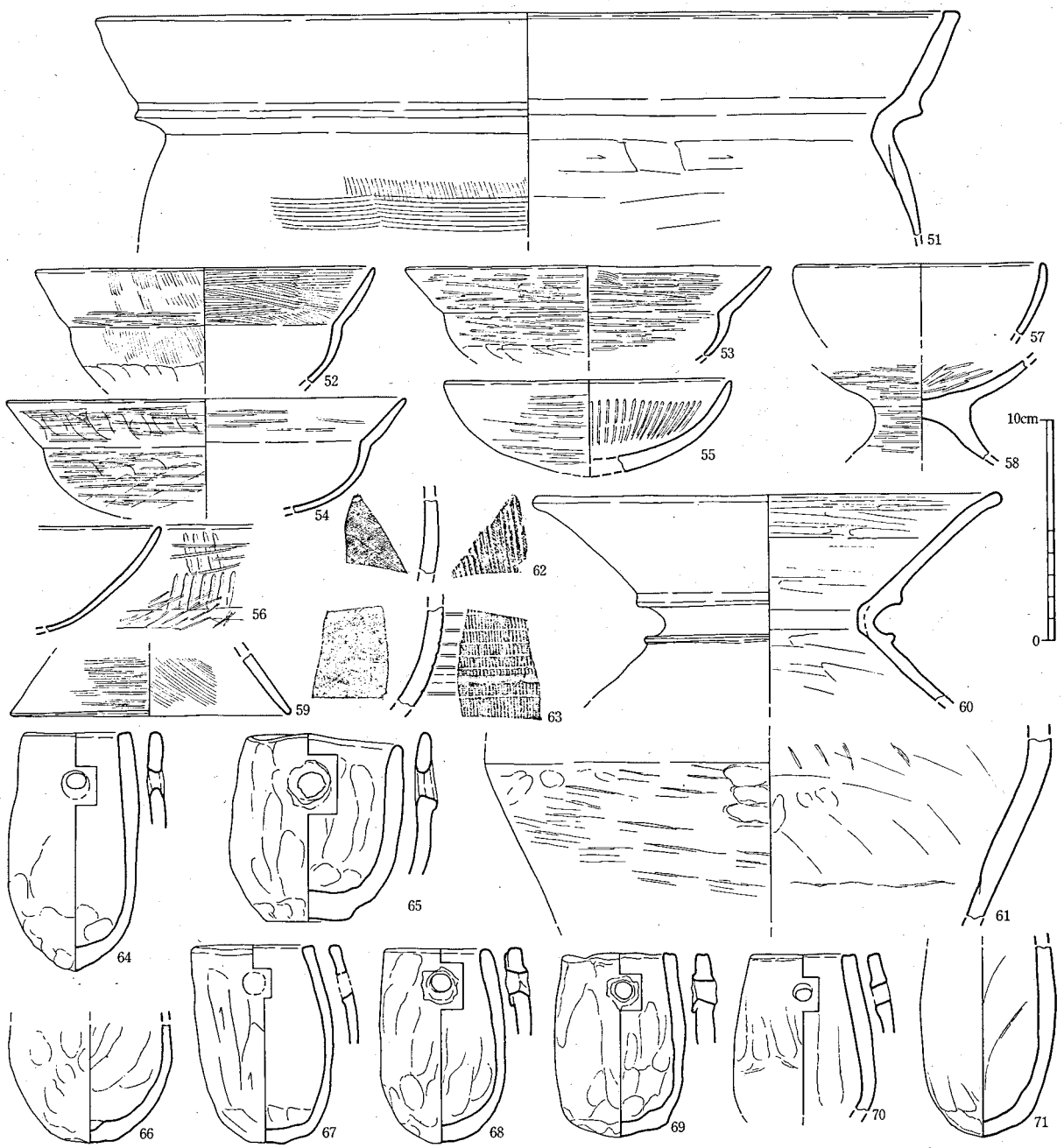
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
48-22		住6覆土	壺底部？	底径50、残高28	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	暗褐色	内外ハケ、底外ケズリ。	2／3		813
48-23		住6カマド煙道上面	壺底部？	残高52	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	赤褐色	内外摩滅、外ハケ残。	小片	破損後二次的に火を受ける	1162
48-24	30	住6no.7	吉備系小形甕	口径98、頸径82、胴径118、器高96、胴高80	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	口縁外強い横ナデの条痕。胴外は下部板ナデ、中部棒状工具ナデ、上部斜めハケ。内指頭圧痕後ケズリ。	1／2	外下部煤付着	807
48-25	30	住6カマド煙道上面	布留系小形甕	口径124、頸径104、胴径134、残高91	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	やや甘い	淡黄褐色	胴部張りが強く、口縁端部丸味をもつ。胴外ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	胴全周	外下部煤付着	837
48-26		住6覆土	甕肩部	残高70	粘土粗、1mm石英多	良好	外淡褐灰色、内明褐色	肩部に沈線による絵画風の線刻あり。外ハケ、内ケズリ。	小片		812
48-27	30	住6no.6	布留系甕	口径142、頸径114、胴径159、器高171、胴高145	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い	淡黄褐色	胴外ハケは上部縦ハケ、中部横ハケ、下部板ナデ風のハケの順。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁全周、胴1／4	肩から下、口縁外面の煤付着顕著。内胴中央部帯状にコゲ。	786
48-28	30	住6no.17	布留系甕	口径140、頸径102、胴径196、残高147	粘土粗、1～3mm	やや甘い	外明褐色、内淡黄褐色	肩部に刺突列点文を施し、口縁端肥厚。胴外ハケは頸部下縦ハケ、肩部横ハケ、胴下部縦ハケ、胴下部右上がり斜めハケの順か。胴内ケズリ。	口縁全周、胴1／2	口縁外、胴肩より下外煤付着。胴内最大径より下コゲ。	804
48-29	31	住6no.1	布留系甕	口径156、頸径116、胴径193、器高214、胴高189	粘土粗、1～3mm石英・土器片多	良好、外肩15cm大黒斑	淡黄褐色	肩部に沈線波状文。胴外ハケは頸部下縦ハケ、肩部横ハケ、胴中部右上がり斜めハケ、胴下部縦ハケの順か。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁1／4、胴5／6		783
48-30		住6カマド煙道上面	布留系甕	口径144、残高34	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡褐色、内淡黄褐色	口縁端上につまみ出す。胴外縦ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8	外面煤付着	1156
48-31		住6カマド煙道南	布留系甕	口径172、残高30	粘土粗、1～3mm石英・長石・クサリ礫多	やや甘い	灰黄褐色	口縁端外につまみ出す。内外ナデ。	1／8		1151
48-32		住6カマド覆土	布留系甕	口径172、残高48	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	暗褐灰色	口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／4		803
48-33		住6カマド周辺	布留系甕	口径172、残高60	粘土細、1～3mm石英少	良好	外淡黄灰褐色、内淡黄褐色	肩部に4条1単位の櫛描直線文。口縁端上につまみ出す。外縦ハケで、頸部にハケ工具静止痕残。胴内ケズリ。	1／4		798
48-34		住6覆土	布留系甕	口径142、残高75	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外淡黄橙褐色、内淡黄褐色	肩部に沈線波状文を施し、口縁端上につまみ出す。胴外ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8		810
48-35		住6覆土	布留系甕	口径154、残高104	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄橙褐色	肩部に5条1単位の櫛描波状文。口縁端上につまみ出す。胴外ハケ。	1／6		811
48-36	31	住6no.17	布留系甕	口径146、頸径112、胴径216、残高163	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡褐黄色	肩部刺突列点文。胴外ハケは頸下・胴中部縦ハケ、肩横ハケ、胴下部斜めハケの順。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁全周、胴1／2		795
48-37		住6カマド煙道覆土	布留系甕	口径220、残高34	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外灰黄褐色、内淡黄褐色	内外ナデ。	1／10	径不安	1157
49-38	31	住6覆土	布留系甕	口径176、頸径148、胴径220、器高256、胴高224	粘土粗、1～5mm石英・土器片？多	良好、胴外15cm大黒斑	外黄白褐色、内黄褐色	胴肩直線沈線文。胴外ハケは上部粗い縦ハケ、肩横ハケ、下部縦ハケ、下部右上がり斜めハケの順。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁1／2、胴1／2	胴復元時に歪んだため、器形不安。外底近く煤付着。	788
49-39	31	住6カマド周辺	布留系甕	口径174、頸径123、胴径247、口径289、胴高234	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い、胴中部10cm大黒斑	淡黄褐色	口縁の伸びが長く、直口壺と甕の中間的形態。口縁内横ハケ後口縁内外ナデ。道祖とハケ、胴内ケズリ。	口縁1／2、胴全周、完形に復元	胴内面の観察が難しい。	785
49-40		住6no.9	布留系甕	残高117	粘土細、1～5mm石英・クサリ礫少	良好	淡褐色	外ハケ、内ケズリ。	底付近全周		800
49-41	31	住6no.8	布留系甕（甑）	頸径124、胴径211、底孔径51、残高222、胴高213	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫・土器片少	良好、胴肩10cm大黒斑	外淡黄褐色、内淡橙褐色	底部を焼成前、ハケメ調整後に穿孔し甑とする。	3／4		787
49-42		住6no.17	布留系甕	頸径130、胴径210、残高186	粘土細、1～5mm石英多、角閃石極少	やや甘い	外淡褐色、内淡黄褐色	頸内の屈曲がシャープ。外縦斜めハケのみで仕上げ、横ハケ施されず特異。内ケズリ。	1／2	外煤付着、内コゲのためか暗褐色に変色。	830
49-43		住6カマド煙道南	高杯杯口縁片	残高11	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	淡橙褐色	外指頭圧痕後ミガキ、内摩滅。	小片		1155
49-44		住6覆土	高杯杯部片	口径198、残高55	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄橙褐色	外下部横ミガキ、口縁外ナデまま仕上げる。内斜めハケ後暗文風ミガキ。	1／4		823
49-45	31	住6覆土	高杯杯部片	口径178、残高57	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色	口縁外斜めハケ、杯底部外ケズリ後外疎らなミガキ。内斜めハケ後暗文風斜めミガキ。	1／3		824
49-46		住6カマド煙道南	高杯杯底部片	残高29	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い	淡橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内摩滅。	1／8	二次的に火を受け褐変部多い。	1154
49-47		住6カマド煙道南	高杯杯底部片	残高21	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	淡橙褐色	粗豊子ミガキ、内摩滅。	1／8		1155
49-48		住6覆土	高杯脚部片	残高49	粘土粗、1mm石英極少	良好	淡黄橙褐色	0・6時方向乾燥前穿孔残。外横ミガキ、脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	1／2		825
49-49		住6覆土	高杯脚部片	残高72	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄橙褐色	0・3・6時方向乾燥前穿孔残。外摩滅、内ナデ。	全周		829
49-50		住6カマド煙道覆土	高杯脚裾片	裾径126、残高13	粘土細、1～3mm石英極少	良好	外橙褐色、内暗褐色	1個所半乾燥時穿孔残。	1／8		1160
50-51		住6no.15	山陰系大形鉢	口径368、残高99	粘土粗、1～3mm石英少	良好	明褐色	胴外縦ハケ後横ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。胴破損面に接合痕残。	1／8	口縁端摩滅し、断面は復元的に図示。	791
50-52		住6覆土	外反口縁鉢	口径148、頸径120、残高52	粘土粗、1mm石英・クサリ礫少	良好	橙褐色	胴外下部ケズリ後、胴外上部・口縁部外ハケ後頸部横ミガキ口縁内ハケ、胴内ナデ。	2／3		816



第48図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）



第49図　6号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）



第 50 図　6 号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）

外には、粘土を指でなで付け補強した痕跡も認められる。

62 は朝鮮半島系土器胴部片で、いずれも陶質。64 ～ 71 はタコ壺で、65 は平底をなす。

7 号竪穴住居跡（図版 13、第 51 図）

3 区中央やや東部、6 号竪穴住居跡の北、8 号竪穴住居跡の南に位置する。検出当初、本住居跡北側は 8 号住居跡と大きく重なると想定していたが、若干掘り下げた後、初めて北壁を明瞭に検出できるようになった。そのため、遺物には若干、8 号住居跡に帰属する遺物が含まれる可能性がある。また、遺構検出時において、主軸の方向を誤り、掘り過ぎたため、住居跡西壁、東南部では段が生じているが、最終的には住居跡南西部隅以外の壁を、ほぼ明瞭な形で検出できた。

主軸を略南北、N － 12° － W に向けたほぼ正方形の平面形を呈し、南北 3.8m 前後に復元され、東西 3.7m を測る。住居跡東北隅は遺存状況が良好であり、壁の高さ 0.4m 弱を測る。床面中央の

やや西よりに、南北0.8m、東西0.9mの範囲で暗褐色細砂を覆土とする浅く掘り込んだ炉跡が検出された。覆土は白黄褐色細砂を斑状に30%程含む灰褐色細砂。P1・P2は暗褐灰色細砂、P3は灰褐色細砂。

床面やや北寄り、炉跡の上部から滑石製有溝・孔石錘およびそれとほぼ同等の長さ10cm余りの未加工の砂岩等の自然石が多量に出土した（巻頭図版1）。

出土範囲は北西－南東に主軸を向けた長軸1.3m、短軸0.9mの楕円形を呈し、破片などもあるが、180点余りを数える（図版55～58、第81・82表）。有溝・孔石錘はもちろんであるが、未加工の砂岩等の自然石も大きさ、形態をほぼ揃えているために、錘として使用されたものと考えられる。これら石錘・砂岩を除去した床面のほぼ中央で炉跡が検出されているので、住居廃絶後の凹みに、石錘、砂岩を綴じ付けた漁網一式が放置されたと推測される。

また、住居北東部隅近くからは土器と大形の礫、砥石が、炉の西側から土器がまとまって出土した。このうち第53図7、第54図17・19・22・23、第55図35・37・39・40・42、第56図57・70・71・73、第57図77はほぼ床面の直上からの出土品である。また、第55図38、第54図23は横倒しになり、意図的に38の底部を23の口縁部に差し込んだような状態で出土している。

出土土器（巻頭図版9、図版31～34、第53～57図、第24～27表）　1・2は在地系大形甕の口縁部。2は頸部外面に高い突帯を貼付し、その頂部をハケメ工具で刺突して刻目を施す。3・4は在地系直口壺の口縁部か。5は在地系短頸直口壺。6は畿内系二重口縁壺か。器壁が厚く、頸

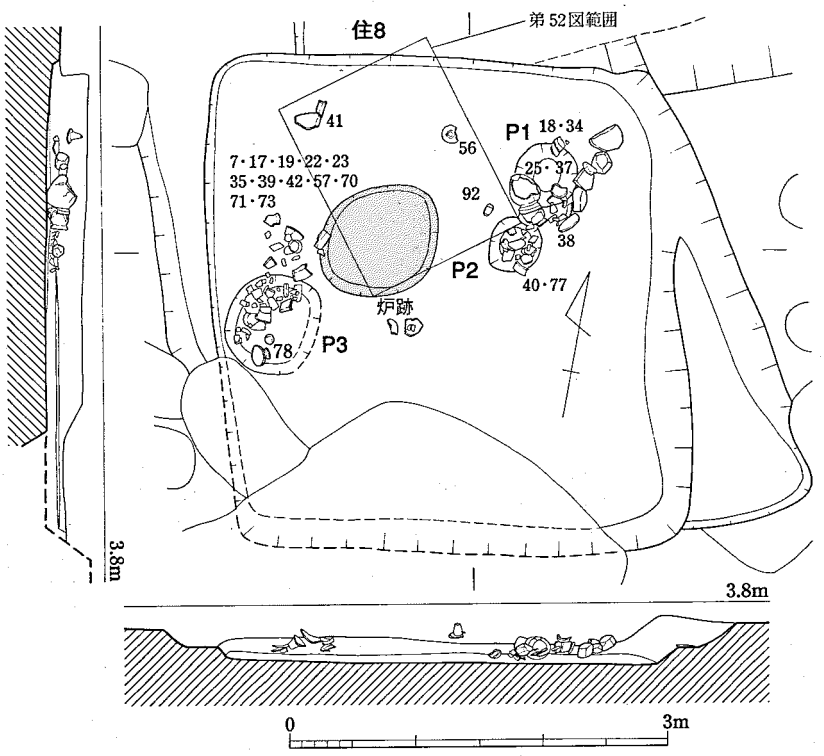
第23表　6号竪穴住居跡出土土器観察表（3）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
50-53		住6覆土	外反口縁鉢	口径156、頸径126、残高40	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	胴外下部ケズリ、口縁外指頭圧痕後内外横ミガキ。口縁内わずかにハケ残。	1／4		817
50-54	31	住6覆土	外反口縁鉢	口径178、頸径144、残高51	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い	外淡橙褐色、内淡黄褐色	胴外ケズリ、口縁外指頭圧痕後外～口縁内ミガキ。胴内摩滅。	1／3		815
50-55		住6カマド煙道南	直口鉢	口径124、残高40	粘土細、1～3mm長石・金雲母少	やや甘い	白黄褐色	外横ミガキ、内暗文風の縦ミガキ。	1／6		1172
50-56		住6カマド周辺	直口鉢	残高46	粘土細、1mm石英・長石少	やや甘い	淡橙褐色	口縁外タタキ、胴下部外ケズリ後外疎らなミガキ。内摩滅。	小片		799
50-57		住6床面	直口鉢	口径108、残高32	粘土細、1mm石英・長石少	良好	白褐色	内外摩滅。	1／8		1097
50-58		住6no.10	脚付鉢脚部	残高43	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	外横ミガキ、脚内ナデ、鉢内ミガキ。	脚鉢接合部全周		790
50-59		住6覆土	小形器台裾部	裾径122、残高27	粘土細、1mm石英・長石少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内斜めハケ。	1／8		1094
50-60	31	住6カマド煙道上面	山陰系鼓形器台	口径202、括部径92、残高91	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄白褐色	外横ナデ、受部内横ミガキ、括部内ナデ、裾部内ケズリ。	2／3		994
50-61		住6覆土	粗製鉢？	胴径250、残高80	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外淡褐灰色、内暗褐色	胴の中間で屈曲。外板ナデで、屈曲部部下に指頭圧痕残。内板ナデ、指頭圧痕。屈曲部外に粘土を指でナデ付け補強した痕跡残。	1／6		827
50-62		住6カマド煙道上面	半島系土器胴部片			陶質	灰色	外縄席文タタキ、内方向不定のナデ。	小片		2358
50-63		住6no.17	半島系土器胴部片			陶質	明灰色	外平行タタキ後沈線・凹線、内平滑なナデ。	小片		2339
50-64	31	住6カマド煙道上面	タコ壺	口径40、器高105	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	内外ナデ。	底全周、口縁1／3		993
50-65	31	住6覆土	タコ壺	口径65、器高83	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	外明褐色、内暗褐色	内外ナデ。	ほぼ完形		808
50-66		住6no.11	タコ壺	残高53	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	底全周		789
50-67	31	住6no.14	タコ壺	口径44、器高87	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	褐色	内外ナデ。	口縁1／2、胴全周		792
50-68	31	住6no.16	タコ壺	口径36、器高85	粘土細、1～3mm石英少	良好、完形だが黒斑無し	白褐色	内外ナデ。	ほぼ完形		793
50-69	31	住6カマド煙道南	タコ壺	口径36、器高81	粘土粗、1mm石英少	良好、外面黒斑	淡黄灰褐色	内外ナデ。	ほぼ完形		1004
50-70		住6カマド袖内	タコ壺	口径36、残高68	粘土細、1mm石英・長石少	やや甘い	外淡黄橙褐色、内明褐色	内外ナデ。	1／6		801
50-71		住6カマド覆土	タコ壺	残高85	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好、外面黒斑	淡灰黄褐色	内外ナデ。	底全周		802

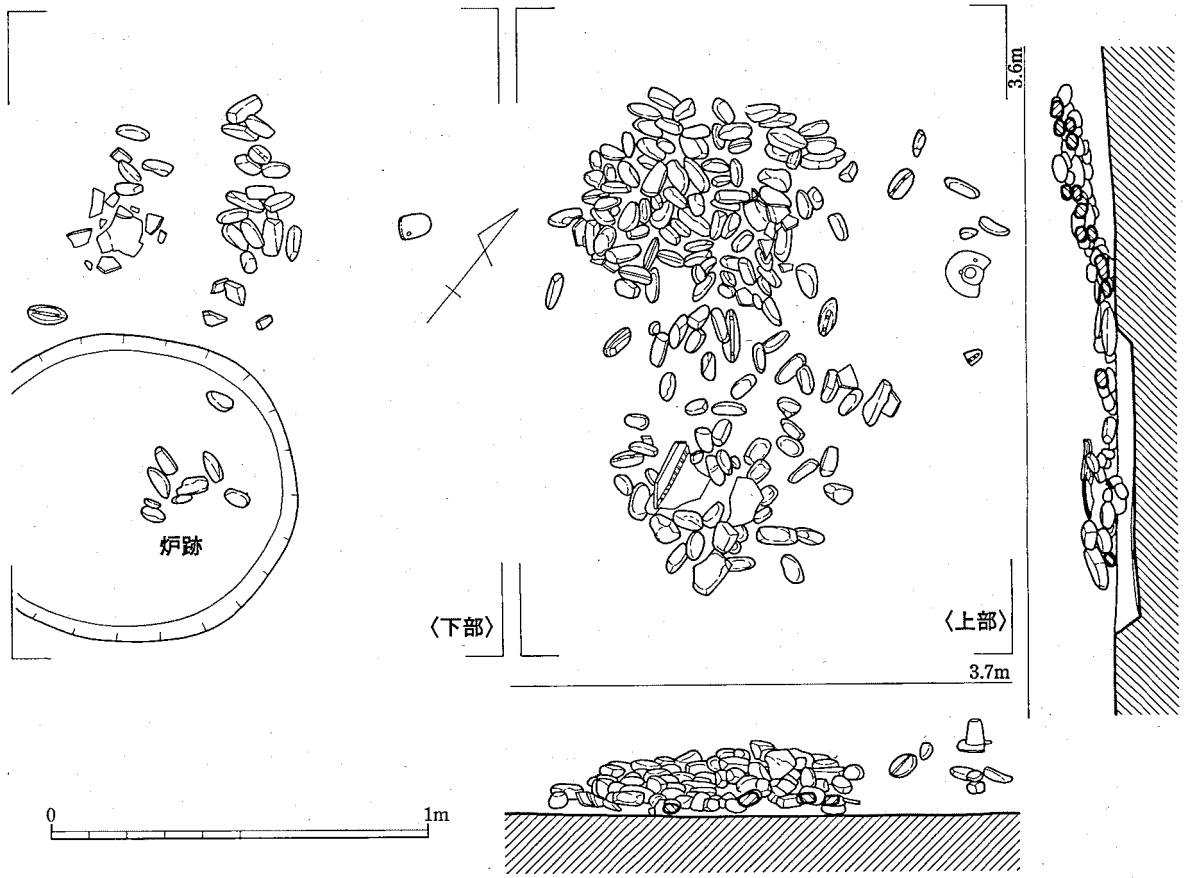
部が短い器形で、肩外面にミガキ・斜めハケに先立つ縦方向のハケ条痕の残ることが特徴的。7～11は畿内系の直口壺で、11は7号住居跡・9号住居跡間の包含層からの出土品。7は口縁端部がシャープで、胴外面～口縁内面を板工具によるミガキ風調整により仕上げる。12～20は山陰系二重口縁壺。13・17は口縁端の外へのつまみ出しが顕著で、19は口縁内へ折り曲げ気味である。16は大形品で、19は肩部に櫛描直線文、20は櫛描波状文を施文する。

21・22は畿内系の中形直口壺。22胴内のハケは上下で原体が異なり、頸部内面には接合痕が残る。23は脚付壺の脚部付近か。脚部外面は暗文風の縦ミガキを施す。25・26は粗製の小形丸底壺か。

26～28は在地系甕口縁部



第51図　7号竪穴住居跡実測図（1／60）



第52図　7号竪穴住居跡石錘出土状況実測図（1／20）

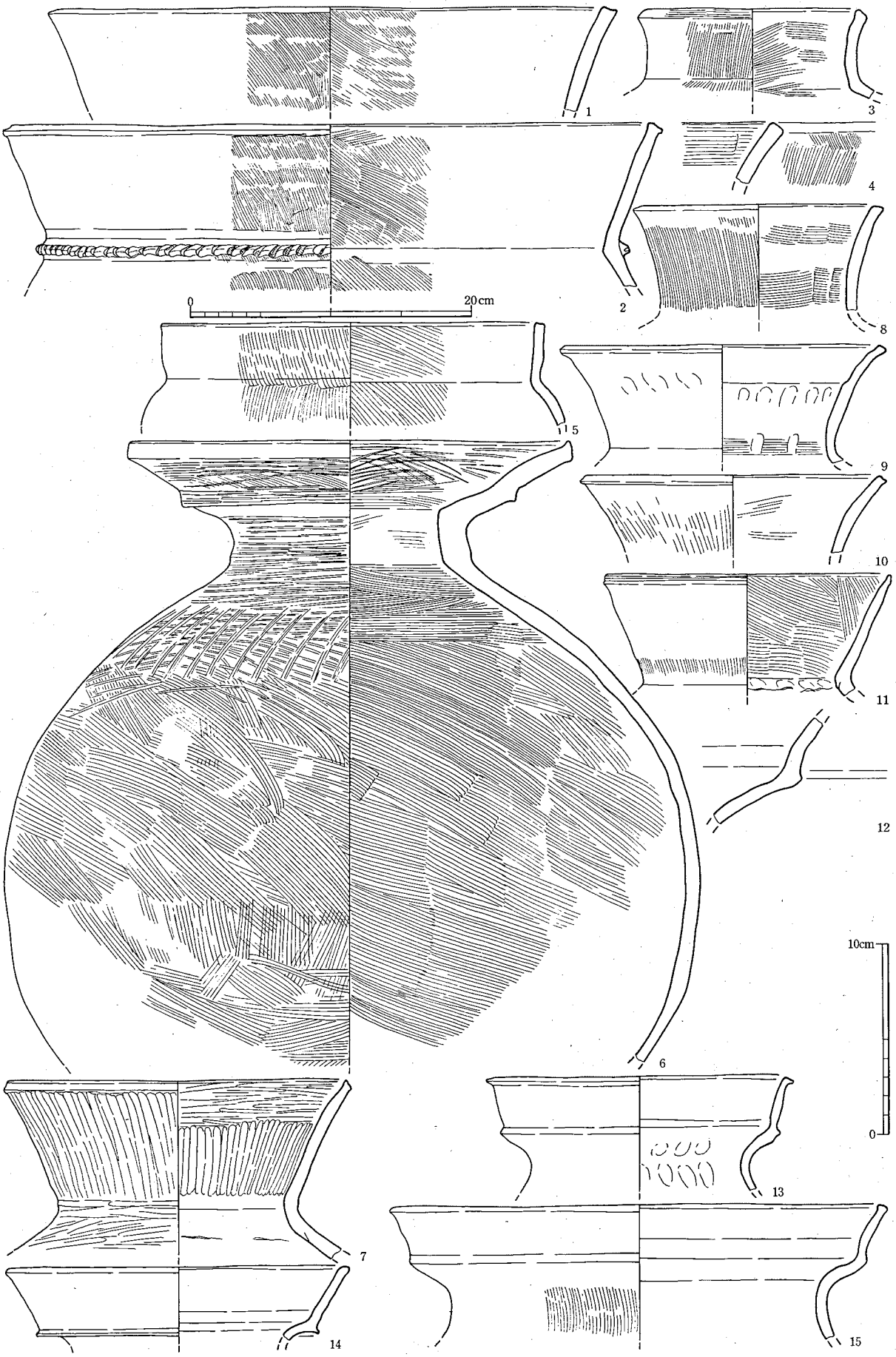
で、28・29は口縁端部が凹む。これらの在地系甕は隣接する36号竪穴住居跡に帰属する可能性も考えられる。30～32は五様式系甕か。30は口縁部が緩やかに外反し、胴上部内面に接合痕を多く残す。32は口縁端部を上方に拡張させる。33・34は庄内系甕で、いずれも口縁端部を微かにつまみ出し、胴外に右上がりタタキを施す。35～44は布留系甕。36は肩部に櫛描波状文、39は頸外下に沈線直線文、42は肩部に沈線波状文、40・41は肩部にハケメ工具小口刺突文を施文。35・36・38・39・42・44は口縁端部を内上につまみ上げ、40は端部を外につまみ出す。38は胴部外面ハケメの切合いが良く観察できる。39は胴外面に赤色顔料が付着し、40は胴上部のハケメをほとんどナデ消す。41は胴外面下部にハケを切る板工具の痕跡が残る。

45～50は高杯口縁部で、外面横ミガキの48以外はいずれも外面縦ミガキで仕上げ、在地系か。51・52は高杯杯底部片で、52は在地系。53～61は高杯脚部。54・56・58は半乾燥時に穿孔を施すが、57は粘土の軟らかい時点で穿孔。53は56・58とは接合法が異なり、脚内頂部が突出し、中央に軸痕が残る。57・59は裾が屈曲せずにスカート状に広がるもので、調整も他と異なる。

63・64は外反口縁鉢で、62は内外ミガキ仕上げの精製品。64～71は直口鉢で、64～68は内外ミガキ仕上げの精製品。69は内外粗いナデで仕上げ、外面には接合痕を残す。71は平底で、内外に板ナデ痕を残す。72～74は大形外反口縁鉢で、72は7号住居跡東の遺構面から出土したもの。73は口縁部を上に拡張し、胴下部外面のケズリ、胴上部～口縁外面の横ミガキが特徴的。75は山陰系大形鉢。76は脚付鉢脚部片か。77は精製の畿内系脚付鉢、78は山陰系脚付鉢。79は大きな平底をなす粗製の大形鉢として図示したが、他に例を見ない器形。胎土、焼成は土師器と考えて間違いなく、特殊な用途を想定すべきか。80～83は精製の小形器台。82は0・4・8時方向に半乾燥時穿孔を施し、脚裾にハケの後、ミガキの前の補修のための粘土貼付けが確認できる。83は受

第24表　7号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

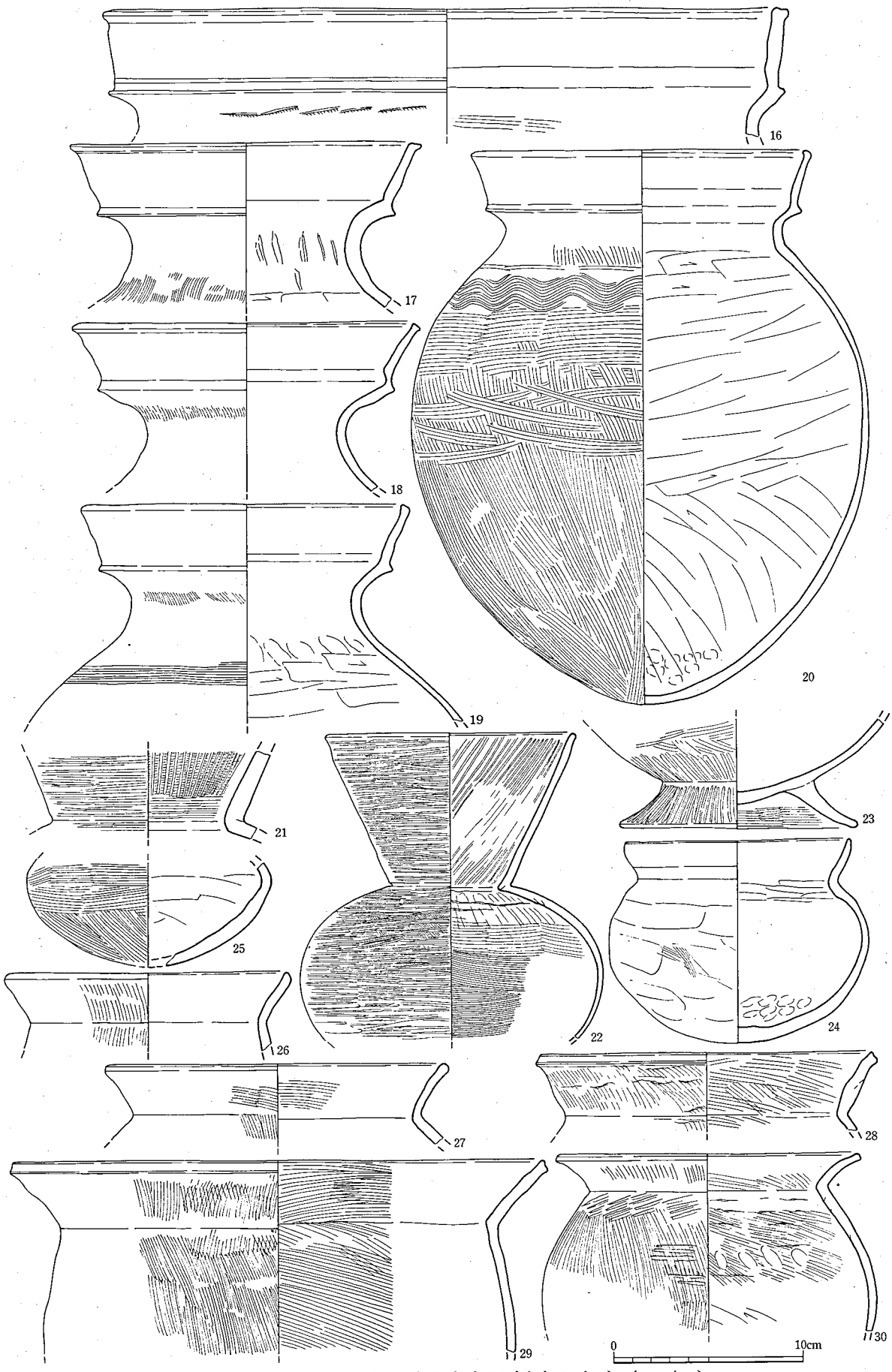
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
53-1		住7覆土下部	在地系大形甕	口径378、残高73	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い、器肉灰黒色	淡黄褐色	口縁端部角張る。内外斜めハケ。	1／6		1357
53-2		住7石錘間	在地系大形甕	口径442、残高114	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い、器肉黒変	淡黄白褐色	頸部外面に高い突帯を貼付、頂部をハケメ工具で刺突して刻目を施す。内外ハケ。	1／8		1369
53-3		住7覆土上面	在地系直口壺	口径112、残高47	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡褐黄色、内淡黄褐色	口縁端部面をなし、端面ハケ施す。外縦ハケ、内横ハケ。	1／8		1337
53-4		住7覆土	在地系直口壺？	残高33	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	外縦ハケ、内横ハケ。	小片		1421
53-5		住7覆土上部	在地系短頸直口壺	口径192、頸径194、残高54	粘土粗、1～3mm石英少	良好、内面黒変	黄褐色	外縦ハケ後口縁横ナデ、口縁斜めハケ、胴斜めハケ。	1／8		1423
53-6	32	住7覆土上部	畿内系？二重口縁壺	口径228、頸径122、胴径364、残高328	粘土粗、1～5mm石英多	やや甘く、内面黒変	淡褐色～黄褐色	器壁が厚く、頸部が短い。肩外ミガキ・斜めハケに先立つ縦方向ハケ条痕の残ることが特徴的。口縁内外ハケ後、肩外～口縁内ミガキ。胴内ハケ。	口縁全周、胴1／4		1323
53-7		住7no.10	畿内系直口壺	口径176、残高96	粘土粗、1～3mm石英多	良好、外大黒斑あり	外黄褐色、内淡灰黄褐色	口縁端シャープ。胴外～口縁内板工具によるミガキ風調整。	1／4		1313
53-8		住7覆土	畿内系直口壺	口径120、残高55	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡褐白色、内淡黄褐色	外縦ハケ、内横ハケ後口縁内外ナデ。	1／6		1346
53-9		住7覆土上部	畿内系直口壺	口径166、残高62	粘土粗、1～3mm石英・長石・クサリ礫少	良好	外灰黄褐色、内淡黄褐色	口縁内外指頭圧痕水平に巡り、頸部内横ハケ残。口縁内外横ナデ仕上げ。	1／4		1332
53-10		住7床面	畿内系直口壺	口径152、残高42	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外縦ハケ、内横ハケ後内外ナデ。	1／8	破損後二次的に火を受け、内に煤付着	1364
53-11		住7・9間包含層	畿内系直口壺	口径146、残高61	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	明褐色	口縁端シャープで外面凹線巡る。頸部外縦ハケ後口縁外ナデ。口縁内斜めハケ、頸部内接合痕残。	1／4		1372
53-12		住7no.12	山陰系二重口縁壺	残高55	粘土粗、1～5mm石英多	良好	褐色	内外器表剥離。	小片	傾き不安。	1318
53-13		住7覆土上部	山陰系二重口縁壺	口径152、残高61	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外褐白色、内淡橙黄褐色	口縁端の外へのつまみ出し顕著。内外ナデで、頸部内指頭圧痕水平に残。	1／4		1430
53-14		住7覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径172、残高38	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	外淡灰褐色、内黄白褐色	内外ナデ。	1／8		1330
53-15		住7覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径152、残高69	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外灰黄褐色、内淡褐黄色	頸部外縦ハケ後口縁内外ナデ。	1／6		1347



第53図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1・2は1／4、他は1／3）

第25表　7号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

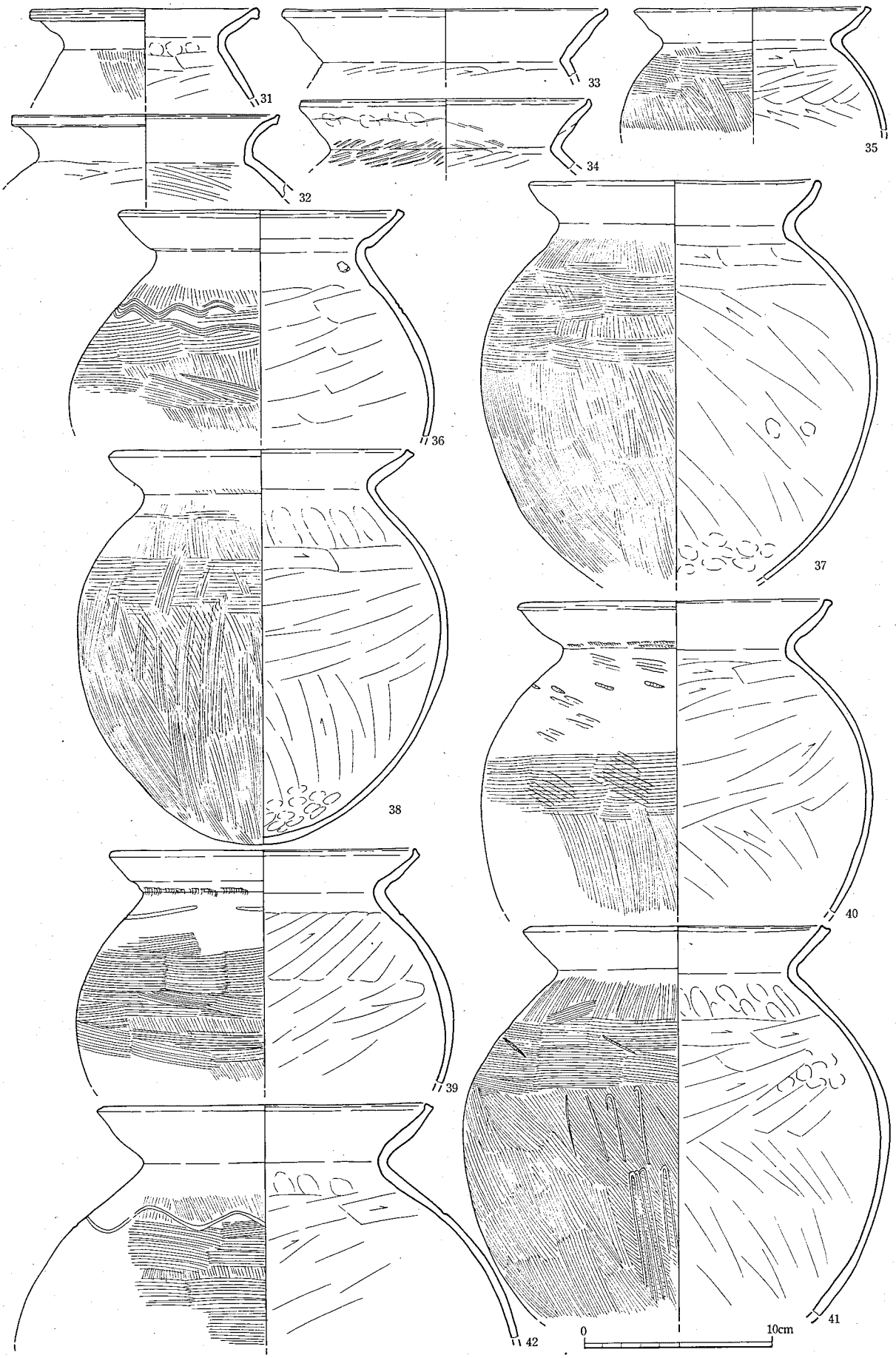
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
54-16		住7	山陰系二重口縁壺	口径346、残高67				大形品で口縁端外につまみ出し。口縁内外ナデ、頸部外ハケメ静止痕残。			1231
54-17		住7no.10	山陰系二重口縁壺	口径174、残高88	粘土粗、1～3mm石英多	良好、胴内面黒変	淡黄褐色	口縁端の外へのつまみ出し顕著。胴外ハケ、胴内ケズリ、頸部内絞り痕残。	1／3		1311
54-18		住7no. 6	山陰系二重口縁壺	口径174、残高89	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	黄褐色	内外ナデで、頸部外面に縦ハケ残。	1／2		1305
54-19	32	住7no.10	山陰系二重口縁壺	口径164、頸径120、残高113	粘土細、1mm石英・クサリ礫極少	良好	外黄橙褐色、内淡黄褐色	肩外櫛描直線文。口縁内外ナデ、頸部外縦ハケ残。胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／4		1312
54-20	33	住7no. 7	山陰系二重口縁壺	口径168、頸径148、胴径239、器高291、胴高243	粘土粗、1～5mm石英多	やや甘い、胴外15cm大黒斑	淡黄褐色	口縁内へ折り曲げ。肩外櫛描波状文。胴外ハケは頸下縦ハケ、胴肩横ハケ、胴下部縦ハケ、胴中下部横ハケの順。胴内ケズリ。	ほぼ完形	器表褐変する個所あり。口縁外面、胴肩より下に煤、胴内下部コゲ付着	1306
54-21		住7覆土下部	中形直口壺	頸径100、残高46	粘土粗、1mm石英・長石極少	良好	淡黄橙褐色	外横ミガキ、内下部横ミガキ、上部斜めハケ後暗文縦ミガキ。	1／4		1429
54-22	31	住7no.10	中形直口壺	口径128、頸径62、胴径158、残高160	粘土粗、1～3mm石英・長石・クサリ礫少	良好	外淡黄橙褐色、内淡黄褐色	胴部の張り強く、口縁直線的に外傾。胴外下部ケズリ、胴外上部ハケ後外横ミガキ。口縁内斜め暗文ミガキ、胴内ナデ後ハケ。胴内のハケは上下で原体が異なり、頸部内接合痕残。	口縁1／2、胴1／2、頸全周		1310
54-23	32	住7no.10	脚付き壺脚部？	裾径122、残高57	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	脚緩やかに外反し端部丸い。胴下部外斜めハケ後縦ミガキ。脚外縦ミガキ、脚内横ハケ、胴内ナデ。	脚全周、胴1／6		1314
54-24	33	住7覆土下部	小形丸底壺	胴径128、残高54	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	淡黄白褐色	外ハケ、内ケズリ。	1／4		1341
54-25		住7no. 4	小形丸底壺	口径116、頸径106、胴径138、器高106、胴高85	粘土細、1～3mm石英少	良好、外下部に5cm大黒斑	橙褐色	口縁部わずかに内湾。胴外ハケ後板ナデか。胴内ナデ、頸内板ナデ、口縁内外横ナデ。	ほぼ完形		1302
54-26		住7覆土上部	在地系甕	口径144、残高42	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	口縁・胴外縦ハケ、内ナデ。	1／4		1422
54-27		住7覆土上部	在地系甕	口径152、残高42	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	胴外縦ハケ、口縁内外横ハケ後横ナデ。	1／12	径、傾き不安	1424
54-28		住7覆土上部	在地系甕	口径174、残高42	粘土粗、1～3mm石英少	良好	明褐色	口縁端凹む。口縁外縦ハケで接合痕状の皺多く残す。口縁内横・斜めハケ。	1／4	外面煤付着	1336
54-29		住7覆土上部	在地系甕	口径276、残高101	粘土細、1～3mm石英少	やや甘く、外面褐変	外淡黄灰褐色、内黄褐色	口縁端凹む。胴・口縁外縦ハケ。口縁内横ハケ、胴内斜めハケ。	1／8		1338
54-30		住7覆土上面	五様式系甕	口径156、頸径126、胴径176、残高103	粘土粗、1mm石英少	やや甘い、器肉完全に黒変	暗褐色	胴外右上がりタタキ後縦ハケ。口縁外縦ハケ、口縁内横・斜めハケ後内外ナデ。胴上部内ハケで、接合痕・指頭圧痕残。胴下部内ケズリ。	1／3		1339
55-31		住7覆土	五様式系甕	口径116、残高49	粘土細、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内黄褐色	口縁端部微かに凹む。胴外縦ハケ、胴内ケズリ。	1／6		1427
55-32		住7床面	五様式系甕	口径138、残高44	粘土粗、1mm石英少	良好	灰黄褐色	口縁端部上方に拡張。胴外板ナデ、胴内ハケ、口縁内外ナデ。	1／6		1365
55-33		住7覆土下部	庄内系甕	口径168、残高36	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	胴外右上がりタタキ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／3		1345
55-34		住7no. 6	庄内系甕	口径150、残高37	粘土粗、1mm石英少	良好、外面黒斑	淡黄褐色	胴外右上がりタタキ、口縁外指頭圧痕、口縁内ハケ後内外横ナデ。胴内ケズリ。口縁内外に接合痕を残す。	1／4		1304
55-35		住7no.10	布留系甕	口径120、頸径94、残高64	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	口縁端わずかにつまみ上げ。胴外頸下横ハケ後中部斜めハケ。胴内ケズリ。	口縁1／8、胴1／4		1316
55-36	32	住7覆土下部	布留系甕	口径144、頸径110、胴径182、残高118	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い	淡黄褐色	胴肩櫛描波状文。口縁端内へつまみ上げ。胴外頸下縦ハケ、肩横ハケ、胴下部縦ハケ、胴下部斜めハケの順。頸内にケズリにより生じた粘土片が付着。	口縁1／4、胴全周		1340
55-37	33	住7no. 4	布留系甕	口径148、頸径124、胴径212、残高208	粘土粗、1～3mm石英・長石多	やや甘い、胴部外面大黒斑あり	外灰白褐色、内灰褐色	口縁端部丸い。口縁内外ナデ、胴外ハケ、胴内ケズリ。	口縁全周、胴1／3	口縁外面、内面は摩滅が顕著。	1301
55-38	32	住7no. 3	布留系甕	口径152、頸径122、胴径184、器高206、胴高185	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄褐色	口縁端内へつまみ上げ。胴外ハケは頸下縦ハケ・胴下部粗い左上がり斜めハケ、肩部横ハケ、胴下部細かい縦ハケの順か。	ほぼ完形	完形であるが煤は付着せず	1300
55-39		住7no.10	布留系甕	口径156、頸径128、胴径198、残高122	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内褐色	頸下沈線直線文。口縁端内へつまみ上げ。頸部外面にハケメ静止痕残。胴外のハケメ切合い不明。	1／3	胴中部外に薄く赤色顔料付着	1358
55-40	32	住7no. 1	布留系甕	口径156、頸径123、胴径206、残高213	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色～灰黄褐色	肩ハケメ工具小口刺突文。口縁端外へつまみ出し。胴外上部タタキ後ナデ、下部ハケ、頸下にハケメ静止痕残。	口縁ほぼ全周、胴2／3	口縁外面、胴最大径より下に煤付着	1297
55-41		住7no.11	布留系甕	口径154、頸径128、胴径224、残高204	粘土細、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	肩ハケメ工具小口刺突文。胴外のハケは頸下縦ハケ、胴状部横ハケ、胴下部斜めハケの順。胴外下部にハケを切る板工具の痕跡残。	1／3		1321
55-42	32	住7no.10	布留系甕	口径168、残高123	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄灰褐色	肩沈線波状文。口縁端内へつまみ上げ。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁全周、胴1／8	胴外面薄く煤付着。	1320
56-43		住7覆土下部	布留系甕	口径164、残高26	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	灰褐色	内外ナデ。	1／4	あるいは庄内系か	1428
56-44		住7覆土	布留系甕	口径194、残高50	粘土細、1～3mm石英少	良好	外黄白褐色、内褐色	口縁端内へつまみ上げ。胴外縦ハケ、口縁内横ハケ後口縁内外横ナデ。	1／8		1420



第54図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

第26表　7号竪穴住居跡出土土器観察表（3）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
56-45		住7石錘間	在地系高杯口縁	口径118、残高29	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外斜めハケ後内外縦ミガキ。	1／4		1371
56-46		住7床面	在地系高杯口縁	口径262、残高18	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄橙褐色	外斜めハケ、内暗文風斜めミガキ。	1／10		1367
56-47		住7覆土下部	在地系高杯口縁	残高23	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外斜めハケ後内外暗文風縦ミガキ。	小片		1435
56-48		住7覆土下部	高杯口縁部	残高28	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内横ハケ後暗文風縦ミガキ。	小片		1436
56-49		住7覆土下部	在地系高杯口縁	残高22	粘土細、1～3mm石英少	良好	外褐灰色、内暗褐色	外指頭圧痕後暗文風縦ミガキ、内縦ミガキ。	小片		1434
56-50		住7覆土下部	在地系高杯口縁	残高44	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好、外面黒斑	外褐黄色、内黄橙褐色	外斜めハケ、内横ハケ後内外暗文風縦ミガキ。	小片		1354
56-51		住7覆土	高杯杯底部片	残高15	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	杯底外ケズリ後外横ミガキ。内暗文縦ミガキ。	1／6		1329
56-52		住7覆土下部	在地系高杯杯底部	残高33	粘土粗、1mm石英少	良好	褐色	口縁と杯底部の境は内外に明瞭な段。外横ミガキ後杯底縦ミガキ。内暗文風の放射状ミガキ。	1／8		1352
56-53		住7覆土下部	高杯脚部片	残高51	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡橙褐色	脚内頂部が突出し、中央に軸痕残。杯底外横ミガキ、杯内ミガキ？、脚外縦ハケ、脚内ナデ。	脚全周、杯1／6		1351
56-54		住7覆土上部	高杯脚部片	残高56	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外橙褐色、内黄橙褐色	半乾燥時穿孔1個所残。外縦ハケ後横ミガキ、脚柱内上部横板ナデ、下部縦板ナデ、脚裾内ハケ。	1／3		1328
56-55		住7覆土上部	高杯脚部片	裾径126、残高13	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外黄橙色、内橙褐色	内外ハケ。	1／6		1425
56-56	32	住7no.8	高杯脚部片	裾径134、残高79	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡橙褐色～淡黄橙褐色	0・6時方向に半乾燥時穿孔。屈曲部外縦ハケ、裾横ハケ後外横ミガキ、脚内ナデ下ろし、脚裾内横ハケ。	脚柱全周、裾3／4		1308
56-57		住7no.10	高杯脚部片	裾径124、残高69	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	外褐赤色、内褐黄色	裾が屈曲せずにスカート状に広がる。0・3・6・9時方向に乾燥前穿孔残。外縦ハケ後縦ミガキ、内ケズリ。	全周		1324
56-58		住7覆土上部	高杯脚部片	残高72	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	0・4・8時方向に半乾燥時穿孔残。外横ミガキ、内板ナデ・ナデ。	全周	破損後火を受け内外煤付着	1326
56-59		住7覆土下部	高杯脚部片	裾径114、残高45	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	裾が屈曲せずにスカート状に広がる。外指頭圧痕、内板ナデ。	裾1／4		1350
56-60		住7覆土上部	高杯脚部片	残高82	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	褐色	外摩滅、下部縦ハケ。脚柱内上部ナデ、下部ハケ。杯内放射状ミガキ。	脚柱全周	内外摩滅進む	1426
56-61		住7覆土上部	高杯脚部片	裾径116、残高11	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い、外黒変	外褐色、内黄褐色	外斜めハケ後ミガキ、内横ハケ。	1／8		1327
56-62		住7覆土下部	外反口縁鉢	口径118、頸径102、器高60、胴高41	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	頸外縦ハケ後外～胴内ミガキ。胴下部内はミガキが疎らで放射状の工具痕が残る。	1／4	二次的に火を受け煤付着	1399
56-63		住7覆土下部	外反口縁鉢	口径116、残高53	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色～灰褐色	口縁端を上に拡張。胴外下部ケズリ、胴外上部ハケ。口縁内外ナデ。胴内横ハケ。	1／4	二次的に火を受け煤付着	1348
56-64		住7覆土下部	直口鉢	口径118、残高24	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外下部ケズリ後内外横ミガキ。	1／8		1433
56-65		住7覆土下部	直口鉢	口径118、残高23	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外下部ケズリ後外横ミガキ。内ナデ？。	1／8		1431
56-66		住7覆土下部	直口鉢	口径118、残高24	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	内外ミガキ。	1／10		1432
56-67	33	住7覆土下部	直口鉢	口径118、器高39	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い、器肉灰変	外橙褐色、内黄橙褐色	外下部ケズリ後外ミガキ。口縁内外横ナデ。内下部ハケ。	2／3		1343
56-68		住7床面下層	直口鉢	口径162、残高23	粘土粗、1mm石英少	良好	褐色	外ハケ後疎らに横ミガキ、内横ミガキ。	1／8	口縁外面～内面煤？コゲ？付着	1368
56-69		住7覆土上部	直口鉢	口径86、残高25	粘土細、1mm石英極少	やや甘い、内外黒斑	黄白褐色	内外粗いナデで、外面には接合痕を残す。	1／3		1333
56-70		住7no.10	直口鉢	口径102、残高47	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁内外ナデ、胴下部外ハケ。	1／4		1319
56-71	33	住7no.10	直口鉢	口径92、底径38、器高72	粘土粗、1～3mm石英少	良好、外面大黒斑	外淡黄褐色、内褐黄色	平底気味。内外板ナデによる粗雑な仕上げ。	2／3		1315
56-72		住7東遺構面	大形外反口縁鉢	口径266、残高109	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	口縁わずかに上に拡張。口縁内外ナデ、胴内外ハケ。	口縁1／8、胴1／6	外面赤変個所あり	1362
56-73	33	住7no.10	大形外反口縁鉢	口径348、頸径321、胴径352、器高254、胴高207	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好、胴下部1／3周黒斑	淡黄褐色	口縁上に拡張。外ハケ後下部ケズリ後上部横ミガキ。口縁内細かい横ハケ、胴内粗いハケ。口縁内には疎らにミガキを施すようにも見える。	口縁1／2、胴下部全周		1309
56-74		住7覆土上部	大形外反口縁鉢	残高80	粘土粗、1～3mm石英多	良好、内面完全に黒変	暗褐色	口縁上に拡張。胴外縦ハケ後横ミガキ、口縁外ハケ後ナデ、内横ハケ。	小片		1335
57-75		住7石錘間	山陰系大形鉢	口径290、残高98	粘土粗、1～3mm石英・長石・クサリ礫多	やや甘く、器肉黒変	外白褐灰色、内淡灰褐色	胴外ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／10		1370
57-76		住7床面	脚付鉢脚部	残高18	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡褐白色	外ナデ、脚内工具痕、鉢内ナデ。	全周		1363
57-77		住7no.1	脚付鉢脚部	裾径172、残高32	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	裾内に1個所半乾燥時穿孔残。外横ミガキ、内ナデ。	1／3		1298
57-78	33	住7P3	脚付鉢	口径163、裾径80、器高71	粘土粗、1～5mm石英・長石少	良好	外橙褐色、内淡黄褐色	鉢外縦ハケ、鉢内摩滅、脚内外ナデ。鉢内はミガキの可能性あり。	口縁1／2、脚全周		1322
57-79		住7覆土	粗製大形鉢？	残高51	粘土粗、1～3mm石英・長石多	やや甘い、外面底部黒変	淡灰黄褐色	大きな平底から内湾しつつ胴部が立ち上がる。外雑なナデ、一部板ナデ。内板ナデ。外に補強のため粘土貼付け。	1／6	内面は使用のためか褐変、径不安。底外に煤付着	1359
57-80		住7覆土	小形器台	残高17	粘土細、1mm石英極少	良好	淡黄橙褐色	口縁端欠損。外ヘラケズリ後横ミガキ、内斜めハケ後暗文風ミガキ。	1／6		1353



第55図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）

部が鉢状となるもの。84は山陰系鼓形器台裾部。

85は土師器甑底部片で、直径3mm前後の孔を密に穿孔する。86は両耳付甕。肩部に2個所、方形で縦に穿孔した耳を付ける。器形は布留系甕に類似するが、縦方向に穿孔する耳は一般的な土師器に例がなく、朝鮮半島西南部地域の両耳付壺と同様な機能を持たせていたと推測される。器壁が厚く、口縁部の作りも一般的な布留系甕とは異なる。また胴部外面は条痕が明瞭に残らない板ナデで仕上げ、胴部内面はハケメ後、板ナデを施し光沢が生じている。頸部内面には接合痕も残り、通常の土師器甕の製作技法とは様々な相違点がある。したがって、土師器甕の製作技法に習熟していない人物が布留系甕の形態を取り入れて、製作した可能性が高いと思われる。87～89は朝鮮半島系土器胴部片で、87・89は軟質、88は瓦質焼成である。

90～96はタコ壺。90は底に穿孔し、94・96は底部を絞りすぼまる器形を作るが、閉じずに仕上げて孔とする。また、94は口縁に2個所穿孔する。

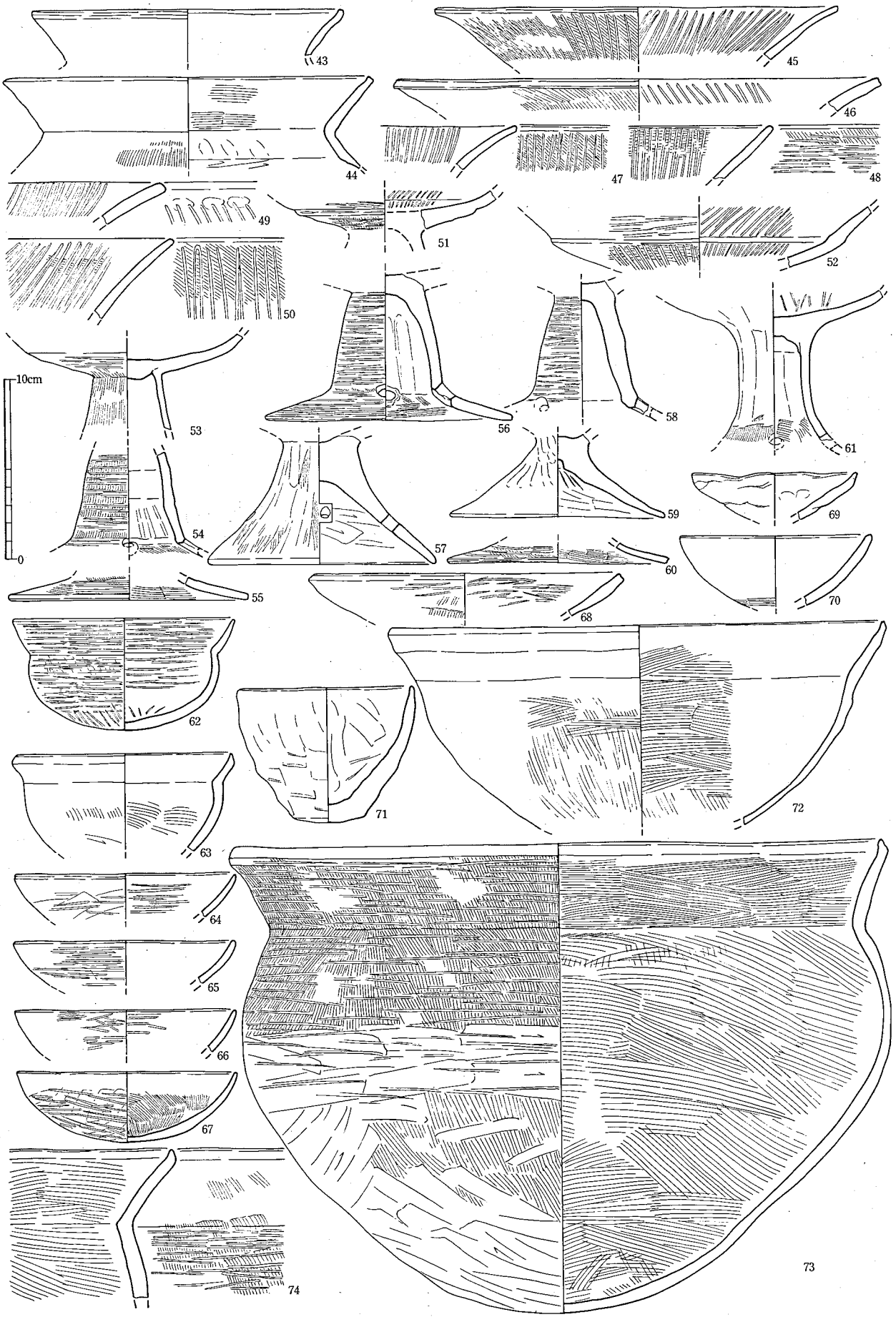
8号竪穴住居跡（図版13・14、第58図）

3区東部に位置し、南西部を7号竪穴住居跡に切られ、南東壁を1号竪穴住居跡に切られる。覆土は黄褐色細砂を斑状に30%程含む灰褐色細砂で、1・7号竪穴住居跡覆土より明るい色のため、平面形は明瞭であった。

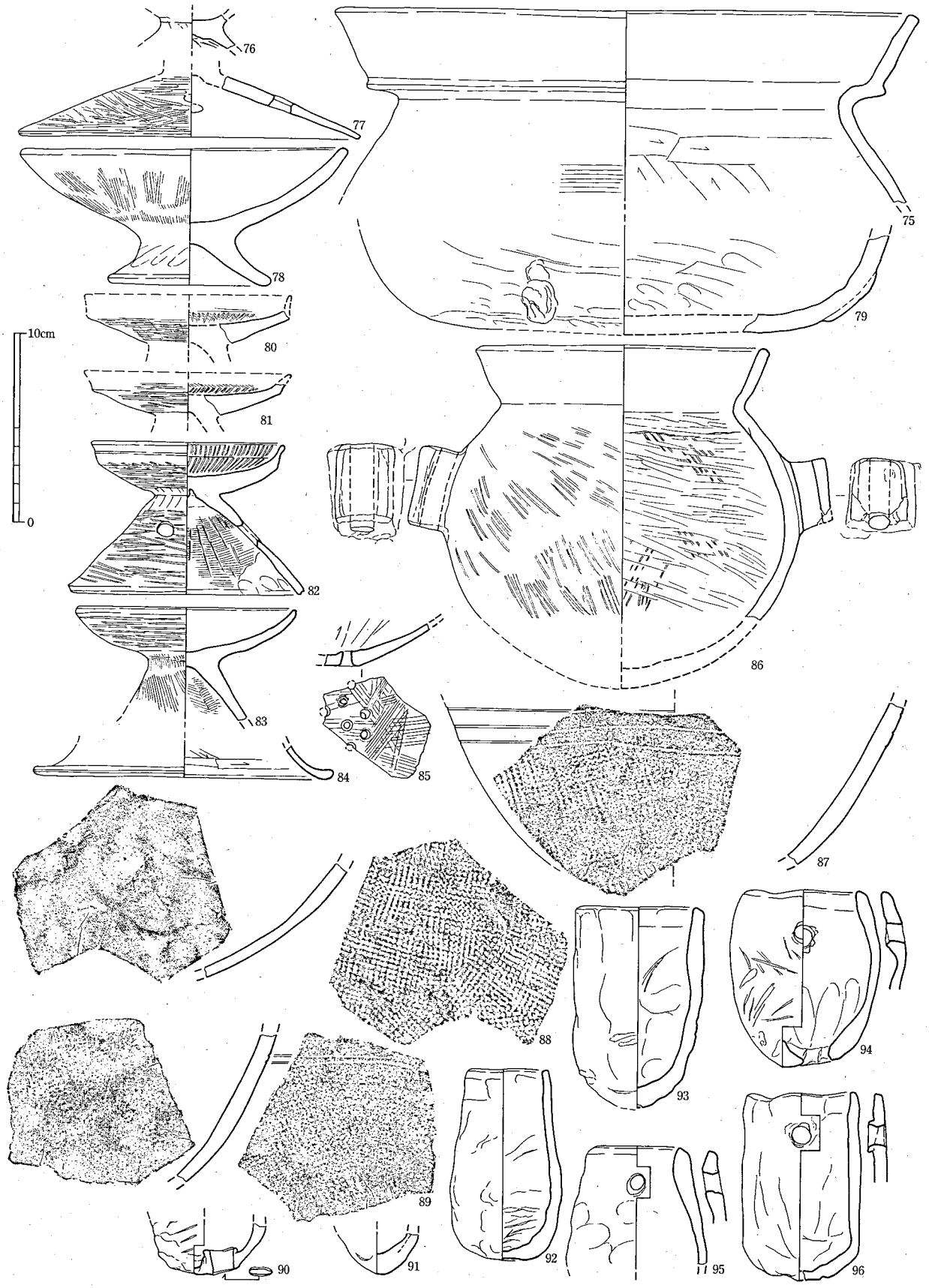
1・7号竪穴住居跡に切られるため南東隅、南西隅を失い、北西隅にも撹乱が位置している。しかし、各壁ともほぼ直線的に検出できて、遺存・検出状況は比較的、良好と言える。主軸をほぼ東西、N－70°－Eに向けた長方形を呈し、長さ5.2～5.3m、幅4.3m前後を測る。西壁は削平等のため低いが、他は良好に遺存しており、壁の高さは最大で0.45mである。

第27表　7号竪穴住居跡出土土器観察表（4）

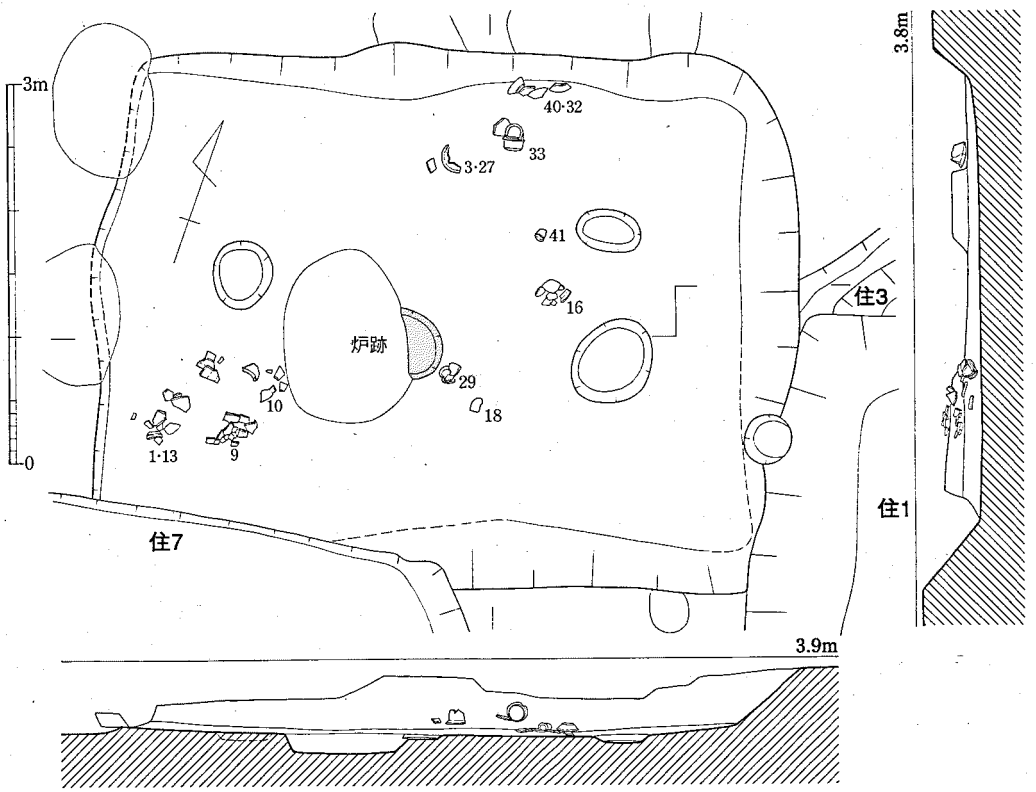
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
57-81		住7覆土	小形器台	残高17	粘土粗、1mm長石少	やや甘い	淡橙褐色	口縁端欠損。外横ミガキ、内斜めハケ後放射状の暗文ミガキ。	1／6		1361
57-82	33	住7覆土下部	小形器台	口径96、裾径118、器高77、脚高50	粘土細、1mm石英極少	良好	淡黄橙褐色	脚微かに内湾気味に広がる。0・4・8時方向に半乾燥時穿孔。受部外横ミガキ、内放射状ミガキ。脚外横ミガキ、内ハケ。脚裾にハケの後、ミガキ前の補修粘土貼付け。	口縁全周、脚3／4		1342
57-83	33	住7覆土上部	小形器台	口径112、残高57	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	褐灰色	受部鉢状の形態。受部外横ミガキ、内摩滅。脚外斜めハケ、脚内ハケ。	受部全周、脚1／3		1325
57-84		住7覆土下部	山陰系鼓形器台	裾径148、残高17	粘土粗、1～3mm石英極少	良好	外淡黄褐色、内褐色	端部跳ね上げ気味。外～裾端内ナデ、内ケズリ。	1／8		1356
57-85		住7no.11	甑	残高22	粘土細、1mm長石極少	やや甘い	淡褐黄色、外淡黄褐色	平底、3mm程直径の孔密に穿孔。外ハケ、内ケズリ。	小片		1317
57-86	33	住7覆土上面	両耳付甕	口径144、頸径128、胴径184、残高140	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色～明褐色	肩部に2個所、方形で縦に穿孔した耳。器壁厚い。胴外は条痕が明瞭に残らない板ナデ、胴内ハケメ後板ナデで光沢が生じる。頸内接合痕残。	1／6、耳2個所	石膏で完形に復元	
57-87		住7覆土下部	半島系土器胴部片	残高85	粘土細、1mm石英・長石少	軟質	褐色	外格子タタキ後沈線、内ナデ。	1／6		2342
57-88		住7覆土	半島系土器胴部片			瓦質	暗灰褐色	外格子タタキ後沈線、内凹凸の顕著なナデ。	小片		2341
57-89		住7覆土下部	半島系土器胴部片		粘土細、1mm石英・長石少	軟質、一部黒斑	灰黄褐色	外格子タタキ後沈線、内ナデ。	小片	57-87と同一個体の可能性もあり	2343
57-90		住7覆土上部	タコ壺	残高27	粘土粗、1～3mm石英少	良好	明褐色	底に穿孔。内外ナデで、外面に線刻状の工具痕残。	全周		1334
57-91		住7no.7	タコ壺	残高21	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡褐色	内外ナデ。	全周		1307
57-92	34	住7no.2	タコ壺	口径40、器高98	粘土細、砂粒ほとんど含まず	甘い、内面黒変	淡黄褐色	内外ナデ。	底全周、口縁1／4		1299
57-93		住7覆土下部	タコ壺	口径56、器高102	粘土細、1～3mm石英少	良好、内底黒変	灰黄褐色	内外ナデ。	1／4		1344
57-94	34	住7no.14	タコ壺	口径56、器高91	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	底部を絞りすぼまる器形を作るが、閉じずに仕上げて孔とする。内外ナデ。	ほぼ完形	口縁歪み大きく菱形に近い。	1395
57-95		住7覆土下部	タコ壺	口径42、残高62	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	外橙褐色、内黄橙褐色	内外ナデ。	1／4		1437
57-96	34	住7no.5	タコ壺	口径46、器高97	粘土粗、1～5mm石英・長石少	良好	黄橙褐色	底部を絞りすぼまる器形を作るが、閉じずに仕上げて孔とする。内外ナデ。	ほぼ完形		1303



第56図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）



第57図　7号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（1／3）



第58図　8号竪穴住居跡実測図（1／60）

中央やや南寄り、撹乱坑に壊されるように半円形に鮮やかな褐色細砂を覆土とする浅い炉跡が確認された。復元するならば直径0.55m程の円形となろう。長方形竪穴住居跡であることから2本主柱の可能性が高いが、炉跡の東西で検出されたピットはいずれも床面からの深さ0.1m弱と浅く、主柱穴とするには躊躇を覚える。なお、図示はしていないが東北壁際の覆土中には5cm前後の大きさの焼土塊、赤褐色細砂が上面から床面近くまでまばらに含まれていたが、その付近にカマドなど特別な施設は設置されていないことは確実である。

炉跡の北東及び炉跡の西からまとまって土器が出土しているが、いずれも床面から若干ながら浮いている。北壁際から出土した第59図3は床面直上であるが、住居廃棄直後の壁際堆積土中と判断された。

出土土器（図版34～35、第58～61図、第28・29表）　1は在地系の短頸直口壺、2は胴部に高い突帯を付けた在地系壺である。3は外面にやや太めの縦ミガキを施すことから畿内五様式系の直口壺か。口縁部は短く緩やかに外反し、胴部の張りは小さい。4～7も口縁部を失うが、タタキや粗い縦ミガキの調整等から考えて、五様式系の壺ではないかと思われる。5・6は小さな平底をなす壺の底部片である。

8・9は山陰系二重口縁壺で、9は頸が短く、胴部の張りが強い。10は壺の胴部で、胴の張りが強く、底部は平底となる可能性がある。11も胴の張りの強い壺胴下部であり、大形壺となるものと思われる。12は粗製の小形壺で、口縁が短く、小さな平底をなし、外ハケ後板ナデ仕上げの粗製品である。

13～15は在地系甕口縁部で、13は口縁端部を外に肥厚させる。16～19は畿内五様式系の甕。19は胴部外面粗いタタキ後、粗い縦・斜めハケを施す。20は布留系甕であるが、胴外面ハケが全面に及ばず、中部外面に帯状にやや広い範囲で左上りの太めのタタキを残す点が特徴的である。

21 ～ 24 は高杯杯部片。21 は口径が小さく、ミガキを施さない粗製品で、22 ～ 24 は在地系の高杯である。25 は在地系高杯の脚裾部で、裾近くの外面に沈線状の工具痕が巡る。

26 は口縁短く、胴外下部に一部ミガキを施した小形の外反口縁鉢。27 は口縁が直線的に外傾するやや大形の外反口縁鉢。28 は粗製の直口鉢。口縁外に微かな段があり、型による成形も想定される。29 は深い器形をなし、胴部外面に疎らに横ミガキを施した脚付鉢である。30 は小形の手捏ね鉢である。31・32 は山陰系鼓形器台でいずれも器表の遺存状況が極めて良好である。

33 はほぼ完形の手焙り形土器である。同種の器形は装飾する場合が多いが本例は無文で、かなり器壁も厚い。口縁を上下に拡張させ、胴部に突帯状の突出が巡り、底は大きな平底をなす。

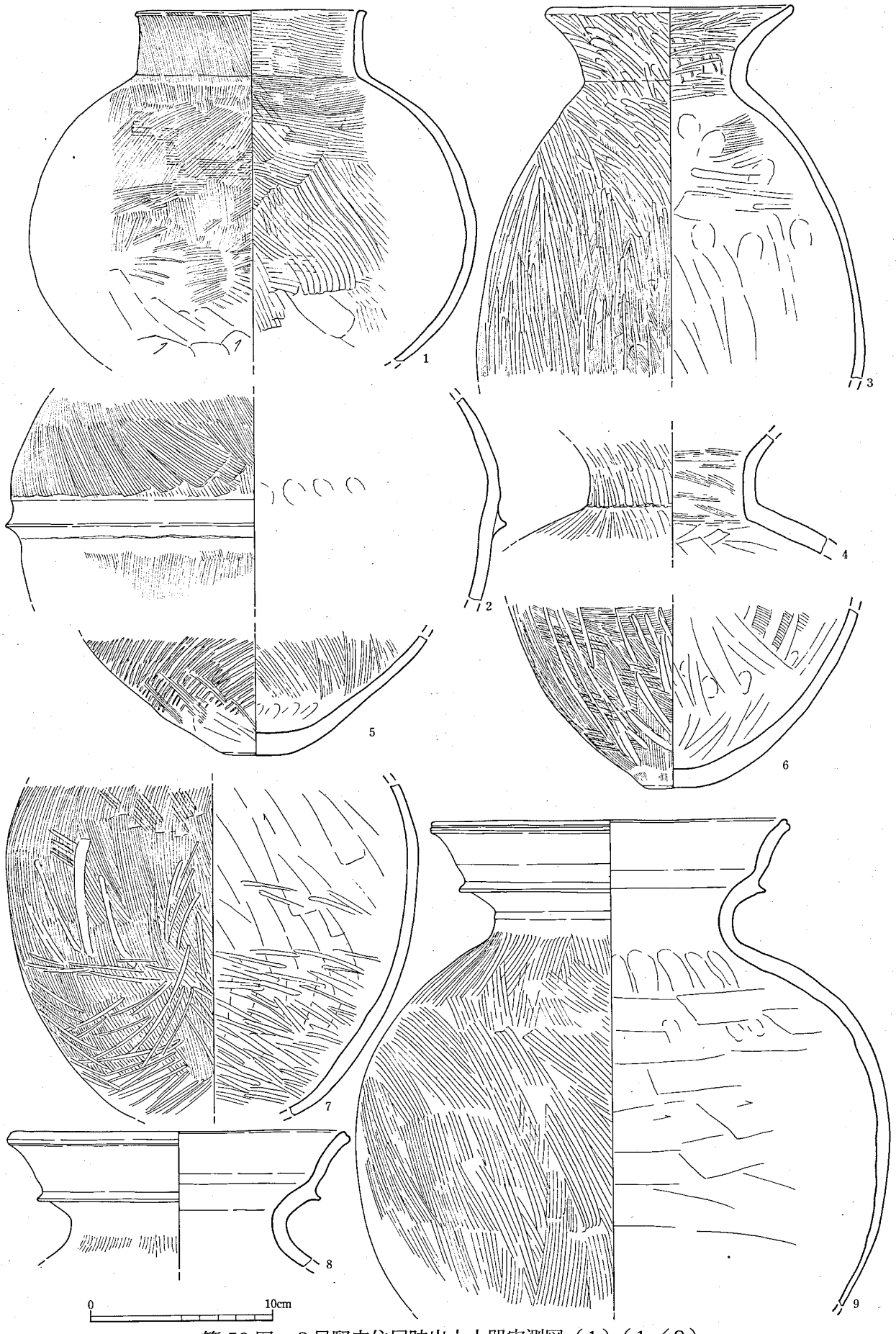
35 ～ 42 はタコ壺で、35・41・42 は底部にも穿孔を施す。

9 号竪穴住居跡（図版 14・15、第 62 図）

3 区の中央やや東寄りに位置する。6 号竪穴住居跡と隣接しており、発掘当初は 6 号住居跡カマド煙道部を本竪穴住居跡に帰属するカマドと考えていたが、掘り下げる過程で別の竪穴住居跡と判断した。また、6 号住居跡と本住居跡の間には、両住居跡に切られるように 36 号竪穴住居跡が位置している。しかしながら、遺構検出面から 0.4m 前後掘り下げた時点で明確な略正方形の平面形が検出された。覆土は褐灰色細砂を主体とし、上部は黄褐色細砂を含んでいた。また、本住居跡の北西には 14 号竪穴住居跡が位置する。以上のような理由のため、住居跡全周にわたって、検出時の誤りによる不自然なテラスが生じている。内側の確実な平面形を基準とするならば、各壁は直線的でないものの主軸を N － 18° － W に向けた略正方形として理解できる。南北 3.9 ～ 3.5m、東西 3.9 ～ 3.5m を測る。壁は本来ならば高さ 0.6 ～ 0.7m 程遺存していたであろう。床面の中央、やや北側に、直径 0.55m、円形の炉跡が検出されている。

第 28 表　8 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
59-1		住 8 no.12	在地系短頸直口壺	口径 116、頸径 124、胴径 240、残高 188	粘土細、1 mm 石英・長石少	良好、胴上部黒斑	外黄橙褐色、内橙褐色	口縁直立、胴張りが強い。外口縁縦ハケ、外胴上部斜めハケ、外胴下部板ナデ。口縁内板ナデ、胴内斜めハケ。	口縁 1／2、胴 1／8		1382
59-2		住 8 覆土下部	在地系壺	胴径 262、残高 111	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英多	良好	外黄褐色、内褐色	最大径より下に高い突帯。胴外突帯上斜めハケ、突帯下縦ハケ。内ナデ。	1／6		1401
59-3	34	住 8 no. 4	五様式系直口壺	口径 130、頸径 82、胴径 110、残高 200	粘土細、1 ～ 3 mm 石英・長石極少	良好	淡黄褐色、一部外橙褐色	胴部の張り小さく、口縁緩やかに外反。胴外縦ハケ後外面太い縦ミガキ。口縁内太い縦ミガキ、同地ハケ後板ナデ・ナデ。	口縁全周、胴 1／4		1387
59-4		住 8 no. 2	五様式系壺？	頸径 90、残高 64	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好、内外広範囲に黒変	橙褐色	頸径小さく直立気味に立ちあがる。外ミガキ風板ナデ、内板ナデ。	1／4		1383
59-5		住 8 覆土下部	五様式系壺？	底径 34、残高 66	粘土細、1 ～ 3 mm 石英・長石少	やや甘い、内外黒変	外黒褐色、内褐灰色	底部小さな平底。外右上がりタタキ後縦ハケ、内板ナデ？ハケ？。	1／6		1395
59-6		住 8 覆土下部	五様式系壺？	底径 35、残高 98	粘土細、1 ～ 3 mm 石英少	やや甘い	外褐色、内灰褐色	底小平底。外左上がりタタキ後斜めハケ後太いミガキ。内ハケ後板ナデ。	2／3		1394
59-7		住 8 覆土上部	五様式系壺？	胴径 220、残高 178	粘土細、1 ～ 3 mm 石英・長石少	良好、内下部黒変	外明褐色、内暗灰黄褐色	外タタキ後縦ハケ後太めのミガキ。内板ナデ後ミガキ。	1／4		1412
59-8		住 8 上面（P 208）	山陰系二重口縁壺	口径 178、残高 73	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	黄褐色	頸外縦ハケ後内外ナデ。	1／4		2274
59-9	34	住 8 no. 9・12	山陰系二重口縁壺	口径 186、頸径 128、胴径 298、残高 261	粘土粗、1 ～ 5 mm 石英少	良好	淡褐黄色	頸が短く、擬口縁の突出が強い。口縁端部は沈線が巡る。胴外斜めハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ、口縁内外ナデ。	口縁 1／2、胴全周		1381
60-10		住 8 no.10	壺胴部	頸径 144、胴径 294、残高 283	粘土細、1 ～ 3 mm 石英・長石少	良好	外明褐色、内黄橙褐色	胴張り、底部平底となる可能性あり。外ハケ、頸内指頭圧痕、胴内ケズリ。	1／6		1380
60-11	34	住 8 覆土上部	壺胴下部	残高 129	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・長石少	良好	淡黄橙褐色	胴部の張りが強く、大形の器形と推測される。外ハケ、内ハケ後ナデ？。	全周		1410
60-12	34	住 8 覆土下部	小形壺	口径 102、頸径 108、底径 24、器高 86、胴高 65	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・長石少	やや甘い	淡黄橙褐色	口縁短く、小さな平底をなす。胴外上部ハケ後胴外下部板ナデ。口縁外ハケ、口縁内横ハケ。胴内ハケ・板工具後ナデ。口縁外、頸内に接合痕残。	2／3		1388
60-13		住 8 no.12	在地系甕	口径 208、残高 36	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	やや甘い	褐色	口縁直線的に外傾し、端部を外に肥厚させる。内外斜めハケ。	1／6		1384
60-14		住 8 覆土下部	在地系甕	口径 246、残高 70	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	外暗褐色、内淡褐色	口縁直線的に外傾。外縦ハケ、口縁内横ハケ、胴内斜めハケ。	1／6		1398



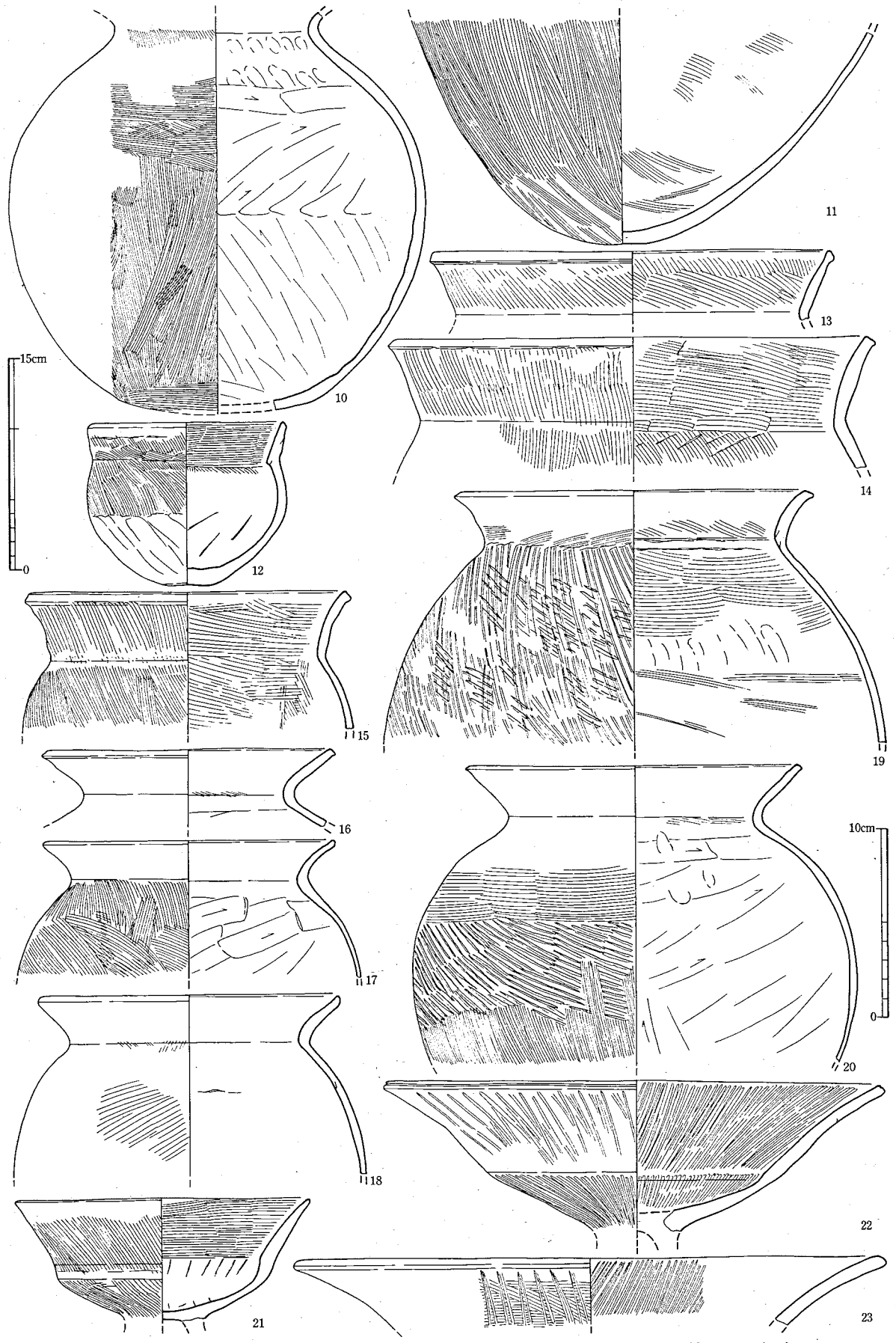
第59図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

上述したような複雑な切り合い関係とそれによる平面形の誤認のため、覆土上部・中部から出土した遺物には6号住居跡に伴うものが混入している恐れがあり、一部に本来36号住居跡に含まれるものもあろう。しかしながら、出土状況を図示した土器は比較的、短期間に覆土中に投棄されたものと考えられる。特に北東隅には完形に復元できる土器（14・33・54・73・147）がまとまって出土しており、意図的に配置された可能性も考えられる。

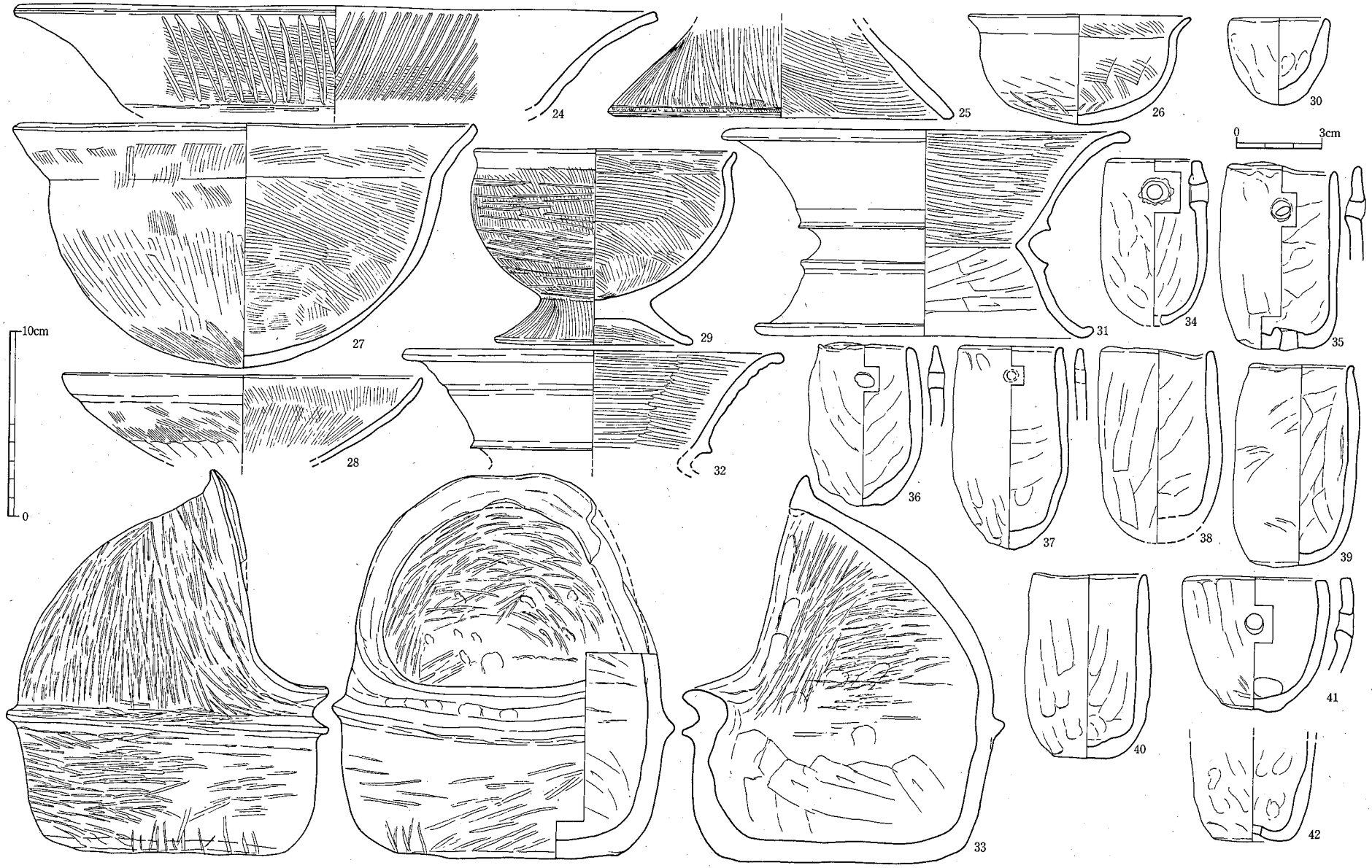
出土遺物（巻頭図版9、図版35～37、第62～70図、第31～35表）　1は口縁下外面に突帯を巡らし、頂部に密に小さな刻目を施すこと、頸部内外にハケメを残すことから在地系複合口縁

第29表　8号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

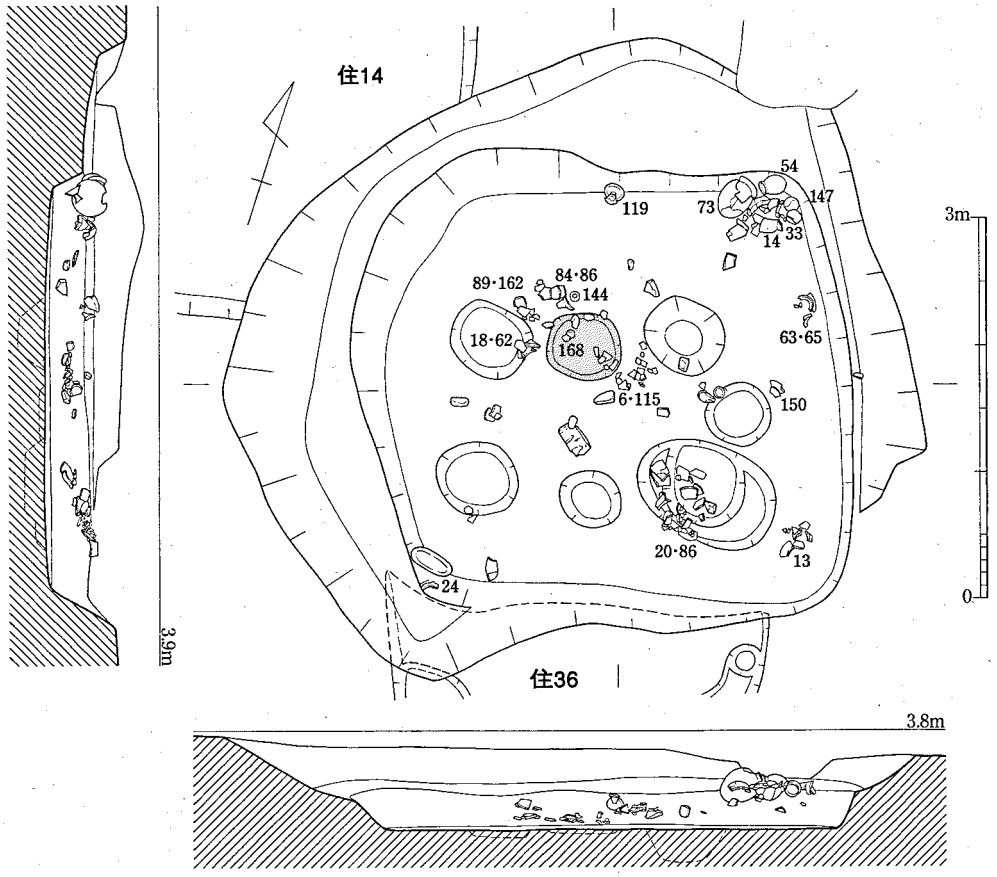
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
60-15		住8覆土下部	在地系甕	口径166、残高73	粘土粗、1～3mm石英少	良好	明褐色	口縁緩やかに外反し、端部角張る。外縦ハケ、内斜め・横ハケ。	1／3		1396
60-16		住8no. 6	五様式系甕	口径148、残高42	粘土粗、1mm石英・長石少	良好、口縁端外面黒斑	外灰褐色、内淡黄褐色	口縁端わずかに外につまみ出し気味。内外ナデ、頸部内ハケ残。	口1／4、胴1／12		1377
60-17		住8覆土	五様式系甕	口径148、頸径126、残高72	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	器壁は薄い。胴部縦・斜めハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／4	口縁・胴外面煤付着	1408
60-18		住8no.10	五様式系甕	口径156、頸径126、残高95	粘土粗、1～3mm石英多	甘い	淡黄褐色	胴外ハケ（摩滅）、胴内ナデで接合痕残。口縁内外ナデ。	口縁1／4、胴1／6	外面は二次的に火を受け褐変・桃変	1379
60-19		住8覆土上部	五様式系甕	口径182、頸径160、残高133	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色～淡黄白褐色	口縁緩やかに外反。胴外粗いタタキ後、粗い縦・斜めハケ。口縁内ハケ後横ナデ。胴内指頭圧痕後頸部下ハケ。	1／3	外煤付着	1409
60-20		住8覆土	布留系甕	口径172、頸径134、胴径234、残高158	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外淡灰褐色、内淡黄褐色	胴外左上りタタキ後、肩横ハケ、胴下部縦ハケ。口縁内外ナデで頸内にハケ残。胴内指頭圧痕後ケズリ。	口縁1／8、胴1／3	口縁わずかしか残らず、径・傾き不安	1397
60-21		住8覆土上部	高杯杯部	口径154、残高64	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄褐色	口縁端部尖り気味。外斜めハケ、口縁内横ハケ、下部内板ナデ。	全周		1413
60-22	34	住8床面	高杯杯部	口径258、残高79	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	橙褐色	口縁緩やかに外反、端部沈線状に凹み巡る。口縁外ハケ後外縦ミガキ。内縦ミガキ。	全周		1418
60-23		住8覆土下部	高杯杯部片	口径306、残高36	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁緩やかに外反。外横ハケ後暗文風縦ミガキ。内放射状にミガキ。	1／12		1399
61-24		住8覆土	高杯杯部片	口径376、残高55	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い、内面黒変	淡褐黄色	口縁緩やかに外反、端部沈線状に凹み。内外斜めハケ後暗文風縦ミガキ。	1／10		1415
61-25		住8覆土下部	高杯脚裾片	裾径180、残高48	粘土粗、1～3mm石英極少	良好、外面黒変	淡黄褐色	外縦ハケ後縦ミガキ。裾近く外に沈線状の工具痕巡る。内斜めハケ。	1／3		1400
61-26	34	住8覆土上部	外反口縁鉢	口径116、頸径104、器高58、胴高46	粘土細、1mm石英・長石少	やや甘い	外灰黄褐色、内淡黄褐色	口縁短く外傾。胴外下部板ナデ後疎らにミガキ、胴外上部～口縁外ナデ。口縁内ハケ、胴内板ナデ後ナデ。	完形		1411
61-27		住8no. 3・4	外反口縁鉢	口径240、頸径208、期高140、胴高110	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い、口縁外面灰変	淡橙褐色	口縁直線的に外傾。胴外～口縁外縦ハケ、口縁内横ハケ後口縁内外横ナデ。胴内斜めハケ。	2／3		1375
61-28		住8覆土下部	直口鉢	口径186、残高46	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	黄褐色	口縁外に微かな段あり型作りの可能性あり。外ハケ後板ナデ、内ハケ。	1／4		1402
61-29	35	住8no. 7	脚杯鉢	口径136、裾径104、器高103、脚高21	粘土粗、1～3mm長石少	やや甘い、胴外1／3黒斑	淡橙褐色	口縁短く外反。胴外ハケ後ミガキ。脚外縦ハケ、脚内斜めハケ。口縁外ナデ、口縁内横ハケ、胴内斜めハケ。	口縁2／3、脚完存		1378
61-30	35	住8床面	手捏ね小形鉢	口径34、器高31	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	内外ナデ。	完形		1417
61-31	35	住8覆土下部	山陰系鼓形器台	口径208、括部径110、裾径170、器高109	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色	外横ナデ、受部内横ミガキ、脚内ケズリ、裾内ナデ。	1／3	器表の遺存が極めて良好	1386
61-32	35	住8no. 2	山陰系鼓形器台	口径198、残高56	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡褐色、内淡黄褐色	外に微かな凹み巡る。外ナデ、内横ミガキ。	1／4	器表の遺存が極めて良好	1374
61-33	34	住8no. 1	手焙り形土器	器高205、胴最大部181×170	粘土粗、1～3mm石英多	良好、底外面全体黒変	淡黄褐色～淡橙褐色	口縁に上下に拡張。口縁下胴部突帯状に突出。底は大きな平底。外～上部内方向不定のミガキ。胴部内ケズリ。	ほぼ完形	特に煤の付着は認められない	1375
61-34		住8覆土下部	タコ壺	口径40、器高88	粘土粗、1mm石英極少	良好、底部黒変	外淡黄褐色、内褐黄灰色	内外ナデ。	1／2		1403
61-35	35	住8覆土北東部	タコ壺	口径54、器高101	粘土粗、1～3mm石英少	良好、底外面黒斑	淡黄褐色	底部にも穿孔。内外ナデ。	完形		1414
61-36	35	住8覆土下部	タコ壺	口径44、器高85	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	灰黄褐色	内外ナデ。	ほぼ完形		1389
61-37	35	住8覆土下部	タコ壺	口径52、器高107	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外淡黄褐色、内淡橙褐色	内外ナデ。	1／3		1393
61-38	35	住8覆土下部	タコ壺	口径50、残高93	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好、底内外黒斑	淡黄褐色	内外ナデ、外は板ナデか。	口縁1／2、胴全周		1392
61-39	35	住8覆土下部	タコ壺	口径52、器高107	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外暗褐色、内暗紫褐色	内外ナデ。	口縁1／2、胴全周		1390
61-40	35	住8覆土下部	タコ壺	口径58、器高98	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好、内面黒変	黄白褐色	内外ナデ。	口縁1／2、胴全周		1391
61-41	35	住8no. 5	タコ壺	口径64、器高72	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	明褐色	底部にも穿孔	ほぼ完形		1376
61-42		住8覆土	タコ壺	残高53	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	底部中央凹み、穿孔。内外ナデで、底外板ナデ。	2／3		1407



第60図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（10は1／4、他は1／3）



第61図　8号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（30は1／2、他は1／3）



第62図　9号竪穴住居跡実測図（1／60）

壺と考えたが、大きく開く口縁はやや特異である。2は内外に粗いハケを施すことから、在地系壺胴下部と考えた。3は在地系壺肩部で、頸部境に断面三角形突帯2条を貼付する。

4～14は畿内系直口壺。4は胴内外の極めて粗いハケ、頸部内面に接合痕・指頭圧痕を残すことが特徴的である。5は口縁の外反が強く、頸部外面は強いナデにより凹む。13は口縁部の外傾が強く、端部の中央が凹む。15は外面に櫛描波状文を密に施文した畿内系二重口縁壺。櫛描波状文は現存範囲では4単位が確認でき、下から上へ施文したと分かる。

16～26は山陰系二重口縁壺。17・24は頸が短く、肩外面に櫛描直線文を施文する。18は肩部にハケメ工具小口刺突による綾杉文を施文した壺胴部片で山陰系か。19は肩部に沈線直線文、20は肩部にハケメ工具小口刺突列点文を施文する。25は器壁が厚く、大形品になると思われる。26はやや小形で、口縁外強いナデによる段が認められる。27は脚付壺となるか。

28は畿内系の中形直口壺口縁部、29はその胴部か。いずれも精製で、頸内面に接合痕を残す。30～37は小形丸底壺で、34・37以外は外面ミガキ仕上げの精製品である。

38～41は在地系甕である。41は口縁が緩やかに外反しながら長く伸びる。42～48は五様式系甕で、44・45は口縁端部が直立に近い面をなし、47は口縁端部を上に折り返す。49は布留系甕の肩部か。肩部に櫛描波状文を施文した後、波状の沈線文が施される。

50～87は布留系甕である。55・73・77・86は肩部に櫛描波状文、57・74は直線沈線文、58・85・87は刺突列点文、65は沈線波状文を施文する。50・62・71は口縁端部をやや外につまみ出し、51・52・54・56・57・61・64・65・69・70・72～74・80・84～88は上方につまみ上げる。55は口縁端部を折り曲げ、直立させる。62・73・74は外面ハケの切合いが良好な状態

で確認できる。73は意図的か不明であるが、胴下部に外から焼成後の穿孔が認められる。88は雑な櫛描波状文を施文した甕ないしは壺の肩部片。89は小形甕の底部片である。

90～104は高杯杯部片で、90～94は形態及び外面に縦ミガキを施すことから在地系か。103は杯底・口縁部境界の稜・段がほとんど認められない丸味をおびた器形である。104は屈曲部が明瞭で、吉備系高杯の可能性がある。105～118は高杯脚部片で、形態、杯との接合法、外面ミガキから105・107～111は在地系と推測される。110・115は粘土の軟らかい時点での穿孔が1個所、112は0・6時方向に、113・114は1個所、半乾燥時の穿孔が残る。

119はほぼ完形で、脚上部に粘土を充填し杯と接合し、外面斜めハケ後太めの縦ミガキを施すものであり、山陰系の高杯か。1個所のみ粘土の軟らかい時点で穿孔する。

120～130は外反口縁鉢で、126・130以外は外面ミガキ仕上げの精製品である。126は淡橙褐色を呈するが、口縁短く、内外を丁寧なナデで仕上げるがミガキは見えず、胎土も粗い。

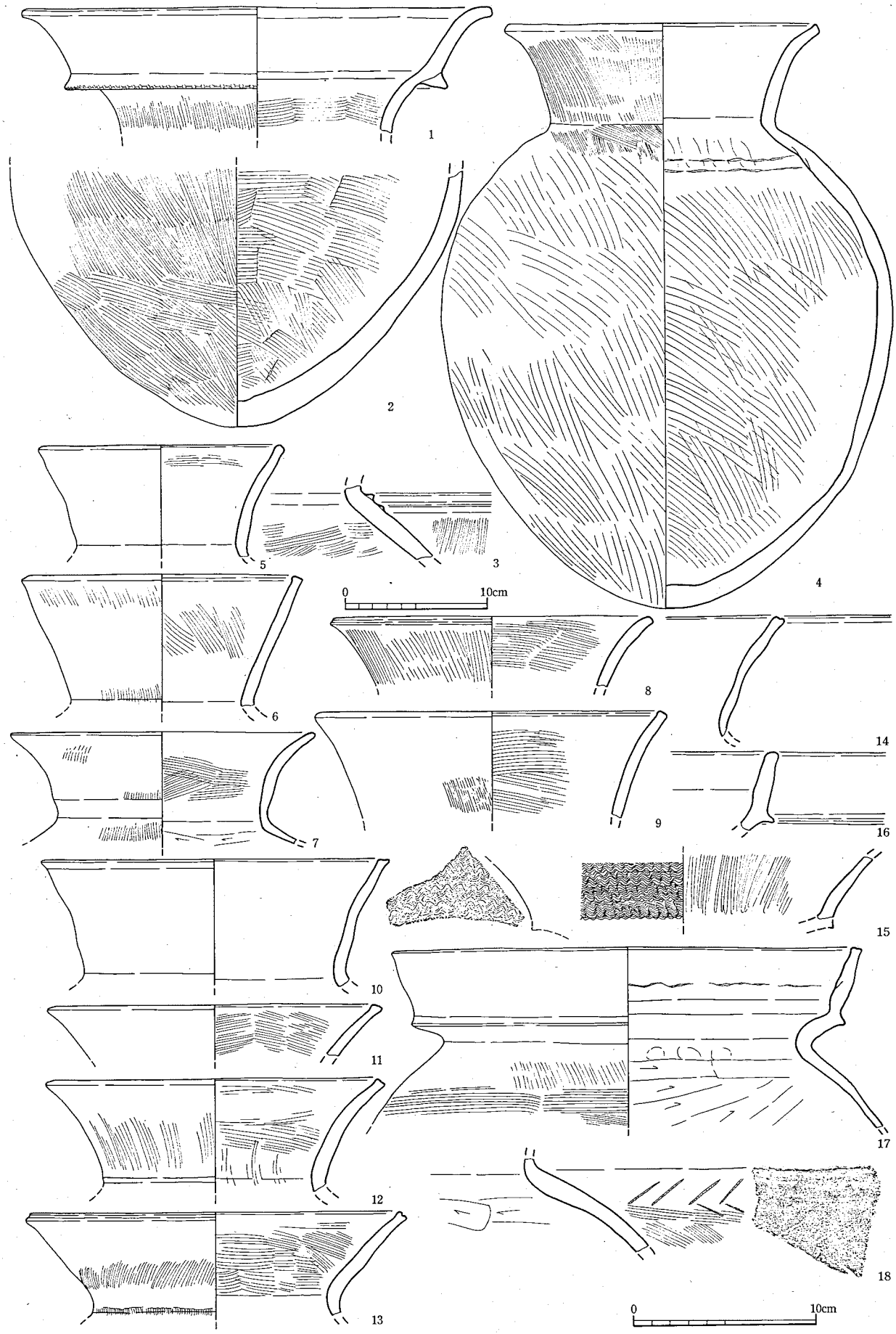
131～142は直口鉢である。131～135は外面ミガキ仕上げの精製品で、131は黒色を呈し平底をなす小形品である。137は胎土・色調は精製品と共通するにも係らず、ミガキが施されない。142は内面のやや太めのミガキが特徴的である。

143～150は脚付鉢およびその脚部と推測される破片。143は脚が中実で、内外に接合痕を多く残し、粗雑である。145は粘土の軟らかい時点での穿孔が1個所残り、脚外縦ミガキ、胴外横ミガキで仕上げる精製品。147はほぼ完形の山陰系脚付鉢で、148は畿内系脚付鉢の脚裾片。149は脚部が高く、鉢内外はミガキ仕上げであるが、脚内外は板ナデ仕上げで雑なもの。

151は在地系の器台であり、口縁端部の斜め方向工具刺突による刻目風の調整が特徴的。

第30表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

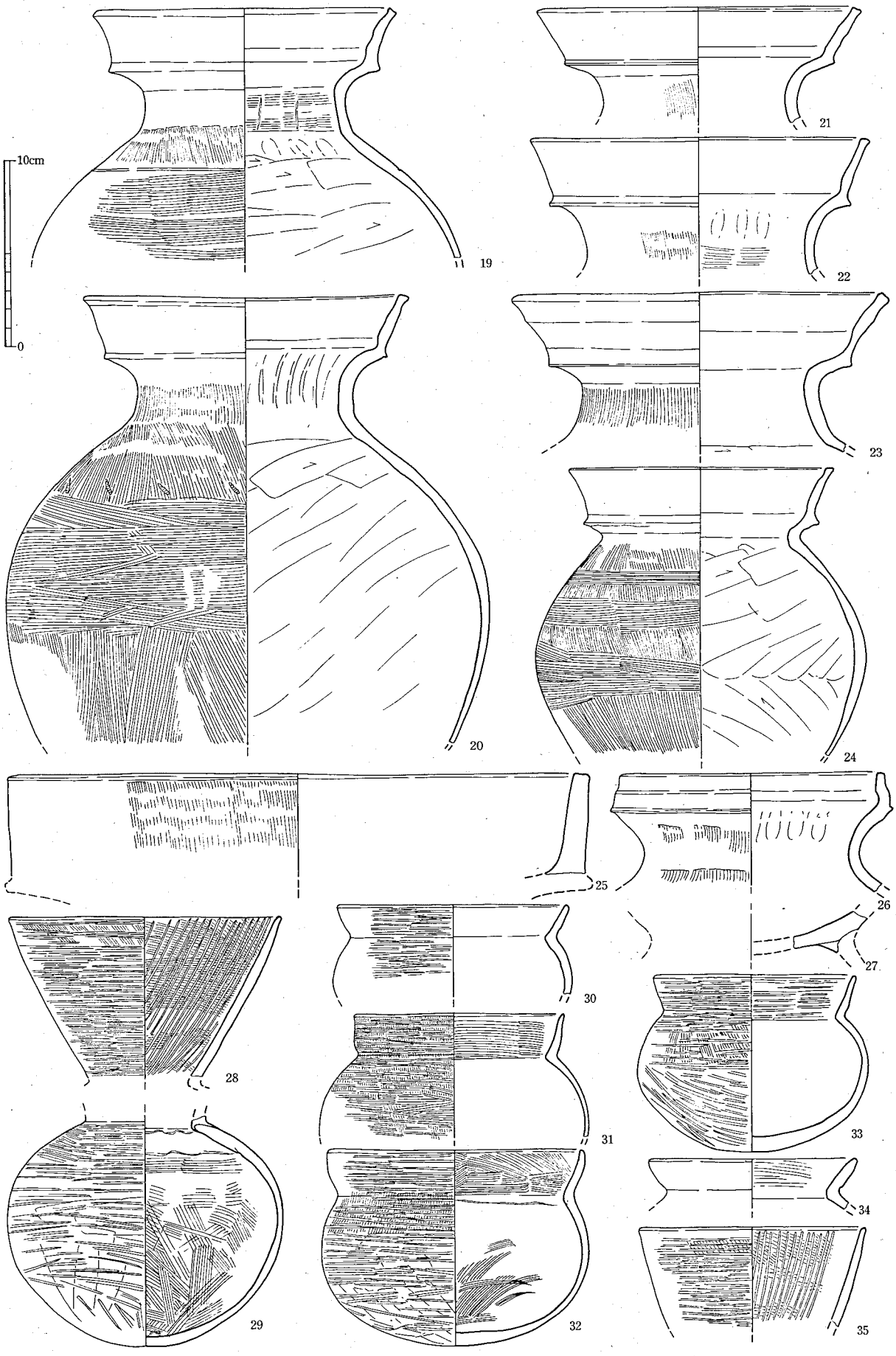
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
63-1		住9上面	在地系複合口縁壺	口径246、残高67	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色～淡黄褐色	口縁下突帯巡らし、頂部小さな刻目。頸内外にハケ残。口縁内外ナデ。	1／4		883
63-2		住9覆土上部	在地系壺胴部？	残高135	粘土粗、1～3mm石英多	良好	褐色	内外ハケ。	1／4		855
63-3	35	住9覆土下部	在地系壺肩部	残高52	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	頸部境に断面三角形突帯2条を貼付。	小片		942
63-4		住9覆土下部	畿内系直口壺	口径164、頸径120、胴径241、器高312、胴高269	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好、外下部8cm大黒斑	淡褐色	口縁緩やかに外反し胴部は倒卵形。胴内外極めて粗いハケ、肩外細かいハケ。口縁外縦ハケ後、口縁内外ナデ。頸部内に接合痕・指頭圧痕残。	口縁2／3、胴1／4		834
63-5		住9覆土上部	畿内系直口壺	口径124、残高59	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	外淡黄橙色、内淡黄灰褐色	口縁端内横ハケ後内外ナデ。	1／8		1140
63-6		住9no.18	畿内系直口壺	口径142、残高70	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	灰黄褐色	外縦ハケ、内斜めハケ後口縁内外ナデ。	1／6		869
63-7	35	住9覆土下部	畿内系直口壺	口径160、残高60	粘土細、1～3mm石英多	甘い、口縁内黒変・灰変	淡黄白褐色	口縁外反強く、頸外強いナデにより凹む。外縦ハケ、内斜めハケ後口縁内外ナデ。胴内ケズリ。	1／6		859
63-8		住9覆土下部	畿内系直口壺	口径164、残高37	粘土細、1mm石英・長石少	良好	淡橙白褐色	外縦ハケ、内斜めハケ後内外横ナデ。	1／4		1113
63-9		住9覆土下部	畿内系直口壺	口径178、残高56	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外淡黄褐色、内黄白褐色	外縦ハケ、内横ハケ後口縁端内外横ナデ。	1／8		1123
63-10		住9覆土上部	畿内系直口壺	口径172、残高69	粘土粗、1mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄褐色～淡黄橙褐色	内外ナデ。	1／6		892
63-11		住9覆土下部	畿内系直口壺	口径166、残高28	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	内横斜めハケ後内外ナデ。	1／8		1111
63-12		住9覆土下部	畿内系直口壺	口径172、残高61	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外褐灰色、内暗褐色	外縦ハケ、内横ハケ後内外ナデ。頸内絞り痕残。	1／6		922
63-13		住9no.23	畿内系直口壺	口径176、残高56	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い、器内中央黒変	淡黄褐色	口縁外傾強く、端部中央凹む。外縦ハケ、内横斜めハケ後内外ナデ。	1／3		867
63-14		住9覆土下部	畿内系直口壺	残高64	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	小片		1102
63-15		住9覆土下部	畿内系二重口縁壺	残高33	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い	黄褐色	外櫛描波状文は4単位があり、下から上へ施文。内縦ミガキ。	1／8		946
63-16		住9覆土下部	山陰系二重口縁壺	残高42	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	外明褐色、内淡橙黄褐色	内外ナデ。	小片		940
63-17	35	住9	山陰系二重口縁壺	口径242、残高97	粘土粗、1～3mm石英多	甘い、口縁外2／3黒変	淡黄白褐色	頸が短く、肩外櫛描直線文。胴外ハケ、胴内ケズリ、口縁内接合痕残。	全周	口縁全周するが煤は付着せず	860
63-18		住9上面	山陰系二重口縁壺	残高48	粘土粗、1～5mm石英少	良好	外橙褐色、内褐黄色	肩部にハケメ工具小口刺突による綾杉文。外ハケ、内ケズリ。	小片		881



第63図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（3は1／4、他は1／3）

第31表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

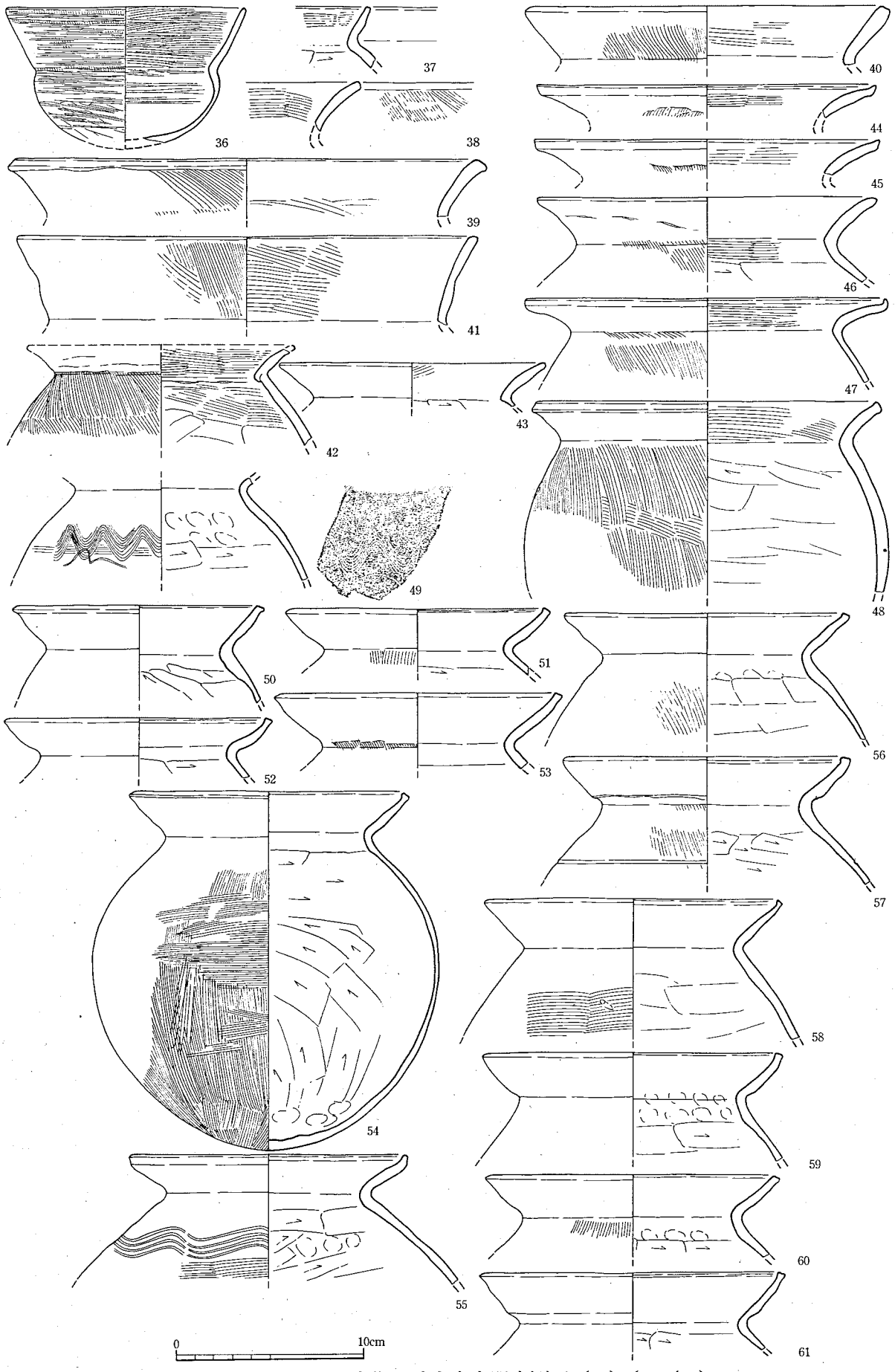
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
64-19		住9	山陰系二重口縁壺	口径152、頸径104、残高130	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外黄白褐色、内黄灰褐色	肩直線沈線文。胴外縦ハケ後横ハケ、頸内ハケ後ケズリ工具あたりのような縦方向沈線状条痕残。口縁内外ナデ。	口縁1／3、胴1／8		903
64-20	35	住9no.22	山陰系二重口縁壺	口径164、頸径112、胴径253、残高235	粘土粗、1～3mm石英・長石多	やや甘い	淡黄褐色、褐灰色	肩ハケ工具小口刺突列点文。胴外縦ハケ後横ハケ、口縁内外ナデ、頸内絞り痕ナデ上げ、胴内ケズリ。	口縁1／4、胴全周		833
64-21		住9覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径162、残高60	粘土粗、1～3mm石英少	甘い、器表灰変・黒変	淡黄褐色	頸外縦ハケ後内外ナデ。	1／6		901
64-22		住9覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径170、残高70	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内橙白褐色	頸外縦ハケ、頸内横ハケ、指頭圧痕後口縁内外ナデ。	1／8		1117
64-23		住9覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径192、残高82	粘土細、1～3mm石英極少	良好	淡黄橙褐色	口縁外強いナデにより稜あり。頸外縦ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8		904
64-24		住9no.11	山陰系二重口縁壺	口径132、頸径104、胴径174、残高150	粘土細、1～3mm石英多、10mm土器片少	良好	淡赤褐色	肩櫛描直線文。胴外ハケは頸下縦ハケ、胴中部横ハケ、胴下部縦ハケ、胴下部横ハケの順。	1／3		902
64-25		住9覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径290、残高53	粘土細、1～3mm石英少	良好	外淡褐色、内淡黄褐色	外縦ハケ後内外ナデ。	1／10		924
64-26		住9覆土下部	山陰系二重口縁壺	口径132、残高62	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄白褐色	口縁外強いナデによる段あり。外縦ハケ、内ナデ上げの圧痕後内外横ナデ。	1／4		905
64-27		住9覆土下部	脚付壺？	残高22	粘土粗、1～3mm石英多	甘い	外白橙色、内淡灰褐色	内外摩滅するが、ミガキか。脚剥離面にハケ残。	1／8		1104
64-28		住9覆土下部	中形直口壺	口径140、残高84	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内横・斜めハケ後暗文風斜めミガキ。	1／4		965
64-29	36	住9覆土下部	中形直口壺胴部？	胴径143、残高120	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外明橙褐色、内淡黄褐色	外下部ヘラケズリ後外ミガキ。内ハケ。頸内接合痕残。	1／2		843
64-30		住9覆土下部	小形丸底壺	口径116、残高47	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内ナデ。	1／8		949
64-31	36	住9覆土下部	小形丸底壺	口径112、頸径106、胴径140、残高65	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	橙褐色	外ハケ後横ミガキ、口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／2		845
64-32	36	住9覆土下部	小形丸底壺	口径132、頸径124、胴径138、器高103、胴高78	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	黄橙色	やや大形、口縁内湾。胴外下部ヘラケズリ、胴外上部縦ハケ後外横ミガキ。口縁内横・斜めハケ、胴内下部ハケ、上部ナデ。頸部内接合痕残。	ほぼ完形		841
64-33	36	住9no.14	小形丸底壺	口径106、頸径96、胴径121、器高91、胴高71	粘土細、1～3mm石英少	良好、底外5cm大黒斑	外橙褐色、内黄橙色	胴外上部斜めハケ後外横ミガキ。口縁内横ミガキ、胴内ナデ。	口縁1／2、胴全周		854
64-34		住9覆土下部	小形丸底壺	口径106、残高28	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	外ナデ、口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／6	歪み顕著で傾き不安	939
64-35		住9覆土下部	小形丸底壺	口径118、残高52	粘土細、1mm石英・金雲母極少	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ後暗文縦ミガキ。	1／10	径不安	1101
65-36		住9	小形丸底壺	口径124、頸径96、胴径97、残高71	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	明橙褐色	胴下部外ケズリ、口縁外縦ハケ後外横ミガキ。口縁内ハケ後疎らミガキ。胴内上部ミガキ、下部ナデ。	1／2		944
65-37		住9覆土下部	小形丸底壺	残高33	粘土細、1～3mm石英少	甘い	外橙黄褐色、内淡黄褐色	外ナデ、口縁内横ハケ、胴内ケズリ。	小片		916
65-38		住9覆土下部	在地系甕	残高26	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	明褐色	口縁緩やかに外反。内外斜めハケ。	小片		1115
65-39		住9上面	在地系甕	口径242、残高31	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好、堅緻	外褐灰色、内黄灰褐色	口縁端雑なナデ仕上げ。外斜めハケ、内横ハケ後横ナデ。	1／8	外面煤付着	1130
65-40		住9覆土下部	在地系甕	口径184、残高31	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好、口縁端黒変	淡橙褐色	外縦ハケ、内横ハケ後内外横ナデ。	1／8	径不安	1107
65-41		住9覆土下部	在地系甕	口径252、残高47	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外黄白褐色、内淡黄褐色	口縁が緩やかに外反しながら長く伸びる。外斜めハケ、内横斜めハケ。	1／8	口縁内外煤のためか褐変	1114
65-42		住9覆土下部	五様式系甕	頸径110、残高50	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外灰橙褐色、内灰褐色	外斜めハケ、口縁内横ハケ、胴内上部横ハケ後下部板ナデ。頸内接合痕残。	1／4		915
65-43		住9覆土下部	五様式系甕	口径158、残高23	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	胴内ケズリ、口縁内横ハケ後口縁内外ナデ。	1／8		1112
65-44		住9覆土下部	五様式系甕	口径176、残高17	粘土粗、1mm石英・長石少	良好、器肉黒変・灰変	外暗褐色、内灰褐色	口縁端部が直立に近い面。口縁内横ハケ、胴外斜めハケ後口縁内外ナデ。	1／8	庄内系甕の可能性もあり	1106
65-45		住9床面	五様式系甕	口径178、残高18	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外褐黄色、内黄白褐色	口縁端部が直立に近い面。口縁内横ハケ、胴外斜めハケ後口縁内外ナデ。	1／8	庄内系甕の可能性もあり	874
65-46		住9床面下層	五様式系甕	口径174、残高45	粘土粗、1～5mm石英・長石少	やや甘い	灰黄褐色	口縁外細い凹みあり、工具痕か。胴外斜めハケ、胴内ハケ後ケズリ。	1／4	外うっすら煤付着。	873
65-47		住9床面下層	五様式系甕	口径188、残高45	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内灰黄褐色	口縁外反強く、端部を直に折り返す。胴外縦ハケ、口縁内横ハケ、胴内ケズリ後ナデ？。	1／8		872
65-48		住9覆土下部	五様式系甕	口径176、頸径152、胴径180、残高100	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	外明褐色、内赤褐色	口縁緩やかに外反し、胴の張りやや強い。外斜めハケ後縦ハケ、口縁外ナデ、口縁内横ハケ、胴内ケズリ。	1／6	在地土器とは色調異なる	920
65-49		住9覆土下部	布留系甕	頸径90、残高53	粘土細、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内灰褐色	肩部櫛描波状文後、波状沈線文。肩横ハケ、内指頭圧痕後ケズリ。	1／6		945
65-50		住9覆土上部	布留系甕	口径124、残高52	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	暗褐色	口縁端外につまみ出す。胴外ナデ（摩滅）、胴内雑なケズリ。	1／6	外面煤付着	1139
65-51		住9覆土下部	布留系甕	口径130、残高35	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	褐赤色	口縁端つまみ上げ。胴外縦ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／8		1110
65-52		住9覆土下部	布留系甕	口径132、残高31	粘土粗、1～3mm石英多	良好	白黄褐色	口縁内湾強く、口縁端つまみ上げ。頸外～口縁内横ナデ、胴内ケズリ。	1／6		1105
65-53		住9覆土上部	布留系甕	口径142、残高40	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡灰褐色、内淡橙白褐色	頸外縦板ナデ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／8		1138



第64図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

第32表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（3）

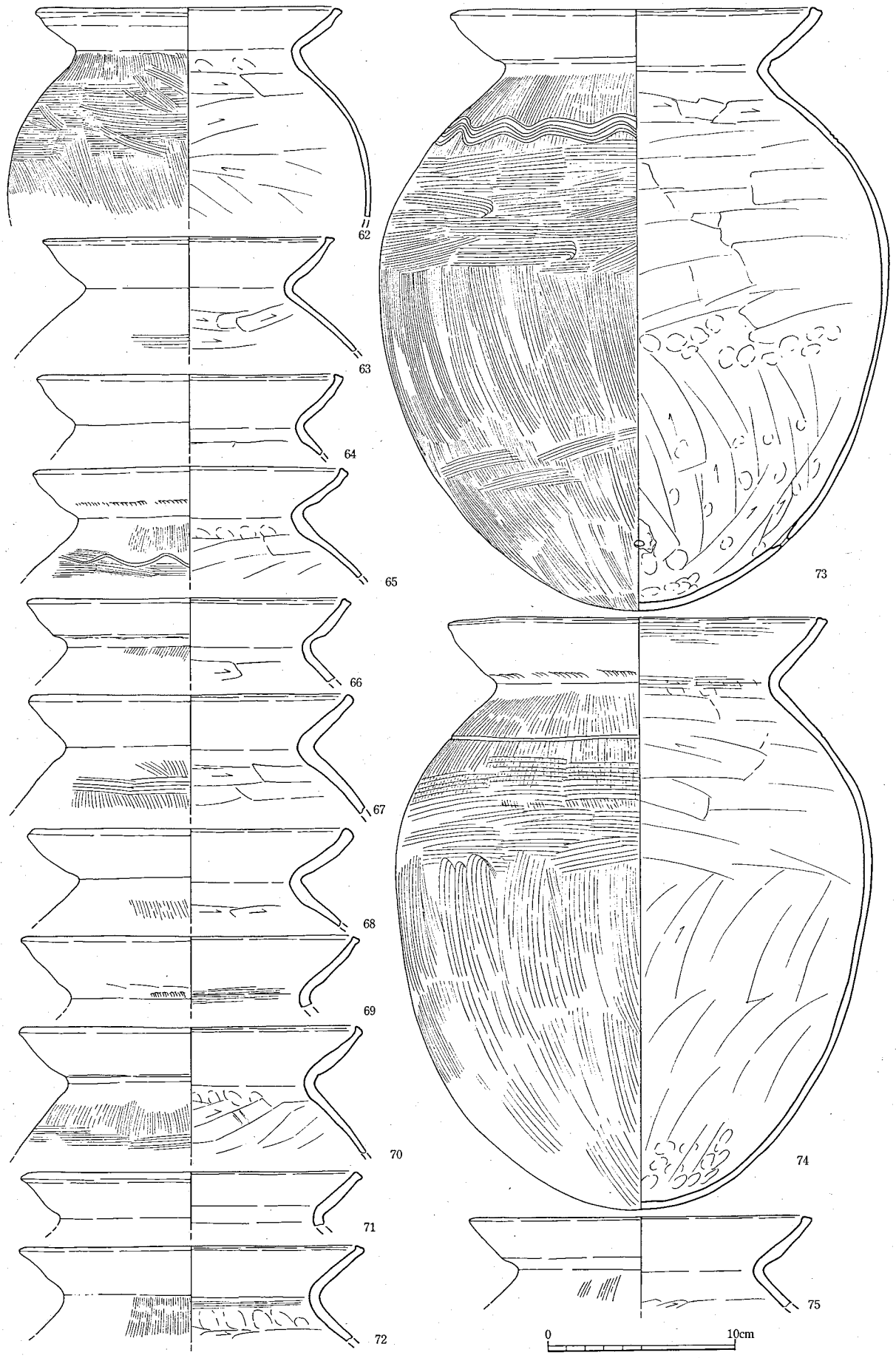
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
65-54	36	住9 no.12	布留系甕	口径140、頸径108、胴径181、器高188、胴高164	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	淡黄褐色	口縁直線的に外傾し、端部つまみ上げ。胴外ハケ、胴内ケズリ。口縁内外ナデ。	ほぼ完形	外肩より下に煤付着	835
65-55		住9覆土下部	布留系甕	口径142、残高64	粘土粗、1～3mm石英多	甘い、黒変・灰変	淡黄褐色	肩外に櫛描波状文。口縁端部を折り曲げ、直立。胴外横ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ、口縁内外ナデ。	1／4		912
65-56		住9上面	布留系甕	口径144、残高67	粘土粗、1～5mm石英・クサリ礫少	良好	淡橙白色	口縁端つまみ上げ。胴外縦ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。口縁内外ナデ。	1／6		1128
65-57		住9覆土上部	布留系甕	口径142、残高67	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	肩沈線直線文?。口縁端つまみ上げ頸外ハケメ工具あたりか段になる。	1／8	口縁、二次的に火を受け褐変	1135
65-58		住9覆土下部	布留系甕	口径152、残高73	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外褐灰色、内暗灰褐色	肩部刺突列点文。胴外横ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	口縁1／8、頸部1／4		1108
65-59		住9覆土下部	布留系甕	口径150、残高56	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外暗灰褐色、内黄灰褐色	外摩滅顕著で調整不明。口縁内ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／6		913
65-60		住9覆土下部	布留系甕	口径146、残高44	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	胴外縦ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／6	外煤が厚く付着	911
65-61		住9覆土上部	布留系甕	口径154、残高43	粘土細、1mm石英少	やや甘い	白黄褐色	口縁やや内湾し、端部つまみ上げ。外摩滅、口縁内ナデ、胴内ケズリ。	1／4		1136
66-62		住9 no. 6	布留系甕	口径152、残高112	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	淡黄白褐色	口縁上部外ナデで凹み、端外につまみ出す。胴外は頸下縦ハケ、肩横ハケ、肩斜めハケ・下部縦ハケの順。	1／3		864
66-63		住9no.20	布留系甕	口径144、残高61	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	暗褐色～暗黄褐色	胴外横ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁1／4、胴1／12		865
66-64		住9覆土上部	布留系甕	口径152、残高42	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡橙褐色、内淡黄褐色	口縁端つまみ上げ。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／3		1137
66-65	36	住9no.20	布留系甕	口径156、残高58	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	肩沈線波状文、口縁端つまみ上げ。胴外縦ハケ後横ハケ、胴内ケズリ。口縁内外横ナデで、口縁外ハケメ工具当たり風条痕残。胴内ケズリ。	2／3	破片によっては褐色に変色。破損後火を受ける?	840
66-66		住9覆土下部	布留系甕	口径162、残高45	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄褐色	胴外縦ハケわずかに残。頸外斜巡る。口縁内外ナデ。	1／6	破損後火を受け一部破片変色	910
66-67		住9覆土下部	布留系甕	口径166、残高62	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	胴外横ハケ後縦ハケ。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	頸1／4、口縁・胴1／8		909
66-68		住9覆土下部	布留系甕	口径162、残高51	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外黄白褐色、内淡灰褐色	胴外縦ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8		1098
66-69		住9覆土下部	布留系甕	口径170、残高37	粘土粗、1～3mm石英多	良好、器肉黒変	外黄白褐色、内淡褐黄色	口縁端つまみ上げ、頸外ハケメ工具当たり?残。頸内ハケ後口縁内外ナデ。	1／4		1116
66-70		住9覆土下部	布留系甕	口径172、残高66	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内灰褐色	口縁端つまみ上げ。頸外強いナデで沈線状。胴内ケズリの稜が甘い。	1／6		918
66-71		住9覆土下部	布留系甕	口径172、残高28	粘土細、1～3mm石英少	良好	灰黄褐色	口縁端外につまみ出す。内外ナデ。	1／8	器表橙褐色のところあり。	914
66-72		住9覆土下部	布留系甕	口径168、残高50	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	黄白褐色	口縁端つまみ上げ。胴外縦ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ、頸内横ハケ残。口縁内外横ナデ。	1／6	内面は使用のためか褐灰色に変色	908
66-73	36	住9no.16	布留系甕	口径186、頸径136、胴径266、器高314、胴高281	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	肩櫛描波状文、口縁端つまみ上げ。意図的か不明であるが胴下部に外から焼成後の穿孔あり。外ハケは肩縦ハケ・胴下部縦ハケ後胴中部横ハケか。胴内ケズリあるが、中央にケズリ前の指頭圧痕巡る。	ほぼ完形	底内面コゲのためか褐変。肩より下外面煤うっすら付着。	832
66-74	37	住9no.15	布留系甕	口径190、頸径148、胴径248、器高309、胴高276	粘土粗、1～5mm石英・クサリ礫少	やや甘い、胴外1／4大黒斑	淡黄褐色	肩直線沈線文、口縁端つまみ上げ。胴外ハケは頸下縦ハケ、肩横ハケ、胴下部板ナデに近い縦ハケの順。頸外にハケ工具のあたり残。	口縁全周、胴5／6		831
66-75		住9覆土下部	布留系甕	口径170、残高46	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡灰黄褐色	胴外縦ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／4		921
67-76		住9覆土上部	布留系甕	口径174、残高69	粘土細、1～3mm石英少	良好、器肉黒変	淡黄褐色	胴外縦ハケ後横ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。頸内横ハケ、口縁内外ナデ。	1／3		893
67-77		住9覆土下部	布留系甕	口径176、残高73	粘土細、1～3mm石英少	良好	灰黄褐色	口縁内湾強く、肩に櫛描波状文。胴外ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／4	外面煤付着	907
67-78		住9上面	布留系甕	口径184、残高48	粘土粗、1～3mm石英・長石多	やや甘い	外橙白褐色、内黄白褐色	胴外縦ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8		1129
67-79		住9上面	布留系甕	口径182、残高49	粘土細、1mm石英・長石少	良好	外淡褐灰色、内淡黄褐色	胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／8		1134
67-80		住9覆土下部	布留系甕	口径182、残高70	粘土粗、1～3mm石英少	甘い、内灰変、外黒斑	淡黄褐色	口縁端つまみ上げ。胴外縦ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／6		917
67-81		住9覆土上部	布留系甕	口径188、残高51	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／4		1133
67-82		住9覆土上部	布留系甕	口径190、残高47	粘土細、1～3mm石英・金雲母少	良好	淡黄褐色	口縁内湾、口縁端外強いナデにより凹むことが特徴的。器壁厚い内外ナデ。	1／6		1109
67-83		住9覆土下部	布留系甕	口径186、残高66	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄白褐色	胴外縦ハケ、口縁内外ナデ、口縁外斜め条痕、頸内横ハケ残。	1／6		919
67-84		住9no. 3	布留系甕	口径198、残高93	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外黄白褐色、内淡黄褐色	肩に刺突列点文、口縁端つまみ上げ。口縁内外ナデで、頸外にハケ痕?残。	1／4		863
67-85		住9覆土下部	布留系甕	口径202、頸径160、胴径260、残高160	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	外淡黄褐色、内褐橙色	刺突列点文。口縁端つまみ上げ。胴外粗いタタキ残り、ハケは頸下縦ハケ・胴下斜めハケ後胴中部横ハケの順。	口縁1／4、胴1／6	口縁外、胴肩より下煤付着	906



第65図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）

第33表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（4）

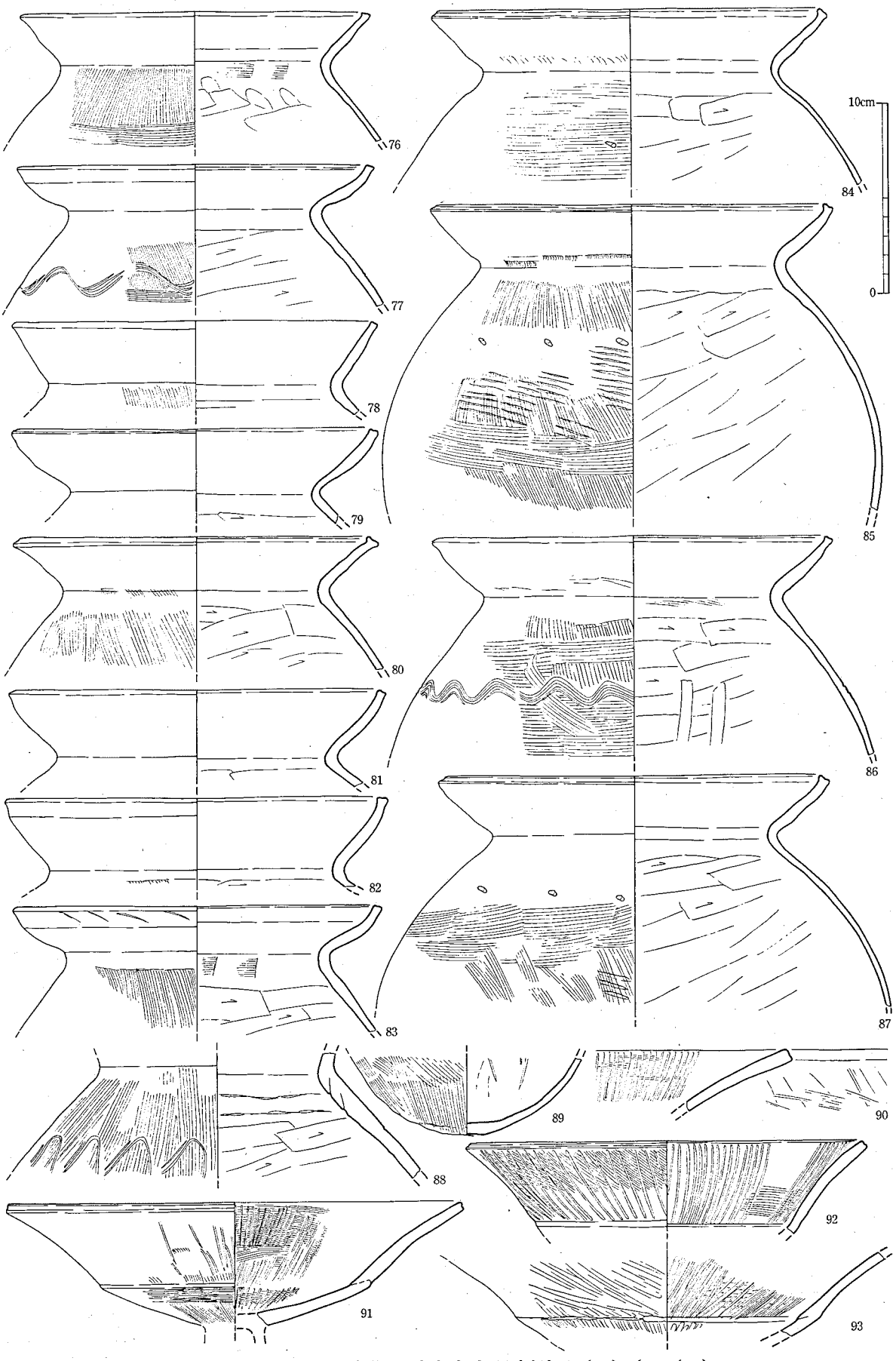
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
67-86		住9 no.22	布留系甕	口径202、残高115	粘土粗、1～3mm石英少	良好、口縁・胴黒斑	外淡黄褐色、肩部外面黄灰褐色	櫛描波状文。口縁端つまみ上げ。頸外工具当たりか凹みあり。胴外左上がり斜めハケは波状文を切る。口縁内外ナデ、頸内横ハケ残。	口縁1／4、胴1／8		866
67-87		住9 no.24	布留系甕	口径194、残高123	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い、外黒斑、褐変	外淡褐黄色、内橙褐色	刺突列点文。口縁端つまみ上げ。胴ハケの切合い不明で、粗いタタキ痕残。胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／6		868
67-88		住9覆土下部	甕あるいは壺肩部	残高64	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外灰褐色、内褐灰色	雑な櫛描波状文施文し、頸径小さい。外縦ハケ、内ケズリ、頸下接合痕残。	1／6		944
67-89		住9 no. 4	甕底部	残高40	粘土粗、1～3mm石英多	良好、底外黒斑	淡黄褐色	外ハケ、内ナデで工具痕疎らに残。	全周		870
67-90		住9覆土下部	在地系高杯杯部	残高31	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外灰褐色、内黄褐色	端部角張る。外板ナデ後ミガキ（摩滅）、内ハケ後縦ミガキ。	小片		1099
67-91		住9覆土下部	在地系高杯杯部	口径236、残高64	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡褐色～淡黄褐色	口縁端凹線上に凹む。口縁外縦ハケ後縦ミガキ（摩滅）、杯底外縦ハケ後横ミガキ、杯内ハケ後縦ミガキ。	1／10		929
67-92		住9覆土下部	在地系高杯杯部	口径204、残高48	粘土細、1mm石英少	良好	外黄橙褐色、内橙褐色	外斜めハケ後暗文風縦ミガキ、内横ハケ後分割暗文風縦ミガキ。	1／3		887
67-93		住9	在地系高杯杯部	残高43	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好、堅緻	外灰黄褐色、内淡褐色	口縁・底の屈曲部の段が明瞭。外縦・斜めミガキ、内ハケ後縦ミガキ。	1／8		1142
68-94		住9覆土下部	在地系高杯杯部	残高63	粘土粗、1～3mm石英少	良好、外面黒斑	黄橙褐色	外斜め・横ハケ後縦ミガキ、内暗文風ハケ。	小片		955
68-95		住9覆土下部	高杯杯部	残高48	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫極少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内斜めハケ後暗文ミガキ。	小片		954
68-96		住9覆土下部	高杯杯部	残高40	粘土粗、1mm石英極少	良好	淡褐色	内外摩滅、内ハケ残。	小片	外面煤付着	1127
68-97		住9覆土下部	高杯杯部	残高28	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	外橙褐色、内淡黄褐色	内外摩滅しミガキ観察できず。外縦ハケ、内斜めハケ残。	小片		1126
68-98		住9覆土上部	高杯杯部	口径192、残高36	粘土細、1～3mm石英・長石極少	良好	橙褐色	外斜めハケ・指頭圧痕後横ミガキ、内横ハケ後暗文ミガキ。	1／12		898
68-99		住9覆土上部	高杯杯部	口径178、残高50	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡橙黄褐色	内外摩滅顕著。外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ残。	1／8	口縁外面破損後火を受け煤付着	956
68-100		住9覆土下部	高杯杯部	残高51	粘土粗、1～3mm石英多	良好	暗褐灰色	外横ミガキ、内斜めハケ後暗文ミガキ。	1／6	径・傾き不安。他と色調異なる。	1125
68-101		住9覆土下部	高杯杯部	口径226、残高63	粘土細、1～3mmクサリ礫・長石極少	やや甘い	外褐色、内黄橙褐色	外横ミガキ、内斜めハケ後暗文ミガキ。	1／4	口縁内面二次的に火を受け黒変	958
68-102		住9上面	高杯杯部	口径198、残高29	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好、外面黒斑	外黄灰褐色、内橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内横ハケ後暗文ミガキ。	1／12		882
68-103		住9覆土下部	高杯杯部	残高49	粘土細、1～3mm石英少	良好	外橙褐色、内黄橙色	杯底・口縁界の稜・段がない丸味をおびた器形。外横ミガキ、内ミガキ。	全周		886
68-104		住9覆土下部	高杯杯部	残高23	粘土細、1～3mm石英極少	やや甘い	淡橙褐色	底外縦ハケ、内縦ミガキ。屈曲部明瞭で、あるいは吉備系か。	1／4		959
68-105		住9覆土下部	高杯脚部	残高73	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	黄褐色	外縦ハケ後縦ミガキ、脚内ナデ、杯内ミガキ。	全周		960
68-106		住9上面	高杯脚部	残高17	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外指頭圧痕後横ミガキ、内ハケ後ミガキ。	1／3		879
68-107		住9覆土下部	高杯脚部	残高41	粘土細、1～3mm石英・角閃石少	やや甘い、器肉灰変	橙褐色	外縦ミガキで、杯との接合部は凹み大。脚内ナデ、杯内ミガキ。	全周		932
68-108		住9	高杯脚部	残高116	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	外褐色、内褐灰色	外縦ハケ、内ナデ。	上部全周、下部1／2		889
68-109		住9覆土下部	高杯脚部	残高86	粘土細、1mm石英少	良好	褐黄灰色	外ハケ後縦ミガキ、内絞り痕後ナデ下ろし。	全周		961
68-110		住9覆土下部	高杯脚部	裾径158、残高34	粘土粗、1mm石英極少	良好	橙褐色	乾燥前穿孔1個所残。外縦ミガキ、内斜めハケ。	1／4		935
68-111		住9覆土下部	高杯脚部	裾径146、残高36	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	褐色	外縦ハケ後縦ミガキ、内斜めハケ。	1／8		966
68-112	36	住9覆土下部	高杯脚部	裾径124、残高81	粘土細、1mm石英極少	良好、脚裾内黒斑	淡黄褐色	0・6時方向に半乾燥時穿孔。外斜めハケ後横ミガキ、脚柱内縦ハケ、脚裾横ハケ。	3／4		848
68-113		住9上面	高杯脚部	残高67	粘土細、1mm石英・長石少	良好	橙褐色	半乾燥時穿孔1個所残。外縦ハケ後横ミガキ、内ナデ下ろし。	1／2		890
68-114		住9覆土上部	高杯脚部	残高68	粘土細、1～3mmクサリ礫極少	良好	淡橙褐色	半乾燥時穿孔1個所残。外横ミガキ、脚柱内ナデ下ろし、脚裾内ハケ。	1／4		1191
68-115		住9 no.18	高杯脚部	残高61	粘土粗、1mm石英・長石少	やや甘い	橙褐色	乾燥前穿孔1個所残。外縦ハケ後横ミガキ、脚柱内板ナデ、脚裾内ハケ。	脚柱全周	破損後火を受け赤変、褐変個所あり	871
68-116		住9覆土下部	高杯脚部	裾径128、残高10	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内横ハケ。	1／8	二次的に火を受け褐変	1101
68-117		住9上面	高杯脚部	裾径126、残高47	粘土細、1mm長石少	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	1／8		880
68-118		住9上面	高杯脚部	裾径120、残高32	粘土粗、1mm長石極少	やや甘い	橙褐色	外横ミガキ（摩滅）、脚柱内ナデ、脚裾内横ハケ。	1／4		899
68-119	37	住9 no.14	山陰系？高杯	口径172、裾径104、器高107、脚高51	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	淡橙白色	乾燥前穿孔1個所残。粘土を充填し脚と杯を接合。外斜めハケ後太め縦ミガキ、杯内斜めハケ後暗文風ミガキ、脚内上部ケズリ、下部ハケ後ナデ。	ほぼ完形		836
68-120		住9上面	外反口縁鉢	口径118、残高42	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴外斜めハケ後外横ミガキ。内ナデ後一部横ミガキ。	1／8		877
68-121		住9覆土下部	外反口縁鉢	口径118、残高51	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	胴外下部ケズリ、頸外縦ハケ後外横ミガキ。口縁内ハケ、胴内疎らミガキ。	1／8		948



第66図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）

第34表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（5）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
68-122		住9覆土上部	外反口縁鉢	口径126、残高23	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外縦ハケ後内外横ミガキ。	1／10		1141
68-123		住9覆土下部	外反口縁鉢	口径126、残高41	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外～口縁内横ミガキ、胴内摩滅。	1／8		925
68-124		住9覆土下部	外反口縁鉢	口径126、頸径112、胴径114、残高44	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外縦ハケ・口縁外指頭圧痕後内外横ミガキ。	1／6		950
68-125		住9上面	外反口縁鉢	口径126、残高40	粘土細、1mm長石極少	良好	外暗褐色、内暗橙褐色	外縦ハケ・口縁外指頭圧痕後外横ミガキ。内ナデ仕上げでミガキ見えず。口縁内湾顕著。	1／8		878
68-126	37	住9上面	外反口縁鉢	口径162、頸径128、器高50、胴高40	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	淡橙褐色	口縁短く、内外丁寧なナデ仕上げであるが、ミガキ見えず。	2／3		851
68-127		住9覆土下部	外反口縁鉢	残高42	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	褐橙色	外斜めハケ後横ミガキ、内ナデ。	小片		1119
68-128		住9	外反口縁鉢	残高27	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	外淡褐灰色、内淡橙褐色	外縦ハケ・口縁外指頭圧痕後外横ミガキ。口縁内ミガキ、胴内ナデ。	小片		1120
68-129		住9覆土下部	外反口縁鉢	残高33	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	胴外縦ハケ後横ミガキ、胴内ナデ。	小片		1118
68-130		住9覆土下部	外反口縁鉢	口径136、残高57	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	器壁厚く、口縁緩やかに外反。胴外ケズリ、口縁内横ナデ、胴内ケズリ。	1／6		941
69-131		住9覆土下部	直口鉢	口径76、器高23	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	黒色	平底の小形品。	1／2		923
69-132		住9上面	直口鉢	口径118、器高36	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外下部ヘラケズリ後内外ミガキ。	1／4		896
69-133		住9覆土下部	直口鉢	口径128、器高35	粘土粗、1mm石英・クサリ礫極少	良好	淡橙褐色	内外ミガキ。	1／6		951
69-134		住9覆土下部	直口鉢	口径130、残高35	粘土細、1～3mm石英・長石極少	良好	橙褐色	外下部ヘラケズリ後内外ミガキ。	1／4		952
69-135		住9	直口鉢	残高22	粘土粗、1～3mm石英少	良好、口縁部黒変	外赤褐色、内褐黄色	内外ミガキ。	小片		1121
69-136	37	住9覆土下部	直口鉢	口径98、残高32	粘土粗、1～3mm石英少	良好、底外黒斑	淡灰褐色	内外極めて雑ナデ。	3／4		861
69-137		住9覆土下部	直口鉢	口径122、残高33	粘土細、1～3mm石英極少	良好	橙褐色	外ハケ、内ナデ。	1／4		953
69-138		住9覆土下部	直口鉢	口径106、残高42	粘土細、1～3mm長石・クサリ礫多	良好	橙褐色	口縁端外微かな段をなす。内外摩滅するが、内に横ミガキわずかに残。	1／4		895
69-139		住9上面	直口鉢	口径156、残高30	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	褐色	口縁端短く内湾。	1／4		897
69-140		住9覆土下部	直口鉢	口径150、残高36	粘土粗、1～3mm石英少	良好、口縁端黒変	淡黄橙褐色	器壁厚く端部角張る。外ハケ、内板ナデ。	1／6		957
69-141		住9覆土下部	直口鉢	口径118、残高45	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好、口縁内外褐変	外暗黄褐色、内褐色	口縁端外微かな段をなす。内外斜めハケ。	1／6		1121
69-142		住9	直口鉢	口径138、器高50	粘土粗、1～5mm石英少	良好	黄褐色	外ケズリ後雑なハケ、内口縁端ハケ後やや太めのミガキ。	1／4		927
69-143		住9覆土下部	脚付鉢	口径88、残高47	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡灰褐色	外指頭圧痕を残す雑なナデ、鉢内板ナデ。内外に接合痕を多く残し、粗雑。	2／5		926
69-144	37	住9no.2	脚付鉢	裾径66、残高29	粘土粗、1～3mm石英多	良好	白褐色	脚外・鉢内摩滅、脚内ナデ。	2／3		856
69-145	37	住9	脚付鉢	裾径102、残高34	粘土細、1～3mm石英少	良好	明褐色	乾燥前穿孔1個所残。脚外縦ミガキ、胴外横ミガキ、胴内、脚内ナデ。端部凹む。	胴1／6、脚2／3		853
69-146		住9覆土下部	脚付鉢	裾径106、残高22	粘土粗、1mm石英・雲母少	やや甘い、内面黒変	灰白褐色	裾径大きい。内外ナデ。	1／3	壺脚部の可能性もあり。	933
69-147	37	住9no.13	脚付鉢	口径146、器高68、裾径76	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄橙褐色	鉢外斜めハケ、鉢内斜めハケ後ミガキ。脚外ナデ、脚内ハケ。	ほぼ完形		839
69-148		住9覆土下部	脚付鉢	裾径208、残高25	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	淡橙褐色	外横ミガキ、内斜めハケ。	1／8		967
69-149	37	住9覆土下部	脚付鉢	裾径116、残高63	粘土粗、1～5mm石英・長石少	良好	黄褐色	脚高い。鉢内外ミガキ、脚外縦ハケ後板ナデ、脚内板ナデ。	2／3		964
69-150	37	住9no.21	脚付鉢	裾径106、残高71	粘土粗、1～3mm石英多	良好	褐黄色	脚端をつまみ上げる。脚外斜めハケ、脚内横ハケ、胴外縦ハケ、胴内斜めハケ。接合部外指頭圧痕残。	脚全周、胴1／6		855
69-151		住9覆土下部	在地系器台	口径124、残高40	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外褐黄色、内淡黄褐色	器壁厚い。口縁端斜め方向工具刺突後ナデ。外縦ハケ、内横ハケ。	1／6		934
69-152	37	住9覆土下部	小形器台	口径97、裾径114、器高86、脚高62	粘土粗、1mm石英・長石極少	やや甘い	明褐色	口縁内外ナデ。受部底外ケズリ？後横ミガキ、受部内放射状ミガキ、脚外斜めハケ、脚内ハケ後裾内ナデ。	受部完形、脚1／2残		846
69-153		住9覆土上部	小形器台	口径96、残高19	粘土細、1mm長石極少	良好	淡橙褐色	外横ミガキ、内横ミガキ後放射状暗文ミガキ。	1／6		891
69-154		住9覆土上部	小形器台	裾径116、残高67	粘土細、1～3mm石英少	良好	褐色～橙褐色	0・3・6時方向に半乾燥時の穿孔残。外横ミガキ、内ハケ後ナデ・指頭圧痕。	1／2		884・888
69-155		住9覆土下部	山陰系鼓形器台	口径204、残高33	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外淡褐灰色、内暗褐色	外ナデ、内ケズリ後横ミガキ。	1／8		1103
69-156		住9覆土上部	山陰系鼓形器台	括部系120、残高56	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	外淡灰黄褐色、内暗褐灰色	屈曲部上外面板工具のあたりのような微かな段あり。外ナデ、内ミガキ。	1／4		894
69-157	37	住9覆土下部	山陰系鼓形器台	口径168、裾径144、括部径76	粘土粗、1～3mm石英・長石多	やや甘い、内外黒変	淡黄褐色	括部外ナデ以外は外面縦ミガキ。受部内横ミガキ、裾部ケズリ。	1／2	外面摩滅進むが、内面調整は遺存良好	842
69-158		住9覆土下部	山陰系鼓形器台	裾径148、残高42	粘土粗、1～3mm石英多	甘い	灰黒褐色	外面にかすかな稜あり。外摩滅、内上部ケズリ、下端横ナデ。	1／4	焼成極めて悪い	930
69-159		住9覆土上部	山陰系鼓形器台	残高29	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡褐色	外縦ハケ後ナデ、内ケズリ。	小片		1132



第67図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（1／3）

152～154は精製の小形器台。154は0・3・6時の3方向に半乾燥時の穿孔が残る。155～160は山陰系鼓形器台で、157・160は外面を縦ミガキで仕上げ、159は外面に斜めハケを残す。

161は内外にハケメを残すもので、朝鮮半島系の甑を模倣して製作された土師質甑の口縁か。162は陶質土器壺口縁部。163は瓦質、164は陶質の胴部片。

165～167はいずれも内外を雑なナデで仕上げた製塩土器である。168～174はタコ壺。

175在地系甕口縁部、176タコ壺はいずれも9号竪穴住居跡・14号竪穴住居跡北側の遺構面から出土したものである。

10号竪穴住居跡（図版15、第71図）

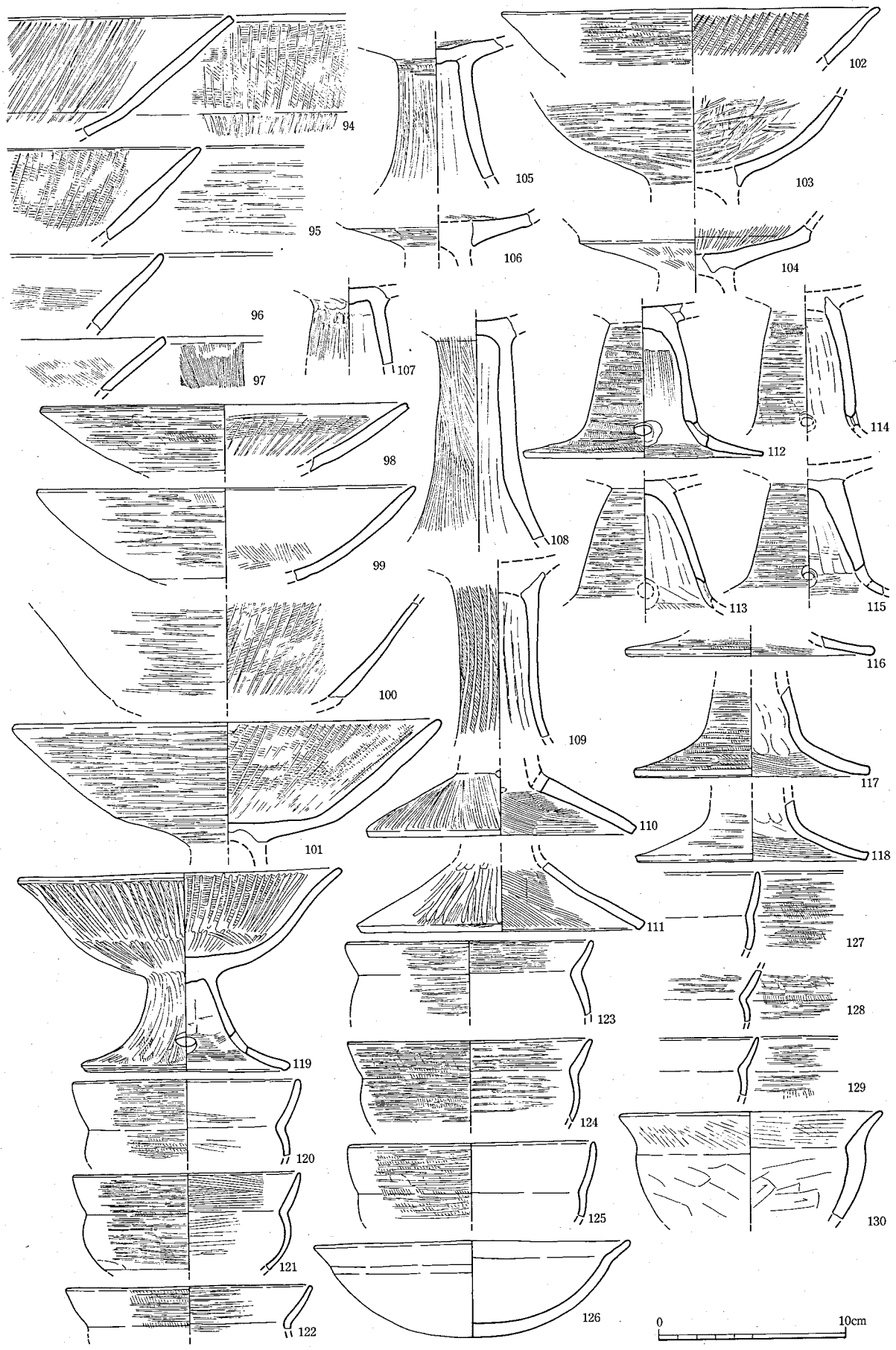
3A～C区北壁沿いに位置する。水道管埋設のための未調査部分を挟んで3D区南壁沿いにも不明瞭な落ち込みがあり、両者が一連となることも考えて図示した。南西側の壁は明瞭に検出でき、南部では床面はほぼ平坦であるため、竪穴住居跡となることは間違いない。一連の高校改築事業に伴う発掘調査で検出された竪穴住居跡でも北限を画する位置にある。覆土は灰褐色細砂。

未調査区を挟んで検出された両者の遺構を一連とするならば、南北7mを越えるやや長大な竪穴住居跡となり、やや不自然である。床面の標高も0.15m程の差がある。3A～C区北壁沿いから未掘部分にかけての範囲で収束する可能性も大きいと考えるべきであろう。そうとすれば、主軸を北西－南東、N－56°－Wに向けた北東－南西4.3m、北西－南東4.0mの方形に近い平面となるか。

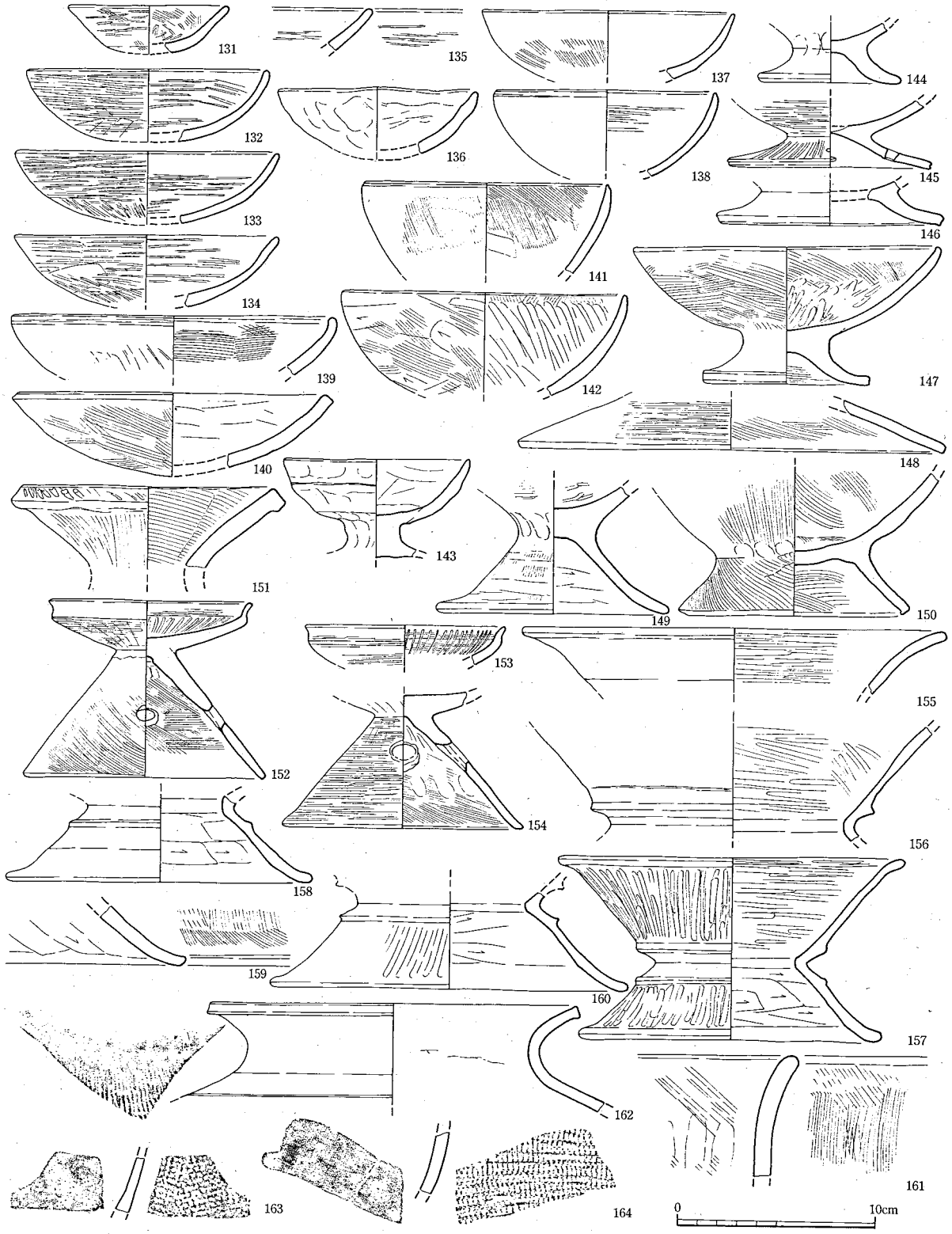
出土遺物（図版38、第71図、第36表）　1は在地系大形壺の口縁部である。頸部に断面三角形突帯を貼付し、頂部をハケメ工具で刻目を施文する。2は畿内系二重口縁壺か。3～5は山陰系二重口縁壺である。6は小形で精製の畿内系二重口縁壺か。7・8は壺底部片と推測されるもので、8は平底に近い凸レンズ状の底をなす。

第35表　9号竪穴住居跡出土土器観察表（6）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
69-160		住9覆土下部	山陰系鼓形器台	裾径172、残高47	粘土粗、1～3mm石英少	良好、脚裾内黒変	外淡橙褐色、内淡黄褐色	括部外ナデ、裾外縦ミガキ、裾内ケズリ、裾端内横ナデ。	1／12		931
69-161		住9覆土下部	甑口縁？	残高60	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	褐黄色	外口縁直下斜めハケ後縦ハケ、内ハケ後指頭圧痕。	小片		2344
69-162		住9no. 5	半島系土器壺口縁	口径180、残高53		陶質	灰白色	口縁外～胴内ナデ、胴外平行タタキ後沈線。頸部内接合痕残。	1／4		1124
69-163		住9覆土上部	半島系土器胴部片			瓦質	灰褐色	外雑な格子タタキ、内凹凸のあるナデ。	小片		2345
69-164		住9	半島系土器胴部片			陶質	灰褐色	外雑な格子タタキ、内直線的なナデ。	小片		2341
70-165	37	住9覆土下部	製塩土器	裾径50、残高25	粘土粗	良好		内外雑なナデ。	1／3		847
70-166		住9覆土下部	製塩土器	裾径50、残高22	粘土粗、1mm長石少	良好	褐色	内外雑なナデ。	1／4		963
70-167		住9覆土下部	製塩土器	裾径50、残高14	粘土粗、1mm長石多	良好	褐色	内外雑なナデ。	1／4		962
70-168	37	住9no. 7	タコ壺	口径43、器高110	粘土細、1～3mm石英多	良好	淡黄橙褐色	内外雑なナデであるが、外下部に板状工具痕残。	1／2		852
70-169		住9覆土下部	タコ壺	口径60、器高77	粘土細、1～3mm石英極少	良好	外淡黄橙褐色、内橙褐色	平底気味で、内外ナデ。外下部に棒状工具痕残。	1／2		938
70-170		住9	タコ壺	残高37	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	外灰褐色、内灰黄褐色	内外ナデ。	全周		937
70-171	37	住9上面	タコ壺	口径42、器高84	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／2		758
70-172	37	住9覆土下部	タコ壺	口径43、器高100	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ、外下部にハケ残。	ほぼ完形		849
70-173	37	住9覆土下部	タコ壺	口径42、器高88	粘土細、1～3mm石英少	良好	褐白色	内外ナデ。	完形		850
70-174		住9床面下層	タコ壺	口径64、残高64	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い、器肉中央黒変	淡灰黄褐色	内外ナデ。	1／6		876
70-175		住9・14北遺構面	在地系甕	口径232、残高58	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	淡黄褐色	端部上方にわずかにつまみ上げ気味。外縦ハケ、内横・斜めハケ。	1／8		900
70-176	37	住9・14北遺構面	タコ壺	口径38、器高101	粘土粗、1～5mm石英少	良好	暗褐赤色	安定した平底なす。内外ナデ。	ほぼ完形		857



第68図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（6）（1／3）

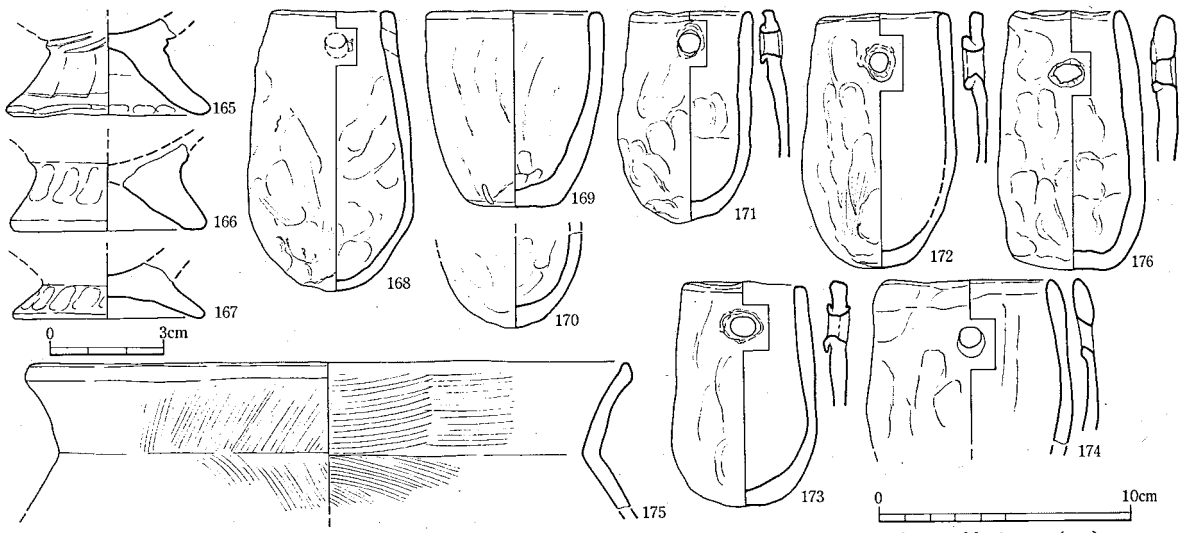


第69図　9号竪穴住居跡出土土器実測図（7）（1／3）

9～21は布留系甕である。9・13・20・21は口縁端部を上に微かにつまみ上げ、10は外にわずかにつまみ出す。14は肩部に直線沈線文を施文する。

22・23は高杯杯部片、24は高杯脚部片で、脚裾0・3時方向に半乾燥時の穿孔が残る。

25・26・29は外反口縁鉢で、いずれも外にミガキを施す精製品であるが、29は黄褐色を呈し、他と色調が異なる。27・28は精製直口鉢。30は山陰系鼓形器台脚裾。



第 70 図　9 号竪穴住居跡出土土器実測図（8）（165 ～ 167 は 1 ／ 2、他は 1 ／ 3）

31 は陶質土器胴部片で外面は平行タタキ後、沈線を密に巡らす。

32 のタコ壺は、胎土は精良で、色調も含めて小形精製器種に近いものである。

11 号竪穴住居跡（図版 15、第 71 図）

3 区の中央やや南東寄り、13 号竪穴住居跡の南東に位置する。南を大きく撹乱によって失い、北辺は確実であるが、東西両辺はやや不明瞭であった。図示した状況を基準とするならば主軸をほぼ南北に向け、南北方向に最大 1.8m、東西方向に最大 3.4m 残存する方形ないしは長方形の竪穴住居跡となる。壁は良好な個所でも、わずかに高さ 0.1m しか遺存しない。

床面の中央やや東寄りで、直径 0.5m の範囲にわたり半円形に床面が鮮やかな褐色に変色しており、炉跡と考えられる。覆土は灰褐色細砂である。

東西の両辺が不明確であったため、13 号住居跡との切合いは確定できず、西壁際出土とした第 72 図 33 は西に位置する 13 号住居跡に伴う可能性が高いと思われる。

出土遺物（図版 31、第 72 図、第 36 表）　いずれも直口鉢である。33 はミガキ仕上げの精製品で、外下部にタタキ痕に類似した条痕が認められることが注意される。34 はケズリ後ナデ仕上げで、ミガキが確認されない。

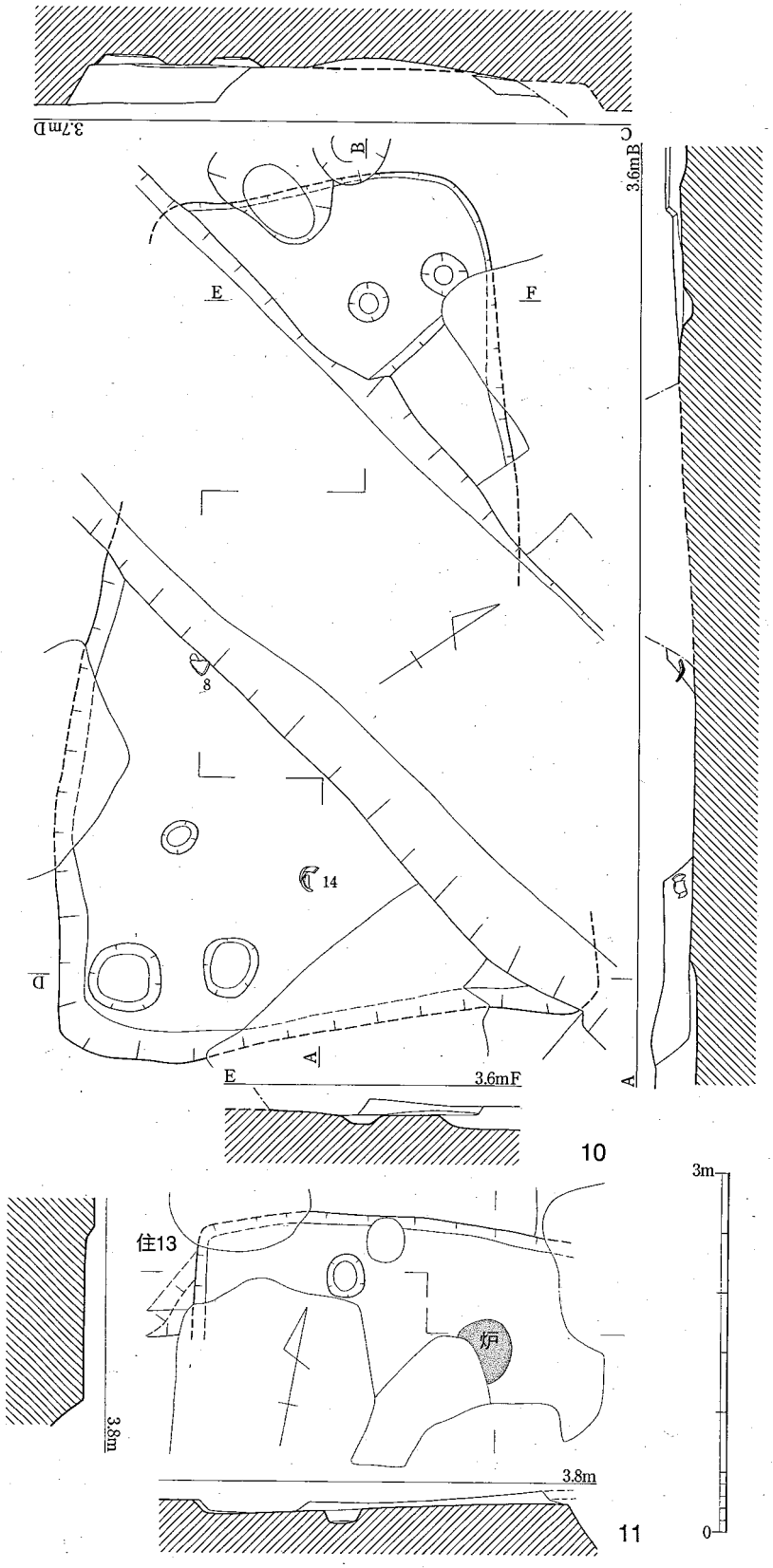
12 号竪穴住居跡（図版 15・16、第 73 図）

3 区の中央やや南寄りに位置し、西にある 13 号竪穴住居跡を切っている。13 号住居跡との切合う部分の輪郭はやや不明瞭であったが、他の辺は地山に掘り込んでいるために輪郭は確実である。撹乱、近世遺構により失われたりする部分もあるが、遺存状況も比較的良好である。

現状では主軸をＮ－ 60°－Ｅに向けた長方形を呈し、長軸方向長さ 4.4 ～ 4.8m、幅 3.6 ～ 3.7m を測り、北東隅近くにカマドを設置する。壁の高さは遺存状況の良好な個所で、40cm 前後である。覆土は暗褐色～褐色細砂。北東隅に、住居跡対角線方向に主軸を向けたカマドを設置する。

カマド（図版 15・16、第 74 図）　住居跡の北東隅に設置されており、遺存状況は良好な部類に属する。煙道は住居の北東隅付近で屋外へ排煙したものであるが、カマドの主軸は住居跡主軸と同様に、北東－南西方向を向け、住居跡壁から袖端部までの長さ 1.8m を測る。

カマドは主として 3 cm 前後の厚さの灰白褐色細砂と 0.2 ～ 0.3cm 前後の厚さの褐色粘質砂を互



第71図　10・11号竪穴住居跡実測図（1／60）

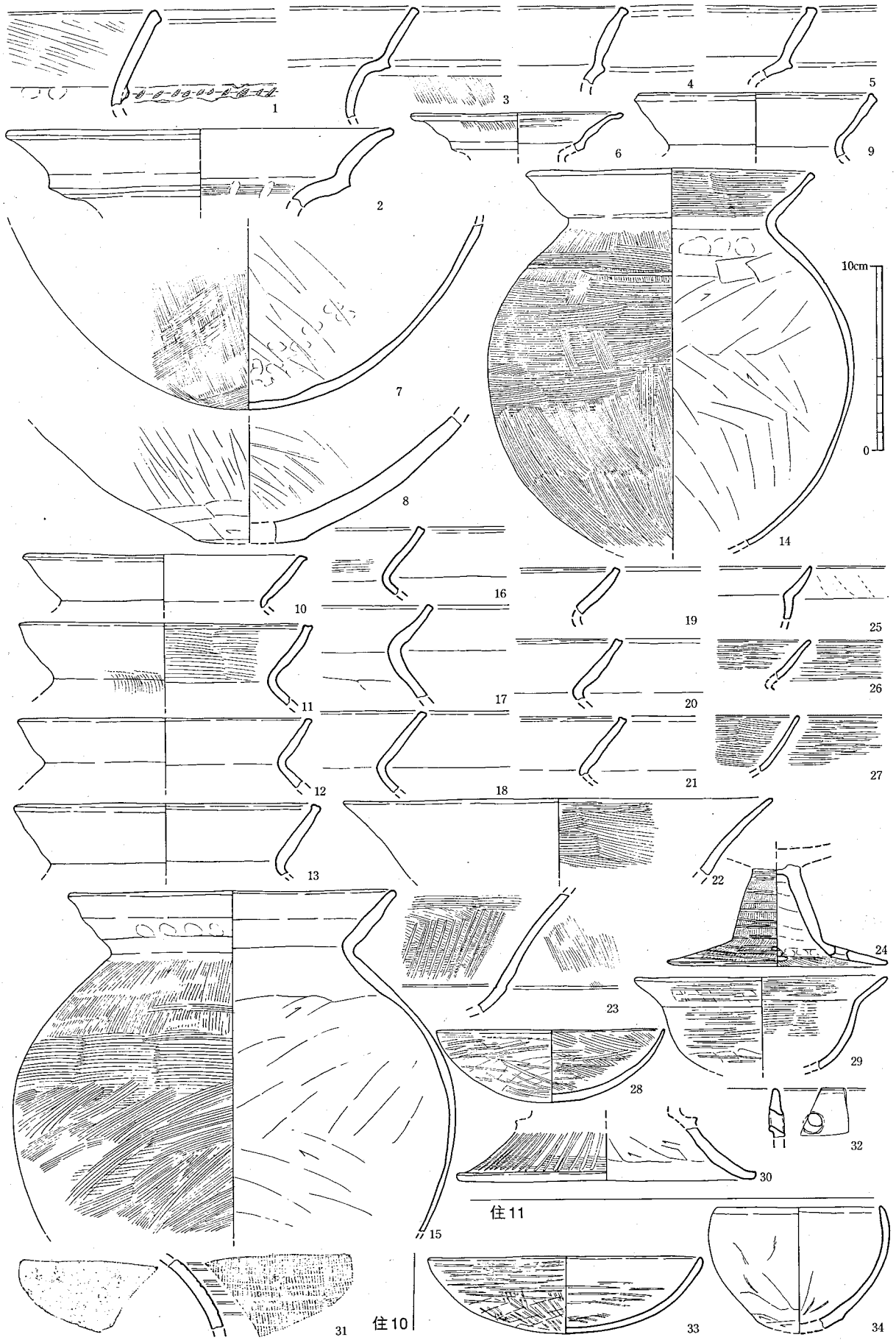
層にして構築している。壁近くの煙道端部では床面から高さ30cm程残り、煙道がトンネル状に遺存していたが、端部近くで急激に立ち上がる形態を断面で確認することができた。煙道端部は直径30cm前後の円形をなし、焼土塊が集中して堆積していた。床面の熱による褐変が認められず、支脚も検出されていないので、燃焼部は不明であるが、袖の先端部では内幅0.35m程になる。

出土遺物（図版38、第75～77図、第37～39表）　1～3は畿内系直口壺の口縁部片。4～7は山陰系二重口縁壺で、4は肩部に沈線波状文、5は頸部に平行斜線文を施文する。6は頸部内面にミガキがわずかに残る。8は壺の底部片か。9～11は精製の小形丸底壺口縁部片である。12は在地系甕。13は五様式系甕で、胴部～口縁部外面には粗いタタキ痕が残る。

14～31は布留系甕である。25は肩に沈線波状文、24・26は沈線直線文を施文する。15は口縁内面を肥厚させ、16・21・23・28は上方につまみ上げ、22・29は外に、30は内につまみ出す。30は頸部内面に、ケズリにより生じた粘土片が指頭圧痕の上から付着する。

32は大形で在地系高杯口縁部となるか。33・34は高杯杯下部破片、35～37は高杯脚裾部の破片である。

38～41は山陰系大形二重口



第72図　10・11号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）（1～32：住10　33・34：住11）

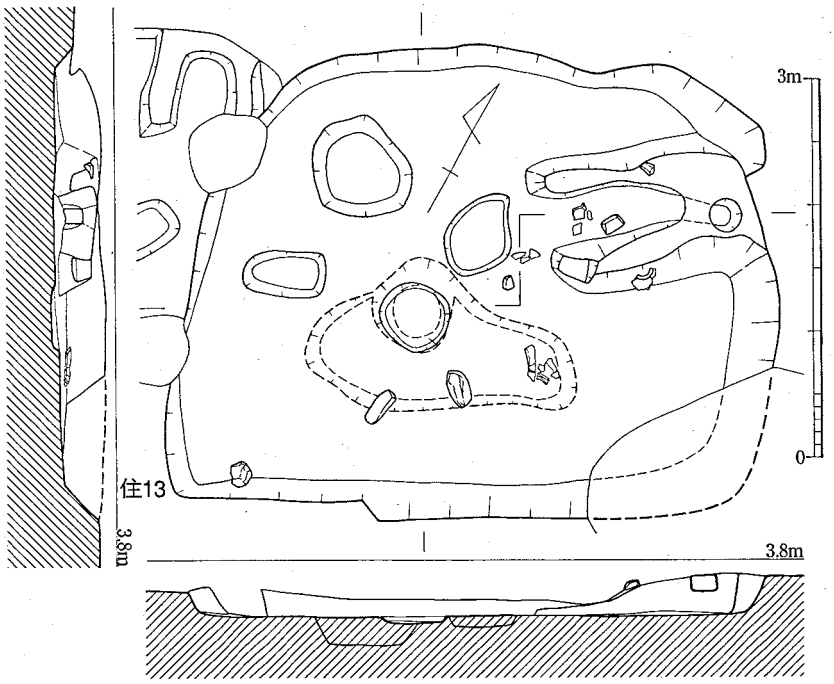
第36表　10・11号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
72-1		住10上面	在地系大形壺口縁	残高50	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡褐黄色、内淡黄褐色	頸部に断面三角形突帯を貼付し、頂部をハケメ工具で刻目施文。	小片		9
72-2		住10上面	畿内系?二重口縁壺	口径202、残高42	粘土細、1～3mm石英・長石・クサリ礫少	良好	淡褐色	口縁端部丸い。口縁内外ナデで、とくに外ナデ強い。頸内ハケ後ナデ。	1／6		22
72-3		住10覆土	山陰系二重口縁壺	残高58	粘土細、1～3mm石英多	良好	外淡橙褐色、内褐黄色	頸部外面ハケ後内外ナデ。屈曲部下ナデが強く微かに凹む。	小片		24
72-4		住10上層	山陰系二重口縁壺	残高42	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄橙褐色	口縁端部を外につまみ出す。内外横ナデ。	小片		19
72-5		住10上層	山陰系二重口縁壺	残高38	粘土粗、1～3mm石英・角閃石・クサリ礫多	やや甘い	黄白褐色	口縁端部を内につまみ出す。内外横ナデ。	小片		20
72-6		住10上面	小形二重口縁壺	口径110、残高20	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	橙褐色	端部やや上につまみ上げ。外摩滅するが縦ハケ残。内横疎らに横ミガキ。	1／8	畿内系か	23
72-7		住10覆土	壺胴下部	残高96	粘土粗、1～3mm石英・長石・クサリ礫少	良好	褐灰色	外方向不定のハケ、内指頭圧痕後ケズリ。	1／6	外煤付着	1
72-8		住10no.1	壺底部	底径60、残高66	粘土粗、1～5mm石英多	良好、外面大黒斑、底黒変	淡黄褐色	平底に近い凸レンズ状の底。内外板ナデ。	1／6	内煤？コゲ？のためか褐変。	11
72-9		住10覆土	布留系甕	口径124、残高33	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外ナデ、内摩滅。	1／6		17
72-10		住10上層	布留系甕	口径142、残高28	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	外ナデ、内摩滅。	1／6		7
72-11		住10上面	布留系甕	口径146、残高43	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	端部水平な面なし、中央凹む。頸外縦ハケ、口縁内横ハケ後内外ナデ。	1／8		10
72-12		住10覆土	布留系甕	口径148、残高36	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	外淡褐橙色、内淡黄褐色	内外ナデ。	1／8		16
72-13		住10覆土	布留系甕	口径152、残高37	粘土粗、1mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡黄橙色	内外ナデ。	1／4		18
72-14	38	住10 no.2	布留系甕	口径148、頸径110、胴径194、残高198	粘土細、1～5mm石英少	良好	褐色～淡黄褐色	肩直線沈線文。胴外ハケは頸下縦ハケ肩横ハケ、下部縦・斜めハケの順。口縁内横ハケ後口縁内外横ナデ。	口縁全周、胴1／3		2
72-15	38	住10上層	布留系甕	口径170、頸径128、胴径234、残高180	粘土粗、1～5mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	口縁端部丸く、口縁器壁厚い。胴外ハケは頸下縦ハケ肩横ハケ、下部斜めハケの順。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／3		5
72-16		住10覆土	布留系甕	残高36	粘土粗、1～5mm石英多	良好	褐黄色	内ハケ後内外ナデ。	小片	外煤付着	13
72-17		住10上層	布留系甕	残高49	粘土粗、1mm石英・長石極少	やや甘い	黄橙褐色	外摩滅、口縁内横ナデ、胴内ケズリ。	小片		17
72-18		住10上層	布留系甕	残高44	粘土粗、1mm石英・長石少	やや甘い	淡黄褐色	外摩滅、内ナデ。	小片	内面汚染のため暗褐灰色	6
72-19		住10覆土	布留系甕	残高26	粘土細、1～3mm石英・角閃石少	良好	外暗褐色、内淡褐灰色	内外ナデ。	小片	外面の色は煤によるものか？	1429
72-20		住10覆土	布留系甕	残高32	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	内外ナデ。	小片		15
72-21		住10覆土	布留系甕	残高32	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡褐黄色	内外ナデ。	小片		12
72-22		住10上層	高杯杯部片	口径224、残高41	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外摩滅、内ハケ後口縁端内横ミガキ。	1／8	23と同一個体の可能性あり	27
72-23		住10上層	高杯杯部片	残高63	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	口縁と杯底部境界外は微かな段、内は沈線状。外摩滅するも斜めハケ残。内斜めハケ後暗文風縦ミガキ。	小片		27
72-24	38	住10上層	高杯脚部片	裾径114、残高54	粘土細、1mm石英・長石少	良好	淡黄橙褐色。	脚裾0・3時方向に半乾燥時穿孔残。外縦ハケ後疎らに横ミガキ、脚柱内板ナデ、脚裾内斜めハケ。	脚裾1／3、脚柱全周		21
72-25		住10覆土	外反口縁鉢	残高29	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	口縁外指頭圧痕後横ミガキ（摩滅）、内摩滅。	小片		31
72-26		住10覆土	外反口縁鉢口縁?	残高21	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	内外横ミガキ。	小片	小形丸底壺口縁の可能性もあり。	29
72-27		住10覆土	直口鉢	残高29	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外横ミガキ、内丁寧なハケ。	小片		32
72-28	38	住10覆土	直口鉢	口径118、器高38	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	胴外下部ヘラケズリ、胴内斜めハケ後内外疎らに横ミガキ。	1／3		30
72-29		住10上層	外反口縁鉢	口径132、頸径104、残高49	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	外黄褐色、内灰褐色	口縁外傾し、胴深い。胴外下ケズリ、口縁外指頭圧痕後外横ミガキ。口縁内ミガキ、胴内上部ハケ、下部ナデ。	1／4		34
72-30		住10覆土	山陰系鼓形器台	据径156、残高27	粘土粗、1～3mm石英多	良好	明褐色	外横ハケ後縦ミガキ、裾内ケズリ、裾端内横ナデ。	1／6		25
72-31		住10上面	半島系土器胴部片			陶質	灰黄色	外平行タタキ後、密な沈線。内は丁寧なナデ。	小片		2348
72-32		住10覆土	タコ壺	残高25	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	内外ナデ。	小片	胎土が精良で小形精製器種に近い。	26
72-33	38	住11西壁際	直口鉢	口径142、器高41	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好、外1／3周黒斑	外黄橙褐色、内橙褐色	外下部ケズリ後、内外横ミガキ（摩滅）。外下部にタタキ状条痕も残る。	ほぼ完形。		36
72-34		住11床面	直口鉢	口径86、残高64	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄橙褐色	外ケズリ後ナデ?、内ナデで下部に板状工具の小口痕残る。	1／4		97

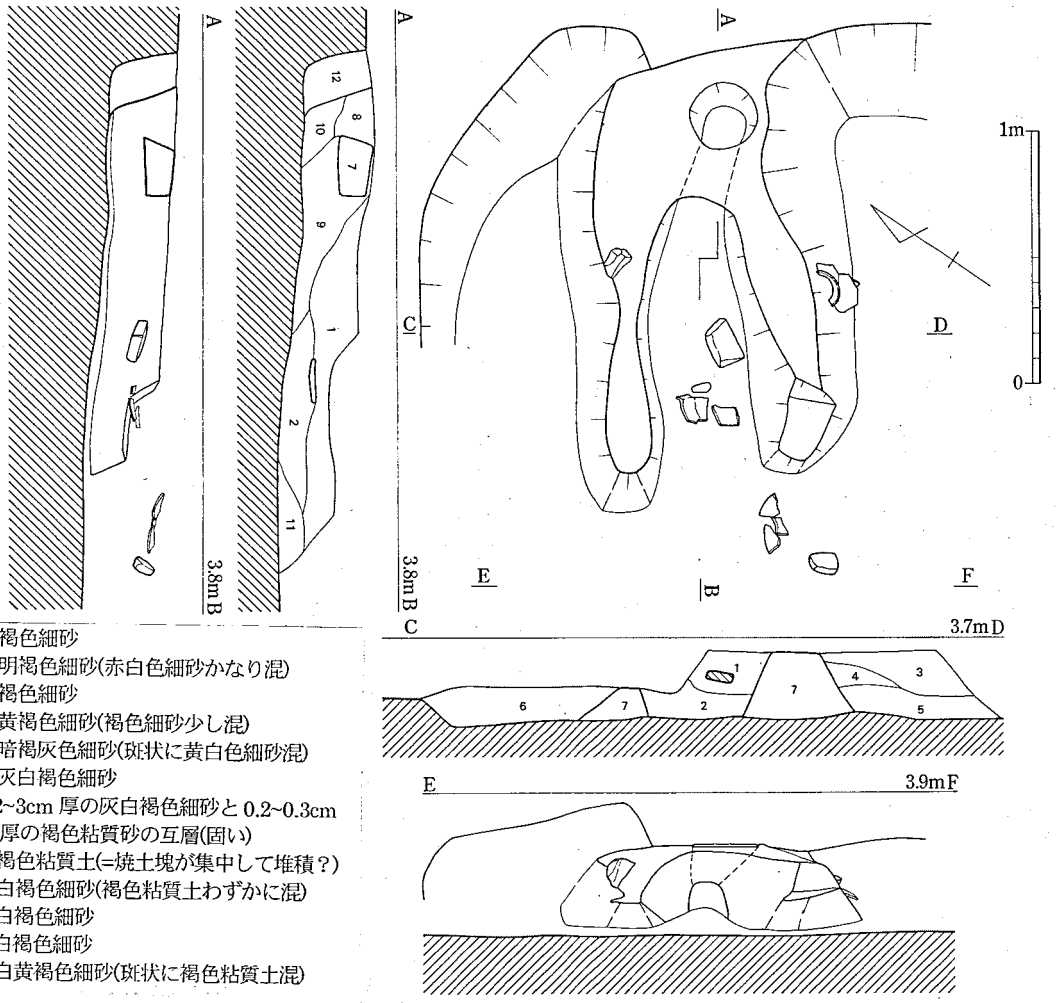
縁鉢で、いずれも口縁部に丁寧な横ナデを施すが、38は口縁外面にハケメが残る。42～47は外反口縁鉢で、42はミガキを施さない粗製品、他は精製品である。48・49は直口鉢で48は内外にミガキを施すが、平底を呈す49は内外雑なナデで仕上げる。

50～56は山陰系鼓形器台。51・53は裾内面をケズリの後疎らにミガキを施し、53は半乾燥時穿孔が1個所残る。

57は外面縄蓆文タタキの



第73図　12号竪穴住居跡実測図（1／60）



第74図　12号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）

陶質土器胴部片。58は胴部タタキ仕上げの製塩土器である。

59～66はタコ壺。66は胴部外面に、意図的な文様かは不明の「V」字状の線刻が見られる。

67～71は12号住居跡の南の遺構面・包含層、北の遺構面から出土したものである。67は高杯脚柱部で、粘土の軟らかい時点での穿孔が1個残る。68は高杯脚裾部、69は外反口縁鉢である。70は脚付鉢と考えられ、鉢内外を板ナデ、脚内外を雑なナデで仕上げる。71はタコ壺である。

13号竪穴住居跡（図版16、第78図）

3区の中央やや南部、12号竪穴住居跡の南西に位置し、12号住居跡に切られる。14号住居跡に北東部を大きく壊されているが、他の個所は地山に掘り込んでおり、輪郭は明瞭であった。

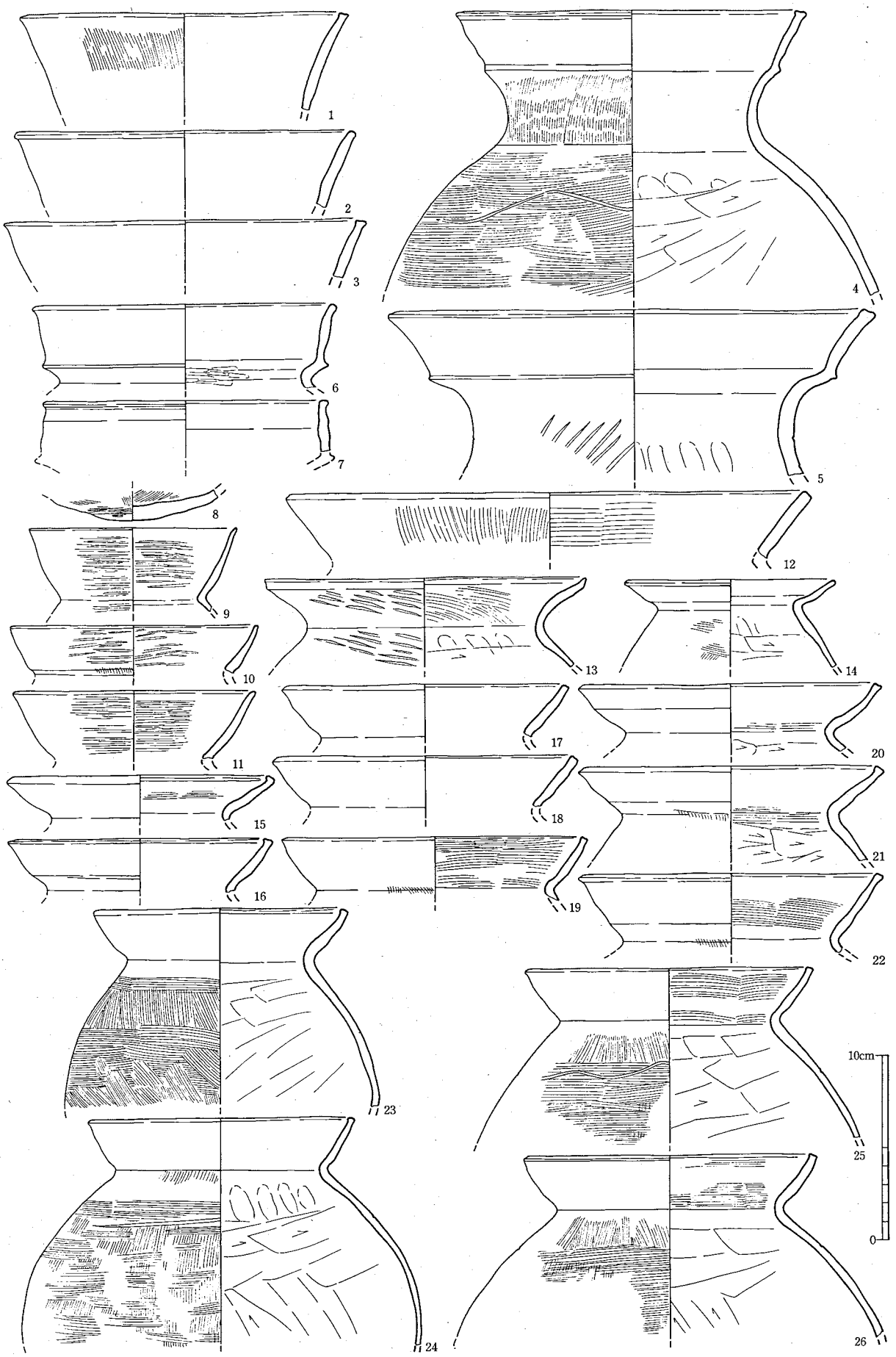
主軸をN－26°－Eに向けた、ほぼ正方形を呈し、北隅に対角線方向に主軸を向けたと思われるカマドを設置している。南北4.5m前後、東西4.0m前後を測り、壁は遺存状況の良好な個所で高さ20cm程を測る。出土遺物は多くないが、輪郭も明瞭であったために、一括性は良好と考えられる。

覆土は暗褐色細砂で、床面のピットの覆土も明褐色細砂を覆土とするP1を除けば、ほとんどが暗褐色細砂であった。

カマド（図版16、第79図） 住居跡の北隅に設置されたものであるが、大半を12号住居跡の掘り込みによって失い、残存していたのは煙道端部近くの幅1.0m、長さ0.9m程の馬蹄形積土のみで

第37表　12号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

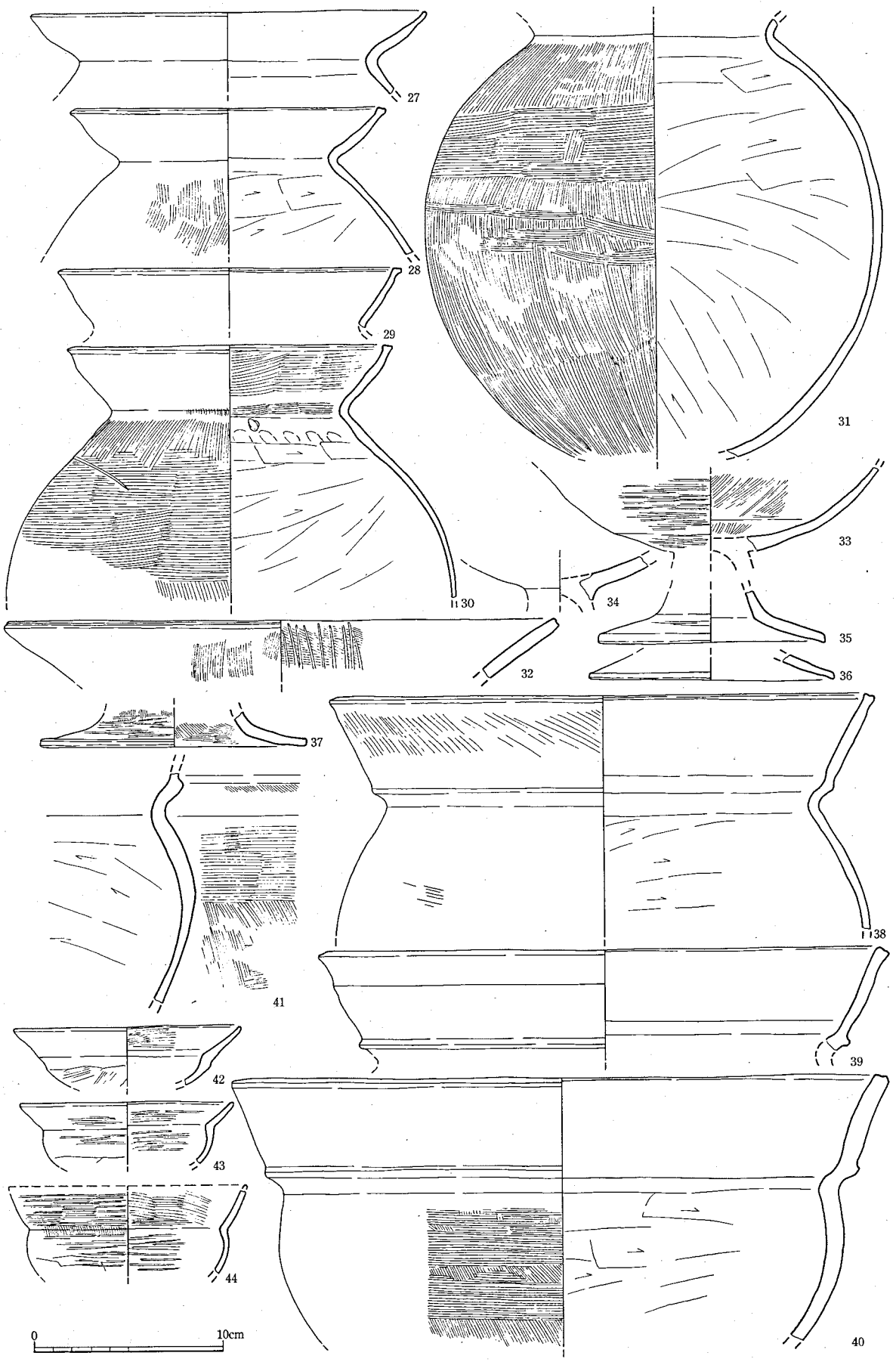
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
75-1		住12カマド周辺	畿内系直口壺	口径162、残高53	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内褐黄色	外縦ハケ後口縁内外ナデ。	1／8		249
75-2		住12上面	畿内系直口壺	口径174、残高41	粘土粗、1～3mm石英少	良好	明褐色	内外ナデ。	1／12		212
75-3		住12覆土下部	畿内系直口壺	口径182、残高32	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外淡黄褐色、内淡褐黄色	内外ナデ。	1／8		237
75-4		住12no.5	山陰系二重口縁壺	口径174、頸径132、残高148	粘土粗、1～3mm石英・長石・角閃石少	良好	暗褐色	肩部に沈線波状文。口縁屈曲部の突出が小さく、端部内につまみ出す。胴肩外横ハケ、頸外縦ハケ。	1／8		45・47
75-5		住12覆土	山陰系二重口縁壺	口径246、残高87	粘土粗、1～5mm石英・長石多	良好	褐色	頸部にハケメ工具小口刺突か、沈線か不明の平行斜線文。内外ナデ。	1／8		46
75-6		住12覆土	山陰系二重口縁壺	口径154、残高44	粘土細、1mm石英・長石少	やや甘く、内面黒変	黄白褐色	頸部短く口縁直に近い角度で立ち上がる。口縁内外ナデ、頸内ミガキ。	1／8	外面煤が厚く付着	233
75-7		住12覆土	山陰系二重口縁壺	口径144、残高27	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外淡褐黄色、内淡黄褐色	内外の横ナデ強い。	1／8		223
75-8		住12覆土	壺底部？	残高15	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	底わずかに突出。内外ハケ。	全周		71
75-9		住12覆土	小形丸底壺	口径108、頸径78	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	内外ミガキ。	1／12		225
75-10		住12覆土	小形丸底壺	口径128、残高26	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	明褐色	内外横ミガキ、頸外にハケ残。	1／8		10
75-11		住12カマド周辺	小形丸底壺	口径126、残高35	粘土細、1mm長石極少	良好	橙褐色	内外横ミガキ。	1／8		244
75-12		住12カマド周辺	在地系甕	口径268、残高35	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外縦ハケ、内横ハケ後内外横ナデ。	1／12	径、傾き不安	241
75-13		住12覆土下部	五様式系甕	口径166、残高47	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	外褐白色、内淡黄褐色	口縁端部つまみ上げ、直立に近い面をなす。外左上がりタタキ、口縁内斜めハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／8		238
75-14		住12覆土	布留系甕	口径108、残高46	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外淡黄褐色、内淡褐黄色	口径小さく、器壁薄い。胴外ハケ、胴内ケズリ口縁内外ナデ。	1／6		217
75-15		住12カマド周辺	布留系甕	口径134、残高24	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	灰白褐色	口縁端内面を肥厚	1／6		248
75-16		住12覆土	布留系甕	口径130、残高28	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端上方につまみ上げる。内外ナデで、頸外面微かな段あり。	1／6	外面煤が厚く付着	231
75-17		住12覆土	布留系甕	口径146、残高28	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	黄白褐色	内外ナデ。	1／8		220
75-18		住12覆土	布留系甕	口径152、残高27	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄白褐色	内外ナデ。	1／6	外面薄く煤付着	219
75-19		住12覆土	布留系甕	口径152、残高34	粘土粗、1mm石英極少	やや甘い	淡黄褐色	口縁内ハケ、頸外縦ハケ後口縁内外ナデ。	1／4		216
75-20		住12覆土	布留系甕	口径154、残高36	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い	淡黄褐色	高円谷や内湾が強い。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8	外面煤付着	230



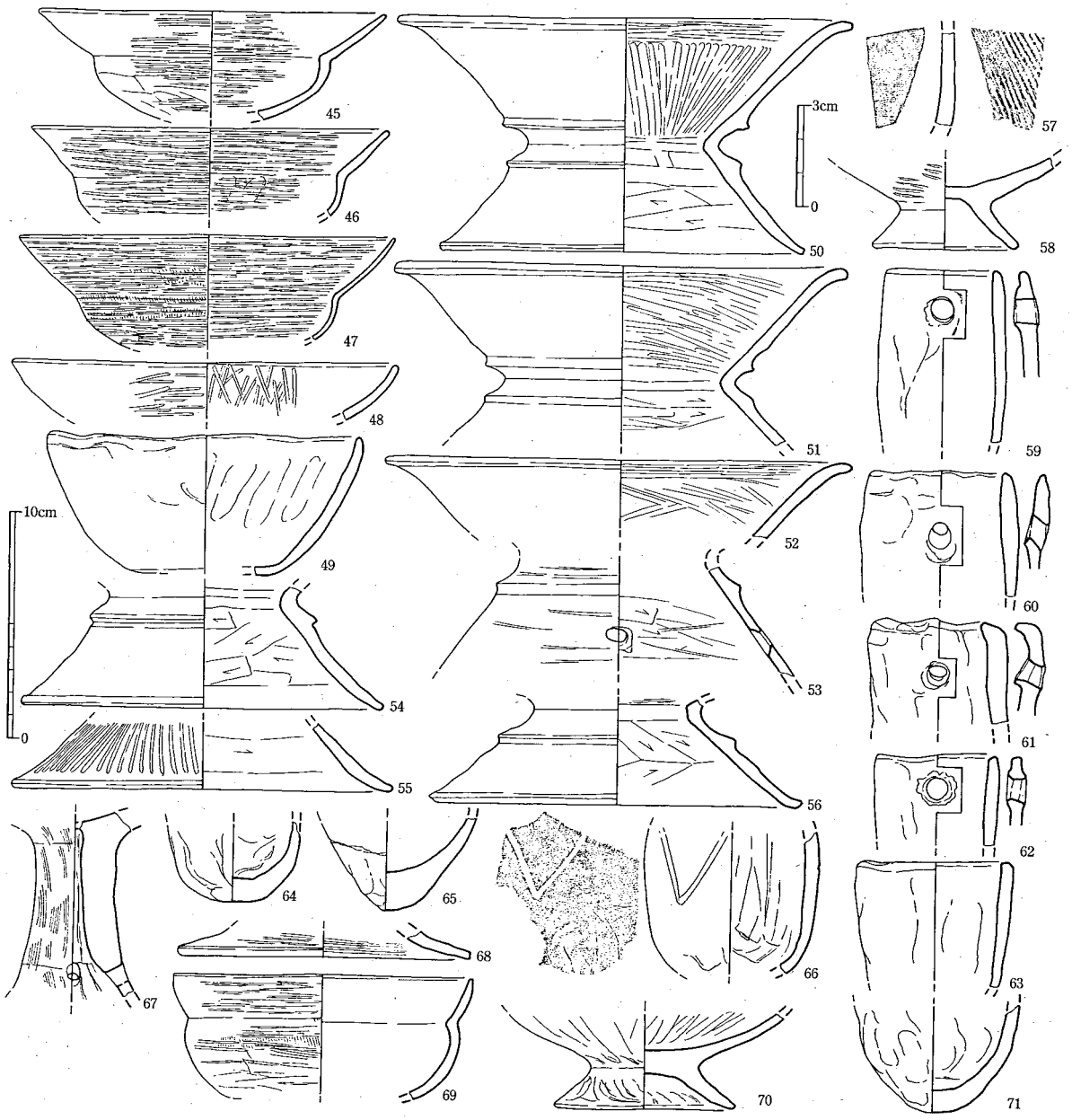
第75図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

第38表　12号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
75-21		住12覆土	布留系甕	口径154、残高50	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	外淡黄褐色、内淡褐白色	口縁端上方につまみ上げ。頸外縦ハケ、頸内横ハケ後口縁内外ナデ。	1／12		218
75-22		住12覆土	布留系甕	口径154、残高42	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	口縁端外につまみ出し。口縁内斜めハケ、頸外縦ハケ後内外横ナデ。	1／8		229
75-23	38	住12覆土	布留系甕	口径128、頸径98、胴径166	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好、胴下部黒変	褐色	口縁端上方につまみ上げ。胴外ハケ、胴内ケズリ、口縁内外横ナデ。	2／5		44
75-24		住12 no. 2	布留系甕	口径136、頸径111、胴径212、残高120	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	外淡黄褐色、内淡褐灰色	肩に沈線直線文。口縁立ち上がりが直に近く、端部丸い。胴外ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ、口縁内外横ナデ。	1／6	外面薄く煤付着	42
75-25		住12覆土	布留系甕	口径146、頸径116、残高90	粘土細、1～3mm石英多	良好	外黄白褐色、内淡黄褐色	肩に沈線波状文。胴外縦ハケ後横ハケ。口縁内横ハケ後内外横ナデ。	1／4		39
75-26		住12カマド周辺	布留系甕	口径148、頸径120、残高97	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄白褐色	肩に沈線直線文。胴外ハケ、口縁外ナデ、口縁内ヨコハケ、胴内ケズリ。	1／4	口縁外面に煤付着。25と同一個体かも	41
76-27		住12カマド周辺	布留系甕	口径206、残高43	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	口縁部の器壁薄い。口縁内外摩滅、胴内ケズリ。	1／8		240
76-28		住12覆土	布留系甕	口径156、残高78	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁端上方につまみ上げ。胴外縦ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／3	外面煤が厚く付着、特に口縁外顕著	40
76-29		住12覆土	布留系甕	口径172、残高32	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い	黄白褐色	口縁端外につまみ出し。内外ナデ。	1／12		222
76-30	38	住12 no. 3	布留系甕	口径162、頸径124、胴径236、残高133	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色～淡黄白褐色	口縁端内につまみ出し。胴外縦ハケ後肩横ハケ？。口縁内ハケ後内外ナデ。頸内ケズリにより生じた粘土片付着。	1／3		37
76-31	38	住12床面	布留系甕	頸径128、胴径240、残高230	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内黄褐色	胴外ハケは頸下縦ハケ、胴肩横ハケ、胴下部縦ハケ、胴下部横ハケの順。	1／3		38
76-32		住12カマド周辺	在地系高杯杯部片	口径284、残高31	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外褐灰色、内淡褐色	口縁直線的に開き、端部微かに凹む。外縦ハケ、内斜めハケ後縦ミガキ。	1／12		242
76-33		住12覆土	高杯杯部片	残高43	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡橙褐色、内黄橙褐色	外横ミガキ、内暗文風のミガキ。	1／8	破損後火を受け煤付着	69
76-34		住12覆土	高杯杯底部片	残高22	粘土粗、1mm石英少	やや甘い	暗褐色	外摩滅、内ミガキ？（摩滅）。	1／6		73
76-35		住12床面下層	高杯脚部片	裾径118、残高26	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	外横ミガキ？（摩滅）、脚柱内ケズリ？、脚裾内ナデ。	1／8		251
76-36		住12カマド周辺	高杯脚部片	裾径126、残高13	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘く、外面灰変	黄白褐色	内外摩滅のため調整不明。	1／6	別器種となる可能性もあり	245
76-37		住12覆土	高杯脚部片	裾径138、残高19	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い	淡橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	1／8		226
76-38		住12 no. 4	山陰系大形鉢	口径276、頸径226、残高124	粘土細、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色～淡黄灰褐色	胴外丁寧なナデで仕上げるが、ハケ？タタキ？残。口縁外斜めハケ後口縁内外横ナデ。胴内ケズリ。	口縁1／2、胴1／8		48
76-39		住12覆土	山陰系大形鉢	口径290、残高54	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	淡黄褐色	口縁端部を外にわずかにつまみ出し気味。内外ナデ。	1／12		242
76-40		住12覆土	山陰系大形鉢	口径332、頸径292、胴径296、残高139	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外明黄橙色、内黄褐色	胴外斜めハケ後横ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8		40
76-41		住12カマド周辺	山陰系大形鉢	残高120	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	外淡黄灰褐色、内黄褐色	胴外斜めハケ後横ハケ、胴内ケズリ。	小片		43
76-42		住12覆土	外反口縁鉢	口径118、残高31	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	淡灰褐色	胴外板ナデ。口縁内横ハケ後口縁内外横ナデ。胴内ナデ。	1／8		227
76-43		住12カマド周辺	外反口縁鉢	口径110、残高32	粘土細、1mm長石極少	良好	橙褐色	口縁微かに内湾して開く。胴外下部ケズリ後内外横ミガキ。	1／8		243
76-44		住12覆土	外反口縁鉢	残高43	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	端部欠損。胴外下部ケズリ、頸外縦ハケ後外横ミガキ。口縁内横ハケ後内疎らに横ミガキ。	1／6		64
77-45		住12覆土	外反口縁鉢	口径148、頸径106、残高48	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	口縁直線的に外傾し、長くのびる。胴外下部ヘラケズリ後内外横ミガキ。	1／6		66
77-46		住12覆土	外反口縁鉢	口径156、残高39	粘土細、1～3mm石英・金雲母少	良好	淡橙褐色	口縁直線的に外傾。胴外下部ヘラケズリ、胴内指頭圧痕後内外横ミガキ。	1／4		65
77-47	31	住12床面	外反口縁鉢	口径164、残高46	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	橙褐色	口縁わずかに内湾しながら開き、長くのびる。器壁も極めて薄い。胴外下部ヘラケズリ、胴上部～口縁外面縦ハケ後内外横ミガキ。	3／4		63
77-48		住12覆土	直口鉢	口径166、残高24	粘土細、1mm石英・長石少	やや甘い	灰黄褐色	外横ミガキ、内縦ミガキ。	1／12		234
77-49		住12カマド周辺	直口鉢	口径136、器高61	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	外灰黄褐色、内淡褐黄色	平底で、口縁内湾しながら長く伸びる。内外粗いナデによる雑な仕上げ。	1／4		67
77-50		住12床面	山陰系鼓形器台	口径194、括部径84、裾径158、器高104	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄褐色	括部急激に外反し、口縁・裾に至る。外丁寧な横ナデ。口縁内横ミガキ後縦ミガキ。裾部内ケズリ。	1／4	口縁内外、焼成のためか、煤の付着のためか黒変	57・59・60
77-51		住12 no. 1	山陰系鼓形器台	口径194、括部径102、残高79	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外黄灰褐色、内黄褐色	外横ミガキ、口縁内斜めミガキ、脚裾内ケズリ後疎らにミガキ。	1／3		56
77-52		住12覆土	山陰系鼓形器台	口径202、残高33	粘土粗、1～3mm石英・長石多	やや甘い	外褐灰色、内暗褐灰色	外横ナデ、内ヘラケズリ後ミガキ。	1／4		52
77-53		住12カマド周辺	山陰系鼓形器台	残高49	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好、内面黒変	淡黄褐色	半乾燥時穿孔1個所残。外横ナデ後疎らに横ミガキ、内ケズリ後疎らに横ミガキ。	1／8		250



第76図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）



第77図　12号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（58は1／2、他は1／3）

支脚及び燃焼面も検出されていない。カマドは白灰色細砂と薄く断面では脈状となった褐色粘質土を互層にして構築している。

出土遺物（図版38、第80・81図）　1～3は山陰系二重口縁壺。いずれも口縁端部を外につまみ出し、1は屈曲部の突出が強い。

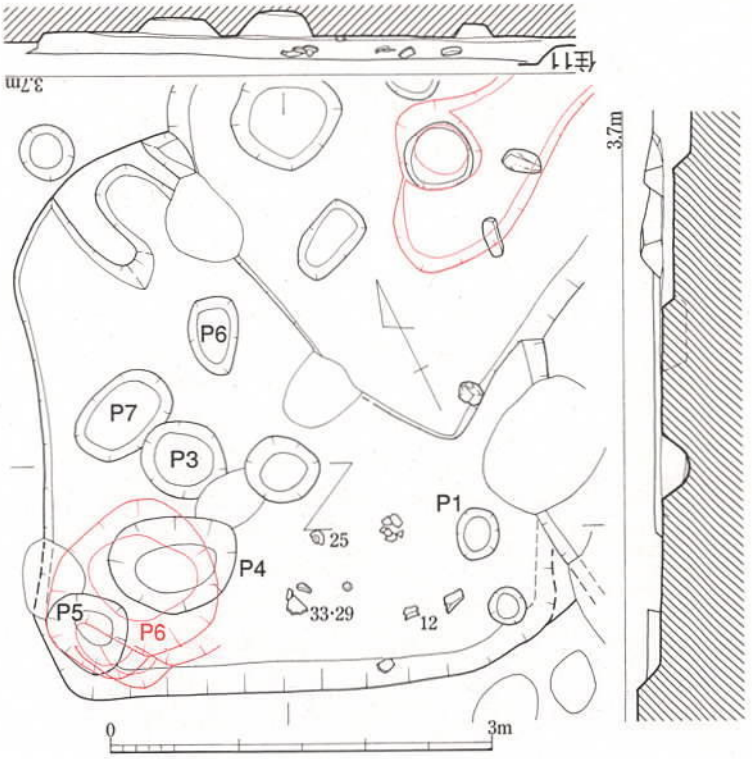
4は畿内系直口壺。5は畿内系の中形直口短頸壺。内外ミガキ仕上げで、ミガキは指頭圧痕後ケズリの胴部内面に及ぶ。6・7は在地系甕で、6は胴部に粗いタタキを残す。

8～16は布留系甕。9・10・12は口縁端部を外につまみ出し、13～16は口縁端内をつまみ上げる。8は形態・器壁の厚さなどは布留系甕と類似しているが、内外板ナデで仕上げた可能性がある点は布留系甕と異なる。12は内面ケズリが頸部稜まで及び、肩部にハケメ工具小口刺突文を施文する。17は甕ないしは壺の底部片で、底部は小さな平底をなす。

18～22は高杯杯部片。20・22は形態及び外面に縦ミガキを施すことから在地系高杯と考えら

れ、22は27と同一個体の可能性が高い。19は外面に細い縦ミガキを暗文風に施すものの、形態は畿内系高杯に近い。23は高杯杯底部片で破損部に杯と脚の接合痕を確認できる。24～27は高杯脚部片。半乾燥時に施した穿孔が24では1個所、25では0・6時方向2個所、27は0・4時方向2個所に残る。

28は精製の外反口縁鉢。29～32は直口鉢で、29～31は外面ミガキ仕上げの精製品、32は外面ナデ、内ナデ仕上げの粗製品。33・34は精製の畿内系脚付鉢脚裾部。35・36は山陰系の大形二重口縁鉢。37は畿内系の精製小形器台脚裾部である。



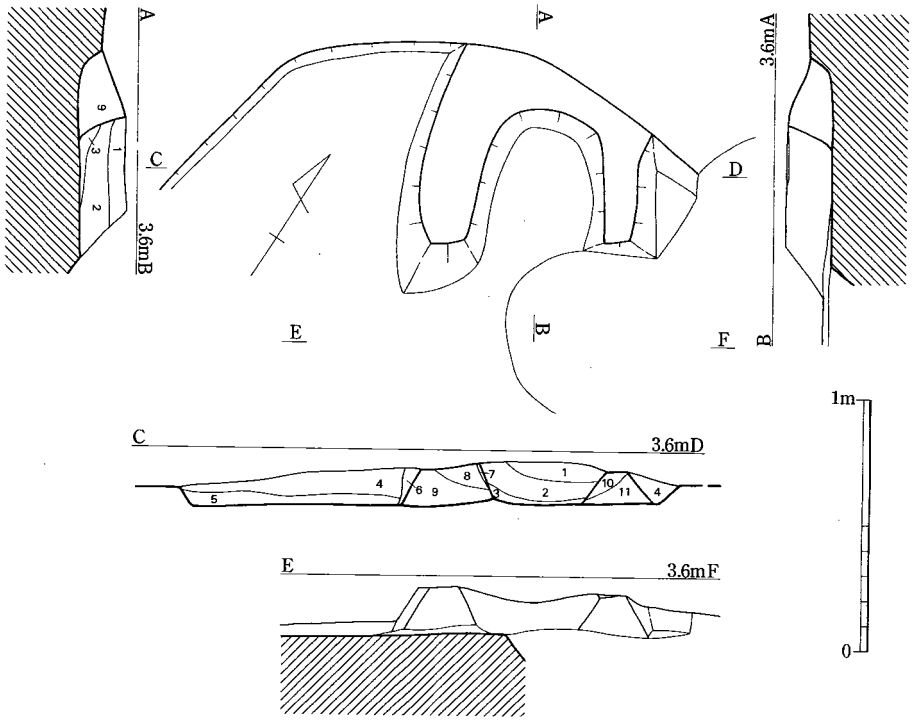
第78図　13号竪穴住居跡実測図（1／60）

14号竪穴住居跡（図版17、第82図）

3区の中央やや北側、9号竪穴住居跡の北西、15号竪穴住居跡の東に位置する。9号住居跡と接

第39表　12号竪穴住居跡出土土器観察表（3）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
77-54		住12覆土	山陰系鼓形器台	裾径156、残高54	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐黄色	外横ナデ、内上部ケズリ、裾内ナデ。	1／6		235
77-55		住12覆土	山陰系鼓形器台	裾径164、残高29	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外灰褐色、内淡橙褐色	外横ナデ後縦ミガキ、内ケズリ（摩滅）。	1／6		61
77-56		住12覆土	山陰系鼓形器台	裾径156、残高47	粘土粗、1～3mm石英・金雲母少	良好	淡黄褐色	外横ナデ、内上部ケズリ、裾内ナデ。	1／6		62
77-57		住12覆土下部	半島系土器胴部片			陶質	灰色	外縄蓆文タタキ、内ナデ。	小片		2349
77-58	38	住12覆土	製塩土器	裾径40、残高28	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	外赤褐色、内黄赤褐色	脚小さく、胴部大きく開く。胴外タタキ、胴内ナデ、脚内外粗いナデで仕上げる。	胴1／6、脚1／2		51
77-59		住12覆土	タコ壺	口径44、残高76	粘土細、1mm石英・長石少	良好	黄褐色	内外ナデ。	1／4		53
77-60		住12覆土	タコ壺	口径56、残高54	粘土細、1mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／2		54
77-61		住12カマド周辺	タコ壺	口径42、残高33	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	褐色	内外ナデ。	1／4		247
77-62		住12カマド周辺	タコ壺	口径46、残高41	粘土細、1mm石英極少	良好	褐白色	内外ナデ。	1／4		55
77-63		住12カマド周辺	タコ壺	口径60、残高55	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い、内面黒変	褐白色	内外ナデ。	1／6		246
77-64		住12覆土	タコ壺	残高35	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外淡黄褐色、内暗灰色	内外ナデ。	1／3		228
77-65		住12覆土下部	タコ壺	残高41	粘土細、1～3mm石英少	やや甘く、外面褐変	黄褐色	内外ナデ。	全周		239
77-66		住12覆土	タコ壺	残高64	粘土細、1mm石英・長石少	良好	外淡橙褐色、内淡褐色	胴外意図的な文様か不明の線刻。内外ナデ。	1／3		52
77-67		住12南遺構面	高杯脚部片	残高83	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	橙黄褐色	乾燥前穿孔が1個所残る。外縦ハケ（摩滅）、内上部絞り、下部板ナデが観察される。	1／3		68
77-68		住12南包含層	高杯脚部片	裾径128、残高12	粘土粗、1mm石英・長石少	やや甘い、内面黒変	黄褐色	端部直立する面をなす。外横ミガキ、内横ハケ。	1／8		215
77-69		住12南包含層	外反口縁鉢	口径130、頸径120、残高55	粘土細	良好	灰黄褐色	胴外下部ケズリ、胴外上部ハケ後外横ミガキ、内摩滅。	1／6		214
77-70	38	住12南遺構面	脚付鉢？	裾径76、残高44	粘土粗、1～3mm石英多	良好、内面黒変	黄橙褐色	脚低く、胴部大きく開く。鉢内外を板ナデ、脚内外を雑なナデ。	1／3		70
77-71		住12北遺構面	タコ壺	残高49	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外黄褐色、内暗褐色	内外ナデ。	1／3		213



1．暗褐黄色細砂
2．暗褐色細砂（暗褐色粘質焼土塊少し混）
3．褐白色細砂
4．灰褐色細砂
5．黄白褐色細砂
6．灰黄色細砂
7．褐色粘質土
8．褐色粘質砂
9．白灰色細砂（褐色粘質土が脈状に混、固い）
10．褐黄色粘質砂
11．黄灰白色細砂

第79図　13号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）

する南東部分を除けば輪郭は明瞭であり、9号住居跡と比べて浅いもののの、北東側壁近くの中央に炉跡が検出されているため、竪穴住居跡として間違いない。覆土は淡灰黄褐色細砂。

現状では主軸をほぼ東西に向けた長方形を呈し、床面東部にベット状遺構のような低い段がある。しかしながら炉跡の位置から考えて、住居跡は本来は低い段の内側までであったと考えておきたい。段の内側では東西3.0～3.4m、南北3.4～3.7mを測り、歪んだ方形を呈する。壁は遺存状況の良好な個所でも15cm程である。出土遺物は少ないが、9号竪穴住居跡との切合いも問題がなかったため、一括性は比較的良好と考えられる。

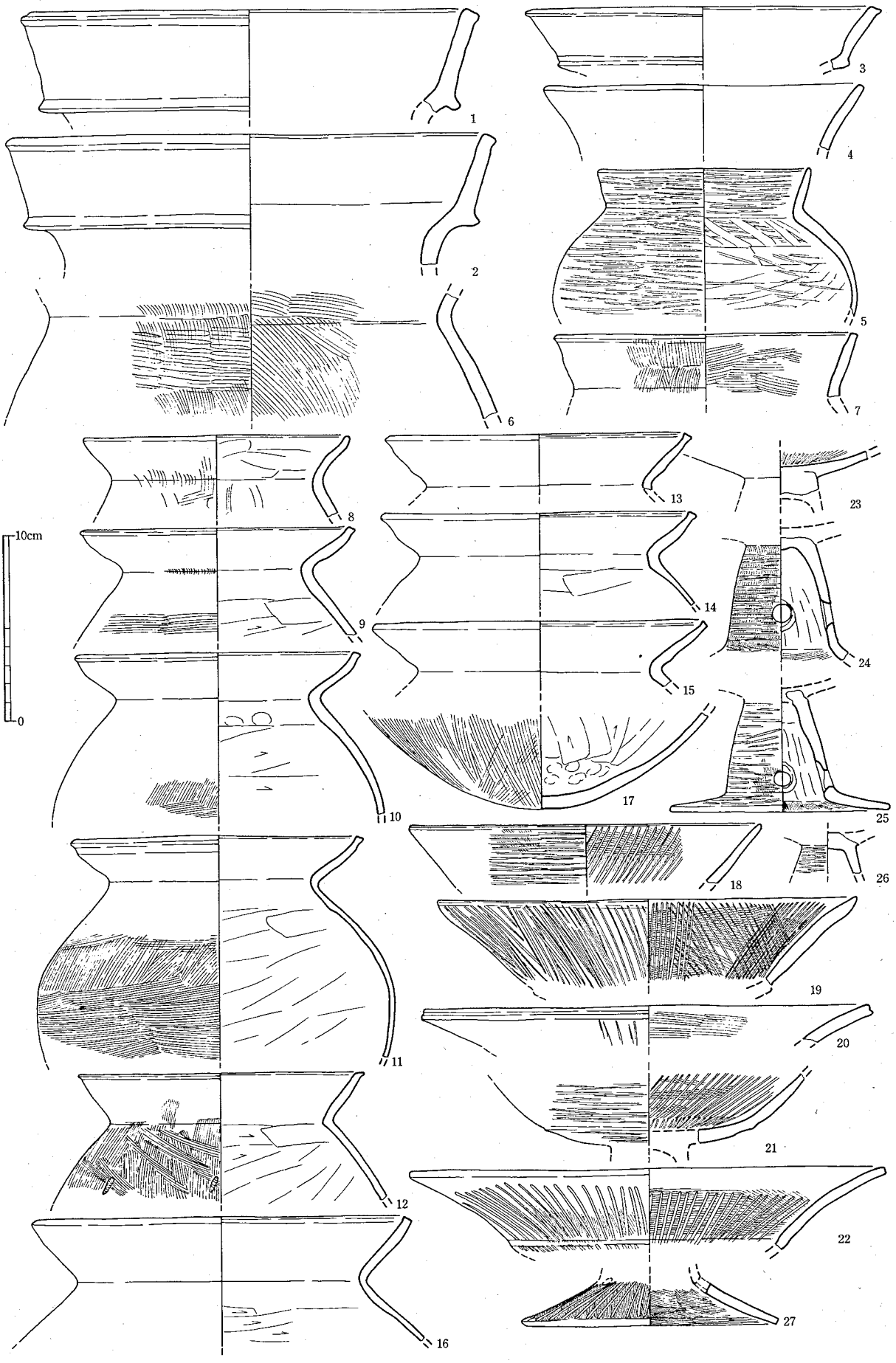
P1・2・3・7の覆土は灰黄褐色細砂、P4は暗褐色細砂、P5・6の覆土は褐色細砂。

出土遺物（図版38・39、第83・84図、第42・43表）　1は在地系大形壺の口縁部片である。口縁端部が角張る。頸部には断面三角形突帯を貼付し、頂部をハケメ工具小口で刺突して刻み目を施す。2は1と同一個体と思われる断面コ字形突帯を貼付した胴部片である。突帯頂部タタキを施し、刻目風に仕上げる。

3・4は畿内系直口壺、5は五様式系壺の底部片か。6は口縁の短い直口壺口縁部で、口縁部の立上がりは直立に近く、口縁外縦ミガキ。口縁内斜めハケ後斜め暗文ミガキで丁寧に仕上げる。

7は脚付短頸壺。口縁部が短く直立し、胴部が算盤玉状をなし、胴高が低く、大きな脚を貼付した例の少ない器形をなす。胴部内外はハケ、口縁内外は丁寧なナデで仕上げ、ミガキは施さないものの精製品である。低い胴部に安定した脚を貼付することから、朝鮮半島瓦質土器に見られる爐形土器と類似しており、爐形土器を模倣した可能性も想定しておきたい。

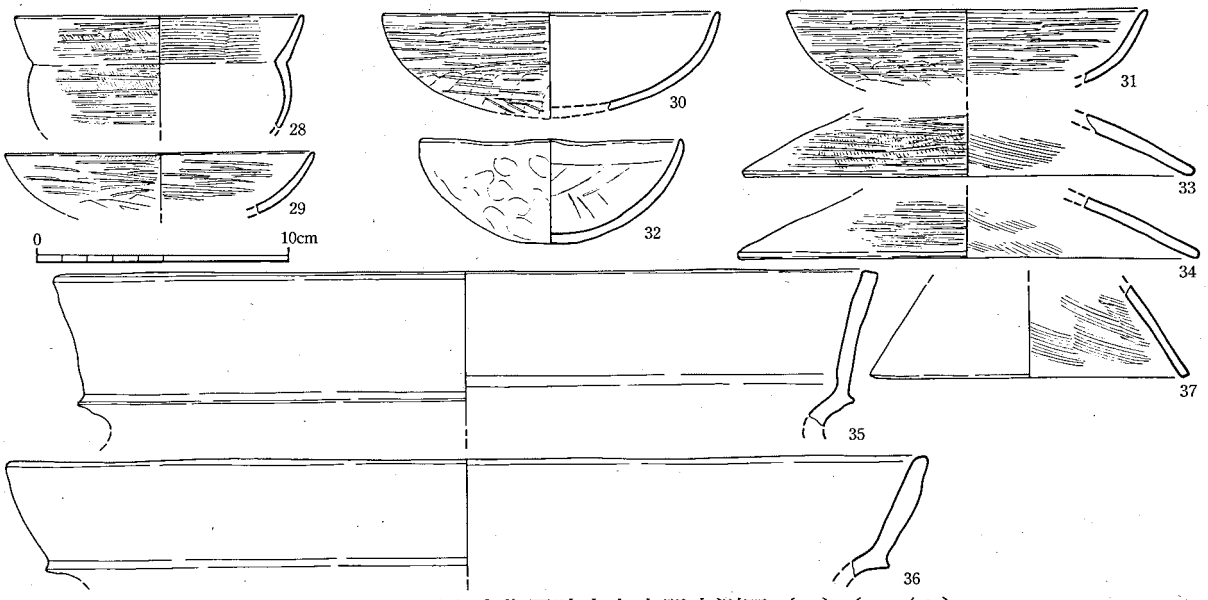
8は安定した平底をなす小形壺で、底近く外面にタタキ痕が残る。



第80図　13号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

第40表　13号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
80-1		住13覆土上面	山陰系二重口縁壺	口径228、残高45	粘土粗、1～5mm石英・長石多	良好	淡黄褐色	口縁端部外につまみ出し、屈曲部の突出強い。内外ナデ。	1／8	口縁煤のため黒変	49
80-2		住13覆土上層	山陰系二重口縁壺	口径246、残高70	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好、器肉黒変	褐黄色	口縁端部外につまみ出し。内外ナデ。	1／8		84
80-3		住13覆土	山陰系二重口縁壺	口径176、残高33	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐色	口縁端部外につまみ出し。内外ナデ。	1／8		259
80-4		住13覆土	畿内系直口壺	口径164、残高35	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外白褐色、内黄褐色	端部丸い。口縁外縦ハケ後内外横ナデ。	1／6	外の色調は二次的に火を受けたためか	80
80-5	38	住13覆土上面	畿内系中形短頸壺	口径108、頸径104、胴径160、残高78	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	口縁短く外傾。胴外斜めハケ後横ミガキ。口縁内横ミガキ。胴内上部縦長指頭圧痕後胴下部ケズリ後胴内ミガキ。	1／2		81
80-6		住13覆土	在地系甕	頸径210、残高67	粘土粗、1～3mm石英多	良好	暗褐色	器壁厚い。胴外粗いタタキ後縦ハケ。胴内斜めハケ。	1／8		258
80-7		住13カマド袖内	在地系甕	口径154、残高31	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	褐色	口縁直線的に外傾、端部わずかに外につまみ出す。外縦ハケ、内斜めハケ。	1／8		264
80-8		住13P2	布留系甕？	口径134、残高44	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁内板ナデ、胴内板ナデ？、外ハケ後板ナデの可能性あり。	1／8		264
80-9		住13覆土上面	布留系甕	口径136、残高56	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端外につまみ出し。胴肩横ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／8	内面汚染のため暗杯褐色	252
80-10		住13覆土	布留系甕	口径144、残高86	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端外につまみ出し。胴外ハケ、口縁内外～胴外肩ナデ、胴内ケズリ。	1／8	口縁外面煤付着	78
80-11	38	住13覆土上面	布留系甕	口径146、頸径104、胴径182、残高117	粘土細、1～3mm石英多	やや甘い	外黄褐色、内灰褐色	口縁端下外強いナデにより凹む。胴上部縦斜めハケ後胴肩横ハケ、胴下部横ハケの順。胴内ケズリ。	口縁1／6、胴1／2	胴外面、口縁外面煤付着	83
80-12		住13 no. 4	布留系甕	口径148、残高69	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄橙褐色	口縁端内傾する面をなす。肩部にハケメ工具小口刺突文。胴内ケズリ頸部稜まで及ぶ。胴外縦ハケ後斜めハケ。	1／4		75
80-13		住13カマド袖内	布留系甕	口径156、残高29	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外褐白色、内淡黄褐色	口縁端内をつまみ上げ。口縁内外ナデ。	1／6		263
80-14		住13覆土	布留系甕	口径156、残高50	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄褐色～灰黄褐色	口縁端内をつまみ上げ。胴外～口縁内横ナデ、胴内ケズリ。	1／4		97
80-15		住13覆土	布留系甕	口径172、残高34	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端内をつまみ上げ。口縁内外ナデ。	1／8		257
80-16		住13覆土	布留系甕	口径192、残高66	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄白褐色	口縁端内をつまみ上げ。胴外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	1／6		79
80-17		住13 no. 7	甕？壺？底部	残高51	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘く、内面黒変	褐灰色	小さな平底をなす。胴外ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	2／3		82
80-18		住13覆土下層	高杯杯部片	口径182、残高32	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	褐色	口縁直線的に外傾。外斜めハケ後横ミガキ。内斜めハケ後暗文ミガキ。	1／10		94
80-19		住13覆土	高杯杯部片	口径218、残高46	粘土粗、1～3mm石英・長石極少	良好	橙褐色	口縁緩やかに外反し端部シャープ。外縦ミガキ、内斜めハケ後暗文風の分割ミガキを交差させる。	1／4		71
80-20		住13覆土下層	高杯杯部片	口径230、残高20	粘土粗、1～3mm石英極少	良好	淡褐色	口縁端部中央凹む。外縦ミガキ、内横ハケ後ナデ。	1／10		254
80-21		住13覆土	高杯杯部片	残高36	粘土細、1mm長石極少	良好	外橙褐色、内黄橙褐色	口縁部内湾、杯底部・口縁境界外面微かな段。外横ミガキ、内横ハケ後横ミガキ。	1／8		269
80-22		住13覆土	高杯杯部片	口径246、残高42	粘土粗、1～3mm石英極少	良好	褐色	口縁緩やかに外反。外縦ハケ後縦ミガキ、口縁内横ハケ後暗文ミガキ。	1／4	27と同一個体の可能性大	90
80-23		住13覆土	高杯杯底部片	残高22	粘土細、1～3mm石英極少	良好	褐色	破損部に接合痕確認できる。外摩滅、内放射状ミガキ。	全周		92
80-24		住13P7	高杯脚部片	残高65	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡橙褐色	1個所半乾燥時穿孔残。外縦ハケ後横ミガキで、下端にハケ工具小口痕残。脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	脚上部全周		95
80-25	38	住13 no. 2	高杯脚部片	裾径108、残高63	粘土細、1mm石英・クサリ礫極少	良好	淡黄褐色	0・6時方向2個所に半乾燥時穿孔残。外縦ハケ後横ミガキ。脚柱内ナデ、脚裾内斜めハケ。	脚上部全周、脚裾2／3	器表の剥離顕著	89
80-26		住13覆土	高杯脚部片	残高22	粘土細、1～3mm石英極少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内ナデ。	接合部2／3		96
80-27		住13覆土	高杯脚部片	裾径132、残高23	粘土粗、1～3mm石英極少	良好	褐色	0・4時方向2個所に半乾燥時穿孔残。脚裾外ハケ後太めミガキ。内横・斜めハケ。	2／3		90
81-28		住13覆土	外反口縁鉢	口径108、頸径98、胴径102、残高44	粘土細、1～3mm石英・長石極少	やや甘い	外褐灰色、内黄灰褐色	口縁微かに内湾。胴外～口縁外斜めハケ、口縁外指頭圧痕後外横ミガキ。口縁内ハケ、胴内ナデ。	1／8		88
81-29		住13 no. 3	直口鉢	口径118、残高23	粘土細、1～3mm石英極少	やや甘い	淡橙褐色	口縁外ハケ、胴下部外ケズリ後内外横ミガキ。	1／6		255
81-30		住13P4	直口鉢	口径128、残高37	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘く、外面黒変・褐変	橙褐色	外下部ヘラケズリ後外横ミガキ。内摩滅。	1／4		86
81-31		住13P5	直口鉢	口径138、残高28	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	褐灰色	外下部ヘラケズリ後内外横ミガキ。	1／8		87
81-32	38	住13カマド袖内	直口鉢	口径100、器高40	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄灰褐色	外指頭圧痕、内ナデ。	1／2		85
81-33		住13 no. 3	脚付鉢脚部	裾径174、残高23	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	1／6		256



第 81 図　13 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

第 41 表　13 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
81-34		住 13 覆土	脚付鉢脚部	裾径 176、残高 23	粘土細、1 mm 長石極少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内斜めハケ後ナデ。	1／8		261
81-35		住 13 覆土上面	山陰系大形鉢	裾径 118、残高 35	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英多	やや甘い	外黄褐色、内黄白褐色	口縁・頸部境界の突出明瞭で、口縁端部角張る。内外横ナデ。	1／12		253
81-36		住 13 P 3	山陰系大形鉢	口径 308、残高 61	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好、内底黒変	淡黄褐色	口縁・頸部境界の突出明瞭で、口縁端部上面内傾。内外横ナデ。	1／12		265
81-37		住 13 覆土上面	小形器台	口径 352、残高 46	粘土細、1 mm 長石極少	良好	淡橙褐色	脚裾直線的に開き、端部角張る。外摩滅、内斜めハケ。	1／4		262

9 は五様式系の甕か。10 ～ 11 は布留系甕で、10 は肩外面に沈線波状文を施文し、11 は口縁端部を内に丸く肥厚させる。12 は右上がりタタキを施し、庄内系甕胴部か。

13 ～ 16 は高杯杯部で、外面の縦・斜めミガキ、形態から在地系のものか。13 は小形品。17・18 は在地系高杯脚裾。

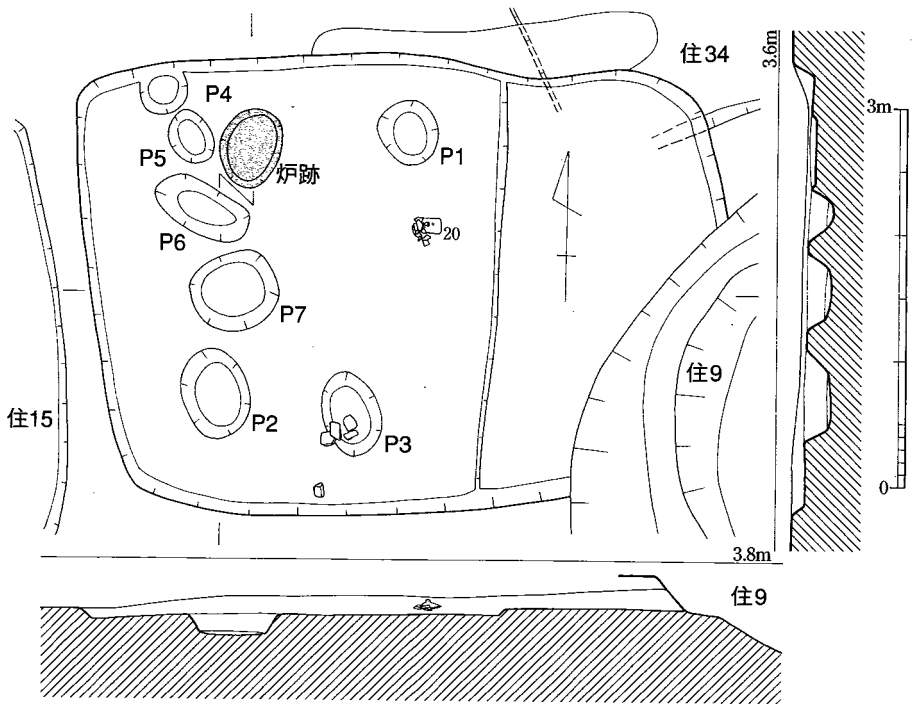
19 は鉢として図示したが、口縁部が直立し、壺との区別に悩む器形である。内外やや太めのミガキで仕上げる。20 は畿内系精製脚付鉢鉢部で、内面の放射状暗文風のミガキが良好な状態で遺存する。21 は外面を横ミガキで仕上げた精製脚付鉢脚裾で、0・4・8 時方向に半乾燥時に穿孔を施す。22 は粗製の脚付鉢鉢部、23 は脚付鉢脚部か。

24 は在地系器台裾部。25・26 は小形精製器台破片。26 は脚部で、0・6 時方向に半乾燥時に穿孔を施す。27 は軟質土器胴部片で、外面格子タタキ。28 はタコ壺。

29・30 は 14 号住居跡西の遺構面から出土したもの。29 は脚付鉢かと推測される。30 は口径から考えて山陰系大形鉢であろう。

15 号竪穴住居跡（図版 17、第 85 図）

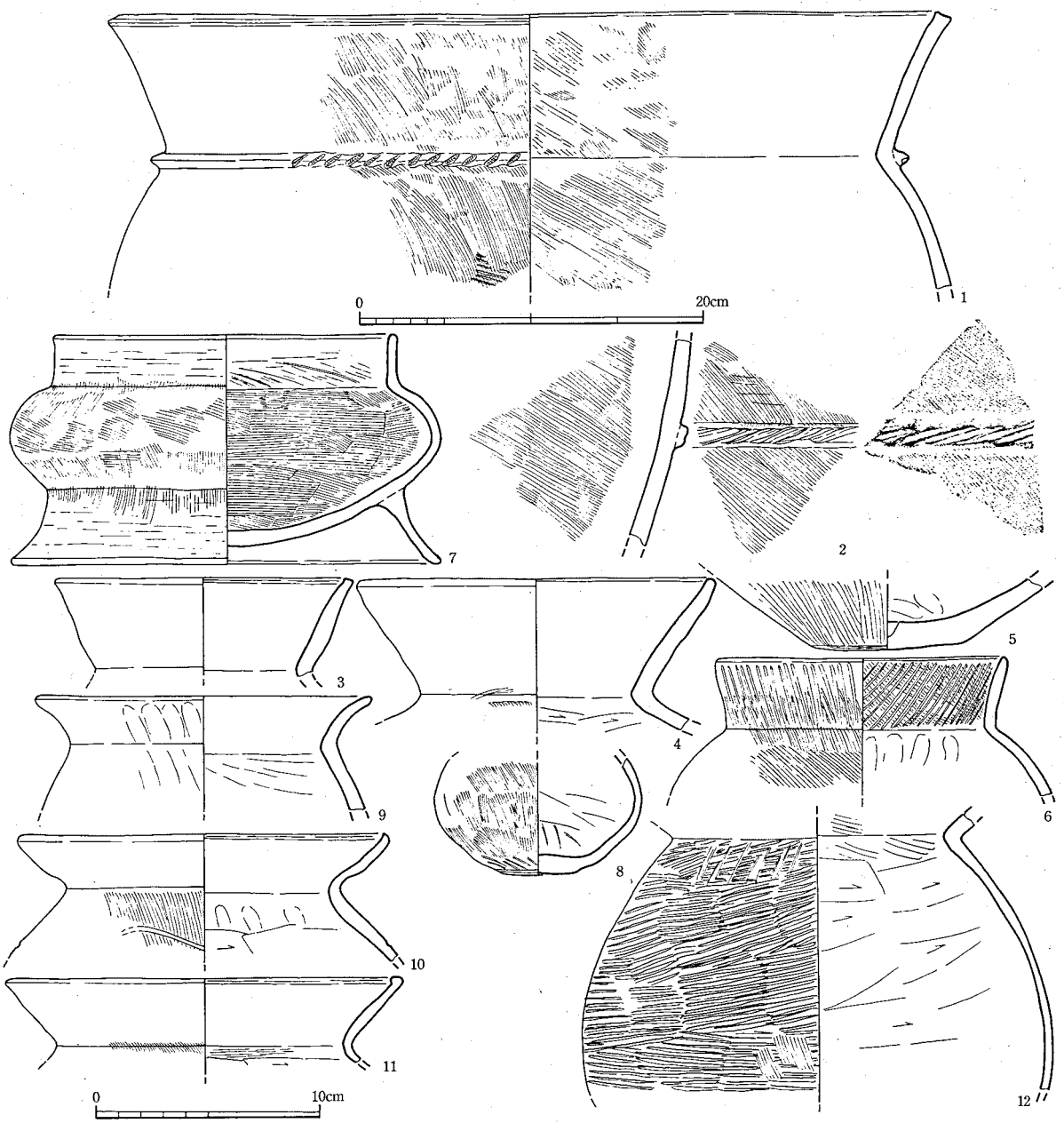
3 区の中央やや北寄り、14 号竪穴住居跡の西、30 号竪穴住居跡の北東、16 号竪穴住居跡の東に位置し、30 号住居跡を切るものと考えて発掘調査を行った。埋土は灰褐色細砂であるが、極めて浅く、床面近くのみを面的に検出したに過ぎず、北側には近世の大形のピット P 445 が位置し、住居



第 82 図　14 号竪穴住居跡実測図（1／60）

第 42 表　14 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
83-1		住 14 no. 2	在地系大形壺	口径 472、残高 162	粘土粗、1 mm 石英多	良好	外黄橙褐色、内淡黄褐色	口縁端部角張り、頸部外断面三角形突帯貼付し、頂部をハケメ工具小口刺突。外斜めハケ、内斜めハケ。	1／8		981
83-2		住 14 上面	在地系大形壺胴部	残高 82	粘土粗、1 mm 石英多	良好	外黄橙褐色、内淡黄褐色	断面コ字形突帯、突帯頂部タタキを施し、刻目風に仕上げる。内外ハケで、外タタキ残。	小片	1 と同一個体か	981
83-3		住 14 覆土	畿内系直口壺	口径 124、残高 43	粘土粗、1 mm 石英・角閃石少	良好	外暗褐色、内褐色	口縁直線的に伸びる。内外ナデ。	1／6	色調他の在地産の土器と異なる	969
83-4		住 14 上面	畿内系直口壺	口径 152、残高 66	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英多	良好	淡褐色	口縁内外ナデ、胴外ハケ、工具痕残。胴内ケズリ。	1／6	内面破損後火を受け褐変	977
83-5		住 14 上面	壺底部	底径 66	粘土細、1 mm 石英・長石少	良好	外赤褐色、内橙褐色	安定した平底をなす。外縦ミガキ、内微かに指頭圧痕残るナデ。	底全周		980
83-6		住 14 上面	在地系直口壺？	口径 124、残高 61	粘土細、1 ～ 3 mm 石英少	良好	淡黄褐色	口縁直立に近く端部丸みをもつ。胴外斜めハケ、口縁内縦ミガキ。口縁内斜めハケ後斜め暗文ミガキ、胴内ナデ。	1／3		976
83-7	38	住 14 上面	脚付短頸直口壺	口径 146、頸径 154、胴径 186、裾径 186、器高 100	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	外橙色、内淡橙褐色	口縁短く直立し算盤玉状に胴高が低く、大きな脚を貼付した例の少ない器形。胴部内外ハケ、口縁内外は極めて丁寧なナデで、ミガキは施さないものの精製品。	1／2	石膏で完形に復元	
83-8		住 14 上面	小形壺	底径 32、胴径 88、残高 50	粘土細、1 mm 石英・長石極少	良好	橙褐色	安定した平底で、胴張り強い。胴外ハケで、底近くタタキ残。胴内工具痕を残したナデ。	底全周		983
83-9		住 14 上面	五様式系甕？	口径 144、残高 49	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・長石少	良好	外暗褐色、内褐黄色	口縁緩やかに外反し大きく開く。外指ナデ、口縁内横ナデ、胴内板ナデ。	1／12		982
83-10		住 14 覆土上部	布留系甕	口径 156、残高 53	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	褐色	胴肩沈線波状文施文し、口縁緩やかに内湾。胴外縦ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ、口縁内外ナデ。	1／8		1144
83-11		住 14 覆土	布留系甕	口径 166、残高 37	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	外淡褐黄色、内淡黄褐色	口縁端部内に丸く肥厚。口縁内外ナデ。頸外ハケ、頸内横ハケ残。	1／4	外面少し煤付着	968
83-12	38	住 14 覆土	庄内系甕？胴部	頸径 128、胴径 206、残高 120	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・角閃石少	良好	外淡褐色、内淡黄灰褐色	外右上がりタタキ後、胴下部縦ハケ、頸外縦方向工具痕。頸内粗いハケ、胴内ケズリ。口縁部の器壁が特に厚い。	1／3		988
84-13		住 14 覆土	高杯杯部片	口径 152、残高 35	粘土粗、1 ～ 5 mm 石英極少	良好	淡橙褐色	口径小さく、口縁端部中央沈線状に凹む。内外暗文風の縦ミガキ。	1／4		972
84-14		住 14 覆土	高杯杯部片	残高 40	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	褐色	口縁端部中央沈線状。外ナデ後暗文ミガキ。内斜めハケ後暗文ミガキ。	小片		1146
84-15		住 14 上面	高杯杯部片	残高 33	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・長石少	良好	外黄褐色、内褐色	端部角張る。外横ミガキ。内横ハケ後暗文ミガキ。	小片		1145
84-16		住 14 床面下層	高杯杯部片	残高 57	粘土粗、1 mm 長石少	良好	橙褐色	屈曲部破片。口縁外斜めミガキ、杯底外横ミガキ後暗文風縦ミガキ。内横ハケ後暗文風斜めミガキ。	1／8	径、傾き不安	1147



第 83 図　14 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1 は 1／4、他は 1／3）

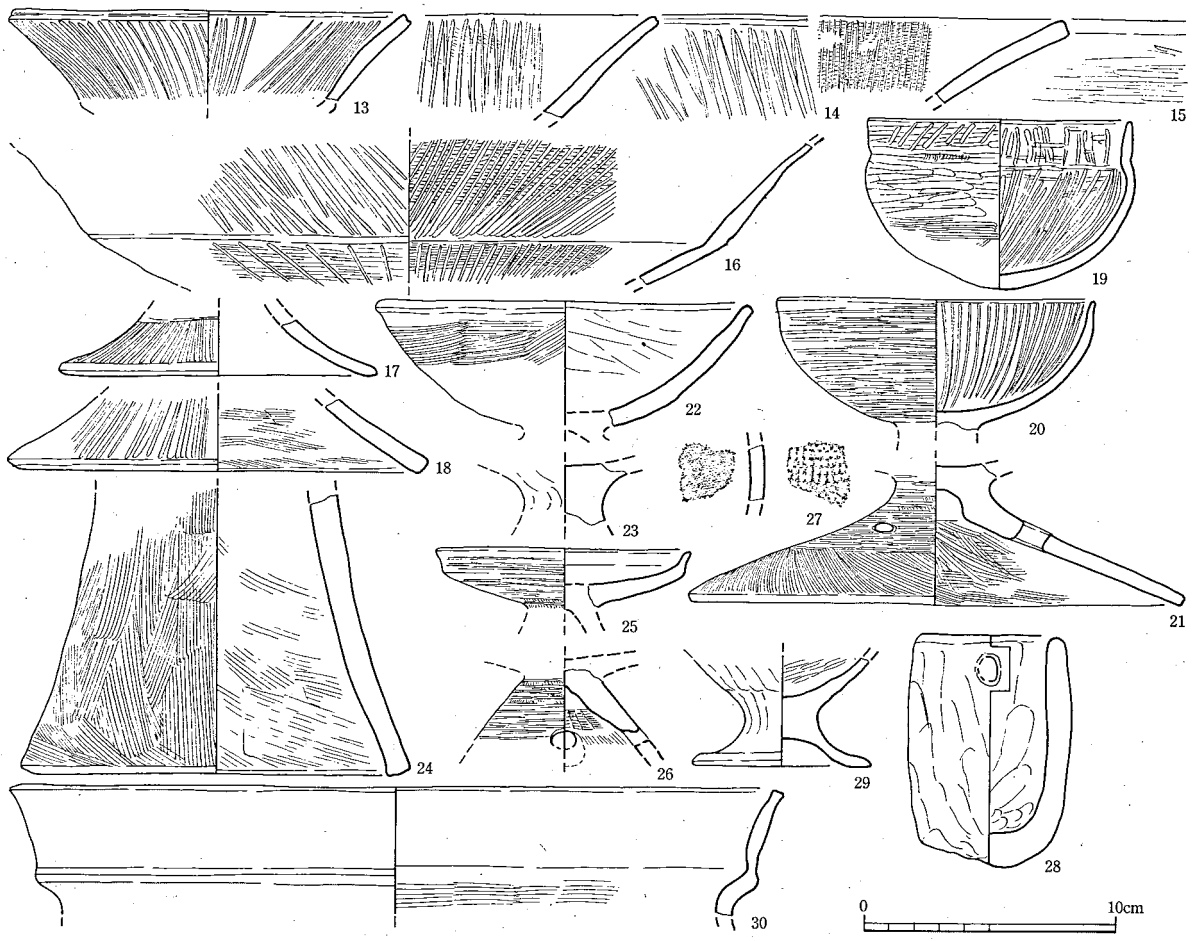
跡を掘り込んでいる。

現状では主軸を N－16°－W に向けた歪んだ方形を呈し、南北 3.7 ～ 3.8m、東西 3.5 ～ 3.8m を測る。壁の高さは良好な個所でも 5cm 内外にすぎない。床面では炉跡、ピット等は検出されず、出土遺物も極めて少ない。

出土遺物（第 87 図、第 44 表）　1 は内外を粗いハケで仕上げた在地系甕。2 は脚が内湾しながら開き、括れ部が細く、鉢部外面にタタキが残るもので、製塩土器か。

16 号竪穴住居跡（図版 17、第 86 図）

16 号竪穴住居跡の西、30 号竪穴住居跡の北西に位置し、30 号住居跡を切るものと考えて発掘調査した。灰褐色細砂を覆土とするが、隣接する 15 号竪穴住居跡と同様に極めて浅く、壁も高さ 5 cm 程しか残っていない。

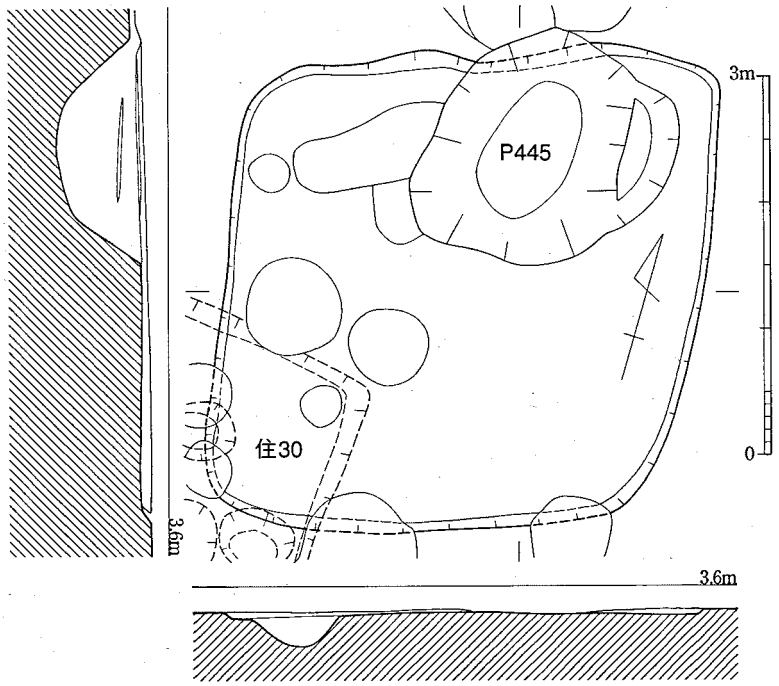


第84図　14号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

第43表　14号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
84-17		住14覆土	高杯脚部片	裾径126、残高23	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	裾緩やかに広がり、端部丸い。外縦ミガキ、内ナデ。	1／4		974
84-18		住14覆土	高杯脚部片	裾径156、残高29	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	淡橙褐色～淡黄橙褐色	裾が緩やかに広がり、端部角張る。外斜めハケ後縦ミガキ、内横ハケ後ナデ仕上げ。	1／6		973
84-19	39	住14上面	鉢	口径102、頸径104、胴径106、器高66、胴高51	粘土粗、1～5mm石英少	良好、外面黒斑	外淡黄褐色、内黄褐色	口縁部直立し、鉢か壺か区別しがたい器形。外やや太めの横ミガキ後口縁外斜めミガキ、内放射状ミガキ。胴外ハケ残。	1／3		898
84-20	39	住14上面	精製脚付鉢鉢部	口径122、残高51	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内放射状の暗文風ミガキ。下部破損面接合のための線刻圧痕が観察できる。	全周		990
84-21	39	住14 no. 1	精製脚付鉢脚部	裾径192、残高55	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄橙褐色	0・4・8時方向に半乾燥時穿孔。外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ後下部横ナデ。	全周		985
84-22	39	住14覆土	脚付鉢鉢部	口径142、残高48	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内黄橙褐色	外上部ハケ、外下部ナデ。内板ナデで、後ミガキの可能性あり。	1／3		35
84-23		住14上面	脚付鉢脚部	残高23	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い、器肉黒変	白黄褐色	外ナデで粗製の仕上げ。	全周		978
84-24		住14覆土上部	在地系器台	裾径142、残高110	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄褐色	器壁厚く、端部角張る。外縦ハケ、内斜めハケ。	1／4	歪みあり、傾き不安	984
84-25		住14覆土	小形器台	口径98、残高22	粘土細	良好	橙褐色	外ハケ後横ミガキ、内摩滅。	1／8		970
84-26		住14覆土	小形器台脚部	残高31	粘土細、1mm長石少	良好	橙褐色	0・6時方向に半乾燥時穿孔。外縦ハケ後横ミガキ。内ハケ。	上部全周		971
84-27	39	住14覆土	半島系土器胴部片			軟質	灰黄褐色	外小さな格子タタキ、内ナデ。	小片		
84-28	39	住14上面	タコ壺	口径50、器高91	粘土粗、1～3mm石英少	良好、胴下部1／4周黒斑	淡黄褐色	内外粗いナデ。	3／4		979
84-29		住14西遺構面	製塩土器？	裾径68、残高41	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	脚低く、鉢部は深い器形か。外板ナデ、鉢内ミガキ。	脚1／2、胴1／4		986
84-30		住14西遺構面	山陰系大形鉢	口径298、残高50	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外淡褐色、内淡褐灰色	内外ナデ、頸内ハケ残。	1／8		1148

主軸をほぼ南北に向けた方形と捉えられるが、南及び西の壁は乱れ、やや膨らんでおり、現状では南北2.8～3.1m、東西3.1～3.6mを測る。北西隅ではカマドが検出されたが、高さもほとんど残っておらず、平面的にも馬蹄形にカマド構築土が残るのみであった。床面で検出されたP1は熱で変色した暗赤褐色細砂を覆土としていた。



第85図　15号竪穴住居跡実測図（1／60）

カマド（第86図）　住居跡の北西隅に褐色～暗褐色粘質砂が中間の途切れた馬蹄形に分布していたので、カマドの煙道部の残存と考えた。現状では長さ0.6m、外幅0.7m、内幅0.2mを測る。方向から考えて住居跡の対角線方向、北西－南東に主軸を向けていたものと思われるが、主軸の延長線上に撹乱が位置しており、燃焼部・支脚は検出されなかった。

出土土器（第87図、第44表）3は壺口縁部か。4・5は布留系甕。5は口縁部の強い外反と端部の上へのわずかな拡張が特徴的な器形をなし、肩部に沈線波状文が巡り、胴部にはタタキが認められる。

6は胴部に粗いタタキを施すことから、製塩土器と考えられる。

17号竪穴住居跡（図版18、第88図）

3区中央やや南部、5号竪穴住居跡と11号竪穴住居跡の間に位置する。覆土上部は暗褐灰色細砂、下部は灰褐色細砂であった。竪穴住居跡であることは間違いないが、輪郭はやや不安が残る。

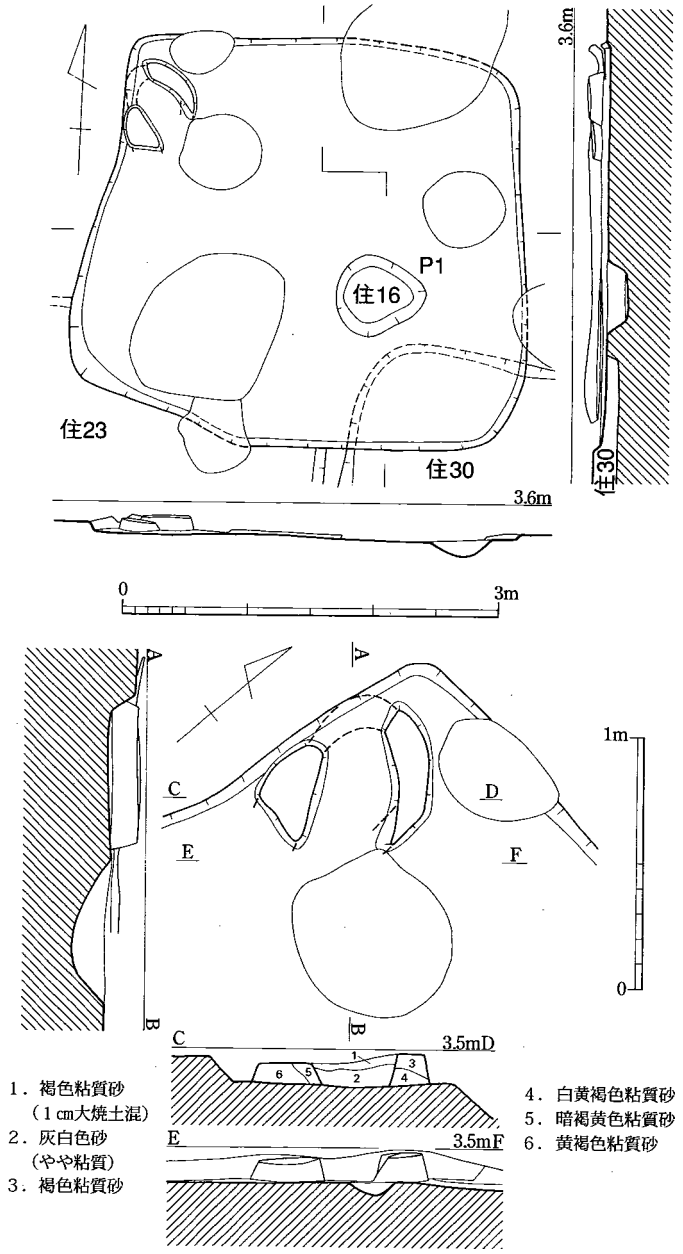
北から西は大きく撹乱によって失われているが、現状では主軸をN－35°－Eにむけた方形ないしは長方形住居跡の東壁・南壁のみを検出したことになる。南北3.1m、東西3.15mが遺存し、壁は残りの良いところで高さ30cm余りである。床面で検出したP1は灰褐色細砂を覆土とするが、斑状に熱を受けて変色したような黄褐色細砂を含むため炉跡と考えられる。P2は褐色細砂を覆土とする。土器は東の壁際から多く出土したが、他の住居跡との切り合いもないので、一括性は良好であろうと思われる。

出土土器（図版39、第89図、第45表）　2・12は17号住居跡北側撹乱から出土したものであるが、本住居跡に伴うと考えて、問題ないと思われる。

1は直口壺。2・3は小形丸底壺と類似する器形であるが、法量が大きい。外及び口縁内はハケ後ミガキ、胴内はケズリ。4は壺口縁として図示したが、他の器種の可能性もある。

5～9は布留系甕である。5・9は口縁端部を内上につまみ上げるのに対し、8はわずかに外につまみ出す。

11～14は直口鉢で、11～13はミガキ仕上げの精製品、14は内外ハケメ仕上げでやや口径の



第86図　16号竪穴住居跡・カマド実測図
（1／60・1／30）

大きい粗製品。15は小形器台。16は山陰系大形鉢か。

17はやや甘い焼成の陶質土器胴部片で、外面粗い平行タタキ後沈線を巡らす。18は瓦質に近い焼成のもので、上部が平行タタキ、下部が格子タタキの胴部片で、胴の下部にあたると考えられる。

18号竪穴住居跡（第88図）

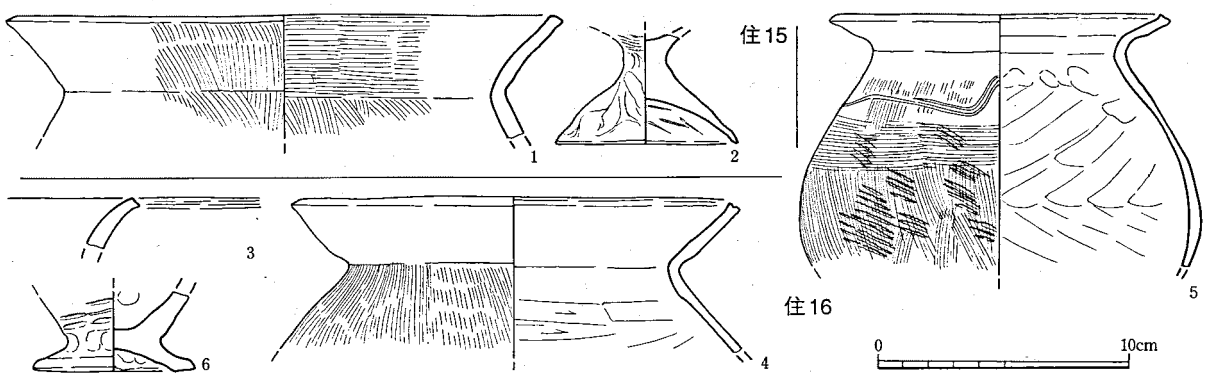
3区の南部に位置するが、北側を大きく撹乱によって壊され、方形ないしは長方形住居跡の西壁・南壁の一部のみを検出したにとどまる。

現状では主軸をほぼ南北、N－5°－Wに向け、南壁は長さ3.5mを測り、西壁は2.0m遺存する。壁は遺存状況の良好な個所でも高さ10cm程である。床面ではピット・炉跡等は検出されなかったが、壁が直線的に検出されているので、住居跡と考えて間違いなかろう。覆土は比較的均質な褐色細砂であった。住居跡東南部では土器がまとまって出土し、一括性は良好と思われる。

出土土器（図版39、第90図、第45表）　1・2は直口壺でいずれも口縁が大きく開く。3は山陰系二重口縁壺。4・5は布留系甕で、4は肩部に直線沈線文、5は肩部に工具刺突の列点文を施

第44表　15・16号竪穴住居跡出土土器観察表

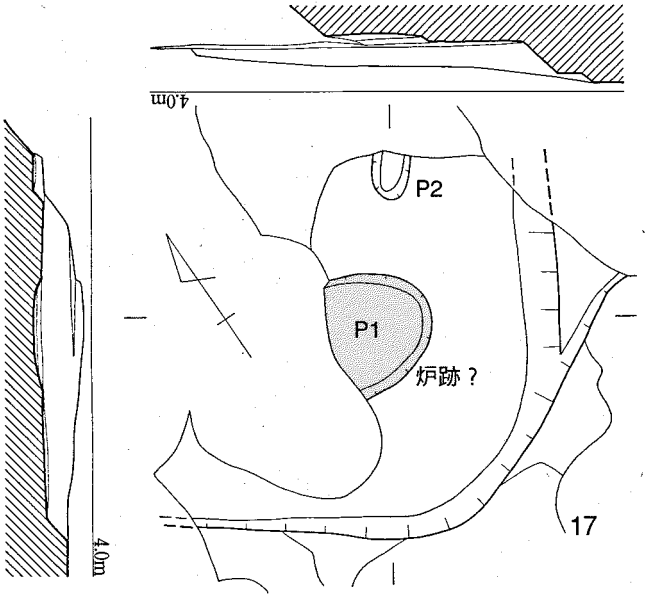
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
87-1		住15	在地系甕	口径206、残高47	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外縦ハケ、口縁内横ハケ、胴内縦ハケ。	1／12	外煤厚く付着	1149
87-2		住15	製塩土器？	裾径66、残高42	粘土細、1mm長石極少	良好	灰褐色	括部細く、脚内湾しつつ開く。脚外ナデ、鉢外タタキ、脚内ナデ。	脚上部全周	使用による変色は特に認められない。	
87-3		住16上面	壺口縁？	残高21	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡褐色	口縁端部角張りつつ、下をつまみ出す。外ハケ後内外ナデ。	小片		601
87-4	39	住16	布留系甕	口径166、残高56	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端部わずかに上方に拡張。胴外縦ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	3／4		599
87-5		住16上面	布留系甕	口径124、頸径98、胴径156、残高	粘土細、1mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁部強く外反し、端部を上へわずかに拡張。肩部に沈線波状文。胴外ハケは頸下縦ハケ、胴下部左上がり斜めハケ、胴肩横ハケ、胴下部縦ハケの順。胴部にはタタキも残。胴内ケズリ。	1／6		600
87-6		住16カマド前面	製塩土器	裾径60、残高31	粘土粗、1～5mm石英多	良好	褐色	脚内外ナデ、胴外タタキ、胴内指頭圧痕。	1／2	使用による変色は特に認められない。	

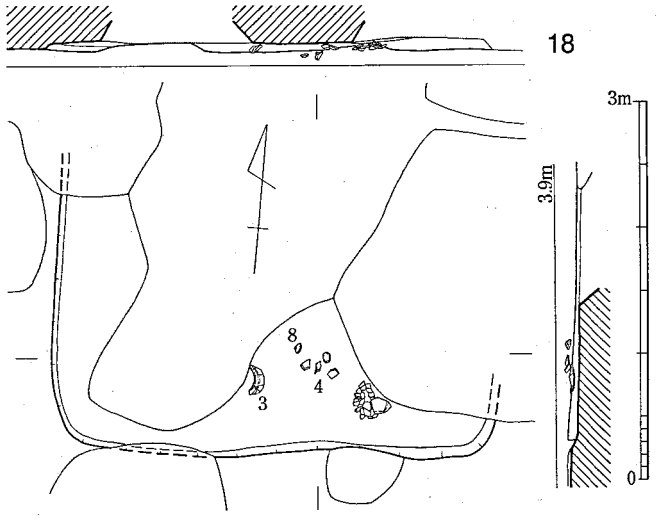


第87図　15・16号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

す。5は胴外ハケ、胴内ケズリで仕上げるが、下半はケズリが観察できずナデ仕上げの可能性がある。7は脚付鉢脚裾である。8は畿内系精製脚付鉢の脚下部破片。9・10はタコ壺。

11・12は18号住居跡内の撹乱から出土したものであるが、本住居跡に伴うと考えて問題はなかろう。11は布留系甕で、胴部内面ケズリで仕上げるが、下部の指頭圧痕の範囲が広いことが注目される。12は平行タタキの陶質土器胴部片。





第88図　17・18号竪穴住居跡実測図（1／60）

19号竪穴住居跡（図版18、第91図）

3区の中央やや南寄りに位置する。検出当初は南に位置する21号竪穴住居跡と一連と考えていたが、少し掘り下げると2棟の竪穴住居跡であることが判明した。そのため、19号住居跡出土土器の中には、本来21号住居跡に帰属する遺物が若干、混入した恐れがある。

北壁、東壁を撹乱によって大きく壊され、北壁は乱れているが、現状では主軸をN－23°－Wに向けた小形の方形を呈す。南北3.1～3.5m、東西2.7～3.4mを測り、壁の高さは良好な個所で20cm程である。覆土は暗褐色細砂。床面の中央やや南寄りに暗褐色に変色した細砂の炉跡が検出された。ピットはいずれも斑状に黄褐色細砂を雑えた褐色細砂であったが、輪郭は不明瞭であった。

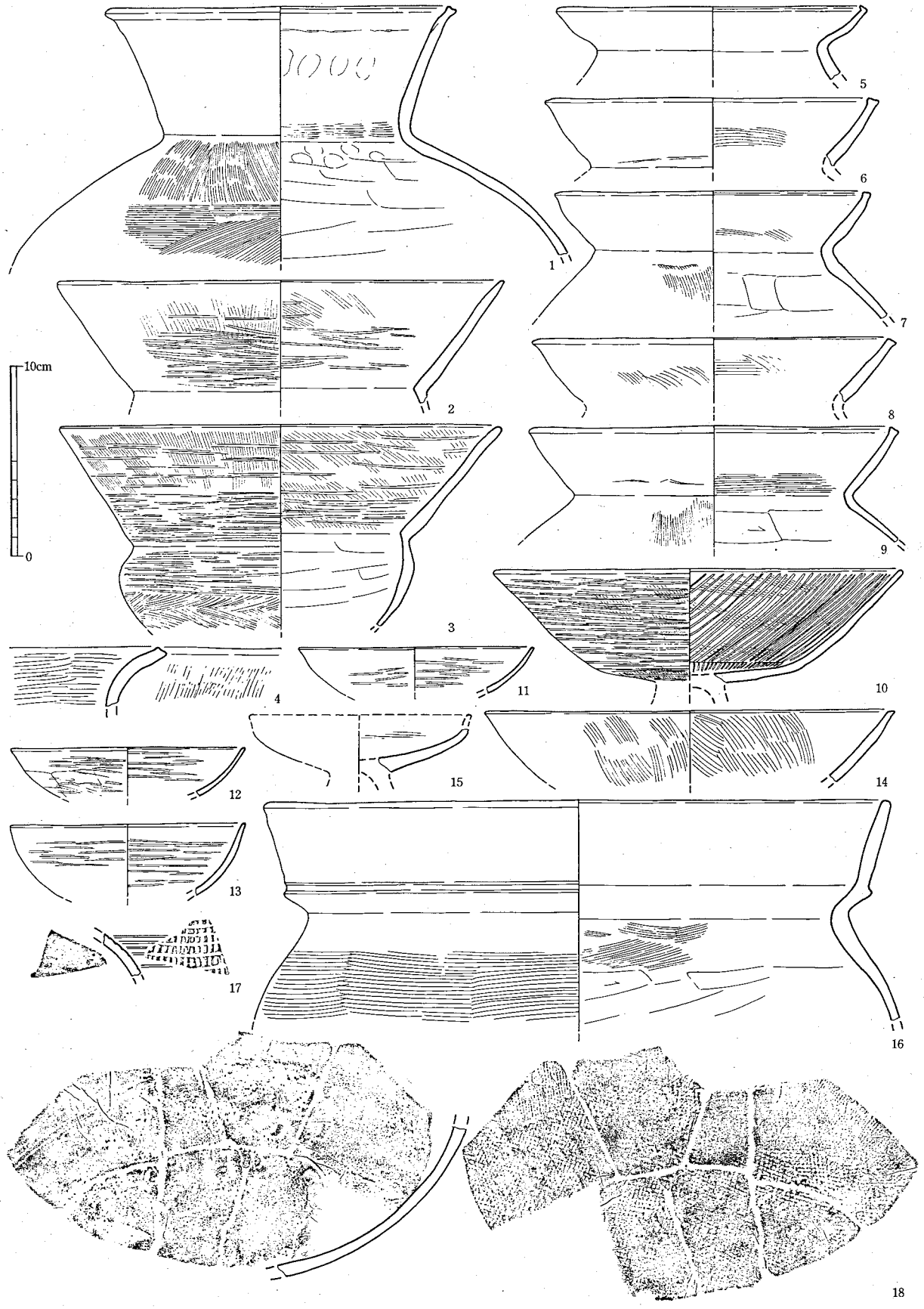
出土土器（図版39、第92図、第46表）　1～7は布留系甕。1は肩に沈線波状文を施し、胴内

ケズリは低い位置でとどまる。2・5・7は口縁端内を上方にわずかにつまみ上げる。8は在地系の大形甕ないし壺の口縁部。9・10は高杯杯部片で、10の下部は接合面より剥離する。

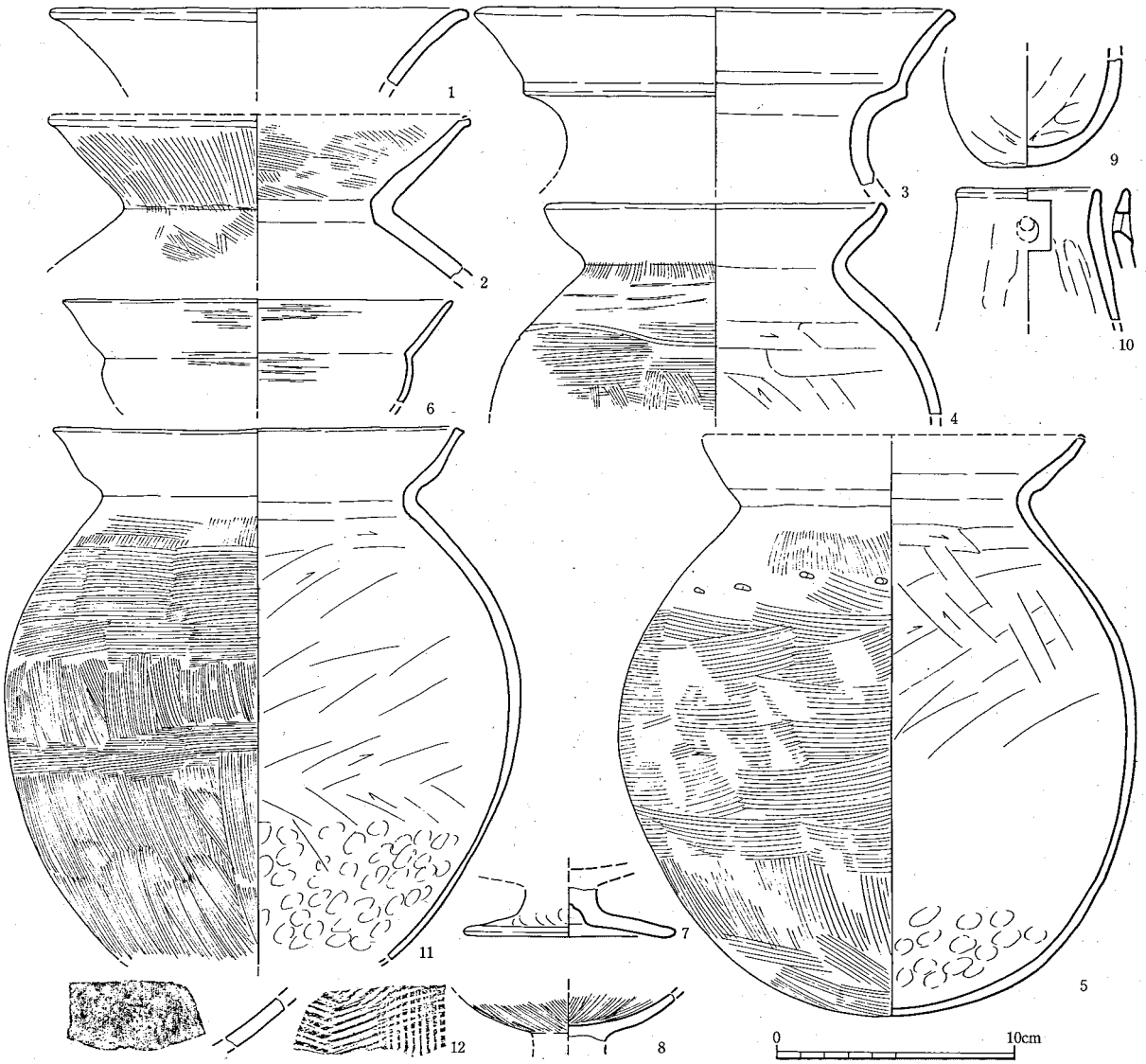
11・12は外反口縁鉢で、11はミガキの見られない粗製品、12は精製品。13は精製直口鉢。14・15は山陰系鼓形器台受部片、16は小形器台裾部。

第45表　17・18号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
89-1	39	住17覆土	直口壺	口径174、頸径134、残高127	粘土粗、1～3mm石英少	良好、胴外面小黒斑	淡黄褐色	口縁端部上へわずかにつまみ上げ。口縁内外ナデ、頸内横ハケ。胴外縦ハケ後横ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	口縁7／8、胴1／6	口縁端下内に接合痕残。	100
89-2		住17北撹乱	丸底壺口縁	口径226、頸径150、残高64	粘土粗、1mm石英少	やや甘い	褐色	口縁直線的に開く。外縦ハケ、内斜めハケ後内外疎らなミガキ。	1／6		107
89-3	39	住17覆土	丸底壺	口径220、頸径130、胴径136、残高103	粘土細、1mm石英・長石少	良好	橙褐色	小形丸底壺を大型化した器形。口縁外縦ハケ、胴外斜めハケ後外ミガキ。口縁内斜めハケ後ミガキ。胴内ケズリ。	2／3	2と接合しないが同一個体の可能性あり	99
89-4		住17覆土	壺口縁？	残高31	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡褐白色	口縁緩やかに外反。外縦ハケ（摩滅）。内ミガキ。	小片	山陰系器台などになる可能性もあり	105
89-5		住17覆土	布留系甕	口径154、残高39	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外黄橙褐色、内淡褐灰色	口縁端内上につまみ上げ。内外ナデ。	1／6		104
89-6		住17覆土	布留系甕	口径160、残高34	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁内ハケ、頸外横方向の工具当たり痕残るが、内外ナデ仕上げ。	1／6		266
89-7		住17覆土	布留系甕	口径154、残高66	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外褐灰色、内淡黄褐色	胴外縦ハケ、口縁内外ナデで口縁内にハケ残。胴内ナデ。	1／6		103
89-8		住17覆土	布留系甕	口径180、残高31	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い、内面灰黒変	黄白褐色	口縁端わずかに外につまみ出し。内外斜めハケ後ナデ。	1／10	径、傾き不安	106
89-9		住17覆土	布留系甕	口径182、残高60	粘土細、1mm石英・クサリ礫少	やや甘い、口縁端部黒変	淡褐黄色～淡黄褐色	口縁内外横ナデで、内横ハケ、頸外接合痕状溝残。口縁端内につまみ上げ。	1／2		102
89-10	39	住17覆土	高杯杯部	口径208、残高58	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	外淡黄橙褐色、内淡黄褐色	口縁直線的に外傾し、杯底薄い。外ハケ後横ミガキ、内斜めハケ後斜め暗文風ミガキ。	1／3		98
89-11		住17覆土	直口鉢	口径118、残高24	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	赤褐色	器壁極めて薄い。内外ミガキ（摩滅）。	1／8		110
89-12		住17北撹乱	直口鉢	口径118、残高25	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	明褐色	器壁極めて薄い。外下部ケズリ後内外ミガキ（摩滅）。	1／8		108
89-13		住17P1	直口鉢	口径118、残高37	粘土細、1mm石英少	良好	橙褐色	内外ミガキ（摩滅）。	1／8		109
89-14		住17上面	直口鉢	口径206、残高36	粘土粗、1mm石英・長石少	良好	外黄褐色、内赤褐色	口縁端やや内傾気味の面をなす。内外斜めハケ。	1／8		2277
89-15		住17覆土	小形器台	残高21	粘土細、1～3mm石英多	やや甘い	淡黄褐色	内外摩滅するも、内にミガキわずかに残る。	1／4		111
89-16		住17覆土	山陰系大形鉢	口径316、頸径276、残高115	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄橙褐色～淡褐色	胴外横ハケ、胴内頸下横ハケ後ケズリ。口縁やや外傾し、端部丸い。	1／8		101
89-17		住17覆土	半島系土器胴部片			陶質、やや甘い	灰褐色	平行タタキ後太めの沈線。	小片		2351
89-18		住17覆土	半島系土器胴部片			瓦質	灰黄褐色	胴下部破片か。上部細かい平行タタキ、下部小さな格子タタキ。	1／4程		2424
90-1		住18覆土	直口壺	口径166、残高31	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁大きく開き、端部丸い。外横ナデ、内摩滅。	1／12	径、傾き不安。内二次加熱により桃変	122
90-2		住18覆土	直口壺	口径190、残高67	粘土粗、1～3mm石英・角閃石少	良好	外橙黄褐色、内淡黄褐色	口縁大きく開き、端部外に肥厚。外～口縁内ハケ。胴内摩滅し調整不明。	1／8		118
90-3	39	住18 no. 1	山陰系二重口縁壺	口径190、残高73	粘土粗、1～5mm石英少	良好、口縁外1／8黒斑	淡黄褐色、一部橙褐色	内外ナデ。	1／2		115
90-4	39	住18 no. 3	布留系甕	口径136、残高87	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外淡黄褐色、内褐色	肩部に沈線波状文？施文。外頸下横ナデ条痕残。内頸下ナデ後胴内ケズリ。	1／2		116
90-5	39	住18覆土	布留系甕	口径154、頸径118、胴径210、器高238、胴高211	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	褐色	肩部工具刺突列点文。胴外ハケ、胴内ケズリで仕上げるが、下半はケズリが観察できずナデ仕上げの可能性あり。	口縁1／3、胴2／3	胴外薄く煤、底内コゲ付着。石膏で完形に復元	114
90-6		住18覆土	外反口縁鉢	口径158、残高43	粘土細、1～3mm石英・長石極少	良好	黄橙褐色	内外ミガキ（摩滅）。	1／12	径、傾き不安	121
90-7		住18覆土	脚付鉢脚部	裾径66、残高20	粘土粗、1mm石英・クサリ礫少	やや甘い	淡褐白色	内頂部軸痕残（中心からずれる）内外摩滅。	2／3		119
90-8		住18 no. 3	脚付鉢部片	残高18	粘土粗、1mm石英多	良好	明褐色	下部は接合面より剥離。外縦ハケ、内ミガキ。	2／3		120
90-9		住18覆土	タコ壺	残高46	粘土粗、1mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	底全周		117
90-10		住18覆土	タコ壺	口径56、残高53	粘土粗、1mm石英多	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／6		123
90-11	39	住18内撹乱	布留系甕	口径162、頸径130、胴径213、残高218	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	やや甘い	外淡黄褐色、内黄白褐色	胴外ハケは頸下縦ハケ、肩横ハケ、下部縦ハケ、中部横ハケの順。胴内ケズリであるが、下部指頭圧痕範囲広い。	口縁3／4、胴3／4		113
90-12		住18内撹乱	半島系土器胴部片			陶質、堅緻	灰黄色	外平行タタキ、内ナデ。	小片		2352



第 89 図　17 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）



第90図　18号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

17は陶質土器壺頸部片で、平行タタキ後沈線をめぐらす。

18～20は19号住居跡と南に隣接する21号住居跡の上面から出土したもので、どちらに帰属するか不明のもの。18は庄内系甕で口縁端部を上に拡張し、口縁外面にタタキが残り、胴内頸までケズリが達する。19は高杯杯口縁部、20は直口鉢、21は小形器台脚上部の破片で、いずれも外面ミガキ仕上げの精製品。

20号竪穴住居跡（図版18、第91図）

3区の中央南部、調査区壁際に位置する。住居跡北側を撹乱により大きく壊され、南は調査区外へと広がるが、現状では主軸をほぼ南北、N－13°－Wに向けた方形ないし長方形住居の北部を検出したことになる。西壁はやや乱れるが、東西2.6～2.7mを測り、南北1.7mが検出され、壁の高さは良好な個所で15cm程である。床面ではピットは検出されたが、炉跡は検出されなかった。

出土遺物（第92図、第42表）　22は山陰系二重口縁壺。23は小形丸底壺でもやや大きめの器形に属するもので、胴部内面の板ナデ仕上げが特徴的である。

24・25は布留系甕で、25は口縁端部内面をわずかに肥厚させる。26は平底をなす五様式系甕ないしは壺の底部片か。底部外面には木葉圧痕が残る。

27は高杯杯部。28はタコ壺口縁部。

21号竪穴住居跡（図版18、第91図）

3区の中央南壁にかかり、19号竪穴住居跡の南に位置する。南部は調査区外に続き、西壁は撹乱によって失われるが、現状では主軸をN－20°－Wに向けた方形を呈し、東壁長さ2.4m、北壁長さ2.2mが現存する。壁は遺存状況の良好な個所で高さ30cm程。

調査区壁際の床面で暗褐色の細砂の炉跡が検出された。炉跡周辺の床面から若干浮いてまとまった量の土器が出土し、完形になるものも多い。輪郭も明瞭であり、出土遺物の一括性は高いと評価することができよう。

出土遺物（巻頭図版10、図版39・40、第92図、第47表）　1は畿内系直口壺である。2は口縁部の中間で屈曲し外面が突帯状になるもので、在地系複合口縁壺かと考えたが、外面に丁寧に横ミガキを施す点はやや特異である。3・4は山陰系二重口縁壺である。

5～7は小形丸底壺で、5は口縁の伸びが長い。

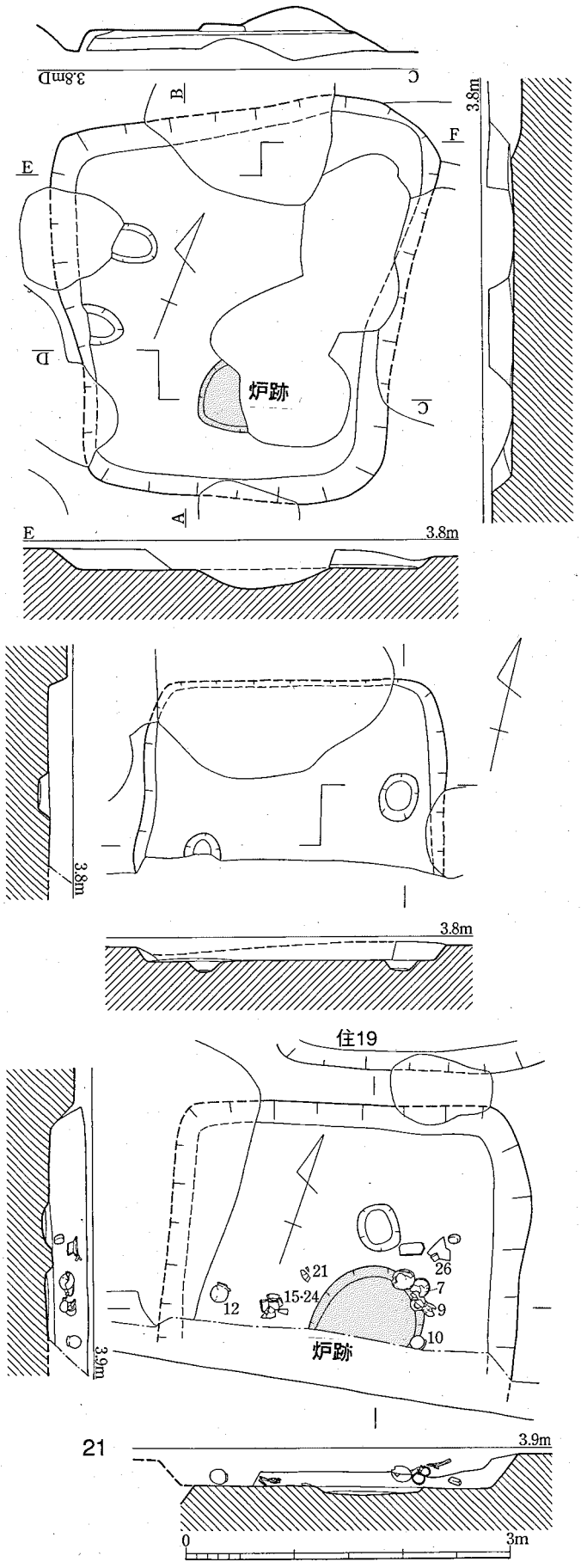
8～10は小形甕。8は器壁の厚い短い口縁をなし、9は外面をヘラケズリ後ミガキで仕上げる。

11～15は布留系甕で、小形品が主体を占め、完形ないしは完形に近い形状を留めるものも多い。12は口縁端部をシャープにつまみ上げる。

16・17は高杯口縁部。16は内面に縦ミガキを施すのに対して、内には縦ミガキは確認されない。18は高杯脚裾で半乾燥時穿孔が残る。

19・20は外反口縁鉢であるが、20は壺との区別に悩む器形である。

21～25は直口鉢で、21～23は内外ミガキ仕上げの精製品。24は外面をハケメで仕上げる



第91図　19～21号竪穴住居跡
実測図（1／60）

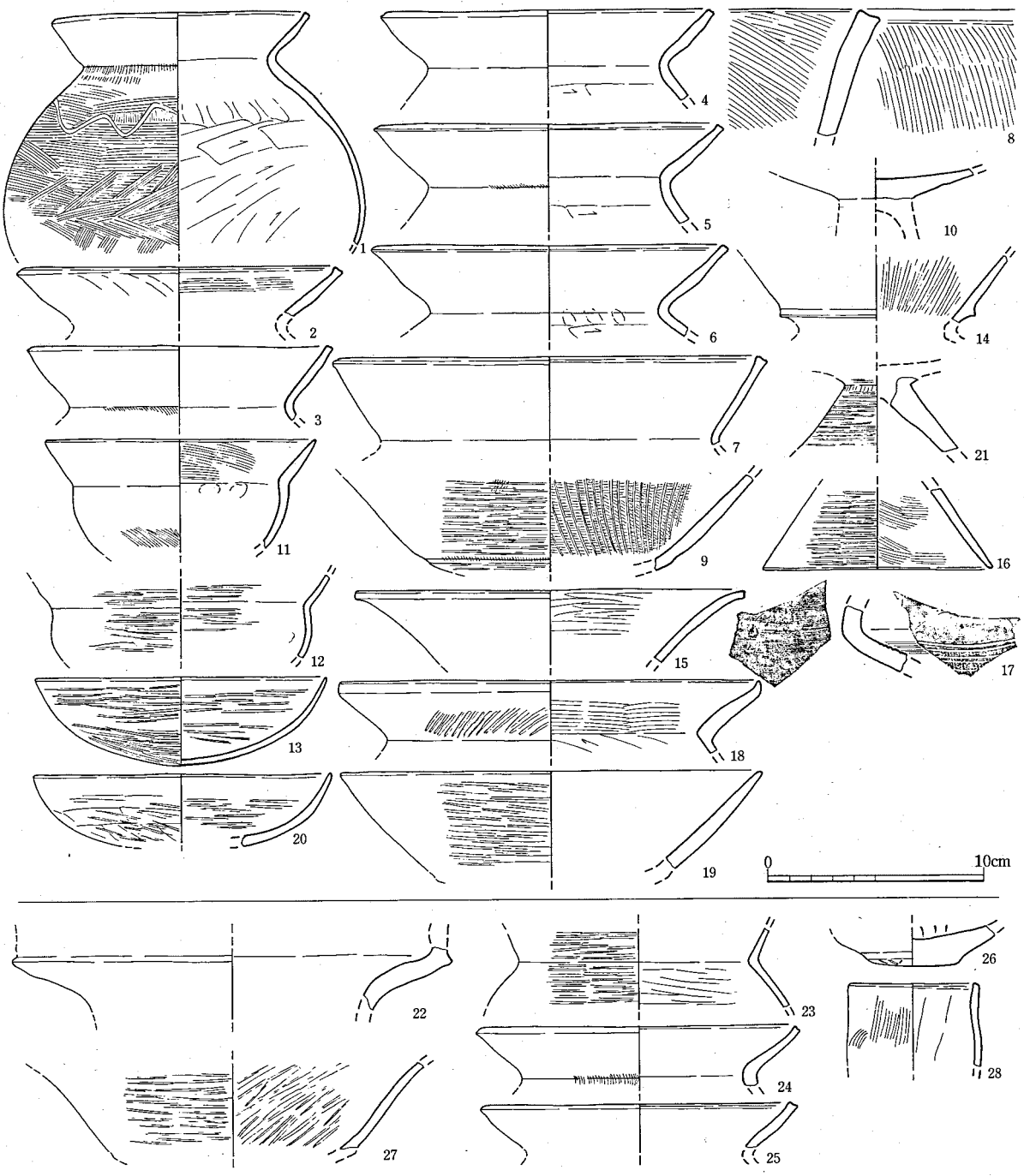
が、内面にもやや粗いミガキを施す。26は山陰系の脚付鉢で、脚内面もミガキで仕上げる。
27は脚付鉢脚部。28は山陰系鼓形器台であるが、一般的な色調とは異なり、橙褐色を呈す。

22号竪穴住居跡（図版11、第94図）

3区の東南部、5号竪穴住居跡の東に位置する。検出当初は5号住居跡と一連のものではないかと考えたが、掘り下げる途中で、5号住居跡に切られることが確認できた。そのため、本来、本住居跡に帰属するものを誤って5号住居跡として取り上げた恐れもあるが、ここで報告する遺物は本住居跡に伴うと考えて間違いない。

第46表　19・20号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
92-1	39	住19覆土下部	布留系甕	口径114、頸径90、胴径167、残高108	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好、外面黒変	淡黄褐色	肩部浅い波状沈線文。胴外ハケは頸下縦ハケ、胴肩横ハケ、下部斜めハケの順。胴内ケズリ低い位置でとどまる。	口縁全周、胴2／3		124
92-2		住19覆土下部	布留系甕	口径144、残高23	粘土粗、1～3mm石英少	良好	灰黄褐色	口縁端内上方につまみ上げる。内外ナデであるが、外ハケメ工具痕風の斜め条痕、内横ハケがかすかに残。	1／2		129
92-3		住19覆土下部	布留系甕	口径136、残高35	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙黄褐色	頸外ハケ残るが、内外ナデ。	1／8		130
92-4		住19覆土下部	布留系甕	口径148、残高42	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色	口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／12	外面薄く煤付着	128
92-5		住19床面下層	布留系甕	口径154、残高45	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	口縁端内上方につまみ上げる。	1／12		137
92-6		住19床面下層	布留系甕	口径158、残高42	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁内外ナデ、頸内指頭圧痕後ケズリ。口縁の伸びやや長い。	1／8		138
92-7		住19覆土下部	布留系甕	口径192、残高41	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄橙褐色	口縁開き小さく、端内上方につまみ上げる。内外ナデ。	1／8		127
92-8		住19覆土上部	大形甕？壺？口縁	残高58	粘土粗、1～3mm石英多	良好	内褐色、外褐黄色	外縦ハケ、内斜めハケ。	小片		1316
92-9		住19覆土	高杯杯部片	残高44	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ。内斜めハケ後暗文風縦ミガキ。	1／8		126
92-10		住19覆土上部	高杯杯底部片	残高14	粘土細、1～3mm石英極少	良好	淡黄褐色	内外摩滅。下部は接合面より剥離し、接合を強化するための刻み圧痕残。	2／3		134
92-11		住19覆土上部	外反口縁鉢	口径122、頸径100、残高51	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡褐色	胴下部外ハケ、胴上部～口縁外ナデ。口縁内斜めハケ、胴内ナデ。	1／8		133
92-12		住19覆土下部	外反口縁鉢	残高41	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外下部ケズリ後内外横ミガキ（摩滅）。	1／8		267
92-13	39	住19覆土下部	直口鉢	口径132、器高41	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外橙褐色、内淡黄褐色	内外横ミガキ。	1／4		125
92-14		住19覆土上部	山陰系鼓形器台	残高31	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	外摩滅、内縦ミガキ。	1／8	外面二次的に火を受け、灰変、褐変	135
92-15		住19覆土上部	山陰系鼓形器台	口径176、残高34	粘土粗、1～3mm石英少	良好	灰褐色	外横ナデ、内横ミガキ。	1／12		136
92-16		住19覆土上部	小形器台	口径104、残高38	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外黄橙褐色、内橙褐色	外横ミガキ、内横・斜めハケ。	1／8		132
92-17		住19覆土上部	半島系土器壺頸部	残高29	石英を少し含む	陶質	灰色	外平行タタキ後横ナデ、沈線。内ナデ。	小片		2353
92-18		住19・21覆土上面	庄内系甕	口径192、残高33	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄灰褐色、内灰褐色	器壁厚く、口縁端部を上に拡張。外タタキ、口縁内横ハケ後ナデ、胴内頸までケズリ。	1／12	焼成・胎土は在地土器と類似	140
92-19		住19・21覆土上面	高杯杯部片	口径190、残高45	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い	淡黄橙褐色	外横ミガキ、内摩滅。	1／8		142
92-20		住19・21覆土上面	直口鉢	口径134、残高33	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	黄橙褐色	外下部ケズリ後内外ミガキ。	1／8		141
92-21		住19付近遺構面	小形器台	残高35	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外横ミガキであるが、屈曲部外ハケ上の縦方向条痕残。内ナデ（摩滅）。	1／3		139
92-22		住20覆土	山陰系二重口縁壺	残高28	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄白褐色	内外横ナデ。	1／8		146
92-23		住20覆土	小形丸底壺	頸径110、残高37	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	小形丸底壺でもやや大きめの部類に属する器形。外横ミガキ、胴内板ナデ。	1／8		148
92-24		住20覆土	布留系甕	口径144、残高28	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	内外ナデで、頸部外面縦ハケ残。	1／12	外厚く煤付着、内面は褐変	144
92-25		住20覆土	布留系甕	口径138、残高21	粘土粗、1mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端内わずかに肥厚。内外ナデ。	1／10		145
92-26		住20覆土	五様式系甕？底部	底径38、残高17	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い、外面黒斑	橙褐色	底部平底で、外面に木葉圧痕が残る。胴外ナデ、内放射状の工具痕。	全周		147
92-27		住20覆土	高杯杯部片	残高40	粘土粗、1mm石英極少	良好	外灰黄褐色、内淡褐黄色	緩やかに口縁外反。下部接合面で剥離。外横ミガキ、内斜めミガキ。	1／8		149
92-28		住20覆土	タコ壺	口径58、残高30	粘土細、1mm石英少	良好	外多濃褐色、内淡褐色	器壁薄く、口縁端シャープ。外縦ハケ、内ナデ。	1／3		150



第92図　19・20号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

北東隅、北西隅から西壁にかけてを撹乱によって失うが、現状では主軸をほぼ南北、N－18°－Wに向けた歪んだ方形を呈す。南北4.8m、東西5.0m程に復元され、比較的大形の竪穴住居跡である。壁は遺存状況の良好な個所で、高さ20cm程である。床面の大半を5号住居跡の掘り込みによって失うためか、炉跡は検出されなかった。

出土遺物（図版41、第95図、第48表）　1・2は山陰系二重口縁壺。2は肩部に沈線直線文を施し、口縁部が強く外傾し、頸部が短い。3・4は小形丸底壺。3は外面ミガキの精製品であるのに対し、4は外面を粗いハケ後ナデで仕上げる。

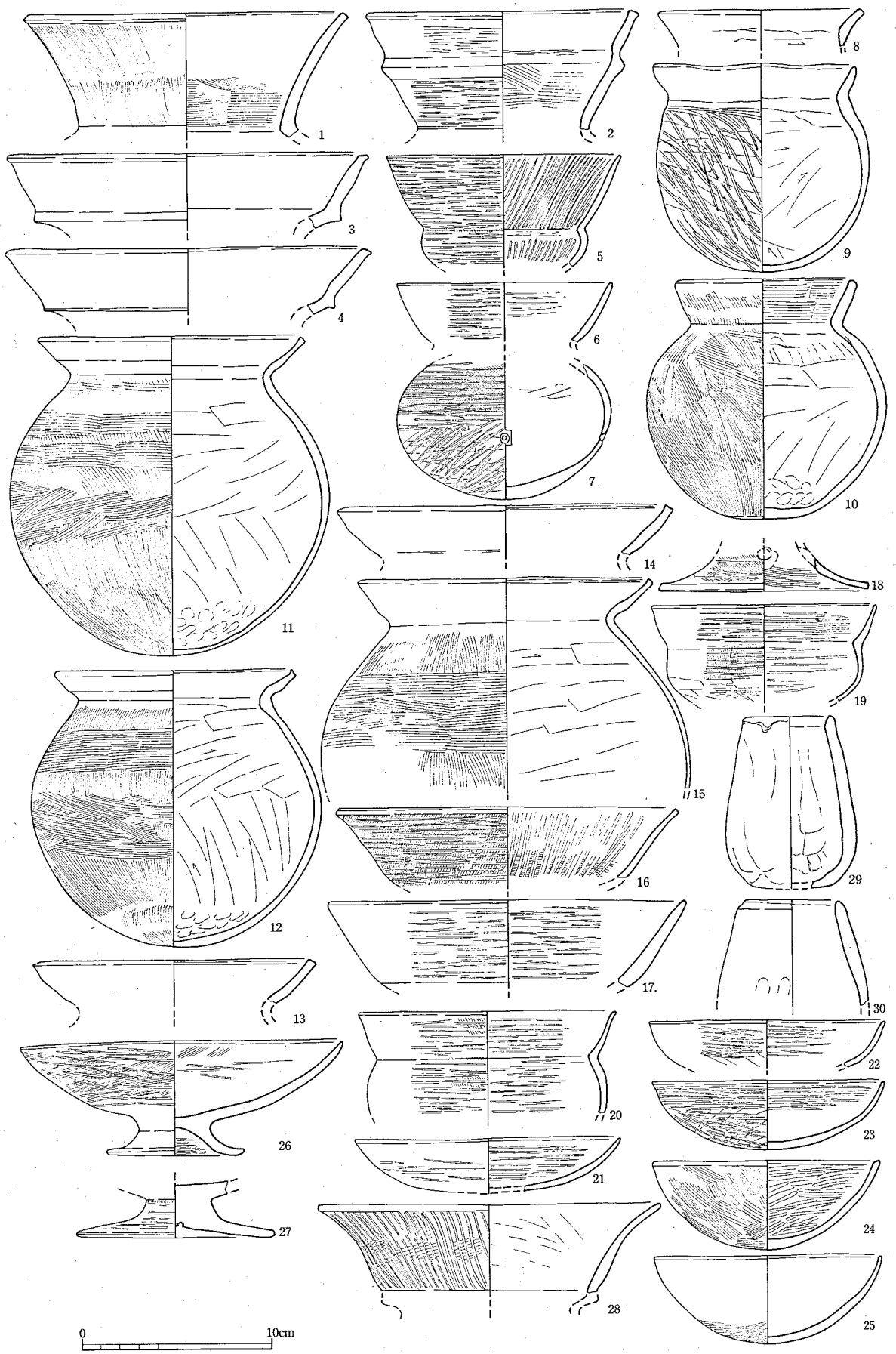
5・6は布留系甕で、7～9はその胴部片と推測されるもの。5は口縁部の内湾が強く、7は口縁端部内側をややつまみ上げ気味に仕上げる。7は肩部に櫛描波状文、8は沈線波状文、9は肩部に櫛描直線文を施文する。

10は高杯で杯下部内面に軸痕が残る。

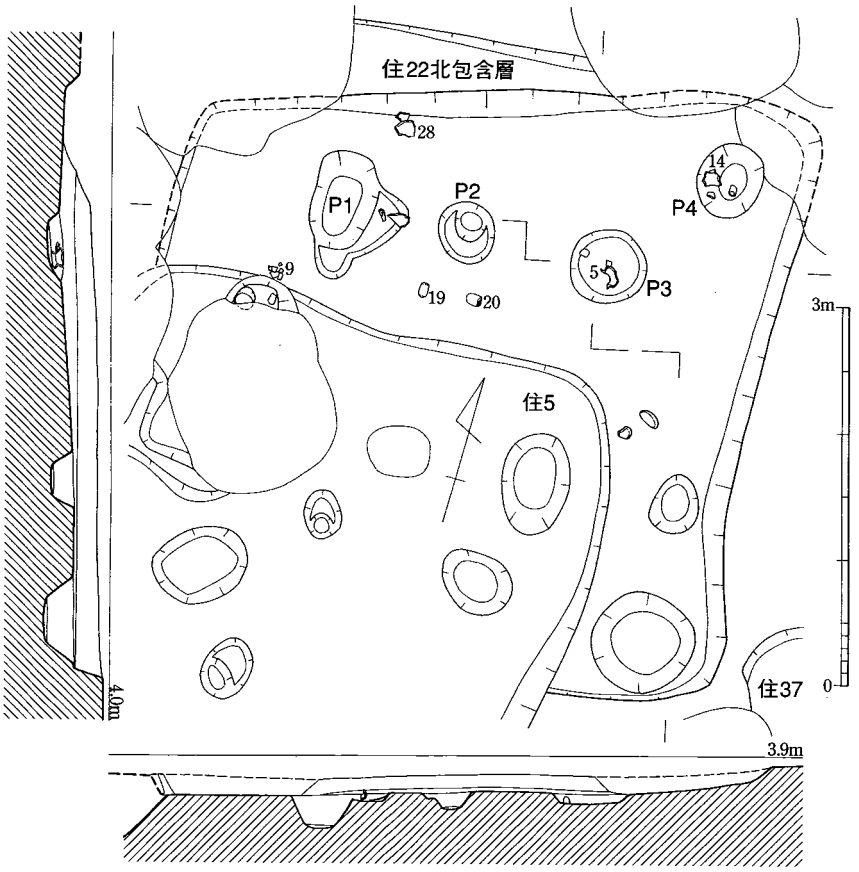
11は外反口縁鉢で、口縁内には縦ミガキが残り、外面にもミガキが観察される。一般的な精製外反口縁鉢とは異なり淡黄褐色を呈す。

第47表　21号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
93-1		住21覆土	畿内系直口壺	口径164、残高66	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	黄褐色	緩やかに外反し端部角張る。外縦ハケ、口縁内横ナデ、頸内横ハケ。	1／8		170
93-2		住21覆土	在地系複合口縁壺？	口径132、残高62	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	縁部の中間で屈曲して口縁が外傾。外面突帯状になる。外横ミガキ、内横ハケ後ナデ。	1／6	径、傾き不安	171
93-3		住21覆土	山陰系二重口縁壺	口径188、残高38	粘土細、1～3mm石英多	良好、外面大黒斑	外淡黄褐色、内黄褐色	口縁端内傾する面をなす。内外横ナデ。	1／6		172
93-4		住21覆土	山陰系二重口縁壺	口径184、残高35	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡灰褐色、内淡黄褐色	内外ナデ。	1／12		274
93-5		住21覆土下部	小形丸底壺	口径120、頸径84、胴径86、残高60	粘土粗、1mm石英少	良好	橙褐色	口縁長く伸びる。頸外縦ハケ後外横ミガキ。内暗文放射状ミガキ。	1／6		163
93-6		住21覆土下部	小形丸底壺	口径108、残高31	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	黄橙褐色	外横ミガキ、内疎らにミガキ。	1／6		271
93-7	39	住21 no. 7	小形丸底壺	胴径112、残高71	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外橙黄褐色、内淡黄褐色	胴下部焼成後ドリルのような工具による穿孔。胴外下部ヘラケズリ、上部斜めハケ後外横ミガキ。内ナデで上部に板工具痕残。	全周		155
93-8		住21覆土下部	小形甕	口径102、残高20	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	口縁短く、器壁厚い。外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	1／4	二次的に火を受け赤変、内コゲ？褐変	272
93-9	40	住21 no. 8	小形甕	口径104、頸径95、胴径111、器高110、胴高92	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	頸部括れ小さい。胴外ケズリ後ミガキ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	ほぼ完形		156
93-10	40	住21 no. 9	小形甕	口径90、頸径81、胴径128、器高126、胴高122	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外淡灰黄褐色、内淡灰褐色	底部安定した平底。外斜めハケ、口縁内横ハケ、頸内ナデ後胴内ケズリ。頸内に接合痕残。	口縁2／3、胴ほぼ完形		157
93-11	40	住21	布留系甕	口径176、頸径106、胴径167、器高167、胴高146	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色～淡橙褐色	胴外ハケは頸下縦ハケ・胴中部左上がり斜めハケ後胴肩横ハケ、胴下部右上がり斜めハケの順。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁2／3、胴3／4		158
93-12	40	住21 no. 1	布留系甕	口径123、頸径101、胴径156、器高145、胴高130	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	口縁短く、端部上に拡張。胴外ハケは頸下縦ハケ、肩横ハケ、胴下部縦ハケ、胴中部左上がり斜めハケの順。	口縁5／6、胴完形	胴最大径より下外面に煤付着	151
93-13		住21覆土	布留系甕	口径140、残高24	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	褐白色	口縁わずかに内湾。内外ナデ。	1／8	外薄く煤付着	270
93-14		住21西撹乱	布留系甕	口径148、残高27	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外褐白色、内褐黄色	内外ナデ。	1／12		275
93-15	40	住21 no. 1・2	布留系甕	口径148、頸径112、胴径194、残高110	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	外淡灰黄褐色、内淡褐色	口縁内外ナデ、胴外縦ハケ後横ハケ、胴内ケズリ。	全周		167
93-16		住21覆土	高杯口縁部	口径176、残高37	粘土細、1mm石英・長石少	良好	外灰褐色、内黄白褐色	口縁やや外反し、端部角張る。外斜めハケ後横ミガキ内斜めハケ後暗文ミガキ（摩滅）。	1／6		168
93-17		住21西撹乱	高杯口縁部	口径186、残高45	粘土粗、1mm石英極少	良好	橙褐色	内外横ミガキで内には縦ミガキは確認されない。	1／8		166
93-18		住21覆土下部	高杯脚裾	裾径108、残高28	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄橙褐色	半乾燥時穿孔1個所残。外斜めハケ後疎らに横ミガキ、内横ハケ。	1／8		273
93-19		住21西撹乱	外反口縁鉢	口径116、頸径102、残高51	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴外下部ケズリ、上部ハケ後外横ミガキ。口縁内横ハケ、胴内横ミガキ。	1／8		164
93-20		住21覆土	外反口縁鉢	口径132、頸径114、胴径124、残高43	粘土細、1～3mm石英極少	良好	淡橙褐色	壺との区別に悩む器形。外ハケ後横ミガキ、内横ミガキ。頸内接合痕残。	口縁1／8、胴1／4		162
93-21		住21 no. 3	直口鉢	口径138、残高27	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡橙褐色	内外横ミガキ（摩滅）。	2／5		153
93-22		住21	直口鉢	口径124、残高24	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	内外黄橙褐色	外ケズリ後内外横ミガキ。	1／12		269
93-23	39	住21覆土	直口鉢	口径122、器高36	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外下部ヘラケズリ後内外横ミガキ。	ほぼ完形		159
93-24	40	住21 no. 2	直口鉢	口径118、器高47	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	外淡黄褐色、内淡黄灰褐色	外斜めハケ、口縁内横ハケ後内ミガキ。	ほぼ完形		152
93-25		住21覆土	直口鉢	口径118、器高46	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	褐白色	外摩滅するも一部ハケ残。内ナデ。	1／6		161
93-26	40	住21 no. 6	脚付鉢	口径168、裾径66、器高60	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外淡橙褐色、内淡黄褐色	外斜めハケ後ミガキ、鉢内ハケ後ミガキ？（摩滅）、脚内横ミガキ。	ほぼ完形		154
93-27		住21覆土	脚付鉢脚部	裾径100、残高30	粘土細、1mm石英極少	良好	橙褐色	外ハケ後横ミガキ、内ハケ後ナデ。、内頂部凹む。	2／3		169
93-28		住21西撹乱	山陰系鼓形器台	口径178、残高46	粘土細、1mm石英・長石少	良好	外橙黄褐色、内橙褐色	外斜めハケ後縦ミガキ、内板ナデ後ナデ？（摩滅）。	1／6	山陰系器台としては色調特異	165



第93図　21号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）



第 94 図　22 号竪穴住居跡実測図（1／60）

12・13 は直口鉢で、13 はミガキを施した精製品。14 は畿内系の脚付鉢脚裾部で 1 個所半乾燥時の穿孔が残り、外面下部に太めの縦ミガキを施す。

15 は小形器台脚部で、一般的なものと比べ小形品である。0・6 時方向の 2 個所に半乾燥時・ミガキ前の穿孔を施す。16 は山陰系鼓器台であるが、一般的なものとは異なり括れ部上下の突帯状突出が見られない。

17 ～ 20 はタコ壺である。21 は 22 号住居跡北側の包含層から出土した高杯杯口縁部片。

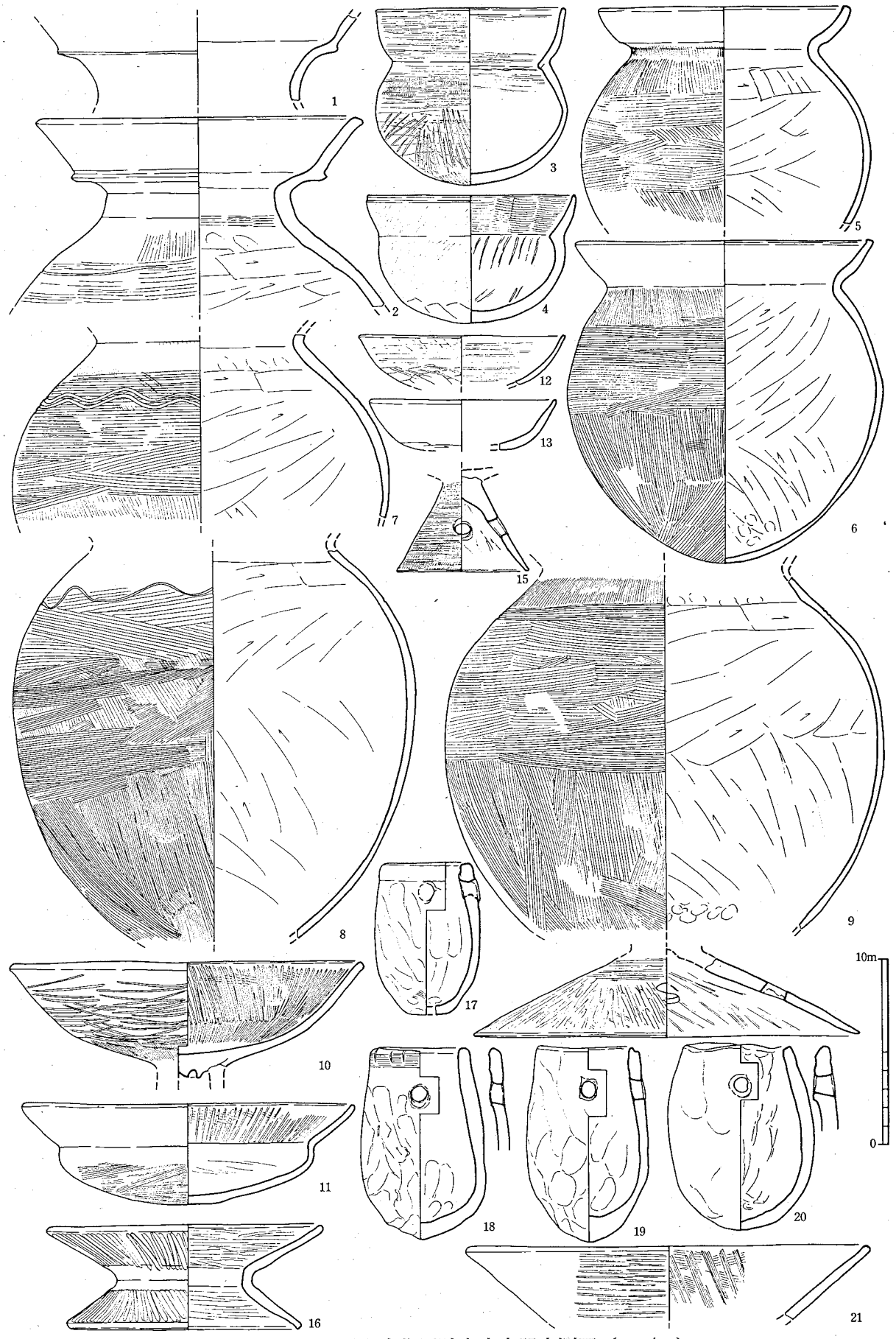
23 号竪穴住居跡（図版 19、第 96 図）

3 区のほぼ中央部、16 号竪穴住居跡の南西、25 号竪穴住居跡の上層、30 号竪穴住居跡の西に位置する。25 号住居跡と切り合う西壁、撹乱及び 16 号住居跡により壁が失われる北壁は輪郭が乱れているが、東、南壁は比較的良好な状態で検出された。

この東、南壁を基準とするならば、長軸を東西に向けた N － 75° － W に向けたわずかに東西に長い長方形を呈し、東西 4.3m 前後、南北 4.1m 程に復元される。壁は良好な部分で高さ 15cm 程遺存する。床面ではいくつかピットが検出されているが、炉跡は検出できなかった。覆土は灰褐色細砂で、黄褐色細砂を 20% 程斑状に含む。

床面で検出された P 1 は褐色細砂、P 2 は炭を含んだ暗褐灰色細砂、P 3 は灰褐色細砂を覆土とする。西側の床面近くからは 10 ～ 20cm 大の石がまとまって出土した。

出土遺物（図版 41、第 97 図、第 49 表）　1 は山陰系の大形二重口縁壺で、口縁部が直立し、端部をわずかに外につまみ出す。2 は口縁端部を強く外につまみ出した畿内系直口壺口縁である。



第95図　22号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

3～5は布留系甕で、4・5は口縁端部を上につまみ上げ、4は肩部に櫛描直線文、5・6は肩部に櫛描直線文と櫛描波状文を施文する。

6は高杯口縁部片。7・8は直口鉢で、7は漆のようなものを塗布したためか黒褐色を呈し、8はハケメ仕上げの粗製品。9～11は脚付鉢脚部。10は内頂部中心からややずれた位置に凹みがある。11は器高が高いが、畿内系精製脚付鉢脚裾となるか。12は在地系器台。13は山陰系鼓形器台。

14～17は平行タタキ後やや太めの沈線を巡らした朝鮮半島系軟質土器の胴部片。15は23号住居跡から出土し、14は25号住居跡、16・17は26号住居跡からの出土品であるが、同一個体と考えられるためここで図示した。17の外面には把手として機能したと思われる半球状の突起が見られる。全体的に軟質であるが、土師器よりやや堅緻な焼成である。18はタコ壺である。

24号竪穴住居跡（図版19、第98図）

3区の中央やや西寄りに位置し、25・26号竪穴住居跡の覆土に掘り込まれている。中央部を大

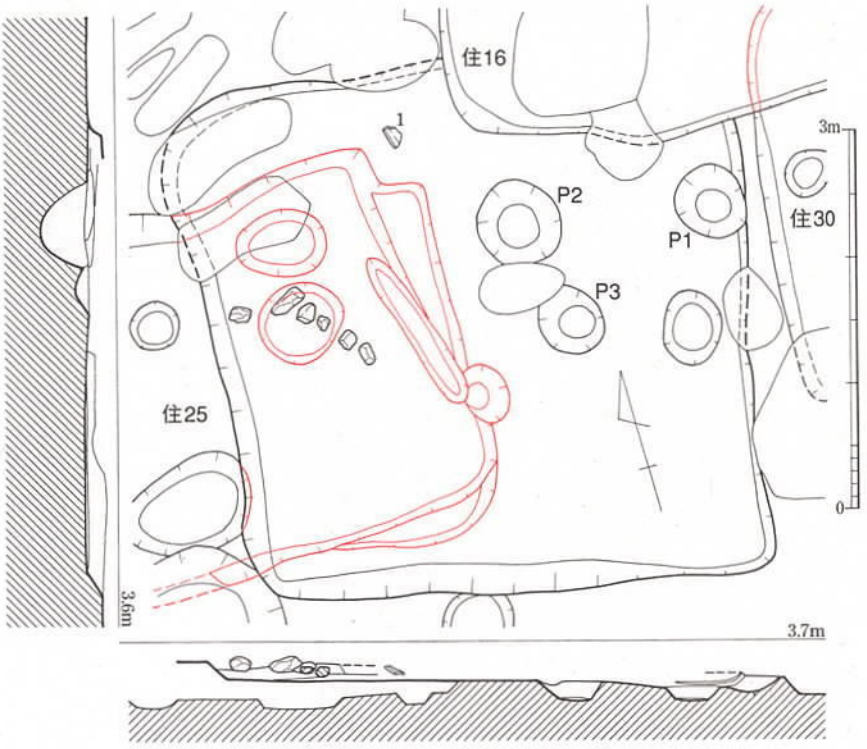
第48表　22号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
95-1		住22 P 1	山陰系二重口縁壺	残高48	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	淡褐黄色	口縁端部欠損。内外ナデで内はナデの凹凸が顕著。	1／6		569
95-2		住22 no. 2	山陰系二重口縁壺	口径170、残高103	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄褐色	口縁部に沈線直線文。口縁外傾大。胴外縦ハケ後横ハケ、頸内ハケ残。	1／6	内外二次的に火を受け褐変し、煤付着	323
95-3	41	住22覆土	小形丸底壺	口径102、頸径86、胴径102、器高95	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	口縁内湾強く、上部直立。胴外下部ケズリ、上部ハケ後外ミガキ。内口縁～胴上部ミガキ、胴内ナデ。	口縁1／8、脚全周		459
95-4		住22 P 3	小形丸底壺	口径108、頸径98、胴径100、器高66、胴高46	粘土粗、1～3mm石英少	良好	灰黄褐色	口縁短く、端部シャープで段状になる。胴外下部板ナデ、胴上部～口縁外ハケ後ナデ、口縁内横ハケ、胴内ナデで随所に板ナデ痕残。	1／6		435
95-5	41	住22 P 3	布留系甕	口径134、頸径100、胴径154、残高117	粘土粗、1～5mm石英・クサリ礫少	良好	外淡褐黄色、内黄褐色	口縁内湾強。胴外ハケは頸下縦ハケ・胴下部左上がり斜めハケ後肩部横ハケの順か。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／2		434
95-6		住22 P 1	布留系甕	口径152、頸径126、胴径170、器高172、胴高137	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	外淡灰褐色、内暗褐色	口縁端内ややつまみ上げ。胴外ハケは頸下縦ハケ、中部横ハケ、下部縦・斜めハケの順か。	口縁1／2、胴1／3	口縁部と胴部変が接合しないため図上で復元。形態不安	433
95-7		住22 no. 5	布留系甕？胴片	頸径110、残高98	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	淡黄褐色	肩部櫛描波状文。外ハケ、胴内ケズリ。	1／4	焼成不良のため褐灰色の個所多い	338
95-8		住22 no. 2	布留系甕？胴片	胴径216、残高208	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い、外大黒斑	外淡黄褐色、内褐灰色	肩部に沈線波状文。胴外ハケは、胴中部縦ハケ、肩粗横ハケ、胴中部細横斜めハケ、胴下部縦ハケの順か。	1／4		322
95-9		住22 no. 6	布留系甕？胴片	胴径230、残高187	粘土細、1～5mm石英・土器片？多	良好、胴肩大黒斑	淡黄褐色	肩部4条1単位の櫛描直線文。胴外ハケ、胴内ケズリ。	1／2		329
95-10	41	住22	高杯杯部	口径186、残高62	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	杯下部に軸痕が残り、屈曲部の段不明瞭。外下部ハケ後横ミガキ。内斜めハケ後縦ミガキ。	全周		325
95-11		住22 no. 2	外反口縁鉢	口径176、頸径136、器高53、胴高31	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い、口縁外面黒斑	淡黄褐色	口縁大きく開き、口径大。胴外ハケ、口縁外摩滅。口縁内斜めハケ後縦ミガキ、胴内疎らにミガキ？。	口縁1／2、胴下部全周		324
95-12		住22 P 1	直口鉢	口径108、残高26	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	胴外下部ヘラケズリ、口縁外指頭圧痕後内外横ミガキ。	1／4	口縁付近、破損後火を受け煤付着	432
95-13		住22覆土	直口鉢	口径98、残高27	粘土粗、1mm石英多	良好	淡黄褐色	外下部ケズリ、口縁外・胴内ナデ。	1／8	径、傾き不安	570
95-14		住22 no. 1	畿内系脚付鉢	裾径206、残高41	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色～淡橙褐色	外下部ハケ後太め縦ミガキ後上部細い横ミガキ。内は板ナデ痕残。1個所半乾燥時穿孔残。	1／3		329
95-15	41	住22 no. 2	小形器台裾部	裾径66、残高50	粘土細、1mm長石極少	良好	褐色	一般的なものより小形。0・6時方向の2個所半乾燥時・ミガキ前穿孔。外ハケ後横ミガキ、内ナデで工具痕残。	1／2		321
95-16	41	住22 P 1	山陰系鼓形器台	口径140、頸径73、裾径120、器高57	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡白褐色、内灰白褐色	括れ部上下の突帯状突出なし。外太め縦ミガキ、内太め横ミガキ。括れ部内外はナデ。	2／3		431
95-17		住22 no. 3	タコ壺	口径44、器高81	粘土細、1mm石英少	良好	外淡橙褐色、内淡黄褐色	内外ナデ。	1／2		326
95-18	41	住22 P 4	タコ壺	口径46、器高103	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデであるが、口縁端部縦工具痕、横ハケ？残。	完形		436
95-19	41	住22 no. 4	タコ壺	口径46、器高105	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内褐色	内外ナデ。	1／2		327
95-20	41	住22 no. 5	タコ壺	口径55、器高100	粘土粗、1～3mm石英・長石多	やや甘い	外褐黄色、内暗褐色	内外ナデであるが、内は板ナデか。	完形		328
95-21		住22北包含層	高杯口縁部	口径212、残高40	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外横ミガキ、内斜めハケ後分割暗文風の斜めミガキ。	1／6		430

きく撹乱によって失うが、輪郭は明瞭であり、25・26号住居跡との切合いも確実と思われる。

主軸をほぼ南北、N－7°－Wに向けたほぼ正方形を呈し、南北3.4～3.6mを測り、東西3.7m前後に復元される。覆土は上面から中央下部にかけてレンズ状に黒色に近い暗褐色細砂が堆積し、壁際近くの下部は黄褐色細砂を斑状に含む灰褐色細砂であった。

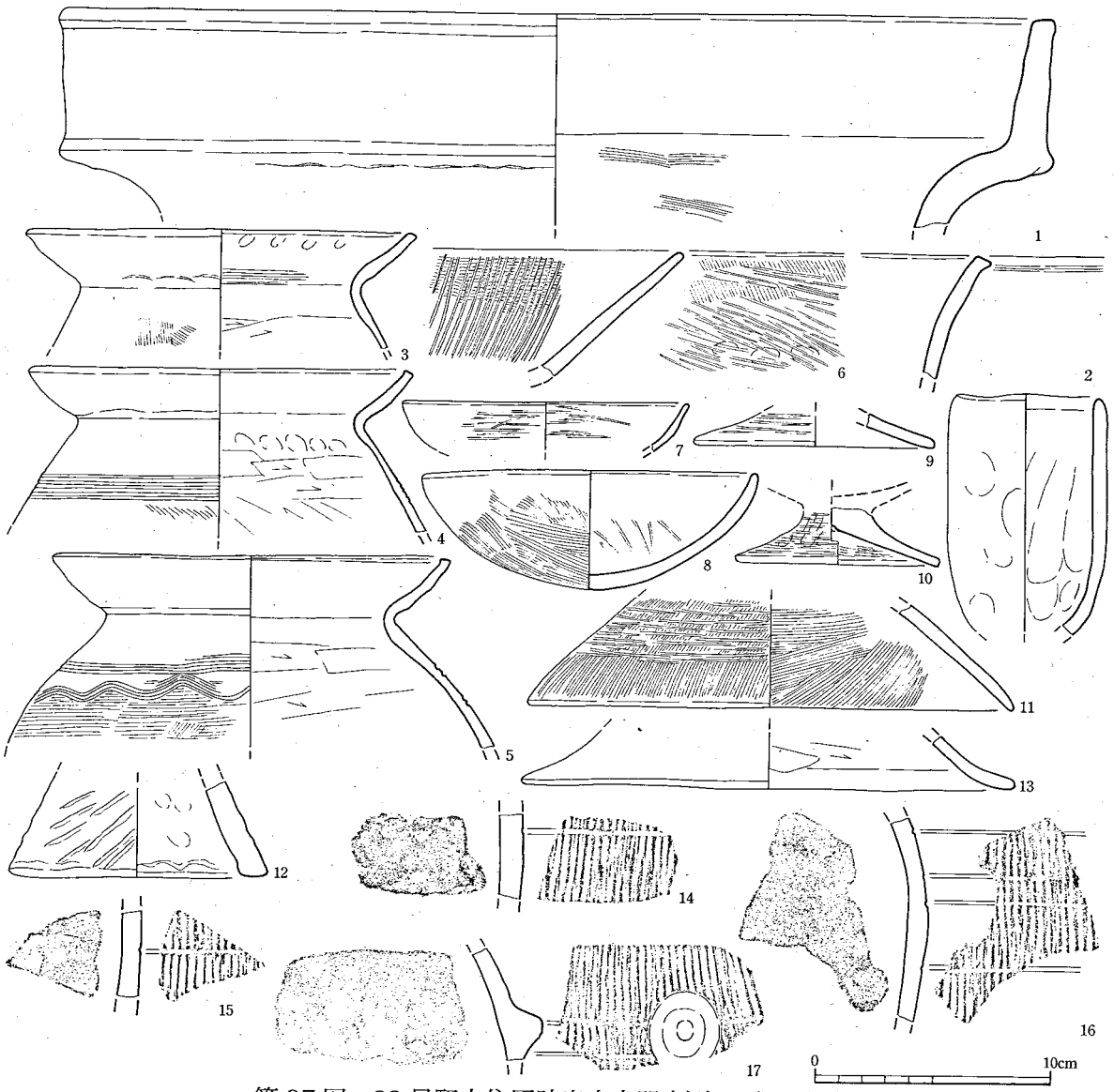
床面では炉跡等は検出されなかったが、中央やや南寄りに位置するP1は比較的、硬く締まった締まった白黄色粘土を含む褐色細砂を覆土とする。北壁際に位置するP2は灰褐色細砂を覆土とし、タコ壺3点（第99図15・18・23）がまとまって出土している。



第96図　23号竪穴住居跡実測図（1／60）

第49表　23号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
97-1		住23 no. 1	山陰系二重口縁壺	口径416、残高88	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い、器肉黒変	褐灰色、一部杯褐色	器壁厚い。口縁直立し、端部を外につまみ出す。内外ナデ、頸内ハケ、頸外接合痕残。	1／8		603
97-2		住23	畿内系直口壺	残高52	粘土粗、1～3mm石英多	良好、外面黒斑	外灰黄褐色、内淡黄褐色	口縁端部を強く外につまみ出す。内外ナデ。	小片		607
97-3		住23上面	布留系甕	口径158、残高49	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄灰褐色	口縁外工具痕。胴外縦ハケ、胴内横ハケ・指頭圧痕、胴内ケズリ。	1／6	歪みのため、径・傾き不安	615
97-4		住23覆土	布留系甕	口径156、残高67	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄灰褐色	口縁端つまみ上げ。胴同4条1単位の櫛描直線文。口縁内外ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／4	外煤付着	605
97-5		住23上面（P325）	布留系甕	口径162、残高79	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端つまみ上げ。櫛描直線文、櫛描波状文施文。口縁内外ナデ。	1／4		2286
97-6		住23覆土	高杯口縁部	残高51	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外指頭圧痕・斜めハケ後斜めミガキ。口縁内斜めハケ後縦ミガキ。	小片		610
97-7		住23覆土	直口鉢	口径116、残高20	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	黒褐色	内外横ミガキ。	1／8	漆塗布？のためか内外黒色	775
97-8	41	住23上面	直口鉢	口径138、残高50	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外灰黄褐色、内淡黄褐色	外斜めハケ、内ナデで工具の当たりのような条痕残る。	2／3		604
97-9		住23覆土	脚付鉢脚部	裾径49、残高23	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外横ミガキ、内ナデ。	1／8		609
97-10		住23覆土	脚付鉢脚部	裾径84、残高23	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	内頂部中心からずれて凹み残。外指頭圧痕後横ミガキ、内横ハケ。	脚柱全周、裾1／6		609
97-11		住23覆土	脚付鉢脚部	裾径198、残高44	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	1／6		611
97-12		住23覆土	在地系器台	裾径106、残高39	粘土粗、1～5mm石英・長石多	良好	外褐黄色、内褐色	裾端部に繊維圧痕残る。外粗いタタキ、内ナデ。	1／8		612
97-13		住23床面下層	山陰系鼓形器台	裾径206、残高23	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い、器肉黒変	外淡黄褐色、内淡黄灰褐色	内外ナデ、裾内ケズリ。	1／8		614
97-14		住25覆土下部	半島系土器胴部片		粘土細、1～3mm石英・長石少	軟質	外黄灰色、内黒褐色	外平行タタキ後沈線。	小片		2355
97-15		住23P2	半島系土器胴部片		粘土細、1～3mm石英・長石少	軟質	外黄灰色、内黒褐色	外平行タタキ後沈線。	小片		2354
97-16		住26覆土	半島系土器胴部片		粘土細、1～3mm石英・長石少	軟質	外黄灰色、内黒褐色	外平行タタキ後沈線。	小片		2356
97-17		住26覆土	半島系土器胴部片		粘土細、1～3mm石英・長石少	軟質	外黄灰色、内黒褐色	外面位半球状の突起あり。外平行タタキ後沈線。	小片		2357
97-18		住23覆土	タコ壺	口径58、残高100	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	暗灰褐色	内外ナデ。	1／3		613



第 97 図　23 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

出土遺物（図版 41、第 99 図、第 50 表）　1 は鋸歯文・有軸羽状文風の文様を刀子先端のような鋭利な工具による沈線で施文した特徴的な土器片で、壺肩部か（図版 50）。一部にハケメを残すことから土師器であることには間違いないが、どの地域の土器かは不明。

2 は在地系壺口縁部か。3 は畿内系直口壺。

4 は粗製の壺上部破片。胴部器壁が極めて厚い。口縁は短く外反し、端部は外傾する面をなす。内外の調整も含めて極めて粗製のものである。胎土・色調は在地の土器に位置づけても違和感はないが、器形は特異である。

5 は在地系甕口縁部、6 は五様式系甕口縁部か。7・8 は庄内系甕で、7 は胴部内面を斜めハケで仕上げる。8 は口縁端を上に拡張させ、ケズリが頸部まで及ぶ。

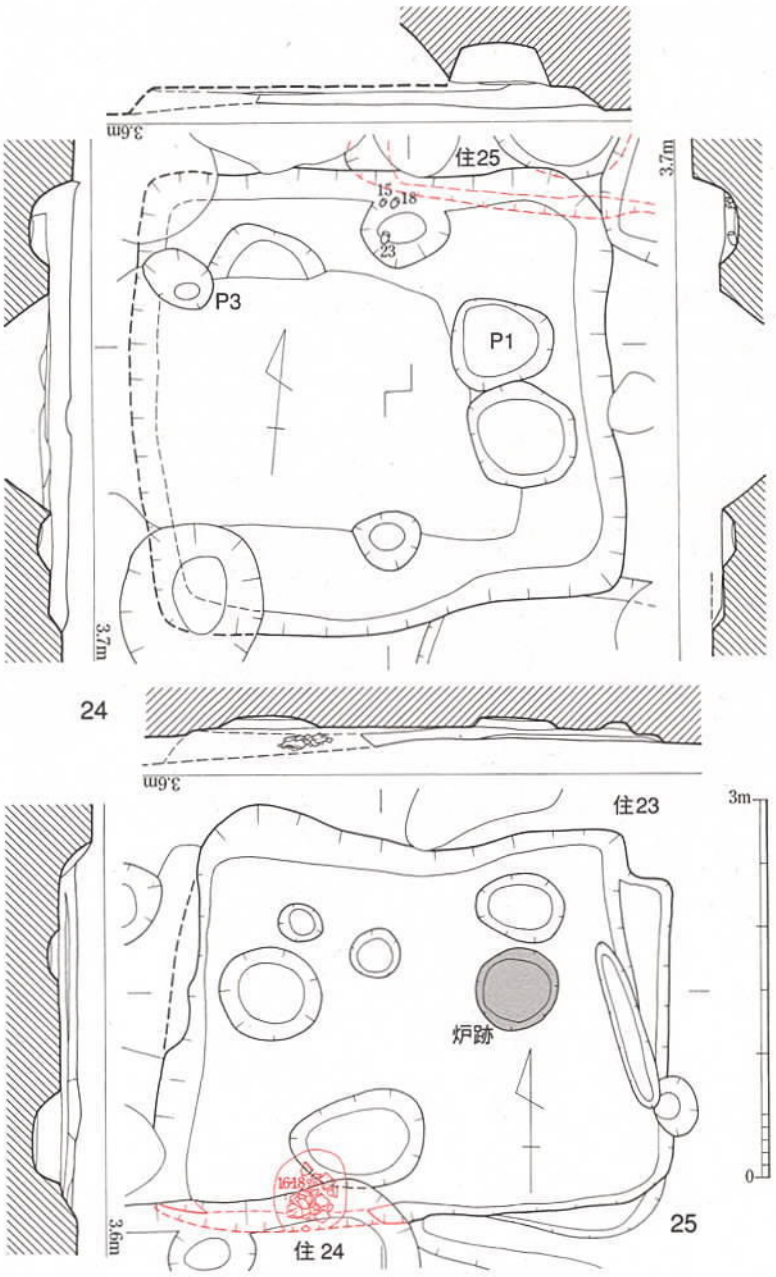
9 は布留系甕で、肩部に沈線による直線文を施文する。

10 は高杯脚部片で、形態・調整から考えて、在地系であろう。11 は粗製の外反口縁鉢、12 は口縁部の直立する粗製二重口縁鉢である。13・14 は直口鉢で、14 は内にミガキを施すが、外面は粗い板ナデ仕上げ。15 ～ 23 はタコ壺。18・23 は平底で、18 は外面にタタキ痕を残す。

25 号竪穴住居跡（図版 19、第 98 図）

3 区の中央やや西より、24 号竪穴住居跡の北、23 号竪穴住居跡の西下層に位置する。北側の輪郭は乱れているが、他の部分では輪郭はほぼ明瞭であった。

北側の壁はやや乱れているものの、主軸をほぼ南北に向けた東西にやや長い長方形を呈し、南北 3.1m、東西 3.4 ～ 4.1m を測る。壁の高さは遺存状況の良好な個所で 30cm 程で、覆土は褐灰色細砂であった。床面では中央やや東寄りに炉跡が検出され、住居跡の南西部からは土師器甕（第 100 図 16 ～ 18）がまとまって出土した。



第 98 図　24・25 号竪穴住居跡実測図（1 ／ 60）

出土遺物（図版 41、第 100・101 図、第 51・52 表）　1・2 は畿内系直口壺。3・4 は山陰系二重口縁壺。3 は口縁部が直立し、4 は胴肩部に沈線直線文を施文する。

5 はミガキ仕上げの精製小形丸底壺。

6 は小形甕。7 ～ 18 は布留系甕。7・18 は肩部に工具刺突による列点文、8 は櫛描直線文、16・17 は沈線直線文を施文する。7・9・14・16・17 は口縁端を強くつまみ上げる。18 は口縁端を外につまみ出し、口縁内外に成形後、化粧土をかけたような痕跡が見られる。

19・20 は高杯杯部。19 は外面を山陰系の精製土器に見るような太いミガキで仕上げ、杯底下面に 2 個所の軸痕が残る。21 ～ 23 は高杯脚部片である。22 は脚柱部の 0・4 時 2 方向に粘土の軟らかい時点での穿孔を施す。24 は大形の外反口縁鉢で口縁端部を上方に拡張させる。25 は直口鉢。

26 ～ 38 はタコ壺。27 は外面に粗いタタキを残し、30・31・36 は平底を呈す。

26 号竪穴住居跡（図版 20、第 102 図）

3 区のほぼ中央部に位置し、東に位置する 32 号住居跡を切り、北西に位置する 24 号竪穴住居跡に切られている。北東隅を 24 号竪穴住居跡に切られ、南西隅に撹乱が位置するため、それぞれの

隅を失っているが、32号住居跡と切り合う東辺を除き、輪郭は比較的明瞭であった。

主軸をほぼ南北に向け、北側の壁が若干膨らみをもつが、整った正方形に近い平面形を呈し、南北3.5m、東西3.4mを測る。壁は遺存の良好な個所で高さ20cm程。覆土は褐灰色細砂。

床面では多数のピットを検出したが、明確な主柱穴はなかった。P1・3は灰褐色細砂、P2・4は暗褐色細砂を覆土とする。炉跡は確認できなかったが、P2の北がわずかに褐色に変色しており、付近に炉跡が位置していた可能性が高い。

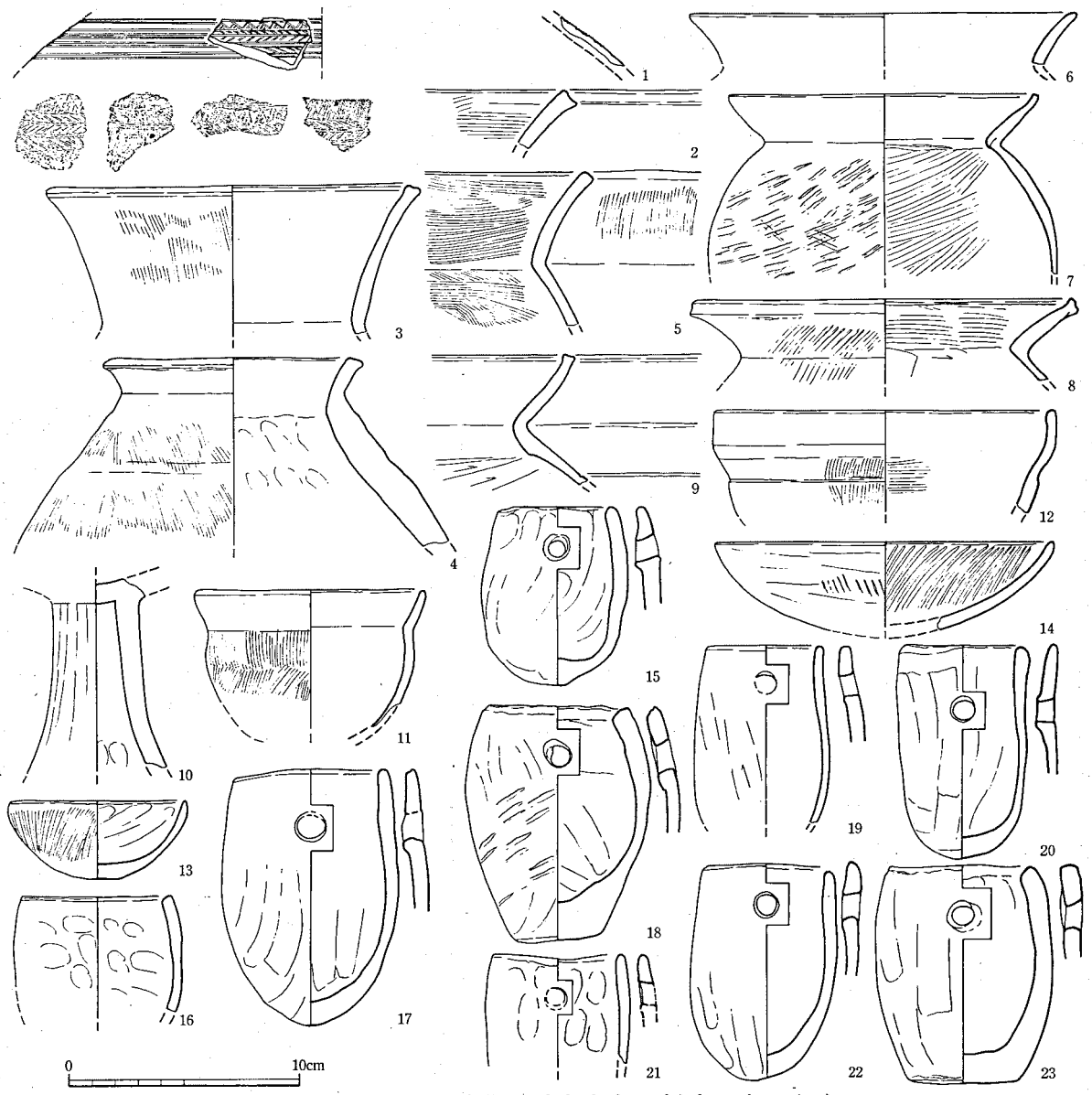
出土遺物（図版42、第103・104図、第53～55）　1～3は畿内系直口壺。2は口縁外に竹管文が2個所、口縁内に線刻状の沈線1条が残り、口縁端部は沈線状に凹む。

4～6は山陰系二重口縁壺。7・9は畿内系の中形直口壺で、7は遺存状況が良好な個体である。胴部内面はハケメを施すが、完形のため十分に調整を図化できていない。

8は中形の短頸直口壺で、内面はハケメを残すが、外面はミガキ仕上げである。10は大きく開き、内外ミガキ仕上げの畿内系二重口縁壺口縁部。

第50表　24号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
99-1		住24覆土	壺肩部	残高21	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	黒色・褐色・黄褐色	鋸歯文・有軸羽状文風の文様を刀子先端のような鋭利な工具による沈線で施文。外一部ハケメ残。内器表剥離。	小片	径、傾き不安。殴破片も内器表剥離	2251
99-2		住24P3	在地系壺口縁？	残高26	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	褐黄色	口縁端強いナデにより凹む。外ナデ、内横ハケ。	小片		622
99-3		住24覆土	畿内系直口壺	口径152、残高64	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内黄褐色	外縦ハケ後内外横ナデ。	1／6		633
99-4		住24覆土	粗製壺	口径100、残高80	粘土粗、1～3mm石英・長石多	やや甘い	外灰黄褐色、内灰褐色	胴部器壁が極めて厚い。口縁は短く外反し、端部は外傾する面をなす。外縦ハケ後粗いナデ、口縁内外横ナデ、胴内指頭圧痕残す粗いナデ。	1／8	胎土・色調は在地土器にも類似	630
99-5		住24覆土	在地系甕	残高68	粘土細、1～3mm石英多	良好	淡褐色	口縁長く伸び、わずかに外反。口縁外縦ハケ、胴外摩滅、口縁内横ハケ、胴内斜めハケ。	小片		631
99-6		住24上面	五様式系甕	口径166、残高22	粘土粗、1～3mm石英多	良好	暗褐色	口縁緩やかに外反。内外ナデ。	1／8		638
99-7		住24覆土	庄内系甕	口径130、頸径102、胴径110、残高77	粘土粗、1～5mm石英多	やや甘い	褐色	胴外右上がりタタキとして図示したが摩滅進む。口縁内外ナデ、胴内粗い斜めハケ。頸内に接合痕残。	1／4	口縁片と胴部片の接点小さく形態不安	724
99-8		住24覆土	庄内系甕	口径164、残高46	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	暗褐灰色	口縁端を上に拡張させる。外ハケ、口縁内横ハケ、胴内ケズリ。	1／6		632
99-9		住24	布留系甕	残高57	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	肩沈線直線文。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	小片		637
99-10		住24	高杯脚部	残高82	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い	外黄褐色、内褐色	外板ナデ（摩滅）、内ナデ、杯内ハケメ？。外ミガキの可能性あり。	全周		634
99-11	41	住24覆土	外反口縁鉢	口径98、頸径89、胴径90、残高59	粘土粗、1～3mm石英少	良好	暗灰褐色	鉢部器形深い。胴外縦ハケ、口縁外～内ナデ。	1／2	破損後火を受け器表剥離、赤変	626
99-12		住24	二重口縁鉢	口径144、残高44	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡褐色	口縁直立、頸部に微かな段あり。胴外縦ハケ、胴内横ハケ、口縁内外ナデ。	1／12		776
99-13		住24覆土	直口鉢	口径76、器高34	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	灰褐色	外斜めハケ、内ナデ。	1／4	口縁わずかしか残らず径不安	629
99-14		住24P1	直口鉢	口径144、残高38	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡褐色	外板ナデ、内暗文風のミガキ。	1／6	口縁わずかしか残らず径不安	621
99-15	41	住24 no.2	タコ壺	口径46、器高77	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	完形		617
99-16		住24床面下層	タコ壺	口径64、残高52	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外褐黄色、内褐色	内外ナデ。	2／3		655
99-17	41	住24床面下層	タコ壺	口径64、器高110	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	内外ナデ。	3／4		635
99-18		住24 no.3	タコ壺	口径58、器高102	粘土粗、1～3mm石英少	良好	暗褐色	外粗いタタキ後内外ナデ。	完形		618
99-19	41	住24P2	タコ壺	口径46、残高78	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	明褐色	内外ナデ。	3／4		623
99-20	41	住24覆土	タコ壺	口径50、器高92	粘土細、1mm石英・長石少	良好	黄褐色	内外ナデ。	3／4		627
99-21		住24床面下層	タコ壺	口径52、器高46	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／2		636
99-22	41	住24床面下層	タコ壺	口径50、器高93	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	内外ナデ。	ほぼ完形		619
99-23	41	住24 no.1	タコ壺	口径60、器高94	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄褐色	内外ナデ。	完形		614



第 99 図　24 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

13・14 は五様式系甕で、13 は直線的に口縁が外傾する。口縁部が強く外反する 14 は胴部内面を板ナデで仕上げるが、頸下に板ナデに先立つ接合痕、絞り痕、指頭圧痕が残る。

15 ～ 17 は布留系甕。15・17 は口縁端をわずかに外につまみ出し、16 は口縁端をつまみ上げる。16 は胴肩に工具刺突列点文、17 は櫛描直線文を施文する。

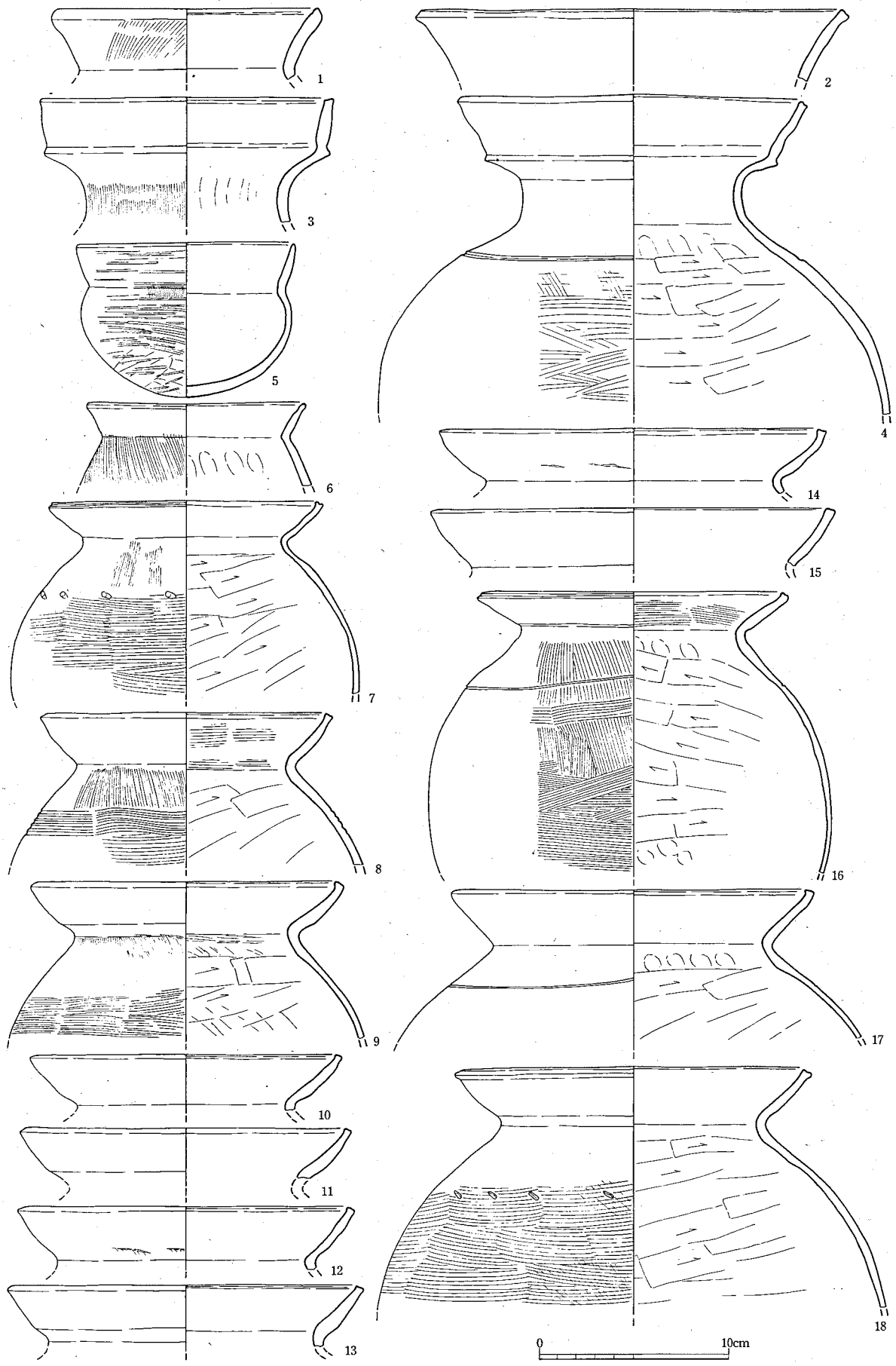
18 は高杯杯口縁部、19 は高杯脚裾部。20 は深い器形で、口縁部がわずかに外反気味の直口鉢。21・22 はともに精製脚付鉢脚部で、21 は脚・鉢接合部が極めて厚い。

23 は小形器台裾か。24 は山陰系鼓形器台で、内下部はミガキを施さずナデ仕上げの可能性があり、突出部内に接合痕が残る。11・12・25・26 はタコ壺である。

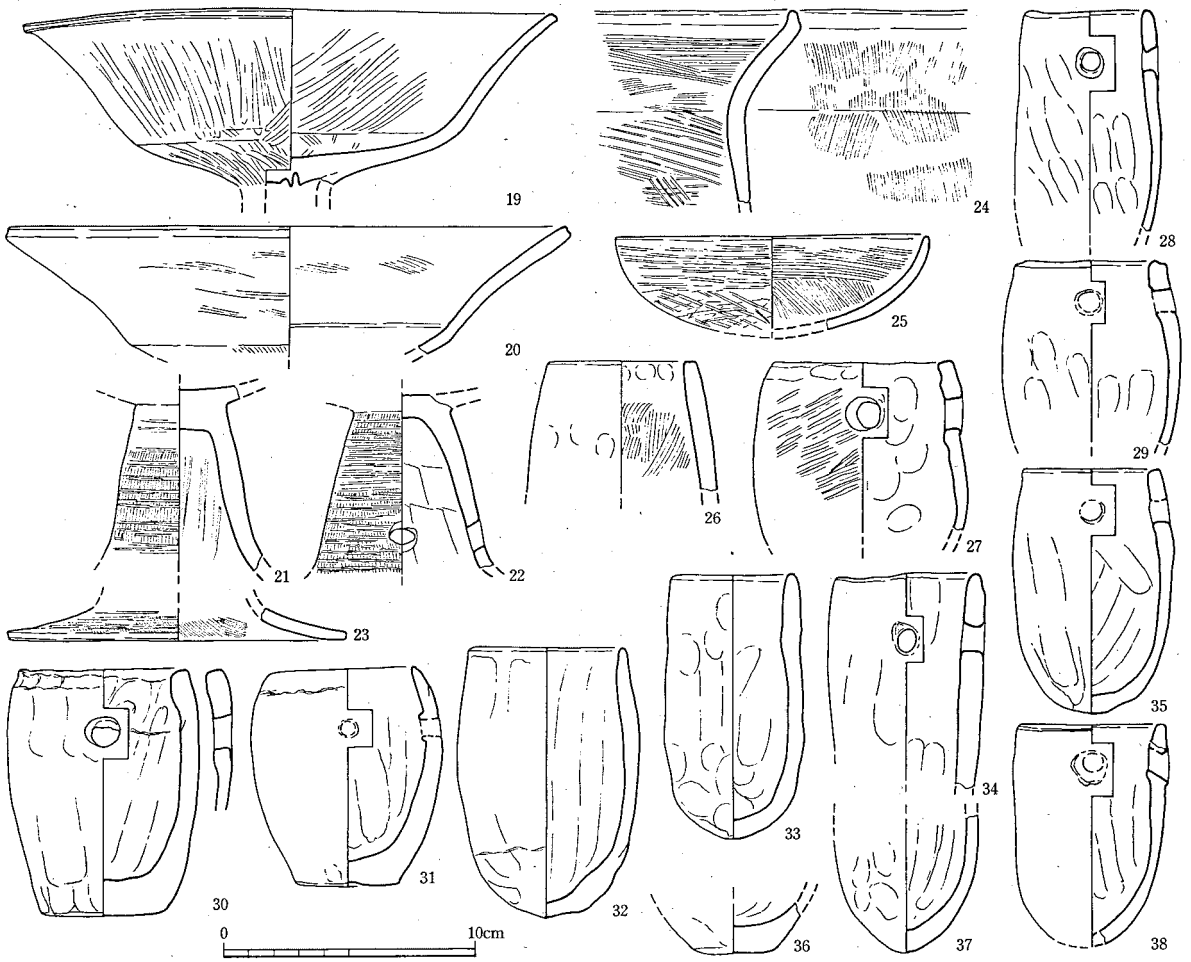
27 ～ 31 は 26 号住居跡周辺の遺構面・撹乱の出土品。27・28 は高杯脚裾部。29 は精製脚付鉢脚部か。30 は山陰系大形鉢口縁部。31 は山陰系鼓形器台口縁部。

第51表　25号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
100-1		住25覆土	畿内系直口壺	口径136、残高38	粘土細、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	外斜めハケ、内横ナデ。	1／8		651
100-2		住25覆土下部	畿内系直口壺	口径218、残高38	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／8		657
100-3		住25覆土上面	山陰系二重口縁壺	口径142、残高64	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁部直立し、端部内傾面なす。頸外縦ハケ、胴内ナデ痕、口縁内外ナデ。	1／6		650
100-4	41	住25覆土南部一括	山陰系二重口縁壺	口径176、頸径116、残高168	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	淡黄白褐色	肩部に直線沈線文。口縁内外ナデ、胴外ハケ、胴内ケズリ。	1／6		643
100-5	41	住25上面	小形丸底壺	口径112、頸径104、胴径112、器高81、胴高55	粘土細、1mm長石・クサリ礫少	良好	淡橙褐色	口縁部かすかに内湾。胴外下部ケズリ、胴外上部ハケ後外横ミガキ。口縁内横ナデ、胴内ナデ。	口縁全周		645
100-6		住25覆土下部	小形甕	口径124、残高43	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い、器肉黒変	橙褐色	胴外縦ハケ、口縁内外ナデ、胴内指頭圧痕残る丁寧なナデ。	1／8		660
100-7	41	住25 no. 1	布留系甕	口径138、頸径108、胴径182、残高102	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄褐色	肩部に工具刺突の列点文施文し、端部をつまみ上げ。胴外縦ハケ後横ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	2／3	外面煤厚く付着	641
100-8		住25床面下層	布留系甕	口径146、残高90	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	肩に5条1単位の櫛描波状文施文し、口縁微かに内湾。胴外縦ハケ後横ハケ、口縁内横ハケ後口縁内外ナデ。	1／8	外面煤付着し、特に口縁下に厚い	654
100-9		住25覆土上面	布留系甕	口径156、頸径118、残高82	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端強くつまみ上げ。胴外ハケで頸外にハケ工具静止痕残。頸内横ハケ、ケズリ工具当たりのような条痕残。	1／4	外面薄く煤付着	678
100-10		住25覆土	布留系甕	口径156、残高29	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い、口縁端黒斑	黄白褐色	内外横ナデ。	1／8		679
100-11		住25覆土上面	布留系甕	口径166、残高27	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い、口縁外帯状黒斑	外褐白色、内淡黄褐色	内外横ナデ。	1／4		649
100-12		住25覆土下部	布留系甕	口径168、残高33	粘土粗、1mm石英・長石極少	良好、内面黒斑	外淡褐色、内淡黄褐色	口縁内外ナデで、頸外にハケ工具当たり残。	1／6		659
100-13		住25覆土上面	布留系甕	口径178、残高33	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い、口縁内外黒変	淡黄褐色	内外横ナデ。	1／6		673
100-14		住25覆土下部	布留系甕	口径192、残高35	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	黄白褐色	口縁の内湾強く、口縁端つまみ上げ。頸外ハケ工具当たり？残。内外ナデ。	1／8		658
100-15		住25覆土	布留系甕	口径202、残高30	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好、口縁端少黒斑	外淡黄褐色、内淡褐色	内外ナデ。	1／12	小片のため径不安	652
100-16	41	住25 no. 1	布留系甕	口径156、頸径116、胴径210、残高147	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内暗灰褐黄色	肩部に沈線直線文。口縁外傾強く、口縁端つまみ上げ、端面沈線条に凹む。口縁内横ハケ後口縁内外ナデ。	口縁全周、胴1／8		644
100-17		住25 no. 1	布留系甕	口径182、残高80	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好、頸外小黒斑	外淡黄褐色、内淡褐色	胴の張りが強い。肩部に沈線直線文。口縁端つまみ上げ。胴外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	1／4		642
100-18	42	住25 no. 1	布留系甕	口径178、頸径140、残高127	粘土細、1mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	肩部に工具刺突による列点文。口縁端を外につまみ出す。	1／4	口縁内外に成形後化粧土をかけてような痕跡がある	639
101-19	42	住25上面	高杯杯部	口径206、残高69	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	黄褐色～淡黄褐色	杯底下部に2個所軸痕残。外ハケ後縦ミガキ、内ハケ後ミガキ（摩滅）。	ほぼ全周		648
101-20		住25覆土	高杯杯部	口径218、残高51	粘土細、1～3mm石英少	良好、口縁端少黒斑	黄褐色	底・口縁境の屈曲部内微かな段。外板ナデ（摩滅）、内ハケ（摩滅）。	1／2	口縁端外化粧土状に赤褐色	667・668
101-21		住25覆土下部	高杯脚部	残高73	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内板工具ナデ。	全周		676
101-22		住25覆土上面	高杯脚部	残高78	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い	橙褐色～暗褐色	0・4時2方向に乾燥前穿孔残。外縦ハケ後横ミガキ、内板ナデ。	3／4		680
101-23		住25覆土	高杯脚部	裾径132、残高13	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	外暗褐黄色、内褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	1／10		674
101-24		住25覆土上面	大形外反口縁鉢	残高76	粘土細、1～3mm石英少	良好、口縁内黒斑	外黄白褐色、内淡黄褐色	口縁端上に拡張。外縦ハケ、口縁内横ハケ、胴内粗いハケ。	小片		646
101-25		住25覆土上面	直口鉢	口径122、残高37	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	橙褐色	外下部ケズリ後外ミガキ、内ハケ。	1／2		647
101-26		住25覆土下部	タコ壺	口径50、残高51	粘土粗、1～3mm石英少	良好	灰黄褐色	外ナデ、内縦ハケ後口縁部ナデ。	1／4		666
101-27		住25覆土下部	タコ壺	口径60、残高77	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	外タタキ、内ナデ。	1／2		663
101-28		住25覆土下部	タコ壺	口径46、残高88	粘土粗、1～3mm石英少	良好	暗褐色	内外ナデ。	1／2		661
101-29		住25床面下層	タコ壺	口径46、残高73	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	褐色	内外ナデ。	1／2		653
101-30	42	住25床面下層	タコ壺	口径64、底径48、器高97	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐灰色	内外ナデ。	完形		620
101-31	42	住25覆土上部	タコ壺	口径53、底径40、器高86	粘土細、1～3mm石英・黒雲母少	良好	黄褐色～淡黄褐色	底部外面中央凹む。口縁外接合痕？残る。内外ナデ。	完形		670
101-32	42	住25覆土上面	タコ壺	口径60、器高106	粘土細、1mm石英・長石少	良好	褐色	内ナデ、外ケズリ後ナデ。	1／2		677
101-33		住25 no. 1	タコ壺	口径46、器高102	粘土粗、1～3mm石英多	良好	褐色	内外ナデ。	底全周、口縁1／4		640
101-34		住25覆土	タコ壺	口径54、残高84	粘土粗、1～5mm石英・長石少	良好	暗褐色	内外ナデ。	2／3		625
101-35	42	住25覆土下部	タコ壺	口径46、器高96	粘土粗、1mm石英・クサリ礫少	良好	赤褐色	内外ナデ。	1／2		662



第 100 図　25 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）



第 101 図　25 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

第 52 表　25 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
101-36		住 25 覆土上部	タコ壺	残高 20	粘土細、1～3 mm 石英・長石少	良好	褐色～暗褐色	内外ナデ。	全周		672
101-37		住 25 覆土下部	タコ壺	残高 54	粘土粗、1～3 mm 石英・長石少	良好	褐色	内外ナデ。	全周		671
101-38		住 25 覆土下部	タコ壺	口径 54、残高 87	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／3		665

27 号竪穴住居跡（第 106 図）

3 区の西南部、調査区壁際にあり、下層には 35 号竪穴住居跡が検出された。西側を大きく撹乱により失うが、方形竪穴住居跡と考えて遺構検出を行った。覆土は均質な褐色細砂。

現状では主軸を N－17°－W に向け、残存する範囲は南北 3.1m、東西 3.7m を測る。検出当初、住居跡の輪郭は明瞭で、北西隅にカマドの構築土と類似する黄褐色でやや粘質を帯びた細砂が分布していた。しかしながら、掘り下げると深さ 10cm 前後で床面が現れ、北西隅の黄褐色粘質細砂もカマドとなる確証も得られなかった。また、床面にはピットも検出されず、確実な炉跡もない。そのため住居跡と断定するには若干の不安を覚える遺構である。

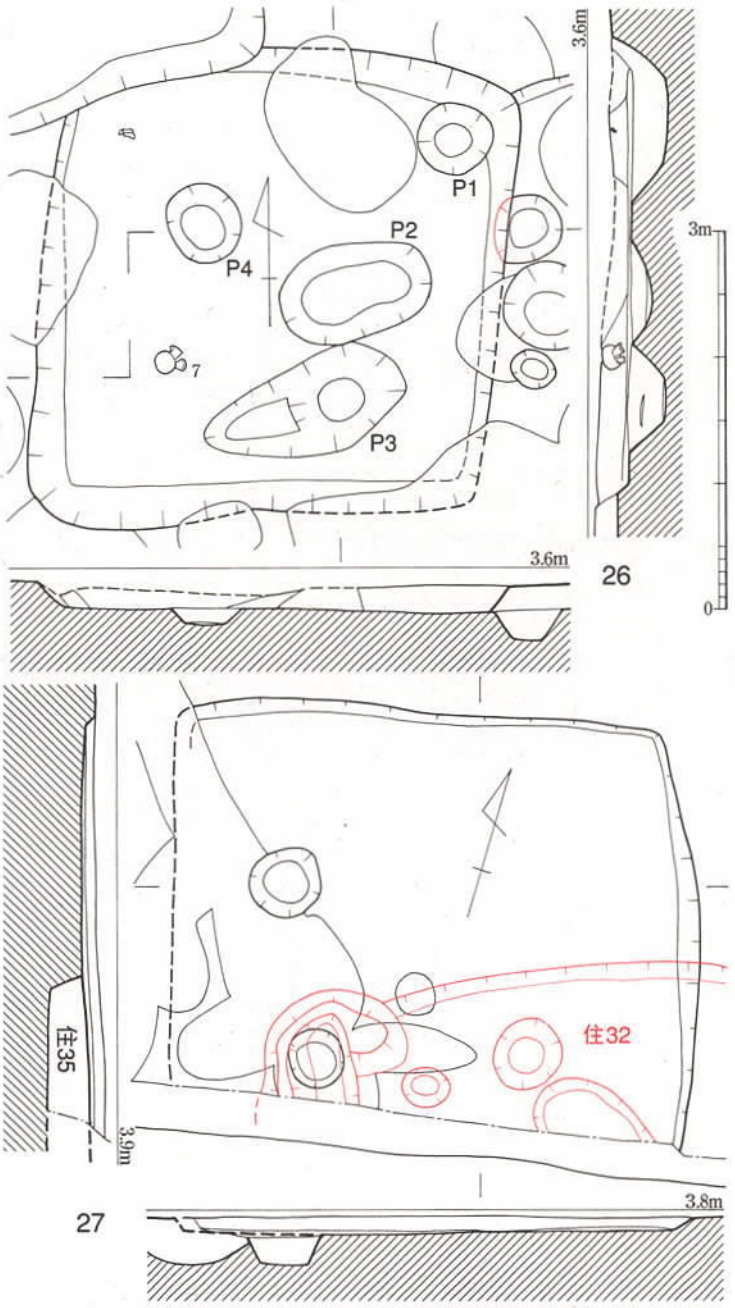
出土遺物（図版 42、第 106 図、第 56 表）　1 は高杯脚裾、2 は山陰系器台脚裾片でいずれも覆土から出土した。3 は床面出土品で、穿孔部は遺存しないが、タコ壺片と考えられる。

4 は 27 号住居跡北側の遺構面から出土した小形丸底壺口縁部で、短く直立する口縁が特徴的。

28 号竪穴住居跡（図版 20、第 105 図）

調査区の中央やや西、25 号竪穴住居跡の北西に位置する。25 号住居跡の掘込みにより南東隅を失い、中央部に大きな撹乱が存在していたため、平面形の検出に苦慮した。当初は灰褐色細砂の堆積する東半部のみを住居跡と捉えていたが、西側に位置する粗砂の堆積層も一連の住居跡ととらえることができた。そのため、輪郭はやや不安を覚えるが、結果的にはほぼ東西に長軸を向けた長方形の竪穴住居跡と復元された。

以上のように発掘調査の経過には不安があるが、東西方向の長さ 5.4m、南北幅 3.1m 前後に復元できる。壁は良好な個所で 30cm 程の高さが遺存する。床面では西壁下部に長さ 1.6m 程のやや大形の土坑状ピットがあり、中央部にも直径 0.3 ～ 0.7m のピットが集中するが、明確な炉跡は検出できなかった。出土土器は少ない。



第 102 図　26・27 号竪穴住居跡実測図（1／60）

出土遺物（第 106 図、第 56 表）

5・7 は畿内系直口壺である。7 は口縁部が短く内傾する小形の二重口縁壺で山陰系か。

8 は 28 号住居跡西部の覆土から出土した布留系甕。

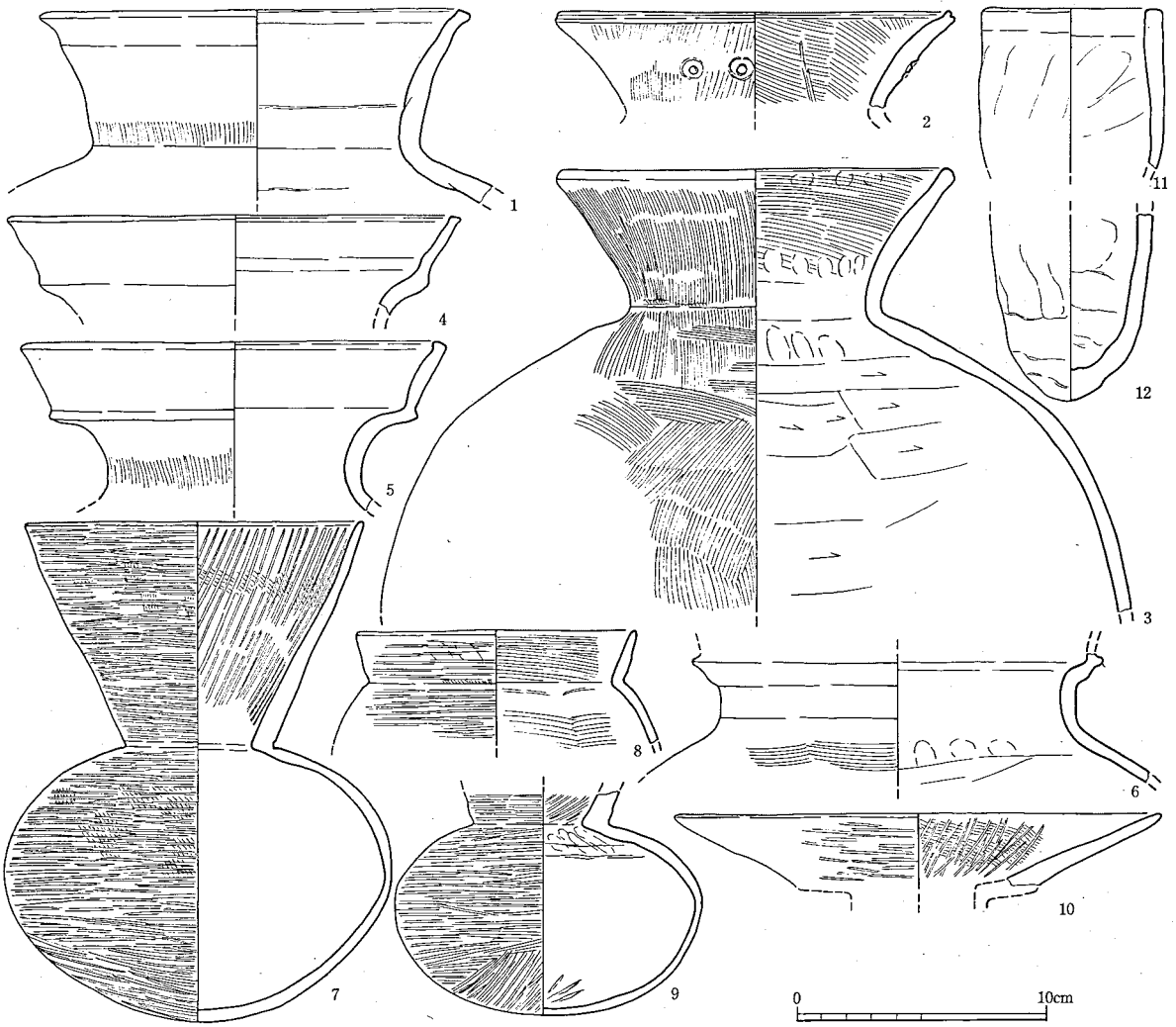
9 ～ 12 は高杯小片であり、9 は 28 号住居跡内の撹乱、10 は 28 号住居跡西部の覆土から出土した。9 は杯口縁部片、10 は杯底部片、11 は杯屈曲部片、12 は脚裾片。

13・14 は精製の外反口縁鉢。15 は直口縁鉢であるが、外面の太い縦ミガキの調整から山陰系と推測される。

16 は脚付鉢の脚状部片で、外面の縦ミガキが特徴的である。

30 号竪穴住居跡（図版 20、第 107 図）

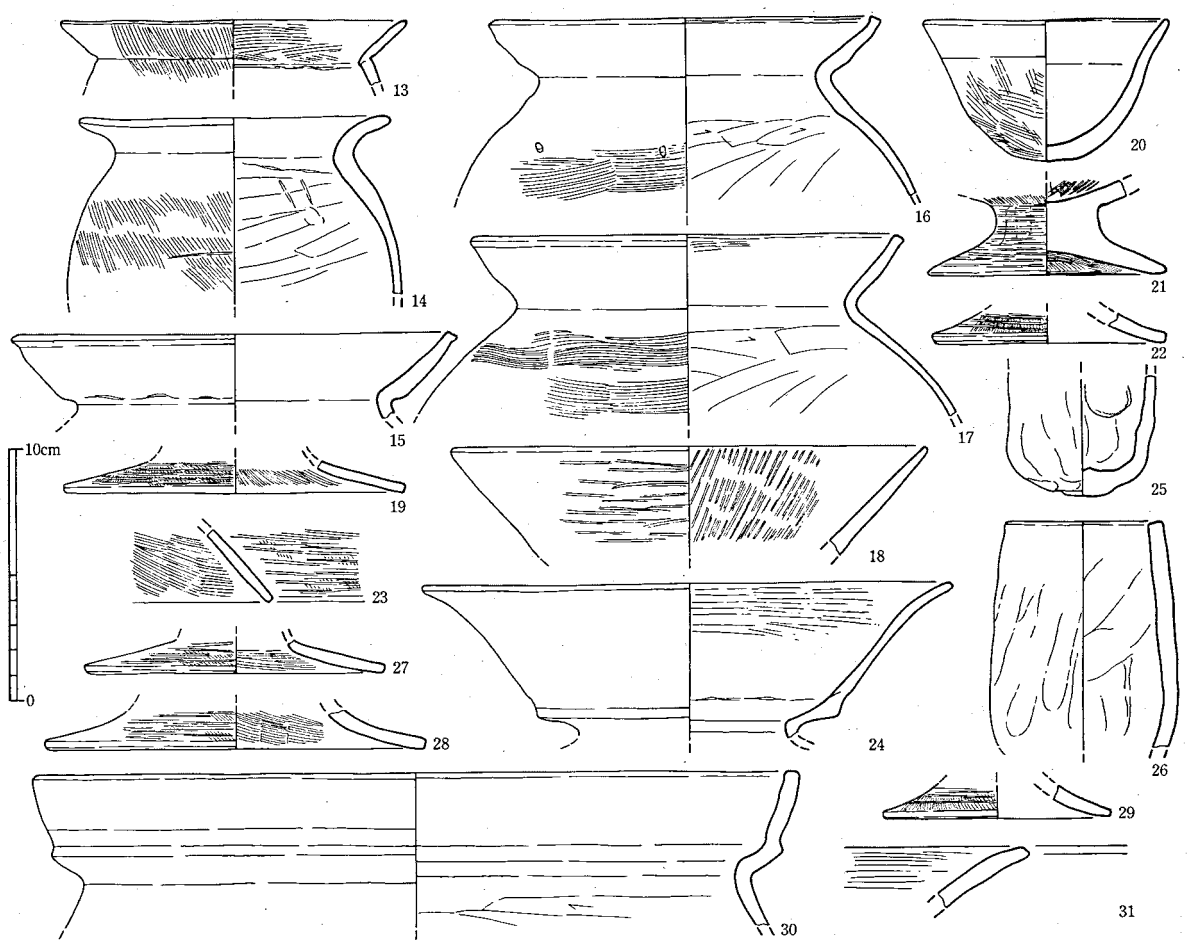
3 区の中央、16 号・17 号竪穴住居跡の南に位置する。長軸を N － 87° － W に向けた長方形竪



第 103 図　26 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

第 53 表　26 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
103-1		住 26	畿内系直口壺	口径 162、残高 77	粘土粗、1～3㎜石英少	良好	褐灰色	口縁端外につまみ出し、内凹む。外ナデで、頸外ハケ残。内ナデ。頸の上、下にそれぞれ1個所接合痕残。	口縁1／8、胴1／4		1024
103-2		住 26 覆土	畿内系直口壺	口径 154、残高 38	粘土細、1～3㎜石英少	良好	褐色	口縁外竹管文2個所、内線刻状の沈線1条残。口縁端部沈線状に凹む。外縦ハケ、内斜めハケ。	1／3		1025
103-3		住 26 覆土	畿内系直口壺	口径 154、頸径 100、残高 126	粘土粗、1～3㎜石英多	やや甘い	外淡黄褐色、内淡褐黄色	胴外斜めハケ、口縁外縦ハケ。口縁内斜めハケで、水平に指頭圧痕残。胴内指頭圧痕後ケズリ。	口縁1／4、胴1／8		1023
103-4		住 26 覆土	山陰系二重口縁壺	口径 172、残高 39	粘土粗、1～3㎜石英少	良好	外褐灰色、内淡黄褐色	口縁部外傾し、端部外にわずかにつまみ出し。内外ナデ。	1／8		1022
103-5		住 26 覆土	山陰系二重口縁壺	口径 162、残高 67	粘土粗、1㎜石英・長石多	やや甘い、器肉中央黒変	外淡黄褐色、内淡褐白色	頸外縦ハケ後内外ナデ。	1／3		1021
103-6		住 26 上面	山陰系二重口縁壺	頸径 142、残高 51	粘土粗、1～3㎜石英・長石少	良好	外黄褐色、内灰褐色	胴肩横ハケ、頸内外ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／6		690
103-7	42	住 26 no. 1	畿内系中形直口壺	口径 132、頸径 59、胴径 154、器高 199、胴高 111	粘土粗、1～3㎜石英・長石少	良好、黒斑なし	橙褐色、胴下部外一部淡黄褐色	口縁直線的に伸び、胴偏球形。口縁外縦ハケ、胴外斜めハケ後横ミガキ。口縁内ハケ後暗文ミガキ。胴内ハケ。	口縁7／8、胴完存。	胴内ハケ完形のためできず。	682
103-8		住 26 覆土	中形短頸直口壺	口径 130、頸径 123、残高 44	粘土細、1～3㎜長石・クサリ礫少	やや甘い	黄橙褐色	頸外ハケ・口縁外指頭圧痕後外横ミガキ。口縁内ハケ、頸下内ナデ（ハケ当たり残）、胴内ハケ。	1／8		1033
103-9	42	住 26	畿内系中形直口壺	頸径 74、胴径 122、残高 80	粘土細、1～3㎜石英少	やや甘い	黄橙褐色	外ミガキ、口縁内斜めミガキ。胴上部内指頭圧痕・接合痕、底部内工具痕残すが、胴内はナデ仕上げ。	胴3／4、口縁1／2		1020
103-10		住 26 覆土	畿内系二重口縁壺	口径 192、残高 31	粘土粗、1㎜石英少	良好	褐色	口縁大きく開き、端部シャープ。外横ミガキ、内斜めハケ後暗文ミガキ。下部は接合面で剥離。	1／10		1031
103-11		住 26 覆土	タコ壺	口径 60、残高 63	粘土粗、1～3㎜石英多	やや甘い	褐色	内外ナデ。	1／4		1035



第 104 図　26 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

第 54 表　26 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
103-12		住 26 覆土	タコ壺	残高 74	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英多	良好	褐色	内外ナデ。	底全周		1034
104-13		住 26 覆土	五様式系甕	口径 136、残高 27	粘土細、1 mm 石英・長石少	良好	褐灰色	器壁薄く、口縁直線的に外傾。外縦ハケ、口縁内横ハケ、胴内ナデ。頸内に接合痕残。	1／8		1028
104-14	42	住 26 no. 2	五様式系甕	口径 120、頸径 94、胴径 130、残高 71	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・長石多	やや甘い	褐黄色	口縁強く外反。胴外ハケ。胴内板ナデで仕上げるが、頸下に接合痕、絞り痕、指頭圧痕残。	1／2		683
104-15		住 26 覆土	布留系甕	口径 166、残高 34	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・長石少	良好	褐色	口縁小さく外につまみ出す。内外ナデで、頸外に蛇行する鰭残る。	1／8	外煤厚く付着	1027
104-16		住 26 覆土	布留系甕	口径 146、残高 71	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	外灰黄褐色、内黄白褐色	肩工具刺突列点文。口縁端つまみ上げ。胴外横ハケ、胴内ケズリ。	1／4	胴外面、割れ口に煤付着。	1026
104-17		住 26 覆土	布留系甕	口径 164、残高 72	粘土細、1 ～ 3 mm 石英少	良好	外淡灰黄褐色、内淡褐色	肩櫛描直線文。口縁小さく外につまみ出す。胴外横ハケ、胴内ケズリ。	1／8	口縁外面褐変、胴外面煤付着	685
104-18		住 26 覆土	高杯口縁部	口径 186、残高 41	粘土細、1 mm 石英・長石極少	良好	淡橙褐色	口縁直線的に開く。外横ミガキ（摩滅）、内斜め暗文風ミガキ（摩滅）。	1／8		1032
104-19		住 26 覆土	高杯脚裾	裾径 132、残高 13	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	1／8		1078
104-20	42	住 26 上面（P 308）	直口鉢	口径 96、器高 56	粘土粗、1 ～ 5 mm 石英・長石少	良好	褐灰色	器形深く、口縁部わずかに外反気味。胴外斜めハケ、口縁外～内ナデ。	口縁 1／4、胴完形		2284
104-21		住 26 覆土	脚付鉢脚部	裾径 94、残高 38	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・長石少	良好	暗褐色	鉢・脚の接合部が厚い。脚外ハケ？板ナデ？後横ミガキ。鉢外ハケ、鉢内ミガキ、脚内ハケ。	2／3		1030
104-22		住 26 覆土	脚付鉢脚部	裾径 92、残高 13	粘土細、1 ～ 3 mm 石英少	良好	淡橙褐色	外斜めハケ後ミガキ、内ナデ。	1／4		1079
104-23		住 26 P 4	小形器台脚裾	残高 29	粘土細、1 mm 長石少	良好	淡橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	小片		691
104-24		住 26 覆土	山陰系鼓形器台	口径 206、残高 61	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英・クサリ礫少	良好	淡褐色	外横ナデ、内上部横ミガキ、下部ケズリ後ナデ？。括れ部上突出部内に接合痕残。	括部 1／4、口縁 1／8		1029
104-25		住 26 覆土	タコ壺	残高 49	粘土細、1 ～ 3 mm 石英・クサリ礫少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	底全周		1037

穴住居跡である。輪郭は比較的、整っているが、南西部角は撹乱により失われている。東西長さ 4.5m、南北幅 2.9 ～ 3.1m を測り、壁の遺存状況の良好な個所で高さ 20cm 程である。床面の中央～東部で多くのピットが検出されたが、炉跡・主柱穴は不明である。住居跡の東部の床面からやや浮いて、まとまって土師器が出土した。これらの土器も含めて、出土遺物の一括性は比較的、良好と思われる。

Ｐ１は褐灰色細砂、Ｐ２～４は暗褐色細砂、Ｐ５・６は褐灰色細砂を覆土とする。Ｐ７・８は炭粒を含んだ褐色細砂を覆土とし、近世と推測される。

出土遺物（図版 42、第 108・109 図、第 57・58 表）　16・22・24・30 は床面下層からの出土品で、他は覆土及び床面からの出土である。

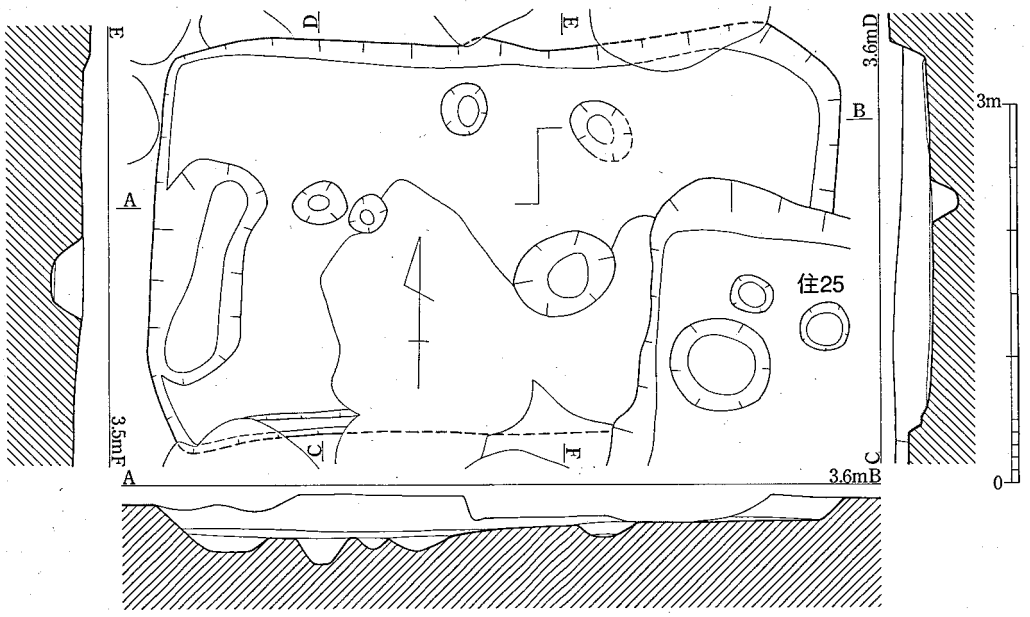
１～７は壺で、１は在地系の複合口縁壺、２～５は山陰系二重口縁壺。１は破損面に口縁部接合痕が観察でき、３は肩部に櫛描直線文を施文する。６は口縁部外面に縦ミガキを施した小形の山陰系二重口縁壺である。７・８は壺の胴～底部片である。７は小さく突出した底部を形成し、８はやや凸レンズ状の底部で自立する。９は外面にミガキを施し、14 号竪穴住居跡出土品のような小形の

第 55 表　26 号竪穴住居跡出土土器観察表（３）

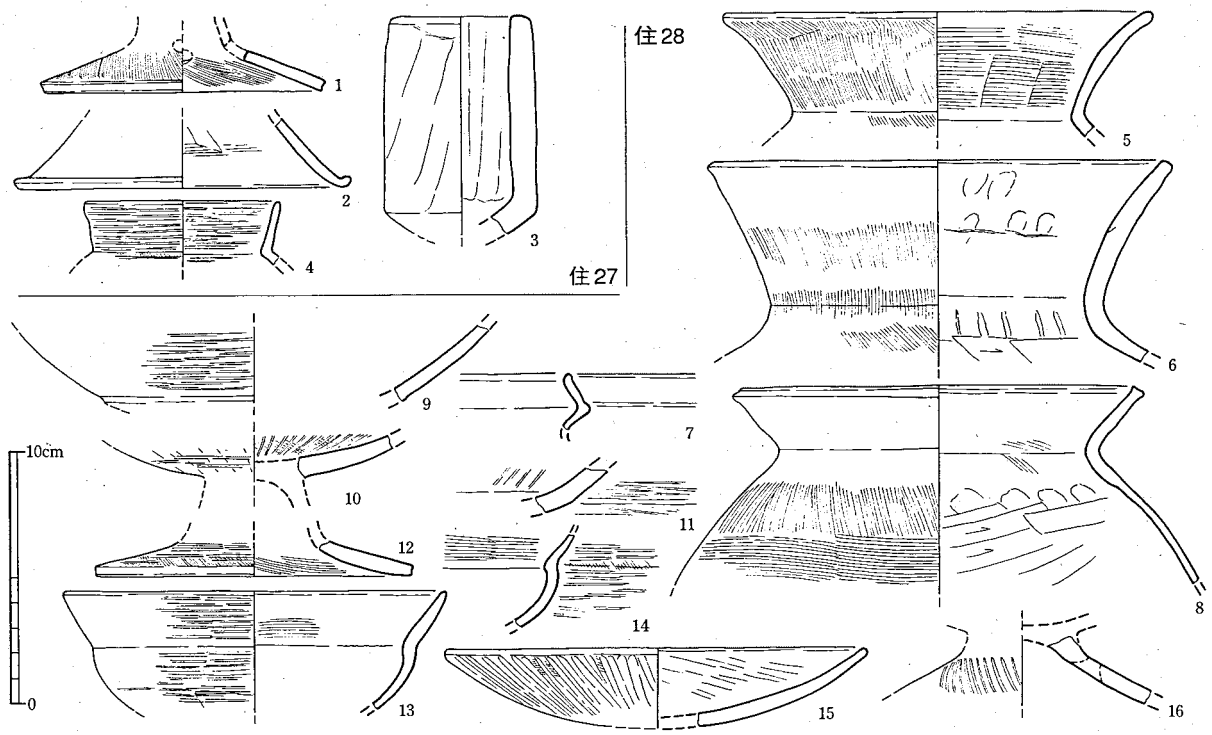
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
104-26		住 26 覆土	タコ壺	口径 60、残高 90	粘土粗、１～３mm 石英少	良好	明褐色	内外ナデ。	１／３		1036
104-27		住 26 付近遺構面	高杯脚裾	裾径 118、残高 13	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内横ハケ。	１／８		688
104-28		住 26 付近遺構面	高杯脚裾	裾径 128、残高 15	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内横・斜めハケ。	１／８		687
104-29		住 26 東遺構面	脚付鉢脚部	裾径 88、残高 13	粘土細、１～３mm 石英・長石少	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内ナデ。	１／４		684
104-30		住 26 東遺構面	山陰系大形鉢	口径 292、残高 61	粘土細、１～３mm 石英・長石少	良好、器肉黒変	外黄白褐色、内褐白色	口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	１／８		689
104-31		住 26 内撹乱	山陰系鼓形器台	残高 25	粘土粗、１mm 石英・長石少	良好	外褐灰色、内暗褐色	外横ナデ、内ケズリ後横ミガキ。	小片		626

第 56 表　27・28 号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
106-1		住 27 覆土	高杯脚裾	裾径 106、残高 15	粘土粗、１～３mm 石英・クサリ礫少	良好	淡黄褐色	脚端部角張る。外面ハケ後ナデ、内面ハケ。１ケ所に半乾燥時穿孔残。	１／８		176
106-2		住 27 覆土	山陰系器台脚裾	裾径 126、残高	粘土やや粗、１mm 石英・長石少	やや甘い、器肉黒変	褐白色	外面摩滅、裾端内面横ナデ、裾上部ハケ後ケズリ。	１／８		177
106-3	42	住 27 床面	タコ壺	口径 40、残高 85	粘土粗、１～２mm 長石・石英少	良好	褐色	口縁端部角張り、内外板ナデ。	１／２		211
106-4		住 27 北遺構面	小形丸底壺	口径 74、残高 25	粘土精良、1mm 石英少	良好	暗褐色	口縁短く直立。内外横ミガキで、頸部外面にミガキ前縦ハケ残る。	１／６		175
106-5		住 28 覆土下部	直口壺	口径 164、残高 48	粘土細か、１～３mm 石英・長石多	良好	橙褐色	口縁大きく外反、口縁端丸い。外縦ハケ、口縁内ハケ後ナデ、頸部内ナデ。	１／４		695
106-6	42	住 28 上面	直口壺	口径 176、残高 78	粘土粗、１～３mm 石英・クサリ礫少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	外面縦ハケ後横ナデ、口縁内面ナデ、胴部内面ケズリ。頸部内に絞り痕残。	口縁２／３、胴１／８		699
106-7		住 28 覆土	小形二重口縁壺	残高 20	粘土やや粗、１mm 石英少	良好	褐白色	口縁部が短く内傾し、端部をわずかにつまみ上げ。内外横ナデ。	小片		692
106-8		住 28 覆土	布留系甕	口径 150、残高 78	粘土粗、１～３mm 石英・クサリ礫少	甘い	淡黄褐色～黄白褐色	口縁部わずかにつまみ上げ。胴部外面縦ハケ後横ハケ、口縁内外横ナデ、胴部内面明瞭な指頭圧痕後ケズリ。	１／３		698
106-9		住 28 内撹乱	高杯杯口縁部片		粘土精良、１～３mm 石英少	良好	橙褐色	外面横ミガキ、内面摩滅。下端は屈曲部で折損。	１／12		778
106-10		住 28 覆土	高杯杯底部片		粘土精良、１～３mm 石英・クサリ礫少	良好	淡黄橙褐色	内面斜めハケ後放射状ミガキ。外面ケズリ後ミガキ。	１／６		779
106-11		住 28 覆土	高杯杯屈曲部片		粘土やや粗、１～２mm 石英少	良好	淡橙褐色	外面横ミガキ、内面暗文ミガキ。	小片		696
106-12		住 28 上面	高杯脚裾片	裾径 122、残高 13	粘土粗、1mm 長石・石英少	良好	橙褐色	外面斜めハケ後横ミガキ、内面ハケ。	１／６		781
106-13		住 28 覆土	外反口縁鉢	口径 146、残高 46	粘土精良、１～３mm 石英・長石少	良好	橙褐色	胴下部外面ケズリ後外面ミガキ、口縁内面ハケ後ナデ。	１／８残	傾き不安	693
106-14		住 28 覆土	外反口縁鉢		粘土精良、１～３mm 石英・長石少	良好	橙褐色	胴下部外面ケズリ後外面ミガキ、口縁内面ハケ後ナデ。頸部外面ハケ残。	小片		694
106-15		住 28 上面	直口縁鉢	口径 160、残高 31	粘土粗、１～３mm 石英・長石少	良好、外面黒斑	外淡黄褐色、内淡褐白色	器高の低い皿状の器形をなす。外面斜めハケ後太めミガキ。内面ミガキが摩滅？。	１／４	外面の太い縦ミガキから山陰系か	697
106-16		住 28 覆土下部	脚付鉢脚部	残高 27	粘土精良、１～３mm 石英・長石少	良好	橙褐色	脚上部破片で、半乾燥時の穿孔がわずかに残る。内外横ナデ後外面縦ミガキで仕上げる。	１／４		780



第 105 図　28 号竪穴住居跡実測図（1／60）



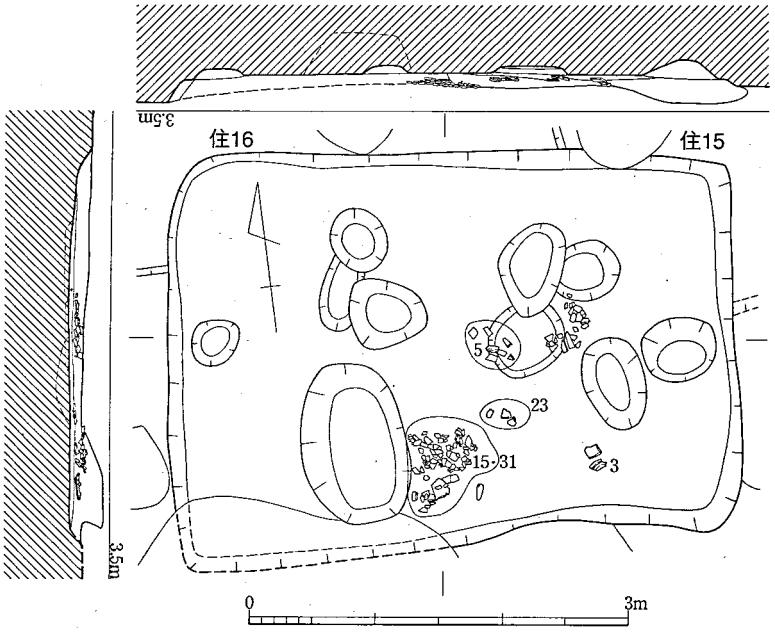
第 106 図　27・28 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）（1～4：住 27　5～17：住 28）

脚付壺の脚裾部になると推測される。

10・11 は在地系の甕口縁部と考えて図化した。ただ、10 は大形鉢の口縁部となる可能性も否定できない。12～15 は布留系の甕である。12 は小形で、13 は口縁外面に接合痕のような皺が認められる。15 は肩部に列点文を施文し、胴部外面の調整は肩部縦ハケ→肩部横ハケ→胴下部縦・斜めハケの切合いが観察できる。

16・18 は高杯口縁部片、17 は高杯脚部片である。17 は 2 ケ所に半乾燥時に穿孔を施す。19 は外面縦ハケ後、縦ミガキで仕上げたもので、脚付鉢の脚裾部片か。

20～22 は外反口縁鉢で、20・21 はミガキ仕上げの精製品であるが、22 は粗いハケメを残した



第 107 図　30 号竪穴住居跡実測図（1／60）

ままの粗製品で、器形も特異である。23 ～ 25 は直口鉢。23・25 は外面に粗いミガキを施し、23・24 は内面の縦ミガキが特徴的である。26 は大形の外反口縁鉢口縁部、27 は精製脚付鉢の脚裾片、28 は山陰系二重口縁大形鉢の底部片と推測される。

29 は外面縦ミガキから、30 は器形及び裾内面のケズリから山陰系器台と考えられるが、30 は屈曲部下の稜が甘く、外面に横ミガキを施し異質である。31 は内外の器表摩滅し、ミガキが観察されないが、畿内系小形器台脚裾か。

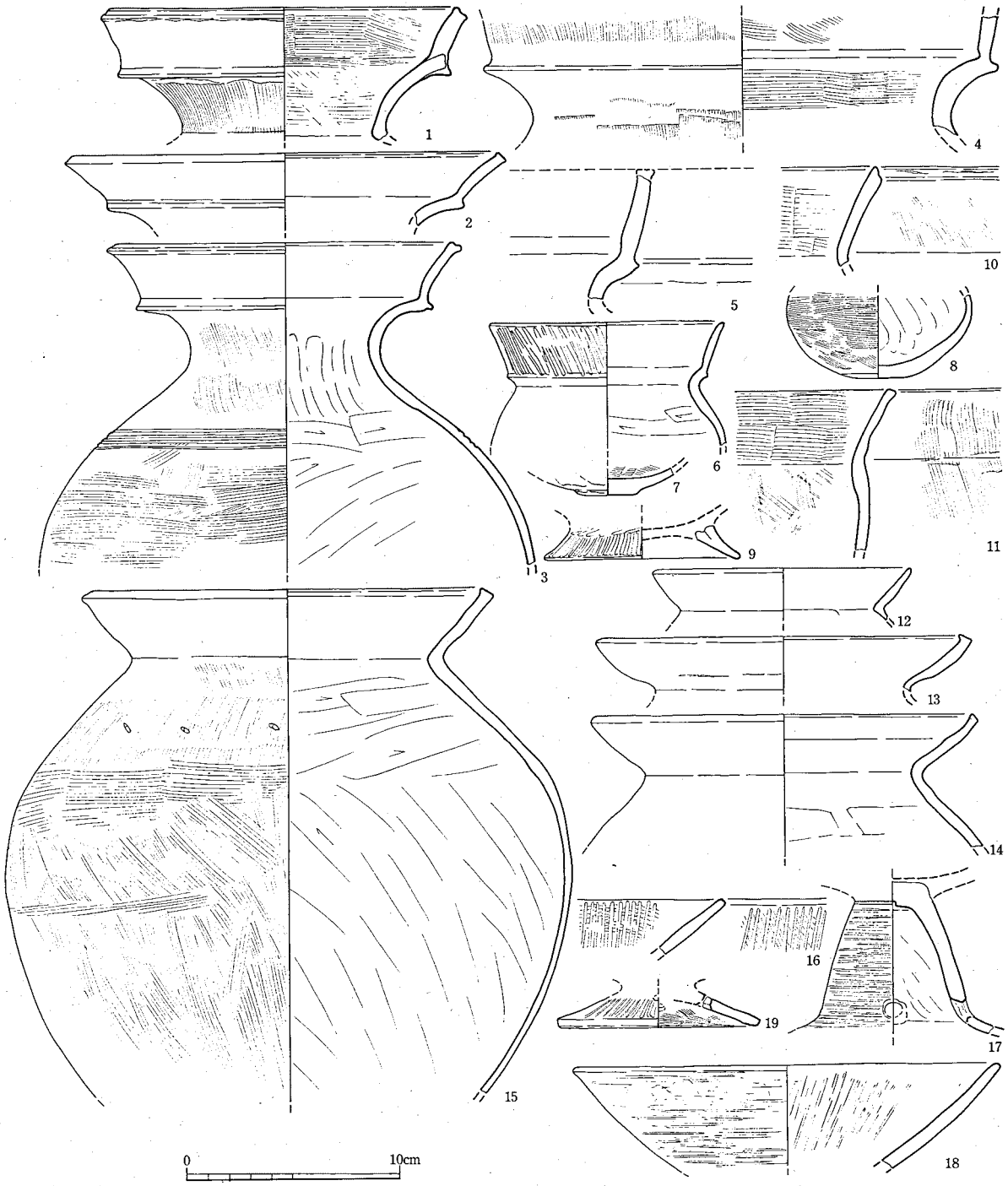
32 は朝鮮半島系土器の壺胴部片であるが、天地・傾きは不安。

31 号竪穴住居跡（図版 20、第 110 図）

3 区の西南部に位置する。中央部を 19 号溝が北東－南西方向に横断し、西部には撹乱が多い。そのため、輪郭の検出に苦慮し、歪な平面形を呈しており、溝の北と南では、一連の住居跡となるか確信はもてなかった。主軸を N － 16° － E に向けた方形を呈するが、南東部が不自然に広がっ

第 57 表　30 号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
108-1		住 30 覆土上部	在地系複合口縁壺	口径 162、残高 62	粘土やや粗、1～3 mm 石英少	良好	外淡黄褐色、内褐白色	口縁外横ナデ、多はハケ。口縁端部わずかに凹み、破損面に擬口縁の接合観察できる。	1／4		719
108-2		住 30 覆土	山陰系二重口縁壺	口径 200、残高 35	粘土かなり粗、1～3 mm 石英少	良好	外淡黄白褐色、内褐灰色	口縁端部わずかにつまみ上げ。外面横ナデ、内面摩滅。	1／8	小片のため傾き不安	708
108-3		住 30 床面	山陰系二重口縁壺	口径 154、頸部径 88、残高 152	粘土やや粗、1～3 mm 石英多	やや甘い。胴・口縁外黒斑	淡褐色～褐黄色	眉部に櫛描直線文。口縁内外横ナデ、頸部内面ナデ上げ、胴～頸部外面縦ハケ後横ハケ。	1／4		704
108-4		住 30 覆土	山陰系二重口縁壺	残高 55	粘土かなり粗、1～3 mm 石英少	良好	黄灰褐色	大形品。内外ハケ後横ナデ。	1／6		715
108-5		住 30 床面	山陰系二重口縁壺	残高 58	粘土粗、1～3 mm 石英少	やや甘い	褐灰色	内外横ナデ。口縁端部欠損。	小片		701
108-6		住 30 覆土	小形山陰系二重口縁壺	口径 108	粘土粗、1～3 mm 石英少	やや甘い	外灰褐色、内褐白色	口縁端部丸味。胴部外面摩滅、口縁外面縦ミガキ、口縁内面ナデ、胴内面ケズリ。	1／6		714
108-7		住 30 覆土	壺底部片	底径 25、残高 13	粘土やや細、1 mm 大長石・石英少	やや甘い	外黄白褐色、内淡灰褐色	外面板ナデ、内面ハケ後ナデ。	全周		716
108-8		住 30 覆土	壺胴部片	胴最大径 88、残高 40	粘土やや細、砂粒ほとんど含まず	良好	外淡褐色、内暗灰褐色	底部自立。外面ハケ、内面・底外面ナデ。	ほぼ全周		717
108-9		住 30 覆土	脚付壺脚部？	脚裾径 92、残高 15	粘土細か、1 mm 大石英・長石わずかに混	良好	褐色	脚裾部のみの破片。脚外面縦ミガキ、脚胴接合部外面斜めミガキ、内面横ナデ。胴との接合面から剥離。	1／4		721
108-10		住 30 覆土	在地系甕口縁？	残高 47	粘土やや粗、1～3 mm 石英少	良好	淡褐黄色	内外ハケ後横ナデ。端部面をなし中央凹む。	小片	鉢の口縁となる可能性あり	705
108-11		住 30 覆土	在地系甕	残高 75	粘土かなり粗、1～5 mm 石英多	良好	淡褐色	外面縦ハケ、口縁内面横ハケ、胴内面斜めハケ。	小片	傾き不安	723
108-12		住 30 覆土	布留系甕	口径 118、残高 25	粘土粗、1 mm 長石・石英少	良好	淡黄褐色	小形品で、口縁部は直線的に外傾し、端部丸い。内面横ナデ、外面摩滅。	1／6		707
108-13		住 30 覆土	布留系甕	口径 166、残高 24	粘土粗、1～3 mm 長石・石英多	良好	灰褐色	口縁端部つまみ上げ。口縁外面下部に接合痕のような細い皺。内外横ナデ。	1／4		706
108-14		住 30 覆土	布留系甕	口径 176、残高 63	粘土やや粗、1～3 mm 石英・クサリ礫少	良好	淡褐黄色	口縁端近く内面強く凹む。外面～口縁内面ナデ、胴内面ケズリ。	1／8		774

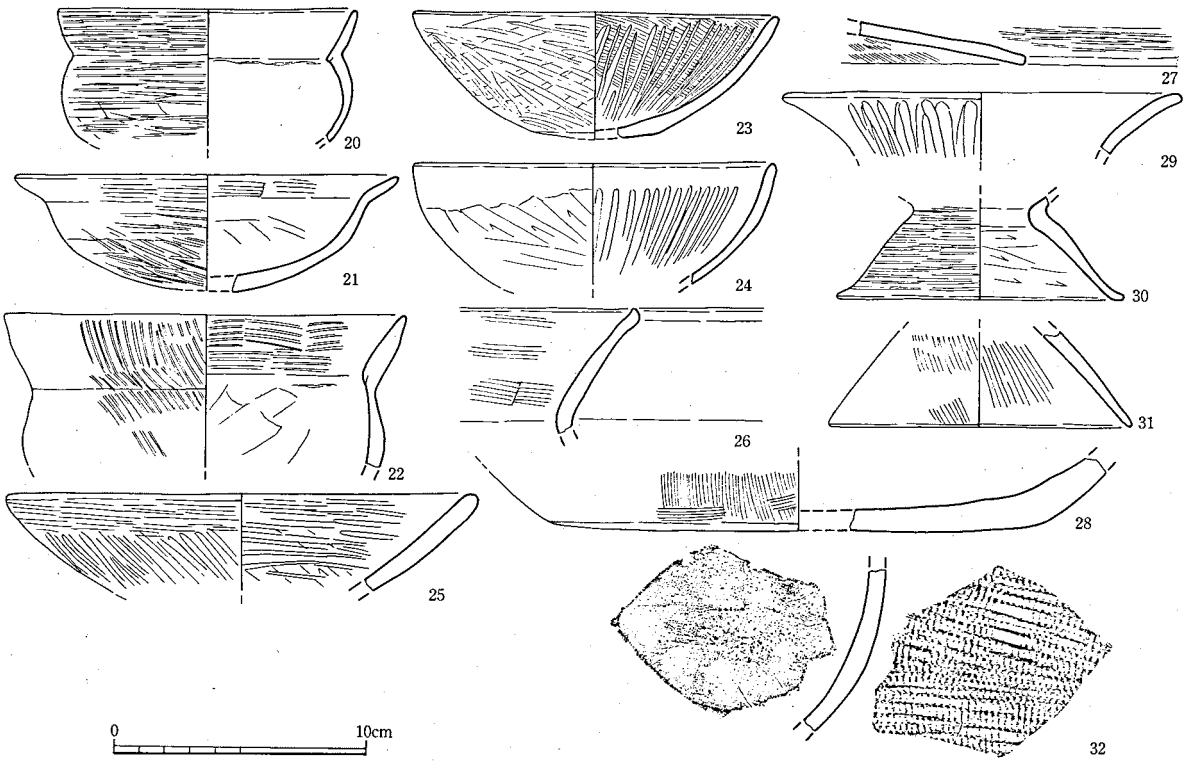


第 108 図　30 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

ている。現状では南北 5.3m、東西 4.6 ～ 5.0m を測り、壁は良好な個所で高さ 40cm 程遺存する。覆土は南部が灰褐色細砂、北部は褐灰色細砂であった。東部の床面からはいくつかピットが検出されているが、炉跡は検出されなかった。

以上のような問題のため、出土遺物の一括性は疑問が残るが、東南部から出土した 7 ・ 17 ・ 18 ・ 24 ・ 29 ・ 39 ・ 62 ・ 63 は確実な一括遺物として捉えることができるだろう。また、47 は P 4 から、出土したものである。

出土遺物（図版 42 ・ 43、第 111 ・ 112 図、第 59 ～ 61 表）　1 ～ 9 は壺。1 は頸部に断面三角形突帯を貼付した壺頸部～胴上部片である。内面にケズリを施すが在地系か。2 は畿内系直口壺で



第 109 図　30 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

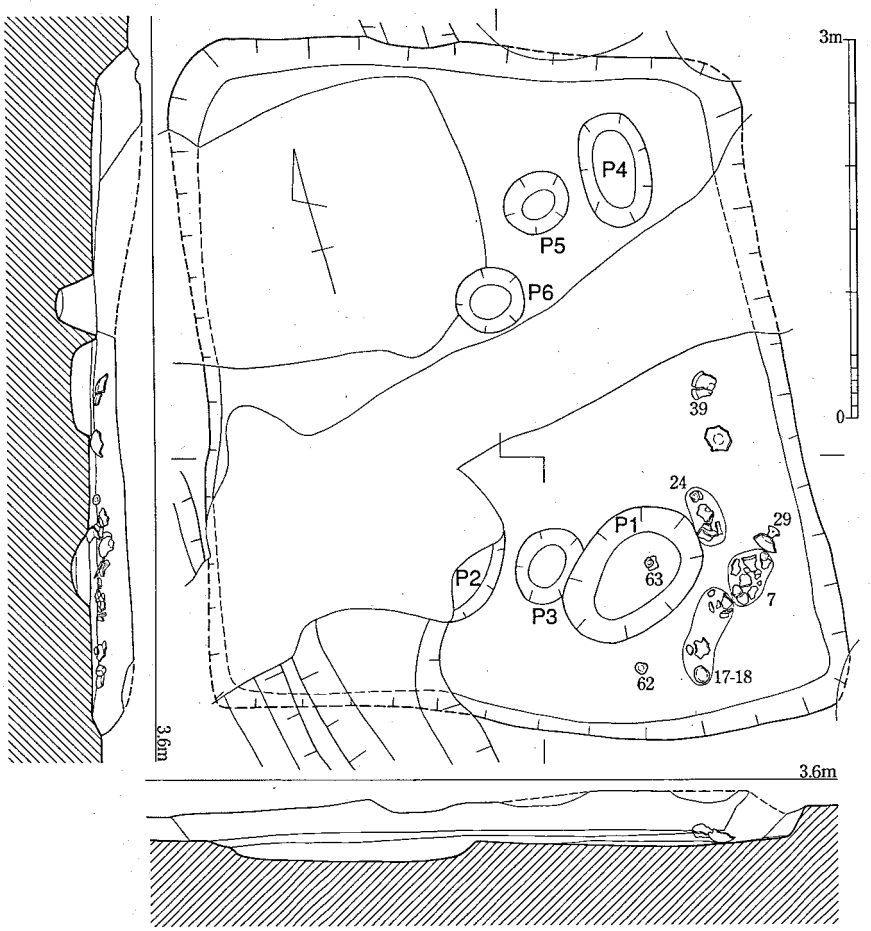
第 58 表　30 号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
108-15	42	住 30 床面	布留系甕	口径 184、頸部径 148、胴最大径 266、残高 238	粘土やや粗、1～3 mm 石英多	やや甘い。胴部黒斑あり	外淡黄褐色、内淡褐黄色	口縁部は直線的に外傾し、口縁端内面をわずかにつまみ上げ。口縁内外横ナデ、胴部内面ケズリ。胴部外面は肩部縦ハケ、肩部横ハケ、胴下部縦・斜めハケの切り合い。	口縁部 1／4、胴部 1／4	胴部最大径より下の外面に煤付着。	782
108-16		住 30 床面下層	高杯口縁部片	残高 26	粘土やや細、1 mm 大石英・長石少	良好	橙褐色	外縦ハケ後縦ミガキ、内斜めハケ後縦ミガキ。	小片		727
108-17		住 30 覆土	高杯杯部片	残高 71	粘土極細、1～2 mm 大石英少	良好	外淡黄褐色、内淡橙褐色	半乾燥時の穿孔 2 ケ所残。外縦ハケ後横ミガキ、内上から下にナデ。	全周	破損後火を受け、煤付着	728
108-18		住 30 覆土	高杯脚部片	口径 198、残高 50	粘土やや粗、1～3 mm 長石・石英少	良好	橙褐色	外面指頭圧痕後ミガキ、内面縦ミガキ。	1／6		710
108-19		住 30 覆土	脚付鉢脚部	裾径 94、残高 15	粘土やや細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡橙褐色	1 ケ所半乾燥時穿孔残存。外面縦ハケ後縦ミガキ。内面斜めハケ。	1／3		722
109-20	42	住 30 覆土	外反口縁鉢	口径 112、残高 52	粘土やや細、1 mm 大石英・長石極少	良好	橙褐色	外面胴下部ケズリ後、外面ミガキ。内面摩滅。	1／4		112
109-21		住 30 覆土上面	外反口縁鉢	口径 148、残高 45	粘土やや粗、1～5 mm 石英・クサリ礫少	良好、外面黒斑あり	淡黄褐色	胴下部外面ケズリ後胴部外面ミガキ。口縁内外横ハケ。胴部内面板ナデ。	1／8	径・傾き不安	720
109-22		住 30 床面下層	外反口縁鉢	口径 152、残高 58	粘土細、1～3 mm 大長石・石英少	やや甘い	外褐赤色、内淡褐色	外面～口縁内面粗いハケ、胴部内面板ナデ。頸部内面に接合痕残す。	1／6	あまり例のない器形	724
109-23	42	住 30 床面	直口鉢	口径 139、器高 48	粘土やや細、1～3 mm 石英・クサリ礫わずかに混	良好	外橙褐色、内黄褐色	外面ヘラケズリ後粗いミガキ。内面ハケメ後疎らな縦ミガキ。	1／3		713
109-24		住 30 床面下層	直口鉢	口径 136、器高 47	粘土やや粗、1～3 mm 石英少	良好・堅緻	淡黄褐色	外面ケズリ。口縁内外横ナデ。内面疎らな縦ミガキ。	1／6	山陰系鉢か	725
109-25		住 30 覆土	直口鉢	口径 176、器高 38	粘土やや粗、1～3 mm 石英少	良好・堅緻	淡黄褐色	外面やや太めミガキ、内面ケズリ後横ミガキ。	1／6		713
109-26		住 30 床面	大形外反口縁鉢	残高 48	粘土やや粗、1～3 mm 石英多	やや甘い	淡黄白褐色	口縁部わずかにつまみ上げ。外面横ナデ、内面横ハケ後ナデ（摩滅）	小片		700
109-27		住 30 覆土	脚付鉢脚裾片	残高 16	粘土やや細、1～3 mm 石英少混	良好	橙褐色	外面横ミガキ、内面斜めハケ。	小片		709
109-28		住 30 覆土	山陰系大形鉢底片	底径 189。残高 27	粘土かなり粗、1～3 mm 石英多	やや甘い	淡黄褐色	胴部外面ハケ、底外面ナデ、胴内面摩滅。	1／4		721
109-29		住 30 床面下層	山陰系器台口縁	口径 138、残高 24	粘土やや粗、1～3 mm 石英少	良好	外淡黄褐色、内淡黄灰褐色	内外ナデ後外面太い縦ミガキ。	1／8		726
109-30		住 30 覆土	山陰系器台裾	裾径 110、残高 40	粘土やや粗、1～3 mm 長石・石英少	良好	淡橙褐色	外面横ミガキ、裾部内面ケズリ、括れ～受部内面ナデ。屈曲部下の稜甘い。	1／4		711
109-31		住 30 床面	器台裾	裾径 118、残高 37	粘土粗、1～3 mm 石英・クサリ礫少	やや甘い	外橙褐色、内淡黄褐色	内外摩滅するが、内外に縦ハケ遺存。	1／8		703
109-32		住 30 覆土	半島系土器壺胴部			硬質だが、焼き締まり小	灰褐色	外面格子タタキ、内面横ナデ。	小片	傾き・天地不安	2359

あるが、3は口縁が直立に近いことから在地系か。4～8は山陰系二重口縁壺。6は大形品で、8は頸部が短く、口径の大きいもの。9は小形丸底壺口縁部片。

10・11は在地系甕口縁部片、12は布留系甕口縁部片。13は器壁が厚く、畿内第五様式系のものか。14は低い突帯を貼付した在地系大形甕胴部片。突帯上面にはハケメ工具を押し付けた×字上の刻目を施文する。

15～28は布留系甕である。15は直線文、20は櫛描直線文、17・21・23・28は波状文、19はハケメ工具を押し付けた列点文をそれぞれ肩部に施文する。17は口縁端部の肥厚が特徴的である。24は布留系甕として提示したが、器壁厚く、外面縦ハケが特徴的であり、畿内五様式系甕の影響を看取できる。25は口縁部内面に接合痕状の皺、肩部外面に強い横ナデによる沈線の巡ることが特徴的である。



第110図　31号竪穴住居跡実測図（1／60）

29はほぼ完形に復元される高杯。脚裾には0・4・8時の3方向に半乾燥時に穿孔を施す。30～35は高杯杯部破片。31は内面に斜めハケ後、暗文風の放射状のミガキを施す。33・34は内外の太いミガキが特徴的で、34は脚－杯の接合法が29等一般的形態のものと異なる。35は杯部屈曲部の小片。36～39は高杯脚柱部破片で、39は脚裾端部まで遺存する。40～42は高杯脚裾部片で、縦ミガキを施す42は在地系高杯か。

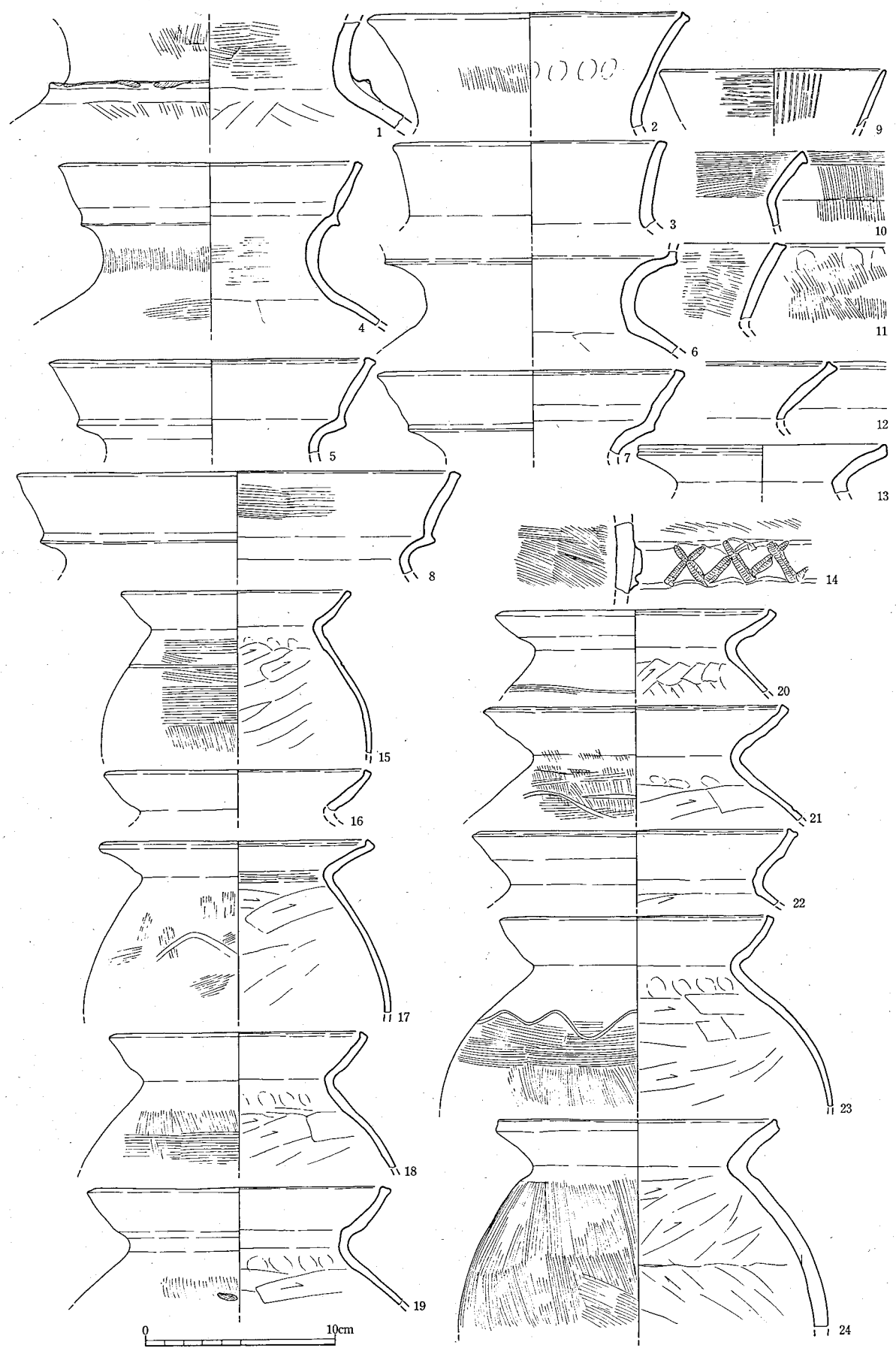
43～48はいずれも外面に横ミガキを施す精製の外反口縁鉢である。48はこの種の器形にしては厚い器壁が特徴的である。49～51は直口鉢破片で、49は精製品。51はハケメの後に施された内面の疎らなミガキが特徴的である。

52は深い器形から考えて精製の脚付鉢鉢部と推測される。56は粗製の脚付鉢鉢部。53～59は精製脚付鉢脚部。53・55は0・3時の2方向に半乾燥時穿孔、57は0・3時の2方向に乾燥前穿孔を施す。55は太めの縦ミガキを施し、57は裾径が小さい点で他と異なる。60は粗製、61は精製で、いずれも深い器形の脚付鉢脚部である。61は鉢下部に意図的に焼成後の穿孔を施す点が注意をひく。62・63も粗製の脚付鉢脚部となるか。

64・65は精製の小形器台受部底部片、66は山陰系鼓形器台口縁部片。67・68は山陰系鼓形器

第59表　31号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

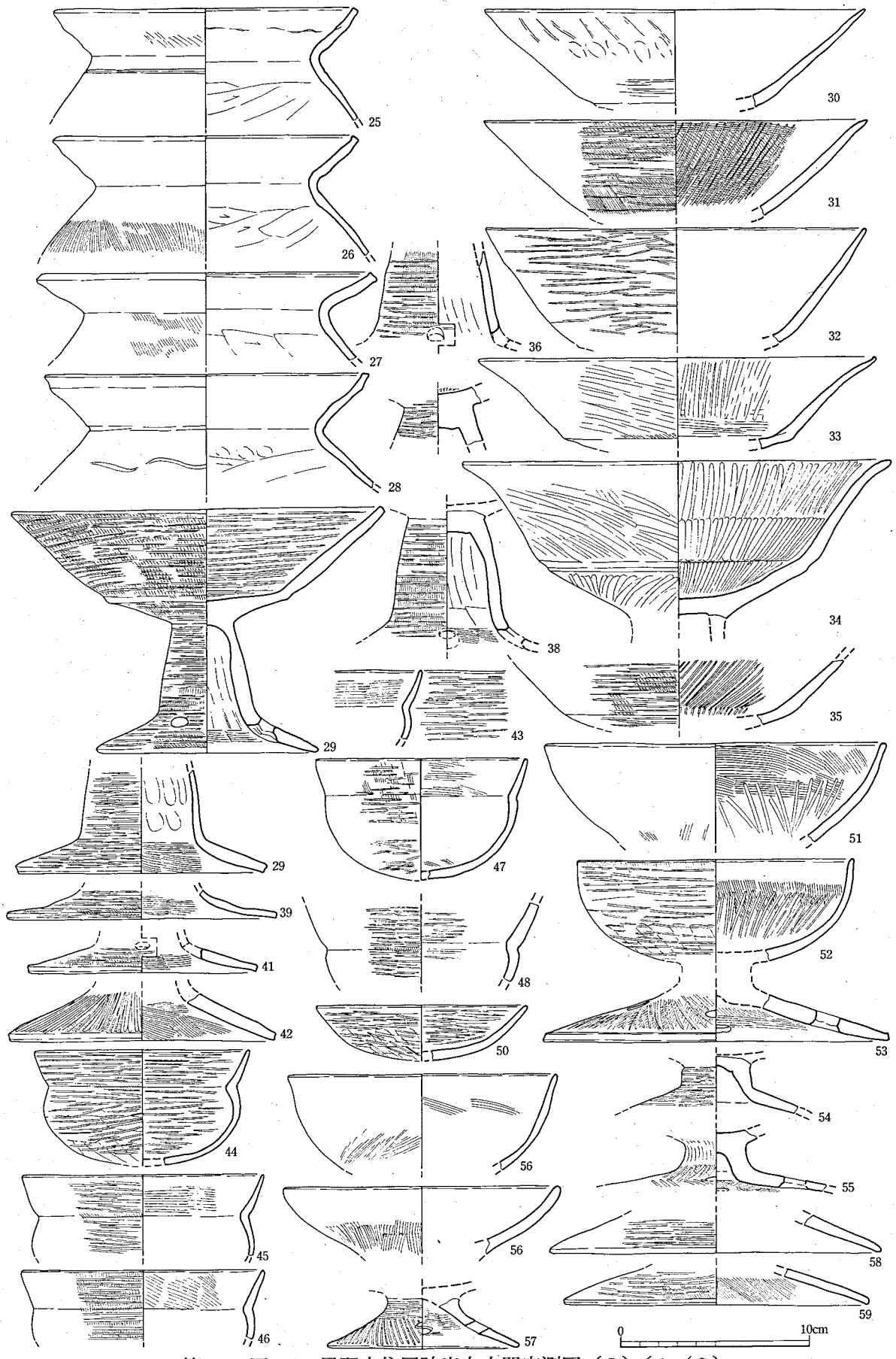
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
111-1		住31北部	在地系壺頸部？	頸部径150、残高58	粘土粗、1～5mm長石・石英多	良好	褐色	頸部に断面三角形突帯貼付し、頂部にハケメ工具で刻目施文。頸部は緩やかに外反。胴外・頸部内外粗いハケ、胴上部内ナデ、胴部内ケズリ。	1／6		1070
111-2		住31覆土上部	畿内系直口壺	口径162、残高62	粘土やや粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡褐色、内淡黄褐色	口縁外反し、端部をつまみ上げ。外ハケ、内指頭圧痕後、内外横ナデ。	1／8		1080
111-3		住31覆土上部	直口壺	口径134、残高47	粘土粗、1mm石英少	良好	外淡褐色、内淡黄褐色	口縁が短く、直立に近い。内外横ナデ。	1／8		730
111-4		住31北東部覆土	山陰系二重口縁壺	口径154、残高86	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	外淡灰黄褐色、内黄白褐色	頸部括れ強く、口縁部は直線的に外傾し端部を丸く内に肥厚。胴外横ハケ、頸部外縦ハケ、頸部内縦ハケ後頸部～口縁内外横ナデ。胴内ケズリ。	1／4		1065
111-5		住31覆土上部	山陰系二重口縁壺	口径164、残高50	粘土粗、1～3mm石英・長石極少混	やや甘い、内面灰変	淡黄褐色を基調	口縁端部内肥厚。内外横ナデ。	1／10	径・傾き不安	763
111-6		住31北部	山陰系二重口縁壺	残高53	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好、器肉黒変・灰変	淡褐黄色	胴上部～口縁屈曲部の破片。外・頸部内ナデ、胴内ケズリ。	1／4強		1070
111-7		住31	山陰系二重口縁壺	口径154、残高45	粘土やや粗、1～3mm石英少	やや甘い	褐黄白色	口縁端部内かすかに肥厚。内外横ナデ。	1／8		1044
111-8		住31覆土上部	山陰系二重口縁壺	口径226	粘土粗、1～3mm石英・長石極少混	良好	外黄橙褐色、内淡黄褐色	口縁内横ハケ後内外横ナデ。頸部短く、括れ小さい。	1／8弱	径・傾き不安	762
111-9		住31覆土下部	小形丸底壺	口径118、残高30	粘土やや細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外横ミガキ、内暗文縦ミガキ。	1／10弱小片		1090
111-10		住31覆土下部	在地系甕	残高40	粘土粗、1～3mm大長石・石英少	良好	淡黄褐色	外縦ハケ、口縁内横ハケ。	小片		1091
111-11		住31覆土上部	在地系甕	残高40	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	褐黄色	外縦ハケ、内面横ハケ。口縁端外面指頭圧痕残。	小片		
111-12		住31覆土上部	布留系甕	残高40	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端部を微かにつまみ上げる。内外横ナデ。	小片		1086
111-13		住31覆土上部	甕	口径130、残高25	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	褐橙色	器壁厚く畿内五様式系か。内外横ナデ。口縁端面をなす微かに凹む。	1／8		1053
111-14		住31覆土上部	在地系大形甕胴部		粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	外暗褐灰色、内灰褐色	突帯を貼付した在地系大形甕胴部片。突帯上面にはハケメ工具を押し付けた×字上の刻目を施文する。	小片		1054
111-15		住31北部覆土	布留系甕	口径118、胴最大径142、残高87	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	胴外横ハケ後下部縦ハケ、口縁内外横ナデ、胴部内ケズリ、頸部内指頭圧痕。	1／4	外面煤付着	1073
111-16		住31覆土下部	布留系甕	口径134、残高22	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄白褐色	口縁部微かに内湾。内外横ナデ。	1／4	外面煤付着	1057
111-17		住31	布留系甕	口径136、胴最大径160、残高90	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内褐色	口縁部直線的に外傾、端部肥厚。肩波状文。胴外ハケ後摩滅、口縁内外横ナデ、頸部内ハケ、胴部内ケズリ。	口縁1／8、頸部1／4		1046
111-18		住31	布留系甕	口径128、残高71	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁微かにつまみ上げ。胴外縦ハケ後横ハケ。口縁内外横ナデ。胴部内指頭圧痕後ケズリ。	1／6		1045
111-19		住31覆土上部	布留系甕	口径150、残高61	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄白褐色	肩部にハケメ工具による列点文。肩縦ハケ後、肩外～口縁内ナデ。胴部内指頭圧痕後ケズリ。	1／8強		731
111-20		住31覆土上部	布留系甕	口径140、残高44	粘土粗、1mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端つまみ上げ、肩部に櫛描直線文。外面～頸部内面ナデ。胴部内面指頭圧痕後ケズリ。	1／6		733
111-21		住31	布留系甕	口径144、残高62	粘土やや粗、1mm石英・長石少	良好	黄褐色	口縁端部を微かにつまみ上げ、肩部に波状文。胴外ハケ、胴内指頭圧痕後ケズリ。胴肩外に水平方向の擦痕あり、ハケメ工具あたりか。	1／4	口縁外面薄く煤付着。口縁内面、胴内外火を受け暗灰褐色	1043
111-22		住31覆土下部	布留系甕	口径162、残高63	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	外淡灰褐色、内淡黄褐色	口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	2／3弱		1056
111-23		住31覆土上部	布留系甕	口径138、胴最大径206、残高101	粘土粗、1mm大長石・石英少	良好、内面一部灰変	淡黄褐色	肩外波状文。胴肩外横ハケ後胴下部縦ハケ。口縁内外横ナデ、頸部内指頭圧痕。	口縁1／8弱、胴1／6	径・傾き不安	734
111-24	43	住31	布留系甕	口径144、胴最大径202、残高110	粘土かなり粗、1～3mm石英多	やや甘い	外褐色、内灰黄褐色	器壁厚い。外面縦ハケが特徴的で畿内五様式系の影響とどめるか。胴部内面ケズリで接合痕残す。	胴3／4、口縁2／3	胴部内面灰黄褐色を基調とするが縞状に褐色土痕。外煤付着	1039
112-25		住31北部覆土	布留系甕	口径156、残高63	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	暗灰褐色	口縁部内に接合痕状の皺、肩部外に強い横ナデによる沈線巡る。外～頸部内ナデ、胴内ケズリ。	1／4	口縁外面煤	1066
112-26		住31北部覆土	布留系甕	口径154、残高63	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外暗褐灰色、内暗褐色	胴外縦ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／4	外面煤付着	1072
112-27		住31覆土上部	布留系甕	口径172、残高47	粘土粗、1～3mm石英少	良好・堅緻	外淡褐白色、内淡黄褐色	口縁端わずかにつまみ上げ。外面縦ハケ後。口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	1／6		732
112-28		住31覆土	布留系甕	口径174、残高63	粘土やや粗、1～3mm石英少	やや甘い、口縁内外灰変	外淡黄褐色、内淡灰黄褐色	肩波状文、胴外摩滅、口縁内外横ナデ、胴部内ケズリ。	1／6	肩波状文は櫛描の可能性あり	1055
112-29	42	住31	高杯	口径204、裾径114、器高129、脚高69	粘土細か、1mm石英・長石極少混	良好、脚裾内1／3黒斑	淡黄橙褐色	外縦・斜めハケ後横ミガキ。杯部内横ミガキ。脚内ナデ下ろし、脚裾内横ハケ。脚裾には0・4・8時の3方向に半乾燥時に穿孔。	口縁少し欠くが、ほぼ完形		1038
112-30		住31覆土上面	高杯杯部片	口径198、残高52	粘土細か、1mm石英極少混	良好	外黄橙褐色、内橙褐色	内外摩滅。外上部に弱い指頭圧痕。	1／4		1050
112-31		住31覆土上面	高杯杯部片	口径202、残高51	粘土細か、1mm石英極少混	良好	橙褐色	口縁直線的に外傾。外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ後暗文風ミガキ。	1／8		1049
112-32		住31北東部覆土	高杯杯部片	口径198、残高60	粘土細か、1mm石英・長石少	良好、外黒斑あり	外橙黄褐色、内淡橙白褐色	内外摩滅気味。外面ミガキ残。	1／6		1067



第 111 図　31 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

第60表　31号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
113-33		住31覆土上部	高杯杯部片	口径208、残高48	粘土やや粗、1～3mm石英多	甘い、器肉灰変	外灰黄褐色、内淡黄白褐色	外太いミガキ、内太い横ミガキ後縦ミガキ。口縁端器壁薄い。	1／6だが口縁わずかに残	径・傾き不安	741
113-34	43	住31	高杯杯部片	口径224、残高82	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	橙黄褐色	外太いミガキ、口縁内横ハケ後内太い縦ミガキ。	ほぼ全周		1041
113-35		住31北東部覆土	高杯杯部片	残高33	粘土粗、1mm石英極少混	良好	外明褐色、内黄褐色	稜の屈強は不明瞭。外斜めハケ後ミガキ、内暗文風ミガキ。	1／10	径・傾き不安	1087
113-36		住31覆土上部	高杯脚部片	残高50	粘土細か、1～3mm石英極少混	良好	外黄橙褐色、内淡橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内ナデ。穿孔1ケ所残。	1／6		1083
113-37		住31覆土上部	高杯脚部片	残高30	粘土細か、1mm長石少	良好	橙褐色	脚外縦ハケ後ミガキ、脚内ナデ、杯内ミガキ。	全周		1052
113-38		住31覆土上面	高杯脚部片	残高68	粘土細か、1mm石英・長石極少混	良好	淡橙褐色	1ケ所半乾燥時穿孔残。外縦ハケ後横ミガキ、脚内ナデ・板ナデ、脚裾内横ハケ。	全周		746
113-39		住31覆土上部	高杯脚部片	裾径138、残高54	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡橙褐色	外横ミガキ、脚柱内ナデ、裾内横ハケ。裾端部角張る。	脚柱1／4、裾1／8		745
113-40		住31北東部覆土	高杯脚裾部片	裾径140、残高14	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	良好	外淡黄褐色、内橙褐色	器壁薄い。外斜めハケ後横ミガキ、内横ハケ。	1／6		1068
113-41		住31覆土上部	高杯脚裾部片	裾径118、残高17	粘土やや粗、1mm長石極少	良好	淡橙褐色	半乾燥時穿孔1ケ所残。外斜めハケ後横ミガキ、内横ハケ。	1／8		1083
113-42		住31覆土下部	高杯脚裾部片	裾径138、残高25	粘土やや粗、1mm長石極少	良好	橙褐色	外斜めハケ後縦ミガキ、内斜めハケ。	1／6	在地系高杯か。	1081
113-43		住31覆土	外反口縁鉢		粘土細か、1mm長石極少	良好	暗橙褐色	外ミガキ、口縁内横ハケ、胴内ナデ。	小片		736
113-44	43	住31覆土上面	外反口縁鉢	口径110、頸径100、器高61、胴高41	粘土細か、1～3mm石英極少	良好	橙褐色	胴下部外ケズリ・頸部外縦ハケ後外横ミガキ。口縁～胴内横ミガキ。	1／3		1040
113-45		住31覆土上部	外反口縁鉢	口径124、残高43	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	橙褐色	頸部外縦ハケ後外横ミガキ。口縁内横ハケ、胴内摩滅。	1／8	外面二次的に火を受け褐変	737
113-46		住31覆土上部	外反口縁鉢	口径126、残高36	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外縦ハケ後ミガキ、口縁内斜めハケ、胴内丁寧なナデ。	1／8		738
113-47		住31P4	外反口縁鉢	口径108、頸径100、器高64、胴高44	粘土細か、1～3mm石英・クサリ礫極少混	良好	橙褐色	胴下部外ケズリ・胴上部及び口縁外縦ハケ後外横ミガキ。口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／6	内面器表の摩滅のためかミガキ見えず	1077
113-48		住31北東部覆土	外反口縁鉢	残高42	粘土粗、1～3mm大長石・石英少	良好	淡橙褐色	外面縦ハケ後横ミガキ、内面横ミガキ。器壁が厚い。	1／8		1088
113-49		住31覆土上部	直口鉢	口径108、器高29	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外下部ヘラケズリ、外中部指頭圧混後、内外横ミガキ。	1／4強		740
113-50		住31覆土下部	直口鉢	口径138、残高50	粘土粗、1mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡灰黄褐色	やや深い器形で、内外ナデ後雑なハケ。	1／6		1059
113-51		住31覆土上面	直口鉢	口径176、残高53	粘土やや細、1～3mm石英少	良好、口縁外黒斑	外淡黄褐色、内黄白褐色	外ナデ後下部ハケ。内斜めハケ後疎ら太いミガキ。口径大きい。	1／4		1048
113-52		住31覆土上部	脚付鉢鉢部	口径144、残高52	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色	外下部ヘラケズリ、上部ハケ後外横ミガキ、内斜めハケ後暗文風ミガキ。	1／4	深い器形から精製脚付鉢か。	742
113-53		住31上面	脚付鉢脚部	裾径118、残高25	粘土やや粗、1～3mm石英少	良好	外黄橙褐色、内橙褐色	0・3時の2方向に半乾燥時穿孔。外斜めハケ後斜めミガキ。内ハケ。	1／4		755
113-54		住31上面	脚付鉢脚部	残高32	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色、器肉は淡黄褐色	外横ミガキ、内ナデ。	全周		1051
113-55		住31覆土上部	脚付鉢脚部	残高33	粘土細か、1mm石英・長石少	やや甘い	淡橙褐色	0・3時の2方向に半乾燥時穿孔。外ハケ後太目縦ミガキ、脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	脚柱全周、裾1／4		744
113-56		住31覆土	脚付鉢鉢部	口径142、残高36	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外淡褐黄色、内橙褐色	下部の形状から脚付と推測。外下部縦ハケ、外上部ナデ、内摩滅。	1／6		739
113-57		住31覆土下部	脚付鉢脚裾	裾径98、残高26	粘土粗、1～3mm石英少	良好、内黒変	淡黄褐色を基調	0・3時の方向に乾燥前穿孔。外ミガキ、内ハケ後ナデ。	1／4		1060
113-58		住31	脚付鉢脚裾	裾径170、残高19	粘土やや細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	橙褐色	外横ミガキ、内ナデ。	1／8		743
113-59		住31上面	脚付鉢脚裾	裾径158、残高18	粘土粗、1mm石英少	良好	黄褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	1／8		1085
114-60		住31覆土上部	脚付鉢脚部	裾径78、残高47	粘土粗、1mm石英少	良好	外黄褐色、内灰褐色	深い鉢部となるか。胴外板ナデ、胴内板ナデ、脚内外横ナデ。	脚3／4、胴1／6		735
114-61	43	住31北東部覆土	脚付鉢脚部	裾径88、残高42	粘土やや細、1mm石英少	良好	黄橙褐色	鉢下部に焼成後、外から意図的穿孔。外ハケ後横ミガキ、胴内横ミガキ、脚内ハケ後ナデ。	脚2／3、胴2／3		1064
114-62		住31	脚付鉢脚部	残高43	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	黄白褐色	外板ナデ（稜あり）。内剥離。	全周	混入した弥生土器の可能性もあり	1042
114-63		住31	脚付鉢脚部	残高43	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	外タタキ後ナデ。胴内・脚内ともナデ。	全周		1047
114-64		住31覆土上面	小形器台受部片	残高13	粘土粗、1mm金雲母・長石極少混	良好	橙褐色	受部底部片。外ミガキ、内ハケ後ナデか。	1／4		1084
114-65		住31北東部覆土	小形器台受部片	残高16	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	良好	外橙褐色、内淡黄橙褐色	受部底部片。外ミガキ（摩滅）、内放射状にミガキ。	1／4		1069
114-66		住31覆土下部	山陰系鼓形器台？	残高29	粘土粗、1～5mm石英少	良好	淡橙褐色、黒斑あり	口縁端部が丸く端部にも丁寧なミガキ。外ナデ、内ミガキ。	小片		1058
114-67		住31	山陰系鼓形器台	裾径148、括部径62、残高54	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外黄白褐色、内淡黄褐色	受部内横ミガキ、括部内ナデ、裾部内ケズリ、外～裾内横ナデ。	1／6		1062
114-68		住31覆土上面	山陰系鼓形器台	裾径178、残高27	粘土粗、1～3mm石英多	良好・堅緻	黄白褐色	裾内外横ナデ。内ケズリ、外横ナデ後幅広の縦ミガキ。	1／6		1063
114-69		住31覆土下部	タコ壺	口径42、残高43	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	内外ナデ。	1／6		1061
114-70		住31北部覆土	タコ壺	口径60、残高81	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	外淡灰黄褐色、内橙褐色	内外ナデ。	1／4弱		1074



第 112 図　31 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

台裾部破片である。66は口縁端部が丸く端部にも丁寧なミガキ、68は外面に横ナデ後幅広の縦ミガキを施す。69～71はタコ壺片。71は安定した平底をなす。

72～89は31号住居跡周辺の遺構面・包含層から出土したもので、このうち72～79・82・83・86・87は31号住居跡南の包含層からまとまって出土した。

72は中形壺の底部か。73は畿内五様式系甕、74～77は布留系の甕、78は五様式系甕の底部か。79は外反口縁鉢、80は脚付鉢脚部、81・84は脚付鉢脚裾である。84は外面ハケ後縦ミガキを施し、高杯脚裾部の可能性も残す。82は小形器台脚裾部、83は山陰系鼓形器台受部か。85～89はタコ壺。

32号竪穴住居跡（図版21、第114図）

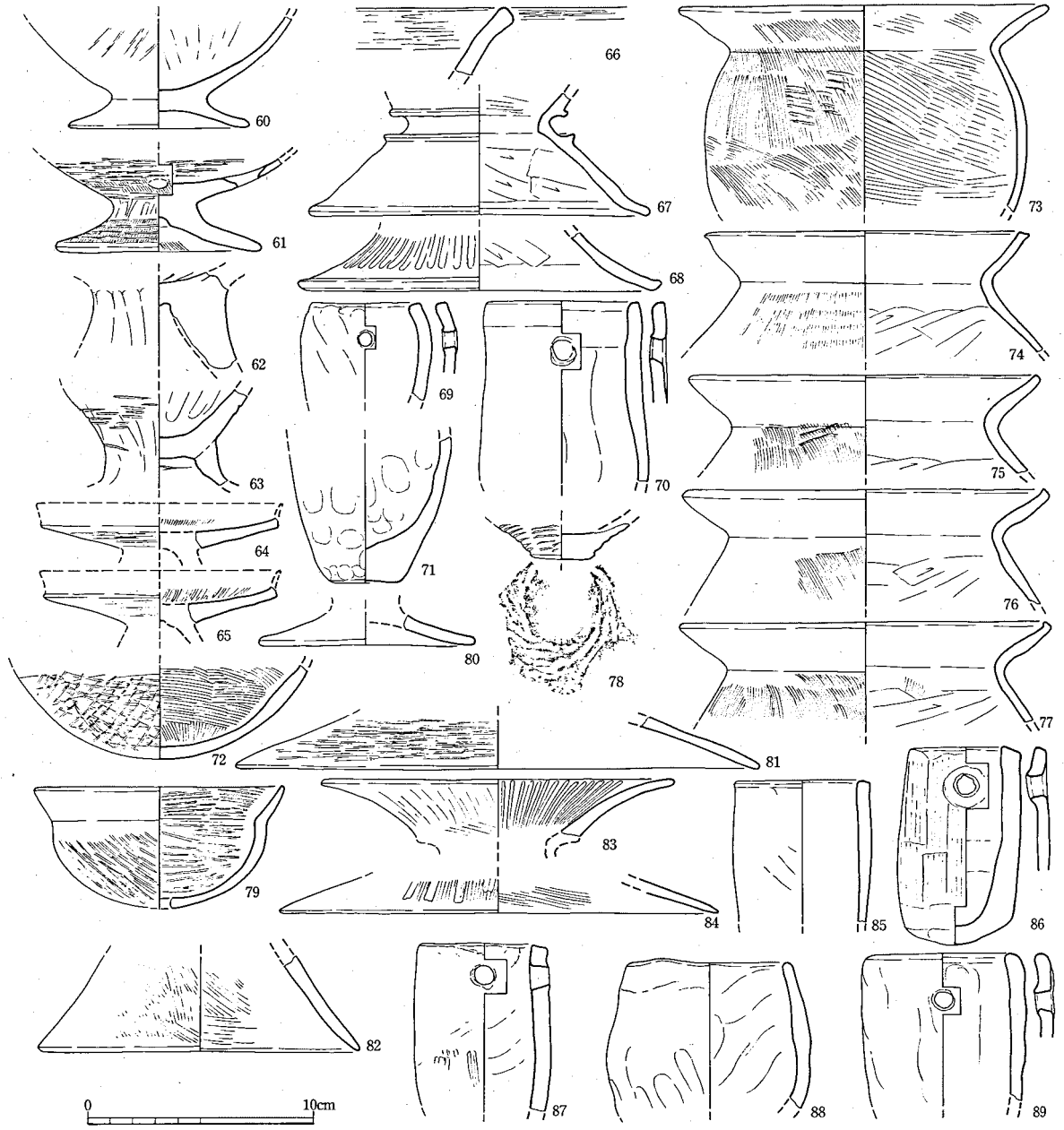
3区のほぼ中央部、26号竪穴住居跡の東に位置する。西側を26号竪穴住居跡に壊され、東・南を撹乱により失うので、検出できたのは北壁のみ。現状では東西方向に最大3.5m、南北方向に最大2.7m遺存する。北壁は直線的で住居跡とするのに問題はないが、遺存の良好な場所で壁の高さ10cm程に過ぎず、正確な形態を捉えたかは不安が残る。床面西部にピットが集中し、炉跡は検出していない。覆土は灰褐色細砂で、P1・P3は灰褐色細砂、P3は黄褐色細砂を覆土としていた。

出土遺物（図版43、第115図、第62表）　1、2はP1から出土した。

1は内外にハケメを残す粗製の中形壺。2・3は布留系甕で、3は口縁外面に接合痕状の皺があり、内面ケズリは切合いが明瞭でシャープである。4は内外ミガキ仕上げの吉備系高杯である。5は精

第61表　31号竪穴住居跡出土土器観察表（3）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
114-71		住31覆土上部	タコ壺	底径30、残高64	粘土粗、1～3mm長石・石英少	良好	外黄褐色、内褐色	底は安定した平底。内外ナデ。	全周		747
114-72		住31南包含層	中形壺底部	残高42	粘土細か、1mm石英・長石少	良好、内外所々褐変	外淡黄褐色、内淡褐色	外ヘラケズリ後ミガキ、内ハケ。	1／3	畿内系の精製直口壺底部か	754
114-73		住31南包含層	五様式系甕	口径164、胴最大径142、残高91	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外橙黄褐色、内淡黄褐色	外タタキ後胴部上及び口縁外縦ハケ後胴下部ハケ。内ハケ。口縁内外横ナデ。	1／4		752
114-74		住31南包含層	布留系甕	口径134、残高53	粘土粗、1～3mm石英・長石多	甘い	淡黄褐色	口縁緩やかに内湾。胴外縦ハケ、口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	1／6		750
114-75		住31南包含層	布留系甕	口径150、残高44	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡褐黄色、内淡黄灰褐色	胴外縦ハケ、口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。口縁外横ナデの範囲狭い。	1／6		748
114-76		住31南包含層	布留系甕	口径158、残高50	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	褐白色	胴外縦ハケ、口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	口縁1／4、胴1／8	113-77と類似	751
114-77		住31南包含層	布留系甕	口径158、残高45	粘土粗、1mm石英少	良好	外淡褐黄色、内淡黄褐色	胴外縦ハケ、口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。頸部内にケズリに先立つ擦痕。外ハケは上から下へ工具動いたか。	1／6	外面煤	749
114-78		住31南包含層	五様式系甕底部	底径26、残高15	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	褐色～暗褐色	外タタキ、内・底外ナデ。安定した小さい平底。	全周		766
114-79		住31南包含層	外反口縁鉢	口径104、頸部径96、器高54、胴高39	粘土粗、1～3mm石英多	良好	褐赤色	胴外ミガキ、口縁外横ナデ、口縁内ハケ、胴内ミガキ。ミガキは雑。	1／3		753
114-80		住31西遺構面	脚付鉢脚部	裾径94、残高14	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外摩滅、内ナデ。	1／3		765
114-81		住31東遺構面	脚付鉢脚裾	裾径230、残高23	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色	外横ミガキ、内丁寧なナデ。	1／8		764
114-82		住31南包含層	小形器台脚部	裾径140、残高41	粘土粗、1～3mm長石・石英少	やや甘い	橙褐色	外内ともハケ（摩滅）。	1／8	器台の裾と考えたが天地は不安。	756
114-83		住31南包含層	山陰系鼓形器台	口径152、残高35	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	黄白褐色	内外縦ミガキ。下端破損面に接合時の刻目残す。	1／8		760
114-84		住31西近世包含層	脚付鉢脚裾	裾径192、残高15	粘土粗、1mm石英・長石極少混	良好	橙褐色	外縦ハケ後縦ミガキ。内横ハケ後ナデ。	1／10		1098
114-85		住31南包含層	タコ壺	口径50、残高63	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	褐色	内外ナデ。	1／4		759
114-86	43	住31南包含層	タコ壺	口径41、器高87	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	灰褐色～暗黄灰褐色	外板ナデ、内ナデ。	完形		757
114-87		住31南包含層	タコ壺	口径42、残高75	粘土粗、1～3mm石英少	良好	暗褐色	口縁端部角張る。内外ナデ、外下部板工具擦痕。	2／3弱		758
114-88		住31西近世包含層	タコ壺	口径70、残高64	粘土やや細、1～3mm石英少	良好	外黄褐色、内灰黄褐色	胴部ふくらむ。内外ナデ。	1／3		1075
114-89		住31西近世包含層	タコ壺	口径60、残高68	粘土やや細、1～3mm石英少	やや甘い		内外ナデ。	1／4		1976



第 113 図　31 号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）

製の直口鉢、5・6はタコ壺。

33 号竪穴住居跡（図版 21、第 114 図）

3区の東南部、4号竪穴住居跡の東で検出した。多くの撹乱があるため、検出できたのは北東隅と南壁東よりの壁の一部に留まる。西壁は 4 号竪穴住居跡と切合うことは確実であるが、明確に検出できなかったため復元的に図示した。復元するならば長軸をほぼ東西、N － 84° － W に向けた長方形の竪穴住居となり、南北 3.3m、東西 4.5m 前後になる。壁は良好な場所で 20cm 弱遺存し、覆土は淡褐色細砂である。中央やや東寄りに炉跡が検出されており、長方形住居跡とする復元とも矛盾していない。

出土遺物（第 116 図、第 63 表）　1・2は直口壺。1は内外にハケメを残し、2は頸部から直に立ち上がり、屈曲して外反する特徴的な器形のもので、瀬戸内海沿岸地域に由来するものか。3・

4は山陰系二重口縁壺で、4は大形品か。5は大形壺の肩部破片で、肩部内面に指頭圧痕が巡る。

6・7は直口壺で、6は口縁が短く直立し、7は外面に縦ミガキを施す。8は胴内面の縦ケズリが特徴的であり、口縁下部外にハケメ工具の当たりと考えられる凹線が認められる。

9は庄内系甕で、色調は在地の土器とは異なり搬入品と推測される。10～14は布留系甕で、11は肩部に沈線が施文されるが全周しない。15～17は高杯杯部片、19～21は高杯脚裾部片で、20・21は在地系高杯か。18は半乾燥時に穿孔するのに対して、20は粘土の乾燥前に穿孔を施す。

21は大形の山陰系二重口縁鉢と思われる。23～25は外反口縁鉢で、25は粗製品。24は頸部内面に接合痕を残す。26～30は直口鉢で、26は内外極めて雑なナデで仕上げ、27底部は小さな平底をなす。29は内外細いミガキ仕上げの精製品で、30は内面ミガキを施すものの、外面は雑なハケを残す。31は脚付鉢脚部、32は脚付鉢として図示したが、胴部やや深い。

33は外面に縦ミガキを施すことから、山陰系の器台か。34は小形器台脚部と思われ、乾燥前に穿孔を施す。35・36は山陰系鼓形器台の破片。

34号竪穴住居跡（図版21、第114図）

3区の中央やや北東、14号竪穴住居跡の北東で検出した。東を撹乱により壊され、南西隅を14号竪穴住居跡の掘込みにより失うが、長軸をN－67°－E、東西に向けた長方形竪穴住居跡と復元される。東西幅3.3m以上、南北ほぼ2.9mを測り、壁は遺存状況の良好な場所でも5cm程である。主柱穴は不明確であるが、中央やや北西寄りで、長軸0.8m、短軸0.6mの範囲に床面が赤褐色に変色した炉跡が検出された。

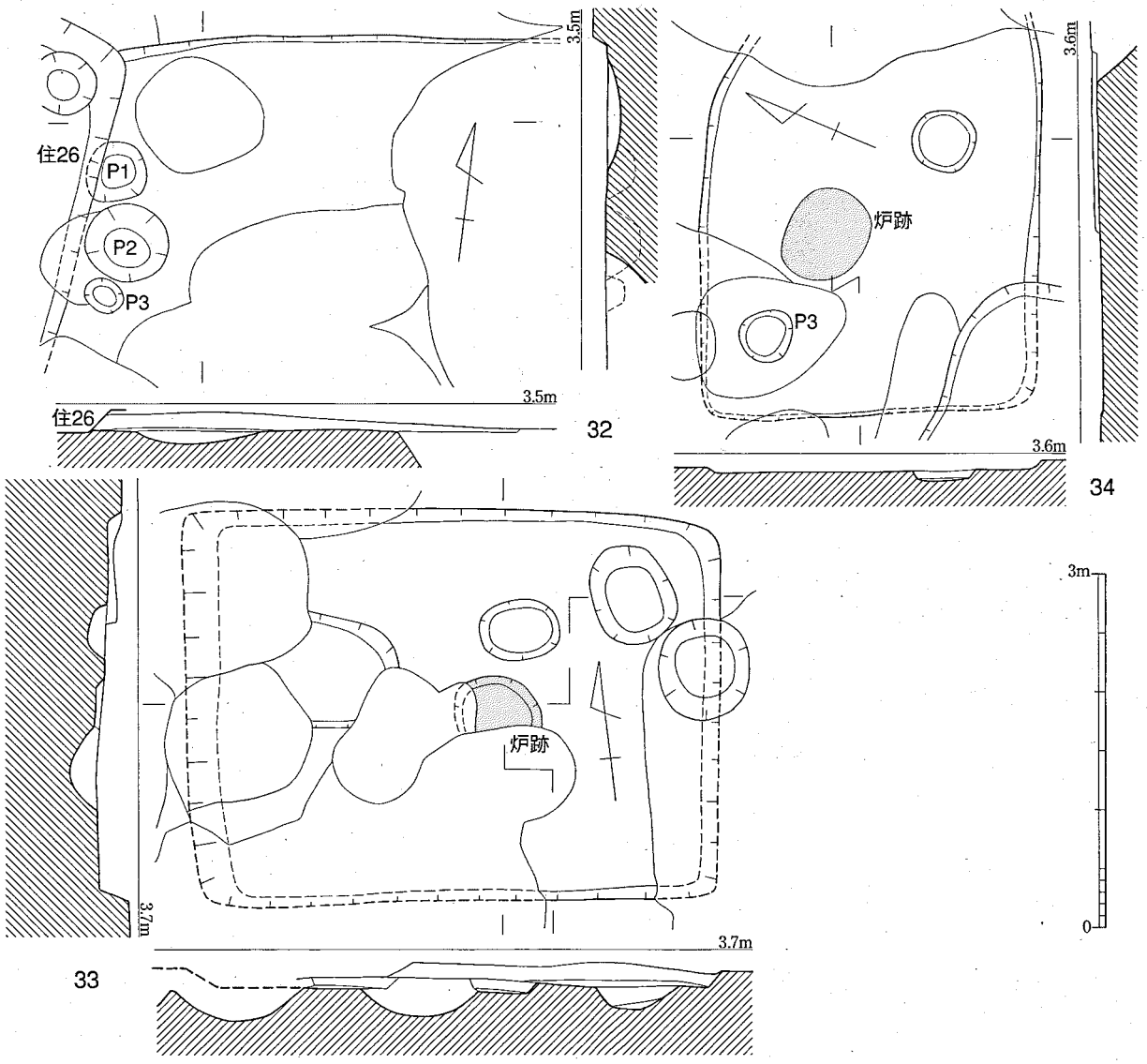
出土遺物（図版43、第117図、第64表）　2は上面のピット、9はP3、1・6は床面の下層から出土品であるが、他は覆土中から出土した。1は庄内系甕口縁部で、端部を上方に拡張させる。2は小形の高杯杯部、3・4は在地系と推測される高杯杯部。5は高杯脚柱部で、0・3・5・7.5時の方向に乾燥前の穿孔が残り、本来は5方向に穿孔したと推測される。6は外反口縁鉢として図示したが、特異な器形を呈す。7・8は山陰系鼓形器台の口縁部破片。9はタコ壺と推測したが、内面に板ナデを施し特異か。10は製塩土器で、下半部が残る遺存状況の良好な資料である。

35号竪穴住居跡（図版22、第118図）

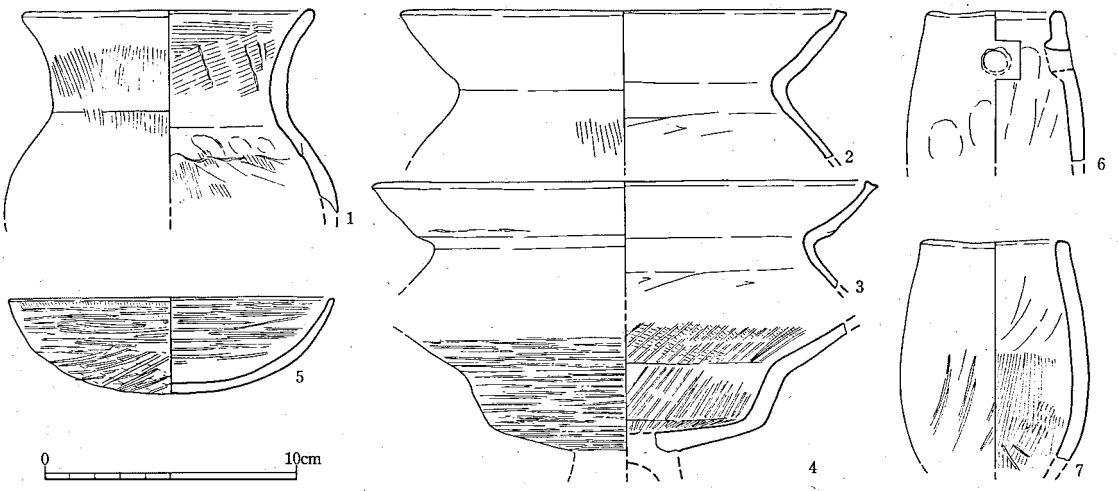
3区の南西部、南壁にかかり、住居跡の北壁を検出したのみで、大半は調査区外へと続く竪穴住

第62表　32号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
115-1		住32 P1	中形壺	口径112、残高82	粘土粗、1～3mm長石・石英少	良好	赤褐色	口縁緩やかに外反。内外ハケ後ナデで、頸部内面に接合痕残す。	1／3		773
115-2		住32 P1	布留系甕	口径168、残高58	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	口縁内面上部強いナデにより凹む。口縁内外ナデ、胴外ハケ残。	1／3		772
115-3		住32覆土上部	布留系甕	口径192、残高45	粘土やや細、1～3mm石英少	甘い、器肉・口縁内黒変	外褐灰色、内灰黄褐色	口縁端つまみ上げ。口縁外に皺、接合痕か。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁1／8、頸部1／3		771
115-4		住32覆土上部	吉備系高杯	残高50	粘土細か、1mm石英・長石少	良好	橙褐色	外丁寧な横ミガキ、口縁内ハケ後内面縦・斜めミガキ（内摩滅顕著）。	1／3		769
115-5	43	住32覆土上部	直口鉢	口径128、器高38	粘土細か、1mm石英・長石極少混	良好	橙褐色	外下部ケズリ、外上部ハケ後、内外をミガキ仕上げ。内底面に指頭圧痕。	1／2		770
115-6		住32	タコ壺	口径48、残高62	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	淡黄灰褐色	内外ナデ。	全周		767
115-7		住32覆土上部	タコ壺	口径48、残高88	粘土粗、1～5mm石英多	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	外下部条痕、内下部ハケ、口縁内外ナデ。	1／4		768



第 114 図　32 ～ 34 号竪穴住居跡実測図（1／60）

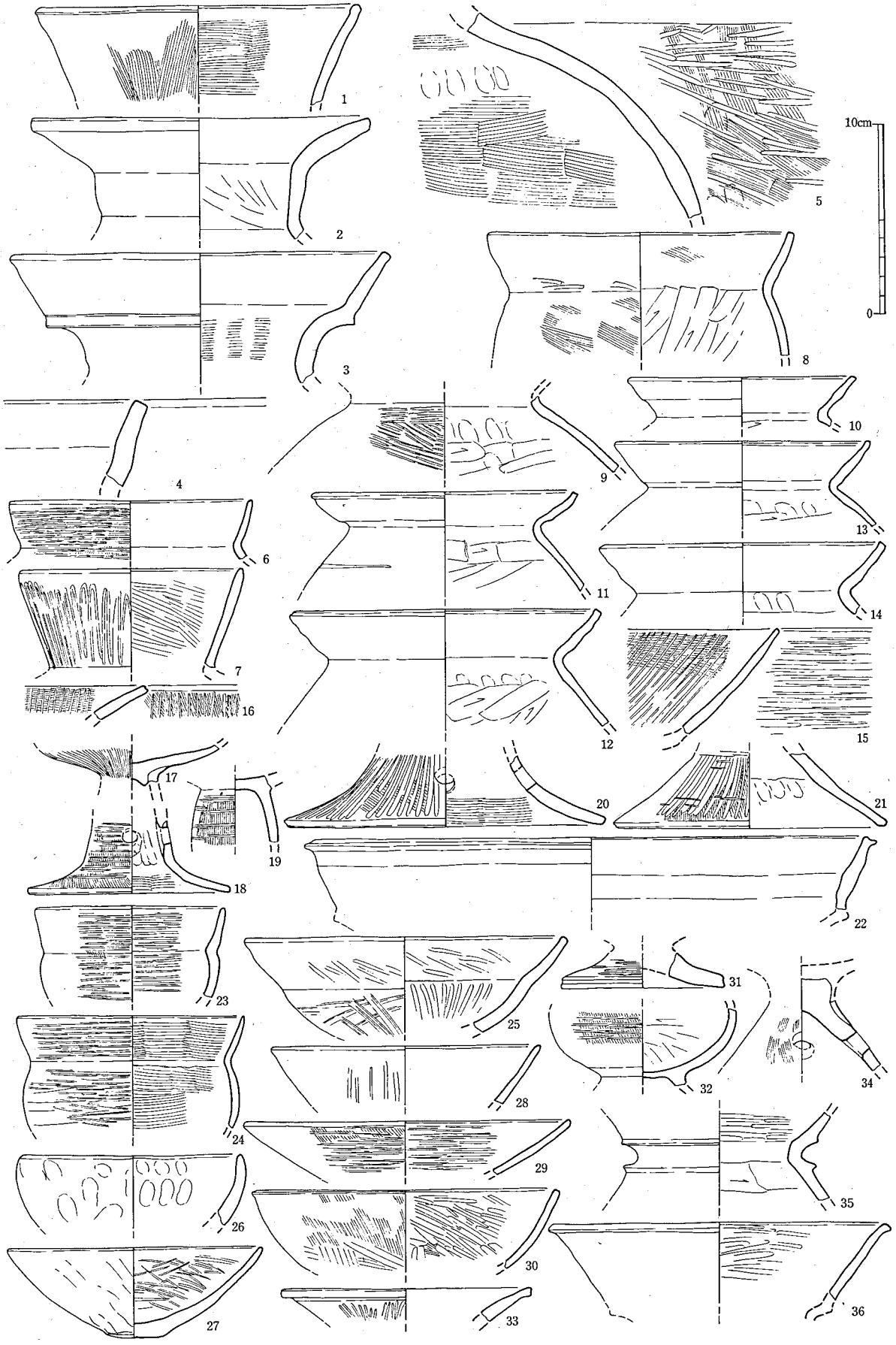


第 115 図　32 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

居跡である。住居跡の北東隅で、白褐色砂と暗褐色粘質砂を互層に積んで構築したカマド跡を検出した。住居跡は主軸を N － 22° － W、ほぼ南北に向けた方形住居跡と推測され、東西 4.0 ～ 3.8m

第63表　33号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
116-1		住33覆土上面	直口壺	口径166、残高54	粘土やや粗、1～3mm石英多	良好	赤褐色	外縦ハケ、内横ハケ、口縁端内外ナデ。端部短く外反。	1／10		577
116-2		住33上面ピット	直口壺	口径176、残高64	粘土粗、1mm長石・石英多	良好	外淡橙褐色、内灰黄褐色	屈曲して外反する特徴的な器形。外～口縁内横ナデ、頸部内板工具ナデ？。	1／8	瀬戸内系のものか。	454
116-3		住33覆土上面	山陰系二重口縁壺	口径214、残高70	粘土粗、1～5mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄褐色	外～口縁内横ナデ、頸部内横ハケ残。	1／8		441
116-4		住33覆土上面	山陰系二重口縁壺	残高48	粘土粗、1mm長石・石英多	やや甘い	褐灰色	器壁が厚く大形品か。内外ナデ。	小片		582
116-5		住33覆土上面	壺肩部片		粘土粗、1mm石英・クサリ礫多	良好	外赤褐色、内黄橙褐色	器壁が厚く大形品か。内ハケ、一部指頭圧痕。外ハケ後ミガキ。	破片		458
116-6		住33覆土	直口壺	口径126、残高36	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	口縁短く直立。外ハケ後横ミガキ、内ナデ。	1／4		698
116-7		住33覆土上面	直口壺	口径114、残高52	粘土粗、1～5mm石英多	良好	暗褐色	外縦ミガキ、内斜めハケ。	1／6		574
116-8		住33覆土下部	直口壺	口径154、残高66	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡褐色、内淡褐黄色	胴外ハケ後ナデ、口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。口縁外にハケメ工具の当たりと考えられる凹線あり。甕との区別に悩む器形。	1／4	口縁内、胴外に煤上の褐色付着物あり	452
116-9		住33P3	庄内系甕肩部	残高38	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外暗褐色、内暗褐灰色	外左上がりタタキ、内指頭圧痕後ケズリ。	1／8	在地土器の焼成・色調と異なる	588
116-10		住33覆土上部	布留系甕	口径130、残高45	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	1／6	外面の一部に煤	445
116-11		住33覆土上面	布留系甕	口径134、残高53	粘土粗、1～3mm石英少	良好、口縁内黒斑	淡黄褐色	肩部全周しない沈線。外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	1／6		440
116-12		住33覆土下部	布留系甕	口径156、残高62	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄白褐色	口縁端部わずかに凹む。外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	1／4		453
116-13		住33覆土上面	布留系甕	口径130、残高45	粘土粗、1mm石英・金雲母多	良好	黄褐色	口縁端部内わずかにつまみ出す。外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	1／4		571
116-14		住33覆土下部	布留系甕	口径146、残高37	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色を基調	外～口縁内ナデ、胴内ケズリ。	1／8		586
116-15		住33覆土上部	高杯杯部片	残高54	粘土細か、1mm石英極少	良好	外褐黄色、内黄褐色	外ミガキ、内ハケ後暗文風ミガキ。	小片		579
116-16		住33覆土下部	高杯杯部片	残高18	粘土細か、1mm石英極少	良好	橙褐色	口縁端微かに凹む。外縦ハケ後縦ミガキ、内斜めハケ後縦ミガキ。	小片		585
116-17		住33覆土上面	高杯杯底部片	残高20	粘土細か、1mm石英・クサリ礫少	やや甘い	淡褐色	外ハケ、内摩滅。破損面から杯と脚の接合のため粘土を貼付したと判る。	1／6		443
116-18		住33覆土上部	高杯脚部片	裾径53、残高38	粘土細か、1mmクサリ礫少	良好	淡橙褐色	外ハケ後ミガキ、脚内ナデ、杯内ミガキ。半乾燥時に穿孔。	1／8		456
116-19		住33覆土上面	高杯脚部片	残高37	粘土粗、1mm長石極少	良好	黄橙褐色	外ハケ後ミガキ、脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	全周		576
116-20		住33覆土上部	高杯脚裾部片	裾径164、残高37	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外橙黄褐色、内淡黄褐色	外斜めハケ後太い縦ミガキ。内裾端ハケ後ナデ。乾燥前に穿孔1ケ所残。	1／8		446
116-21		住33覆土上面	高杯脚部片	裾径142、残高39	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐黄色	緩やかに裾が広がり端部に至る。外斜めハケ後太い縦ミガキ、内ナデ。	1／8		444
116-22		住33覆土上面	山陰系大形鉢	口径306、残高38	粘土粗、1mm石英・金雲母少	良好	外黄灰褐色、内淡黄褐色	口縁端部を外に強くつまみ出す。内外ナデ。	1／8		581
116-23		住33覆土上面	外反口縁鉢	口径96、残高48	粘土細か、1mm石英極少	良好	淡褐橙色	内外ミガキ。頸部外面にハケ少し残。	1／8		450
116-24		住33覆土上部	外反口縁鉢	口径118、残高61	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	良好	褐赤色	胴外ケズリ後外ミガキ。内ハケメ、頸部内接合痕残。	1／4		455
116-25		住33覆土	外反口縁鉢	口径164、残高50	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外橙黄褐色、内灰黄褐色	胴外板ナデ、口縁外～内太く雑なミガキ。	1／8		452
116-26		住33覆土上部	直口鉢	口径110、残高38	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡褐灰色	内外極めて雑なナデ仕上げ。	1／8		451
116-27		住33覆土上部	直口鉢	口径132、器高47、底径30	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄白褐色	底は小さな平底。外ナデ、内雑なミガキ（方向に規則性無し）。	1／2		457
116-28		住33覆土上面	直口鉢	口径136、残高32	粘土粗、1mm長石少	良好	褐色	内外摩滅、外縦ミガキ？。	1／10	傾き不安。	578
116-29		住33覆土上部	直口鉢	口径168、残高29	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	良好、口縁内外黒変	橙褐色	外ハケ後、内外ミガキ。	1／10		575
116-30		住33覆土上面	直口鉢	口径152、残高42	粘土細か、1mm石英少	良好	外淡褐白色、内淡褐色	端部面をなし、凹む。外ハケで、下部は粗い。内ハケ後ミガキ。	1／6		573
116-31		住33覆土上部	脚付鉢脚部	裾径84、残高18	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外ハケ後ミガキ、内ナデ。	1／6		584
116-32		住33覆土上面	脚付鉢胴下部	残高48	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡褐色、内淡黄褐色	外ハケ後ミガキ。脚と胴の接合部外ナデ。内ケズリ後ナデ。	1／3		449
116-33		住33覆土上面	小形器台受部？	口径126、残高17	粘土粗、1mm大長石・石英少	良好	橙褐色	内外横ナデ後、外暗文風縦ミガキ。端部面をなす。	1／8	山陰系か。	583
116-34		住33覆土	小形器台脚部	残高48	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い、内灰変	淡灰黄褐色	外ハケ後ナデ、内摩滅。乾燥前の穿孔1ケ所に残。	上部は全周		448
116-35		住33覆土上部	山陰系鼓形器台	括れ部径86、残高47	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡褐白色、内淡黄褐色	下部の器壁がやや厚い。外ナデ、受部内ミガキ、裾部内ケズリ。	1／4		447
116-36		住33覆土上面	山陰系鼓形器台	口径174、残高40	粘土粗、1～3mm長石・石英少	良好	外黄褐色、内黄褐灰色	外ナデ、内横ミガキ。	1／6		580



第116図　33号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

を測り、南北 1.5m 程を検出している。壁は 20cm 程の高さが遺存し、覆土は灰黄褐色細砂。

カマド　住居跡の北西隅に、白褐色砂と暗褐色粘質砂を互層に積んで構築する。住居跡壁を検出したレベルよりも高い位置でその存在が確認されていたので、良好な個所では高さ 30cm 程遺存している。床面は住居跡床よりも低くなるが、掘り過ぎによる。床面は火を強く受けた痕跡もなかったため、恐らく煙道部と思われ、床面の幅は 0.25m 前後。西壁側の積土が丁寧に白褐色砂と暗褐色粘質砂の互層となるのに対し、東側の積土は暗褐色～褐色粘質砂を主体とした雑な積み方を呈す。

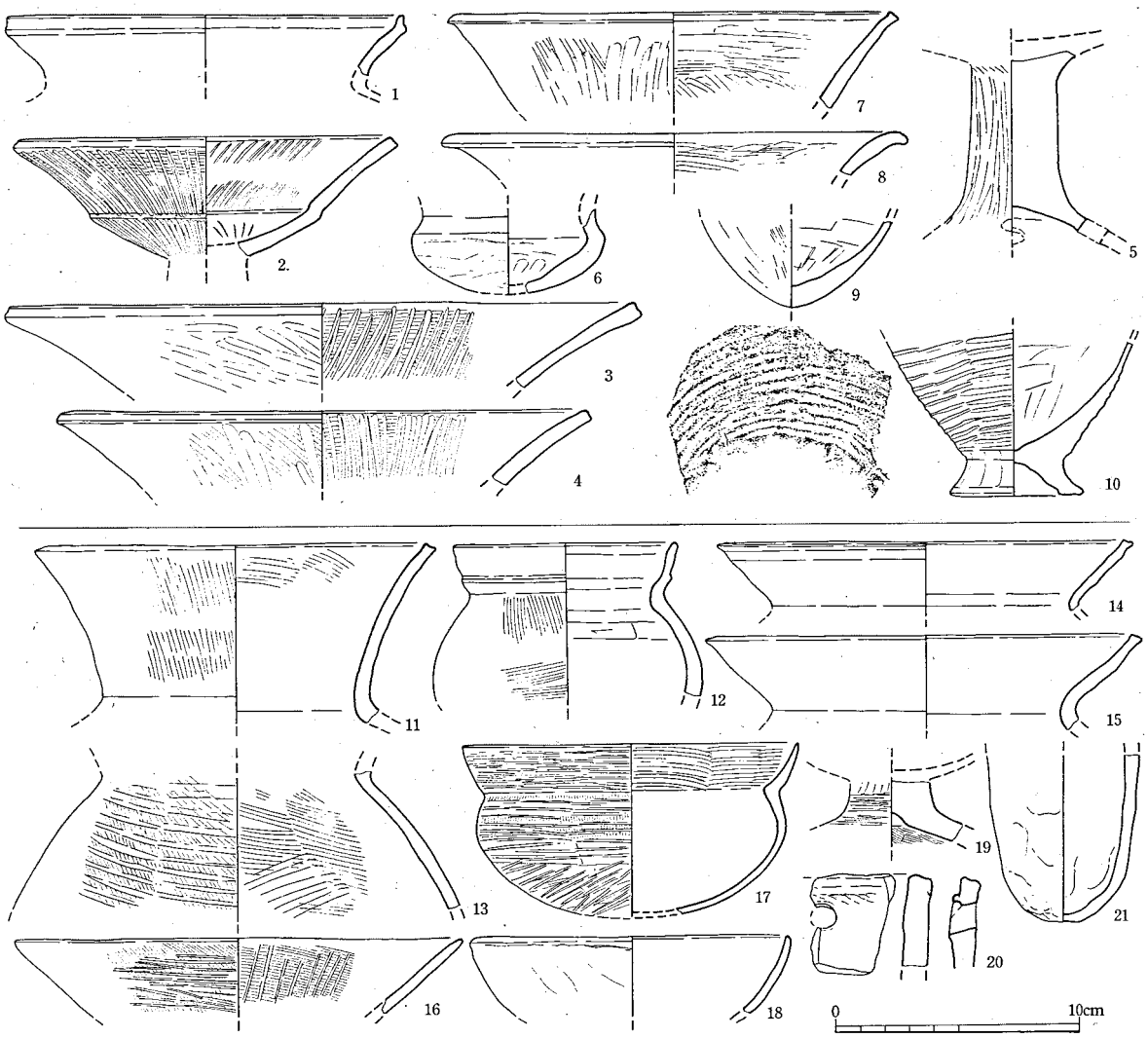
出土遺物（図版 43、第 117 図、第 64 表）　いずれも覆土出土品。11 は直口壺、12 は小形の山陰系二重口縁壺。13 は外面タタキ後ハケ、内面ハケ仕上げで、畿内五様式系の甕胴上部片か。14・15 は布留系甕で、口縁端部を外につまみ出す。16 は高杯口縁、17 は精製の外反口縁鉢。18 は直口鉢で口縁端部粘土の一部を外に曲げ肥厚させる。19 は精製の脚付鉢脚部片で、20・21 はタコ壺。

36 号竪穴住居跡（図版 22、第 119 図）

3 区の中央やや東部、6 号竪穴住居跡、9 号竪穴住居跡に挟まれた場所に位置する。当初 6 号住居跡カマド煙道付近と一連の竪穴住居跡ではないかと考えて掘り下げ、6 号住居跡、9 号住居跡をほぼ完掘した段階でその存在に気が付いた。そのため壁の上部を失ってしまったが、輪郭はほぼ確実である。9 号住居跡の掘削により北側の大半を失うが、主軸をほぼ南北、N － 25° － W に向け

第 64 表　34・35 号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
117-1		住 34 床面下層	庄内系甕	口径 160、残高 27	粘土粗、1～3 mm 石英少	良好、口縁内黒変	褐色	口縁端部を上方に拡張。内外横ナデ。	1／12	口縁内下部うっすら黒変	1017
117-2		住 34 覆土	高杯杯部片	口径 150、残高 48	粘土細か、1～3 mm 石英少	良好	外黄橙褐色、内明褐色	外ハケ後縦ミガキ、口縁内縦ミガキ（摩滅）、杯底内ハケ工具痕残。	1／4		1014
117-3		住 34 覆土上面	高杯杯部片	口径 250、残高 35	粘土粗、1～3 mm 石英少	良好	外淡灰褐色、内淡黄褐色	外太めのミガキ、内横ハケ後縦ミガキ。	1／12	小片のため、径・傾き不安	1016
117-4		住 34 覆土	高杯杯部片	口径 212、残高 31	粘土細か、1 mm 石英・長石極少	やや甘い	橙黄褐色	内外斜め・横ハケ後縦ミガキ。	1／12	小片のため、径・傾き不安	1012
117-5		住 34 覆土	高杯脚部片	残高 74	粘土粗、1 mm 大長石・石英少	やや甘い、灰変	黄白褐色	中実の脚柱部。外縦ミガキ。0・3・5・7.5 時の方向に乾燥前の穿孔残り、本来は 5 孔か。	全周		1010
117-6		住 34 床面下層	外反口縁鉢？	残高 34	粘土粗、1～3 mm 石英少	良好	淡黄褐色	鉢としたが特異な器形。外板ナデ、内ナデ。	1／4		1018
117-7		住 34 覆土	山陰系鼓形器台？	口径 174、残高 40	粘土粗、1～3 mm 石英少	良好	淡黄褐色	口縁端部を上方に拡張。内外同一工具によるミガキ。外ミガキ前ハケ残。	1／12	小片のため、径・傾き不安	1013
117-8		住 34 覆土上面	山陰系鼓形器台	口径 178、残高 18	粘土細か、1 mm 長石極少	良好	淡橙褐色	口縁端部やや垂れ下がる。外ナデ、内ケズリ後ミガキ。	1／12	小片のため、径・傾き不安	1015
117-9		住 34 覆土	タコ壺？	残高 34	粘土細か、1 mm 石英・長石少	良好	外褐黄色、内褐色	タコ壺にしては内面の板ナデは道和感あり。外板ナデ。	全周		1011
117-10	43	住 34 覆土	製塩土器	裾径 56、残高 63	粘土粗、1～3 mm 石英少	良好	外暗褐色、内黄橙褐色	胴外タタキ、胴内板ナデ。脚外ケズリ後ナデ、脚内ナデ。	1／3	遺存状況が良好。	1009
117-11		住 35 覆土	直口壺	口径 154、残高 73	粘土粗、1～3 mm 石英少	やや甘い	外淡褐色、内淡黄褐色	内外ハケ後横ナデ。	1／12		207
117-12		住 35 覆土	小形二重口縁壺	口径 88、残高 6.3	粘土粗、1～3 mm 石英少	良好	淡黄褐色	小形の山陰系二重口縁壺。胴外ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ後ナデ。	1／6		208
117-13		住 35 覆土	五様式径甕？	残高 54	粘土粗、1～5 mm 石英少	良好	褐黄色	外タタキ後ハケ、内ハケ仕上げで、畿内五様式系の甕胴上部片か。	1／6		279
117-14		住 35 覆土	布留系甕	口径 162、残高 29	粘土粗、1 mm 石英少	良好	外淡黄褐色、内暗褐灰色	口縁端部をわずかに外につまみ出す。内外横ナデ。	1／6		206
117-15		住 35 覆土	布留系甕	口径 166、残高 39	粘土粗、1～3 mm 長石・石英少	やや甘い	外褐白色、内淡黄褐色	口縁端部をわずかに外につまみ出す。内外横ナデ。	1／12		278
117-16		住 35 覆土上面	高杯杯口縁部片	口径 180、残高 32	粘土粗、1～3 mm 石英少	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内横ハケ後縦ミガキ。	1／12	小片のため、径・傾き不安	280
117-17	43	住 35 覆土	外反口縁鉢	口径 136、頸径 120、復元器高 71、胴高 51	粘土細か、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴下部外ケズリ、同上部外ハケ後外ミガキ。口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／2 弱		205
117-18		住 35 覆土	直口鉢	口径 126、残高 32	粘土粗、1～3 mm 石英少	良好	淡褐白色	口縁端部粘土の一部を外に曲げ肥厚させる。内外粗いナデ仕上げ。	1／8		210
117-19		住 35 覆土上面	脚付鉢脚部	残高 24	粘土細か、1 mm 石英少	良好	橙褐色	外縦方向の稜後ミガキ、内下部ハケ、内頂部ナデ。	全周		209
117-20		住 35 覆土	タコ壺	残高 38	粘土粗、1～3 mm 石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	小片		296
117-21		住 35 覆土	タコ壺	残高 69	粘土細か、1～3 mm 石英少	やや甘い	暗灰褐色	内外ナデ。	1／4		277



第 117 図　34・35 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

た竪穴住居跡と考えられる。東西 3.0m を測り、南北 1.7m を検出している。壁は良好な個所で高さ 20cm 程を測り、覆土は暗褐色細砂である。南西隅にピット、南東隅近くで壁に沿って幅 20cm 余りの壁溝が検出された。

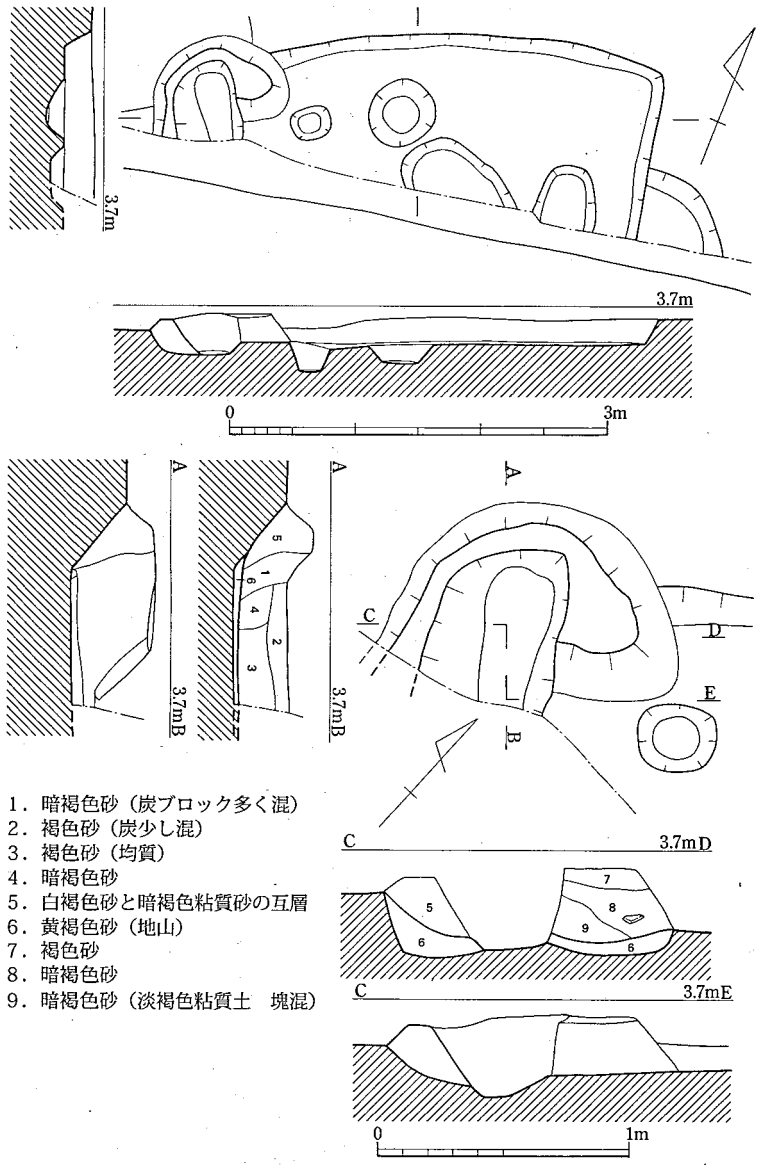
出土遺物は 6 号住居跡カマド煙道の北外から検出された。本住居跡覆土上部に含まれていたものと考えられるが、一括性は比較的良好と思われる。

出土遺物（図版 43、第 120 図、第 65 表）　1 は大形壺胴部片、2 は直口壺口縁部片。3 は壺として図示したがあるいは甕か。

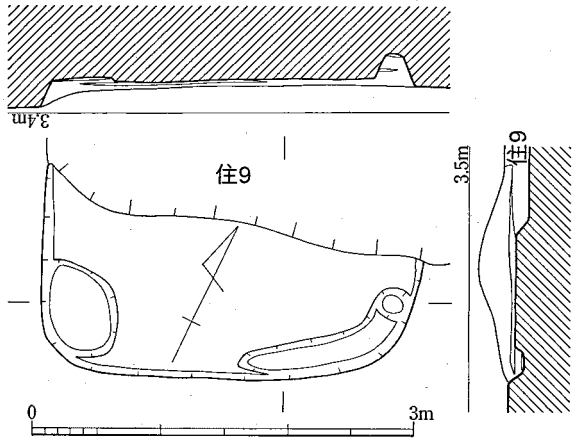
4 は在地系甕で、外面粗い板ナデ、内面粗いハケ後ナデで仕上げる。

5～8 は五様式系甕と推測されるもので、9 はその口縁部。外面ハケで仕上げ、内面にもハケを残すものが多いが、5 底部近く、8 肩部にはタタキを残す。7 胴下部は細かいハケを切る粗いハケが見え、胴上部内面には接合痕を残す。口縁端部工具の当たりのような条痕が残る。8 は胴部外面のハケメの切合いが良好に観察できる。

10 は在地系高杯の脚～杯下部破片である。0・3・6 時の方向に半乾燥時に穿孔するが、9 時の方向には穿孔が認められない。11 は脚付鉢で、内面を丁寧な放射状ナデを施す。



第 118 図　35 号竪穴住居跡・同カマド実測図
（1／60・1／30）



第 119 図　36 号竪穴住居跡実測図
（1／60）

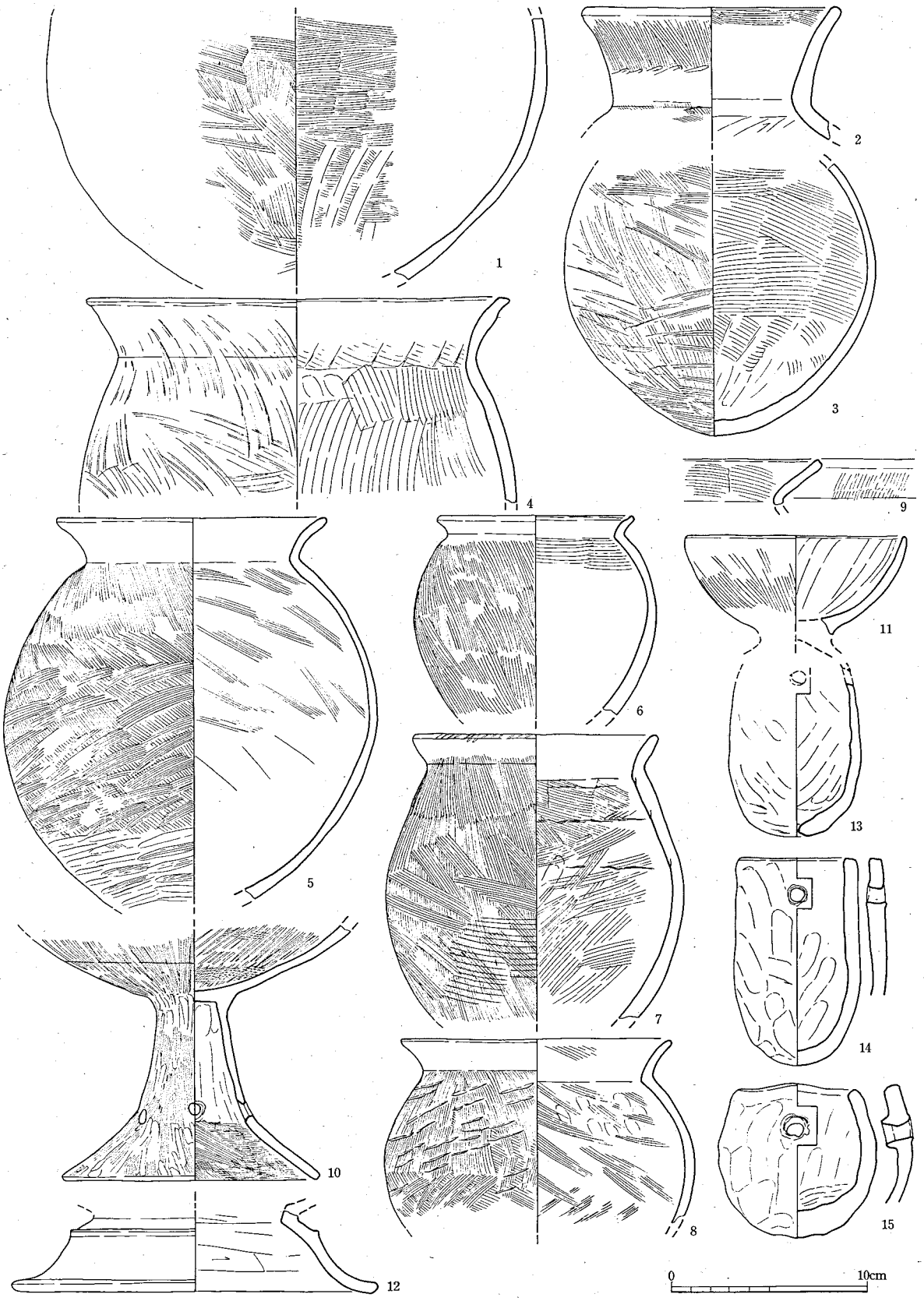
12 は山陰系鼓形器台であるが、括れ部下の稜の突出が弱い。

13 ～ 15 はタコ壺で、13 は口縁下の孔の他に、底部の絞り痕を完全に閉じず孔とする。

37 号竪穴住居跡（図版 22・23、第 121 図）

3 区の東南部、5・22 号竪穴住居跡の東南、38 号竪穴住居跡の東に位置する。調査区外へと広がり、住居跡の西半分を検出したにとどまるが、輪郭は明瞭であった。主軸をほぼ南北 N － 32° － W に向けた方形の住居跡で、北側壁に沿って煙道を長く伸ばしたカマドを付設している。南北 3.6 ～ 3.7m を測り、東西 3.0 ～ 1.5m を検出した。壁の遺存状況の良好な個所では高さ 40cm を超え、覆土は暗灰褐色細砂であった。床面では 5 基のピットを検出しているが、主柱穴は明確でなかった。住居跡からは多量の土器が出土しているが、主として西側から、ある程度、竪穴部が埋没した段階で、投棄されたものと考えられる。

カマド（図版 23・24、第 122 図）　住居跡の北壁に沿って付設されており、煙道部を中心に遺存状況が良好である。カマドは主として 3 ～ 5 cm 厚の灰黄褐色細砂と 2 ～ 3 mm 厚の褐色粘質砂を互層に積んで構築している。燃焼部を示す焼面は北壁から 0.75m、西壁から 2.5m の位置にあり、袖の方向は住居主軸とは斜行している。燃焼部での袖の間隔は 0.45m 程である。煙道は北壁に沿って伸び、1.6m ほどはトンネル状となっている。いくつかの断面では黄褐色粘質土で埋没していた状況が確認でき、幅 10cm、高さ 10cm 程であった。煙道はほとん



第 120 図　36 号竪穴住居跡出土土器実測図（1／3）

どが水平に走っていたと覆われるが、北壁から 0.6m、西壁から 0.2m のところで立ち上がり、竪穴外へ排煙していたと思われる。

以上のように本カマドは煙道を中心に、本来の形状を良く留めているといえるが、煙道に比べると、袖部は高さ 15cm 程しか遺存していない。発掘時には遺存の良好な煙道端部から検出を進めていったため、形態はほぼ間違いない。竪穴住居跡の廃棄に伴い、意図的にカマドの上部を壊して除去したことを示唆するのではなかろうか。

出土遺物（巻頭図版 10、図版 44 ～ 47、第 123 ～ 131 図、第 66 ～ 70 表）　1 は畿内系二重口縁壺で、口縁屈曲部に 2 個 1 単位の円形浮文を貼付し、その上面に竹管文を押捺する。

2 ～ 5 は畿内系の直口壺。6 は口縁部の伸びが大きく、端部を内にわずかに肥厚させる。

7 ～ 14・23 は山陰系二重口縁壺。7 は大形品と考えられるが、頸部の括れ、伸びは小さい。23 は肩部外面にハケメ工具刺突による綾杉文が施文される。15 は頸部に高い断面コの字状突帯を貼付するもので、口縁が大きく開く山陰系二重口縁壺と推測される。16 は中形の山陰系二重口縁壺。カマド煙道積土中から出土した 17 も中形の二重口縁壺であるが、1 次口縁屈曲部の稜が甘く、シャープさにかける。18 は小形の畿内系二重口縁壺。23 は大形品でほぼ完形に復元されるものである。

19 ～ 22 はやや大形の精製小形丸底壺である。20 以外はいずれも外面は胴下部ケズリ、胴上部ハケ後ミガキを施す。24 は極めて小形の二重口縁壺で、内外ミガキ仕上げの精製品。

25 ～ 36 は小形丸底壺で、ミガキを施さず器壁の厚い雑な作りの 26 を除けば、いずれも精製品である。25 は他に比べ、口縁部の伸びが大きい。精製品では外面は胴下部ケズリ、胴上部～口縁ハケメの後、ミガキを施すものが多いが、35 は頸部の括れのない器形で、胴上部・口縁部外面にミガキに先立つナデの指頭圧痕を良くとどめている。

36 は五様式系の甕で頸部外面ハケメ工具のあたりのような段が見られる。38 は庄内系甕で、口

第 65 表　36 号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
120-1		住 36 覆土上部	壺胴部	残高 135	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	淡褐黄色	外同状部横ハケ後胴下部ハケ。内下部帯状にハケナデ消し。	1／3		1003
120-2		住 36 覆土上部	直口壺	口径 128、残高 68	粘土粗、1 ～ 3 mm 長石・石英少	良好	褐色	器壁やや厚い。外ハケ後ナデ。口縁端内ハケ後口縁内ナデ。胴内ケズリ。	1／3		1008
120-3		住 36 覆土上部	中形壺胴部	胴部径 166、残高 137	粘土細か、1 ～ 3 mm 石英少	良好	外褐黄色、内暗褐色	外胴中部粗い縦ハケ後、胴上部細かい横ハケ・胴下部細かい横ハケ。内ハケ後下部ナデ上げ。	1／4	外面煤付着、あるいは甕か。	990
120-4		住 36 覆土上部	在地系甕？	口径 224、残高 104	粘土細、1 ～ 3 mm 石英・クサリ礫少	良好	外黄橙褐色、内淡褐色	口縁緩やかに外反し、端部つまみ出し。外粗い板ナデ、内粗いハケ後ナデ。	1／4	頸部を除く外面に煤付着。	1005
120-5	43	住 36 覆土上部	五様式系甕？	口径 134、頸径 110、胴径 190、残高 193	粘土細か、1 mm 石英・長石少	やや甘い	黄白褐色	胴外下部タタキ後胴外ハケ。胴内板工具ナデ。口縁内外ナデ。	口縁・胴とも 2／3	外面全面煤、胴内下半コゲ。	998
120-6		住 36 覆土上部	五様式系甕？	口径 96、胴径 124、残高 102	粘土粗、1 ～ 3 mm 長石・石英少	良好	褐色	口縁短く端部角張る。胴外縦ハケ、胴上部内横ハケ、胴下部ナデ。	1／4	外火を受け黒変、赤変	1000
120-7	43	住 36 覆土上部	五様式系甕？	口径 120、胴径 150、残高 154	粘土細か、1 mm 石英・長石少	良好	褐色	胴外細かいハケ後、胴下部粗いハケ。胴内ハケで仕上げ、接合痕残。口縁端部工具の当たりのような条痕残。	1／2	全体的に煤付着	997
120-8	43	住 36 覆土上部	五様式系甕？	口径 134、頸径 118、胴径 160、残高 102	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	淡黄褐色	タタキ後、胴下部左上がりハケ後胴下部右上がりハケ後胴上部縦ハケ。胴内指頭圧痕後ハケ。口縁内ハケ残す。	口縁 1／2、胴部全周	胴下部内コゲ、胴外下部煤付着し、火を受け変色	1002
120-9		住 36 覆土上部	五様式系甕？	残高 24	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	外褐色、内黄褐色	内外ハケ。	小片	外面に煤付着	1161
120-10	43	住 36 覆土上部	在地系高杯	裾径 124、残高 128、脚高 94	粘土細か、1 ～ 3 mm 石英・クサリ礫少	良好	黄橙褐色	0・3・6 時の方向に半乾燥時穿孔するが、9 時の方向には穿孔せず。外ハケ後縦ミガキ。杯内斜めハケ後暗文風縦ミガキ。脚口ナデ下ろし、脚裾内ハケ。	脚裾 3／4、脚柱全周		996
120-11	43	住 36 覆土上部	脚付鉢	口径 108、残高 50	粘土細か、1 ～ 3 mm 石英少	良好	黄白褐色	外ハケ、内丁寧な放射状ナデ。	全周		1001
120-12		住 36 覆土上部	山陰系鼓形器台	裾径 178、残高 41	粘土粗、1 ～ 3 mm 石英少	良好	外淡褐黄色、内淡褐灰色	外横ナデ、裾内ケズリ、括れ部内ミガキか。括れ部下の稜の突出弱い。	1／8		1019
120-13		住 36 覆土上部	タコ壺	残高 77	粘土細か、1 ～ 3 mm 石英・長石少	良好	外暗褐黄色、内暗褐色	底部の絞り痕を完全に閉じず孔とする。内外ナデ。	底全周		997
120-14	43	住 36 覆土上部	タコ壺	口径 48、器高 103	粘土粗、1 ～ 3 mm 長石・石英少	良好	暗褐色	内外ナデ。	口 1／2、底全周		1007
120-15	43	住 36 覆土上部	タコ壺	器高 75				内外ナデ。	ほぼ完形		1006

縁端の内の肥厚、胴外面の粗な左上りタタキが特徴的である。

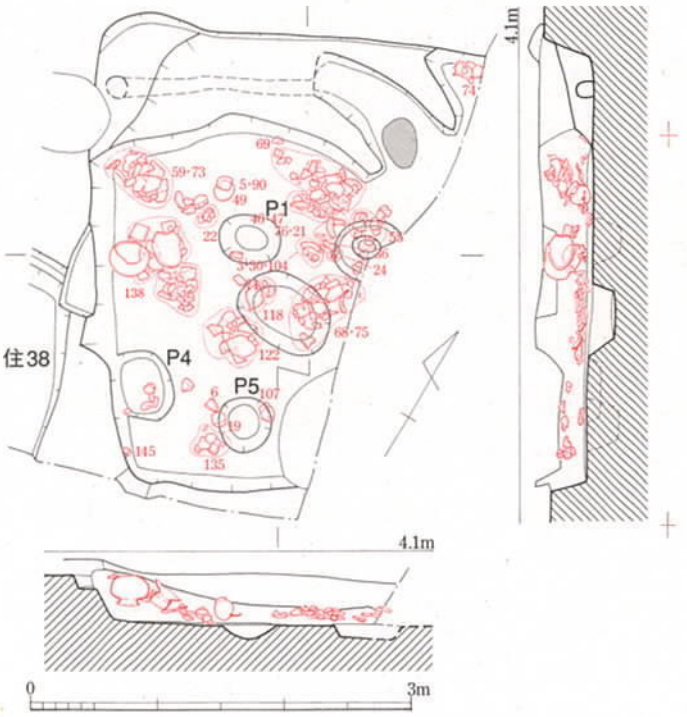
39～90は布留系甕。全体的に見れば口縁端部を断面三角形につまみ出すものが多いが、39は口縁端を内に肥厚させる小片。40は小形で器高の低い器形を呈する。43・55は肩外面ハケメ工具小口刺突文を巡らし、49は肩部ハケメ工具小口刺突文を、0・2・5・7・10時の方向に施すことが確認できた。46は外面摩滅のため調整不明であるが、肩部に波状沈線文巡らす。52肩部は粗い斜めハケ後、粗い横ハケを施し、肩部に2／3周のみの雑な沈線を巡らす。53は口縁端部内面の肥厚が顕著で、肩部に工具刺突列点文が3個所残る。54はほぼ完形に復元される。

57は肩部に櫛描波状文を施文し、胴部外面のハケメの切合いが良く観察できる。57・66・86は胎土に土器片と思われる混和材を含むことが特徴的である。

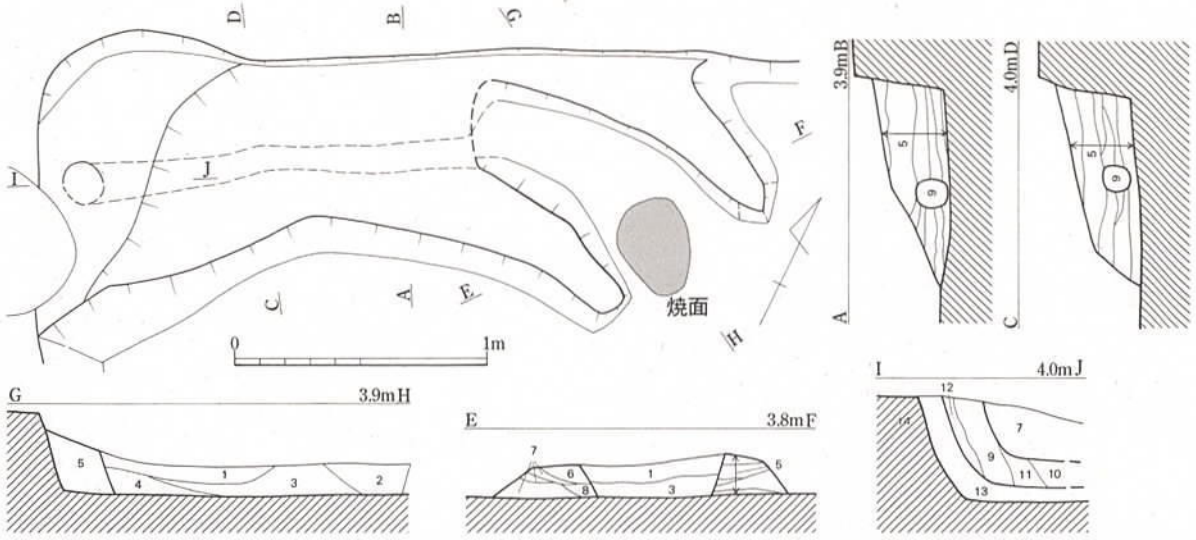
62は頸部内面に、ケズリ時に生じた粘土塊が付着する。68は肩部・胴中部にハケメに先行する左上りの粗いタタキを残し、櫛描波状文を施文。72は頸部内面の調整が良好に遺存している。

73はほぼ完形に復元されるもので、頸部外面に薄く赤色顔料を塗布し、図示はしていないが、77頸部外面にもうっすら付着する可能性がある。

75はほぼ完形に復元されるもので、



第121図　37号竪穴住居跡実測図（1／60）

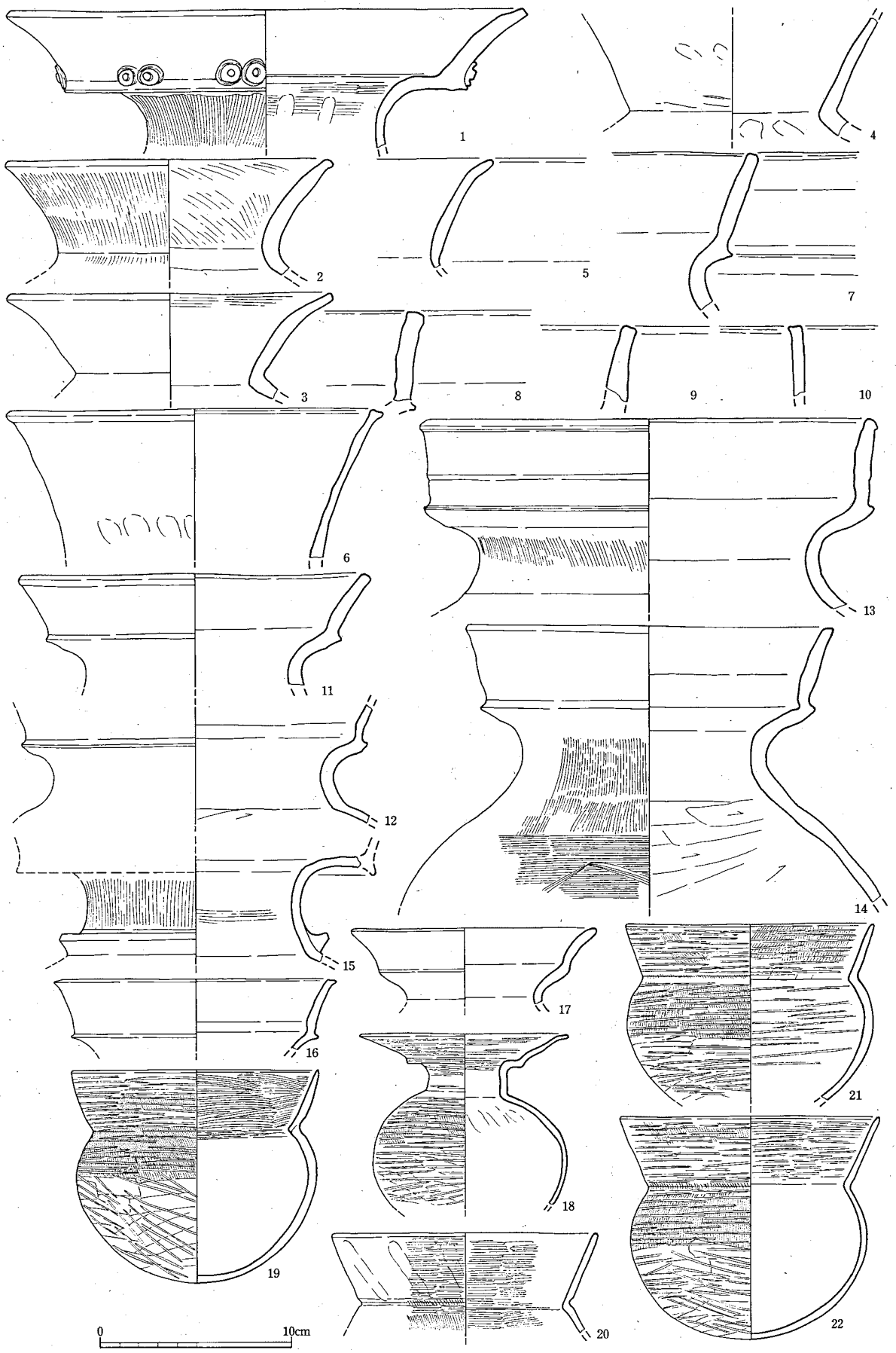


1．黄灰褐色粘質細砂（焼土粒混）
2．灰黄褐色細砂
3．褐色細砂（焼土粒多く混）
4．黄灰色細砂
5．3～5㎝厚灰黄褐色細砂（2～3㎝厚褐色粘質土が脈状に入る）
6．暗褐色粘質砂
7．灰黄褐色粘質砂
8．黄白色細砂
9．黄褐色粘質土
10．9に同じ（煙道埋土）
11．黄灰色細砂（斑状に褐色粘質土混）
12．明褐黄色粘質砂
13．灰黄色細砂（斑状に褐色粘質土混）
14．灰黄白色細砂（地山）

第122図　37号竪穴住居跡カマド実測図（1／30）

第66表　37号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

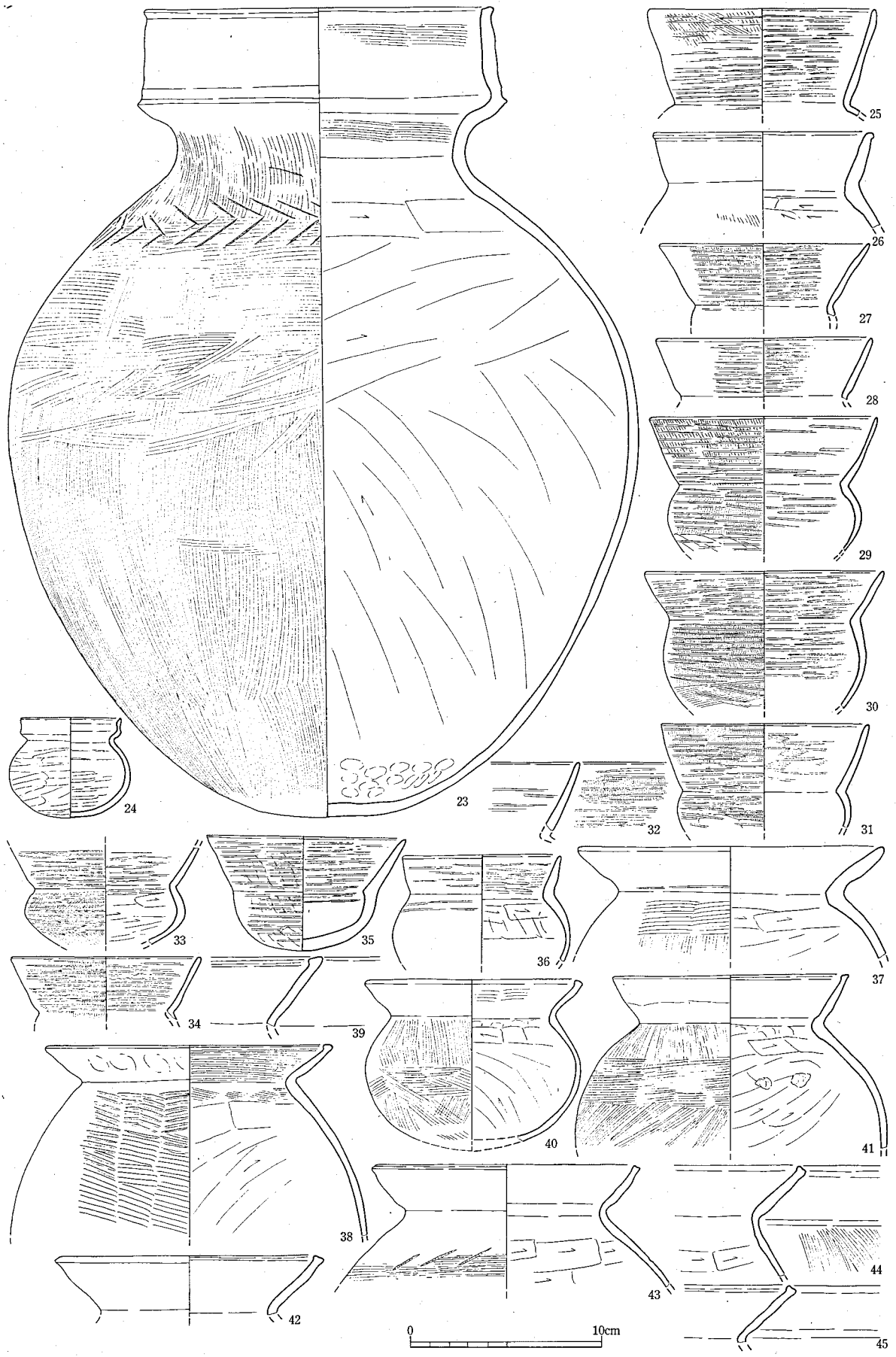
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
123-1		住37南部一括	畿内系二重口縁壺	口径268、残高72	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い、器肉中央黒変	外橙褐色、内淡黄褐色	屈曲部に2個1単位の円形浮文を貼付し、竹管文押捺。頸外縦ハケ、頸内横ハケ後ナデ、口縁内外ナデ。	1／6		1294
123-2		住37 no.21	直口壺	口径166、残高60	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	口縁内外ハケ後ナデ、胴部内ケズリ。	1／4		1187
123-3		住37 no.19	直口壺	口径168、残高55	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄橙褐色	口縁内外横ナデ、胴内ケズリ（摩滅）。口縁端内にハケメ残。	1／3		1185
123-4		住37西部覆土	直口壺	残高62	粘土粗、1～3mm長石・石英少	良好	外淡褐黄色、内淡黄褐色	端部欠損。口縁内外ナデで、頸部外に工具痕かと思われる凹みあり。	1／8		1273
123-5		住37no.5	直口壺	残高58	粘土粗、1mm大長石・石英少	やや甘い	外淡褐灰色、内淡黄褐色	外横ナデ、内摩滅。	小片	外面うっすら煤付着。	1168
123-6		住37 no.28	直口壺	口径186、残高75	粘土粗、1～3mm長石・石英少	やや甘い	外暗灰褐色、内黄褐色	口縁部の伸びが大きく、口縁端部を内にわずかに肥厚。内外ナデ。	1／4		1193
123-7		住37 no.13	山陰系二重口縁壺	残高82	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	外淡黄褐色、内黄白褐色	大形品と考えられるが、頸部括れ、伸びは小さい。内外ナデ。	小片		1176
123-8		住37床面	山陰系二重口縁壺	残高47	粘土粗、1mm石英少	良好	外黄褐色、内淡褐灰色	内外ナデ。	小片	口縁上面煤付着	1286
123-9		住37覆土	山陰系二重口縁壺	残高40	粘土粗、1～3mm石英少	良好	白黄褐色	内外ナデ。	小片		1224
123-10		住37覆土	山陰系二重口縁壺	残高35	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	小片		1269
123-11		住37カマド内	山陰系二重口縁壺	口径174、残高60	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	褐黄色	内外ナデ。	1／6		1279
123-12		住37覆土	山陰系二重口縁壺	残高62	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄褐色～黄白褐色	口縁端欠損。頸部内外ナデ、胴内ケズリ仕上げ。	1／8		1230
123-13		住37覆土	山陰系二重口縁壺	口径230、残高100	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	やや大形、口縁端外に肥厚。外ナデ、頸部外面ハケ残。内摩滅・剥離。	1／6		1226
123-14	45	住37覆土	山陰系二重口縁壺	口径192、残高142	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡橙褐色	胴外縦ハケ後横ハケ。肩外4本1単位櫛描波状文。胴内ケズリ。	1／6残		1297
123-15		住37覆土	山陰系二重口縁壺	残高54	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁大きく開く山陰系二重口縁壺か。頸部高い断面コの字突帯貼付。内外ナデ、頸部外縦ハケ、頸部内横ハケ残。	1／3		2084
123-16		住37南部一括	中形二重口縁壺	口径138、残高38	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡褐黄色	器壁が薄く、口縁端をわずかに外につまみ出す。内外横ナデ。	1／12		1265
123-17		住37カマド煙道積土	中形二重口縁壺	口径132、残高39	粘土粗、1mm石英・クサリ礫少	やや甘い	黄橙褐色	口縁端丸く、1次口縁屈曲部の稜が甘い。内外横ナデ。	1／6		1265
123-18	45	住37遺構面（溝22）	畿内系二重口縁壺	口径108、頸径43、胴径100、残高89	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	明褐色	器壁が極めて薄い。胴外下部ヘラケズリ、胴外上部斜めハケ後胴外～口縁内ミガキ。頸部内ナデ、胴内ナデ。	口縁2／3、胴1／4		2096
123-19	45	住37 no.30	小形丸底壺	口径126、頸径108、胴径126、器高111、胴高81	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	やや甘い	淡橙黄褐色	胴外下部ヘラケズリ、胴外上部斜めハケ後外ミガキ。口縁内ハケ後疎らミガキ。胴内ナデ。	口縁7／8、胴3／4残	完形に復元される	1194
123-20		住37覆土下部	小形丸底壺	口径136、残高53	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴外ハケ後、外ミガキ。内ミガキ。	1／6		1138
123-21		住37 no.3・14	小形丸底壺	口径128、頸径114、胴径130、残高92	粘土細、1mm石英極少	良好	淡橙黄褐色	胴外下部ヘラケズリ、胴上部・口縁外斜めハケ後外ミガキ。口縁内斜めハケ後ミガキ。胴内ナデ後疎らなミガキ。	1／6		1164
123-22	45	住37no.8	小形丸底壺	口径134、頸径106、胴径122、器高117、胴高80	粘土細、1～3mm石英少	良好、底外黒反	外黄橙褐色、内橙褐色	胴外下部ヘラケズリ、胴上部・口縁外斜めハケ後外ミガキ。口縁内ミガキ、胴内摩滅。	胴完形、口縁1／2		1171
124-23	44	住37 no.12	山陰系二重口縁壺	口径180、頸径152、胴径326、器高425、胴高346	粘土粗、1～3mm石英多	良好、口縁外10cm大黒斑	外淡黄褐色、内灰黄褐色	肩部外面にハケメ工具刺突による綾杉文。胴外ハケ、口縁内ハケ後口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	ほぼ完形		1174
124-24	45	住37 no.17	小形二重口縁壺	口径51、頸径44、胴径62、器高52、胴高40	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	極めて小形の二重口縁壺。胴外ミガキ、口縁内外ナデ、胴内ミガキ。	ほぼ完形	山陰系か。	437
124-25		住37覆土	小形丸底壺	口径116、残高56	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	褐色	口縁部の伸び大きい。外斜めハケ後内外横ミガキ。	1／4		1205
124-26		住37北部一括	小形丸底壺	口径108、残高49	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色を基調	ミガキ施さず、器壁も厚く雑な作り。	1／6		1292
124-27		住37覆土	小形丸底壺	口径108、残高36	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	頸部で折損。外斜めハケ後内外横ミガキ。	1／6		1212
124-28		住37北部一括	小形丸底壺	口径112、残高32	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	内外ミガキ。	1／8		1261
124-29		住37北部一括	小形丸底壺	口径118、頸径90、胴径102、残高70	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	淡黄橙褐色	胴下部外ケズリ、胴上部・口縁外縦ハケ後外面横ミガキ。内疎らにミガキ（摩滅）。	1／4		1253
124-30		住37 no.19	小形丸底壺	口径126、頸径100、胴径106、残高72	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄橙褐色	胴外ハケ後内外ミガキ。	1／6		1184
124-31		住37北部一括	小形丸底壺	口径106、頸径86、胴径92、残高54	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	胴下部外ケズリ、胴上部・口縁外縦ハケ後外面横ミガキ。口縁内ハケ後ミガキ、胴内摩滅。	1／6		1254
124-32		住37北部一括	小形丸底壺	残高36	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	口縁外縦ハケ後内外横ミガキ（内摩滅）	小片		1260
124-33	45	住37南部一括	小形丸底壺	残高51	粘土細、1mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁端欠損。胴外ハケ後外～口縁内ミガキ。胴内ケズリ。	1／2		1444
124-34		住37覆土	小形丸底壺	口径98、残高33	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	口縁外縦ハケ後内外横ミガキ。	1／6		1217



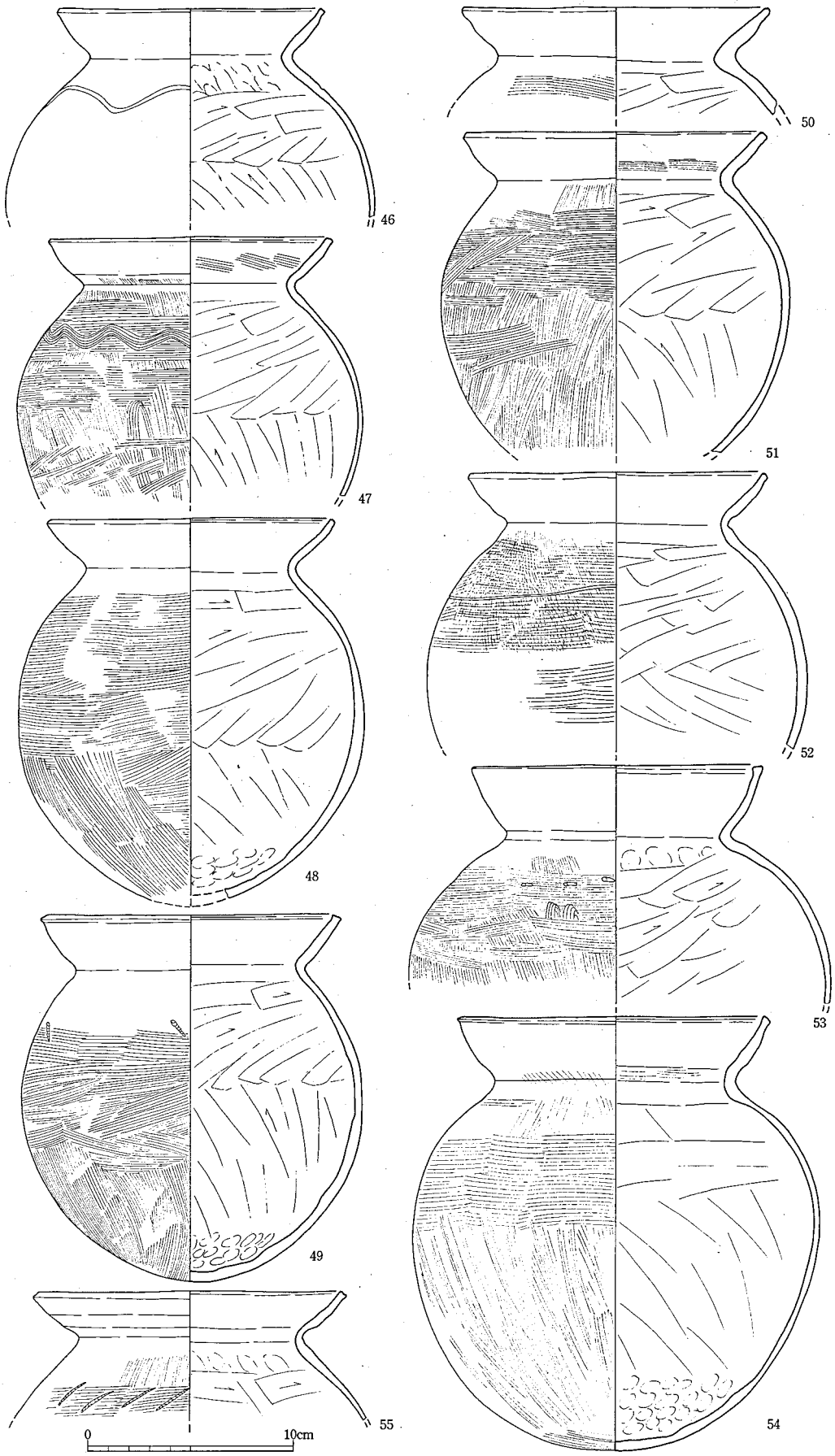
第 123 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

第67表　37号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

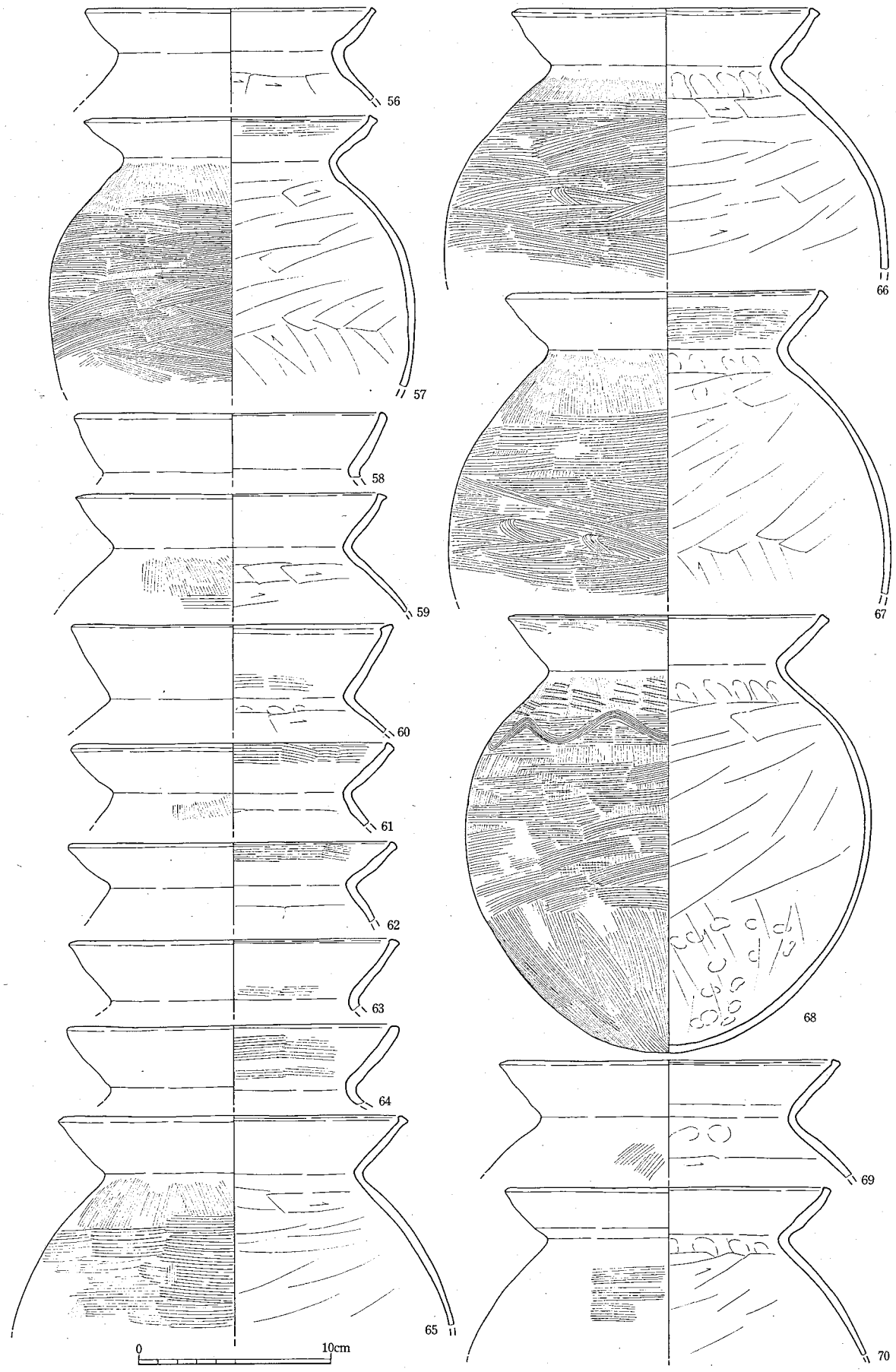
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
124-35	45	住37覆土	小形丸底壺	口径104、頸径88、器高60、胴高29	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	赤褐色	頸部の括れなし。胴下部ケズリ、胴上部・口縁部外面にナデの指頭圧痕後、外面～口縁内ミガキ。胴内ナデ。	完形		1445
124-36	45	住37 no.16	小形丸底壺	口径80、頸径76、胴径92、残高56	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	淡橙褐色	外ミガキ（摩滅）、口縁内ハケ後ミガキ、胴内板ナデ風ケズリ。	1／2		1182
124-37		住37北部一括	五様式系甕	口径156、残高59	粘土細、1～3mm石英・長石多	やや甘い、器肉中央黒変	外淡黄白褐色、内灰褐色	胴外縦ハケ後横ハケ。頸外ハケメ工具のあたりのような段。胴内ケズリ。	1／6		1256
124-38		住37覆土	庄内系甕	口径140、残高100	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡橙白褐色	口縁端内に肥厚。胴外粗な左上りタタキ、口縁外指頭圧痕、口縁内ハケ。	1／6		1209
124-39		住37覆土	布留系甕	残高36	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄橙色	口縁端を内に肥厚させる。内外横ナデ。	小片		1222
124-40	45	住37覆土	布留系甕	口径108、頸径86、胴径112、復元高89	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外黄褐色、内橙褐色	小形で、口縁端つまみ上げ。胴外縦ハケ後横・斜めハケ。口縁内ハケ残。	1／4		1201
124-41	45	住37覆土	布留系甕	口径138、残高91	粘土粗、1～3mm石英・角閃石少	やや甘い	外褐黄色、内暗灰黄褐色	口縁端内にやや肥厚。胴外肩部縦ハケ後、肩部横ハケ後、胴下部斜めハケ。胴内にケズリに先行する凹み残。	1／6	色調・胎土他とやや異なる。外面煤付着	1199
124-42		住37覆土	布留系甕	口径130、残高30	粘土粗、1～3mm石英少	良好	橙褐色	口縁端内につまみ上げ。内外横ナデ。	1／8		1215
124-43		住37床面	布留系甕	口径134、残高66	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄白褐色が基調	肩外面ハケメ工具小口刺突文巡る。胴外横ハケ、胴内ケズリ。	1／6	外面煤付着	2082
124-44		住37南部一括	布留系甕	残高48	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い	外淡黄褐色、内淡橙褐色	口縁内外ナデ、胴外縦ハケ、胴内ケズリ。	小片		1287
124-45		住37南部一括	布留系甕	残高31	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡橙褐色	内外横ナデ、端部つまみ上げ。	小片		1288
125-46		住37 no.15	布留系甕	口径128、頸径98、胴径180、残高102	粘土細、1mm石英極少	やや甘い	外淡黄褐色、内暗褐灰色	肩部波状沈線文施文。胴外摩滅、口縁内外横ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／2	外面煤付着。二次的に火を受け赤変。	1180・1179
125-47	45	住37 no.15	布留系甕	口径134、頸径102、胴径168、残高125	粘土細、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐黄色	肩部櫛描波状文。胴外は下部縦・斜めハケ、中央～肩部横ハケ、頸部下縦ハケの順。口縁内ハケ残。胴内ケズリ。	1／4	外うっすら煤付着し、所々剥離。外面ハケ良好に残る。	1181
125-48		住37北部一括	布留系甕	口径136、頸径102、胴径168、残高184	粘土細、1～3mm石英・長石多	やや甘い、内面灰変	外黄褐色、内灰黄褐色	胴外ハケは上部横ハケ下部縦ハケの順。口縁内外横ナデ。胴内ケズリ。	1／2	復元時に器形歪み、径、傾き不安。	1423
125-49	45	住37 no. 7	布留系甕	口径138、頸径111、胴径168、器高177、胴高152	粘土細、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内明褐色	肩部0・2・5・7・10時方向にハケメ工具小口刺突文。胴外ハケは上部粗い横ハケ後下部横・斜めハケ。	ほぼ完形？		1170
125-50		住37 no.22	布留系甕	口径146、残高53	粘土細、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	胴肩横ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／3		1188
125-51	45	住37覆土南部	布留系甕	口径144、頸径114、胴径170、残高155	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	胴ハケは頸部下縦ハケ、肩部横ハケ、胴下部縦・斜めハケの順。口縁内外横ナデで、内にハケ残。胴内ケズリ。	口縁・胴3／4残		2297
125-52	45	住37床面	布留系甕	口径144、頸径108、胴径184、残高135	粘土細、1～3mm石英多	やや甘い	外淡黄褐色、内暗灰褐色	肩部に2／3周の沈線文。胴上部粗い斜めハケ後、粗い横ハケ。口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	胴ほぼ全周		1284
125-53	45	住37覆土	布留系甕	口径142、頸径110、胴径210、残高115	粘土粗、1～3mm石英・金雲母少	良好	外淡黄褐色、内褐黄色	口縁端部内面の肥厚が顕著で、肩部に工具刺突列点文が3個所残。胴外ハケは頸部下縦ハケ、肩部横ハケ、胴中部縦ハケ、胴中部横ハケの順。	1／2	外面ハケ良好に残る。	1200
125-54	46	住37 no.13	布留系甕	口径144、頸径114、胴径198、器高210、胴高178	粘土粗、1～3mm石英・長石・クサリ礫多	良好	外黄褐色、内褐色	口縁端わずかに内につまみ上げ。胴外ハケは頸下縦ハケ、肩部横ハケ、胴下部板ナデ風のハケの順。口縁内外横ナデで、頸部内にハケ残。	完形	底煤のためか褐変。	1177
125-55		住37 no. 4	布留系甕	口径146、残高62	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	肩部ハケメ工具小口刺突文。胴外縦ハケ後横ハケ。胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／6強	外面煤付着し、特に口縁外面に厚い。	1165
126-56		住37北部一括	布留系甕	口径146、残高48	粘土粗、1～3mm石英・金雲母少	良好	淡黄褐色	外～口縁内横ナデ、胴内ケズリ。	1／4		1246
126-57	46	住37北部一括	布留系甕	口径144、頸径110、胴径190、残高138	粘土粗、1～8mm石英・長石・土器片多	良好	外淡褐黄色、内淡橙褐色	口縁端部内にややつまみ上げ。胴外、頸部下縦ハケ後胴中部横ハケの順。口縁内外横ナデで、口縁内ハケ残。	1／4		1252
126-58		住37カマド積土	布留系甕	口径154、残高34	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫・角閃石少		淡橙褐色	口縁立ち上がりやや直に近い。内外ナデ。	1／4		1277
126-59		住37 no.11	布留系甕	口径152、残高62	粘土粗、1～3mm石英・長石少		淡褐色	胴外縦ハケ後横ハケ。口縁内外横ナデ。胴内ケズリ。	口縁1／2、胴1／8		1172
126-60		住37北部一括	布留系甕	口径164、残高57	粘土粗、1mm石英多	良好	黄褐色	口縁内ハケ後、口縁内外横ナデ。	1／6		1247
126-61		住37	布留系甕	口径160、残高43	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外黄白褐色、内淡黄橙色	胴頸下縦ハケ、口縁内横ハケ後口縁内外横ナデ。	1／4		1241
126-62		住37覆土	布留系甕	口径164、残高41	粘土細、1mm石英・金雲母少	やや甘い	淡黄褐色	口縁内ハケ後、口縁内外横ナデ。	1／6		1227
126-63		住37北部一括	布留系甕	口径162、残高36	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁内ハケ後、口縁内外横ナデ。	1／6		1290
126-64		住37覆土	布留系甕	口径164、残高41	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡黄橙色	口縁内ハケ後、口縁内外横ナデ。	1／8		1229



第 124 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）



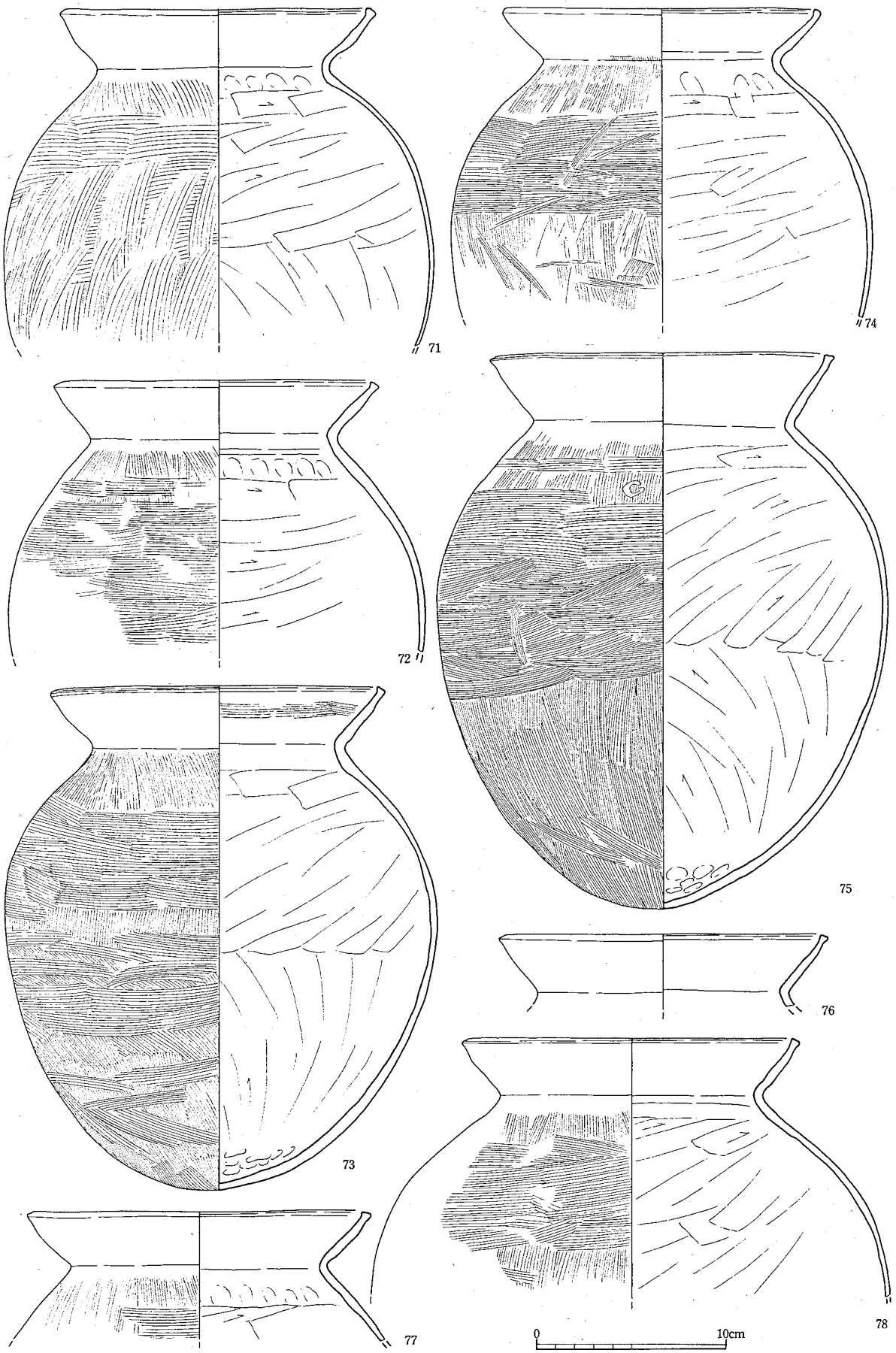
第 125 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）



第 126 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）

第68表　37号竪穴住居跡出土土器観察表（3）

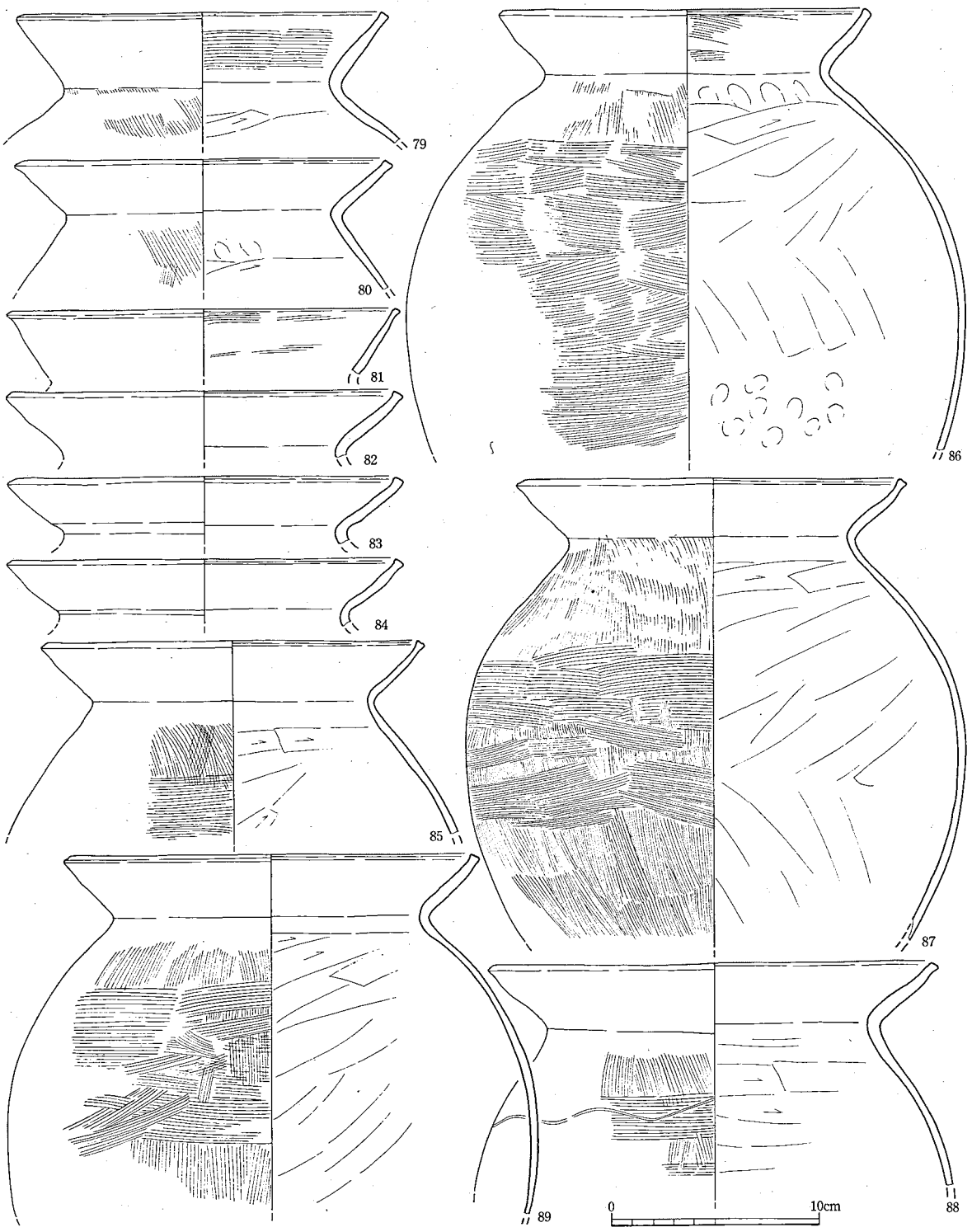
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
126-65		住37北部一括	布留系甕	口径172、残高109	粘土細、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内淡橙褐色	口縁直線的に外傾、端部をわずかにつまみ出し。胴外縦ハケ後横ハケ。	1／4		1244
126-66		住37北部一括	布留系甕	口径152、残高135	粘土粗、1～3mm石英・長石・土器片多	良好	外淡褐色、内淡黄褐色	口縁端内へつまみ出し。胴外縦ハケ後横ハケ。胴内ケズリ。	口縁1／6、胴1／2		1243
126-67	46	住37北部一括	布留系甕	口径160、頸径125、胴径212、残高157	粘土細、1～3mm石英・長石・クサリ礫少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	口縁端内へつまみ出し。口縁内ハケ後、口縁内外横ナデ。胴ハケは頸下縦ハケ後胴中央横・斜めハケ。胴内ケズリ。	口縁全集、胴7／8		1250
126-68	46	住37 no.20	布留系甕	口径158、頸径120、胴径210、器高225、胴高200	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い、胴肩2個所に黒斑	外淡黄褐色、内褐色	肩部に櫛描波状文施文。口縁端内へつまみ出し。胴外、頸下タタキ後頸下縦ハケ・胴下部縦ハケ後胴中部横ハケ。胴内ケズリに先行する指頭圧痕残。	口縁1／2、胴ほぼ完存		1439
126-69		住37 no. 6	布留系甕	口径188、残高61	粘土細、1mm石英・クサリ礫少	やや甘い	淡褐黄白色	口縁端内へつまみ出し。胴外摩滅、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁1／4、胴1／8		1169
126-70		住37覆土	布留系甕	口径162、残高87	粘土細、1～5mm石英・長石少	良好	褐色	胴外肩横ハケ。	1／3	他と色調異なる。	1203
127-71	46	住37 no.26	布留系甕	口径158、頸径116、胴径226、残高176	粘土細、1～3mm石英・長石・クサリ礫少	良好	淡褐色	口縁端内へつまみ出し。胴外頸部下縦ハケ、胴中部横ハケ、胴下部縦ハケの順。	口縁7／8、胴5／6	胴下部煤付着	1191
127-72		住37北部一括	布留系甕	口径162、頸径126、胴径218、残高143	粘土細か、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外黄白褐色、内淡橙褐色	口縁端内へつまみ出し。頸部内の調整が良好に遺存し、指頭圧痕後ケズリと分かる。頸部内にナデによる凹線。	口縁全周、胴1／4		1248
127-73	46	住37 no.11	布留系甕	口径166、頸径132、胴径230、器高262、胴高230	粘土細、1～5mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄褐色	口縁端内へつまみ出し。頸部外面に薄く赤色顔料を塗布。口縁内に横ナデに先立つハケメ残り、口縁端にもハケメ風の条痕残。	ほぼ完形		1173
127-74	46	住37 no. 2	布留系甕	口径162、頸径124、胴径220、残高163	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	口縁端部やや丸みおびる。胴下部のハケメ切り合い詳細不明。口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	口縁・胴1／3		1163
127-75	44	住37 no.20	布留系甕	口径172、頸径136、胴径236、器高291、胴高264	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外黄褐色、内褐色	口縁端をわずかに外に拡張。肩部にC字状の押捺文を4個所に施す。胴外ハケは頸下縦ハケ、胴中部横ハケ・胴下部縦ハケ、胴中下部横ハケの順か。	ほぼ完形	胴下半、口縁外面に煤付着。胴内下部にコゲ付着。	1186
127-76		住37 no.14	布留系甕	口径164、残高38	粘土粗、1mm石英・クサリ礫少	良好	淡褐色	口縁端内へつまみ出し。内外横ナデ。	1／3		1166
127-77		住37北部一括	布留系甕	口径170、残高68	粘土粗、1～3mm長石・石英少	良好、口縁内面黒斑	淡黄褐色	口縁端内へつまみ出し。胴外縦ハケ後横ハケ。	1／4	頸部外面赤色顔料うっすら付着？	1293
127-78		住37北部一括	布留系甕	口径166、残高135	粘土細、1～5mm石英・クサリ礫多	良好、胴外肩小黒斑	外淡黄褐色、内淡橙褐色	口縁端内へつまみ出し。胴外ハケ、口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。頸内に強い横ナデによるケズリ巡る。	口縁1／2、胴1／4		1251
128-79		住37覆土	布留系甕	口径170、残高63	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内淡黄橙色	口縁端内へつまみ出し。胴外ハケ、口縁内ハケ後口縁内外横ナデ。	1／3		1204
128-80		住37覆土	布留系甕	口径174、残高63	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外淡橙褐色、内淡黄褐色	口縁端内へつまみ出し。胴外ハケ、口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	1／4		1295
128-81		住37南部一括	布留系甕	口径182、残高32	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	淡黄褐色	口縁内ハケ後口縁内外横ナデ。	1／8		1264
128-82		住37北部一括	布留系甕	口径182、残30	粘土細、1～3mm石英少	良好	外黄白褐色、内淡橙褐色	口縁端内へつまみ出し。口縁内外横ナデ。	2／3		1245
128-83		住37北部一括	布留系甕	口径182、残高32	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄橙褐色	口縁端内へつまみ出し。口縁内外横ナデ。	1／8		1291
128-84		住37北部一括	布留系甕	口径182、残高32	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	口縁端内へつまみ出し。口縁内外横ナデ。	1／6		1289
128-85		住37北部一括	布留系甕	口径176、残高93	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外淡黄褐色、内黄褐色	口縁端内へつまみ出し。胴外ハケ、口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	1／4		1178
128-86	46	住37北部一括	布留系甕	口径172、頸径138、胴径230、残高212	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外褐白色、内淡黄褐色	口縁端内へつまみ出し。胴外ハケ、口縁内ハケ後口縁内外横ナデ。胴内ケズリであるが、下部は摩滅で観察困難。	口縁1／2、胴1／6		1242
128-87	46	住37北部一括	布留系甕	口径180、頸径138、胴径240、残高224	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫・土器片？少	良好	外淡褐黄色、内橙褐色	口縁端内へつまみ出し。胴外ハケ、口縁内外横ナデ。胴内ケズリ。外面のハケ良く残る。	口縁2／3、胴1／2		1440
128-88		住37南部一括	布留系甕	口径208、残高108	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐色	肩部に波状沈線文。胴外ハケ、口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	1／8		1267
128-89		住37北部一括	布留系甕	口径192、頸径152、胴径254、残高173	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄橙褐色	口縁端内へつまみ出し。胴外ハケ、口縁内外横ナデ。胴内ケズリ。	口縁1／2、胴1／3		1249
128-90		住37 no. 5	布留系甕	口径192、頸径150、胴径296、残高155	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡褐黄色	口縁内外ナデ、胴内ケズリ。胴外ハケメは頸部下縦ハケ、肩部横ハケ、胴中部縦・横ハケの順か。	口縁1／2、胴1／6		1167
129-91		住37覆土	高杯杯部片	残高40	粘土細、1mm長石極少	良好	淡黄橙色	外横ミガキ（摩滅）、内横ハケ後縦ミガキ（摩滅）。	小片		1218
129-92		住37西部覆土	高杯脚部片	残高75	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	外横ミガキ、脚柱内上部ハケ、下部ナデ、裾内ハケ。半乾燥穿孔1個所残。	1／3		1272
129-93		住37覆土下部	高杯杯底部片	残高23	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄褐色	外ハケ、板ナデ？。	1／4		1240
129-94		住37覆土	高杯杯底部片	残高18	粘土粗、1～3mm長石・石英多	良好	淡黄褐色	破損面に接合痕が良く観察できる。外縦ミガキ、内ナデ。	1／6		1237
129-95		住37覆土	高杯脚裾片	裾径108、残高15	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	外黄褐色、内黒変	外ハケ後ミガキ、内ハケ。	1／6		1223



第 127 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（5）（1／3）

第69表　37号竪穴住居跡出土土器観察表（4）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
129-96	46	住37 no.33	外反口縁鉢	口径96、頸径85、胴径92、器高67、胴高53	粘土細、1mm石英少	やや甘い	外黄白褐色、内淡黄灰褐色	胴部深く、口縁部の開き小さい器形。胴外上部板ナデ、胴下部ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ後ナデ。	口縁2／3、胴ほぼ完存		1195
129-97		住37 P5	外反口縁鉢	口径122、残高45	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	橙褐色	胴外ハケ後内外横ミガキ。内のミガキは疎ら。	1／12		1183
129-98	46	住37 no.23	外反口縁鉢	口径146、復元高46	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色	胴外下部ケズリ、口縁外指頭圧痕後、内外疎らな横ミガキ。	2／3		1262
129-99		住37西部覆土	外反口縁鉢	口径158、残高38	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄橙褐色	内外ナデ。口縁部外面指頭圧痕残。	1／8		1275
129-100		住37北部一括	外反口縁鉢	口径148、残高43	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	胴上部ハケ、胴下部ケズリ後内外横ミガキ。	1／4		1255
129-101		住37覆土	外反口縁鉢	口径164、残高51	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴下部ケズリ後内外横ミガキ。	1／8		1206
129-102	46	住37南部一括	外反口縁鉢	口径168、残高34	粘土細、1～3mm石英少	良好	橙褐色	胴下部ケズリ後内外横ミガキ。	1／4		1443
129-103		住37覆土下部	外反口縁鉢	口径164、残高42	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	胴上部ハケ後内外横ミガキ。	1／6		1239
129-104		住37 no.19	外反口縁鉢	口径166、残高42	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄橙褐色	胴下部ケズリ、口縁内斜めハケ後、内外横ミガキ。	1／8		1183
129-105		住37西部覆土	外反口縁鉢	口径168、残高46	粘土細、1～3mm石英・長石・クサリ礫少	やや甘い	淡橙褐色	胴上部ハケ、胴下部ケズリ後内外横ミガキ（内面摩滅）。	口縁1／8，胴1／12		1270
129-106		住37覆土	外反口縁鉢	口径176、残高30	粘土細、1mm長石極少	良好	淡黄褐色	胴下部ケズリ後内外横ミガキ。	1／12		1214
129-107	46	住37 no.27	外反口縁鉢	口径166、残高55	粘土細、1mm長石極少	良好	外黄橙褐色、内橙褐色	胴下部ケズリ後内外横ミガキ。	口縁1／2、胴ほぼ完存		1192
129-108		住37覆土	外反口縁鉢	残高31	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	口縁外面指頭圧痕後、内外横ミガキ。	小片		1211
129-109		住37覆土	畿内系二重口縁鉢	口径142、残高27	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外黄橙褐色、内褐色	内外横ミガキ後、胴下部内暗文風。縦ミガキ。	1／12		1219
129-110		住37	畿内系二重口縁鉢	口径148、残高26	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	褐色	口縁内外ナデか。胴内外横ミガキ後、胴下部内暗文風。縦ミガキ。	1／8		1208
129-111		住37覆土	直口鉢	口径110、復元高32	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	胴下部ケズリ後内外横ミガキ。	1／8		1231
129-112		住37覆土	直口鉢	口径120、器高34	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外横ミガキ、内斜めハケ後暗文風ミガキ。深い器形で脚付鉢か。	1／8		1216
129-113		住37覆土	脚付鉢脚部片	残高20	粘土粗、1mm石英極少	やや甘い	淡黄橙色	内外雑なナデ。	全周		1234
129-114		住37北部一括	脚付鉢脚部片	裾径90、残高13	粘土細、1mmクサリ礫少	良好	淡橙褐色	外横ミガキ、内摩滅。	1／6		1259
129-115		住37覆土	脚付鉢脚部片	残高35	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外縦ハケ後横ミガキ、内斜めハケ。半乾燥時の穿孔1個所残。	1／6		1233
129-116		住37覆土	大形直口鉢	残高53	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	黄白褐色	内外ハケメ仕上げで、口縁端部にハケメの条痕残る。	小片		1231
129-117	46	住37覆土	平底鉢	底径78、残高49	粘土細、1～3mm石英・角閃石少	やや甘い	淡橙黄褐色	外面ハケメ、内面ケズリ、底外雑なナデ。	1／2		1210
129-118		住37 no.24	山陰系大形鉢	口径322、残高112	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	外淡褐黄色、内暗灰褐色	胴外横ハケ、胴内ケズリ。口縁内外ナデ。	1／6		1189
129-119		住37北部一括	山陰系大形鉢	口径280、残高47	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	外暗灰褐色、内黄灰褐色	内外ナデ。	1／12		1258
129-120		住37 no.12	山陰系大形鉢底部	底径155、残高65	粘土粗、1～5mm石英・長石・土器片多	やや甘い	外淡黄褐色、内淡褐色	胴内ケズリ、胴外ナデ、底外摩滅。	2／3		1175
129-121		住37覆土南部	山陰系大形鉢底部	底径152、残高24	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	胴内ケズリ、胴外ハケ、底外ナデ。	1／6		1266
130-122		住37no.25	山陰系大形鉢底部	口径282、頸径240、胴径308、残高197	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	やや甘い	淡黄褐色	胴外ハケ（摩滅）、胴内ケズリ（摩滅）、口縁内外ナデ。	口縁1／4、胴1／6		1190
130-123	46	住37覆土	手捏ね鉢	口径48、器高32	粘土粗、1～3mm石英・角閃石多	良好	暗灰褐色	内外ナデ。	ほぼ完形		1202
130-124		住37覆土	在地系器台口縁部	口径130、残高30	粘土粗、1mm大長石・石英少	良好	褐色	内外ハケ後ナデ。器台の口縁部としたが、作りが丁寧な点は違和感あり。	1／6		1213
130-125		住37カマド内	小形器台受部	口径96、残高18	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内縦ミガキ暗文。	1／8		1278
130-126		住37西部覆土	小形器台裾部	裾径132、残高18	粘土細、1mm石英・クサリ礫極少	良好	淡橙褐色	外横ミガキ、内横ハケ。			1276
130-127		住37覆土	小形器台裾部	裾径126、残高45	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡橙褐色	外ミガキ、内ハケメ風の板ナデ。	1／6		1233
130-128		住37 P1	山陰系鼓形器台	口径112、残高33	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	赤褐色	口縁外縦ミガキ、括部外ナデ、内摩滅。	全周		1282
130-129	47	住37 P1	山陰系鼓形器台	裾径112、括部径36、残高43	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	裾外縦ミガキ、括部外ナデ、内ケズリ（摩滅）。	全周	129と同一個体の可能性が高い	1280
130-130		住37覆土	山陰系鼓形器台	裾径112、残高38	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	やや甘い	淡黄褐色	内外摩滅するが、外縦ミガキ残。	1／6		1235
130-131		住37南部一括	山陰系鼓形器台	裾径114、残高17	粘土粗、1～3mm長石・石英少	やや甘い、器肉中央黒変	外淡黄褐色、内淡黄橙色	外ナデ後暗文縦ミガキ、内ケズリ後ナデ。	1／8		1274
130-132	47	住37覆土	山陰系鼓形器台	口径96、括部径38、裾径94、器高58	粘土細、1～3mm石英多	やや甘い	橙褐色	口縁内外摩滅、裾外縦ミガキ、裾内ケズリ。	裾完存、口縁1／4残		1198
130-133		住37覆土	山陰系鼓形器台	残高41、括部径90	粘土細、1～3mm石英少	良好	黄白褐色	口縁外横ミガキ、括部外ナデ、口縁内ハケ後縦ミガキ、裾内ケズリ。	1／12		1220



第 128 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（6）（1／3）

肩部にＣ字状の押捺文を 4 個所に施す。88 は肩部に波状の沈線文が遺存する。

91 は高杯杯部片、92 は高杯脚部片、93・94 は高杯杯底部片、95 は高杯脚裾片である。93・94 は器壁が厚くやや粗製の印象を受け、94 は破損面に接合痕が良く観察できる。

96 ～ 108 は外反口縁鉢。96 は胴部深く、口縁部の開き小さい器形で、胴部内外に板ナデ痕を多く残す粗製品。他は内外ミガキ仕上げの精製品が多いが、97 を除けば胴部が浅く、口縁部が大きく開く形態を呈す。99 は内外ナデ仕上げかと推測される。

109・110は畿内系の精製二重口縁鉢で、胴内面の暗文風縦ミガキが特徴的である。

111・112は直口鉢である。いずれも内外ミガキ仕上げの精製品で、112は深い器形で脚付鉢の可能性も想定される。

113～115は脚杯鉢の脚部片である。113は内外雑なナデ仕上げの粗製品であるが、他は精製品である。116は大形の鉢になると推測される。117は平底鉢である。外面ハケメ、内面ケズリ仕上げであるが、あるいは朝鮮半島系土器を模倣して製作されたものか。

118・119は山陰系の大形二重口縁鉢で、120・121はその底部か。123は内外ナデの手捏ね鉢。

124は在地系の器台口縁部と推測したが、作りが丁寧な点で、若干の違和感がある。

125は小形器台受部、126・127は小形器台裾部か。127内面はハケメ風の板ナデを施す。

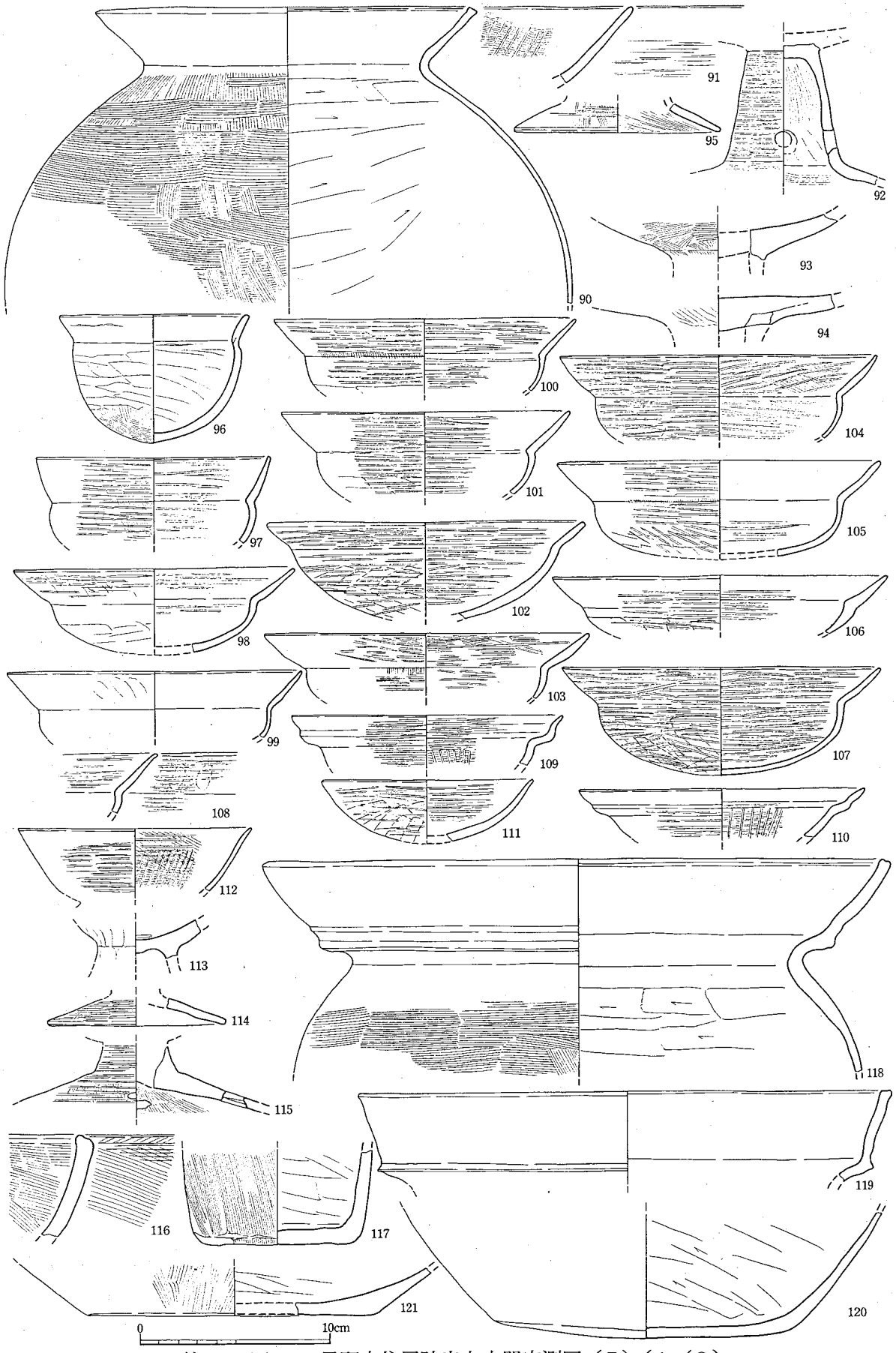
128～135は山陰系鼓形器台で、133・134以外は外面に縦ミガキを良くとどめた小形品である。136は山陰系甑形土器の把手か。

137～141は朝鮮半島系土器。137は硬質の壺頸部。138は口縁端部を意図的に打ち欠いた可能性のあるタタキ文壺で灰色～灰黄褐色を呈す。口縁端部以外は、ほぼ完形に近い状態で遺存する。外面は上部平行タタキ、下部小さな格子タタキ後沈線を巡らす。139は土師器に近い焼成で淡黄褐色の甑口縁部片である。

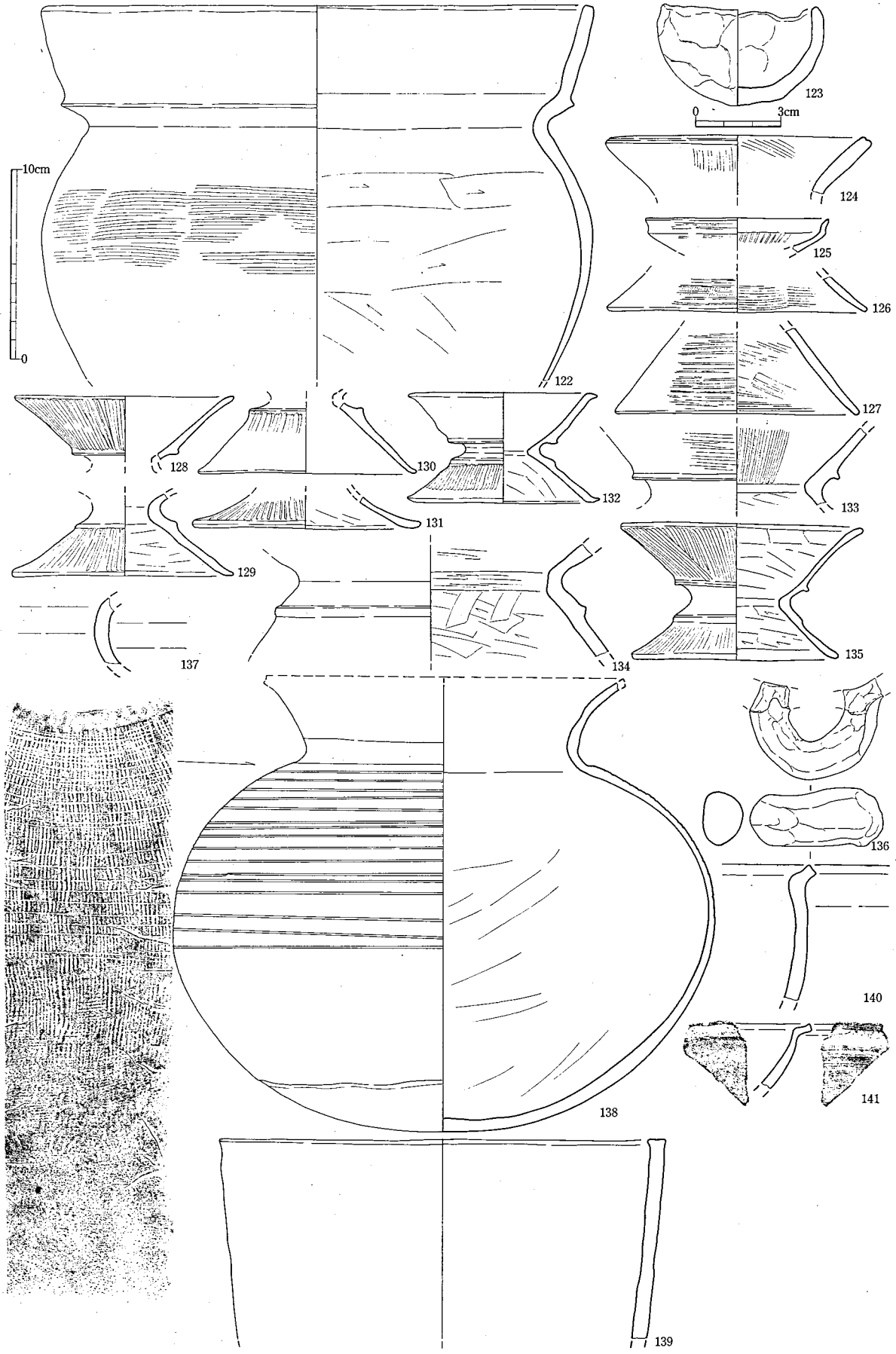
139・140は無文の鉢口縁部で140は明黄褐色軟質、141は明灰色瓦質を呈する。

第70表　37号竪穴住居跡出土土器観察表（5）

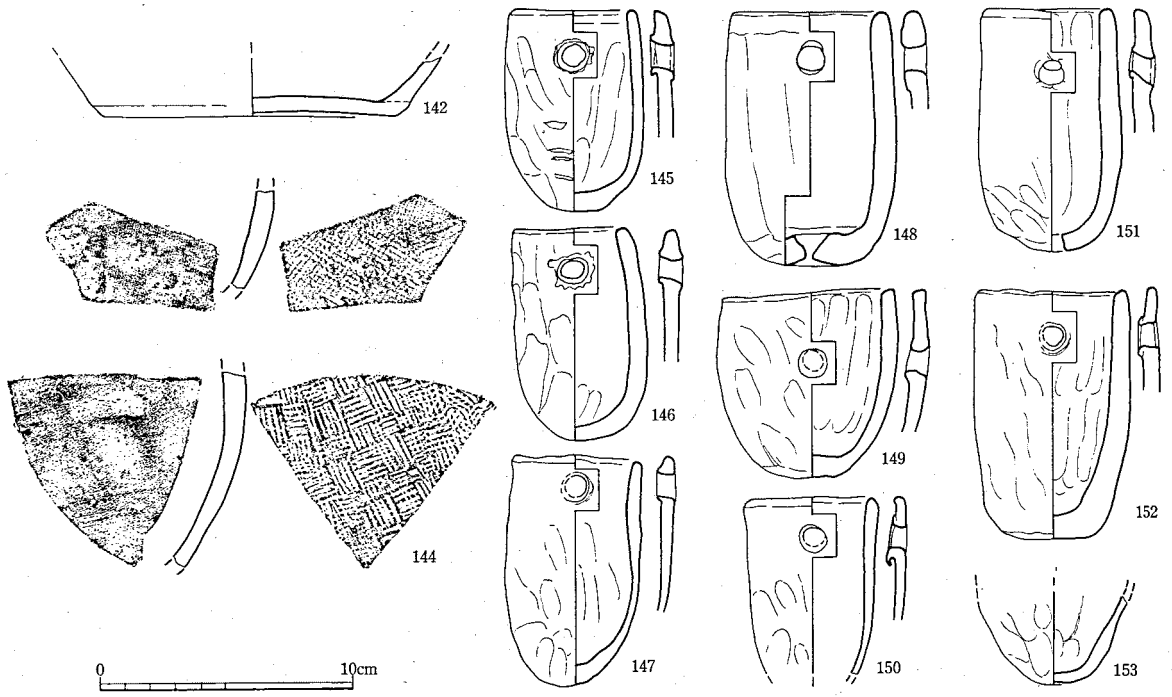
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
130-134		住37覆土	山陰系鼓形器台	残高61、括部径146	粘土粗、1～3mm石英少	良好、火回り悪く一部黒変	淡黄褐色	外の突出部稜甘い。外ナデ、内括部・受部ミガキ、内裾部ケズリ。	1／6		1228
130-135	47	住37 no.31	山陰系鼓形器台	口径126、括部径51、裾径106、器高71	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	口縁・裾外縦ミガキ、括部外ナデ、口縁内ケズリ後摩滅、裾内ケズリ。	2／3だが完形に復元	二次的に火を受け、赤変する部分あり	1441
130-136		住37西部覆土	山陰系甑形土器	太さ25～30	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	把手の破片。ナデ仕上げで、端部は器壁との接合面から欠損。	把手破片		2360
130-137		住37覆土下部	半島系土器壺頸部	残高36	粘土細	瓦質	暗灰色	内外ナデ。	小片		2364
130-138	47	住37 no.1	半島系土器壺	復元口径189、胴径285、復元器高240、胴高197	粘土粗、1～3mm長石・石英少	瓦質より堅いが、焼き締まり無し	灰色～灰黄褐色	外面は上部平行タタキ、下部小さな格子タタキ後沈線。内ナデ。底部近く外に粘土接合痕と思われる凹み巡る。	口縁端欠損。他は完形。	全形をうかがえる良好な個体。	2319
130-139		住37南部一括	半島系土器甑	口径234、残高105	粘土粗、1～3mm長石・石英少	土師質、良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／4		1268
130-140		住37北部一括	半島系土器鉢口縁	残高73	粘土粗、1～3mm長石・石英少	軟質	明黄褐色	無文、内外ナデ。	小片		2366
130-141		住37西部覆土	半島系土器鉢口縁	残高34	粘土細	瓦質	明灰色	無文、内外ナデ。	小片		2363
131-142		住37南部一括	半島系土器鉢底	底径116、残高24	粘土細	瓦質	明灰褐色	内外ナデ。底部は内外とも凹凸顕著。	1／2		2426
131-143		住37西部覆土	半島系土器壺胴部		粘土細	瓦質、触ると手に粉がつく	灰黄色	外面小さな格子タタキ、内面ナデ。	小片		2362
131-144		住37覆土下部	半島系土器壺胴部		粘土細	陶質	灰褐色	外面綱代状のタタキ、内面ナデ。	小片		2365
131-145	47	住37 no.32	タコ壺	口径48、器高80	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。外下部横方向工具痕。	ほぼ完形		438
131-146	47	住37 no.35	タコ壺	口径43、器高83	粘土細、1mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	ほぼ完形		439
131-147		住37 no.34	タコ壺	口径46、器高91	粘土細、1mm石英・長石少	やや甘い	淡灰褐色～淡黄灰褐色	内外ナデ。	底全周、口縁1／6		1196
131-148		住37覆土	タコ壺	口径56、器高113	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡黄褐色、内黄白褐色	内外ナデ。粘土を絞り器形をすぼめ底部を作る際、底を塞がずに孔とする。	ほぼ完形？		1207
131-149	47	住37南部一括	タコ壺	口径61、器高74	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	褐色	内外ナデ。	ほぼ完形？		1263
131-150		住37 P4	タコ壺	口径46、残高70	粘土粗、1～3mm長石・石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／2？		1281
131-151	47	住37北部一括	タコ壺	口径42、器高95	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。粘土を絞り器形をすぼめ底部を作る際、底を塞がずに孔とする。	1／2		1257
131-152		住37覆土	タコ壺	口径54、器高92	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	淡黄褐色	内外ナデ。	1／2		1225
131-153		住37西部覆土	タコ壺	残高24	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	全周		1271



第 129 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（7）（1／3）



第 130 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（8）（1／3）



第 131 図　37 号竪穴住居跡出土土器実測図（9）（1／3）

145 ～ 153 はタコ壺である。148・151 は粘土を絞り、器形をすぼめて底部を作る際、底を塞がずに孔としている。

38 号竪穴住居跡（図版 24、第 132 図）

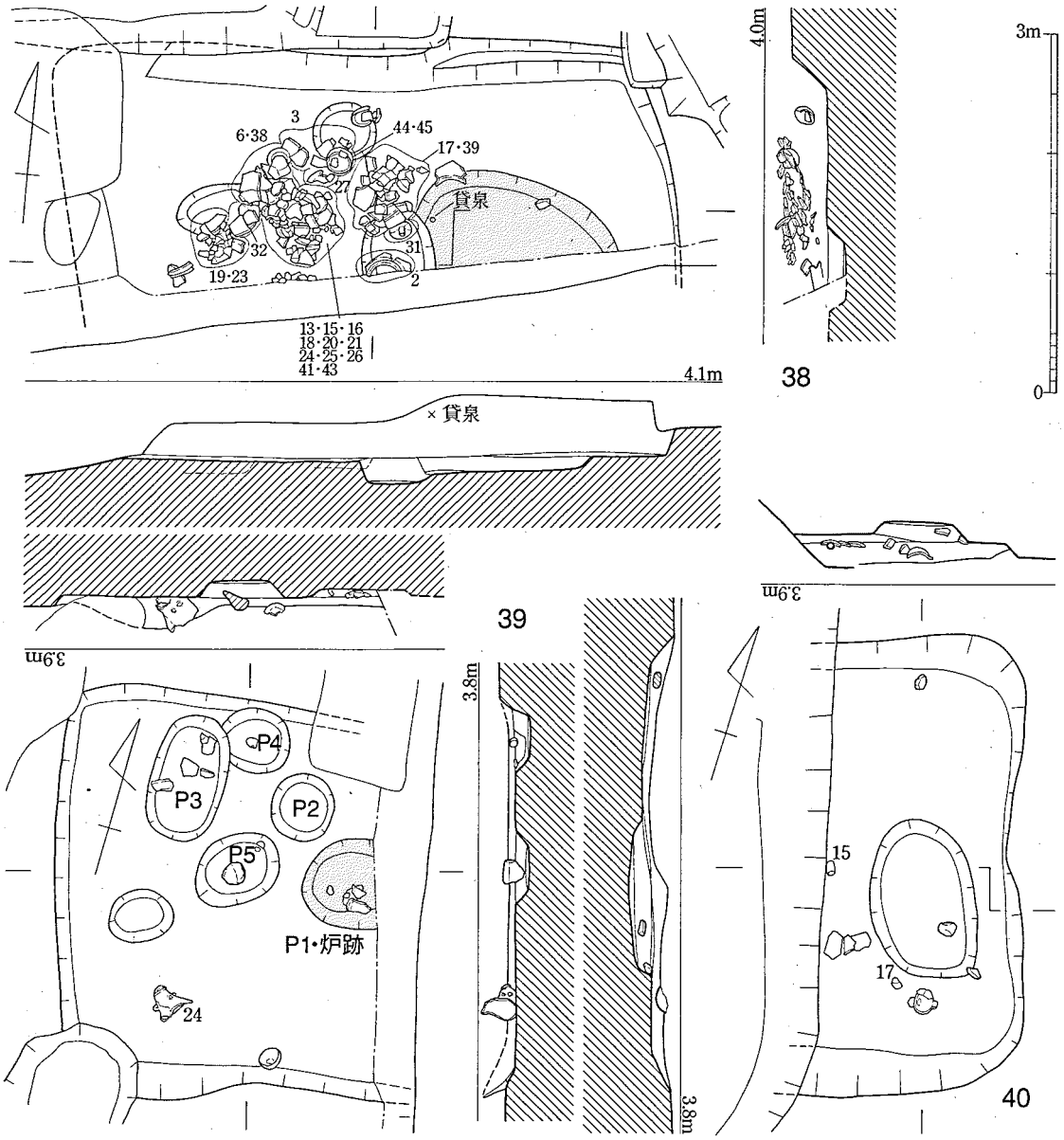
3 区の南東部、5 号竪穴住居跡の南、37 号竪穴住居跡の西に位置し、南は調査区外へと続いている。西壁を撹乱によって失うが、北壁は良好な状態で検出された。一方、東壁は北壁とは直交しない。調査区壁を見ると、住居覆土の大半は斑状に灰白色細砂を含む灰褐色細砂であったが、東壁付近では比較的、均質な灰褐色細砂が堆積し、明らかな差があった。したがって、東壁付近で 2 棟の住居跡が切り合う可能性があるが、出土状況を図示した土器群の一括性は高いものと思われる。

とりあえず、図示した状況に即して述べるならば、主軸をほぼ南北 N － 5° － W に向けた方形の住居跡で、東西 4.1m を確認し、南北 1.6m 程を調査したことになる。壁は遺存状況の良好な個所で高さ 50cm 弱。住居跡東部床面の大形の掘り込みは暗褐色細砂が分布しており、炉跡と考えられる。覆土の上部から多量の土器と貨泉（第 145 図 2、図版 53）が出土している。

出土遺物（図版 47・48、第 133 ～ 136 図、第 71・72）　1 は在地系の大形壺胴部片。2 はほぼ完形に復元されるもので、山陰系大形壺か。いずれも頸部に断面三角突帯、胴部に頂部をタタキにより刻目風に装飾した断面コ字形突帯を巡らす。1 は胴外タタキ後頸部下ハケ、胴内ハケ。2 は頸部が短く、胴部外面はタタキ、ハケ、板ナデ、太めで疎らなミガキの順の調整で仕上げる。

3・4 は畿内系の直口壺である。3 は胴中部外面に、ミガキに先立つタタキを広く残す点が特徴的で、4 も口縁外面にタタキらしき痕跡を留める。5 ～ 7 は山陰系二重口縁壺。6 は肩部に櫛描波状文を施文し、擬口縁部内面に接合痕を残す。8・9 は精製の中形壺。

10 ～ 12 は五様式系甕の口縁部と推測されるもので、10 は口縁端部のつまみ上げ、拡張が特徴的である。13・14 は庄内系甕で、13 は胴外は交叉するタタキで仕上げる。



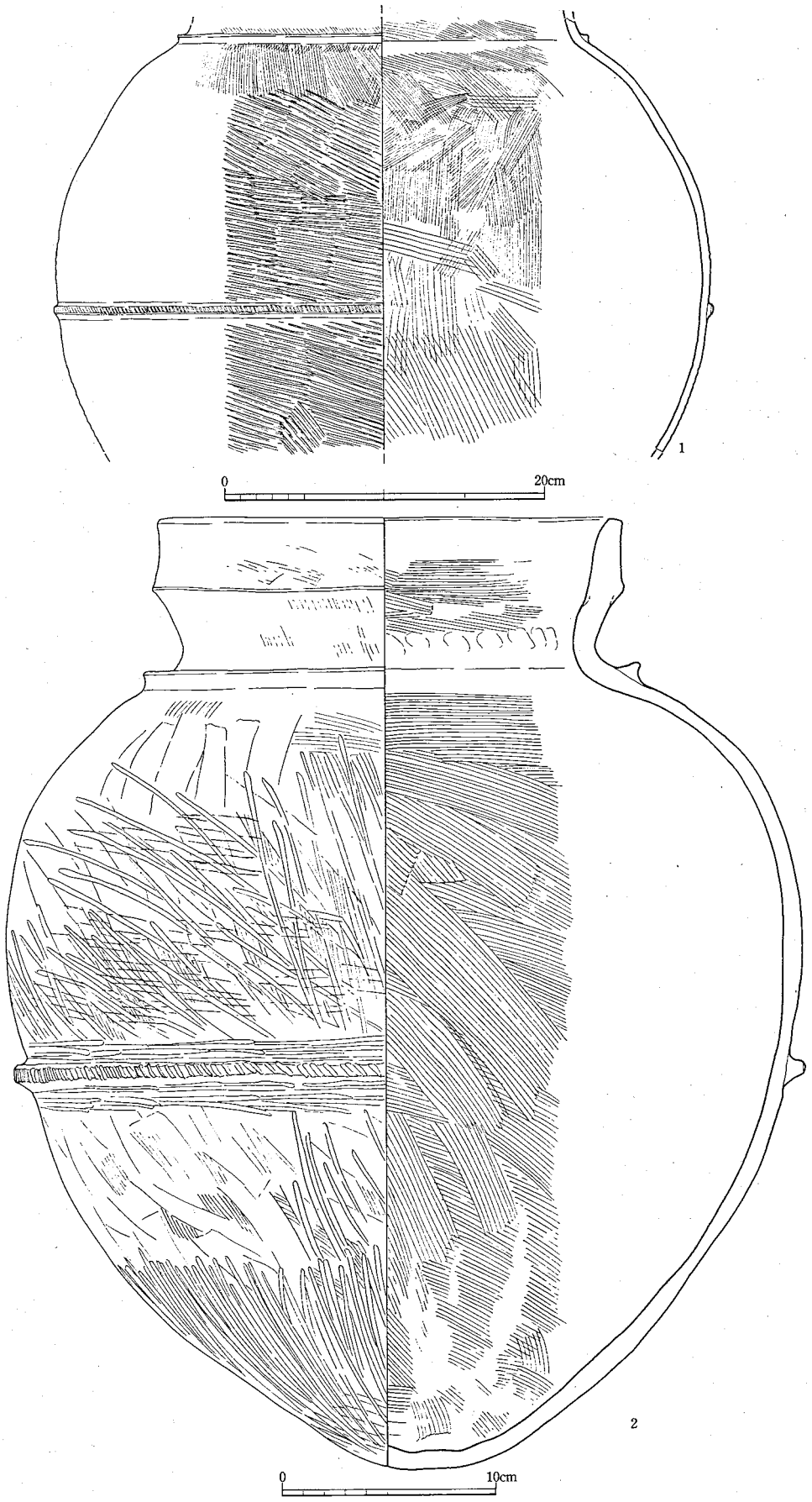
第 132 図　38 ～ 40 号竪穴住居跡実測図（1 ／ 60）

15 ～ 30 は布留系甕。19・23 は肩部に直線沈線文、26・27・30 は櫛描波状文を施文する。16・19・20・26 などは胴外面のハケメの切り合いが良く確認できる。20 は口縁端部を上へ拡張し、口縁の内湾が顕著である。29 は口縁内面に接合痕かと思われる細い溝が巡る。

31 ～ 36 は高杯破片で、32 は杯底部破片、31・33 ～ 36 は脚部破片。31 は脚裾にいずれも 0・6 時方向に 2 段にわたり半乾燥時穿孔を施す。35 は裾径が小さい。37 は口縁部が直立し、脚が低い特徴的な形態を呈する高杯。口縁部内面はハケ後縦ミガキを施すが、外面はハケメ、板ナデを留め、粗雑な仕上げの印象を受ける。

38 は山陰系二重口縁大形鉢で、接合しない胴上部・口縁部片と底部片を復元的に図示した。

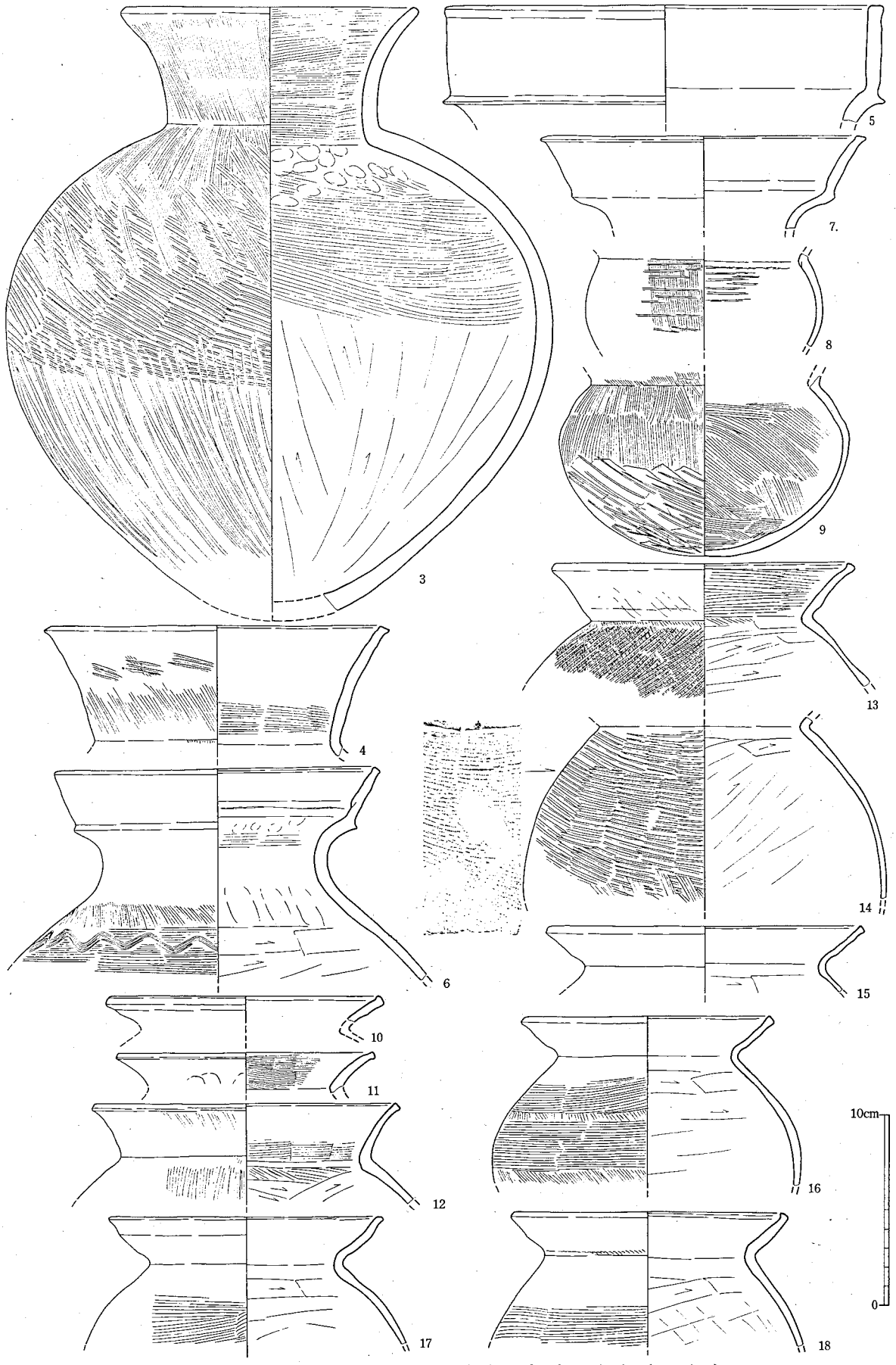
39 ～ 42 は精製の外反口縁鉢であるが、いずれも内面にミガキは確認できない。39 はやや大形で外面をミガキで仕上げるが、胴内にはハケを広く残す。43 は精製脚付鉢鉢部、44 は精製脚付鉢裾部で、1 個所半乾燥時穿孔が残る。45 ～ 47 は粗製の直口鉢で、47 は大きめの平底になる。48



第133図　38号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1は1／4、他は1／3）

第71表　38号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
133-1		住38北部一括	在地系大形壺	頸径246、胴径412	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	頸部に断面三角突帯、胴部には頂部をタタキにより刻目風に装飾した断面コ字突帯巡らす。胴外タタキ後頸部下ハケ。胴内ハケ。	1／4		462
133-2	47	住38no.8	山陰系?二重口縁壺	口径210、頸径196、胴部最大径376	粘土粗、1～5mm石英・長石多	良好、胴下部外面1／6大黒斑、胴上部外面1／4大黒斑。	外橙褐色、内褐色。	口縁部厚く直立に近い角度で立ち上がる。頸部に断面三角突帯、胴部には頂部をタタキにより刻目風に装飾した断面コ字突帯巡らす。頸部短い。胴部外面タタキ後ハケ後板ナデ後太めで疎らなミガキ。胴内ハケ。口縁内外ハケ後横ナデ。	ほぼ完形		484
134-3	47	住38no.11・13・15・16	畿内系直口壺	口径138、頸径114、胴径284、残高315	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好、胴下部大黒斑	外淡黄褐色、内淡橙褐色	胴外面タタキ後上部ハケ、下部ミガキ。口縁内外ハケ、胴内上部指頭圧痕後ハケ、内下部ケズリ。	口縁全周、胴2／3残		504
134-4		住38覆土	畿内系直口壺	口径170、残高68	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外黄白褐色、内淡黄褐色	口縁外左上タタキ、ハケ後口縁内外、頸部内ハケ後口縁内外ハケ。	1／3		463
134-5		住38覆土	山陰系二重口縁壺	口径216、残高61	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	外淡黄橙色、内淡黄褐色	内外ナデ。	1／6		591
134-6	48	住38no.12	山陰系二重口縁壺	口径164、残高112	粘土粗、1～3mm石英少	良好、口縁・胴黒斑	淡黄褐色	肩部に櫛描波状文施文、擬口縁部内面に接合痕残す。胴肩縦ハケ後横ハケ。口縁内外横ナデ、頸部内にハケ、指頭圧痕残す。胴内ケズリ。	口縁全周、胴2／3		488
134-7		住38覆土	山陰系二重口縁壺	口径162、残高49	粘土粗、1mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／6		597
134-8		住38北部一括	中形壺	残高47	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	外淡黄褐色、内淡橙褐色	外ハケ後ミガキ、内疎らミガキで、頸部内面接合痕残。	1／8		489
134-9		住38覆土	中形壺	胴径152、残高94	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	頸の縮まり小さい。胴外上部ハケ後胴下部ケズリ後、胴下部外ミガキ。胴内ハケ。	1／2		593
134-10		住38覆土下部	五様式系甕	口径140、残高14	粘土細、1mm石英・長石・角閃石少	極めて良好	灰褐色	口縁端つまみ上げ拡張。内外ナデ。	1／6	胎土から搬入品の可能性あり	466
134-11		住38覆土	五様式系甕	口径130、残高21	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	内ハケ、外指頭圧痕。	1／8		494
134-12		住38no.18	五様式系甕	口径154、残高52	粘土細、1mm石英・長石少	良好	褐黄色	胴外縦ハケ、胴内ハケ後ケズリ。口縁内外ハケ後横ナデ。	1／8		481
134-13	47	住38no.13	庄内系甕	口径152、残高64	粘土粗、1～3mm石英・角閃石少	良好	淡灰黄褐色	口縁端内肥厚。口縁内ハケ、口縁外指頭圧痕後内外ナデ。胴外タタキ交叉、胴内ケズリ。	口縁全周	色調から搬入品の可能性あり	495
134-14		住38上面	庄内系甕	胴径190、残高93	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	胴外左上タタキ後胴下部縦ハケ。内ケズリ。	1／6	胎土、色調は在地土器と似る。	475
134-15		住38no.13	布留系甕	口径164、残高34	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	灰黄褐色	口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／8	外面煤付着。	496
134-16		住38no.13	布留系甕	口径126、頸径94、胴径162、残高88	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	黄白褐色	胴外ハケは肩縦ハケ後肩横ハケ後胴下部縦ハケ。胴内ケズリ。	2／3	胴外面煤付着	501
134-17		住38no.5	布留系甕	口径136、残高67	粘土粗、1～3mm石英少	良好	黄褐色	胴外横ハケ、胴内ケズリ、口縁内外横ナデ。	1／6	外面煤付着	481
134-18	48	住38no.13	布留系甕	口径138、残高69	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外黄白褐色、内淡褐色	同外横ハケ、胴内ケズリ、頸部外ハケ残。	口縁全周	外面煤付着	492
135-19	48	住38no.16	布留系甕	口径144、頸径110、胴径175、残高163	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外黄白褐色、内褐黄色	口縁外面直線沈線文巡る。口縁端部外につまみ出し。胴外ハケ肩縦ハケ、肩横ハケ、胴下部縦ハケ、胴下部横斜めハケ。	口縁全周、胴2／3	肩より下外煤付着	505
135-20	48	住38no.13	布留系甕	口径146、頸径118、胴径196、残高151	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色～黄白褐色	口縁端部上へ拡張し、内湾顕著。胴外横ハケ後縦ハケ。口縁内ハケ後内外ナデ。胴内ケズリ。	口縁全周、胴1／2	外面煤付着、内面下部コゲ?	489
135-21	48	住38no.13	布留系甕	口径148、頸径114、胴径186、残高150	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	外淡黄灰褐色、内灰黄褐色	口縁端内つまみ出し。胴外は上部横ハケ後下部縦ハケ。	口縁全周	外面煤付着	490
135-22	48	住38覆土下部	布留系甕	口径156、頸径130、胴径218、残高169	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内黄褐色	口縁端外へ拡張。胴外ハケ、口縁内ハケ後内外横ナデ、胴内ケズリ。	口縁1／4、胴全周	外面煤付着。胴内過半コゲで褐変。	499
135-23	48	住38no.16	布留系甕	口径156、残高110	粘土細、1mm石英・クサリ礫少	良好	口縁内淡黄褐色、他は灰黄褐色	肩直線沈線文巡る。胴外ハケ、胴内ケズリ。	口縁全周、胴2／3		506
135-24		住38no.13	布留系甕	口径154、残高80	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	外淡黄褐色、内灰褐色	口縁内へつまみ出し。胴外横ハケ、頸部外ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／3		493
135-25	48	住38no.13	布留系甕	口径164、頸径129、胴径228、残高130	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	灰褐色～淡黄褐色	胴外肩縦ハケ後肩横ハケ後下部縦ハケ。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	全周	外面煤付着	491
135-26		住38no.13	布留系甕	口径168、頸径130、胴径198、残高130	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外黄褐色、内褐灰色	肩に6条1単位櫛描波状文。胴外肩横ハケ後下部縦ハケ。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁1／8、胴1／4		500
135-27		住38no.10	布留系甕	口径166、残高102	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い、口縁外黒斑	外灰黄褐色、内淡黄白褐色	口縁内につまみ出し。肩に3条1単位櫛描波状文。胴外頸下縦ハケ、肩横ハケ、下部縦ハケの順。口縁内外横ナデで、内にハケ残。	1／4		487
135-28		住38覆土下部	布留系甕	口径172、残高44	粘土粗、1mm石英少	良好	淡灰黄褐色	口縁内につまみ出し。胴外ハケ残。口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	1／6		471
135-29		住38覆土	布留系甕	口径184、残高46	粘土粗、1mm石英少	やや甘い、内外広く黒変	淡黄灰褐色～灰褐色	口縁端外へわずかにつまみ出し。口縁内外ナデ、内に接合痕残。	1／4		465
136-30		住38覆土下部	布留系甕	頸径142、残高90	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外灰黄褐色、内灰褐色	肩外6条1単位櫛描波状文。胴外頸下縦ハケ後肩横ハケ。胴内ケズリ。	1／4		474
136-31	48	住38no.6	在地系高杯脚部	裾径126、残高88	粘土細、1mm石英少	やや甘い、内黒変	淡黄橙褐色	脚裾にいずれも0・6時方向に2段にわたり半乾燥時穿孔。外縦ハケ後縦ミガキ。脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	全周		482



第 134 図　38 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

は脚の低い山陰系脚付鉢で、鉢内面はケズリ後疎らな縦ミガキで仕上げる。

49・50は裾・口縁外面縦ミガキ、括れ部外面ナデ、受部内面横ミガキで仕上げた山陰系鼓形器台である。51は朝鮮半島系陶質土器壺。シャープな器形で、胴内にハケメかタタキ当具痕か不明の細かい条痕が残る。52・53はタコ壺。

39号竪穴住居跡（図版24、第132図）

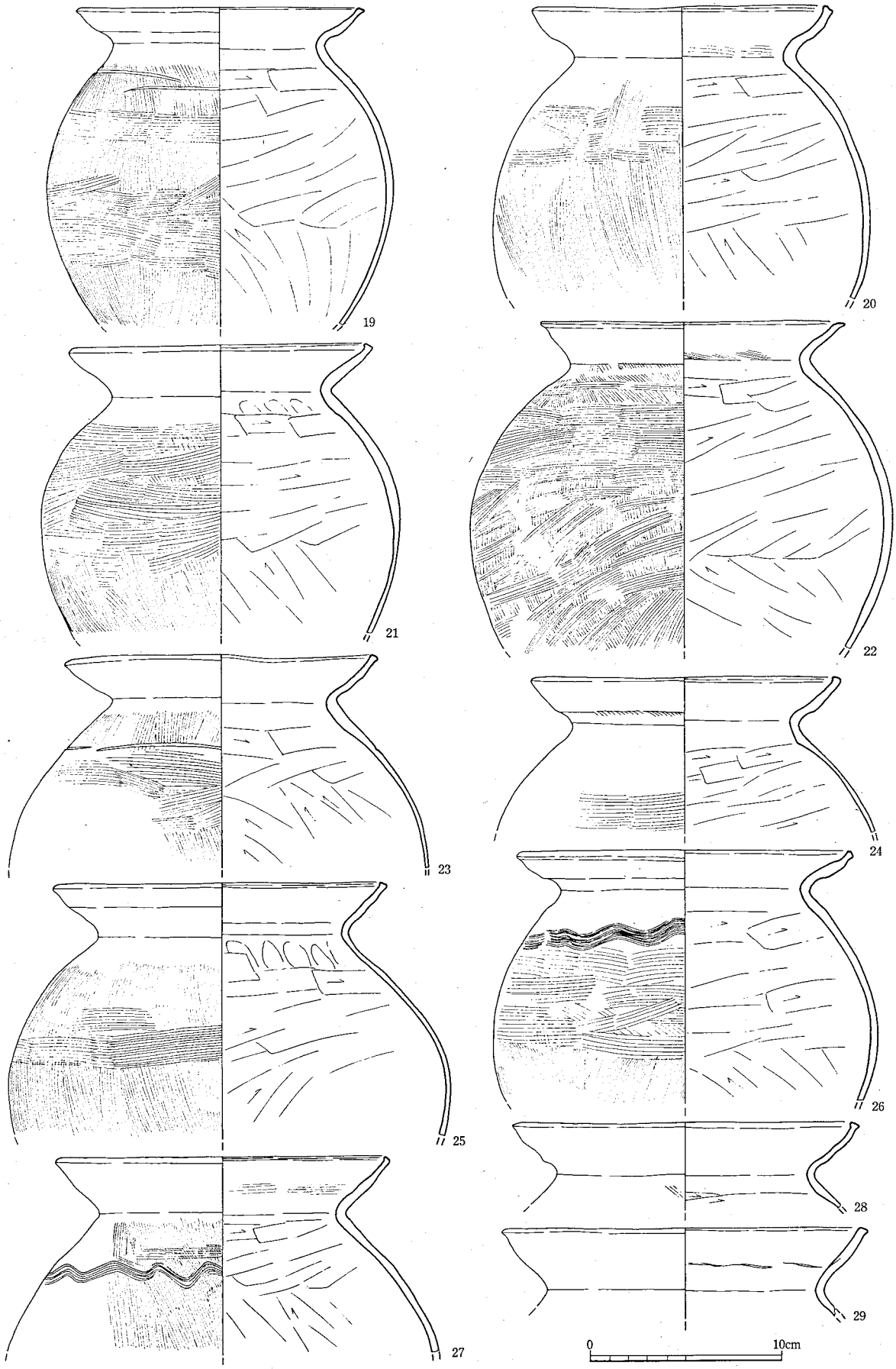
3区の北東部、1・3号竪穴住居跡の北東に位置する。主軸をほぼ南北、N－15°－Wに向けた方形竪穴住居跡で、東部は調査区外へと続いている。南北2.9～3.1mを測り、東西2.4m程を調査した。壁は良好な個所では20cm程遺存しているが、多くの所では10cm未満である。南北床面ではいくつかピットがあり、調査区壁にかかる位置で炉跡が検出された。覆土は暗褐色細砂。

切合いもなく、出土遺物の一括性は良好と考えられる。

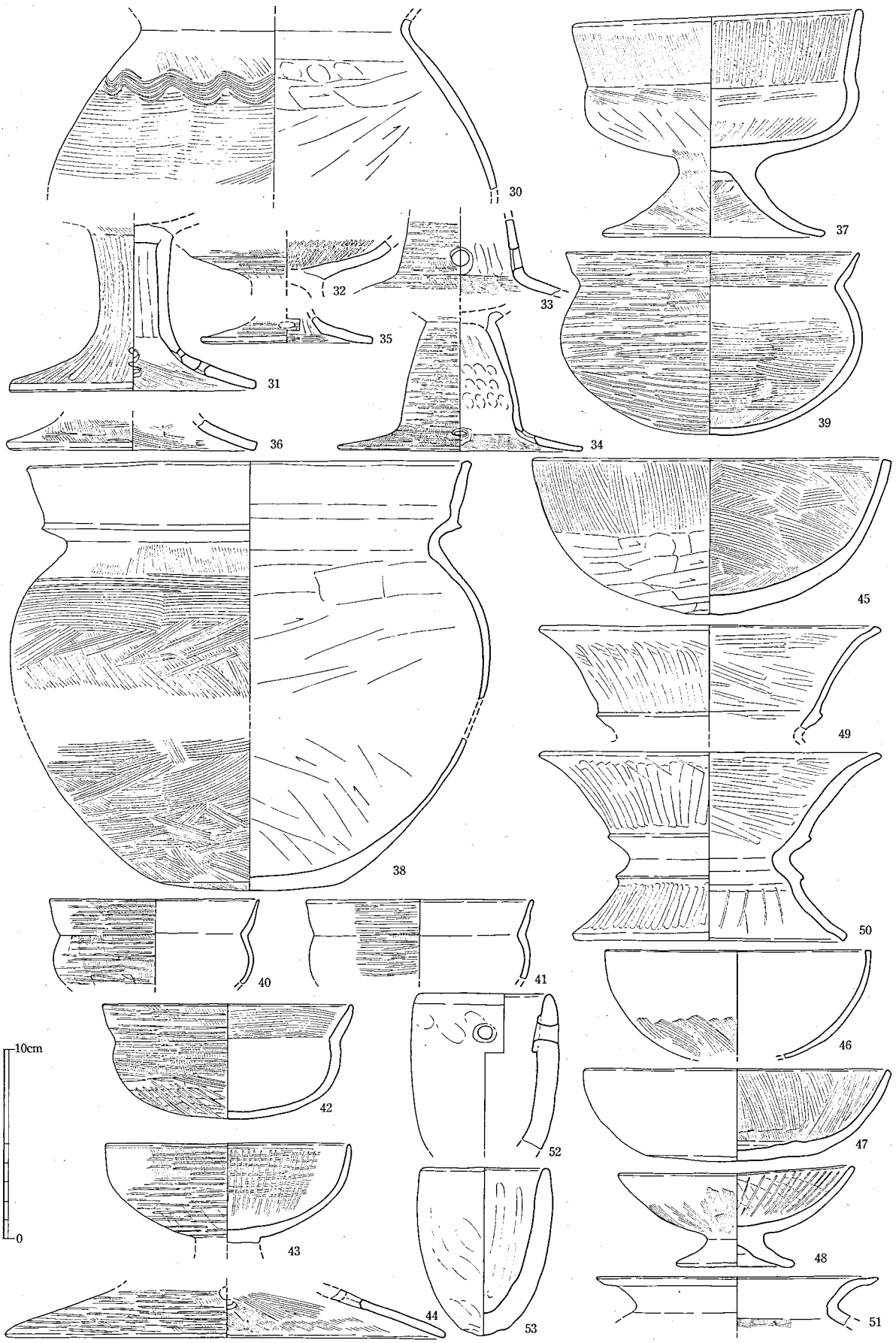
出土遺物（図版48・49、第137・138図、第73・74表）　1は在地系大形甕口縁部である。口縁部の上端、口縁部の外端にハケメ工具による刻目を施文するとともに、1個所に棒状粘土貼付の

第72表　38号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

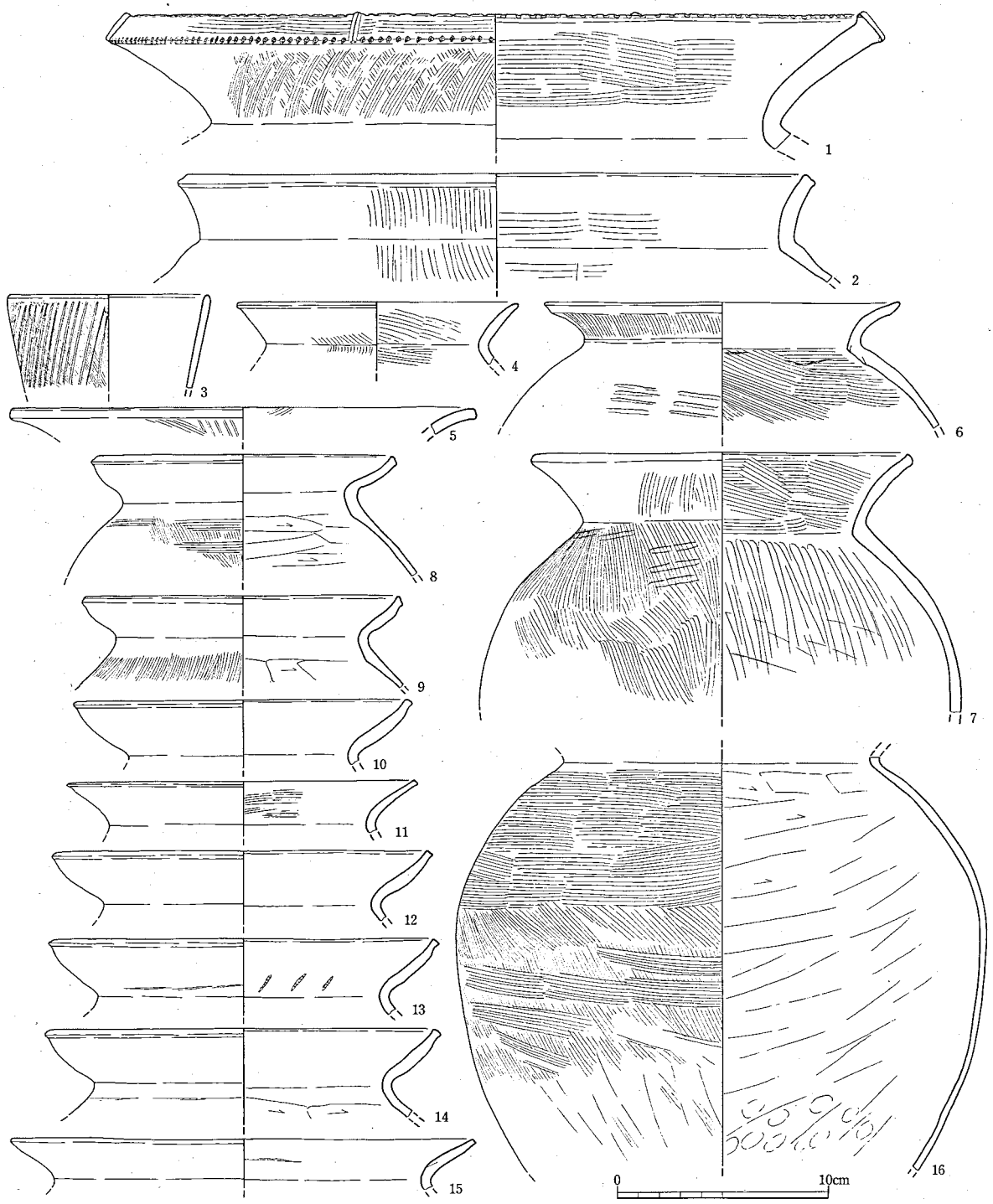
挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
136-32		住38 no.15	高杯杯底部	残高21	粘土細、1mm石英・長石少	良好	橙褐色	外ケズリ・ハケ後横ミガキ。内ハケ後暗文風ミガキ。	1／3		503
136-33		住38北部一括	高杯脚部	残高40	粘土細、1mm石英・長石少	良好	外黄橙色、内橙褐色	半乾燥時穿孔1個所残。外ハケ後横ミガキ。脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	1／4		460
136-34		住38覆土	高杯脚部	裾径126、残高83	粘土細、1mm石英・長石少	良好	黄橙褐色	脚裾外ハケ後外横ミガキ。脚柱内上ハケ、内下指頭圧痕。裾内ハケ。半乾燥時穿孔1個所残。	1／3		467
136-35		住38覆土	高杯脚裾	裾径96、残高14	粘土粗、1mm長石・石英少	良好	橙褐色	裾径小さい。外ハケ後疎ら横ミガキ。脚内ナデ、裾内ハケ。	1／6		595
136-36		住38覆土	高杯脚裾	裾径126、残高17	粘土粗、1mm石英少	良好	淡橙褐色	外ハケ後疎ら横ミガキ、内ハケ。	1／8		592
136-37	48	住38覆土	高杯	口径156、裾径114、器高120、脚高35	粘土粗、1mm長石・石英多	良好	褐色	口縁部が直立し、脚の低い特徴的な形態。	口縁1／2、脚全周		468
136-38	48	住38 no.12	山陰系大形鉢	口径226、頸径198、胴径252、底径98、復元高229	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	肩外縁描直線文。底部～胴外ハケ、口縁内外ナデ、胴内ケズリ。	口縁全周	口縁内面煤付着	502
136-39		住38no.4	外反口縁鉢	口径154、頸径140、胴径160、器高98、胴高79	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡橙褐色	やや大形で口縁短い。胴外上部ハケ後外面ミガキ、内ハケ（頸内摩滅）。	1／3		480
136-40		住38 P3	外反口縁鉢	口径108、残高45	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	口縁外・胴上部外ハケ、胴下部ケズリ後外ミガキ。内ナデ。	1／6		477
136-41		住38 no.13	外反口縁鉢	口径118、残高42	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	頸外ハケ後外ミガキ、内ナデ。	1／10		598
136-42	48	住38 no.13	外反口縁鉢	口径128、頸径119、胴径120、器高61、胴高41	粘土細か、1mm石英少	良好、口縁外6cm大黒斑	橙褐色	口縁外・胴上部外ハケ、胴下部ケズリ後外ミガキ。口縁内ハケ、胴内ナデ。	ほぼ完形		498
136-43		住38 no.13	脚付鉢鉢部	口径126、残高52	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	口縁外・胴上部外ハケ、胴下部ケズリ後外ミガキ。内横ミガキ後暗文風縦ミガキ。口縁外下一部沈線状。	口縁1／8、下部1／3		497
136-44		住38no.9	脚付鉢脚裾	裾径228、残高36	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外斜めハケ後横ミガキ、内斜めハケ。	1／4		489
136-45	48	住38no.9	直口鉢	口径180、器高82	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	褐色	端部角張る。内外ハケ後外下部ケズリ。	ほぼ完形		486
136-46		住38覆土下部	直口鉢	口径134、残高57	粘土粗、1mm長石・石英多	良好	外灰褐色、内褐黄色	端部シャープに角張る。内外ナデ後外下部粗い雑なハケ。	1／4		473
136-47	47	住38覆土no.2	直口鉢	口径158、器高49	粘土粗、1mm石英少	良好	外黄褐色、内淡褐色	大きめの平底。外底～口縁ナデ、内ハケ。見込みハケは螺旋状。	ほぼ完形		479
136-48	48	住38覆土no.2	山陰系脚付鉢	口径123、裾径54、器高53	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	やや甘い	外淡褐白色、内淡黄褐色	脚裾内外横ナデ、鉢外縦ハケ、鉢内ケズリ後疎らな縦ミガキ。	ほぼ完形		478
136-49		住38覆土下部	山陰系鼓形器台	口径154、残高54	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄褐色	口縁外面縦ミガキ、括れ部外面ナデ、受部内面横ミガキ。	1／4		472
136-50	48	住38覆土床面	山陰系鼓形器台	口径174、括部径84、裾径142、器高99	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	やや甘い	淡黄褐色	裾・口縁外面縦ミガキ、括れ部外面ナデ、受部内面横ミガキ。裾内面は横ナデ仕上げであるが、縦方向工具痕残。	1／4		470
136-51		住38覆土下部	半島系土器壺	口径146、器高26	粘土細か	陶質、堅緻	褐灰色	外～口縁外ナデ、胴内ハケ？、当具痕か不明の細かい条痕残。シャープ。	1／4		2367
136-52		住38上面	タコ壺	口径68、残高81	粘土粗、1～5mm石英多	良好	褐色	内外ナデ。	1／3		476
136-53		住38覆土	タコ壺	口径64、器高78	粘土粗、1～3mm石英・角閃石多	良好	外黄褐色、内褐灰色	内外ナデ。	1／4		460



第 135 図　38 号竪穴住居跡出土土器実測図（3）（1／3）



第 136 図　38 号竪穴住居跡出土土器実測図（4）（1／3）



第137図　39号竪穴住居跡出土土器実測図（1）（1／3）

浮文が残る。粘土貼付の浮文の総数は不明である。2は在地系大形壺で、3はやや精製の直口壺口縁部である。

4～7は五様式系甕である。6は口縁が外反し、面をなす端部に至り、胴外面はタタキ後ナデで仕上げる。7の胴部内面はケズリの後板ナデを施し、特徴的である。

8～16は布留系甕。このうち11・15は口縁部が緩やかに外反し、15は口縁部内面に接合痕を残す。胴部のみの破片となる16の外面は、肩部横ハケ、胴中部縦、斜めハケ、胴中部横ハケの順

の切合いが確認できる。

17は在地系高杯口縁部、18は在地系高杯脚部。18は屈曲部に2個所、乾燥前、ミガキに先立つ穿孔がある。19も高杯口縁部か。20は高杯杯部片、21は脚上部片である。

22は深い器形の直口鉢で、器壁が厚く粗製品である。23は脚付鉢鉢部片で、下端の破損面にハケメ痕が認められる。

24は山陰系甑の下半部大形破片で、裾近くに断面コ字状突帯、裾よりやや上に半環形把手がある。把手は器壁に穿孔し、棒を差し込んで接合して成形する。

25は朝鮮半島系土器壺として図示したが、外面にカキメらしき条痕も見えるので須恵器の可能性もあるか。

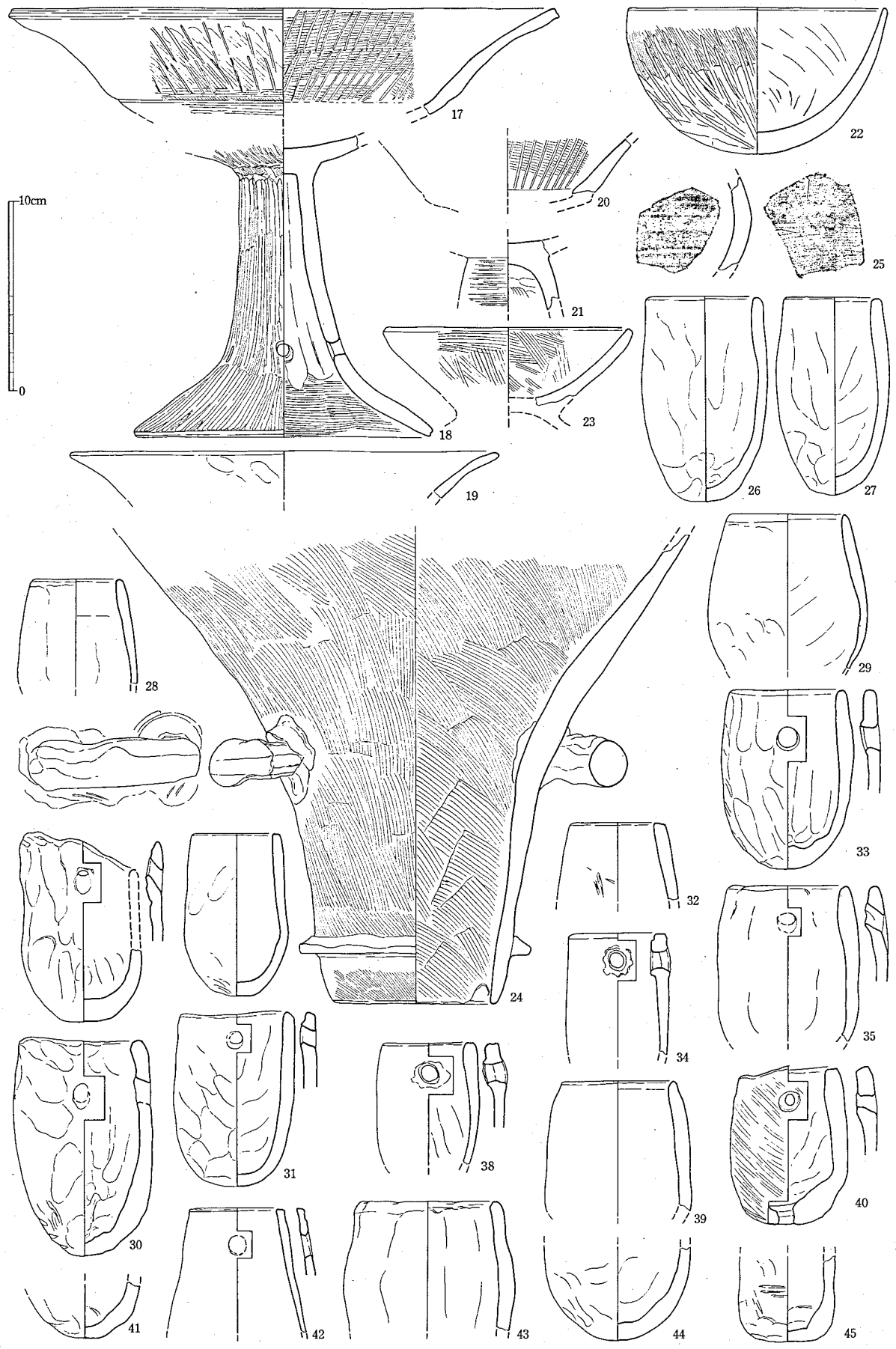
26～45はタコ壺である。30は口縁部の歪みが極めて大きく、粗雑な印象を受ける。40は外面タタキ仕上げで、底部にも穿孔を施す。42は器壁が極めて薄く、胎土・焼成もあわせて、小形精製器種に近い仕上げである。

40号竪穴住居跡（図版24、第132図）

3区の東部に位置し、西に位置する1号竪穴住居跡に大半を壊される。主軸をほぼ南北N－18°

第73表　39号竪穴住居跡出土土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
137-1		住39 P3	在地系大形甕口縁	口径342、残高65	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡褐黄色、内淡黄褐色	口縁上端、口縁外端ハケメ工具による刻目、1個所棒状粘土貼付の浮文残。外斜めハケ、口縁外端横ハケ、口縁内横ハケ。	1／8		198
137-2		住39覆土	在地系大形壺	口径290、残高53	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	口縁ゆるやかに外反し、端部角張る。外縦ハケ、内横ハケ。	1／8		196
137-3		住39覆土	直口壺口縁	口径92、残高46	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡褐色	口縁の伸び大きい。外斜めハケ後暗文縦ミガキ、内摩滅。	1／6		199
137-4		住39覆土	五様式系甕	口径132、残高29	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	頸外ハケ、口縁外ナデ、内ハケ。	1／6		286
137-5		住39覆土	五様式系甕	口径216、残高13	粘土細か、1mm石英少	良好	淡褐黄色	横ナデ仕上げであるが、内外に粗いハケ残。	1／12	径・傾き不安	197
137-6	49	住39覆土	五様式系甕	口径186、残高60	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い、口縁内黒斑	外灰褐色、淡褐黄色	口縁外反、端部面をなす。胴外面はタタキ後ナデ、口縁外面ハケ、口縁内ナデ、胴内ハケ。頸部内面に接合痕残。	1／4		194
137-7	48	住39覆土	布留系甕	口径176、頸径136、胴径206、残高123	粘土細、1～5mm石英多	良好、胴外1／4大黒斑	外黄白褐色、内灰黄褐色	胴外タタキ後ハケ、口縁外縦ハケ、口縁内ハケ、胴内ケズリ後板ナデ。	口縁7／8残		192
137-8	49	住39 P1	布留系甕	口径140、残高56	粘土細、1～3mm石英・長石少	かなり甘い	灰白褐色	胴外ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	5／6		193
137-9		住39覆土	布留系甕	口径146、残高43	粘土粗、1mm長石・石英少	やや甘い	灰黄褐色	胴外ハケ、胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／4		282
137-10		住39覆土	布留系甕	口径154、残高29	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内暗褐黄色	口縁内外ナデ。	1／6	口縁端外面二次的にやや赤変	283
137-11		住39覆土	布留系甕	口径160、残高24	粘土粗、1mm石英少	良好	外淡黄灰褐色、内淡黄褐色	口縁外反。口縁内ハケ後口縁内外ナデ。	1／12		285
137-12		住39覆土	布留系甕	口径172、残高33	粘土粗、1～3mm石英少	やや甘い	外黄褐色、内淡黄褐色	口縁内外ナデ。	1／12		287
137-13		住39覆土	布留系甕	口径178、残高35	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	外灰黄褐色、内淡黄褐色	口縁内ハケメ工具静止痕、頸外ハケメ工具あたり残るが、内外ナデ。	1／8		284
137-14		住39覆土	布留系甕	口径178、残高42	粘土細、1～3mm石英・長石少	やや甘い	淡黄灰褐色	胴内ケズリ、口縁内外ナデ。	1／4		195
137-15		住39炉跡	布留系甕	口径218、残高19	粘土粗、1mm長石・石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐黄色	口縁外反。内外ナデで、内面に接合痕と思われる溝巡る。	1／12	径不安	295
137-16		住39 P4	布留系甕	頸径150、胴径250、残高196	粘土細、1～3mm石英少	良好だが、内面黒変	淡黄褐色	外肩部横ハケ、胴中部縦、斜めハケ、胴中部横ハケの順。内下部指頭圧痕。	1／3		203
138-17		住39炉跡	高杯口縁部	口径306、残高55	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐色～淡黄褐色	外反強く、口縁端部凹む。外ハケ、口縁外下指頭圧痕、内ハケ後内外暗文風のミガキ。	1／12		202
138-18	49	住39覆土	高杯脚部	脚裾径174、残高157	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	橙褐色	2個所に乾燥前、ミガキに先立つ穿孔あり。外縦ハケ後縦の太めミガキ、脚柱内ナデ、脚裾内ハケ。	全周		204
138-19		住39覆土	高杯口縁部	口径216、残高23	粘土細、1mm長石極少	良好	褐色	内外摩滅、外指頭圧痕残。	1／12		200
138-20		住39覆土	高杯杯部	残高29	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	外摩滅、内ハケ後ミガキ。	1／8		196



第 138 図　39 号竪穴住居跡出土土器実測図（2）（1／3）

－Wに向けた方形竪穴住居跡の東壁と、北壁・南壁のそれぞれ一部を検出したにとどまる。

南北3.4m、東西1.4～1.6mを測り、壁は遺存状況の良好な個所でも高さ20cmに満たない。床面南部に長楕円形のピットを検出しているが、炉跡は検出されなかった。図示できる出土遺物も少ない。

出土遺物（図版49・50、第139図、第75表）　1は粗製の直口壺で、在地系と考えられる。

2～4は在地系の甕口縁部。いずれも口縁部が直線的に外傾する。5は脚付甕で在地系のものか。6は五様式系の甕。

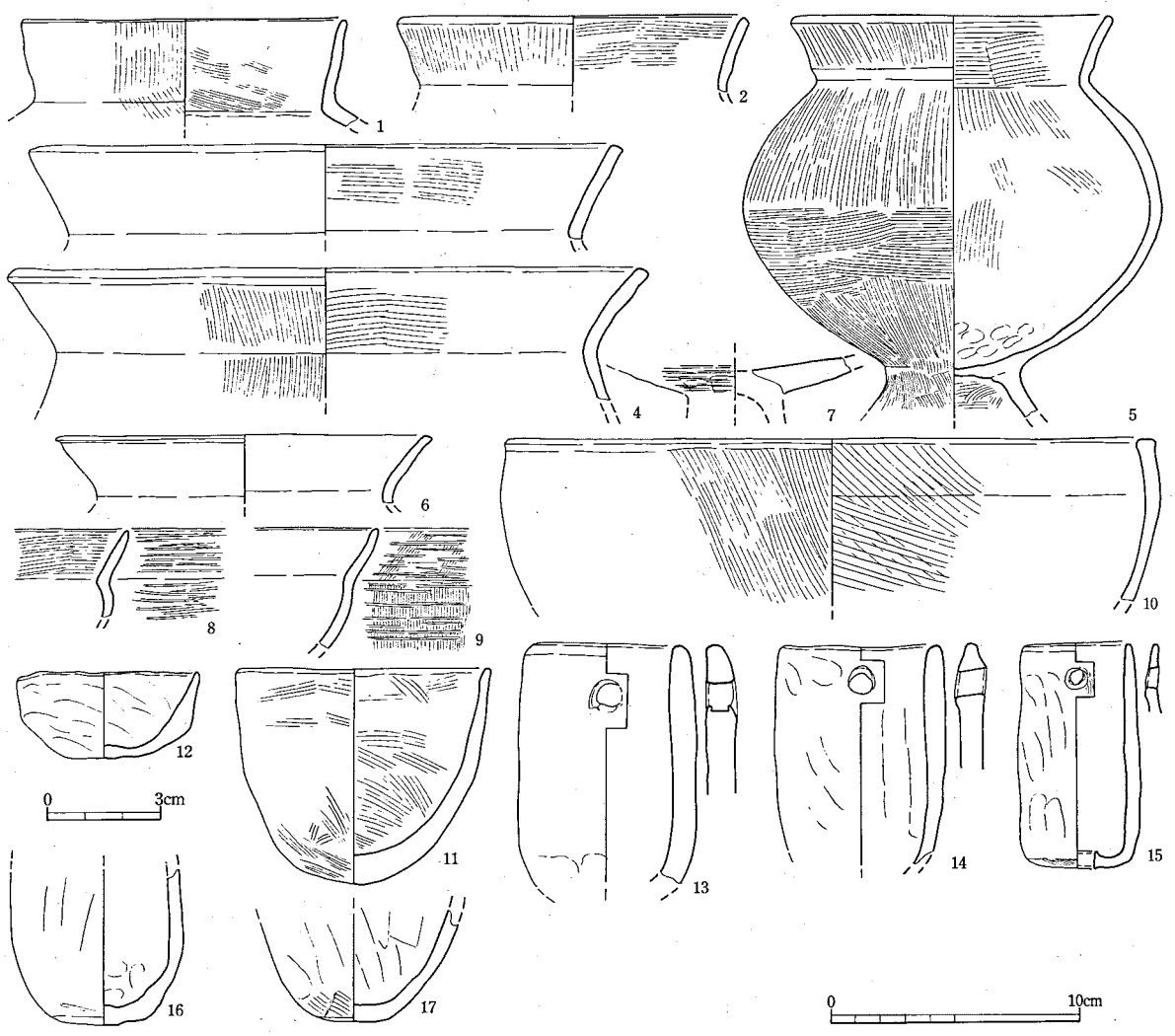
7は高杯杯底部である。外面ケズリ後ミガキ、内面ミガキと思われるが摩滅する。

8・9は外反口縁の鉢で、いずれも口縁部は直に近い角度で立ち上がる。10はやや大形の直口縁鉢であり、口縁は内湾し、端部が肥厚する。11は深い器形で粗製の直口鉢、12は手捏ねの小形鉢。

13～17はタコ壺である。15は底部に穿孔し、17は底外面にハケメ風の条痕を残す。

第74表　39号竪穴住居跡出土土器観察表（2）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
138-21		住39上面	高杯脚部	残高36	粘土細、1mm石英少	良好	淡橙褐色	外ミガキ、内ナデ、一部ハケ。	全周		589
138-22	49	住39no.2	直口鉢	口径136、器高76	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	黄褐色	器壁厚い。外上部ハケ後外下部ケズリ後外疎らな縦ミガキ。内板ナデ。	ほぼ完形		191
138-23		住39覆土	脚付鉢鉢部	口径126、残高41	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐黄色	内外ハケ仕上げ。下端の破損面ハケメ痕あり。	1／6		201
138-24	49	住39no.1	山陰系甑	据径84、残高245	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡橙褐色	据近くに断面コ字状突帯、据よりやや上に半環形把手あり。把手は器壁に穿孔し、棒を差し込み接合し成形。把手・突帯はナデ、他は内外ハケ。	全周		1296
138-25		住39覆土	半島系土器壺胴部	残高47	粘土細か	良好	明灰色	外カキメ、内横ナデ。	小片		2368
138-26		住39覆土	タコ壺	口径54、器高108	粘土細、1mm石英少	良好	淡橙褐色	内外ナデ。	1／2		186
138-27	49	住39覆土	タコ壺	口径42、器高103	粘土細、1～3mm石英少	やや甘い	淡黄褐色	内外ナデ。	1／3		181
138-28		住39P2	タコ壺	口径42、残高55	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐色	内外ナデ。	1／3		294
138-29		住39覆土	タコ壺	口径60、残高81	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	内外ナデ。	1／4		186
138-30	49	住39覆土	タコ壺	口径50、器高100	粘土細、1～3mm石英極少	良好	黄白褐色	かなり口縁歪む。内外ナデ。	3／4	器径の歪み大きい	170
138-31		住39覆土（東壁）	タコ壺	口径38、器高85	粘土細、1mm石英少	やや甘い	外淡灰褐色、内黄灰褐色	内外ナデ。	1／2		190
138-32		住39	タコ壺	口径38、残高40	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内淡黄灰褐色	内外ナデ。	1／4		291
138-33	49	住39覆土（東壁）	タコ壺	口径52、器高94	粘土粗、1～5mm石英・長石少	良好	褐黄色	内外ナデ。	ほぼ完形		188
138-34		住39覆土	タコ壺	口径40、残高64	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄褐色	内外ナデ。穿孔時の粘土が内外にせり出す。	1／4		187
138-35		住39覆土	タコ壺	口径60、残高83	粘土粗、1mm石英・クサリ礫少	良好	外褐黄色、内淡黄褐色	内外ナデ。	1／4		288
138-36	49	住39炉跡	タコ壺	口径62、器高115	粘土細、1～5mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／2		178
138-37	49	住39覆土	タコ壺	口径56、器高91	粘土粗、1mm長石・石英少	良好	褐黄色	内外ナデ。	口縁3／4、他は全周		184
138-38		住39P2	タコ壺	口径42、残高64	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄灰褐色	内外ナデ。	全周		189
138-39		住39覆土	タコ壺	口径58、残高68	粘土粗、1～5mm大石英少	良好	外黄褐色、内橙褐色	内外ナデ。	1／6	小片径不安	290
138-40	49	住39P4	タコ壺	口径43、器高82	粘土粗、1mm長石・石英少	やや甘い	淡黄褐色	外斜めタタキ、内ナデ。	ほぼ完形		182
138-41		住39覆土	タコ壺	残高29	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	内外ナデ。	全周		293
138-42		住39覆土	タコ壺	口径42、残高64	粘土細、1～3mm石英・長石・クサリ礫少	良好	橙褐色	器壁薄く、胎土・焼成もあわせて、小形精製器種に近い仕上げ。内外ナデ。	1／3		292
138-43		住39	タコ壺	口径70、残高67	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／4		289
138-44		住39	タコ壺	残高50	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	褐色	内外ナデ。	1／3		185
138-45		住39P5	タコ壺	残高45	粘土粗、1mm石英極少	良好	淡褐灰色、淡黄褐色	内外ナデ。外面に条痕残。	全周		183



第 139 図　40 号竪穴住居跡出土土器実測図（12 は 1／2、他は 1／3）

（2）包含層・遺構検出面出土の土器（図版 50、第 140 ～ 144 図、第 75 ～ 78 表）

ここでは遺構検出面、近世遺構等からの出土土器のうち、西新町遺跡集落と同時期のものを報告する。このうち 89・93 は 1 区からの出土品であるが、他は 3 区からの出土品である。

1 ～ 4 は在地系大形壺ないしは甕の破片である。1 は頸部片で、頸部外面に断面三角形に近い刻目突帯を貼付する。2 は胴部片で、高い断面コ字状突帯を貼付し、頂部にハケメ工具で刻目を施文する。3 は 1 と同様に刻目突帯を貼付する頸部片。4 は口縁部小片で口縁外端には意図的か不明な刻目状凹みが見られる。

5 は畿内系直口壺。6 は畿内系二重口縁壺で、口縁下部に竹管文を施文した円形浮文を貼付する。内外ナデ後、口縁外櫛描波状文、口縁内縦ミガキで仕上げる。7 ・ 8 は山陰系二重口縁壺。9 は大形二重口縁壺で、外面に 2 段にわたり雑な櫛描波状文を施文する。10 は畿内系の精製二重口縁壺と推測されるもので、口縁部外面に櫛描波状文を施文する。11 は二重口縁壺頸部片で 10 と同一個体の可能性がある。頸部に高い断面三角突帯を施文し、頂部に刻目を施す。胴上部には直線櫛描文を施文する。

12 は頸部に断面三角形突帯を貼付し、頸部直下に細く、深い沈線を縦方向に施文した壺破片で、24 号竪穴住居跡出土品（第 99 図 1 ）と同一個体の可能性が高い。13 は脚付壺脚部か。脚部長く伸び、

外面丁寧な横ミガキで仕上げた精製品であり、14号竪穴住居跡出土品（第83図7）と類似する個体となるか。14は内外板ナデ仕上げで、平底の壺底部片。

16～18は小形丸底壺で、15はその口縁部、19はその胴部片。16・17・19・20はミガキ仕上げの精製品であるが、15・18はナデ仕上げでミガキを施さず、粗製化がすすんだものか。19は頸部の強く締まり、二重口縁壺の可能性も考えられる。

22～25は在地系甕口縁部で、23は8号竪穴住居跡上面のピットから出土した。25～29は五様式系甕。25は口縁部の外反が強く、28は端部が面をなす。30は庄内系甕であるが、口縁外面のタタキは通例と比べ粗い。

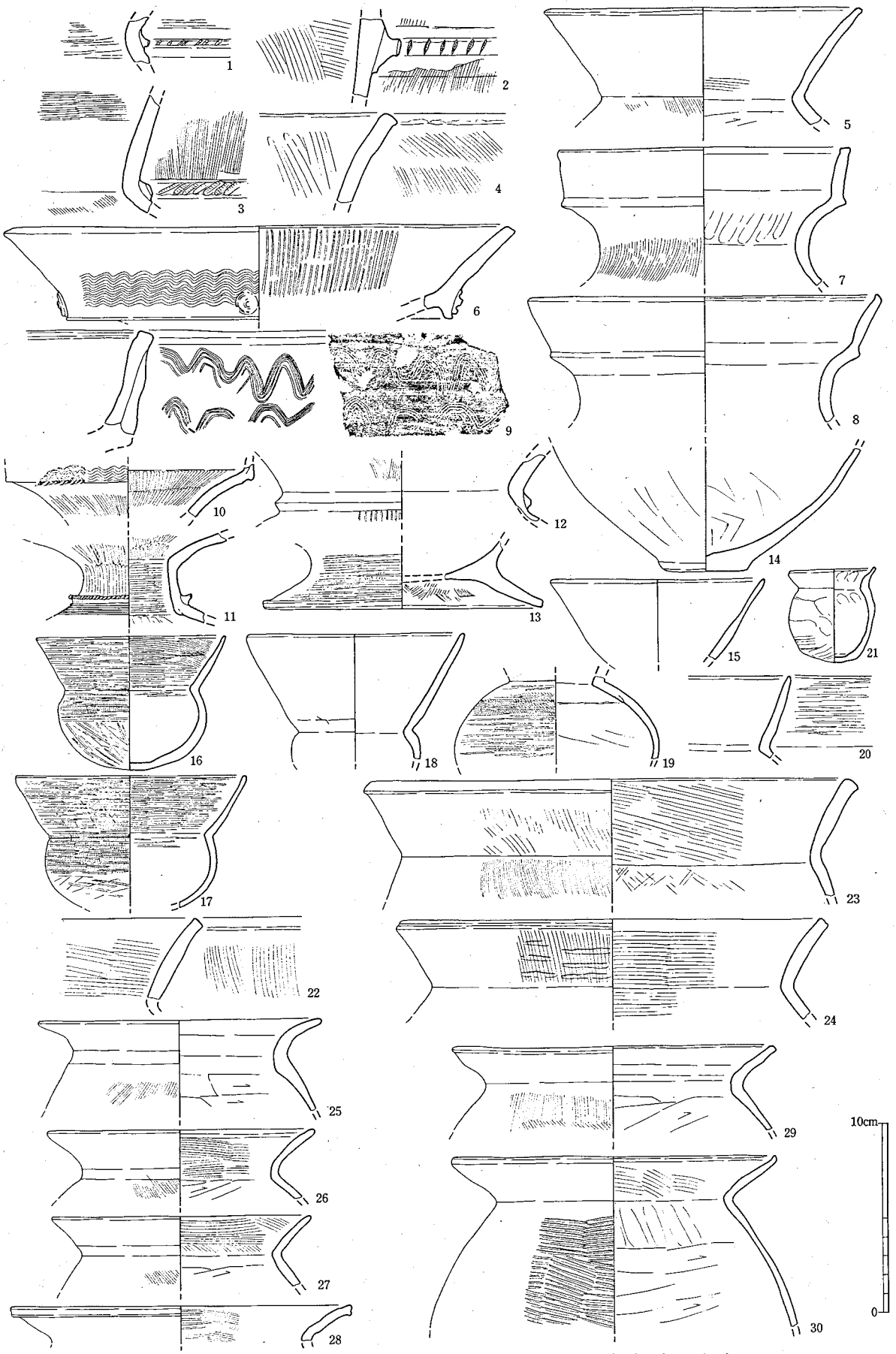
31～37は布留系甕、38・39は布留系甕肩部破片である。36は口縁端部を内に肥厚させ、胴肩外に横ハケを施さず、胴内にケズリを施さずハケメを留めるなど、他と調整が異なる。37は外面に粗い櫛描波状文を施す。38は肩部外面に櫛描波状文を施すが、ハケメ工具で施文した可能性がある。39は肩にハケメ工具の水平方向刺突を縦に並べて施文する。

40～43はいずれもミガキを施した精製高杯。44・45は高杯脚柱部片で、いずれも乾燥前の穿孔を施す。46～49は高杯脚裾部付近の破片で、49は在地系か。

50～57は外反口縁鉢で、50・51は外面ミガキ仕上げの精製品。52は頸部がほとんど括れず、口縁の長、あまり類例を見ない器形である。53は平底で、口縁部がやや内湾する。56・57は外面

第75表　40号竪穴住居跡出土土器観察表

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
139-1		住40覆土下部	直口壺	口径128、残高43	粘土細、1～3mm石英少	良好	淡赤褐色	外縦ハケ、口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／8		1826
139-2		住40覆土下部	在地系甕	口径136、残高30	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	口縁外縦ハケ、口縁内横ハケ。	1／4		1696
139-3		住40覆土下部	在地系甕	口径230、残高36	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐黄色	外ナデ、内横ハケ。	1／8		1691
139-4		住40覆土下部	在地系甕	口径248、残高53	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	外縦ハケ、口縁内横ハケ、胴内ナデ。	1／12	外煤付着	1698
139-5	49	住40no.1	脚付甕	口径126、頸径110、胴径170、残高160	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	口縁は直線的に外傾。外口縁～胴上部縦ハケ、胴下部横ハケ後脚付近縦ハケの順。口縁内横ハケ、胴内ハケ後ナデ。脚裾内ハケ。	胴1／2、口縁1／8	外煤付着	1702
139-6		住40覆土下部	五様式系甕？	口径146、残高53	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡灰褐色、内黄褐色	内外ナデ。	1／6	外わずかに煤付着	1823
139-7		住40覆土下部	高杯杯底部	残高15	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄橙色	外面ケズリ後ミガキ、内面ミガキと思われるが摩滅。	1／8		1827
139-8		住40覆土下部	外反口縁鉢	残高35	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡褐色～赤褐色	外面ミガキ、口縁内ハケ、胴内ナデ。	小片		1825
139-9		住40覆土下部	外反口縁鉢	残高48	粘土細、1mm石英・長石少	やや甘い	淡橙褐色	外面縦ハケ後横ミガキ、胴内摩滅。	小片		1824
139-10		住40覆土	大形直口鉢	口径246、残高66	粘土粗、1mm長石・石英極少	良好	淡黄褐色	口縁やや内湾。内外粗いハケ仕上げ。	1／12		1697
139-11	50	住40覆土上面	直口鉢	口径106、器高86	粘土粗、1mm長石・石英少	良好	外灰黄褐色、内褐黄色	深い器形で粗製。内外ハケ。	1／4		1699
139-12	49	住40覆土下部	手捏鉢	口径50、器高24	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	黒褐色	内外ナデ。	3／4		1700
139-13		住40覆土下部	タコ壺	口径52、残高97	粘土粗、1mm長石・石英少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	2／3		1693
139-14		住40覆土下部	タコ壺	口径60、残高78	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外黄褐色、内褐赤色	内外ナデ。	1／3		1692
139-15	49	住40no.4	タコ壺	口径40、器高90	粘土粗、1mm長石・石英少	良好	外黄褐色、内淡黄褐色	内外ナデ。底部に穿孔あり。	底部1／2、口縁全周		1695
139-16		住40覆土下部	タコ壺	残高60	粘土細、1mm石英少	良好	黄白褐色	内外ナデ。	底全周		1690
139-17		住40no.2	タコ壺	残高45	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外褐色、内褐黄色	内外ナデ。	底全周		1694

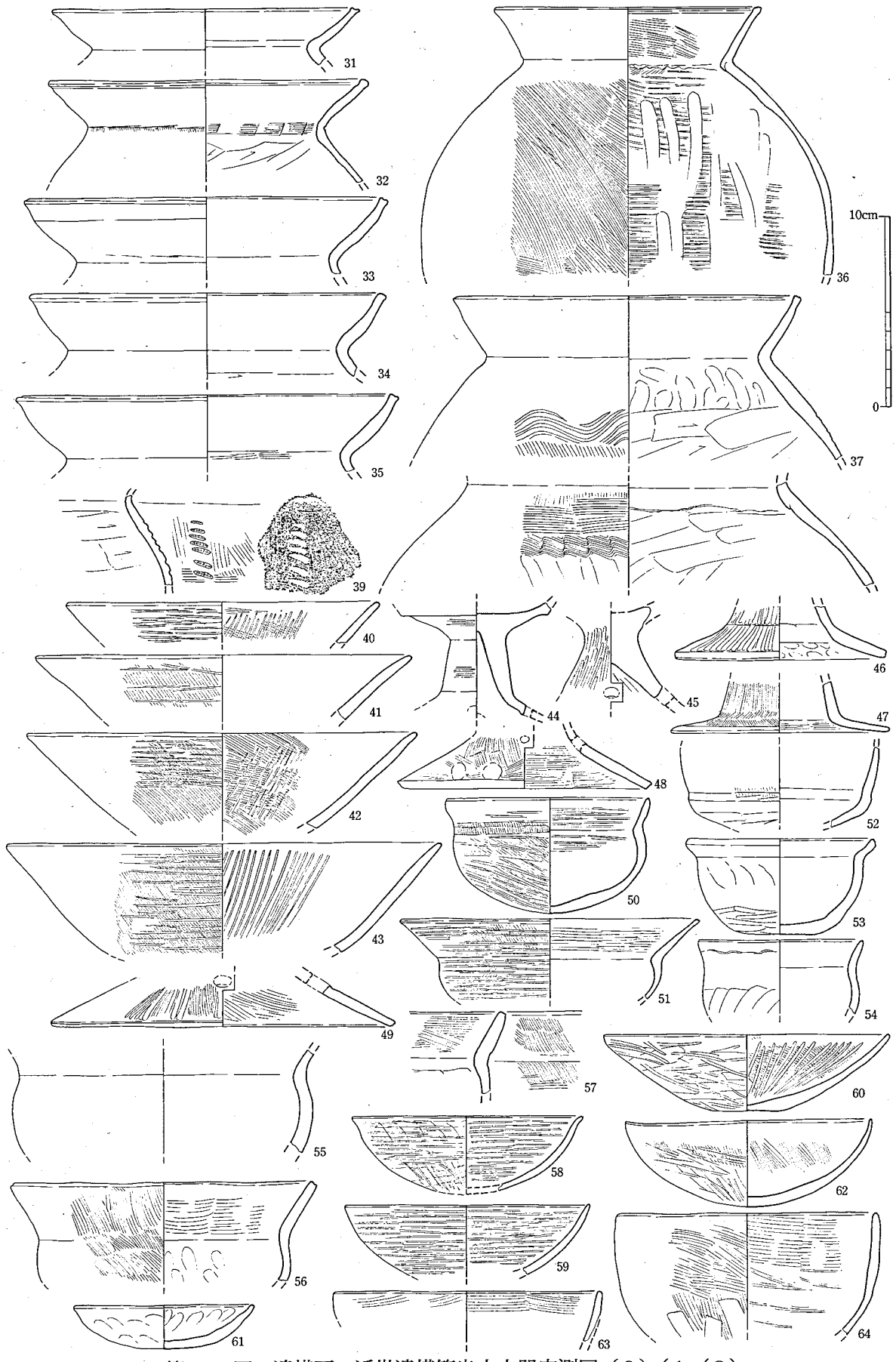


第 140 図　遺構面・近世遺構等出土土器実測図（1）（1／3）

第76表　遺構面・近世遺構等出土土器観察表（1）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
140-1		3区溝18	在地系大形壺	残高24	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	明褐色	頸部片。頸部外面に断面三角形に近い刻目突帯。内外ミガキか。	小片		2152
140-2		3区溝18南半	在地系大形壺	残高63	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	胴部片。高いコ字突帯を貼付し頂部をハケメ工具で刻目。内外ミガキ。	小片		2153
140-3		3区溝18	在地系大形壺	残高42	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	頸部片。頸部に低い突帯を貼付し頂部をハケメ工具で刻目。外ハケ、ハケ後ナデ。	小片		2148
140-4		3区溝19	在地系大形壺	残高56	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外褐黄色、内明褐色	口縁部片。内外ハケ。口縁外端には意図的か不明な刻目状凹みあり。	小片		2187
140-5		3区溝18北半	畿内系直口壺	口径162、残高62	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	口縁内外ナデ、内にナデに先立つハケ残。胴外縦ハケ、胴内ケズリ。	1／8		2161
140-6		3区no.9・10遺構面	畿内系二重口縁壺	口径256、残高49	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外淡褐色、内淡黄褐色	口縁下部に竹管文を施文した円形浮文貼付。内外ナデ後口縁外櫛描波状文、内縦ミガキ。	1／12		2255
140-7		3区遺構面	山陰系二重口縁壺	口径144、残高73	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	口縁内外ナデ、頸部外縦ハケ、頸部内指頭圧痕。	1／3		2101
140-8		3区溝18北半	山陰系二重口縁壺	口径182、残高66	粘土粗、1～3mm石英極少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／8		2165
140-9		3区no.36・37遺構面	二重口縁壺口縁部	残高55	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡褐色	外に2段の雑な櫛描波状文施文。破損面に接合痕観察できる。内外ナデ。	小片		2103
140-10		3区東南部遺構面	畿内系二重口縁壺	残高27	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡褐色、内淡褐灰色	口縁部外面に櫛描波状文を施文。内外縦ミガキ。	1／10		2110
140-11		3区東部遺構面	畿内系二重口縁壺	頸径50、残高46	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡黄褐色、内黄灰褐色	頸部に高い断面三角突帯を貼付し、頂部に刻目。胴上部には直線櫛描文を施文。頸部内外ミガキ、胴内ナデ。	1／4	140-10と同一個体か。	2109
140-12		3区溝19	壺	頸径136、残高33	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	黒褐色	頸部に断面三角形突帯を貼付、頸部直下に細く、深い沈線を縦方向に施文。	1／8	住24出土品と同一の可能性	2199
140-13		3区中央部遺構面	脚付壺	裾径144、残高35	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	明褐色	脚部長く伸びる。外縦ハケ後ミガキ、内ハケ後ナデ。	1／4		2088
140-14	50	3区溝17	壺底部	底径44、残高64	粘土細、1～5mm石英多	良好	外褐黄色、内黄褐色	底部わずかに突出した平底。内外板ナデ。	1／6		2147
140-15		3区溝17	小形丸底壺口縁	口径108、残高42	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	淡黄白褐色	内外ナデ。	1／8		2144
140-16	50	3B区P481	小形丸底壺	口径98、頸径72、胴径80、器高70、胴高42	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	胴上部外ハケ、胴下部外ケズリの後、外ミガキ。口縁内はハケ後疎らなミガキ、胴内ナデ。	1／4		2298
140-17	50	3区中央部撹乱	小形丸底壺	口径116、頸径86、胴径88、残高69	粘土細、1～3mm石英極少	良好	橙褐色	胴上部外ハケ、胴下部外ケズリ、口縁外指頭圧痕の後、外ミガキ。口縁内はハケ後疎らなミガキ、胴内はナデ。	1／3	二次的に火を受け褐変	2262
140-18		3区南東部遺構面	小形丸底壺	口径112、残高67	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡褐色	内外ナデで、頸部外に板ナデ痕残。	1／4		2091
140-19		3区近世包含層7南部	小形壺胴部	胴径108、残高43	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外橙褐色、内淡黄褐色	頸部が強く締まり、二重口縁壺の可能性あり。外ミガキ、内ナデで、頸部内面に接合痕残。	1／4		2246
140-20		3区溝17	小形丸底壺口縁	残高43	粘土粗、1～3mm石英多	良好	暗赤褐色	外ミガキ、内ナデ。	小片		2142
140-21	50	3区排土中	小形壺	口径44、頸径38、胴径47、器高49、胴高40	粘土細、1mm石英極少	良好	暗褐色	小形品で器形は甕にも近い。内外ナデで底外にハケ状の擦痕残。	ほぼ完形		2255
140-22		3区溝14	在地系甕	残高42	粘土粗、1～3mm石英・金雲母少	良好	淡灰褐色	外縦ハケ、内横・斜めハケ、口縁端横ナデ。	小片		2139
140-23		3区P208	在地系甕	口径128、残高61	粘土粗、1～3mm石英少	良好	外暗褐色、内淡褐色	内外ハケで、胴外面はハケメが細かい。	1／6		2275
140-24		3区溝18北半	在地系甕	口径220、残高53	粘土粗、1～3mm石英・長石極少	良好	淡黄白褐色	胴外ナデ、他はハケで仕上げ、口縁外にタタキ痕残す。	1／8		2164
140-25		3D区遺構面	五様式系甕	口径146、残高49	粘土粗、1～5mm石英少	良好	淡黄褐色	胴外ハケ、胴内ケズリ、口縁内外横ナデ。	1／8		2114
140-26		3区溝19	五様式系甕	口径138、残高38	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外褐色、内淡黄白褐色	胴外ハケ、口縁内ハケ後口縁内外ナデ。胴内ケズリ。	1／8		2193
140-27		3区溝17	五様式系甕	口径134、残高37	粘土細、砂粒少ないが金雲母目立つ	良好	黄褐色	胴外ハケ、口縁内ハケ後口縁内外ナデ。胴内ケズリ。	1／8	外面煤付着	2145
140-28		3D区溝37	五様式系甕	口径134、残高38	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡赤褐色	口縁内ハケ後口縁内外ナデ。	1／8	外面煤付着	2217
140-29		3区溝18北半	五様式系甕	口径176、残高19	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	胴外ハケ、口縁内ハケ後口縁内外ナデ。胴内ケズリ。	1／8	外面煤付着	2163
140-30		3区溝18北半	庄内系甕	口径168、残高90	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	淡黄褐白色	口縁部薄く、端部をわずかに上につまみ上げ。胴外極めて粗いタタキ、口縁ハケ後口縁内外ナデ。胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／6		2162
141-31		3区溝18南半	布留系甕	口径152、残高30	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	黄褐色	内外ナデ。	1／8		2151
141-32	50	3D区撹乱	布留系甕	口径172、残高55	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	口縁内ハケ後口縁内外ナデ。胴外ナデ、胴内ケズリ。	3／4		2261
141-33		3区近世包含層7南部	布留系甕	口径182、残高42	粘土粗、1mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	1／6	外面煤付着	2244

出土遺構の「土」は土坑のこと

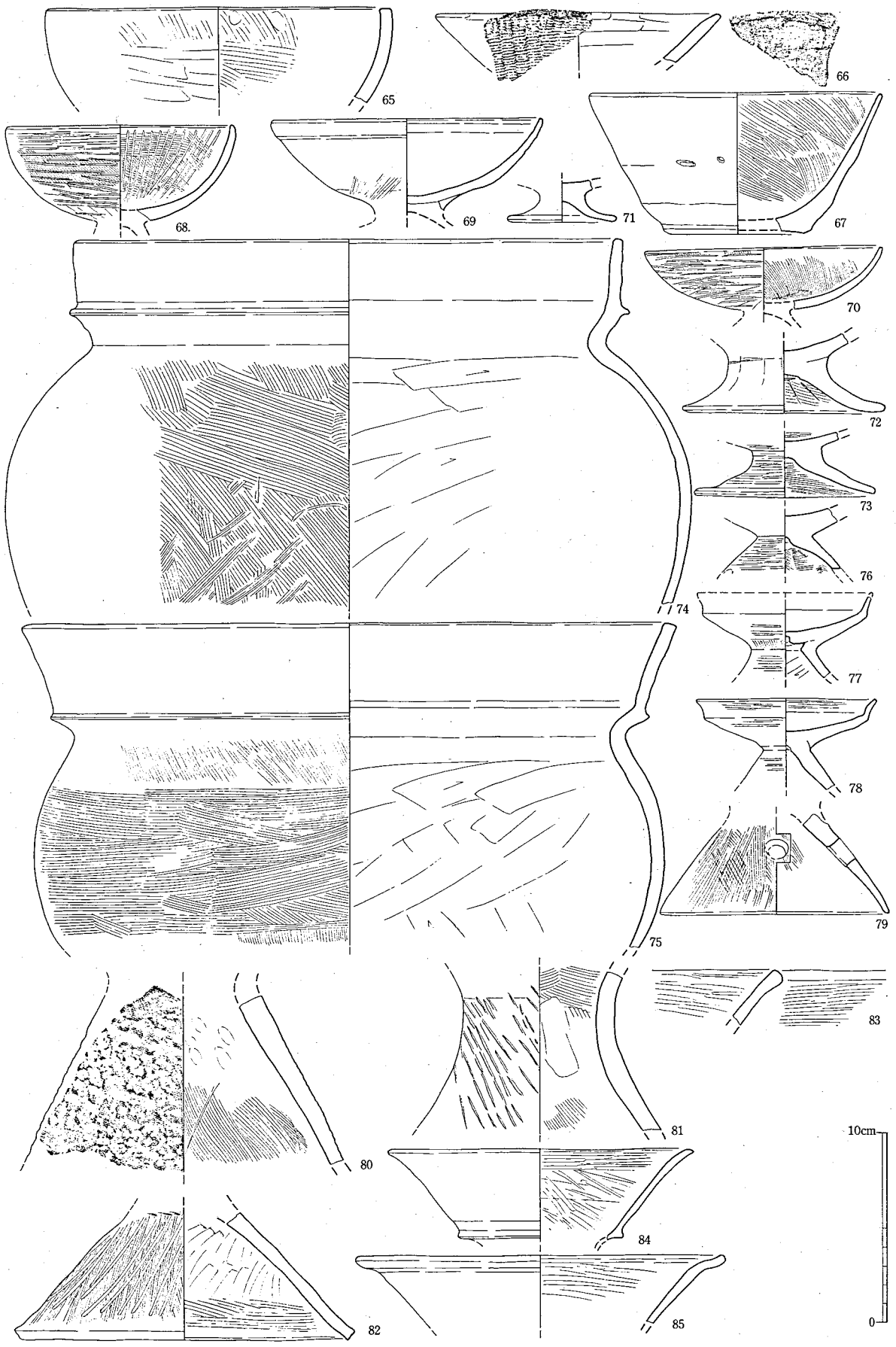


第 141 図　遺構面・近世遺構等出土土器実測図（2）（1／3）

第77表　遺構面・近世遺構等出土土器観察表（2）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
141-34		3区溝19	布留系甕	口径178、残高44	粘土粗、1mm長石・石英極少	良好	外灰黄褐色、内淡黄褐色	内外ナデ、口縁内ケズリ。	1／8		2192
141-35		3区近世包含層7南部	布留系甕	口径190、残高40	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外黄白褐色、内淡黄褐色	内外ナデ、頸部内ハケ。	1／12		2245
141-36		3区南東部遺構面	布留系甕	口径138、頸径110、胴系214、残高140	粘土粗、1～3mm石英・長石多	やや甘い	淡褐黄色	口縁端部内に明瞭に肥厚。胴外粗いハケ、口縁外ナデ、口縁内ハケ、胴内ハケ後指ナデ。頸部内に接合痕残。	1／4	底部遺存するが、接合せず	2227
141-37		3区no.17遺構面	布留系甕	口径174、残高88	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	明褐色	肩部外櫛描波状文。外波状文下ハケ、口縁ナデ、胴内指頭圧痕後ケズリ。	1／3		2085
141-38		3区溝19	布留系甕？肩部	残高54	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	黄褐色	外ハケメ工具による？櫛描波状文。外波状文下板ナデ、波状文上ハケ。胴内ケズリで、頸部内面に接合痕残。	1／8	外面煤付着	2189
141-39		3区東北部遺構面	布留系甕	残高47	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡黄褐色	肩にハケメ工具の水平方向刺突を縦に並べて施文。外ハケ、内ケズリ。	小片		2123
141-40		3区近世包含層7南部	高杯杯部	口径162、残高21	粘土細、1～3mm石英・長石少	良好	橙褐色	外横ミガキ、内横ハケ後縦ミガキ。	1／8		2248
141-41		3区近世包含層7南部	高杯杯部	口径194、残高34	粘土粗、1mm石英・長石・クサリ礫少	良好	橙褐色	外ハケ後疎らな横ミガキ、内摩滅。	1／8		2247
141-42		要確認	高杯杯部	口径200、残高50	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	内外ハケ後、外疎ら横ミガキ、内暗文縦ミガキ。	1／8		2178
141-43		3区溝19	高杯杯部	口径224、残高57	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外ハケ後、疎ら横ミガキ。内暗文縦ミガキ。	1／8		2179
141-44		3区南東部遺構面	高杯脚部	残高59	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐白色	外・杯内摩滅するが、脚外ミガキ残。脚内ナデ。内頂部に軸痕あり	脚上部全周		2092
141-45		3区溝18北半	高杯脚部	残高48	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	褐色	外縦ミガキ、内ナデ。	脚上部全周		2169
141-46		3区溝17	高杯脚部	裾径108、残高27	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	赤褐色	外縦ミガキ、脚裾内ハケ、脚柱内ケズリ後ナデ。	1／6		2146
141-47		3区溝18北半	高杯脚部	裾径112、残高26	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	赤褐色	外ハケ、脚裾内ハケ、脚柱内ナデ。	1／6		2166
141-48		3区溝17	高杯脚部	裾径126、残高26	粘土粗、1～3mm石英極少	良好	淡黄褐色	外ハケ・内指頭圧痕、内ハケ。	1／6		2180
141-49		3区溝18北半	高杯脚部	裾径174、残高24	粘土細、1mm石英少	良好	淡黄褐色	外縦ハケ後縦ミガキ、内斜めハケ。	1／10		2167
141-50	50	3区近世包含層6	外反口縁鉢	口径102、頸径96、胴径100、器高60、胴高46	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡黄褐色	胴外ハケ、口縁内外ナデ後、外～口縁内ミガキ。胴内ナデ。	3／4		2241
141-51		3C区撹乱（no.4）	外反口縁鉢	口径152、残高42	粘土粗、1～3mm石英多	良好	橙褐色	口縁外縦ハケ後外面ミガキ。口縁内ハケ、胴内摩滅。	1／6		2260
141-52		3区溝19	外反口縁鉢	残高41	粘土粗、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄褐色	頸部が括れず、口縁の長い器形。頸外縦ハケ、胴外ケズリ、他はナデ。	1／8		2184
141-53		3区近世包含層5	外反口縁鉢	口径96、頸径88、底径30、器高50	粘土粗、1～5mm石英少	良好	淡黄褐色	平底で口縁部がやや内湾。底ヘラ工具によるナデ、他はナデ。	1／4		2240
141-54		3区遺構面	外反口縁鉢	口径86、残高39	粘土粗、1～3mm石英・長石・クサリ礫少	やや甘い	外淡橙黄褐色、内褐色	内外ナデで、胴外下部は板ナデ。口縁外面に粘土接合痕らしき細い溝あり。	1／6		1661
141-55		3区溝19	外反口縁鉢	残高55	粘土粗、1～3mm石英多	良好	淡褐色	内外摩滅。	1／8		2182
141-56		3区溝19	外反口縁鉢	口径152、残高51	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡橙黄褐色	外縦ハケ、口縁内粗いハケ、胴内ナデ。	1／8		2190
141-57		3区溝19	外反口縁鉢	残高44	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	淡黄褐色	外縦ハケ後胴外横ハケ、口縁内横ハケ、胴内ケズリ。	小片		2191
141-58		3C区撹乱（no.4）	直口鉢	口径118、復元高40	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	淡黄橙褐色	外下部ケズリ、外上部指頭圧痕後内外ミガキ。	1／4		2259
141-59		3区P381	直口鉢	口径126、残高37	粘土細、砂粒ほとんど含まず	やや甘い	淡橙褐色	内外ミガキ。	1／4		2287
141-60		3区no.23遺構面	直口鉢	口径148、底径36	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外褐色、内黄褐色	小さな平底。	1／4	破損後火を受け煤付着	2263
141-61	50	3区東部遺構面	直口鉢	口径92、器高23	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	淡黄褐色	内外ナデ。	3／4		2105
141-62	50	3区東北部遺構面	直口鉢	口径126、器高46	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	外橙褐色、内淡黄褐色。	外下部ケズリ、外上部縦ハケ後ミガキ。胴内ハケ後ナデ？。	1／6		2117
141-63		3区溝19	直口鉢	口径134、残高25	粘土粗、砂粒少ないが金雲母目立つ	良好	外褐灰色、内暗灰褐色	口縁内外ハケ、胴内ナデ。下端は接合面より剥離。	1／8		2183
141-64		3区溝19	直口鉢	口径132、残高64	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	外淡褐黄色、内淡褐灰色	外ハケ後縦方向板ナデ。内横ハケ後下部板ナデ。	1／8		2181
142-65		3区溝19	直口鉢	口径170、残高50	粘土粗、1～5mm石英多	良好	褐黄色	口縁端部角張る。内外ハケ後、外下部板ナデ、内上部指頭圧痕。	1／6		2185
142-66		3区土26覆土	籠目土器直口鉢	口径146、残高26	粘土粗、1mm長石・石英少	良好	褐色	外籠圧痕、内ケズリ。	1／8		2373
142-67		3区近世包含層4南部	直口鉢	口径148、器高74、底径70	粘土粗、1～5mm石英少	良好	外淡黄褐色、内淡褐色	底部平底で方形となる可能性あり。外ナデ、内ハケ。外面粘土粒付着。	1／6		2234
142-68		3区東部遺構面	脚付鉢鉢部	口径116、残高50	粘土細、1mm石英・長石極少	良好	外暗褐色、内淡褐色	外下部ケズリ、外上部縦ハケ後ミガキ。内ハケ後暗文ミガキ。	口縁1／8、胴1／4		2118

出土遺構の「土」は土坑のこと

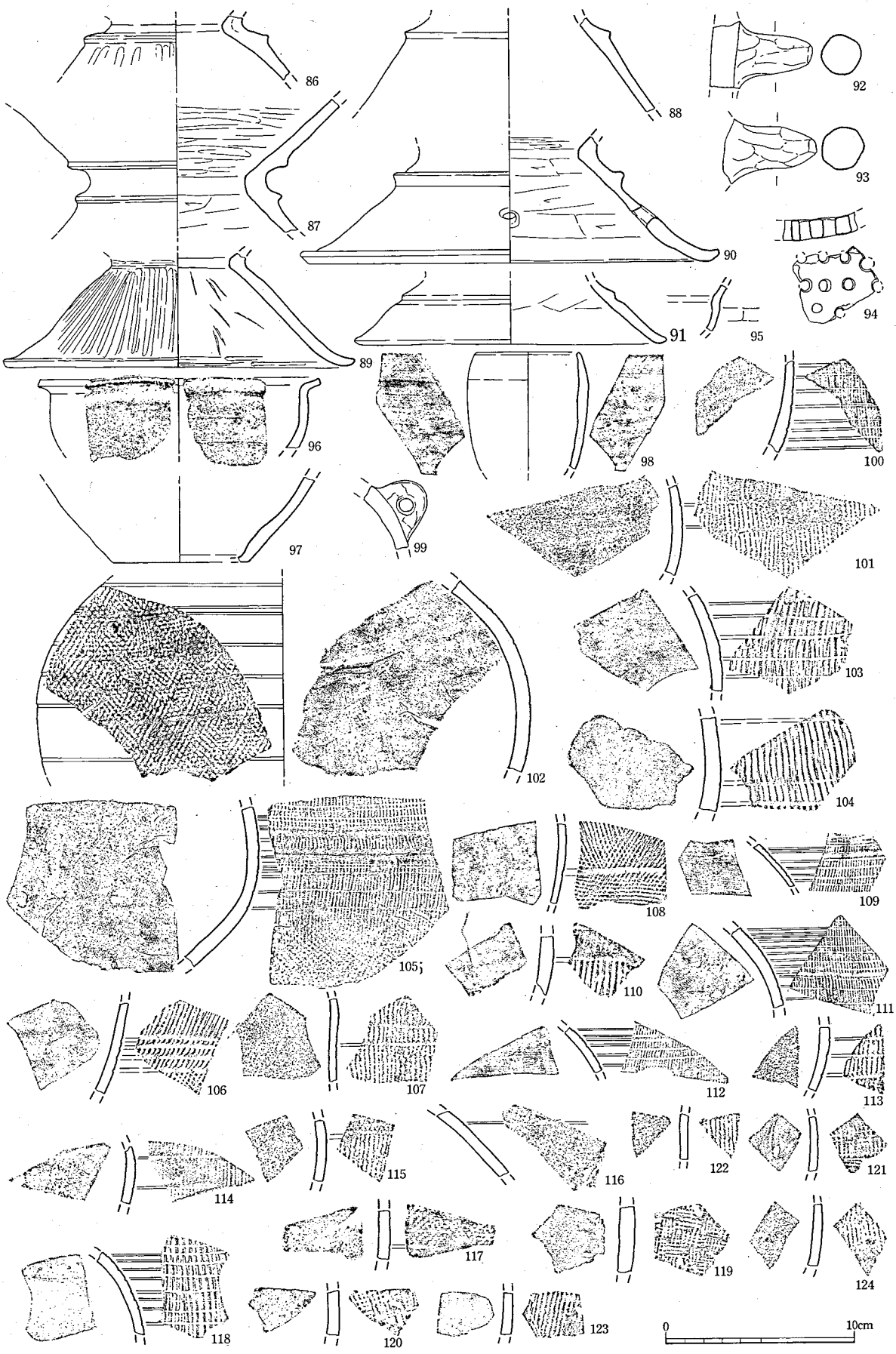


第142図　遺構面・近世遺構等出土土器実測図（3）（1／3）

第78表　遺構面・近世遺構等出土土器観察表（3）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
142-69	50	3区近世包含層7	脚付鉢部	口径140、残高46	粘土粗、1mm石英・長石・角閃石少	良好	淡黄褐色	口縁外に段あり、型の圧痕か。内外ナデで、胴下部外面ハケ残。脚裾破損面にもハケ見える。	3／4		2242
142-70	50	3区近世包含層4南部	脚付鉢部	口径126、残高33	粘土細、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	橙褐色	外ミガキ、内ハケ。	3／4		2244
142-71		3区排土中	脚付鉢脚部	裾径56、残高21	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	外淡黄褐色、内暗黄灰褐色	内外ナデ。	1／3		2254
142-72	50	3区P204	脚付鉢脚部	裾径104、残高41	粘土細、1～3mm長石・クサリ礫少	良好	褐色	外ナデ、内粗い横ハケ後ナデ。	1／6		2273
142-73		3B区遺構面	脚付鉢脚部	裾径92、残高34	粘土粗、1mm長石少	良好	黄褐色	外・鉢内ミガキ、脚内ハケ。	1／6		2095
142-74		3C区撹乱（no.9）	山陰系大形鉢	口径280、頸径260、胴径360、残高193	粘土粗、1～3mm石英多	良好	明褐色	口縁部は直立に近い。胴外は頸部下縦ハケ、胴中部～下部左上り斜めハケ、肩部横ハケ、胴下部右上り斜めハケの順。口縁内外横ナデ、胴内ケズリ。	1／4		2112
142-75		3区中央部遺構面	山陰系大形鉢	口径232、頸径290、胴径332、残高170	粘土粗、1～5mm石英多	良好	外淡黄褐色、内褐白色	口縁外横。口縁内外ナデ、胴外ハケ、胴内ケズリ。	全周		2087
142-76		3区溝18南半	小形器台	残高35	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	脚外ミガキ、受部外摩滅、脚内ハケ、受部内ミガキ。脚内頂部凹む。	全周		2149
142-77		3区東部遺構面	小形器台	残高43	粘土粗、1～3mm石英多	やや甘い	橙褐色	脚内上部に明確な輪痕あり。外ハケ後ミガキ、受部内摩滅、脚内ケズリ。	全周		2108
142-78		3区東南部遺構面	小形器台	口径96、残高49	粘土細、砂粒ほとんど含まず	良好	橙褐色	外・受部内ミガキ、脚内ナデ。	1／8		2093
142-79		3区東部遺構面	小形器台	裾径120、残高52	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	0・3時方向に粘土の柔らかい時点の穿孔残。外ハケ、内ハケ後ナデ。	1／4		2107
142-80		3区東南部遺構面	在地系器台	残高89	粘土粗、1mm長石・石英極少	良好	外淡灰黄褐色、内黄白褐色	外面粗い格子タタキか。内上部ナデ、内下部ハケ。	1／6	径、傾き不安	2120
142-81		3区近世包含層5	在地系器台	残高84	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	淡橙褐色	外タタキ後ナデ、内ハケ後ナデ。	1／3		2239
142-82		3B区P228	器台脚？	裾径172、残高68	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄橙褐色	脚付鉢脚部の可能性もある。外縦ハケ後暗文ミガキ、内上部板ナデ、裾内ハケ後疎らなミガキ。	1／4		2276
142-83		3区溝19	山陰系鼓形器台	残高30	粘土細、1～3mm石英少	良好、外面黄変、黒変	明褐色	端部丸い。外面ハケか強いナデによる条痕か区別できない。内ミガキ。	小片	住34上面のピットからの出土	2176
142-84		3区溝17	山陰系鼓形器台	口径156、残高47	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	灰黄褐色	口縁端外へわずかにつまみ出し。外ナデ、内ケズリ後ミガキ。	1／6		2143
142-85		3区溝19	山陰系鼓形器台	口径190、残高37	粘土粗、1mm長石多	良好	外黄褐色、内淡黄褐色	外ナデ、内ミガキ。	1／6		2188
143-86		3区溝18南半	山陰系鼓形器台	残高33	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄白褐色	裾外縦ミガキ、括部外ナデ、受部内ミガキ、裾内摩滅。	1／6		2150
143-87		3区P308	山陰系鼓形器台	残高79	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	淡黄褐色	外顕著な横ナデ、受部内ミガキ、括部内ナデ、裾部内ケズリ。	1／2		2285
143-88		3区溝14	山陰系鼓形器台	残高50	粘土粗、1～3mm石英・長石多	良好	淡黄褐色	外ナデ、内摩滅。	1／8		2138
143-89		1区遺構面	山陰系鼓形器台	裾径178、残高60	粘土粗、1～3mm石英多	良好	黄橙褐色	裾外縦ミガキ、括部外横ミガキ、裾端内横ミガキ、裾内板工具痕残るナデ。	1／6		2124
143-90		3区排土中	山陰系鼓形器台	裾径210、残高66	粘土粗、1～3mm石英少	良好	淡黄褐色	外ナデ、裾内ケズリ、受部内ミガキ。	1／8		2253
143-91		3区近世包含層7	山陰系鼓形器台	裾径154、残高36	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫少	良好	外橙褐色、内淡黄褐色	外ナデ、裾内上部ケズリ、裾内下部ナデ。	1／8		2249
143-92		3区P363	半島系土器瓶把手	長40	粘土粗、1mm長石・石英少	土師質、良好	褐色	ナデ。	小片		2415
143-93		1区遺構面	半島系土器瓶把手	長46	粘土粗	土師質、良好	灰褐色	ナデ。	小片		2384
143-94		3D区遺構面	半島系土器瓶底部	残高15	粘土粗	土師質、良好	淡黄褐色	6mm前後穿孔密に施す。内外ナデ。	小片		2388
143-95		3区土20覆土	半島系土器壺耳			陶質、堅緻	灰～暗灰色	外ケズリ後ナデ、内ナデ。	小片		
143-96		3区排土中	半島系土器鉢	口径146、残高37		陶質、堅緻	灰黄色	内外ナデ。	1／8		2427
143-97		3区土22	半島系土器鉢底部	底径70、残高43		陶質、やや甘い	灰黄色	内外ナデ（摩滅）。	1／6		2370
143-98		3D区包含層	半島系土器鉢？	口径50、残高62		陶質	灰色	口径小さく、深い器形。内外ナデ。	1／6		2408
143-99		3区東部遺構面	半島系土器壺胴部			軟質	褐色	縦方向の耳を貼付。ナデ。胴内横ナデ。	小片		2397
143-100		3区土29	半島系土器壺胴部			軟質	褐色	外平行タタキ後沈線、内縦方向ナデ。	小片		2377
143-101		3D区近世包含層	半島系土器壺胴部			陶質	灰色	外平行タタキ後沈線。	小片		2394
143-102		3区no.27～29遺構面	半島系土器壺胴部			陶質、やや甘い	灰褐色	外格子タタキ後やや幅広凹線。内縦方向ナデ（板ナデ？）。	1／6		2386
143-103		3区西部撹乱	半島系土器壺胴部			陶質、やや甘い	灰褐色	外縄蓆文タタキ後沈線、内ナデ。	小片		2419
143-104		3区土29	半島系土器壺胴部			軟質、土師器に近い焼成	褐色	外平行タタキ後沈線、内横ナデ。	小片		2375
143-105		3区土27上層	半島系土器壺胴部			陶質	暗灰色	外上部平行タタキ後沈線、下部格子タタキ。内ナデ。	小片		2374

出土遺構の「土」は土坑のこと

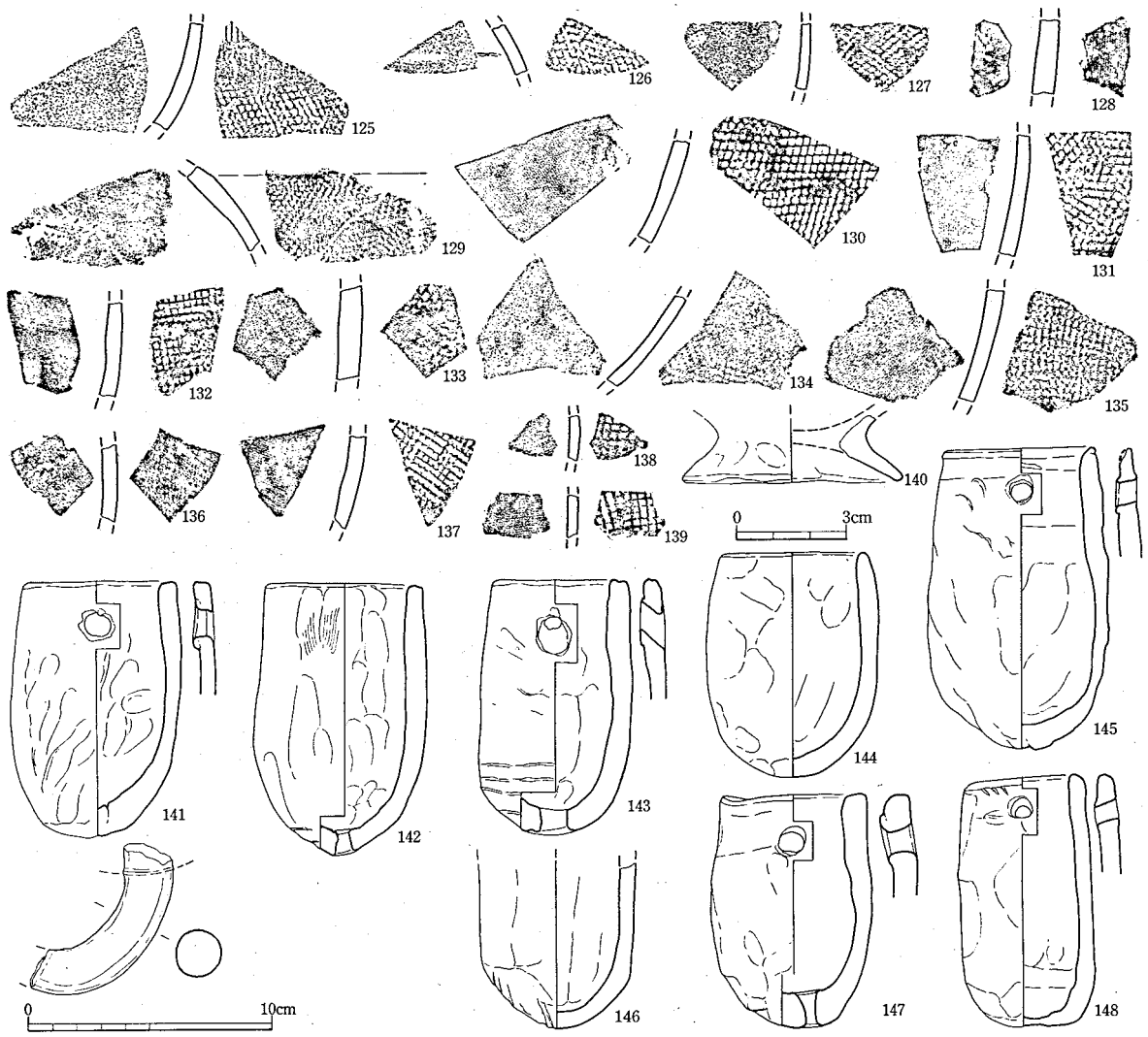


第143図　遺構面・近世遺構等出土土器実測図（4）（1／3）

第79表　遺構面・近世遺構等出土土器観察表（4）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（㎜）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
143-106		3D区溝31下層	半島系土器壺胴部			陶質	灰褐色	外平行（縄蓆文？）タタキ後沈線、内ナデで凹凸ある。	小片		2382
143-107		3D区遺構面	半島系土器壺胴部			陶質、焼歪みあり	灰色	外平行タタキ後沈線、内ナデ。	小片		2389
143-108		3区東部遺構面	半島系土器壺胴部			陶質	灰褐色	外平行タタキ後太めの凹線。内ナデ。	小片		2395
143-109		3区近世包含層8	半島系土器壺胴部			陶質	灰褐色	外平行タタキ後沈線、内ナデ。	小片		2412
143-110		3区近世包含層8	半島系土器壺胴部			陶質、やや甘い	淡灰褐色	外平行タタキ後沈線、内ナデ。	小片		2410
143-111		3区no.17遺構面	半島系土器壺胴部			陶質	明灰色	外平行タタキ後沈線、内ナデで、板ナデ状の個所あり。	小片		2385
143-112		3区土30	半島系土器壺胴部			陶質	灰色	外平行タタキ後沈線、内ナデ。	小片		2318
143-113		3D区包含層	半島系土器壺胴部			陶質	灰褐色	外平行タタキ後沈線、内ナデ。	小片		2405
143-114		3B区遺構面	半島系土器壺胴部			瓦質	灰褐色～灰色	外平行タタキ後沈線、内ナデ。	小片		2391
143-115		3D区溝32	半島系土器壺胴部			陶質	灰色	外平行タタキ後沈線、内ナデ。	小片		2383
143-116		3区中央部遺構面	半島系土器壺胴部			軟質	外灰褐色、内淡褐色	外格子タタキ後沈線、内摩滅。	小片	天地不安	2122
143-117		3区土35	半島系土器壺胴部			瓦質	灰白色	外格子タタキ後沈線、内摩滅。	小片		2379
143-118		3区土22	半島系土器壺胴部			陶質	淡灰褐色	外縄蓆文タタキ後沈線、内ナデ。	小片		2371
143-119		3D区包含層	半島系土器片			陶質	灰色	外網代状タタキ、内ナデ。	小片		2399
143-120		3区排土中	半島系土器片			陶質	灰褐色	外網代状タタキ、内ナデ。	小片		2420
143-121		3区土29	半島系土器片			瓦質	灰白色	外網代状タタキ、内ナデ。	小片		2376
143-122		3D区包含層	半島系土器片			陶質	灰褐色	外平行タタキ、内ナデ。	小片		2404
143-123		3区東部遺構面	半島系土器片			陶質	灰色	外平行タタキ、内ナデ。	小片		2356
143-124		3D区包含層	半島系土器片			陶質	灰褐色	外平行タタキ、内ナデ。	小片		2403
144-125		3D区撹乱	半島系土器片			陶質	灰褐色	外上部平行タタキ、下部格子タタキ、内ナデ。	小片		2417
144-126		3D区包含層	半島系土器片			陶質	灰褐色	外格子タタキ、内ナデで接合痕残。	小片		2407
144-127		3D区包含層	半島系土器片			軟質	淡褐色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2406
144-128		3D区包含層	半島系土器片			瓦質	灰褐色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2402
144-129		3区近世包含層8	半島系土器片			陶質、やや甘い	灰褐色	頸部近く破片か。外格子タタキ、内ナデ。	小片		2441
144-130		3D区包含層	半島系土器片			陶質、やや甘い	灰褐色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2401
144-131		3区西部撹乱	半島系土器片			陶質	明灰褐色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2418
144-132		3D区包含層	半島系土器片			陶質	黄灰褐色	外格子タタキ、内ナデで凹凸あり。	小片		2400
144-133		3区溝18南半	半島系土器片			軟質	灰黄色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2381
144-134		3D区包含層	半島系土器片			軟質	灰褐色	外格子タタキ、内ナデで凹凸あり。	小片		2409
144-135		3区no.34・35遺構面	半島系土器片			陶質、外黒斑？	黄灰褐色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2387
144-136		3B区遺構面	半島系土器片			瓦質	灰白色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2392
144-137		3D区包含層	半島系土器片			陶質	黄灰色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2398
144-138		3B区遺構面	半島系土器片			軟質、土師器に近い焼成	黒褐色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2393
144-139		3区土20	半島系土器片			陶質	灰黄色	外格子タタキ、内ナデ。	小片		2369
144-140		3区P406	製塩土器脚部	裾径58	粘土粗、1mm長石多	やや甘い	暗褐色	内外ナデ。	1／4	二次的に火を受ける	2299
144-141		3区東部遺構面	タコ壺	口径60、器高105	粘土粗、1～3mm石英・長石少	やや甘い	褐黄色。	底は絞りすぼめて粘土を最後に充填したか。内外ナデ。	完形		2110
144-142		3B区no.11遺構面	タコ壺	口径56、器高112	粘土粗、1～5mm石英・長石多	やや甘い	淡黄褐色	底部穿孔。内外ナデで、外上部ハケメ残る。	2／3		2097
144-143		3B区遺構面	タコ壺	口径48、器高105	粘土粗、1～3mm石英少	良好	褐色	底部穿孔。内外ナデであるが、底部近く外タタキ条痕残。	完形		2094
144-144		3区南東部遺構面	タコ壺	口径56、器高92	粘土粗、1～3mm石英多	良好	外黄褐色、内淡褐色	内外ナデ。	口縁1／3、底全周		2090

出土遺構の「土」は土坑のこと



第 144 図　遺構面・近世遺構等出土土器実測図（5）（140 は 1／2、他は 1／3）

にハケメを残す粗製品。

58 ～ 65 は直口鉢。58・59 は内外横ミガキ、60 は外面斜めミガキ、内面暗文風縦ミガキ仕上げの精製品である。61 は小形品で、62 は外面に疎らなミガキを施す。

66 は口縁の大きく開く籠目土器である。67 は底部方形の平底となる可能性ある類例の少ない器形で、外面に粘土粒が付着する。

68・70 は精製の脚付鉢鉢部片。69 は山陰系の低脚鉢と考えられるが、口縁外に型の圧痕らしき段がある。71 ～ 73 は脚付鉢脚部で、73 は精製品である。74・75 は山陰系大形鉢で、74 は外面ハケの切合いがよく観察できる。

76 ～ 78 は小形器台。77 は脚内上部に明確な軸痕があり、78 とは接合法が異なる。79 も小形器台として図示したものであるが、外面のミガキは観察できず、穿孔は粘土の柔らかい時点で施す点が他と異なる。

80・81 は在地系の器台。80 は外面に粗い格子タタキが残ることが特徴的で、同様の例は福岡市西区元岡からも出土している〔武末 1991〕。82 は器台裾部として図示したが、脚付鉢脚部の可能性も考えられる。外面縦ミガキ、内面の板ナデが特徴的である。84 ～ 91 は山陰系鼓形器台で、83

もその口縁部か。89は括部下の突出がなく、90は裾部に半乾燥時の穿孔が残る。

92～139は朝鮮半島系土器。92・93は甑把手、94は小孔を多く穿孔した甑底部。95・96は鉢で、97は平底の鉢底部か。98は口径が小さく、深い器形をなす。内外ナデ仕上げで硬質。99は陶質壺の縦方向耳破片である。100～118は外面に沈線・凹線を巡らした壺胴部片。119～121は網代状のタタキの胴部片。122～124は平行タタキの胴部片。125～139は格子タタキの胴部片。

140は製塩土器脚部片。

141～148はタコ壺で、142・143・147は底部に穿孔を施す。また、143底部近く外面にはタタキ痕らしき条痕が残る。149は断面円形の屈曲した粘土棒であるが、図示した方向に即して述べれば、上端に粘土の剥離痕が残るため、山陰系甑の環状把手の可能性が高い。

参考文献

武末純一 1991「福岡市元岡遺跡の器台」『肥後考古』第8号

（3）青銅器（図版53、第145図）

1は1号竪穴住居跡から出土した完形の小形倣製鏡である。面径は3.15cmを測る小形品であり、一般の古墳時代倣製鏡には例が少ない法量である。また、白銅質の地金が錆の間から見える個所もあるもののの、鏡背は錆・砂粒の付着のため模糊として文様が存在しても判読しづらい状態であるが、おそらく無文と思われる。縁の突出も形成されない。このような無文の倣製鏡は古墳時代前期前後の鳥取県長瀬高浜遺跡から集中して出土しているようである〔林2004〕。西新町遺跡では山陰系の土器及び玉石材も出土しており、これらの遺物と同様に山陰地域からもたらされた可能性が高いものと思われる。

全体の高さ0.59cm、鈕の高さ0.40cm、鈕の径0.75cmを測る。

2は38号竪穴住居跡の覆土上面から出土した完形の「貨泉」で、比佐氏の集成によれば、福岡県内で24例目の出土である〔岡部他2004〕。径は2.28cm、重さ2.3 gを測り、中央に内法で0.68cmの方孔がある。面（表）には郭がなく、孔辺に接するように右に「貨」、左に「泉」の篆書文字を鋳出するが、「泉」の「白」字、「水」字の左側、「貨」の「ヒ」字の右側、「貝」字の右側が微かに見えるが見えるのみで、錆より模糊としている。背（裏面）には明瞭な郭があり、郭右角近くに棒状の突起を鋳出している。面の方孔周縁に郭を欠くことから、河南省安陽市豫北地区窖蔵出土貨泉の分類〔戴・謝1984原典未見、高倉1989、p.30による〕では、第Ⅲ類に近い。高倉洋彰氏〔1989〕は第Ⅲ類は新代末から建武16年（西暦40）に五銖銭の制が復活されるまでの間に鋳造されたものと考え、日本出土品はその時期に製作されたものが多いと指摘している。

この他に17次調査では近世の各種貨幣、煙管等の青銅器も出土しているが、紙幅の都合上、そ

第80表　遺構面・近世遺構等出土土器観察表（5）

挿図番号	図版番号	出土遺構等	器種	法量（mm）	胎土	焼成	色調	器形や技法の特徴	残存率	備考	登録番号
144-145		3区近世包含層4南部	タコ壺	口径59、器高123	粘土粗、1～3mm石英・クサリ礫多	良好	褐黄色	内外ナデ。	口縁1／4、底全周		2235
144-146		3区南東部遺構面	タコ壺	残高68	粘土細、1～3mm石英極少	やや甘い	黄白褐色	内外ナデ。	全周		2089
144-147		3区no.9・10遺構面	タコ壺	口径52、器高92	粘土粗、1～3mm石英・長石少	良好	黄褐色	底部穿孔。内外ナデ。	完形		2111
144-148		3C区攪乱（no.4）	タコ壺	口径42、器高93	粘土細、1mm石英少	やや甘い	白褐色	内外ナデ。	完形		2258
144-149		3区土21	山陰系甑把手？	太さ20	粘土粗	良好	橙白褐色	ナデ。	小片		

出土遺構の「土」は土坑のこと

の報告は別の機会をもちたいと思う。

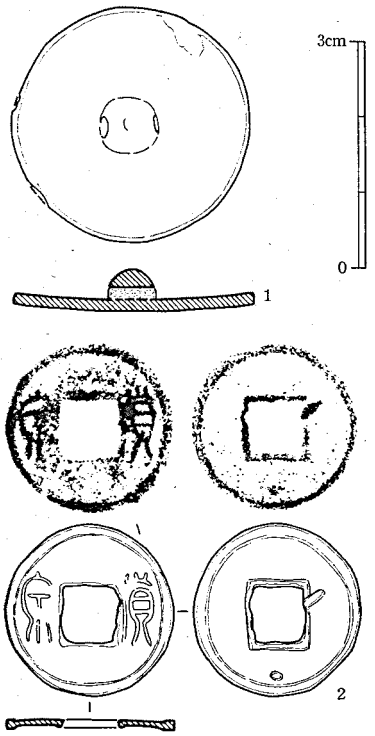
参考文献

林正憲 2005「小型倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念』 大阪大学考古学研究室

岡部裕俊・比佐陽一郎・片多雅樹 2004「三坂七尾遺跡出土貨泉について －全国古代中国銭出土一覧－」『福岡考古』第 21 号

戴志強・謝世平 1984 「"貨泉" 初探－兼論莽銭制作特徴的演変－」『中国銭幣』1984 － 1

高倉洋彰 1989 「王莽銭の流入と流通」『九州歴史資料館研究論集』14



第 145 図 青銅器実測図（実大）

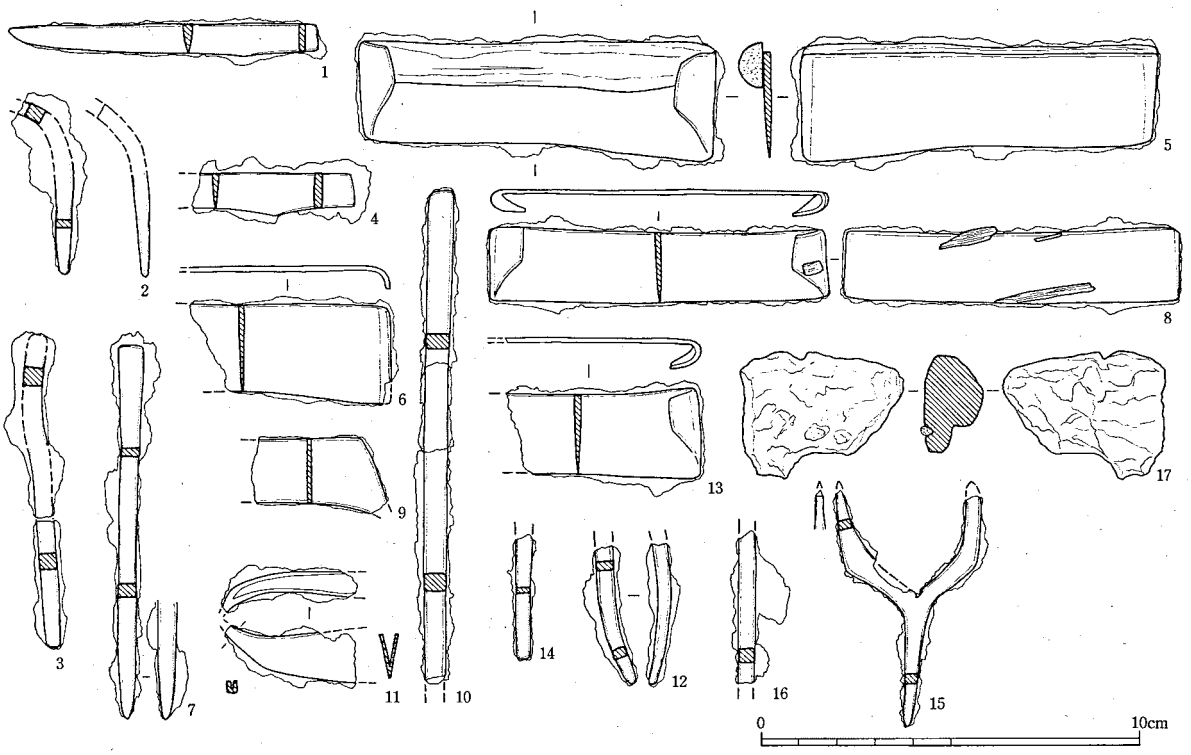
（4）鉄器（第 146 図、図版 54）

西新町遺跡 17 次調査では多数の鉄器が出土したが、その多くが近世～近代の遺構に伴うものである。そこで、ここでは古墳時代の遺構から出土したものを報告することにしたい。

1 は 1 号竪穴住居跡周辺遺構面出土のやや細身の刀子で完形品である。全長 8.0cm、刃部長 6.1cm、茎部長 1.9cm、関部幅 1.1cm、茎尻幅 0.7cm、厚さ 0.2cm を測る。 2 は 1 号竪穴住居跡覆土から出土した棒状の鉄製品。上部は錆で膨らみ正確な形態は不詳であるが、屈曲していると思われ、下部は細くなり端部に至る。竪穴住居跡からの出土であるいは近世の釘となるか。断面は方形で上部は幅 0.5cm、厚さ 0.5cm、下部は幅 0.4cm、厚さ 0.2cm 程になる。屈曲しているが現存長さ 4.5cm 程である。 3 は 1 号竪穴住居跡出土の棒状鉄製品。中間で折れているが、本来、図示した程度の長さで問題ないと思われる。中間はやや屈曲し、断面方形である。下端は特に本来の形態をとど留めていると思われ、断面方形のまま終わるようである。上端は錆が多く正確な形態は不明であるが、長さ 9.2cm 程、幅・厚さ 0.5cm を測る。

4 は 5 号竪穴住居跡覆土から出土した刀子茎部～関部付近の破片である。関はわずかに幅を増し、屈曲して茎部に至る。残存長 4.2cm、茎部長 2.1cm、関部幅 1.1cm を測る。

5 は 7 号竪穴住居跡覆土上部から出土した完形の手鎌である。長さ 9.4cm、右端幅 3.1cm、左端幅 2.6cm を測り、厚さ 0.2cm 程である。通有の手鎌と同様に両端を 1.0cm 程強く折り曲げるが、本例で特筆されるのは屈曲部に差し込んだ木質が遺存する点である。木質は鉄分を多く含むためか、錆による膨らみと区別が難しいが、ほとんど欠損すること無く遺存するのではないかと考えられる。錆による膨らみ・変形もあるが、遺存状況からすれば木質部は直径 1.2cm 程の細い枝を半裁し、鉄板脊部に平行するようにあてて、手鎌両端を折り曲げて強く挟んで固定したものと考えられる。木質部上部は手鎌脊部よりもややはみ出している。なお、刃部は左端に向うにつれ細く研ぎ減りすることも、使用方法を示唆するものとして注目される。以上のようなことから本例は、手鎌の製作技法、構造、使用法を考えるため貴重な資料と言えるであろう。 6 は 7 号竪穴住居跡から出土した直刃鎌の基部付近破片。基部を緩やかに 0.5cm 程の長さで、折り曲げる。残存長 5.2cm、基部幅 2.6cm、折損部幅 2.2cm、厚さ 0.15cm 程である。



第 146 図　鉄器実測図（1／2）

7 は 7 号竪穴住居跡出土の先端が尖る完形の棒状鉄製品で、鑿として使用されたものか。上端は錆で形状に不安があるが、方形に端部となると思われる。長さ 9.8cm、最大幅 0.55cm を測り、断面は方形で、上部はやや薄く 0.25cm、下部はやや厚く厚さ 0.4cm 程である。

8 は 9 号竪穴住居跡覆土下部から出土した手鎌で、途中で折損しているが完形品である。長さ 9.0cm、右端幅 1.8cm、左幅 1.9cm を測り、厚さ 0.2cm 程である。両端を 1.0cm 前後折り曲げる。屈曲部に差し込んだ木質は遺存しないが、表裏に木質が見られ、埋蔵環境の中で付着したものと思われる。

9 は 19・21 号竪穴住居跡覆土上面から出土した薄い鉄片である。長さ 3.5cm、幅 2.0cm を測り、厚さ 0.15cm 程。刃部は見られず、右下端が細長く突出するか。近世に属する可能性がある。

10 は 25 号竪穴住居跡の覆土から出土した棒状の鉄製品。長さ 13.0cm、幅 0.6cm、厚さ 0.4cm 前後で、上端は本来の形状を留めるが、下端は欠損する。錆で膨らみ、板状に剥離が進行している。

11 は 26 号竪穴住居跡覆土から出土したもので、錆で膨らみ形状不安であるが、2 枚の鉄片を鍛接するか、1 枚の鉄片を折り曲げて袋部状としている可能性がある。長さ 3.4cm、幅 1.3cm を測り、左端は細く上方に屈曲している。古墳時代の鉄器中には類例がなく、近世のものが混入した可能性も検討すべきであろう。12 は 26 号竪穴住居跡から出土した鉄棒。上端は欠損し、緩やかに屈曲しながら、幅・厚さを減じ下端に至る。長さ 3.7cm、幅 0.5cm、厚さ 0.3cm を測る。混入した近世釘か。

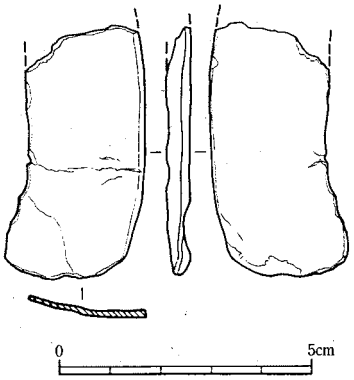
13 は 30 号竪穴住居跡から出土した手鎌の右半破片。長さ 5.1cm、右端幅 2.4cm、厚さ 0.2cm を測る。右端を 0.7cm 程強く屈曲させる。14 は 30 号竪穴住居跡から出土した薄い棒状鉄片。上端は欠損し、下端は方形をなす。長さ 3.4cm、幅 0.5cm、厚さ 0.2cm を測る。

15 は 30 号竪穴住居跡出土の先端部が雁股状に分かれた鉄製品で漁具か。先端部は欠損するが、長さ 6.2cm、先端幅 4.8cm、厚さ 0.3cm を測る。ヤスとして使用された可能性が高いが、古墳時代

前期にはこのような形態の類例が少ないようである。近世漁具の混入も考慮する必要があろう。薄く板状に剥離が進行している。

16は37号竪穴住居跡覆土から出土した鉄棒で、上下端部は欠損する。長さ4.0cm、幅0.4cm、厚さ0.4cm前後である。

17は31号竪穴住居跡から出土の鉄滓。長さ4.1cm、幅3.4cmを測り、厚さは1.5cm余り。表裏とも凹凸があり、表面には砂粒が付着する。肉眼観察では良質な鉄分を保つようであるが、遺跡内では今のところ古墳時代の小鍛冶炉等は検出されていないので、古墳時代のものかは確証がない。



第147図　鉛片実測図
（2／3）

（5）その他金属器（図版53、第147図）

第147図は5号竪穴住居跡から出土した鉛片である。下端は本来の形状をほぼ留め、隅丸方形を呈し、上端は折損する。長さ4.1cm、幅2.3cm、厚さ0.1～0.2cmを測る。中央で若干、屈曲し、亀裂があるが、製作途中で生じたものか。古墳時代のものとすれば類例が少なく貴重な出土例となる。素材として輸入され青銅器の製作等に供されるものであったと推測しておきたい。

（6）土製品（図版53・54、第148図）

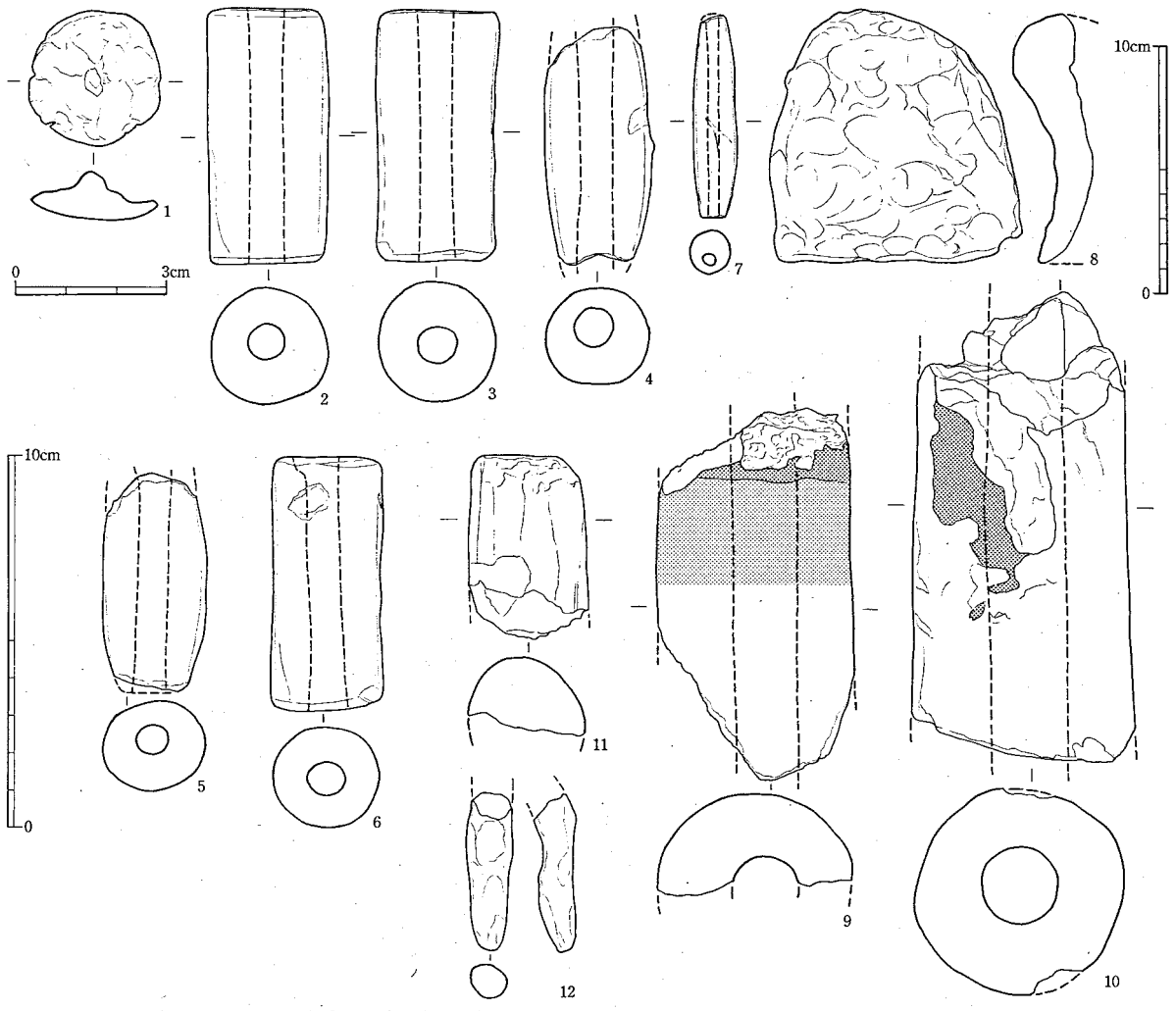
ここでは17次調査で出土した土製品のうち実測可能なものを報告する。

1は37号竪穴住居跡覆土から出土した土製の鏡雛形である。径2.6～2.8cm、高さ1.0cmを測り、中央からややずれた所を粘土をなでてつまみ出し、鈕状に仕上げている。表裏ナデで仕上げ、鏡背面は指頭圧痕の凹みが顕著で、鏡面はひび割れが目立つ。淡褐色。

2～7は管状土錘。2は7号竪穴住居跡覆土上部から出土したもので、円柱状の完形品。長さ6.9cm、直径3.15cm前後、重さ89.8 gを測り、中心部に径0.9cmの円孔がある。褐色である。3は3区P 499から出土した。長さ6.8cm、直径3.2cm前後、重さ92.6 gを測り、中心部に直径0.9cmの円孔がある。褐色。4は3区P 223から出土したもので、上下端部を欠損するが、上下がすぼまる形態をなす。現存長6.3cm、太さ2.6～2.8cm、重さ44.3 gを測る。穿孔は1.0cm。橙褐色。5は1区P 162から出土したもので、上下端は欠損する。現存長5.8cm、太さ2.4～2.8cm、重さ36.0 gを測り、穿孔は径0.8cm程。褐色。6は3区東部の撹乱から出土したもので、ほぼ完形品。円柱状を呈し、長さ6.9cm、太さ2.9cm、重さ70.2 gを測る。穿孔は0.9cm前後で、橙褐色を呈する。7は1区遺構面から出土した細身の土錘。上端をわずかに欠損するがほぼ完形品であり、長さ5.4cm、太さ1.2cm、重さ7.6 gを測る。赤褐色。以上の土錘のうち7は細身で古墳時代のものではないと考えられるが、他は近世ピット、撹乱出土品も含めて古墳時代に属するものか。

8は14号竪穴住居跡の覆土上面から出土した沓形支脚。背部が大きく欠損し、前面部が残るのみである。表面を粗いナデにより仕上げ、指頭圧痕が多く残る。背部は粘土接合部より剥離したような状態である。高さ10.2cm、幅10.0cmを測る。

9・10は鞴羽口でいずれも近世の遺構から出土したものであり、古墳時代に属する積極的な根拠はない。9は近世包含層5から出土したもので、上端は本来の形態を一部留めるが、下端は欠損する。現存長14.9cm、太さ7.8cm、孔径2.6cmを測る。上端は鉄滓が付着し、その下の器表が熱により黒変、



第 148 図　土製品実測図（1 は 2／3、8～10 は 1／3、他は 1／2）

赤変する。全体的には褐色に焼成されている。10 は 3 区の 22 号土坑から出土したもので、上下を欠損する。長さ 18.9cm、太さ 9.0cm、孔径 3.1cm を測る。

11 は 9 号竪穴住居跡覆土下部から出土した円柱状土製品。上端は本来の形状を留めるが、下端は破損し、甑の把手の可能性も想定しておきたい。現存長 4.9cm、太さ 3.2cm を測り、黄褐色を呈す。

12 は 38 号竪穴住居跡覆土上面から出土した棒状の土製品。現存長 4.2cm、幅 1.25cm を測り、断面は粗雑なナデにより歪な円形を呈す。上端が屈曲し、杓子の把手の可能性も考えておきたい。

(7) 石器

漁撈具（図版 55～58、第 149・150 図、第 81・82 表）　1～22 は 3 区出土の石錘である。

1 は 2 号竪穴住居跡覆土出土の有孔石錘で、両端に孔があり、全体的に磨かれる。長さ 6.3 ㎝、重さ 7.2 ｇでシルト岩製である。2 は 5 号竪穴住居跡覆土出土で、全体的に所々に加工痕が残る未成品か。長さ 6.3 ㎝、重さ 7.2 ｇで砂岩製である。3 は 6 号竪穴住居跡覆土出土で上端部および下端部は欠損するが上下に 2 孔をもち、長さ 7.2 ㎝、重さ 144.5 ｇで砂岩製である。

4 から 16 は 7 号竪穴住居跡出土品。上述のように 7 号竪穴住居跡からは加工した有溝・孔石錘と自然石の未加工の石錘が合わせて 180 点余り、一括で出土している（巻頭図版 1）。このうち加工した石錘は実測図を作成した。4 は約 1／3 のみ残存するが、全体的に加工痕が残る未製品か。

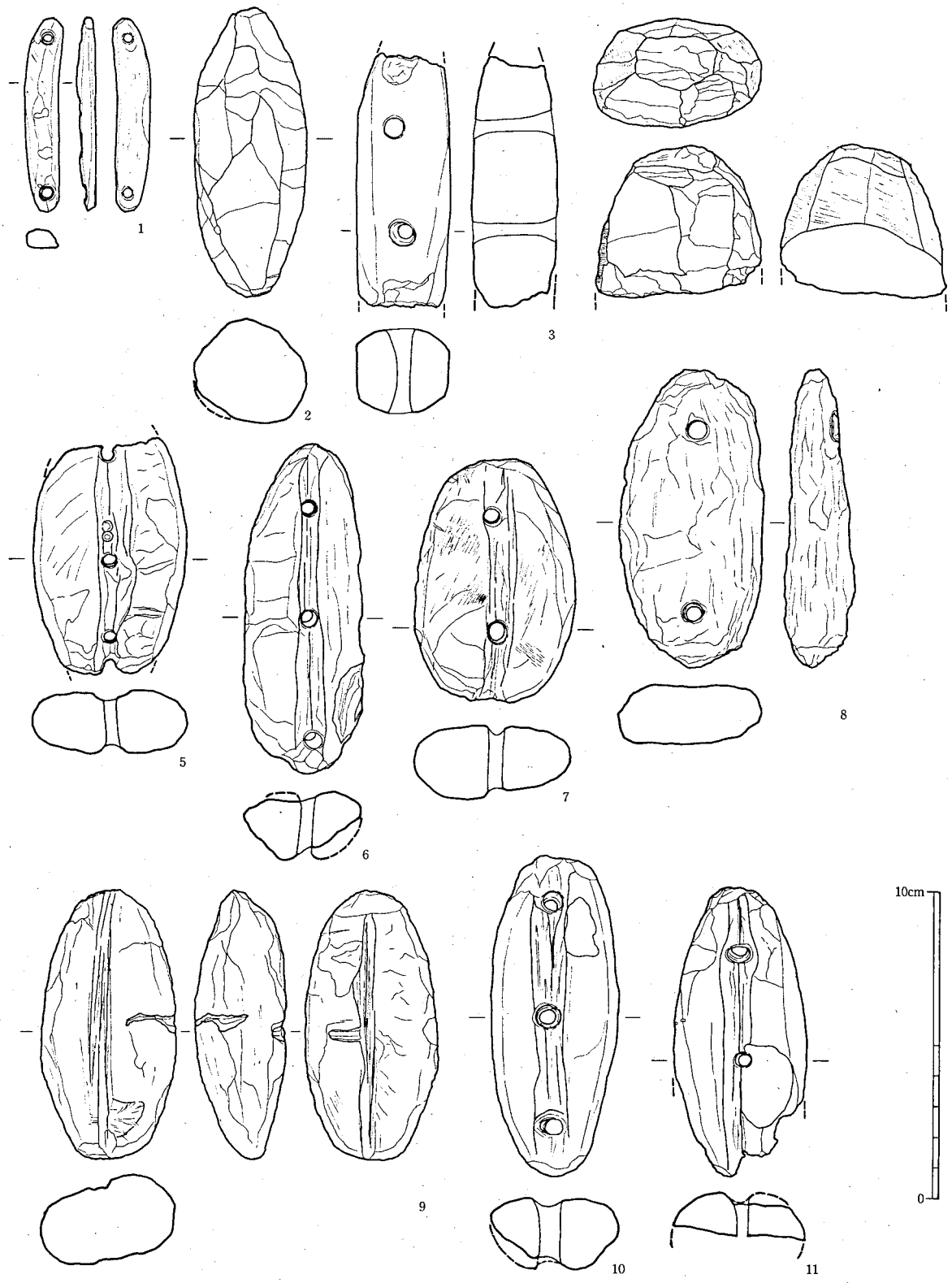
長さ4.9㎝、重さ100.5ｇで滑石製。5は有溝・孔石錘で上端部を欠損するが、溝が全周するタイプで長軸溝に3孔もち、開きかけの孔が両面に1つずつある。長さ7.7㎝、重さ126.6ｇで滑石製である。6も所々欠損するが長軸溝に3孔ある。長さ10.8㎝、重さ126.3ｇで滑石製である。7は有溝・孔石錘で長軸溝に2孔もつ。長さ8.0㎝、重さ143.9ｇで滑石製である。8は有孔石錘で、長さ6.3㎝、重さ142.9ｇで滑石製である。9は有溝石錘で長軸溝は互い違いにはなるが両面にあり、また僅かに短軸溝らしき痕跡が残る。長さ8.8㎝、重さ156.1ｇで滑石製である。10～16は有溝・孔石錘である。10は長軸溝に3孔あるが、片面は磨耗のため溝が消えかかっている。長さ10.4㎝、重さ134.3ｇで滑石製である。11は片面の約1／2以下が残存し、長軸溝に2孔ある。長さ9.4㎝、重さ66.0ｇで滑石製である。12は下端部を欠損するが、長軸溝に2孔もつが、下半部の孔は開きかけの孔と重なる。長さ8.8㎝、重さ142.7ｇ、滑石製。13は長さ13.2㎝、重さ254.0ｇで滑石製である。14は上下端部を少し欠損するが長さ9.7㎝、重さ169.7ｇで滑石製。15は1／3ほど欠損するが長軸溝に2孔もつ、長さ6.5㎝、重さ101.1ｇで滑石製である。16は片面を剥離するが長軸溝に3孔もつ。長さ10.3㎝、重さ175.0ｇで滑石製である。

なお、7号竪穴住居跡から出土した自然石石錘は観察表の作成（第82表）と図版写真（図版56～58）の掲載に留めたが、大きさ・形態とも上述した滑石製の加工した製品とほぼ一致しており、意図的に選択したものと推定される。

17は8号竪穴住居跡床面出土の有溝・孔石錘で、約2／3のみ残存するが、長軸溝に2孔ある。長さ8.0㎝、重さ148.2ｇで滑石製である。18は9号竪穴住居跡覆土上面出土の有溝・孔石錘で、片側を一部欠損するが、長軸溝に2孔ある。長さ10.6㎝、重さ248.2ｇで滑石製である。19は13号竪穴住居跡覆土出土の有孔石錘で上端部および下半分ほど欠損する。全面磨かれていて1孔ある。長さ4.2㎝、重さ10.5ｇでシルト岩製である。20は25号竪穴住居跡覆土上部出土の有孔石錘か。真中に開きかけの孔らしき痕跡がある。長さ8.0㎝、重さ40.3ｇで砂岩製である。21は32号竪穴住居跡床面下層出土の石錘で、全面に磨かれているが溝および孔らしき痕跡はない。長さ4.5㎝、重さ14.6ｇでシルト岩製である。22は3区14号溝出土の有溝・孔石錘で、約1／2のみ残存するが2孔をもつ。上端部には丸みがあり、先端部のみに溝がある。長さ6.5㎝、重さ98.5ｇで砂岩製である。

第81表　石錘観察表

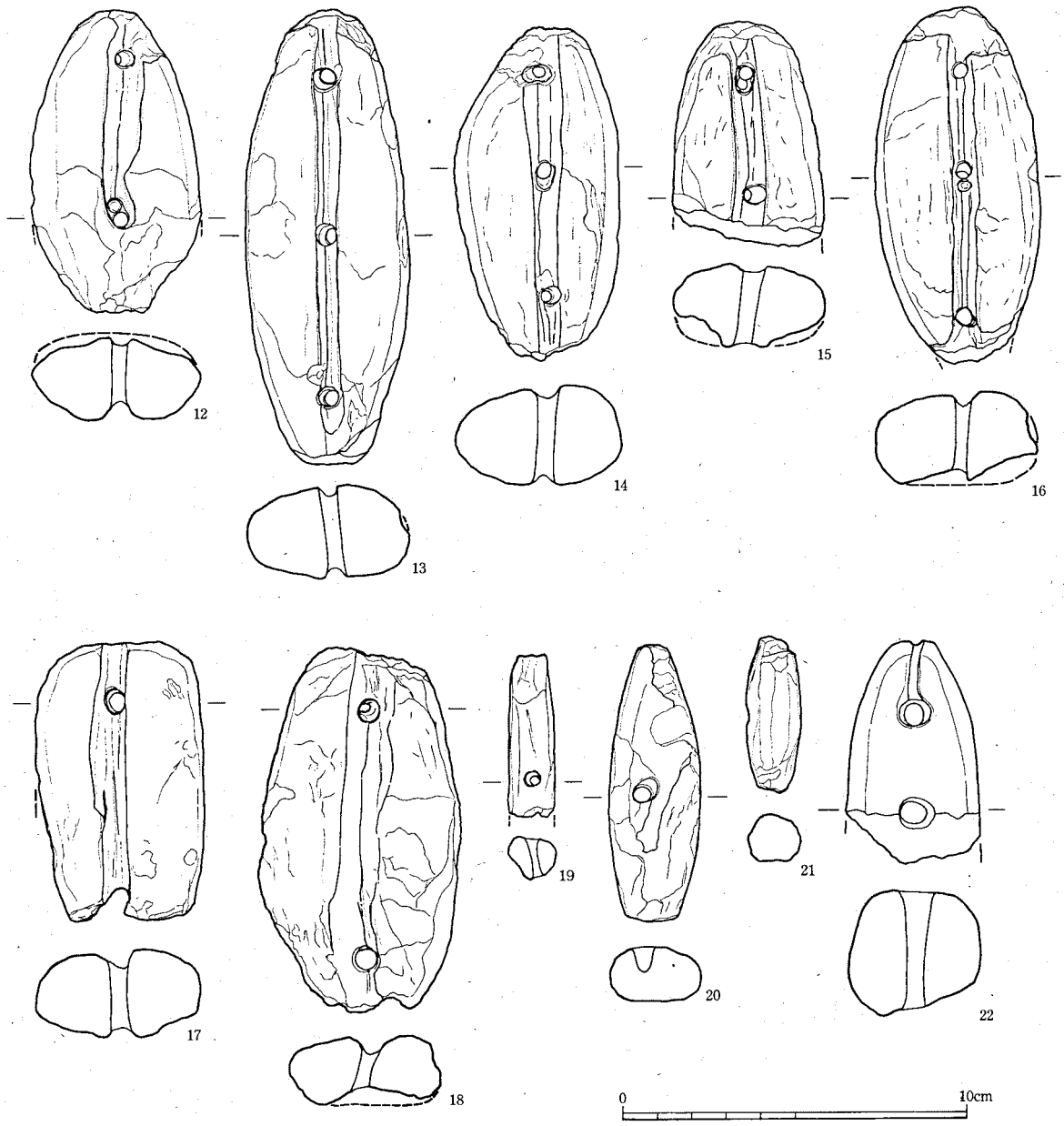
挿図番号	種類	出土遺構	材質	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
140-1	石錘	住2覆土中部	シルト岩	6.3	1.05	0.6	7.2	穿孔2
140-2	石錘	住5覆土	砂岩	9.3	3.65	3.4	130.7	未製品
140-3	石錘	住6覆土	滑石	7.2	3	2.7	144.5	穿孔2
140-4	石錘	住7No.10②	滑石	4.9	5.4	3.5	100.5	未製品
140-5	石錘	住7No.28	滑石	7.7	5	2	126.6	穿孔3　両面に溝あり
140-6	石錘	住7No.39	滑石	10.8	3.9	2	126.3	穿孔3　両面に溝あり
140-7	石錘	住7No.52	滑石	8	5.4	2.4	143.9	穿孔2　両面に溝あり
140-8	石錘	住7No.63	滑石	9.7	4.7	2.3	142.9	穿孔2
140-9	石錘	住7No.67	滑石	8.8	4.2	2.5	156.1	穿孔2
140-10	石錘	住7No.69	滑石	10.4	4.2	2.3	134.3	穿孔3　両面に溝あり
140-11	石錘	住7No.70	滑石	9.4	4.3	1.1	66	片面2／3残存　穿孔2　溝あり　破片
141-12	石錘	住7No.84	滑石	8.8	4.9	2.4	142.7	穿孔3　両面に溝あり
141-13	石錘	住7No.85	滑石	13.2	4.8	2.7	254	穿孔3　両面に溝あり
141-14	石錘	住7No.112	滑石	9.7	4.8	2.9	169.7	穿孔3　両面に溝あり
141-15	石錘	住7No.144	滑石	6.5	4.2	2.4	101.1	穿孔2　両面に溝あり
141-16	石錘	住7No.181	滑石	10.3	4.8	2.7	175	穿孔3　両面に溝あり
141-17	石錘	住8床面	滑石	8	4.9	2.6	148.2	穿孔2　両面に溝あり
141-18	石錘	住9覆土上面	滑石	10.6	5.9	2.7	248.2	穿孔2　両面に溝あり
141-19	石錘	住13覆土	シルト岩	4.2	1.4	1.3	10.5	一部残存
141-20	石錘	住25覆土上部	滑石	8	2.7	1.6	40.3	穿孔1
141-21	石錘	住32床面下層	シルト岩	4.5	1.6	1.4	14.6	
141-22	石錘	溝14	滑石	6.5	3.8	3.7	98.5	穿孔2　両面に一部溝あり　1／2残存



第 149 図　石錘実測図（2）（1／2）

石器（図版 58、第 151 図、第 83 表）　23 ～ 37 は 3 区出土品である。

23 は 1 号竪穴住居跡覆土中部出土品で上端の中央が円形にえぐれる。長さ 12.6 × 10.5 ㎝、厚さ 4.6 ㎝、重さ 1033.2 ｇで礫岩製である。24 は 1 号竪穴住居跡積土内出土品で、砥石か。一面使用しているようだが欠損が多い。長さ 9.95 × 5.4 ㎝、厚さ 1.5 ㎝、重さ 149.8 ｇでシルト岩製で



第150図　石錘実測図（1）（1／2）

ある。25も竪穴住居跡覆土上面出土品で砥石か。一部分のみしか残存しないが両面とも磨かれる。長さ4.75×5.0㎝、厚さ0.4㎝、重さ23.5ｇで粘板岩製である。

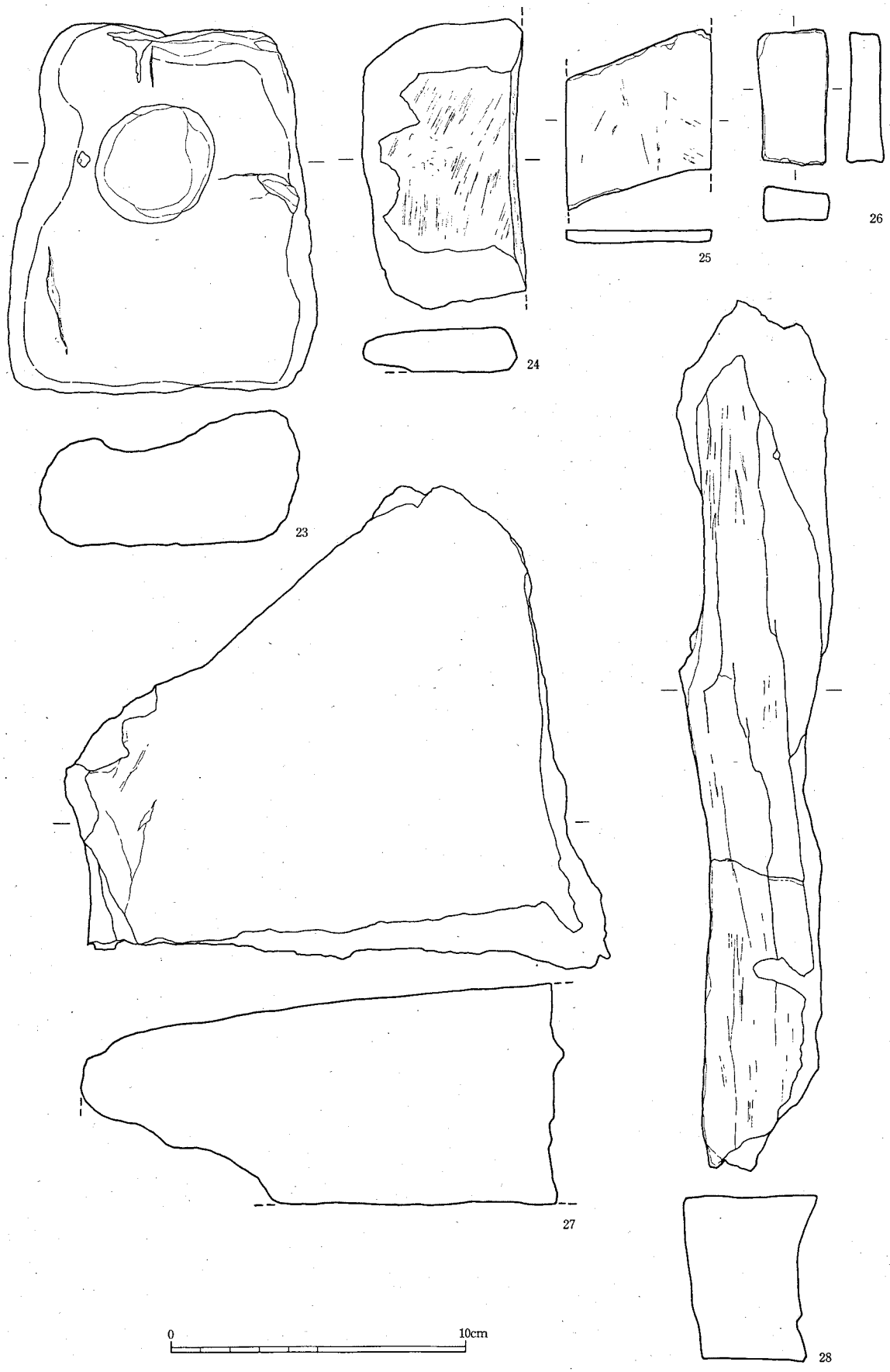
26は5号竪穴住居跡覆土東北部出土の品で、砥石か。4面とも使用する痕跡がある。長さ4.6×2.3㎝、厚さ0.7㎝、重さ22.8ｇで砂岩製である。27は7号竪穴住居跡出土で、欠損するが2面のみ滑らかな面があり、砥石として使用したものか。長さ約16.0×17.8㎝、厚さ7.5㎝、重さ2.87kgを測り、砂岩製。28は8号竪穴住居跡覆土出土品。2面のみ滑らかな面があり、砥石として使用か。また所々に円形の穴がいくつかある。長さ29.7×5.0㎝、厚さ5.5㎝、重さ1.24kｇで砂岩製である。29は9号竪穴住居跡覆土下部出土品で、砥石または叩き石と推測される。上面は滑らかであり、また下端部は少し欠損するが、使用している痕跡がある。長さ10.8×9.3㎝、重さ594.8ｇで砂岩製。30は12号竪穴住居跡カマド周辺出土品。全体的に滑らかであるが、上面を砥石として使用したも

のと推測される。長さ 7.0 × 5.1 ㎝、厚さ 3.0 ㎝、重さ 98.6 ｇで砂岩製。31 は 17 号竪穴住居跡覆土出土品で、３面を使用する砥石か。長さ 11.0 × 5.5 ㎝、厚さ 4.5 ㎝、重さ 392.5 ｇで砂岩製。

32 は遺構面出土で砥石か。全体的に滑らかであるが、一部に擦痕らしき痕跡が残る。長さ約 18.4 ㎝× 3.9 ㎝、厚さ 2.85 ㎝、重さ 347.7 ｇでシルト岩製である。

第 82 表　７号竪穴住居跡自然石石錘観察表

No.	重量	長×短	幅	石材	実測	備考
1	155.2	8.6 × 3.8	3.3	砂岩	×	
2	180.5	7.8 × 4.5	3.9	細粒砂岩	×	
3	183.5	7.7 × 5.3	3.5	砂岩	×	
4	158.4	8.7 × 4.3	3.4	細粒砂岩	×	
5	254.3	9.9 × 4.9	3.5	流紋岩	×	
6	217.9	8.8 × 4.2	3.6	細粒砂岩	×	
7	113.6	8.0 × 3.7	2.8	砂岩	×	
8	189.9	8.5 × 4.1	3.9	砂岩	×	
9	159.5	9.4 × 3.2	3.2	細粒砂岩	×	
10①	195.6	9.5 × 4.2	3.3	流紋岩	×	
10②	100.5	4.9 × 5.4	3.5	滑石	○	未製品
10③	88.8	7.1 × 3.7	3.3		×	土製品？
11	125.3	9.1 × 4.4	2.5	細粒砂岩	×	
12	165.5	10.1 × 3.6	3.6	細粒砂岩	×	
13	119.8	7.9 × 3.9	7.6	砂岩	×	
14	251.3	8.6 × 4.9	4.5	硬質砂岩	×	
15	134.9	7.3 × 4.0	3.3	細粒砂岩	×	
16	232.7	11.3 × 3.6	3.8	細粒砂岩	×	
17	83.8			砂岩	×	破片多数
18	233.6	8.8 × 5.0	3.3	細粒砂岩	×	
19	126.2	6.0 × 3.8	3.7	硬質砂岩	×	
20	163.6	8.9 × 3.9	4.2	礫岩	×	
21	148.0	8.2 × 4.5	4.3	砂岩	×	
22	175.4	8.6 × 5.0	3.4	砂岩	×	
23	168.4	8.6 × 4.1	2.6	砂岩	×	
24	136.7	7.0 × 4.0	3.1	砂岩	×	
25	143.4	7.0 × 4.4	3.2	砂岩	×	
26	75.5	4.6 × 4.2	3.4	細粒砂岩	×	
27	135.5	7.1 × 5.0	3.0	硬質砂岩	×	
28	126.6	7.7 × 5.0	2.0	滑石	○	有溝・孔石錘
29	174.1	10.0 × 4.6	3.1	礫岩	×	
30	156.3	8.5 × 4.0	3.4	細粒砂岩	×	
31	108.1	8.1 × 4.2	2.9	礫岩	×	
32	200.3	9.5 × 5.0	3.3	細粒砂岩	×	
33	148.0	7.9 × 4.3	3.8	砂岩	×	
34	145.6	6.6 × 4.5	3.0	細粒砂岩	×	
35	234.5	10.2 × 5.0	4.6	礫岩	×	
36	156.0	8.2 × 3.6	3.9	砂岩	×	
37	117.1	6.6 × 3.6	3.3	砂岩	×	
38	195.1	7.8 × 5.1	3.5	砂岩	×	
39	126.3	10.8 × 3.9	2.0	滑石	○	有溝・孔石錘
40	133.1	7.7 × 3.8	3.6	砂岩	×	
41	145.0	7.6 × 4.2	3.6	砂岩	×	
42	266.6	11.0 × 4.8	3.5	砂岩	×	
43	139.3	10.5 × 3.8	2.9	砂岩	×	
44	226.8	8.8 × 4.3	3.9	細粒砂岩	×	
45①	86.8	4.7 × 4.7	3.2	砂岩	×	被熱する
②	146.8	6.7 × 4.5	3.4	砂岩	×	
46	157.1	7.5 × 4.8	3.2	硬質砂岩	×	
47	282.3	10.0 × 6.6	4.3	礫岩	×	
48	128.6	9.3 × 4.2	2.8	礫岩	×	
49	95.5	7.3 × 4.0	2.7	砂岩	×	表面剥離
50	175.8	8.5 × 4.7	3.4	細粒砂岩	×	
51	205.7	7.7 × 4.9	4.0	硬質砂岩	×	
52	143.9	8.0 × 5.4	2.4	滑石	○	有溝・孔石錘
53	244.7	11.3 × 4.6	3.9	砂岩	×	
54	248.3	8.3 × 5.1	4.4	砂岩	×	
55	194.3	8.5 × 4.5	4.3	砂岩	×	
56	191.8	9.1 × 4.1	3.4	砂岩	×	
57	160.8	9.2 × 4.3	2.7	砂岩	×	
58	162.4	8.1 × 4.4	3.5	砂岩	×	
59	155.5	8.2 × 4.5	4.1	砂岩	×	
60	130.0	9.6 × 3.3	2.9	砂岩	×	
61	89.2	7.4 × 3.3	2.8	細粒砂岩	×	
62	167.6	9.0 × 3.3	3.7	硬質砂岩	×	
63	142.9	9.7 × 4.7	2.3	滑石	○	有溝・孔石錘
64	89.6	8.8 × 4.6	3.1	砂岩	×	
65	144.6	8.0 × 4.2	3.0	砂岩	×	
66	91.4	8.3 × 3.0	2.7	砂岩	×	
67	156.1	8.8 × 4.2	2.5	滑石	○	溝あり
68	132.3	6.9 × 4.3	3.1	砂岩	×	
69	134.3	10.4 × 4.2	2.3	滑石	○	有溝・孔石錘
70	66.0	9.4 × 4.3	1.1	滑石	○	有溝・孔石錘
71	7.7			滑石	○	７０と同一、溝あり
72	112.0	8.9 × 4.1	4.3	花崗岩	×	
73	142.5	9.2 × 4.0	3.6	花崗岩	×	
74	164.7	8.9 × 4.7	2.9	硬質砂岩	×	
75	152.7	9.0 × 3.1	3.5	砂岩	×	
76	167.4	8.0 × 4.3	3.4	砂岩	×	
77①	173.7	6.3 × 5.6	4.2	細粒砂岩	×	
②	9.5	4.5 × 3.1	0.5	細粒砂岩	×	破片
78	128.8	7.5 × 4.7	3.3	砂岩	×	
79	231.6	6.2 × 8.8	5.3	砂岩	×	
80	170.6	7.4 × 4.8	3.3	細粒砂岩	×	
81	263.6	9.0 × 5.9	3.0	硬質砂岩	×	
82	147.9	9.0 × 3.8	3.0	砂岩	×	
83	132.2	8.5 × 3.9	3.6	硬質砂岩	×	
84	142.7	8.8 × 4.9	2.4	滑石	○	有溝・孔石錘
85	254.0	13.2 × 4.8	2.7	滑石	○	有溝・孔石錘
86	122.0	9.2 × 4.0	3.7	砂岩	×	
87	214.5	8.5 × 34.5	3.7	細粒砂岩	×	
88	139.9	8.0 × 3.2	2.9	砂岩	×	
89	223.5	9.8 × 4.9	3.4	砂岩	×	
90	156.7	8.9 × 4.0	3.1	砂岩	×	
91				砂岩	×	破片
92	164.2	8.9 × 3.9	3.4	砂岩	×	
93	179.0	10.7 × 4.0	3.4	砂岩	×	
94	105.7	7.5 × 4.3	2.8	砂岩	×	
95	88.4	7.6 × 3.7	2.5	砂岩	×	
96	172.3	7.7 × 4.3	3.6	砂岩	×	
97	194.8	8.8 × 4.3	3.6	硬質砂岩	×	
98	150.9	8.3 × 4.2	3.6	礫岩	×	
99	164.0	9.1 × 4.1	2.9	砂岩	×	
100	162.4	8.2 × 4.2	2.9	砂岩	×	
101	160.3	7.7 × 4.2	3.5	砂岩	×	
102	144.2	7.6 × 4.4	3.4	砂岩	×	
103	337.4	12.2 × 4.8	4.2	硬質砂岩	×	
104	171.8	7.5 × 4.0	4.2	砂岩	×	溝？
105	131.0	7.9 × 3.7	3.2	砂岩	×	
106	162.8	8.0 × 4.5	3.2	細粒砂岩	×	
107	134.5	8.9 × 3.2	3.5	砂岩	×	
108	175.0	9.3 × 4.7	2.7	砂岩	×	
109	313.7	7.9 × 5.7	4.5	硬質砂岩	×	
110	140.7	7.1 × 4.5	3.0	礫岩	×	
111	148.6			花崗岩	×	破片多数
112	169.7	9.7 × 4.8	2.9	滑石	○	有溝・孔石錘
113	135.0	7.4 × 4.2	3.2	細粒砂岩	×	
114	155.3	7.6 × 7.7	3.7	硬質砂岩	×	
115	145.1	9.4 × 4.4	7.3	細粒砂岩	×	
116	218.2	9.3 × 5.3	3.7	砂岩	×	
117	125.8	7.8 × 3.4	3.1	砂岩	×	
118	178.6	8.7 × 4.5	3.7	砂岩	×	
119	212.7	8.7 × 4.7	3.9	砂岩	×	
120	101.3	6.1 × 3.7	2.9	砂岩	×	
121	242.1	9.5 × 5.1	3.6	砂岩	×	
122	161.4	7.4 × 4.4	3.4	砂岩	×	
123	122.3	7.8 × 3.6	3.2	砂岩	×	
124	58.6	4.1 × 4.0	3.1	砂岩	×	破片
125	251.5	5.5 × 5.4	3.9	細粒砂岩	×	
126	251.7	9.4 × 4.6	4.0	砂岩	×	
127	299.4	7.0 × 5.2	4.8	砂岩	×	
128	259.1	9.1 × 5.3	3.9	硬質砂岩	×	
129	171.7	8.2 × 4.5	3.3	砂岩	×	
130	138.2	6.0 × 4.4	3.6	硬質砂岩	×	
131	164.1	10.0 × 4.3	2.5	細粒砂岩	×	
132	109.7	7.8 × 4.5	2.7	細粒砂岩	×	
133	154.0	8.2 × 4.1	4.6	砂岩	×	被熱する
134	256.6	9.0 × 5.0	5.0	硬質砂岩	×	
135	204.5	9.5 × 4.7	2.6	細粒砂岩	×	
136	313.4	11.4 × 8.0	2.9	礫岩	×	
137	208.0	6.9 × 5.1	4.3	礫岩	×	
138	137.3	8.0 × 3.9	3.1	硬質砂岩	×	
139	239.3	8.2 × 5.5	4.1	細粒砂岩	×	
140	137.1	7.9 × 4.2	3.5	細粒砂岩	×	
141	184.9	9.6 × 4.6	4.0	砂岩	×	
142	158.8	8.4 × 5.0	3.7	硬質砂岩	×	
143	173.1	7.7 × 4.8	3.8	砂岩	×	
144	101.1	6.5 × 4.2	2.4	滑石	○	有溝・孔石錘
145	105.1	6.5 × 4.0	2.9	砂岩	×	被熱する
146	161.2	8.6 × 4.1	3.2	細粒砂岩	×	
147	177.9	8.3 × 4.3	3.5	礫岩	×	
148	307.2	7.0 × 7.2	4.7	砂岩	×	
149	169.8	8.0 × 4.6	2.9	細粒砂岩	×	
150	154.2	8.6 × 4.0	3.0	細粒砂岩	×	
151	158.5	8.6 × 4.6	3.2	細粒砂岩	×	
152	119.9	7.7 × 3.7	3.4	砂岩	×	被熱する
153	255.3	8.9 × 4.7	3.6	砂岩	×	
154	133.6	8.1 × 4.0	3.3	砂岩	×	
155	157.3	10.1 × 8.9	2.8	砂岩	×	
156	259.9	8.9 × 4.2	4.3	砂岩	×	
157	165.6	9.4 × 4.0	3.4	砂岩	×	
158	3.6	3.0 × 1.7	0.3	細粒砂岩	×	破片
159	126.8	8.4 × 3.6	3.0	細粒砂岩	×	
160	231.3	10.8 × 4.8	3.6	砂岩	×	
161	140.4	9.3 × 4.0	2.9	砂岩	×	
162	195.2	8.3 × 4.0	3.7	砂岩	×	
163	157.3	8.6 × 4.7	3.5	硬質砂岩	×	
164	124.8	7.8 × 3.9	3.2	砂岩	×	
165	6.5	4.0 × 2.2	0.7	細粒砂岩	×	破片
166	153.6	7.9 × 3.9	3.2	硬質砂岩	×	
167	39.2	4.1 × 3.7	2.9	砂岩	×	
168	25.0	5.5 × 4.0	1.2	細粒砂岩	×	破片
169	119.0	7.5 × 4.2	3.5	砂岩	×	
170	160.9	9.6 × 4.8	3.5	砂岩	×	
171	106.6	7.5 × 4.6	2.8	砂岩	×	被熱する
172	145.7	8.8 × 5.0	2.8	硬質砂岩	×	
173	53.8	7.0 × 3.8	2.7	細粒砂岩	×	１７５と同一
174	2.4	3.7 × 0.8	0.7	砂岩	×	
175	62.4	7.4 × 3.3	2.0	細粒砂岩	×	１７３と同一
176	184.6	8.4 × 4.2	3.7	礫岩	×	
177	142.5	6.7 × 4.6	3.3	礫岩	×	
178	111.8	7.3 × 4.1	3.0	砂岩	×	
179	156.1	7.0 × 3.9	3.3	砂岩	×	
180	127.9	5.7 × 4.5	3.7	砂岩	×	
181	175.0	10.3 × 4.8	2.7	滑石	○	有溝・孔石錘
182	193.4	9.7 × 4.5	3.1	砂岩	×	
183	141.5	8.4 × 4.4	3.2	砂岩	×	



第151図　石器実測図（1）（1／2）

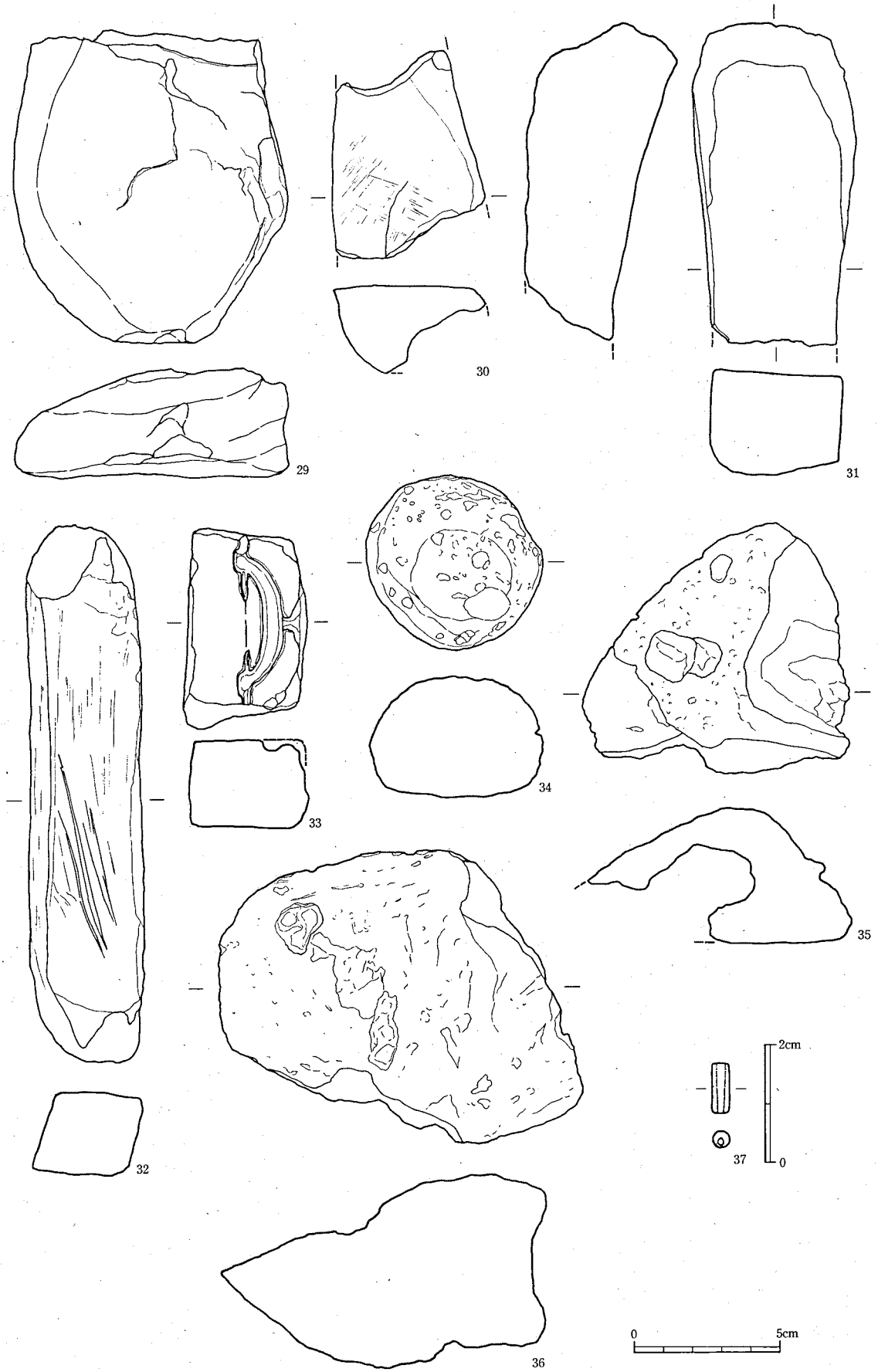
33は3D区廃土出土品で、上面に弓形の彫りこみがある鉛製漁網沈子鋳型である。類例から近世のものと考えられる。長さ6.9×4.2㎝、厚さ3.0㎝、重さ143.7ｇで砂岩製。

34～36は軽石である。34は8号竪穴住居跡出土で径3.0㎝のほぼ円形を呈する。厚さ4.1㎝、重さ47.9ｇを測る。35は8号竪穴住居跡覆土下部出土で長さ9.15×8.5㎝、厚さ4.6㎝、重さ54.8ｇを測る。36は40号竪穴住居跡出土で長さ12.3×9.8㎝、厚さ5.9㎝、重さ123.2ｇを測る。

37は3区31号竪穴住居跡出土の碧玉製管玉。長さ0.8㎝、径0.3㎝、重さ0.1ｇである。

第83表　石器観察表

挿図番号	種類	出土遺構	材質	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重量（g）	備考
142-23	砥石	住1積土内（入り口）	礫岩	9.95	5.4	1.5	149.8	
142-24	砥石	住1覆土上面（入り口）	細粒砂岩	4.75	5	0.4	23.5	
142-25	？	住1覆土中部	粘板岩	12.6	10.5	4.6	1033.2	両面に円形の窪みあり
142-26	砥石	住5覆土東北部	砂岩	4.6	2.3	0.7	22.8	
142-27	砥石	住7No.12	砂岩	16	17.8	7.5	2868.4	
142-28	砥石	住8覆土	砂岩	29.7	5	5.5	1236.8	
143-29	砥石？	住9覆土下部	砂岩	10.8	9.3	3.7	594.8	砥石？　タタキ石？
143-30	砥石	住12カマド周辺	砂岩	7	5.1	3	98.6	一部残存
143-31	砥石	住17覆土	砂岩	11	5.5	9.5	392.5	
143-32	砥石	3区遺構面（No.18）	シルト岩	18.35	3.9	2.85	347.7	
143-33	鋳型	3D区排土	砂岩	6.9	4.2	3	143.7	近世の重りの鋳型
143-34	軽石	住8覆土下部		9.15	8.5	4.6	54.8	
143-35	軽石	住8覆土		3	3	4.1	47.9	
143-36	軽石	住40No.5		12.3	9.8	5.9	123.2	
143-37	玉	住31No.5		8	3	3	0.1	



第152図　石器実測図（1）・玉実測図（37は実大、他は1／2）

第4章　考察

第1節　西新町遺跡17次調査の遺構と遺物

（1）はじめに

本書で報告した西新町遺跡17次の調査では、近世・近代の遺構も検出されたが、主体をなすものは、古墳時代の竪穴住居跡39棟である。修猷館高校の全面改築に伴う発掘調査は平成18年度にも予定されている。総合的な集落の変遷、遺構・遺物の検討は最終年度の発掘調査報告とあわせて行うこととしたいが、ここでは17次調査で検出された竪穴住居跡の集落遺跡内における位置付けと、17次調査で出土した遺物の若干の整理を行うことにしたい。

（2）17次調査の竪穴住居跡と集落展開上の位置付け

西新町遺跡17次調査で検出された古墳時代の主要遺構には竪穴住居跡39棟があり、いずれも古墳時代初頭～前期に比定することができる。修猷館高校内の発掘調査では弥生時代終末～古墳時代前期の竪穴住居跡が3次7棟、12次158棟、13次86棟、14次29棟、検出されており、修猷館高校内に限っても調査された竪穴住居跡は319棟を数える。また、遺跡内での地下鉄建設、民間開発等に先立って実施された福岡市教育委員会の発掘調査を加えると、弥生時代終末～古墳時代の竪穴住居跡は400棟を優に超える。

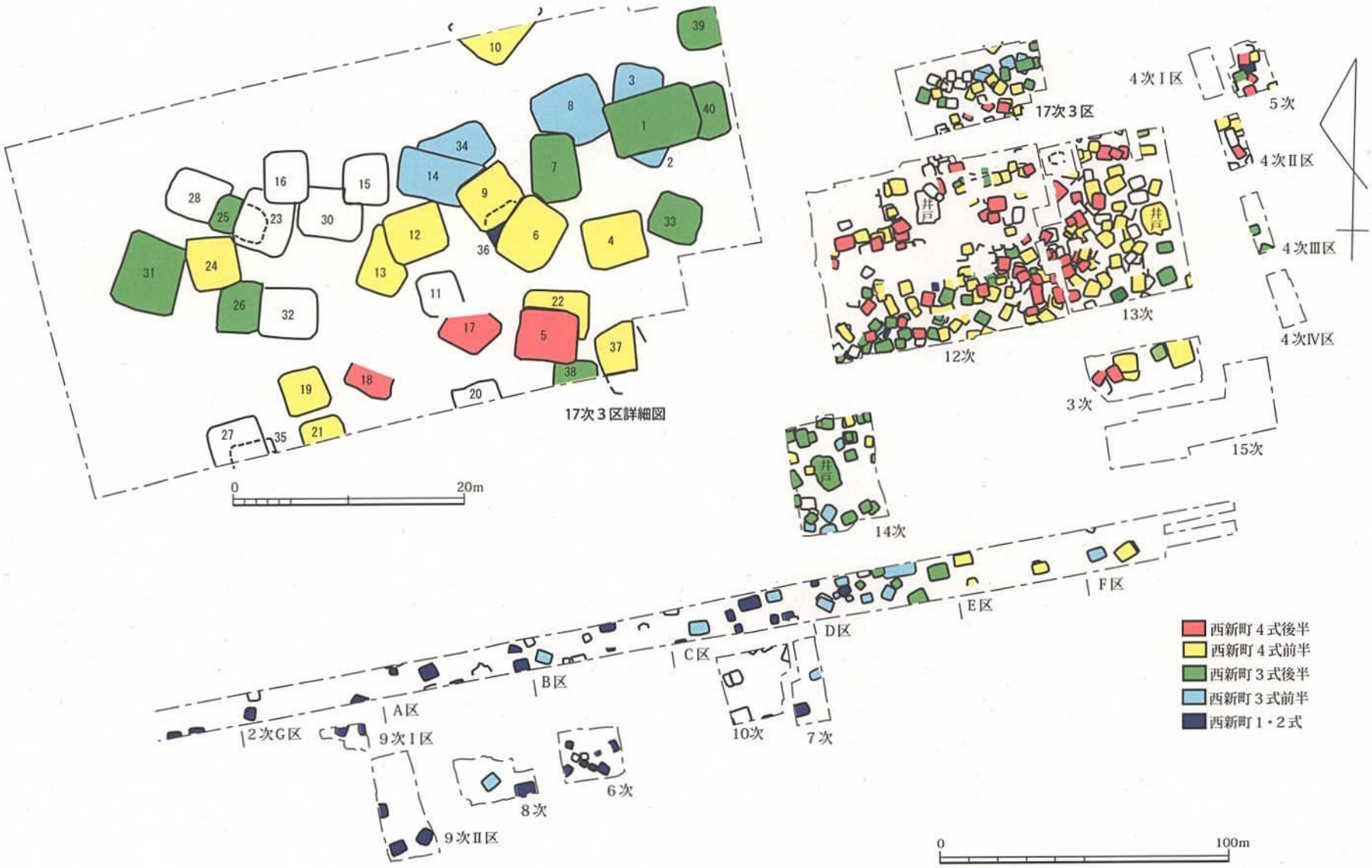
高校改築、地下鉄建設という大規模な開発事業に伴う調査という特殊な事情があるが、西新町遺跡は古墳時代初頭においては博多湾沿岸において規模の大きな集落遺跡の一つである。また、砂丘遺跡ということもあって、集落遺跡を構成する竪穴住居跡以外の遺構の実態が把握されていないという大きな課題を残すが、集落遺跡の内容の解明が進んだ集落と評価することができる。

西新町遺跡の集落の変遷については、修猷館高校改築事業に係り福岡県教育委員会が発行した『西新町遺跡』III・V・VIにおいて、西新町遺跡第2次調査報告書による土器編年〔常松他1982〕に若干の修正を加えつつ、整理を行っている。土器編年に対して問題も指摘されているが、ここでもこれを踏襲して集落遺跡の変遷を提示すると第153図のようになる。

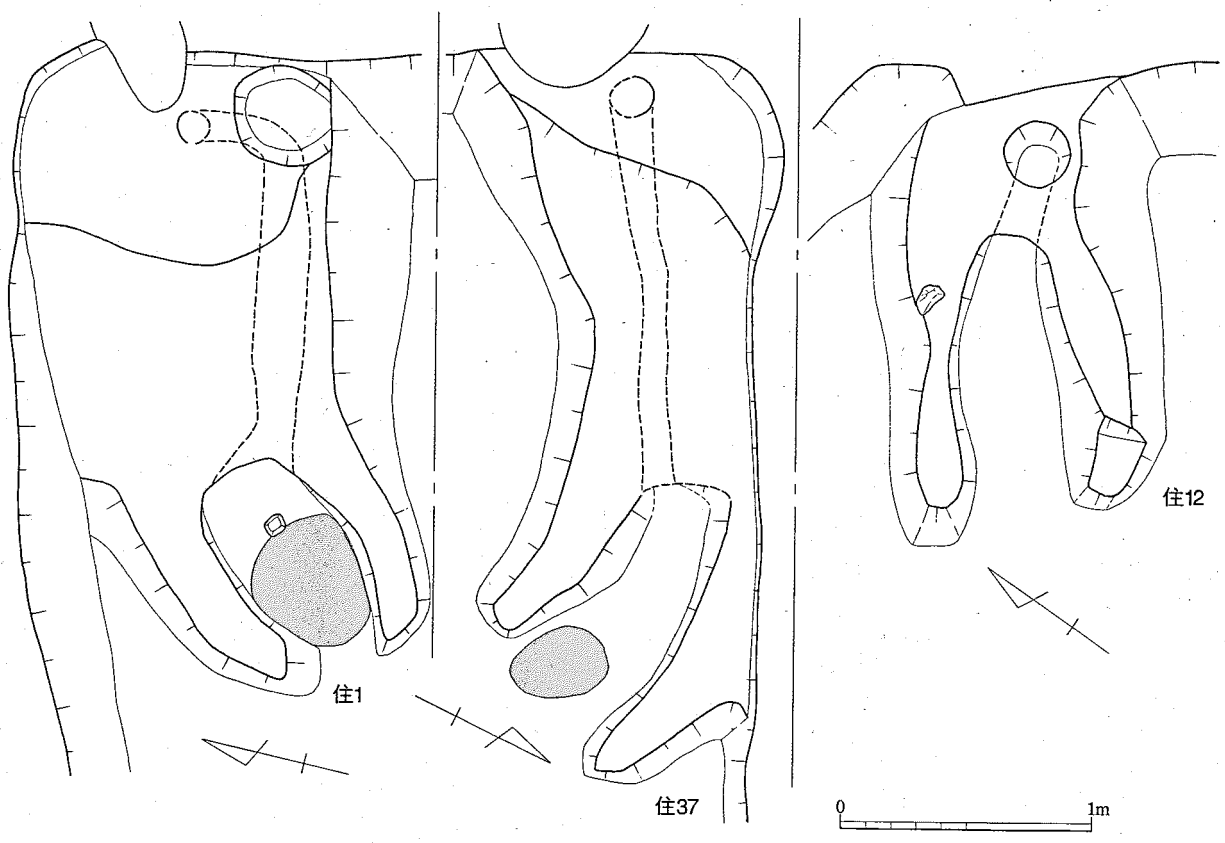
第153図に示したように、17次調査区はこれまでの調査においても北辺に位置している。17次調査では3A～C区において竪穴住居跡が検出されているが、3D区及び1区、2区では竪穴住居跡は検出されていない。これまでの調査では12次調査区の北西隅でも地形が北西方向に緩やかに低くなるとともに、竪穴住居跡が希薄になる様相が捉えられている。また、竪穴住居跡が検出された3A～C区でも西北隅では竪穴住居跡が分布していない。したがって、12次調査区北西隅、17次調査区北西隅を結ぶラインを、竪穴住居跡の分布域の縁辺部として捉えることができるであろう。

17次で検出された竪穴住居跡の中で、最も時期の遡るものは西新町2式となる可能性のある36号竪穴住居跡である。また、9・14号竪穴住居跡も布留系甕が若干ながら出土しつつ、定型化した小形丸底壺、外反口縁鉢を伴わないために3式前半に遡る可能性があろう。その他の竪穴住居跡の時期を見ると、6・17号竪穴住居跡等4式後半に下る可能性のあるものもあるが、その大半が3式後半に比定できるものが多いのではないかと考えられる。

『西新町遺跡』III報告書において筆者は、西新町遺跡の集落の展開の中で、12次調査区には新しい時期に属する竪穴住居跡が多く、時期が下るにつれて集落の中心は南西方向から東北方向に移動



第153図　西新町遺跡における竪穴住居跡変遷図（全体は1／2000、17次細部は1／500）



第 154 図　西新町遺跡 17 次調査カマド平面図（1／30）

すると指摘した。集落遺跡の変遷の全体においては、今でもこのような理解で間違いないと考えている。しかしながら、遺跡の東端部に位置する５次調査区においても若干ながら西新町２式に遡る竪穴住居跡が検出されている。したがって、西新町遺跡２式～３式前半においては、小規模ながらも集落の東北端近くに、分村したような小集団が形成されたことも検討すべきと思われる。

（3）竪穴住居跡のカマドについて

西新町遺跡の古墳時代初頭の竪穴住居跡では、日本の他の同時期の遺跡にはほどんど見られないカマド付竪穴住居跡が集中的に検出されている。同時期の朝鮮半島においては楽浪郡及び中国本土ないしは中国東北部の調理様式の影響を受けてカマドが普及する時期に相当する。韓国では近年、原三国時代～三国時代の集落遺跡の調査例が進展しており、壁に沿って長く煙道を伸ばす形式のカマドは特に「オンドル状遺構」とも称される。西新町遺跡のカマドについては韓国でのオンドル状遺構と称されるものと類似するものがあるため、朝鮮半島からの渡来人がもたらした知識のもとに構築されたことには異論がないようである。

オンドル状遺構に類似するものも含め、『西新町遺跡』Ⅴにおいて吉田東明氏により次のようなカマドの分類が行われている。

Ⅰ類　カマド本体が住居のコーナー部に直接付設され、煙道ははない、もしくは非常に短いもの。

Ⅱ類　カマド燃焼部が住居跡の壁から離れた内側にあり、煙道が住居跡の隅に向って長く伸びるもの。

Ⅲ類　壁のほぼ中央に付設されるもの。煙道は無い、もしくは非常に短いもの。

このうちII類はオンドル状遺構と称されるものと類似性が高い一群であり、III類は我が国におけるカマド普及期である5世紀後半以降、一般化するカマドと類似する。

本書で報告した17次調査では1・5・6・12・13・16・35・37号竪穴住居跡においてカマドを検出した。このうち12号竪穴住居跡のカマドはI類に相当する。1・6・37号竪穴住居跡カマドは煙道を壁に沿って長く伸ばすことから、II類にあたるであろう。残る住居跡はカマドの遺存状況が良くなかったり、一部のみの調査に止まるため、分類は難しい。

II類としたもののうち1・37号竪穴住居跡は煙道部を中心として、遺存状況が極めて良好であり、II類の典型例として位置づけることが可能であるとともに、西新町遺跡を代表するカマドとして評価できるであろう。1・37号竪穴住居跡ともに、住居跡壁からやや離れたところに燃焼部を設け、袖は壁にやや斜行する方向に主軸を向けている。燃焼部の奥から袖の壁体が屈曲し、煙道部の壁体に移行し、いずれも住居跡の壁にそって煙道をはわせ、住居跡隅から屋外に排煙する。1号竪穴住居跡は壁の高さ70cm、37号竪穴住居跡では壁の高さ40cm程が残るため、1・37号竪穴住居跡とも煙道が暗渠状に遺存していた。

1号竪穴住居跡・37号竪穴住居跡とも煙道形態、高さ、方向を断面で検討すべく、煙道部の断ち割りを進め調査を行った。必ずしも確証をもって煙道を捉えたとも言えないが、煙道が壁に平行するように走り、住居隅部で上方に立ち上がり屋外へと排煙する構造になると思われる。また、12号竪穴住居跡においても煙道の立ち上がり部分を断面において捉えることができた。今後、このような細部の構造について、韓国における発掘調査例と比較検討を進める必要があるだろう。

1・12・37号竪穴住居跡等、本調査区のカマドにおいては3～5cmの黄白色細砂と0.3cm前後の褐色粘質土を互層に積み上げたものが多いことも注目できる。カマド構築土の全体としては、細砂が大半を占めるが、褐色粘質土を挟むことによってかなりの硬度となっている。1号竪穴住居跡カマド煙道部付近の構築土は急傾斜で立ち上がるが、このような硬度・強度を確保することによって構築できた構造と言える。

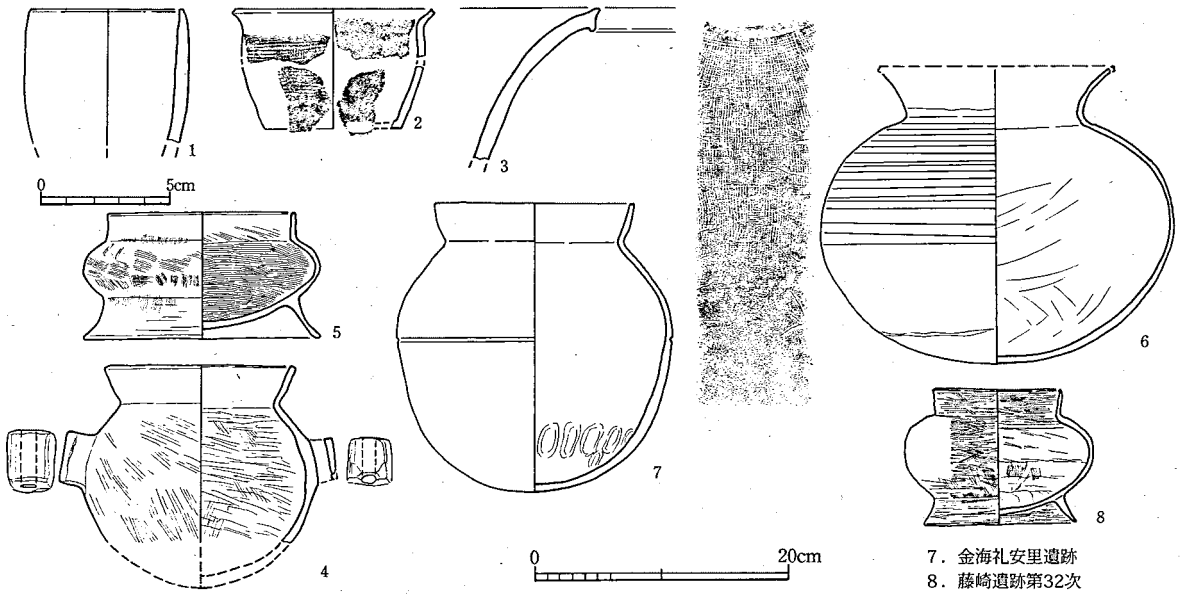
（4）朝鮮半島系土器について

17次調査ではこれまでの調査に比べ朝鮮半島系土器は多くないと言えるが、注目すべきものも少なくない。ここではいくつかの事例について、調査・報告書作成中に御教示頂いたこと、気がついたことをまとめに代えて、述べておきたい。

17次調査出土品のうち遺存状況の良好で、器形の良く分かる例について示したのが第155図である。1は1号竪穴住居跡から出土した陶質土器片である。口径が小さく深い器形で一見、タコ壺を想起させるが、杯として理解できるであろう。朝鮮半島南部においてこの種の器形はさほど一般的ではないが、おそらく伽耶地域からの搬入品かと考えられる。

3は5号竪穴住居跡出土品として図示した陶質土器大甕口縁部片である。同一個体と思われる胴部片が、本住居跡のほかに、1号竪穴住居跡上面、7号竪穴住居跡、33号竪穴住居跡、38号竪穴住居跡からも出土している。また、接合を試みていないが、12次調査区の東北部、50号竪穴住居跡から大甕頸部片が出土しており、同一個体の可能性がある。胴部は内外に丁寧にナデを施して仕上げ、タタキの痕跡を残さない。底部近くの破片もあるので、当然ながら完形品として搬入された可能性が高い。2は5号竪穴住居跡から出土した軟質の平底鉢である。

4は7号竪穴住居跡から出土した両耳付甕である。一見すると器形は布留系甕に類似するが、肩



第 155 図　西新町遺跡 17 次調査出土朝鮮半島系土器（1／6）

部に 2 個所、縦方向に穿孔する耳は一般的な土師器に例がない。また子細に見るならば、器壁が厚く、口縁部もナデの施し方が異なるため、端部が角張り、布留系甕と形態が異なる。また、胴部外面は板状工具で擦過し、滑らかに仕上げようと意図しているが、布留系甕に見られるようなハケメ条痕は観察されない。このように布留系甕を意識して形態的な特徴を取り入れているが、製作技法は布留系甕とは大きく異なると言えるだろう。

両耳は朝鮮半島西南部の両耳付壺を意識したものと考えることができる。また、土師器甕の器形を取り入れている点から考えて、製作者は布留系甕を直に見て製作した可能性が高い。しかしながら、製作技法が異なることから考えて、土器製作の作法、工程等にかかわる具体的な知識を布留系甕の製作に習熟した人物から、得たわけではないと思われる。このような点を総合するならば、朝鮮半島出身の人物が製作した可能性が高いのではなかろうか。

朝鮮半島でも布留式土器ないしはそれに類似した土器が出土している〔武末 1988〕。その中には、金海礼安里遺跡出土例（第 155 図 7）のように、朝鮮半島において布留系甕を模倣して製作したものも存在する。しかしながら、7 号竪穴住居跡出土例は朝鮮半島で出土する布留系甕とは縦方向の穿孔の耳の存在、口縁部形態等模倣の様相が異なっている。したがって、厳密な胎土分析は経ていないものの、西新町遺跡で製作された可能性が高いのではなかろうか。仮にそうであるとするならば、朝鮮半島からの渡来人の存在を裏付ける一つの資料となろう。

5 は 14 号竪穴住居跡覆土上面から出土した脚付短頸壺である。胴部内外のハケメは弥生時代終末以来の在地系土器と共通し、口縁部の丁寧なナデ、色調は土師器の精製器種に通じるものがあるため、土師器及び弥生時代終末の以来の在地系土器の製作技法の範疇で捉えることができよう。しかしながら、短い口縁部、算盤玉状の胴部、径の大きい脚は土師器及び弥生時代後期終末以来の在地系土器には類例が少ない。むしろ脚の形態・接合法や胴部の全体的な器形は朝鮮半島の瓦質土器爐形器台と類似している感がある。同様の形態のものが西新町遺跡 4 次 SD098〔松村 1989〕、藤崎遺跡 32 次 2 号方形周溝墓周溝（第 155 図 8）〔池田他 2004〕等で出土している。藤崎遺跡 32 次報告書の著者の一人、久住猛雄氏も爐形土器の模倣品と指摘しており、同感である。類例を悉皆

的に検索したわけではないが、玄界灘沿岸地域をみてもこの種の器形の類例は少なく、西新町遺跡周辺に集中する感があり、朝鮮半島との交流の頻度が高いという地域性とも矛盾がない。

ただ、西新町遺跡では爐形土器そのものは今のところ出土例がない。14 号竪穴住居跡は上述のように西新町 3 式前半まで遡る可能性があるが、当該期は西新町遺跡における朝鮮半島系土器の流入のピークに若干ながら先行する。このような点は爐形土器の模倣品とするにはやや不利な点である。今後、西新町遺跡および周辺での朝鮮半島からの搬入品の爐形土器の出土に期待しつつ、在地の土器の中での位置付けにも注意しておきたい。

6 は 37 号竪穴住居跡から出土した偏球形の胴部をなすやや甘い焼成の陶質土器タタキ文壺である。口縁端部を欠くが口縁部・胴部がほぼ完形の形状を留めており、貴重である。口縁端部は意図的に打ち欠いた可能性があろう。

（5）その他の遺物について

前節では 17 次調査において出土した朝鮮半島系土器について述べたが、ここではそれ以外の対外交流を示す遺物について触れておきたい。

土器以外に注目される資料としては青銅器、鉛板片がある。

青銅器には 1 号竪穴住居跡から出土した小形倣製鏡、38 号竪穴住居跡から出土した貨泉がある。1 号竪穴住居跡出土の鏡は直径 3.15cm と日本の倣製鏡の中でも極めて小形で、鏡背が無文ということが最大の特徴である。鳥取県長瀬高浜遺跡では同様の無文鏡がまとまって出土しており、その地域で製作された可能性が指摘されている〔林 2005〕。

西新町遺跡では山陰系土器の各器種が出土するとともに、12 次調査 119 号竪穴住居跡からは山陰から搬入されたと思われる碧玉製の玉未製品が出土している。山陰地域と西新町遺跡の間では玄界灘～日本海を通じた交流が密接であったと思われ、1 号竪穴住居跡出土の鏡もその脈絡の中で理解できるのではなかろうか。

青銅器には他に 38 号竪穴住居跡覆土上面から出土した中国新代の貨幣、貨泉がある。西新町遺跡では 12 次 96 号竪穴住居跡において五銖銭が出土しており、古墳時代初頭前後の集落に伴う中国の貨幣としては 2 例目となる。福岡市内における貨泉の出土例を収集した比佐陽一郎氏らによれば、福岡県内では 24 例目、福岡市内では 11 例目の出土である〔岡部他 2004〕。高倉洋彰氏〔1989〕は日本への貨泉の流入において弥生時代と古代末～中世の 2 つの波があると指摘している。さらに、高倉氏はそのうち弥生時代に流入したものの大半は新末～後漢初、日本の時代区分で言えば弥生時代後期初頭～前半に流入したと推測している。

西新町遺跡 38 号竪穴住居跡の貨泉は弥生時代後期前半に流入し、伝世の後、古墳時代初頭になって廃棄されたた可能性を完全に排除することはできない。しかしながら、集落の形成過程及び古墳時代初頭における朝鮮半島との交流の脈絡から考えて、朝鮮半島南海岸地域を経由して古墳時代初頭に流入した可能性が高いのではなかろうか。西新町遺跡 12 次調査 96 号竪穴住居跡出土の五銖銭は後漢後半に流通していたものであり、それと同じ過程でもたらされたものであろう。そのような意味において、日本における貨泉の流入の経路を考えるひとつの貴重な資料となろう。

また、5 号竪穴住居跡から出土した鉛板片も注目される。類例を検索したわけではないが、福岡県内においては弥生～古墳時代の鉛板片の出土例はないようである。青銅器の鋳造には鉛を必要とするが、このような鉛板片が青銅器製作の原材料に供された可能性を想定しておきたい。鉛も古墳

時代においては基本的には日本で産出しないと考えられ、中国大陸から朝鮮半島を通じてもたらされたものであろう。

(6) 小結

西新町遺跡 17 次調査での竪穴住居跡の検出数、出土遺物量、対外交流と関係する遺物等は、調査区が広く、古墳時代初頭～前期の集落の中心地である 12・13 次調査に及ぶものではない。しかしながら、上述したように注目すべき遺物・遺構も少なくなく、また集落の北西縁辺を確定することができたという点でも貴重な知見を得ることができた。これまで簡単にその意義について筆者なりの考えを述べてきたが、重要な比較資料の見落とし、解釈の誤りなども多いのではないかと思われる。御教示をいただければ幸いである。

なお、本論をまとめるにあたり、朝鮮半島系土器については特に武末純一氏、寺井誠氏に多くの御教示を頂いた。記して感謝いたします。

参考文献

常松幹雄・折尾学 1982「第 4 章 結語」 池崎譲二・田崎博之・常松幹雄・田中克子・折尾学編『福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告 2 西新町遺跡』福岡市文化財調査報告書第 79 集 pp.173-92

武末純一 1989「小形丸底坩の軌跡—考古学から見た日朝交流の一断面」『古文化談叢』第 20 集発刊記念論集 (下)

武末純一 1988「朝鮮半島の布留系甕」『永井昌文教授退官記念論文集 日本民族・文化の生成』1

池田祐司・久住猛雄・澤田むつ代・中橋孝博・比佐陽一郎 2004『藤崎遺跡』15 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 824 集

岡部裕俊・比佐陽一郎・片多雅樹 2004「三坂七尾遺跡出土貸泉について－全国古代中国銭出土一覧－」『福岡考古』第 21 号

高倉洋彰 1989「王莽銭の流入と流通」『九州歴史資料館研究論集』14

林正憲 2005「小型倭鏡の系譜と社会的意義」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念』大阪大学考古学研究室

松村道博 1989『西新町遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第 203 集

第２節　西新町遺跡出土土師器の器種構成と製作技法について

（１）はじめに

修猷館高校の改築に伴う西新町遺跡 12 次～ 15 次・17 次調査では古墳時代初頭～古墳時代前期いっぱいの時期幅をもつ土器群が多量に出土した。その器種・器形が豊富であることに加えて、砂丘遺跡ということも手伝って、調整・製作技法の痕跡を良く留めるものも多い。これまで西新町遺跡の関係報告書の作成にあたっては、特にあらかじめ土器の器種・器形の分類を提示することを省略していた。また、調整・製作技法も個別の土器毎に述べるのみにとどまった。そこで、改めて西新町遺跡の出土土器の各器種・器形を概観するとともに、その製作技法について、報告書作成に伴う実測図の作製等の観察を通じて、気づいたことを述べることにしたい。

周知のように古墳時代初頭の北部九州では畿内を中心とした外来系の土器様式が浸透し、弥生時代後期以来の在地形土器と交換するように増加する〔武末 1978〕。また、畿内における古墳時代初頭を代表する土器様式である「布留式」の成立においても、甕等における山陰系土器の製作技法の影響、小形精製三器種の成立における吉備系土器の影響などが指摘されていて、技術的には複雑な地域間の系統関係を考慮する必要がある。

そのため器種構成、製作技法の議論においては、弥生時代終末～古墳時代前期の各地域の土器様式間の影響関係の総体を把握した上で、位置付けを図る必要がある。ただ、筆者は各地の土器の観察を網羅的に行ったわけでもないので、ここではこれまでの報告書作成を通じての観察結果を提示し、系統的な影響関係については今後の議論に委ねることにしたい。

（２）器種の分類について

西新町遺跡の古墳時代初頭～古墳時代前期の土器群においては弥生時代後期以来の伝統的な在地系土器群が含まれる。また、畿内の伝統的五様式系の土器、瀬戸内海沿岸の各地域の土器、南九州からの搬入品と推測される土器も出土する。

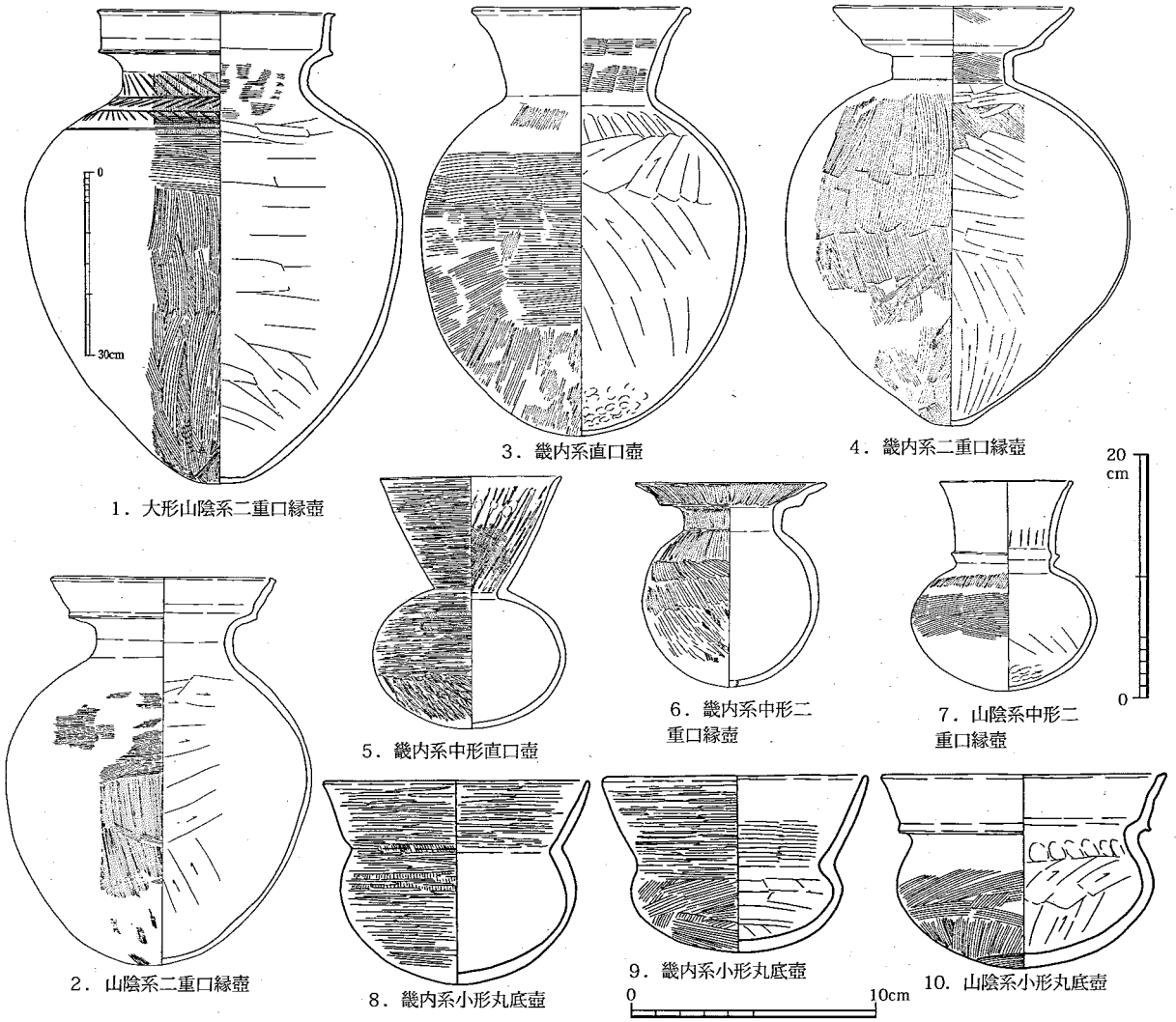
しかしながら、主体を占めるのは畿内地域の「(庄内式)、(布留式)」、同時期の山陰地域の土器様式の影響をうけた土器群である。そこでここではそれらの土器群について、器種・器形の分類を述べることにしたい。

１）壺

山陰系二重口縁壺（第 156 図 1・2）　胴部外面はハケメ、内面はケズリで仕上げ、その製作技法は布留系甕などと類似する。口縁部外面に明瞭な屈曲部を形成し、屈曲部が突帯状に突出するものもある。頸部外面に水平方向沈線とハケメ工具小口の斜め刺突による綾杉文を施文する比率も高く、肩部に沈線文、櫛描文を施文する例もある。法量はバラエティーに富むが、器高 40cm 前後のもの（第 156 図 2）が主体を占める。また、西新町遺跡を初めとして集落遺跡での出土例は少ないが、中には器高 50cm を優に超える大形品（第 156 図 1）もある。なお、図示していないが、頸部が短く、器高が 30cm に達しないものもあり、布留系の甕などと同様に煮沸具として使用した可能性がある。

畿内系直口壺（第 156 図 3）　器高 40cm 前後の大形の直口壺で畿内系である。胴部、口縁部の調整は布留系甕、山陰系二重口縁壺とほぼ同様である。肩部には沈線の波状文を施文する例があるが、布留系甕、山陰系二重口縁壺ほど文様を施文する頻度は高くない。

畿内系二重口縁壺（第 156 図 4・6）　器高 30cm を超す大形品と器高 20cm 前後の中形品があ



1．12次105号住　2．13次17号住4　3．12次97号住18　4．12次80号住1　5．12次97住18　6．12次93住137．12次97住19　8．12次97住27　9．12次97住26　10．12次138住9（1は1／12、2～7は1／6、8～10は1／3）

第156図　西新町遺跡土師器の器種分類（1）

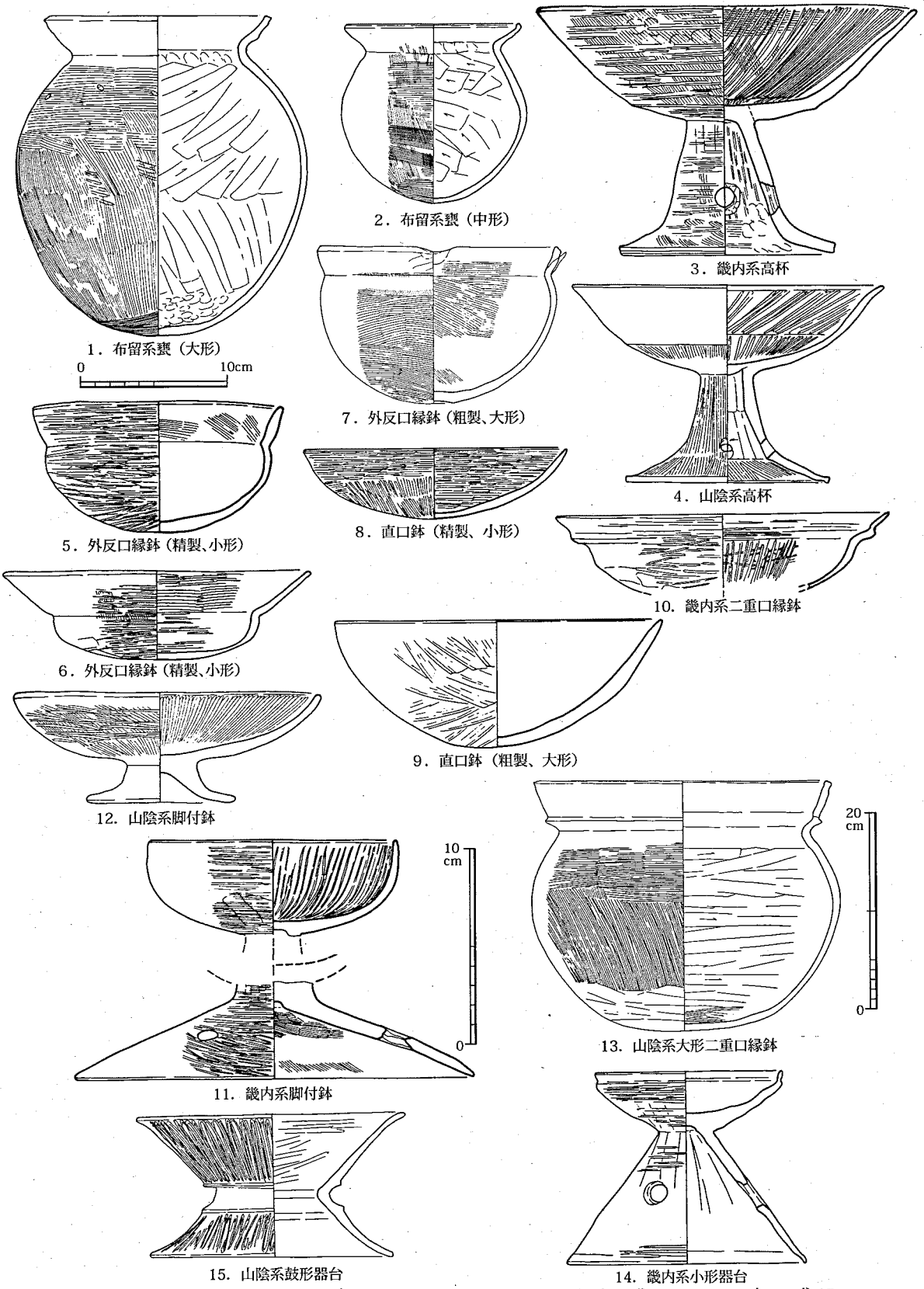
る。大形品は円形浮文を施すなど装飾性の高い一群と、そうでないものに区別できる可能性があるが、西新町遺跡では事例が少ない。この他、器高15cm以下の小形品もあるが、やはり少数である。

畿内系中形直口壺（第156図5）　器高20cm前後で、口縁部が直線的に長く伸びるもの。外面ミガキ、口縁部内面暗文風の縦ミガキ仕上げを基本とする。

山陰系中形二重口縁壺（第156図7）　17次調査では出土例は皆無であるが、12次・13次調査で多く出土している。畿内系直口壺と同様に口縁の伸びが大きいが、胴部の調整は山陰系二重口縁壺と同様である。口縁外面にやや太めの縦ミガキを施すものがある。

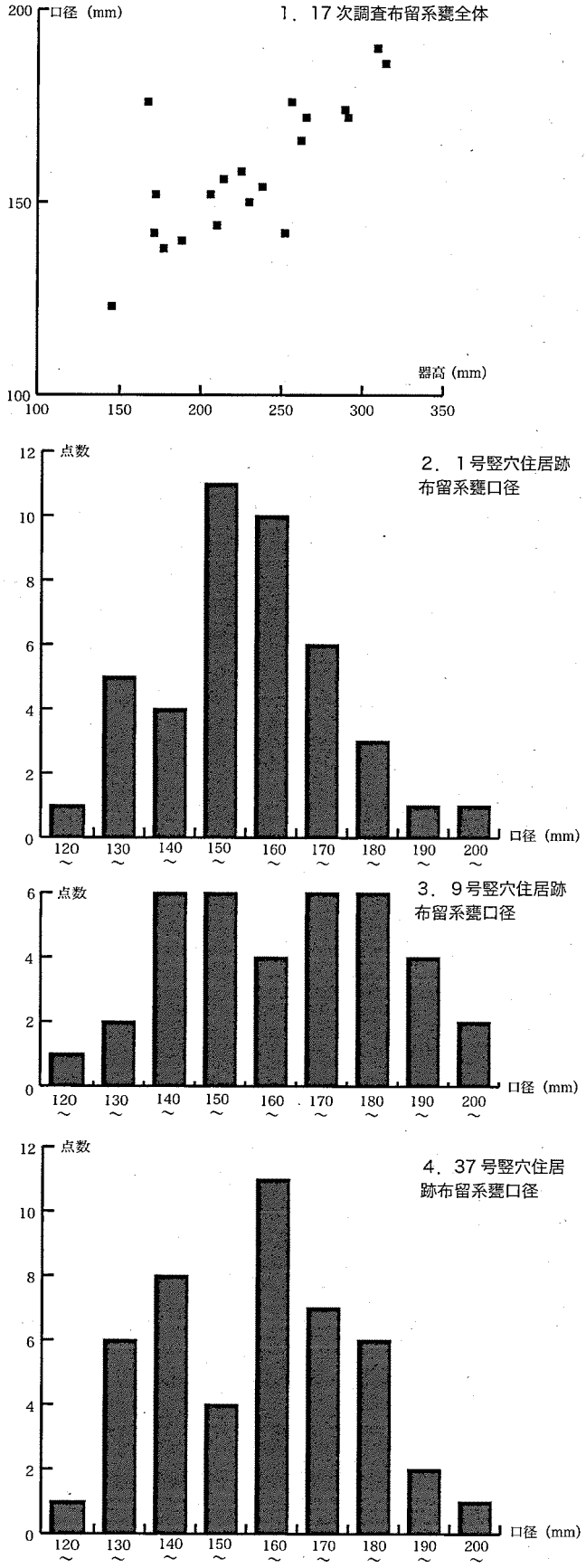
畿内系小形丸底壺（第156図8・9）　畿内の布留式において、小形器台、二重口縁鉢（有段口縁鉢）とともに、小形精製三器種を構成するもの。外面ミガキで仕上げるものが多いが、時期が下るとハケメで仕上げたものが増える。12次48号竪穴住居跡7、12次138号竪穴住居跡9のように口縁部で屈曲し二重口縁をなすものは、山陰系（第156図10）と理解できる。なお、これらの小形丸底壺には希に脚付のものがある。

以上の壺の内、中形・小形の畿内系二重口縁壺、畿内系中形直口壺、畿内系小形丸底壺で丁寧な



1．12次139住62　2．12次119住42　3．12次122住32　4．12次21住46　5．12次147住27
6．12次42住6　7．12次86住39　8．12次139住62　9．12次139住82　10．12次121住34
11．12次155住25・12次144住25　12．12次86住14　13．12次65住39　14．12次37住26
15．12次97住118（1・2・15は1／4、13は1／6、他は1／3）

第157図　西新町遺跡土師器の器種分類（2）



第158図　17次調査出土布留系甕の法量

横ミガキで仕上げた精製品は砂粒の少ない精良な胎土を用い、橙褐色～明褐色に発色するものが多い。その他のものは砂粒が多く、黄褐色～淡黄褐色を呈するものが多いという傾向がある。

2）甕

布留系甕　第158図1は西新町遺跡17次調査で出土した完形ないしは図上で完形に復元できるもの22点について、横軸に器高、縦軸に口径の散布図として示したものである。これによると口径は12cm程から20cm程、器高は15cmから30cm余りと大きな変異がある。口径16cm以下、器高25cm以下の一群と、それを超える一群に大きく2分できるようであるが、サンプル数が少ないので決定はできない。

そこで、布留系甕の出土点数の多い1・9・37号竪穴住居跡について、破片も含めて口径をヒストグラムにしたものが、第158図2～3である。1号竪穴住居跡では口径15cm～の階級に分布の中心があり、大きな正規分布を呈している。一方、9号竪穴住居跡はサンプル数が1号竪穴住居跡より少ないという難点があるが、口径17cm～の階級と、14cm～の階級の二つのピークがある。また、37号竪穴住居跡では口径16cm～の階級が最も多く、巨視的に見ればそれを中心とする正規分布に近いが、口径14cm～の階級にもひとつのピークが指摘できそうである。

以上のように、口径のみでは明確な区分ができないが、上述のように布留系甕は大きく分けて大小2群に少なくとも分かれる可能性は考慮すべきと思われる（第157図1・2）。以下の検討ではあえて区分しないが、今後、事例数を増やして再考してみたい。

布留系甕の他に、甕には在地系甕、伝統的五様式系甕、庄内系甕もあり、布留系甕とこれらの器種は大きくは時間的な前後関係にあるが、1遺構・1一括遺物群の中に、布留系甕と共存する事例も多い。

このほかに山陰系甕、吉備系甕の影響を受けたものも出土する。また、上述したような布留系甕の法量の分布域から外れる17次21号竪穴住居跡8・9のような小形の甕もある。このような小形の甕については朝鮮半島系土器軟質平底鉢の影響を受けて製作された可能性も想定しておくべきであろう。なお、布留系甕は山陰系二重口縁壺などと同様に、在地で生産されたと思われるものは黄褐色～淡黄褐色が主体となる。庄内系甕には角閃石等、在地生産の土器には見られない砂粒を含み、色調も含めて搬入品と推測されるものもある。

3）高杯

畿内系高杯（第157図3）西新町遺跡の古墳時代初頭～前期の高杯において、主体を占めるのは外面に丁寧な横ミガキを施した精製高杯である。外面の細く丁寧な横ミガキ、橙褐色～明褐色を中心とした色調から考えて、畿内系の小形精製3器種（小形丸底壺・小形器台・二重口縁鉢）と技術的に一体をなす器種と考えられる。しかしながら、この器種と全く同様の器形は畿内地域では一般的でなく、北部九州に畿内系の土器様式が流入した後、北部九州地域で改変を加えられて一器種として確立したと解釈するのが実態に近いが〔久住1999〕、とりあえず「畿内系」と称しておきたい。

山陰系高杯（第157図4） 杯と脚の接合に際して、脚上部に粘土を充填することを特徴とし、杯部外面を太めの縦ミガキで仕上げるものが多い高杯である。これらの点は畿内系高杯と異なり、太めの縦ミガキを施す点で山陰系中形二重口縁壺と共通するため山陰系と理解することができる。山陰系高杯は胎土に砂粒を多く含み、黄褐色～褐白色に発色する点でも畿内系高杯とは異なる。

このほかに畿内系には12次36号竪穴住居跡16のような大形品がある。また、杯部が段をなす吉備系高杯、庄内系の高杯も少量ながら存在する。

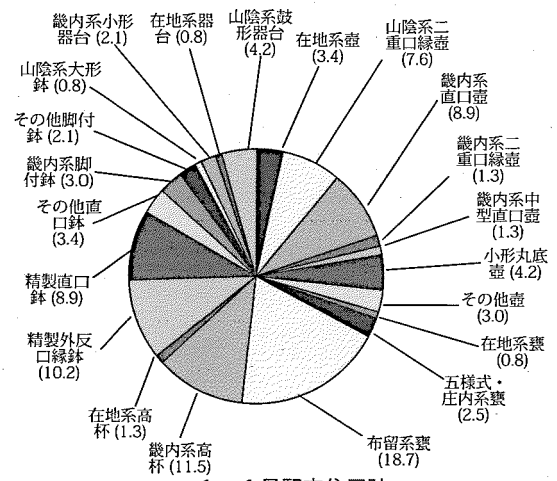
4）鉢

鉢は口縁の外反の有無、脚の有無、法量等においてバリエーションが大きい一方で、器形が単純なために器種の分類は困難を伴う。ここでは次のように分類したが、この分類に収まりきれないもの、在地系・畿内系等の判断に悩むものも多い。

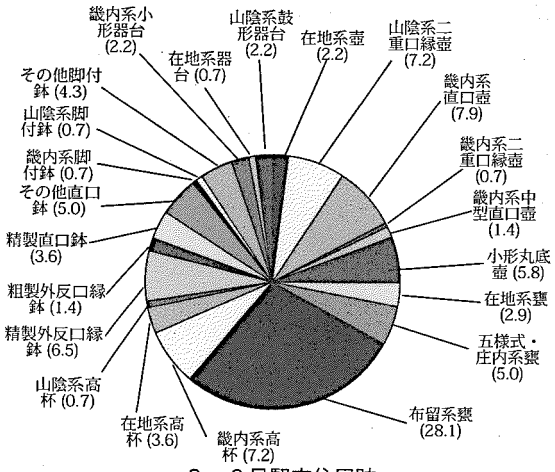
外反口縁鉢（第157図5・6） 外反口縁の鉢には口径10～15cmで、外面をミガキで仕上げ、精良な胎土を用い、橙褐色～明褐色を呈する精製品とそれ以外に大きく分けることができる。精製品については畿内系の小形丸底壺・高杯と一体をなす器種と言える。それ以外のものは精製品と同形同大のものもあるが、大形品もある。大形品については、在地系の器種か、畿内系の器種か一概に区分することが難しい。

直口縁鉢（第157図8・9） 口縁部が外反せずに、皿状・半球形の器形をなすもの。このうち口径10～15cmで、外面をミガキ、橙褐色～明褐色を呈する精製品は、布留式中には数量が少ないが、調整から考えて畿内系の精製器種を構成するものと捉えられる。一方、図示はしていないが12次93号竪穴住居跡77のようにやや太めの縦ミガキを施すものは、技法から山陰系に位置づけられる。なお、大形品も多いが、細分は今後の課題である。

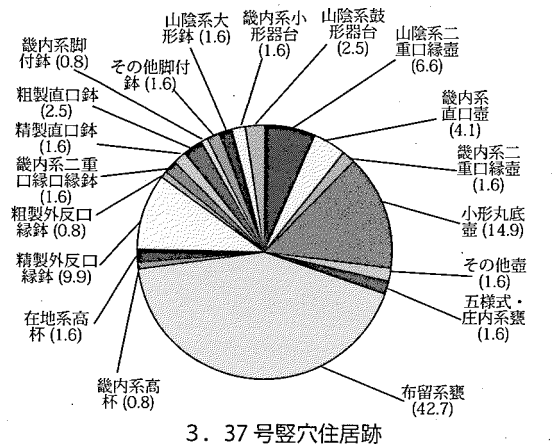
畿内系二重口縁鉢（第157図10） 口径15cm前後で、口縁部が段を形成し、二重口縁となるもの。



1．1号竪穴住居跡



2．9号竪穴住居跡



3．37号竪穴住居跡

第159図　1・9・37号竪穴住居跡出土土器の器種構成比率（数値は%）

「有段鉢」とも呼ばれ、布留式の小形精製器種を構成する。横ミガキで仕上げるものが多く、内面に暗文風の縦ミガキを施すものもある。

山陰系大形二重口縁鉢（第157図13）　口径30cm以上、器高20cm以上で、平底に近い底部に二重口縁をなすもの。大形であるいは壺のような貯蔵の機能を果たしていた可能性もあるが、ここでは鉢に含めた。

畿内系脚付鉢（第157図11）鉢部はやや深めの椀形を呈し、脚はやや高く大きく開くもの。内外ミガキ仕上げで、色調も畿内系の小形精製器種と共通する。

山陰系脚付鉢（第157図12）鉢部はやや浅めの皿状・半球形を呈し、脚は小形で低いもの。内面にやや太めの放射状ミガキを施すものがある。

西新町遺跡では以上の2器種に収まらない脚付鉢も多く、その細分は今後の課題である。

5）器台

弥生時代終末以来の在地系の器台もあるが、古墳時代初頭以降は次の器種が主体を占める。

畿内系小形器台（第157図14）　畿内系の小形精製器種を構成するもので、器高10cm程で、外面をミガキで仕上げる。脚部に穿孔することが一般的で、受部は皿形を呈するもの、底が無く筒抜けのものがある。

山陰系鼓形器台（第157図15）　山陰系の器種で、法量によりさらに大小2種程度に細分できる可能性がある。

口縁と裾が同様の形態をしているため天地に悩むものもあるが、一般的には受部内面横ミガキ、裾部内面ヘラケズリで仕上げるので、調整により図化の際の天地を判断することが有効であろう。

6）その他

以上の分類以外にも、吉備系など瀬戸内地域からの搬入品、あるいはその様式により在地で生産されたものがあるが、少数である。また、海に近いという遺跡の立地上、タコ壺・製塩土器も出土するが、ここでは分類していない。

（3）器種構成比率について

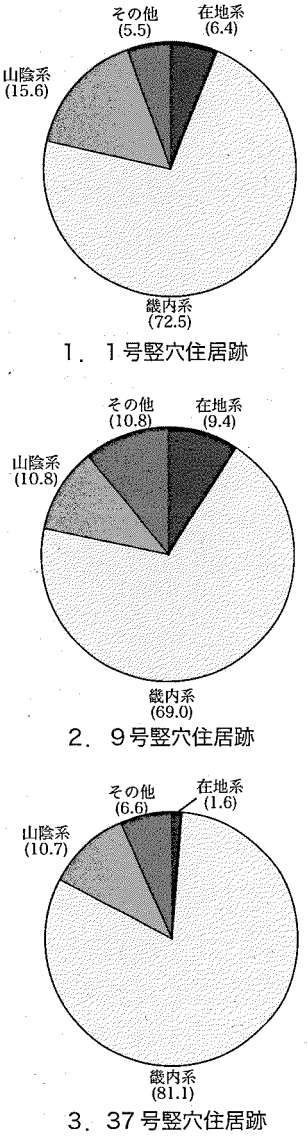
第159図1～3は、17次調査でも出土遺物の多かった1・9・37号竪穴住居跡出土土器について、前項での器種の区分に基づいて、器種構成比率を示したものである。それぞれの竪穴住居跡の出土土器はかなり小片でも実測可能なものについて図化したため、数量は実測図掲載分を基準とした。また、西新町遺跡の特徴ともなっている朝鮮半島系土器、タコ壺、製塩土器は、土師器の器種構成とはひとまず別にして考えるべきであるので、ここではカウントに含めていない。

なお、甕・壺・鉢は口縁部の点数を基準とし、また高杯・器台は口縁と裾部の実測図作成点数のうち多いほうの数値を採用した。

器形毎に述べるならば1号竪穴住居跡では壺29.7％、甕22.0％、高杯12.8％、鉢28.4％、器台7.1％、9号竪穴住居跡壺25.2％、甕36.0％、高杯11.5％、鉢22.2％、器台5.1％、37号竪穴住居跡では壺28.8％、甕44.3％、高杯2.4％、鉢20.4％、器台4.1％になる。器種構成の中で最も多いものが甕で、壺、鉢の順になる。高杯は鉢よりも少なく、日常的な食器としては各種の鉢の占める比率が高かったものと言える。

次に、これらの住居跡出土土器について、同様の基準で点数をカウントし、在地系・畿内系・山陰系・その他の系統別に分けて比率を示したのが、第160図1～3である。なお、その他としたものは在地系・畿内系・山陰系以外の地域の系統の土器が主体となるが、鉢・壺類を中心に在地系・畿内系・山陰系に弁別できなかったものも含んでいる。

以上のような理由により今後、系統別の区別が進めば、数値を訂正する必要があるが、ひとまずこれを基準とするならば、畿内系の土器が69～81％と大多数を占める。山陰系の土器は10～15％である。在地系の土器は時期が下るにつれ、畿内系・山陰系の土器と交代するために、絶対量が少ない。



第160図　1・9・37号竪穴住居跡出土土器の各系統別比率（数値は％）

第159図と第160図を対照し、各器形毎の山陰系と布留形の関係についても述べておきたい。高杯には山陰系の高杯が確実に存在するものの、検討してみた3棟の竪穴住居跡出土品中で確実な例としては9号竪穴住居跡の1点のみである。在地系高杯も存在するが、畿内系高杯が圧倒的に多数を占めると言える。鉢においても同様に畿内系の精製外反口縁鉢・精製直口鉢等が多いのに対して、山陰系脚付鉢等は少ない。

これに対して壺では畿内系直口壺とほぼ同じ比率を山陰系二重口縁壺が占めている。したがって、山陰系土器は各器種が揃ってはいるものの、二重口縁壺がその主体をなすものと言えよう。

（4）各器種の製作技法

1）甕・壺の製作技法

前項で検討したように、古墳時代初頭～古墳時代前期の西新町遺跡の煮沸具としては、布留系の

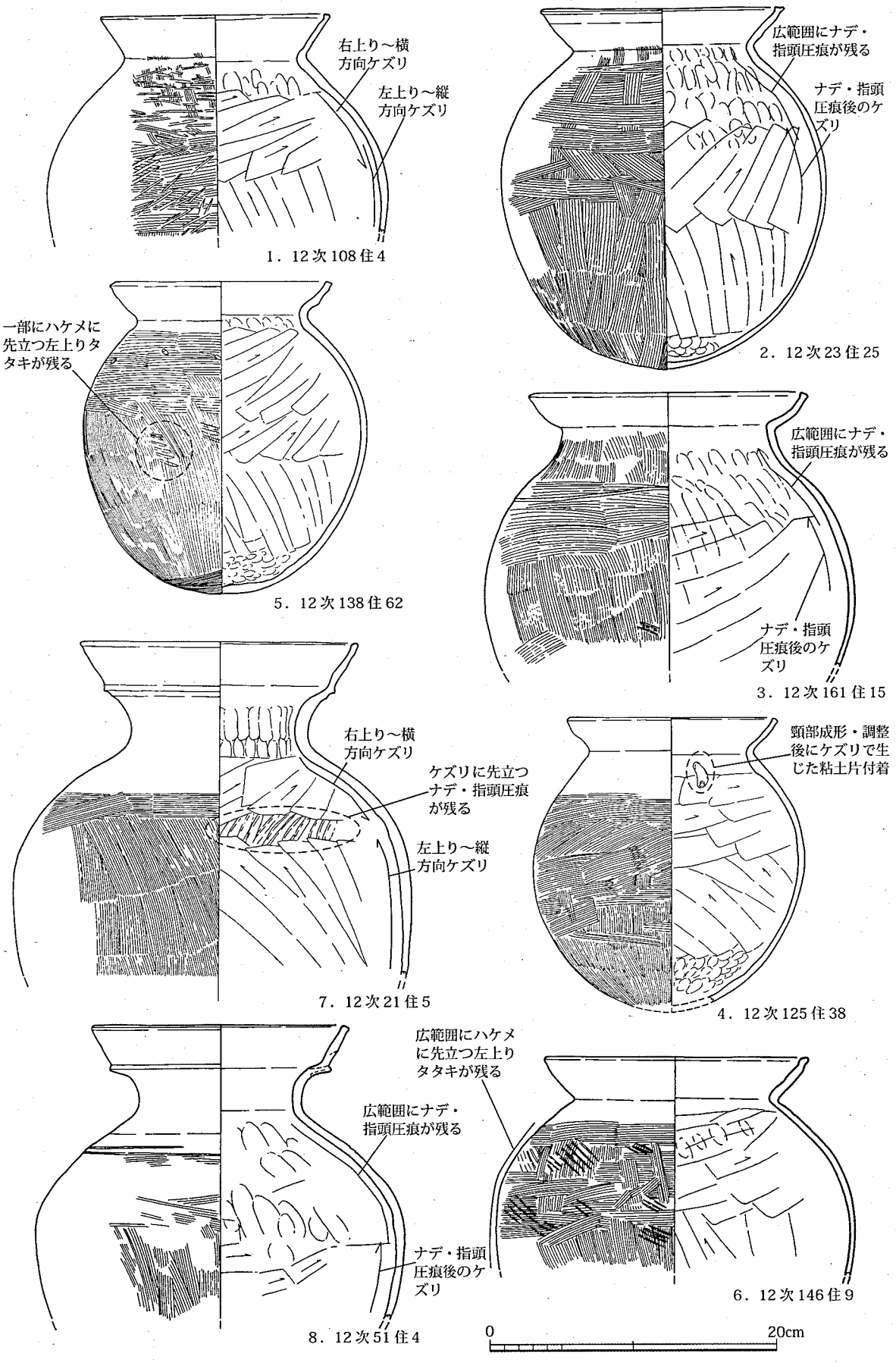
甕が主体を占める。布留式甕については庄内式甕との型式変化の連続、不連続の側面、底部の整形における型作りが注目されてきた。型作り成形の重要な根拠となったのは、底部内面の指頭圧痕が半球形の範囲に施されることにある。しかし、西弘海氏は型作りではなく、柔らかい段階の土器の外側を板ヘラ、すなわちハケメ工具により掻くことにより、丸底が形成され、その時に内側から土器を支えた痕跡が底部の指頭圧痕であるとの考えを持っていたようである〔西 1986〕。このように、布留系甕の製作技法については底部の指頭圧痕が注目されているが、胴部内面の大半を占めるのはケズリであり、まずケズリの工程について整理しておきたい。

西新町遺跡の布留系甕では胴上半部内面に斜め右上り～横方向のケズリ、胴下半部内面を斜め左上り～縦方向のケズリの施されるものが大半である。12 次 108 号竪穴住居跡 4（第 161 図 1）は胴部外面にハケメの後ミガキを施すやや特異な個体であるが、胴上下のケズリの切合いが良好な状態で確認できる。また、甕ではないが、12 次 21 号竪穴住居跡 5 山陰系二重口縁壺胴部（第 161 図 7）は肩部ケズリの方向の変換線が接しておらず、その間にナデ上げたような痕跡が残る。加えて 12 次 51 号竪穴住居跡 4 山陰系二重口縁壺（第 161 図 8）は胴上半内面はケズリがほとんど施されず、指頭圧痕状のナデ痕が多く残る。12 次 23 号竪穴住居跡 25（第 161 図 2）、12 次 161 号竪穴住居跡 15（第 161 図 3）も同様である。これらの例は胴上半部のケズリが省略されたと考えられるであろう。したがって、ケズリを施す前に指頭圧痕を残すようなナデにより仕上げられたものと考えられる。また、ケズリが施される時期にはすでに頸部・口縁部も整形されていたと考えられる。かなり乾燥が進んだ段階でケズリを施すと考えられるが、12 次 125 号竪穴住居跡 38（第 161 図 4）のように、まれにケズリにより生じた粘土片が掻き出されずに、頸部内面等に付着して残ることがある。また、頸部内面には指頭圧痕ないしは頸径をすぼめる際の絞り痕を消したナデの後にケズリを行ったという切合いを観察できるものが多い。

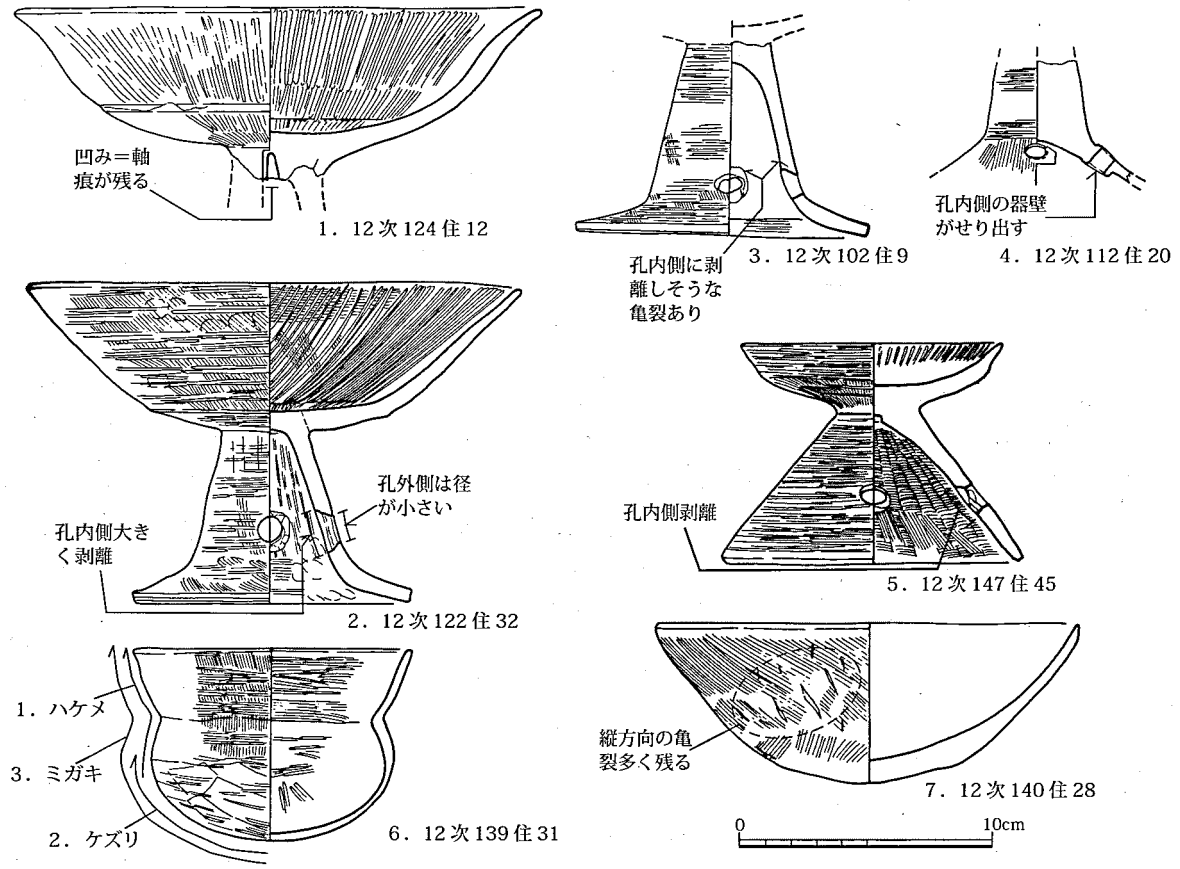
以上のようにケズリを施す前の胴部内面はナデ等による指頭圧痕、凹みを残したような状態であったと考えられる。ところで、布留系甕の特徴である底部指頭圧痕とケズリとの前後関係について、土師器の製作技法に詳しい久住猛雄氏はケズリの後、指で押し出して底部を丸く製作したと考え〔久住 1999〕、ケズリ後指頭圧痕という観察結果を報告している〔池田他 2004、田上編 1999 他〕。これを上述したような観察結果と関連づけると、胴部内面の調整痕の順序は胴上部のナデ、ケズリ、底部押し出しのための指頭圧痕の順となろう。

しかしながら、胴上部の指頭圧痕、ナデ痕と底部の指頭圧痕には外見的には面的な大小の差はあるが、凹みの深さにおいては大きな差が無い。また、場合によっては底部の指頭圧痕をケズリが切るように見える例もある。そもそも、底部を押し出して丸底にするためには変形可能な程度まで粘土が柔らかくないといけないが、それ以前にケズリを施すと、ケズリ工具の粘土掻きとりにより、器壁に穴が開き、成形に失敗する確率が高まるのではなかろうか。上述したように口縁、頸部の成形が終わった後にケズリを施すと考えられるので、口縁・頸部と同様にケズリを施す前には底部も丸底として完成しており、器壁を薄くするために半乾燥の状態でケズリを施したと理解するほうが良いと思われる。なお、17 次 18 号竪穴住居跡 11 などは胴内面下部の指頭圧痕が通常のものより広い範囲に残っているが、これはケズリの範囲が狭かったためと理解できるだろう。

布留系甕の胴部外面については、ハケメを留めることが一般的である。布留系甕では肩部に横ハケを施すものが多いが、子細に見るとハケメは複雑な様相を呈している。17 次 17 次 5 号住居跡 102 は頸下縦ハケ、胴下部左上りハケ、肩横ハケ、胴下部右上がりハケの順と観察された。また、



第161図　甕・壺の製作技法関連資料（1／4）



第162図　その他の器種の製作技法関連資料

17次9号竪穴住居跡74でも頸下縦ハケ、肩横ハケ、胴下部板ナデに近い縦ハケの順である。これらの例では全体的に縦ハケで仕上げ、肩部に横ハケを施した後、再度、胴の下半に縦ハケを施したと考えられる。胴肩部の沈線、櫛歯工具等による施文は胴肩横ハケを施した後に行うが、まれにこれら文様を胴下部の縦ハケが切る例もあり、このような観察を補強してくれる。これに対して、17次9号竪穴住居跡73では肩縦ハケ・胴下部縦ハケの後、胴肩部横ハケの切合いである。これについては、横ハケの後の縦ハケが省略された例と考えられよう。

まれに例えば12次138号竪穴住居跡62(第161図5)・12次146号竪穴住居跡9(第161図6)のように、ハケメに先行するタタキが観察できる例がある。なお、タタキ技法は西新町4式前半ほどまでの布留系甕等で確認できている。そのため、ハケメで完全に消されるものが多いものの、かなりの頻度でタタキが基本的な成形に用いられたのではないかと考えている。また、タタキの条痕幅は畿内で出土する河内型庄内甕、大和型庄内甕程、細く狭い間隔のものではない。おそらく、弥生時代終末以来の在地系土器の製作に用いられたものに系譜を引く、やや粗めのタタキ工具が踏襲されたのではないかと考えている。

したがって、胴部外面はタタキで仕上げた後、全体に縦ハケを施してタタキを消し、さらに肩部横ハケを施して、場合によっては再度、胴下部に縦ハケを施したと考えられる。先に胴部の基本的な形態はケズリを施す前にほぼ完成されていたと考えたが、タタキ、ハケメの複雑な工程は基本的な倒卵形・丸底の胴部形態を成形するためのものではなかろうか。以上から、布留系甕は型作りではなく、ハケメ等で丸底に成形したとすることに西弘海の推測に基本的に同意したい。また、このような製作技法は布留系甕のみならず、山陰系二重口縁壺でも同様と考えられる。

2）その他の器種の製作技法

高杯　畿内系高杯では、第157図2のように、脚部の頂部の周囲に杯底部の粘土を付加して杯部と接合している。また、杯底部と脚頂部の接合を強化するために、脚頂部に刻みを施すものも多い。このような脚と杯の接合技法は畿内系の小形器台の脚と受部底の接合技法にも共通するものである。

これに対して山陰系高杯は第157図4のように脚頂部に見える杯底が半球状に突出し、畿内系の高杯とは異なる。畿内系高杯と山陰系高杯との区別は外面横ミガキの有無もあるが、この接合技法も指標として扱うことができる。また、山陰系高杯杯底の突出部には12次124号竪穴住居跡12（第162図1）のように、細い棒状工具を刺した軸痕と呼ばれる痕跡が残る例も多い。

また、畿内系高杯は脚柱部と脚裾部の変換点近くに穿孔を施すことが一般的である。穿孔部を子細にみると12次122号竪穴住居跡32（第162図2）のように布留系高杯は穿孔部内面が、外面に比べ広く剥離することが特徴的である。これらの穿孔はミガキを切っており、内面の粘土が剥離することと合わせて、粘土の乾燥が進んだ半乾燥時に穿孔したと考えられる。第162図3に示した12次102号竪穴住居跡出土の高杯においては外側からの穿孔により通常剥離する粘土が、剥離せずに亀裂が入った状態で器壁に付着したままとなっている。

なお、器種は異なるが、17次1号竪穴住居跡240の畿内系精製脚付鉢では、穿孔部の横外面に、穿孔を試みた同心円状の擦痕が観察できる。そこから半乾燥時の穿孔は管状の工具を外から回転させて穿孔したと推定される。高杯もこれと同様の穿孔方法によるものであろう。半乾燥時穿孔は畿内系高杯以外にも、畿内系小形器台（第162図5）、畿内系精製脚杯鉢でも観察でき、布留系小形精製器種の製作技法を構成していたものと考えられる。

これに対して粘土が柔らかい段階に穿孔したため、内側の穿孔周囲の粘土がせり出した例もある。12次112号竪穴住居跡20（第162図4）はそのような乾燥前の穿孔の例である。正確にカウントしたわけではないが、このような穿孔は畿内系高杯が成立する以前の、庄内系・五様式系の高杯などに多いという傾向がうかがえる。

小形丸底壺・精製外反口縁鉢　精製の小形丸底壺は胴部外面を丁寧な横ミガキで仕上げることが最大の特徴である。ただ、このミガキに先立ち、胴下部外面にケズリ、胴上部～口縁部外面にハケメの見られるものも多い。調整の切合いは、胴上部～口縁外面ハケ、胴下部ケズリ、外面ミガキの順が一般的である（第162図6）。同様の製作技法は精製外反口縁鉢、精製直口鉢、畿内系精製中形直口壺において指摘できる。したがって、これらの技法が小形精製器種に共通する基本的な製作技法であったと考えられる。

なお、粗製の直口鉢では17次8号竪穴住居跡28のように、口縁外下に微かな段があり、型による成形が想定される例もある。また、豊岡卓之氏〔1999〕は縦方向にひび割れの入る鉢なども、型に細い粘土板を押し付けた痕跡と考えている。これに相当する例として、ハケメに先立つ縦方向の亀裂を留めた12次146号竪穴住居跡28（第162図7）のような鉢がある。

先に布留系甕の製作技法として型作りを否定したが、半球形の鉢の一部には型で作ったものもあったと想定しておきたい。鉢に少数ながらみられる籠目土器もこのような型作りの製作技法の一環であったと考えられる。

（5）小結

本節では西新町遺跡の出土土師器について器種分類を行った後、器種構成比率について検討し、

さらにはいくつかの器種の製作技法について報告書作成時の観察で気がついたことを述べてみた。

ただ、上述した器種分類もあくまで暫定的であり、今後、西新町遺跡の出土土器の整理を進める上で再検討を加える必要がある器種も多い。また、器種構成比率については、17次調査の3棟の竪穴住居跡を対象としたが、より確実性を増すためには事例の集積が望まれよう。

さらに、製作技法については微細な部分になるほど、福岡県内の各報告書の間はもちろん、西新町遺跡の報告書作成の担当者間においてさえ、観察結果が異なる場合もある。特に布留系甕の製作技法では、胴部内面の調整について、重要な研究成果と筆者の観察に食い違いが生じるところもあった。筆者の観察の入口が間違っているならば、上述した論の展開は成立しない箇所も生じてくる。多くの方々に資料を検討していただき、御批判の上、観察を修正していただければと思う。

幸い、西新町遺跡の調査は平成18年度にも予定されている。御叱正いただければ、平成18年度の調査結果の報告とあわせて、分類、器種構成比率、製作技法について修正を図りたい。

参考文献

久住猛雄 1999「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』19

池田祐二・久住猛雄・澤田むつ代・中橋考博・比佐陽一郎 2004『藤崎遺跡』15　福岡市埋蔵文化財調査報告書第824集

武末純一 1978「福岡県・早良平野の古式土師器」『古文化談叢』第5集

西弘海　1986『土器様式の成立とその背景』真陽社

田上勇一郎編 1999『箱崎遺跡』7　福岡市埋蔵文化財調査報告書第591集

豊岡卓之 1999「『纒向』土器資料の基礎的研究」『纒向（補遺編）』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

第３節　西新町遺跡と早良平野の古墳時代渡来人

（１）はじめに

西新町遺跡の所在する筑前地域は朝鮮半島と近く、弥生時代以前より対馬海峡を挟んだ様々な位相での交流が行われてきた。弥生時代の始まり、青銅器生産の始まりや農業生産の拡大に朝鮮半島からの渡来人が重要な役割を果たしたことは周知のとおりである。また、弥生時代には後漢書東夷伝、魏志倭人伝に登場する伊都国、奴国と朝鮮半島に置かれた楽浪郡、さらには漢王朝との国家的な通交が行われ、弥生時代より朝鮮半島系の遺物が豊富である。

古墳時代初頭には朝鮮半島系の遺物は少なくなるが、これは全国的な傾向とも一致したものと言える。そのような中で、古墳時代初頭の陶質土器、軟質土器等多数の朝鮮半島系遺物が出土し、同時期の竈付竪穴住居跡が検出された西新町遺跡の存在は特に注目される。遺物・遺構の様相から考えて、前節までに述べたように渡来人の存在を示唆する資料も多く含まれる。

西新町遺跡の廃絶する古墳時代中期以降においても、西新町遺跡の所在する早良平野は朝鮮半島との窓口の役割を果たし、渡来人の存在をうかがわせる資料も豊富である。そこで、ここでは早良平野の渡来人に関係する資料を概観し、西新町遺跡と比較しつつ、西新町遺跡における渡来人の特質について考えてみることとしたい。

（２）渡来系の遺構と遺物の抽出

渡来系の遺構・遺物から渡来人の存在を検討していく方法としては、亀田修一氏の一連の論考〔亀田 1993・2003 他〕を参考にしているが、早良平野を始めとする北部九州の古墳時代の物質文化の展開の中で、渡来系の遺構・遺物として注目される項目には次のようなものがある。

土器　陶質土器・瓦質土器等の朝鮮半島系土器は、土器そのものが威信財的性格、祭祀的性格をもったり、内容物の交易に用いられたりするため、単独では物のみの移動か、人の移動を伴うものか判断が難しい。しかしながら、西新町遺跡などのように集落等の遺跡で一定期間にわたって、陶質土器・瓦質土器を伴う場合は、渡来人の存在を前提とした継続的・安定的な交流が成立していたと考えられる。一方、軟質土器そのものが交易の対象となったり、威信財的性格を帯びることは少ないと思われる。そのため、軟質土器が出土する場合には、それを使用する人の渡来を十分推測してよい。

さらに、今後、胎土の科学的分析が進み、在地の胎土で製作されたことが証明された場合、土器を製作した朝鮮半島からの渡来人が存在したことになる。ただ、軟質土器の場合、それを模倣して在地の集団が製作したものがないかどうかは注意を要する。

また、陶質土器に近い特徴的な初期須恵器が出土した場合には、生産地が近くにあると推測されるような脈絡の中では、それらを生産した渡来人の存在を想定する間接的資料として捉えることができよう。

建物跡・生活遺構　北部九州では朝鮮半島の調理様式を取り入れて５世紀中ごろ（須恵器出現期）以降から竈の導入が本格化する。一方、朝鮮半島では紀元前後以降、竈付きの竪穴住居が次第に一般化するので、須恵器出現に先立つ時期の竈については、朝鮮半島からの影響、特に渡来人の存在を前提とした解釈が必要となる。まさに西新町遺跡の例がこれに該当する。

竈以外では、古墳時代中期以降、各地で点的に検出例のある大壁住居跡など壁立の建物跡も弥生時代の伝統的な建築様式の中からは出現しがたいものであるため、他の項目と関連する場合には渡

来人の存在を想定する資料となる。

墓地　古墳では横穴式石室の出現からしばらくたった6世紀の前葉以降、紀元前後以来の朝鮮半島の葬送儀礼の影響のもと、横穴式石室等主体部内に土器を副葬する風習が一般化する。これに対して、前期以来の伝統的な古墳の葬送儀礼では朱を入れた壺の副葬等一部の例外を除いて主体部内に土器を副葬することは、極めて希である。したがって、6世紀初頭以前に主体部内に土器を副葬した古墳は渡来人からの葬送儀礼の影響あるいは被葬者そのものが渡来人であった可能性が高くなる。ただ、北部九州においては朝鮮半島からの初期横穴式石室の導入に伴って、在地の集団にも断片的にそのような儀礼が取り入れられた可能性も考えられるので、注意が必要である。

各種生産活動　弥生時代以来、九州では鉄器の生産を行っているが、その素材の多くは朝鮮半島からもたらされ、鉄器生産の技術革新の各段階においては渡来人の関与が推測される。また、本地域においては6世紀以降、砂鉄を使用した鉄素材の生産が本格化するが、その開始にあたっても渡来人の関わりは小さくなかったであろう。そのため鉄滓の出土及び鍛冶具等の出土は渡来人の存在を示唆する重要な資料となる。ただ、鉄器の生産、鉄生産という先端技術が渡来人にのみ独占されたわけではなく、二次的に波及して、在地の集団に取り入れられたことも十分に推測される。したがって、これらの鉄生産・鉄器生産の場合、その他の項目との相関が高まった場合、渡来人の存在の可能性が高くなると言えるだろう。

鉄素材となる鉄鋌、古墳時代には生産するための技術的基盤が存在せず、鉄素材としても転用された可能性のある鋳造鉄斧は、威信財として単独で扱われた可能性も排除できない。しかし、鍛冶道具等、その他の項目と結びつく場合には、渡来人が存在する可能性を補強するものとして取り扱うことができる。

また、上述したような須恵器生産、特に陶質土器の属性を色濃く残す特徴的な初期須恵器の生産には朝鮮半島からの第一世代の工人の関わりが想定される。

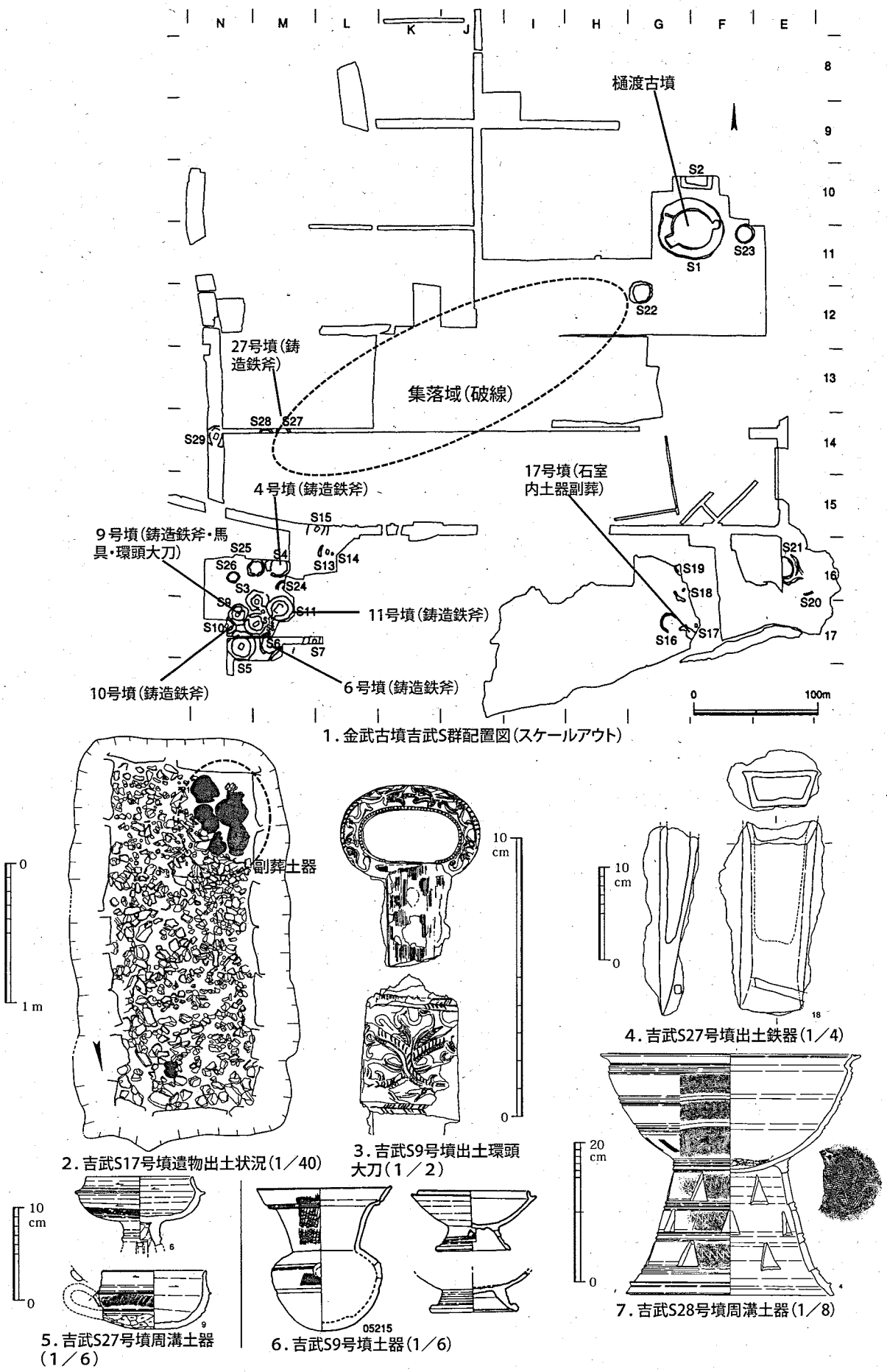
（3）早良平野における様相

西新町遺跡の廃絶後である古墳時代中期において、渡来系資料の集中する遺跡として注目されるのが早良平野の南西、飯森山麓に位置する福岡市西区吉武遺跡群周辺の地域である。

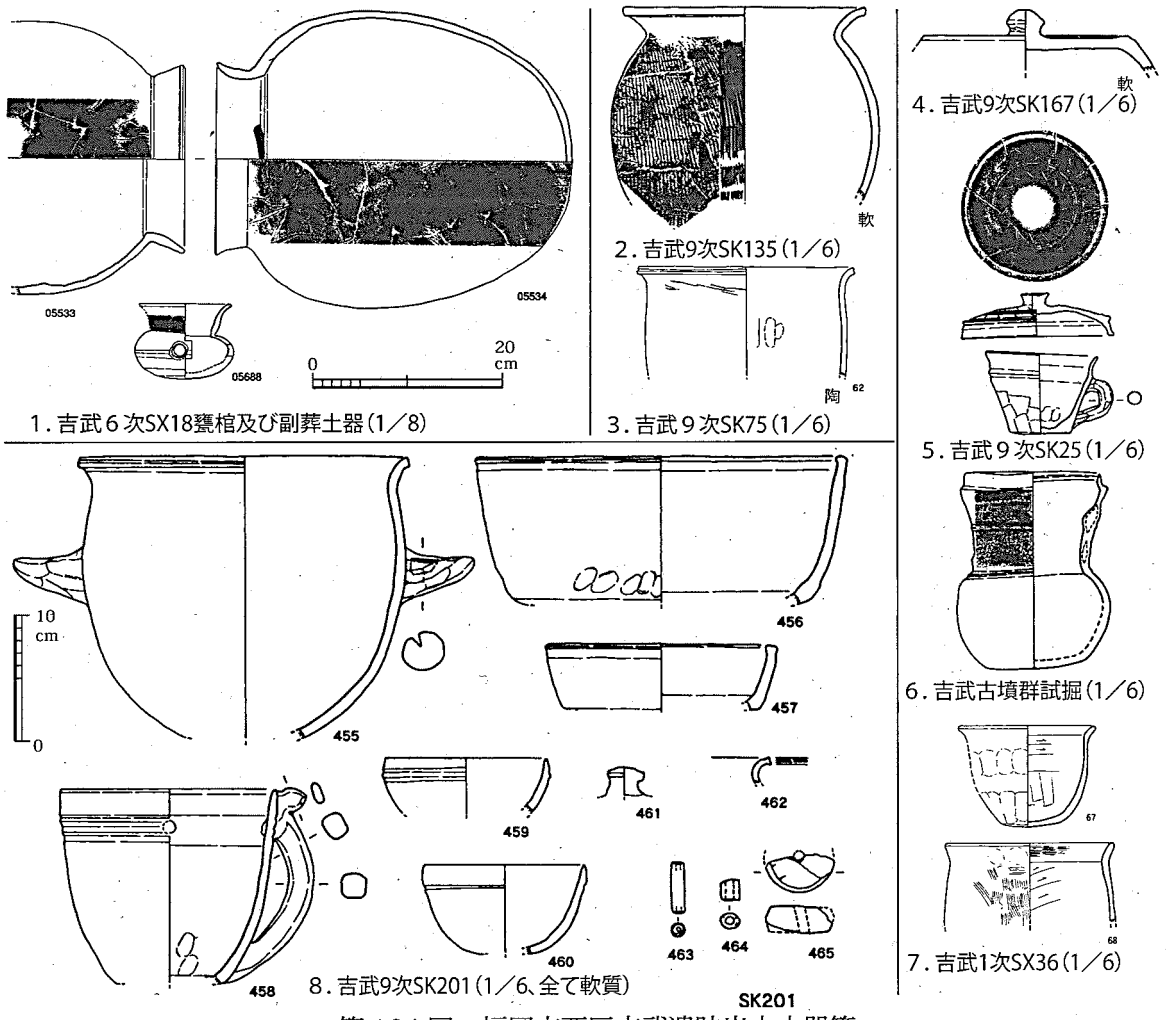
吉武遺跡群中の金武古墳群吉武S群（第163図1）〔横山2003〕は土器を副葬した石室、陶質土器、双龍文環頭大刀、鋳造鉄斧、初期馬具等の渡来系資料の集中する5世紀中頃～6世紀前葉にかけての墓地である。

この墓地群は完掘されたわけではないが、集落域を挟んで前方後円墳である樋渡古墳を中心とする北部と、南西部、南東部に3分できるようである。北部は主体部等、古墳の遺存状態は良くなく、本来の副葬・供献品の構成を反映していない可能性があるが、上述したような渡来系資料の集中するのは南西部である。南西部では多様な形態の陶質土器が出土しているが、これに加え特筆されるのが鋳造鉄斧（第163図4）の集中である。点数はそれぞれの古墳で1～2点であるが、これ程、集中的に鋳造鉄斧を所有する集団は九州では類例が無いといっても過言ではなかろう。

この南西部の古墳群の中で盟主的な存在となるのが、墳丘規模はさほど大きくないが、双龍環頭大刀（第163図3）・馬具・鋳造鉄斧を出土した吉武S9号墳である。また吉武S27号墳では石室内に鉄滓が副葬されていた。ただ、南西部では主体部の遺存状況が良くないことも考慮しなければならないものの、石室内に土器を副葬した古墳は発見されなかった。一方、南東部では石室内に



第 163 図　福岡市西区吉武古墳群の渡来系遺物・遺構



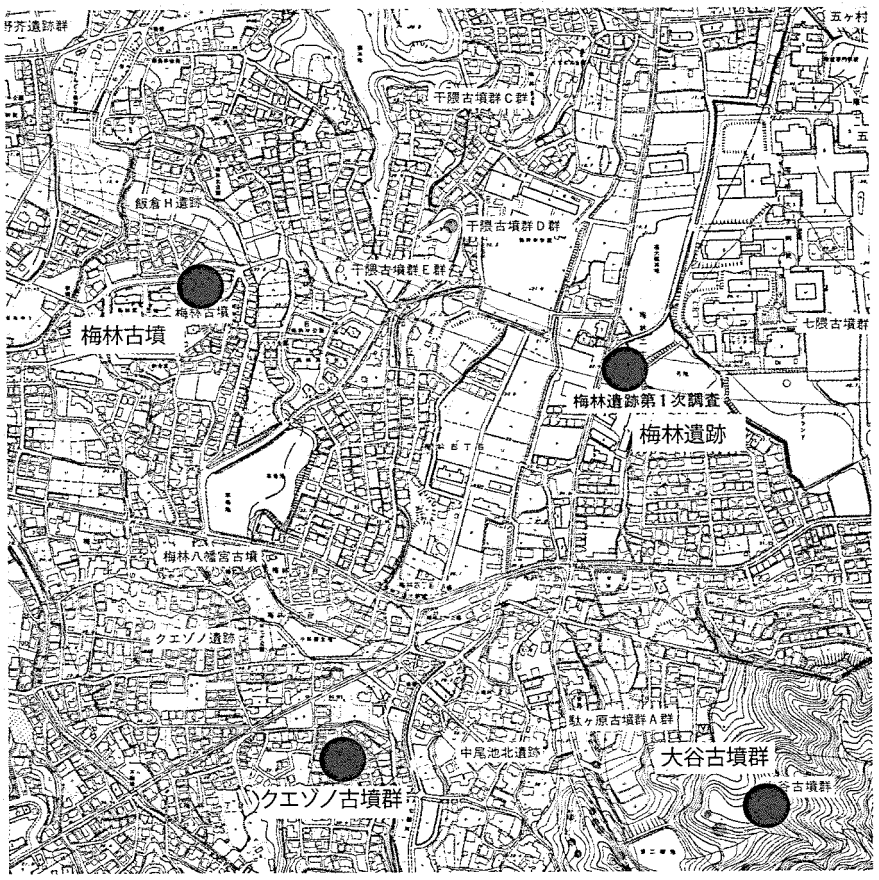
第164図　福岡市西区吉武遺跡出土土器等

土器を副葬した吉武S 17号墳（第163図2）が位置している。

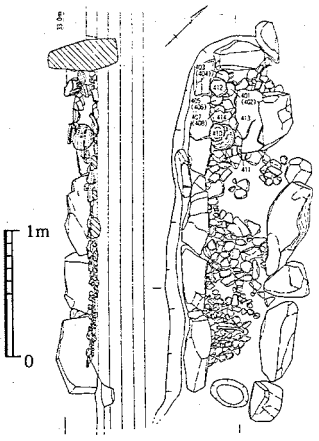
吉武S群では各種の渡来系資料が豊富であるが、北部、南西部、南東部の3群でそれぞれ様相を異にすることに注意する必要があるだろう。なお、南西部の古墳群中には小児棺と推測される同時期の甕棺墓（第164図1）がいくつか検出されているが、当該期の古墳においては一般的には甕棺が少ないため、注意をひく。

これら古墳群に挟まれた集落域でも渡来系資料が豊富である〔山崎編 1986、濱石編 1989、加藤 2005〕。集落は掘立柱建物、竪穴住居跡、土坑等の遺構で構成されているが、この時期の他の集落に比べ、土坑の多いことが特異である。出土品中の渡来系遺物としては、朝鮮半島系軟質土器があげられ、平底鉢、甑、鍋、鳥足文風タタキの壺、蓋等器種が豊富である。そのうち、例えば、9次SK201号土坑（第164図4）〔加藤 2005〕から出土した鍋、大形の鉢、ジョッキ形土器等の軟質土器群などは好例となろう。共伴する須恵器はTK208～TK23の時期である。また、1次SX36〔山崎編 1986〕及び5次SK05等では軟質の平底鉢とそれを模倣した土師器小形甕（第164図7）が共伴している。これらの集落、墳墓の様相から考えてかなりの数の渡来人が居住していたことは間違いないであろう。

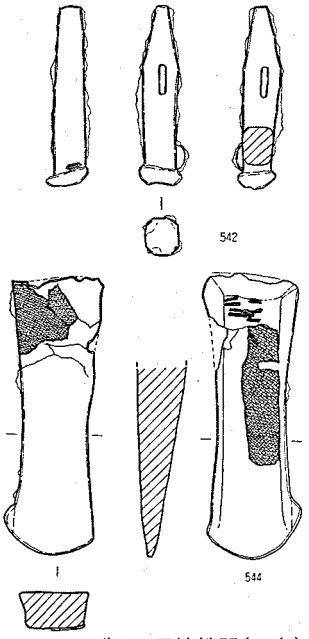
なお、出土した陶質土器の属性の色濃い初期須恵器は陶邑産初期須恵器あるいは北部九州の朝倉窯とも異質である。例えば、吉武S 27号墳周溝出土の高杯杯部片（第163図5）は口縁部の内傾



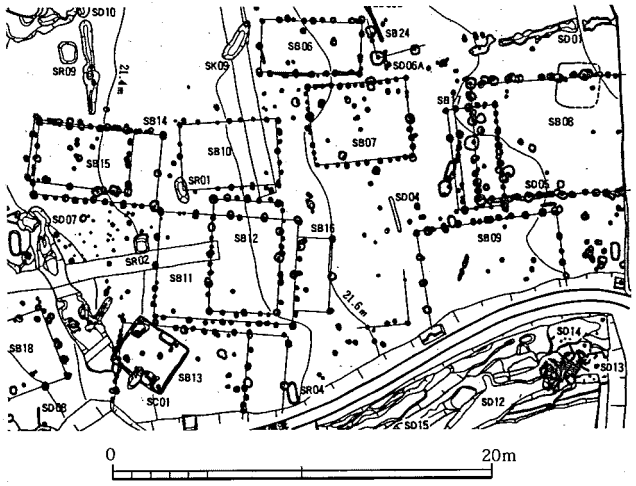
1．福岡市梅林遺跡周辺地形図(1／10000)



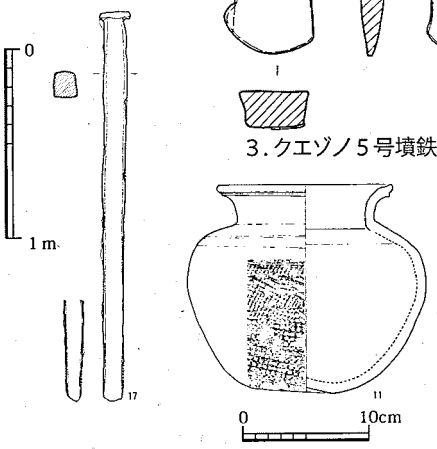
2．クエゾノ4号墳石室(1／60)



3．クエゾノ5号墳鉄器(1／4)



4．梅林遺跡1次調査建物群(一部、1／400)



5．梅林古墳出土遺物(土器1／6、鉄器1／4)

第165図　福岡市城南区梅林遺跡周辺の渡来系遺構・遺物

など朝倉窯系初期須恵器の古式のものと類似しているが、脚杯接合部からやや下がった所に突帯が巡り、その上に透かしを施さない点は朝倉窯や陶邑産には見られない属性である。また、吉武S 28号墳周溝出土の大形器台（第163図7）は口縁部内面に突帯を巡らしており、他地域の初期須恵器ではあまり例がない。直口に仕上げる壺(第164図1）も特徴的な器種である。陶邑産に酷似する蓋杯等一般的な須恵器の器種との共伴を見ると、これらの特徴的な須恵器はやや新しい時期まで古

い属性を留めているようにもとれる。

これらの初期須恵器については、朝鮮半島の類例を検索するとともに、胎土分析等科学的な産地推定の進展をまつ必要もあるが、ここでは未知の初期須恵器窯が近辺に存在したと考えたい。古い属性が新しい時期まで残存したのではという推測が前提となるが、少なくとも朝倉窯との出現と大差ない頃から、陶邑編年のTK47型式までくらいは渡来人を中心とした工人により、特徴的な須恵器が生産されたのではないかと考えておきたい。

また、吉武遺跡では6世紀中ごろ～後半にまで下ると思われる陶質土器も出土している。例えば吉武S9号墳出土の短脚高杯（第164図6）、吉武古墳群試掘出土の大加耶系壺（第164図6）などがそうである。また、金武古墳群吉武G群〔荒牧1998〕にも6世紀後半の新羅系脚付壺の例がある。したがって、吉武遺跡周辺は5世紀中頃から6世紀後半にかけて朝鮮半島の複数の地域からの渡来人が居住するとともに、複数の地域との交易の拠点として機能していたと推測しておきたい。

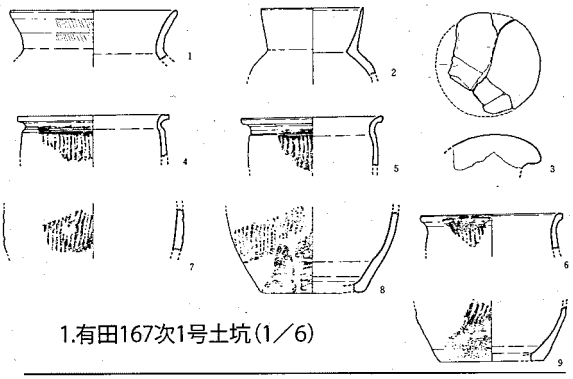
吉武遺跡と並び注目される遺跡としては、早良平野の東部、梅林遺跡周辺がある（第165図1）。梅林遺跡の1次調査〔井澤2000〕では、狭く不均等な間隔で柱穴の並んだ特異な建物跡群が群集して検出されている（第165図4）。柱穴間には溝は検出されていないが、大壁建物のように壁立建物となるのではなかろうか。また、梅林遺跡4次調査〔井澤編2003〕では、形態は確定していないがオンドル風に壁に沿って煙道が巡ると考えられる竈を付設した2号竪穴住居跡などが検出されている。建物跡、竪穴住居跡とも6世紀後半を中心とするもので、他の集落遺跡にない特徴的な遺構と言える。

梅林遺跡の西南に位置するクエゾノ遺跡は、4世紀末～5世紀初の陶質土器を出土した1号墳、TK47型式の須恵器を副葬し、鋳造鉄斧・鍛冶工具（第165図3）を出土した5号墳の存在から渡来的な色彩の強い古墳群と理解されてきた。また、同古墳群内のクエゾノ4号墳では長さ2.4m、幅0.45mの竪穴式石室を主体部とし、TK23型式頃の須恵器・土師器が副葬されていた（第165図4）。竪穴式石室は石棺系竪穴式石室と呼ばれる4世紀後葉以降の北部九州で盛行する小形の竪穴式石室と比べてやや、長大である。石室内に土器を副葬することから考えて、朝鮮半島加耶地域の竪穴式石槨の影響を受けているのではなかろうか。このようなことから考えて、クエゾノ古墳群は朝鮮半島からの渡来人の古墳群となる可能性が高いが、梅林遺跡の集落と比べると、時期的に先行する点は課題を残している。

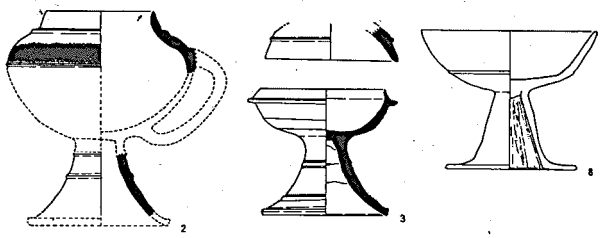
また、全長27mのやや小形の前方後円墳である梅林古墳〔濱石他1991〕からは鏨、鳥足文風のタタキを施した硬質の土器が出土している（第165図5）。なお、土器はタタキ文様、形態から考えて全羅南道系の壺と考えられるが、口縁部は須恵器の属性を取り入れているような感もある。古墳はTK47型式頃の築造と考えられ、前述したクエゾノ古墳群と平行する時期にある。クエゾノ古墳群を築造した集団を統括した首長墓と考えられよう。

この他に早良平野では朝鮮半島系土器を出土する集落遺跡が多数、所在する。中でも、平野のほぼ中央に位置する有田・小田部遺跡では軟質土器・陶質土器が集中的に分布している。例えば、有田遺跡167次1号土坑〔杉山他1995〕では5世紀中頃～後半の土師器と軟質土器平底鉢がまとまって出土し、同遺構では土製無文タタキ当具も共伴する（第166図1）。軟質土器平底鉢の作成に使用されたものとすれば、渡来人が遺跡内で土器を生産していたことになる。

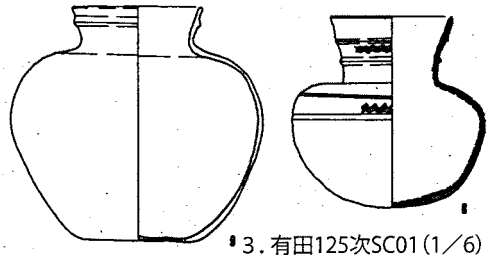
また、6次SC02〔山崎・井澤編1994〕からは加耶系把手脚付短頸壺、高杯（第166図2）、181次掘立柱建物跡〔菅波編1998〕からは陶質土器高杯（第166図4）が出土している。このう



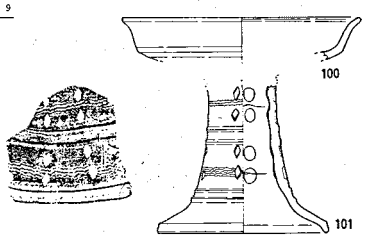
1.有田167次1号土坑(1／6)



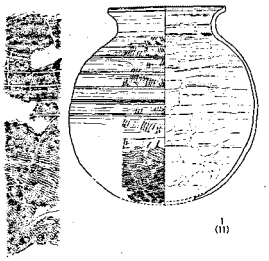
2.有田小田部6次SC02上層(1／6)



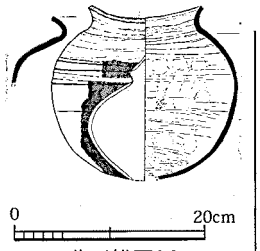
3．有田125次SC01(1／6)



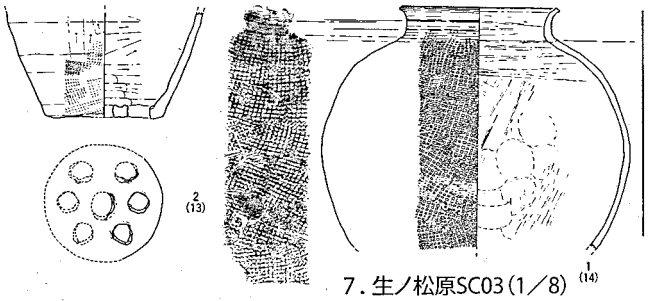
4．有田181次掘立柱建物(1／6)



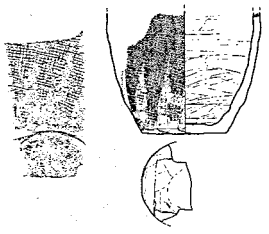
5．生ノ松原SC02(1／8)



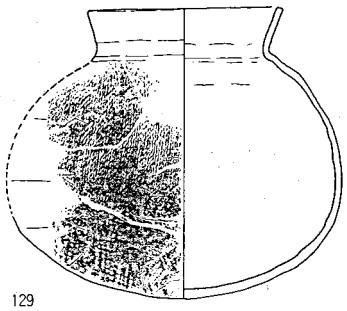
6．生ノ松原SC03
(1／8)



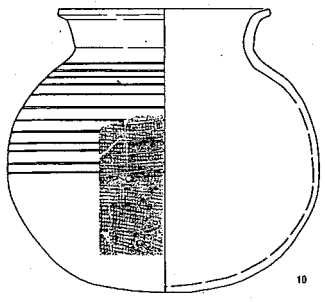
7．生ノ松原SC03(1／8)



8．生ノ松原SC07(1／8)

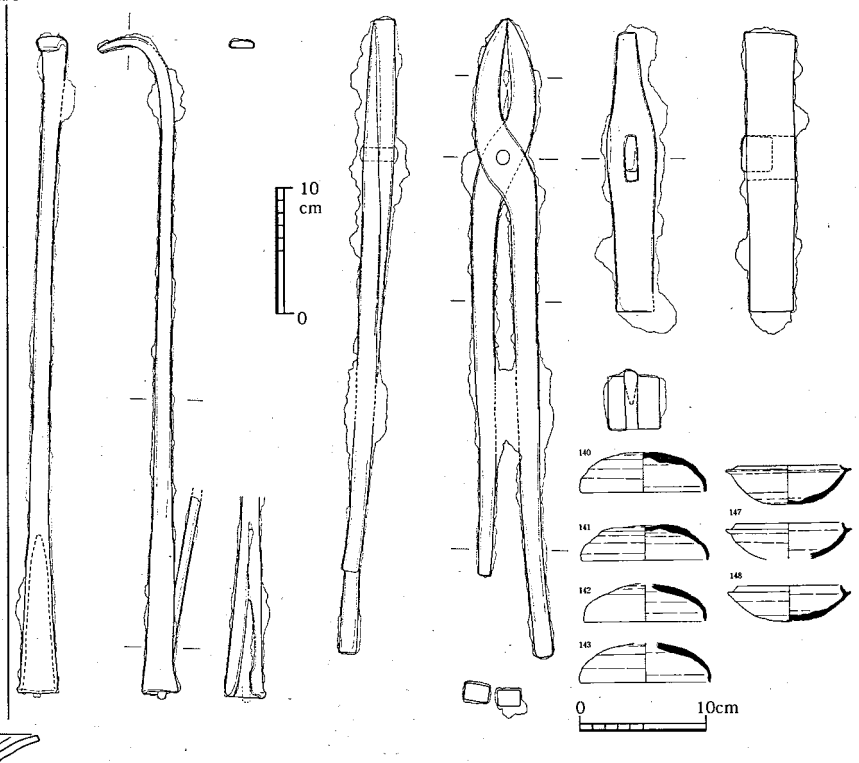


9．次郎丸遺跡３次(1／6)





10．今宿３次3号土壙(1／6)



11．広石南A4号墳(鉄器1／4、土器1／6)

第166図　早良平野周辺の渡来系遺物等

ち6次SC02把手脚杯短頸壺は慶尚南道金海付近から、181次陶質土器高杯は慶尚南道咸安付近からの舶載品と推測される。また、125次SC01ではTK73～TK216型式の須恵器とともにやや瓦質に近い平底壺が出土している（第166図3）。この他147次〔山崎編1995〕・181次〔菅波編1998〕・下水道J08地点〔長家1991〕などで軟質土器の例がある。

有田遺跡での資料はそれぞれは断片的であるが、各調査の範囲が狭小であることを加味するならば、高密度に分布していると解釈すべきと思われ、その時期も5世紀中頃～後半を中心とするようである。ただ、142・143次SK22ではTK43～TK209型式の須恵器と共伴して、把手に深い切り込みのある軟質土器の影響を受けた甑が出土しており、6世紀後半にも朝鮮半島との交易、人の移動が継続していた可能性を考えておきたい。なお、有田遺跡に西に隣接する原深町遺跡〔飛高他1981〕でも軟質土器平底鉢の例がある。

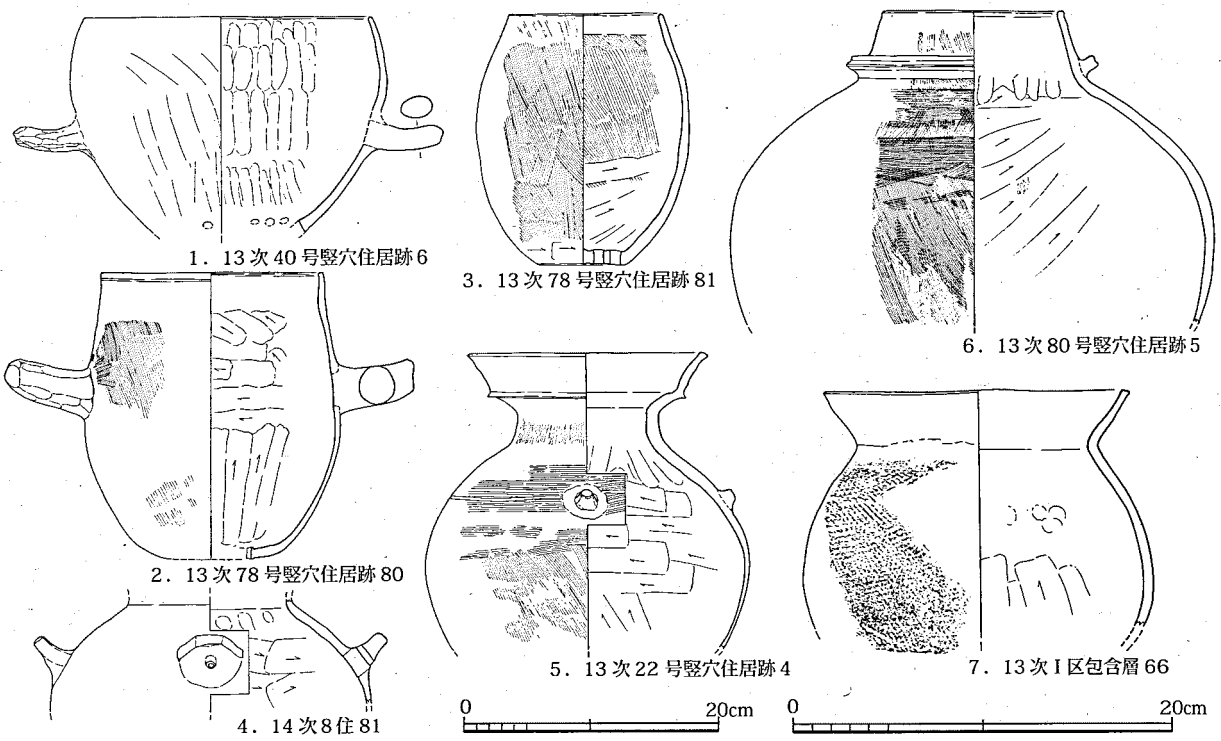
早良平野の北西端、博多湾に面した砂丘上に立地する生の松原遺跡〔池田他2000〕でも陶質土器、軟質土器の資料が集中する（第166図5～8）。中でもSC03は住居跡に竈を設置した可能性があり、煮沸具のセットが軟質土器のみで構成される特異な遺構である。この他に5世紀前葉頃土師器を出土した次郎丸遺跡3次10号溝〔中村1996〕からは完形の縄蓆文タタキ瓦質土器壺（第166図9）などが出土している。

なお、早良平野には古代～中世の製鉄関係の遺跡が多く、一部には古墳時代にまで遡ると想定されるものがある。前述したクエゾノ遺跡では6世紀末を上限とする箱形炉が検出され、多量の鉄滓が出土している。また、早良平野の西部、吉武遺跡群の北側に位置する広石遺跡C地点では6～7世紀の竪穴住居跡38棟とあわせて、同時期の掘立柱建物21棟、焼土坑30基が検出され、多量の鉄滓が出土した。このような掘立柱建物の比率の高さも考慮するならば、製鉄に関連した特殊な集落と評価すべきであろう〔下村他1990〕。広石遺跡に隣接する広石南古墳群A群4号墳〔屋山・中村編1999〕はTK43～TK209型式の古墳と推測されるが、良好な鍛冶工具のセットが副葬されていた（第166図11）。梅林遺跡の南西に位置する大谷古墳群〔緒方編1972、山崎編1985〕では横穴式石室内に鉄滓を副葬する古墳が多く、梅林遺跡・クエゾノ遺跡周辺の製鉄集団の奥津城的性格が想像される。

以上のように早良平野には、西新町以外にも、渡来人の足跡が濃密に残された遺跡が多い。このうち吉武遺跡群、有田遺跡群は5～6世紀にかけて、渡来人に関係した資料が継続的に存在している。このような継続性は、古墳時代初頭頃に始まり、古墳時代前期を通じて朝鮮半島との交通の窓口となっていた西新町遺跡と類似していると言えよう。推測をすすめれば、西新町遺跡の消滅以後、これらの遺跡の集団が、早良平野さらには北部九州の各集団と朝鮮半島との交通の窓口として台頭してきたとも考えられるだろう。

一方、西新町遺跡とそれ以降の渡来人関係資料を残す各遺跡との間には、性質の違いも指摘できる。特に注目されるのが、梅林遺跡や吉武遺跡群において鉄生産、鉄器生産という、渡来人のもたらした生産技術との深いかかわりが認められる点である。また、梅林遺跡、吉武遺跡群で渡来人関係資料が増加する古墳時代中期～後期にかけては、上述したように早良平野及びその周辺一円で、鉄生産に関係する資料が飛躍的に増加することも注意される。

西新町遺跡においても、朝鮮半島からもたらされた技術を用いて、ガラス小玉、ガラス勾玉を生産していたことが明らかである。しかしながら、集落全域においてガラス等、当時の最先端の文物の生産を展開していたわけではない。また、周辺の集落へカマド、ガラス玉生産等の渡来人のもた



第167図　西新町遺跡における朝鮮半島系土器の模倣土器・折衷土器（7は1／4、他は1／6）

らした技術・文化が、広く波及した様相も看取できない。このような違いについては、それぞれの時期における渡来人と在地集団との関係の違いを示唆するものではなかろうか。

また、吉武遺跡の墓地となる金武古墳群吉武S群、クエゾノ遺跡では渡来人が埋葬された可能性を指摘できる古墳が存在する。一方、西新町遺跡の墓地となる藤崎遺跡の古墳群では、土器を副葬したような墓は検出されていない。藤崎遺跡では三角縁二神二馬車鏡、素環頭大刀を副葬した盟主的な古墳である3次6号古墳、三角縁盤龍鏡を出土した第32次調査地点方形周溝墓を中心に、15基近くの古墳が検出されているが、主体部は木棺墓等、在地の埋葬施設とほぼ共通している。したがって、西新町遺跡は渡来人の存在を十分に考えてよいものの、その墓地は今のところ発見されていないと言えるだろう。

（4）西新町遺跡における渡来人に関係する資料の様相

西新町遺跡において、渡来人の存在を示唆する朝鮮半島との関係の深い資料としては竈付竪穴住居跡と各種の朝鮮半島形土器がある。ただ、前者においては朝鮮半島に渡海した当地の人間が情報を持ち帰って構築したという可能性を否定した上で初めて資料として用いることができる。同じく、朝鮮半島系土器については、朝鮮半島へ渡海した当地の人間が交換・交易等の手段によって入手して持ち込んだということも考えられる。

しかしながら第1節で検討したように、朝鮮半島系土器の中にはこの地で朝鮮半島からの渡来人の手で製作された可能性のあるものが存在する。そこで、朝鮮半島系土器の模倣、朝鮮半島系土器と土師器との折衷土器などの様相から、渡来人と在地集団との関係の一端について考えてみたい。

朝鮮半島系土器を代表するものには甑がある。このうち軟質でもやや堅緻な焼成で胎土の精良な12次22号竪穴住居跡9、12次89号竪穴住居跡89、やや瓦質の13次42号竪穴住居跡7は朝鮮

半島からの舶載品としてほぼ間違いない。一方、13次48号竪穴住居跡48、13号78号竪穴住居跡80・81（第167図2・3）などはハケメで調整し、胎土等から見ても土師器の工人の手によるものである。また、13次40号竪穴住居跡6（第167図1）は外面板ナデ、内面ナデを施し、胎土は土師器と異ならないので、当遺跡近辺で焼成されたと考えられる。12次81号竪穴住居跡87甑は、ハケメが残らず、口縁端部の形態、胴部の把手割り付け線の存在など朝鮮半島の製作技法を忠実にとっているが、胎土・焼成は土師器との区別が付かない。また、布留系甕と同様の器形をつくりながら底部に焼成前（乾燥前）に大きな穿孔を施し、甑とする17次6号竪穴住居跡39のような例もある。

このうちハケメで仕上げたものも、把手の接合は搬入品と同様に孔を開けてそとから粘土棒を差し込んで成形する。したがって、朝鮮半島における甑の製作技法を有る程度知りえたものと思われる。

甑以外の折衷土器で注目されるのは、13次22号竪穴住居跡4（第167図5）、14次8号竪穴住居跡61（第167図4）の両耳付壺である。これは朝鮮半島の両耳付壺の一部の属性を、土師器に取り入れて製作したものと言える。また、久住猛雄氏は藤崎遺跡32次2号方形周溝墓周溝から出土した、西新町遺跡13次80号竪穴住居跡5（第167図5）のような頸部に高い突帯状の突出をもつ土師器壺について、全羅南道系の二重口縁壺の模倣品と指摘している〔池田他2004〕。

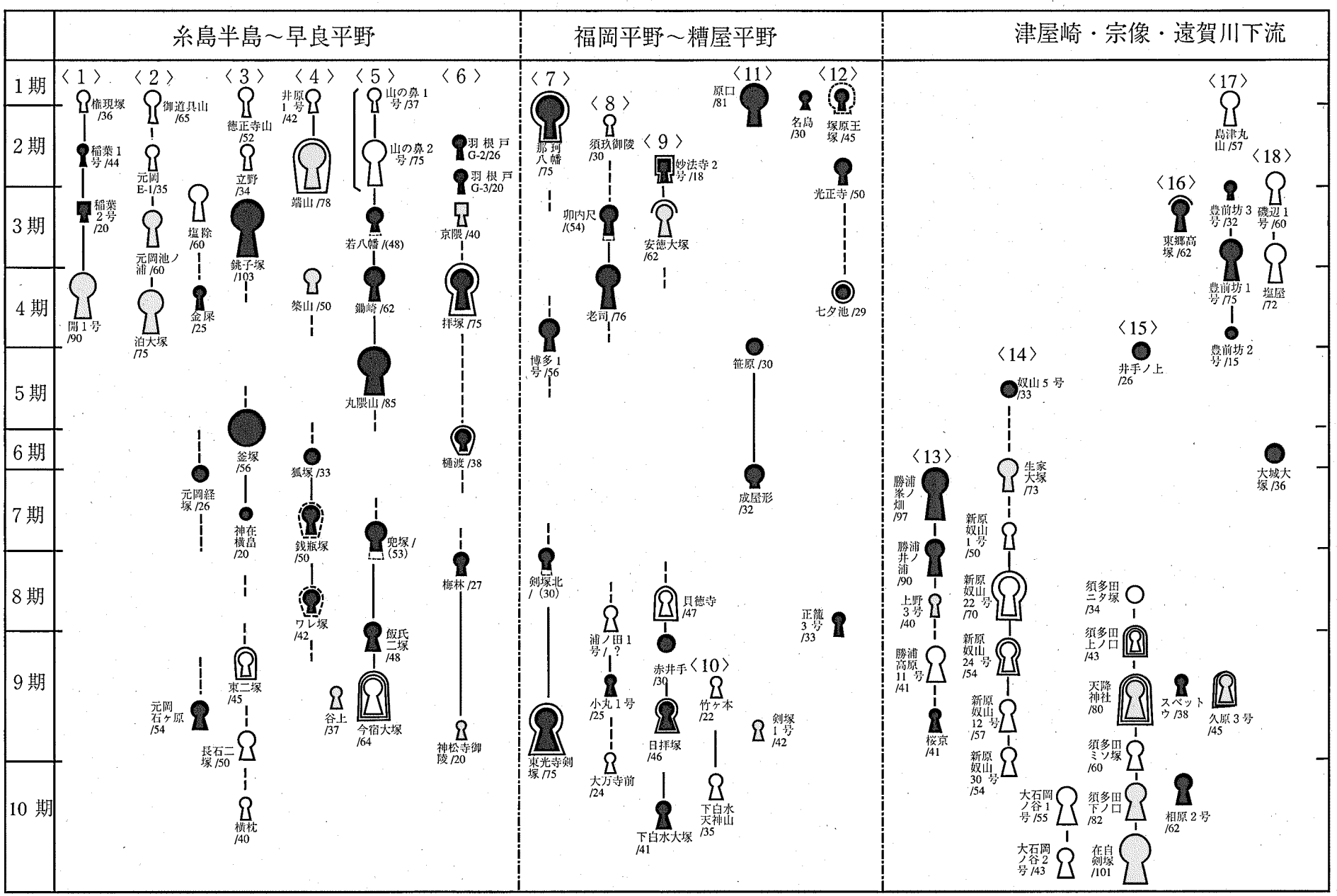
このほか17次21号竪穴住居跡8・9のような小形の甕は、法量が朝鮮半島系軟質平底鉢とほぼ一致するので、その代替品として製作された可能性もあるだろう。

以上のような折衷系の土器のうち、甑については、把手の作り方が朝鮮半島の製作技術を忠実に採り入れていることから考えて、朝鮮半島からの渡来人の指導のもとに製作した可能性が考えられる。また、耳付の壺については、セットになる蓋と壺とを紐で縛るという朝鮮半島における使用法が前提となった可能性が高い。このような使用法は渡来人の生活習慣によるものであり、渡来人からの依頼によって、在地の工人が製作したとも考えれよう。

ところで、西新町遺跡における竈においては、まれに竈にかけたような状態で土器が出土したり、竈の脇に煮炊きに使うために揃えた土器がそのまま出土することがある（例えば17次6号竪穴住居跡）。それらの土器は大半が土師器の甕などである。竈付竪穴住居跡で生活した集団の全てとは考えにくいにしても、その中に多くの渡来人がいたと仮定するのは無理がない。そこで、竈付住居に渡来人が生活すると仮定した場合、使用した土器には土師器が多数含まれることから、渡来人も在地の集団との交換などを通じて土師器を手に入れ、使用していたことになる。一方、胴部に小さな格子タタキを施した13次I区包含層66（第167図7）、17次7号竪穴住居跡86は布留系甕を意識しているが、口縁部等微細な形態において土師器と異なるので、渡来人が生産したものではないかと推測される。したがって、17次7号竪穴住居跡出土の両耳付甕のように、渡来人が自ら土器を製作することもあったと考えられるが、土師器工人に対して、甑等の必要な器形の製作を依頼することもあったのではなかろうか。その製品が上述した折衷、模倣土器の中に含まれていると解釈しておきたい。

（5）小結

本節で紹介したように、早良平野においては西新町遺跡のみならず、古墳時代を通じて、朝鮮半島からの渡来人の存在を物語る遺跡が豊富であり、北部九州の中でも特に傑出した地域と言える。



古墳時代筑前地域の首長墓系列（〈〉内番号は分布地図に対応、黒塗りは時期を限定できるもの、灰色は時期が前後する可能性のあるもの、白抜きは時期決定の根拠の弱いもの。〔は前後関係不詳の一群、－は連続的な関係を示す）

第168図　玄界灘沿岸地域における首長墓系列

そのような渡来人の存在は、政治的に有力な首長との結びつきを想定する誘惑にかられるが、早良平野は古墳時代を通じて、隣接する地域に比べると大形の前方後円墳等は少ない。

第168図は玄界灘沿岸部の筑前地域の首長墓を編年表として示したものである。横方向に首長墓系列を並べ、上下には『前方後円墳集成』に即した時期区分を示しているが、1～3期＝古墳時代前期、4～8期＝古墳時代中期、9・10＝古墳時代後期となる。

これによると、早良平野の西に隣接する糸島半島には首長墓系列〈1〉～〈4〉があり、前期には銚子塚古墳、前期末には開1号墳など100m前後の大形古墳が存在する。また、今宿平野では今宿古墳群とも称される前期以来の首長墓系列〈5〉があり、中期前半の丸隈山古墳、後期前半の今宿大塚古墳等の大形古墳も多い。

早良平野の東に隣接する福岡平野においては、早くから開発が進展して、古墳が消滅した恐れもあり、首長墓の系列的な築造はうかがえない。ただ、首長墓の系列も〈7〉、〈8〉、〈9〉のように複数存在する。また、古墳時代初頭の那珂八幡宮古墳は、同時期の玄界灘沿岸において、最大級の古墳と評価することができる。

これに対して早良平野〈6〉は中期前半に全長80m近い大形前方後円墳拝塚古墳が平野の中央部に構築されるが、前期、後期においては隣接する諸地域に比べ、首長墓の規模は小さい。また、継続的な築造が認められず、前期から後期まで一貫した首長墓系列の存在は認められない。このような傑出した首長権力の存在がうかがえない早良平野において、前期には西新町遺跡、中期～後期には有田遺跡、吉武遺跡群、梅林遺跡周辺などの渡来人の集中する集落が形成された事実をどう解釈するかは大きな課題であろう。

ところで玄界灘沿岸域の古墳の展開において一つの画期となるのが、福岡県福津市津屋崎における有力首長墓系列（第168図の〈13〉、〈14〉、〈15〉）の出現である。この津屋崎古墳群とも呼ばれる首長墓系列は玄界灘に面した丘陵上に中期中ごろの時期に、突如として出現するような感がある。また、同じ頃、宗像沖ノ島の祭祀が本格化するので、沖ノ島祭祀及び朝鮮半島への海上交通と深く結びついた首長墓系列と評価されている。

津屋崎古墳群周辺では首長墓系列の出現とほぼ時を同じくして、朝鮮半島系土器を出土する集落があらわれるようになり、渡来人の存在を十分に推定することができる。この渡来人については、早良平野の渡来人とは異なり、有力な首長の麾下にあった集団と理解することができるだろう。

西新町遺跡を初めとする早良平野の渡来人の集団編成の特質については、今後、これら玄界灘沿岸域における渡来人の動向とその編成形態と比較することによってさらに解明が進むのではなかろうか。

本論の一部は第8回九州前方後円墳研究会（テーマ：2005年6月、九州における渡来人の受容と展開）において、神保公久氏・杉本岳史氏との連名で行った「筑前・筑後地域における渡来系の遺構・遺物」と題した発表の成果を含んでいる。また、発表及び本論の作成を通じて御教示をいただいた両氏に感謝申し上げます。

参考文献

亀田修一 1993「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』第30集（中）
亀田修一 2003「渡来人の考古学」『七隈史学』第4号
小林義彦 2003『今宿遺跡』2　福岡市埋蔵文化財調査報告書第738集

屋山洋・中村啓太郎編 1999『広石南古墳群 A 群』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 617 集
飛高憲雄・力武卓治 1981『原深町遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 71 集
中村啓太郎 1996『次郎丸遺跡』 I 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 468 集
池田祐司・久住猛雄 2000『JR 筑肥線複線化地内遺跡埋蔵文化財調査報告書』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 654 集
杉山富雄・屋山洋・松村道博 1995『都地遺跡』(4) 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 434 集
横山邦継 2003『吉武遺跡群』XV 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 775 集
加藤良彦編 2004『吉武遺跡群』XVI 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 831 集
山崎龍雄編 1986『吉武遺跡群』 I 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 127 集
濱石哲也編 1989『吉武遺跡群』IV 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 194 集
加藤良彦 2005『吉武遺跡群』XVII 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 864 集
荒牧宏行 1998『金武古墳群』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 579 集
濱石哲也・菅波正人・林田憲三 1991『梅林古墳』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 240 集
常松幹雄編 1995『クエゾノ遺跡』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 420 集
井澤洋一 2000『梅林遺跡』第 1 次調査 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 648 集
井澤洋一編 2003『梅林遺跡』第 4 次調査 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 781 集
濱石 哲也編 1989『吉武遺跡群』IV 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 194 集
菅波正人編 1998『有田・小田部』31 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 574 集
山崎達雄編 1995『有田・小田部』第 21 集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 426 集
山崎純男・井澤洋一編 1994『有田・小田部』第 19 集 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 377 集
長家伸 1991『有田・小田部 14 原遺跡 5』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 266 集
下村智・加藤良彦・山崎龍雄 1990『生松台』 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 226 集
緒方勉編 1972『大谷古墳群』 I 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 19 集
山崎純男 1985『大谷古墳群』 II 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 122 集
池田祐司・久住猛雄・澤田むつ代・中橋孝博・比佐陽一郎 2004『藤崎遺跡』15 福岡市埋蔵文化財調査報告書第 824 集

第5章　おわりに

本書では平成15年度に実施した、西新町遺跡17次調査の発掘調査について報告した。また、西新町遺跡では平成18年度にも修猷館高校改築に伴う発掘調査が予定されている。

本書は短時間で作製したために、多くの事実誤認や勉強不足による誤りがあるのではないかと考えている。本書についての誤りは全て執筆者の責任にあるが、平成18年度の発掘調査報告書において、それを受けて訂正を図りたいと考えているので、御批判をお願いしたい。

一連の修猷館高校改築事業に伴う発掘調査については、福岡県教育委員会では随時、報告書を刊行してきたが、修猷館高校の改築に伴う発掘調査予定地も残すところが少なくなってきた。担当者がそれぞれ、各報告書においてその成果と課題についてまとめてきたが、これまで刊行した報告書についても、御批判もふくめ、先学諸氏から貴重な御教示を頂いている。報告書の最終年度には、修猷館高校の調査と西新町遺跡の全体像について包括的な見解を提示する必要があると思うので、これまでの担当者で協議を重ね、それに向けて検討を進めていきたい。

また、これまで整理の進捗にあわせ、速報的に出土品の一部を九州歴史資料館に展示をしてきたが、担当職員それぞれが出土遺物の活用について十二分に努力したとは言えない状況であった。しかしながら、最近、出土品の借用、見学について問い合わせがすこしずつ増えている。これを契機に、担当職員一同も、多くの方に出土品を目にし、手に触れていただくような機会を積極的につくるよう努力していきたいと考えている。

最後に発掘調査と報告書の作成にかかわった全ての皆様に感謝申し上げ、おわりとしたい。

図　　版



1．1区遠景(南西から)



2．1区全景(西から)



3．1区東壁土層(北西から)

図版２



１．１区全景(南から)



２．１Ｂ区全景(東から)



３．２区全景(北から)



1．3区近世遺構全景(南西から)



2．2区西壁土層(北から)



3．3区北部近世遺構全景(西から)

図版4



1．3区近世遺構全景(西から)



2．3区近世遺構全景(東から)



3．3区北部近世遺構全景(東から)



1．3区古墳時代遺構全景(西から)



2．3区南東隅近世遺構(西から)



3．1B区・3区古墳時代遺構全景(南西から)

図版6



1．3区古墳時代遺構全景(南西から)



2．3区古墳時代遺構全景空中写真(上空から)



1．3区古墳時代遺構全景(北西から)



2．3区古墳時代遺構全景(北東から)



3．3区東端古墳時代遺構全景(北から)



4．3区西端古墳時代遺構全景(北から)

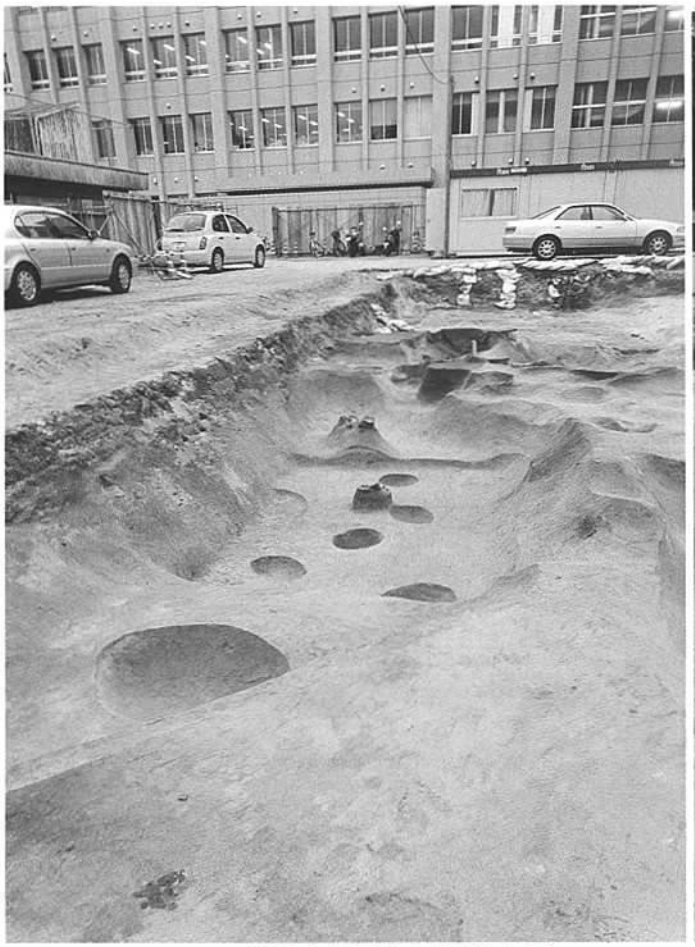
図版８



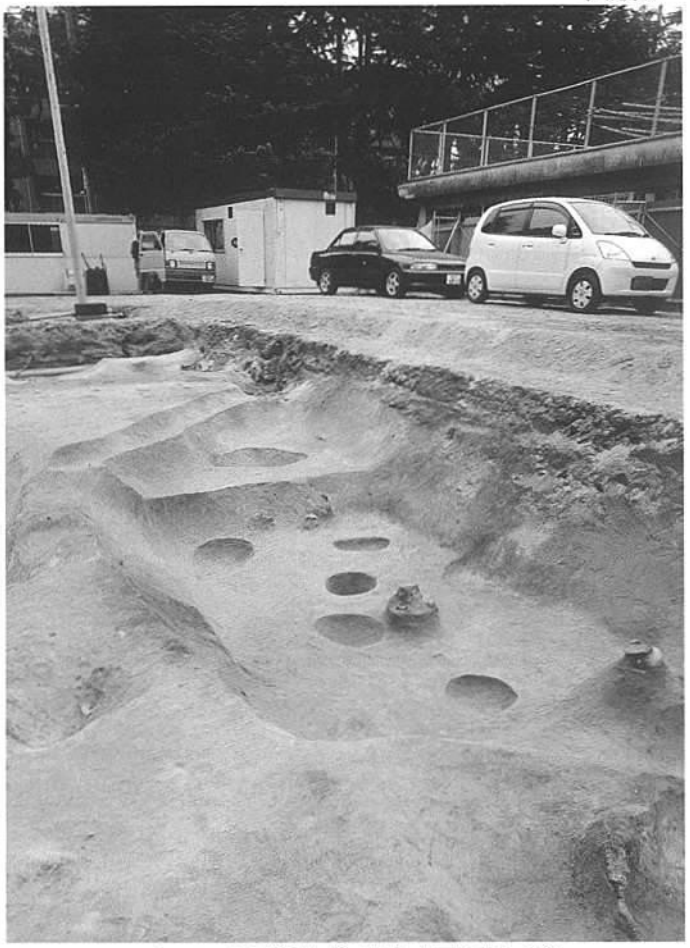
１．３区東部住居跡集中部（南から）



２．１～３号竪穴住居跡土層（北西から）



1．1・2号竪穴住居跡土層(北から)



2．1・3号竪穴住居跡土層(南から)



3．1号竪穴住居跡土器出土状況(南から)

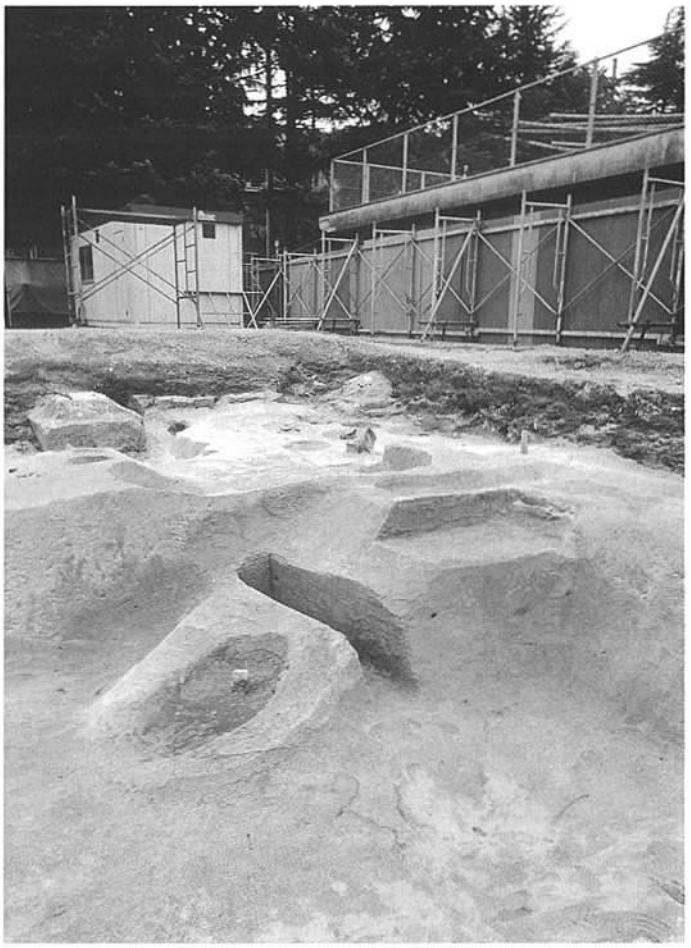


4．1号竪穴住居跡東部(南から)

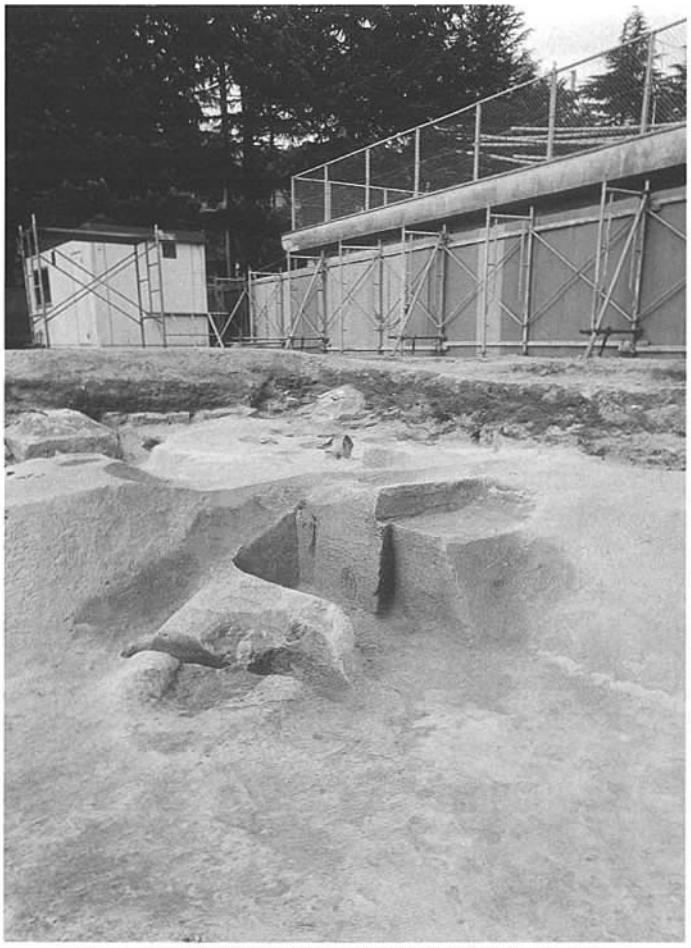
図版10



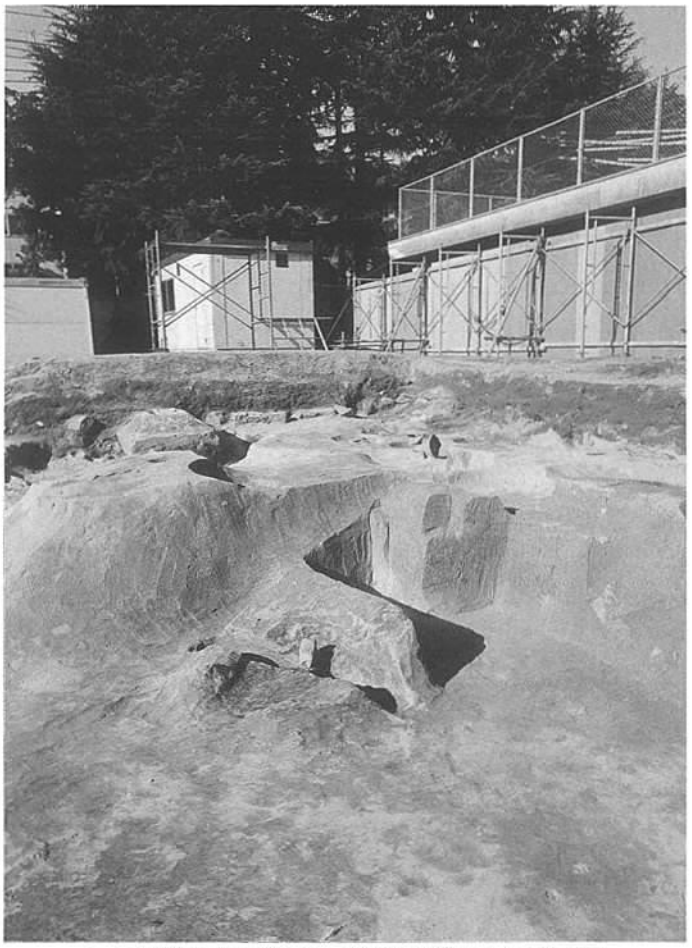
1．1号竪穴住居跡カマド発掘状況1（南から）



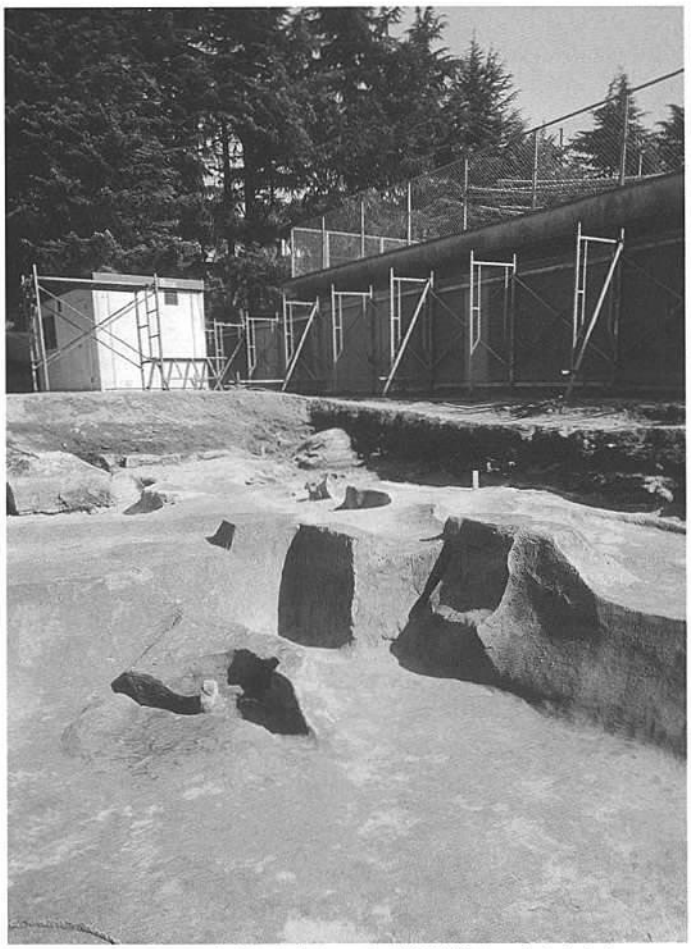
2．1号竪穴住居跡カマド発掘状況2（南から）



3．1号竪穴住居跡カマド発掘状況3（南から）



4．1号竪穴住居跡カマド発掘状況4（南から）



1．1号竪穴住居跡カマド発掘状況５（南から）



2．4号竪穴住居跡（南から）



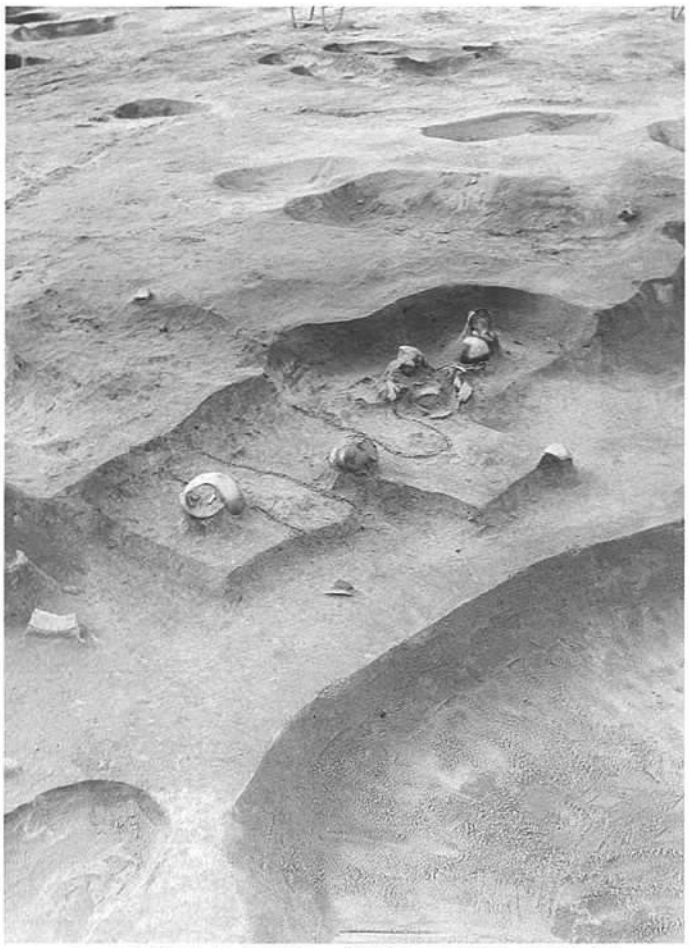
3．5・22号竪穴住居跡（南西から）



4．5号竪穴住居跡カマド（南東から）



1．6号竪穴住居跡全景(南から)



2．6号竪穴住居跡カマド燃焼部付近(南東から)



3．6号竪穴住居跡カマド支脚(南東から)



4．6号竪穴住居跡カマド煙道(東から)



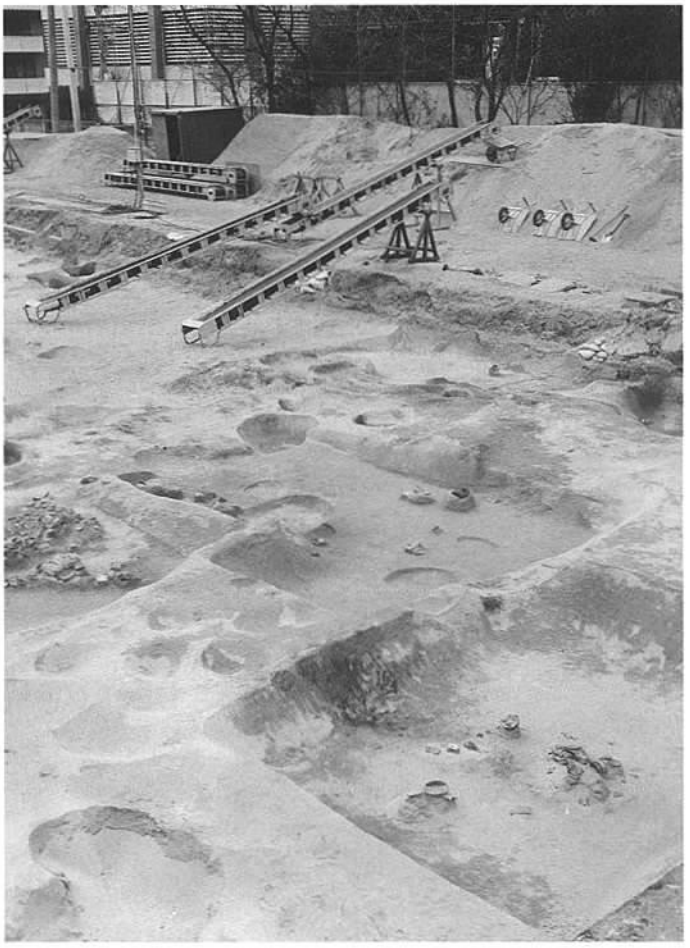
1．7号竪穴住居跡全景(東から)



2．7号竪穴住居跡土器出土状況(北西から)

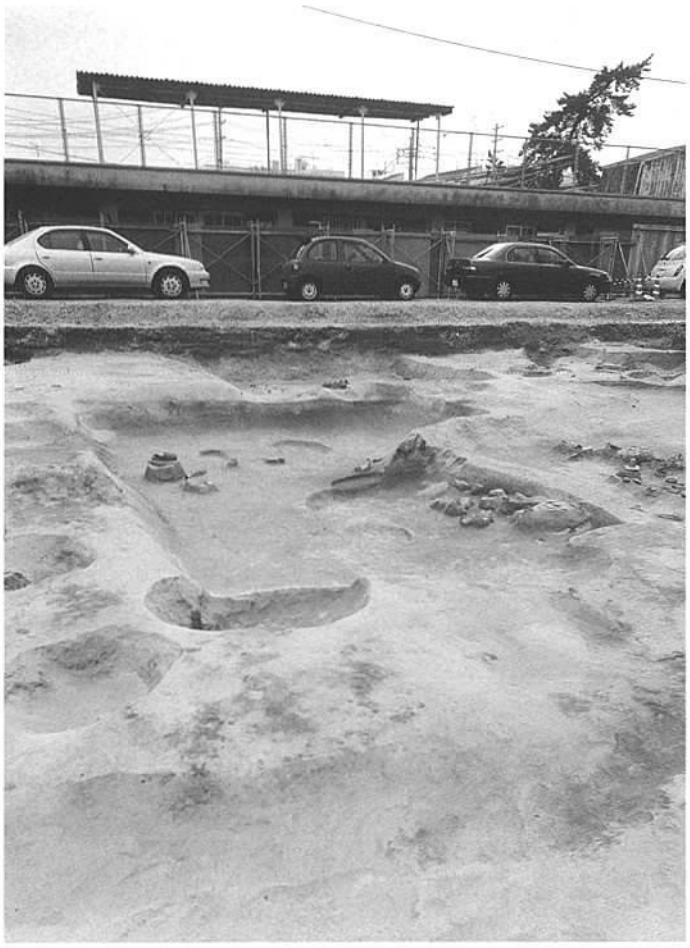


3．7号住居跡石錘出土状況



4．8号竪穴住居跡(南東から)

図版14



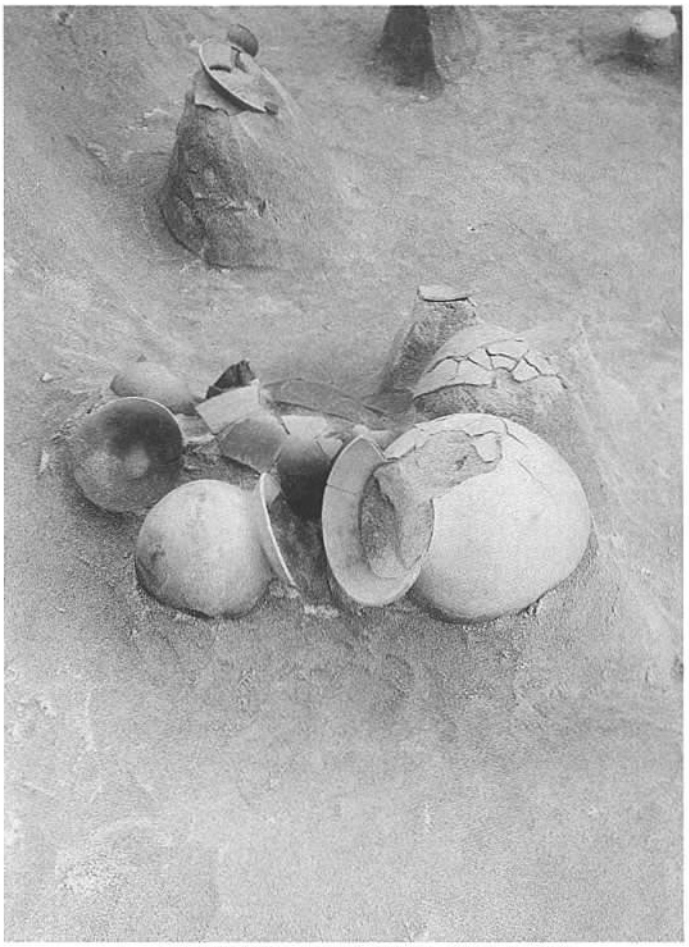
1．8号竪穴住居跡（西から）



2．9号竪穴住居跡（北西から）



3．9号竪穴住居跡土器出土状況（南西から）



1．9号竪穴住居跡北東部土器出土状況



2．10号竪穴住居跡南半部(北西から)

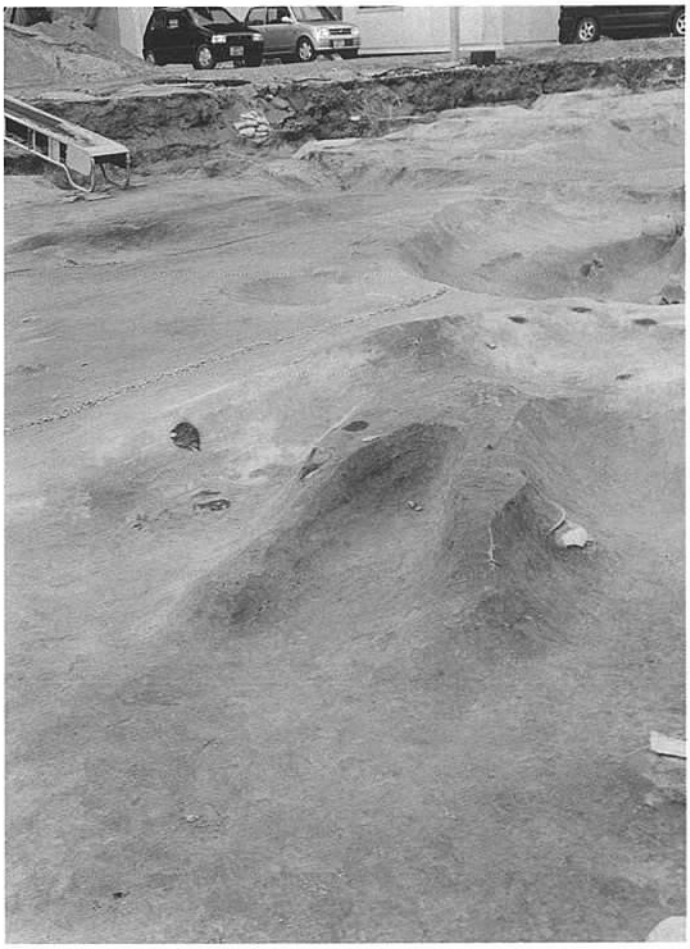


3．11号竪穴住居跡(南から)



4．12号竪穴住居跡(南から)

図版16



1．12号竪穴住居跡カマド（南西から）



2．12号竪穴住居跡カマド煙道断面（北から）



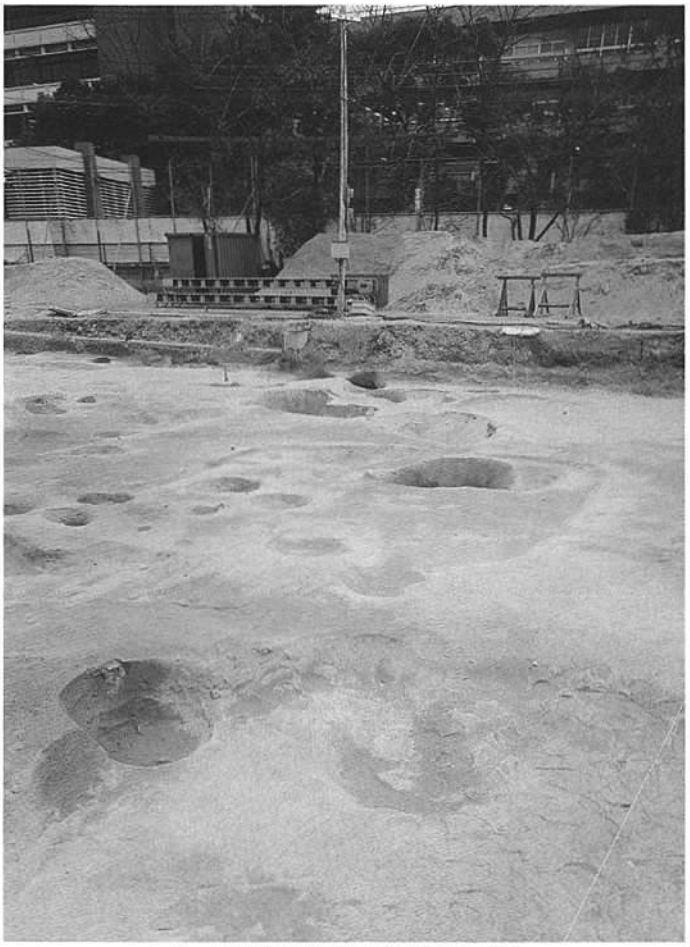
3．13号竪穴住居跡（南から）



4．13号竪穴住居跡カマド（南東から）



1．14号竪穴住居跡(南西から)



2．15号竪穴住居跡(南東から)



3．16号竪穴住居跡(南東から)

図版18



1．17号竪穴住居跡(北東から)



2．19号竪穴住居跡(南から)



3．20号竪穴住居跡(南東から)



4．21号竪穴住居跡(南東から)



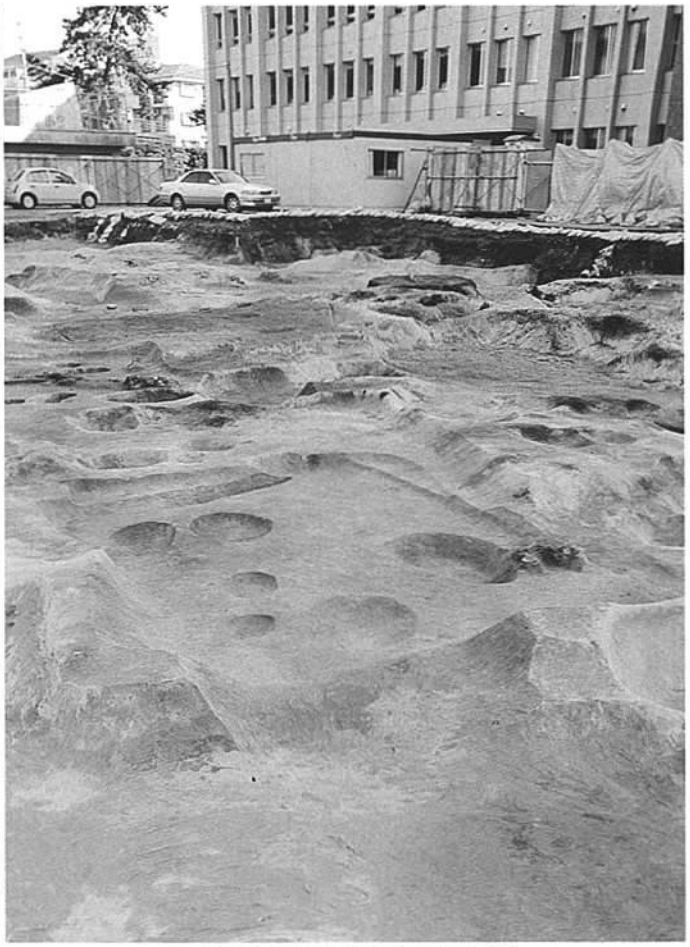
1．23号竪穴住居跡(東から)



2．24号竪穴住居跡(東から)

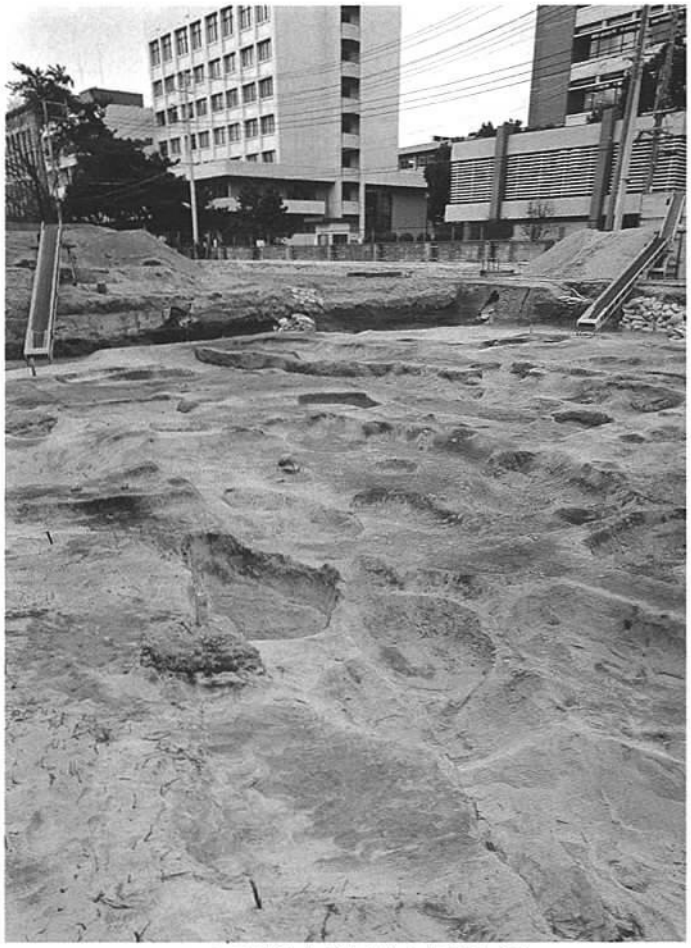


3．24号竪穴住居跡タコ壺出土状況(南西から)

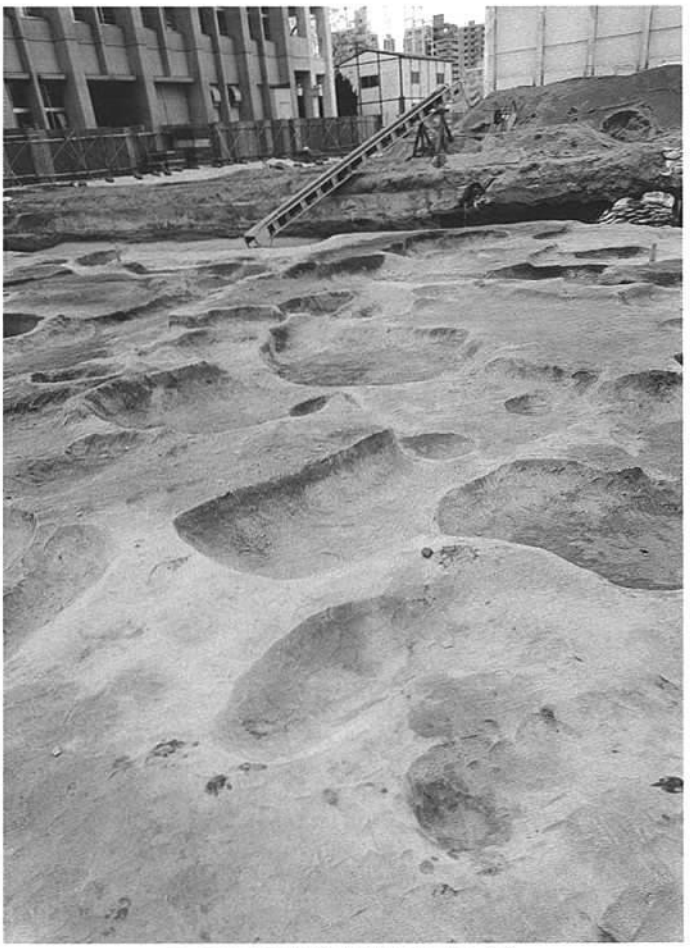


4．25号竪穴住居跡(北西から)

図版20



1．26号竪穴住居跡（南東から）



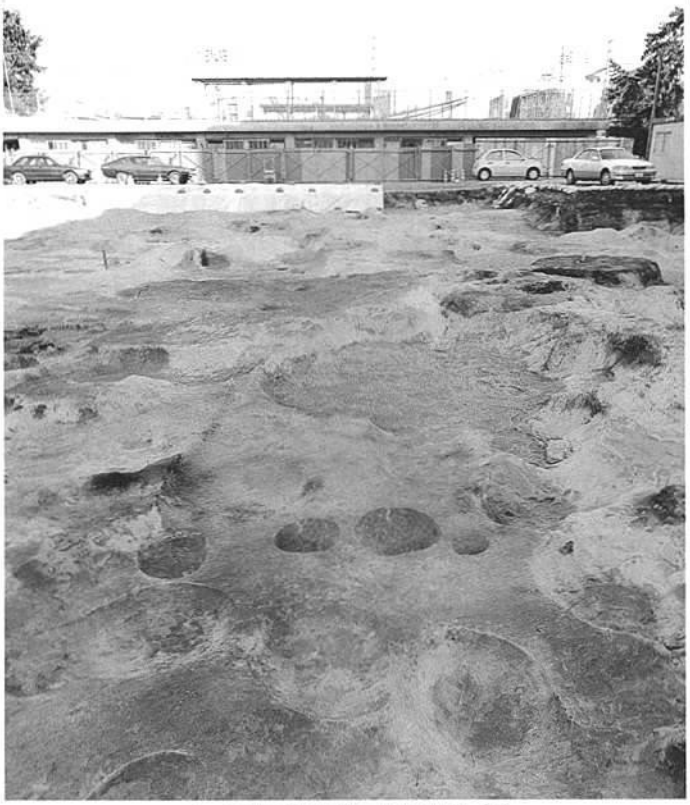
2．28号竪穴住居跡（北東から）



3．30号竪穴住居跡（北西から）



4．31号竪穴住居跡（南西から）



1．32号竪穴住居跡（西から）



2．33号竪穴住居跡（北東から）



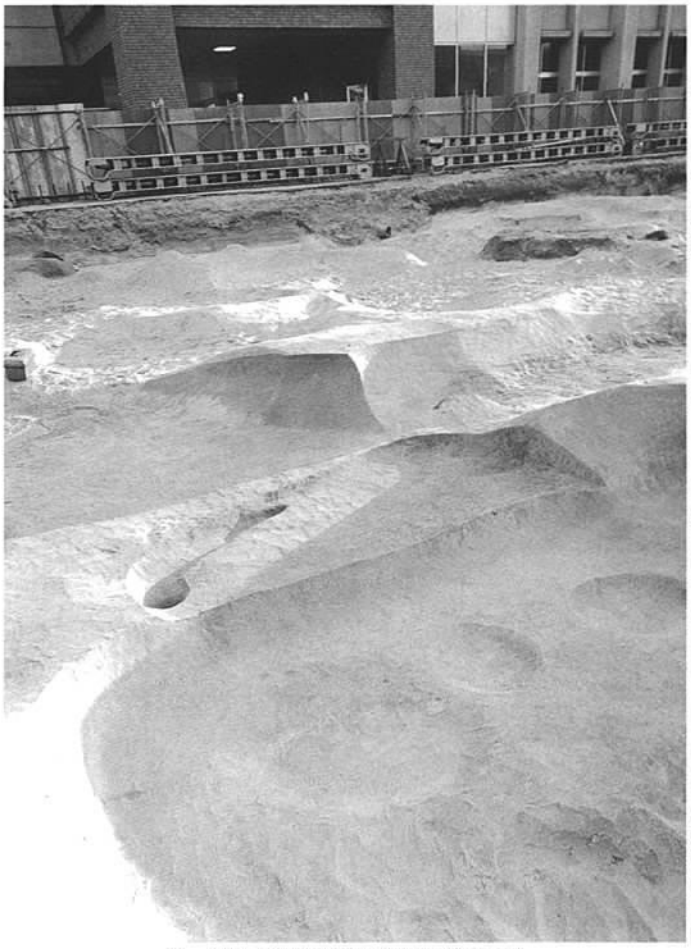
3．34号竪穴住居跡（北東から）



1．35号竪穴住居跡（東から）



2．35号竪穴住居跡カマド（南東から）



3．36号竪穴住居跡（北東から）



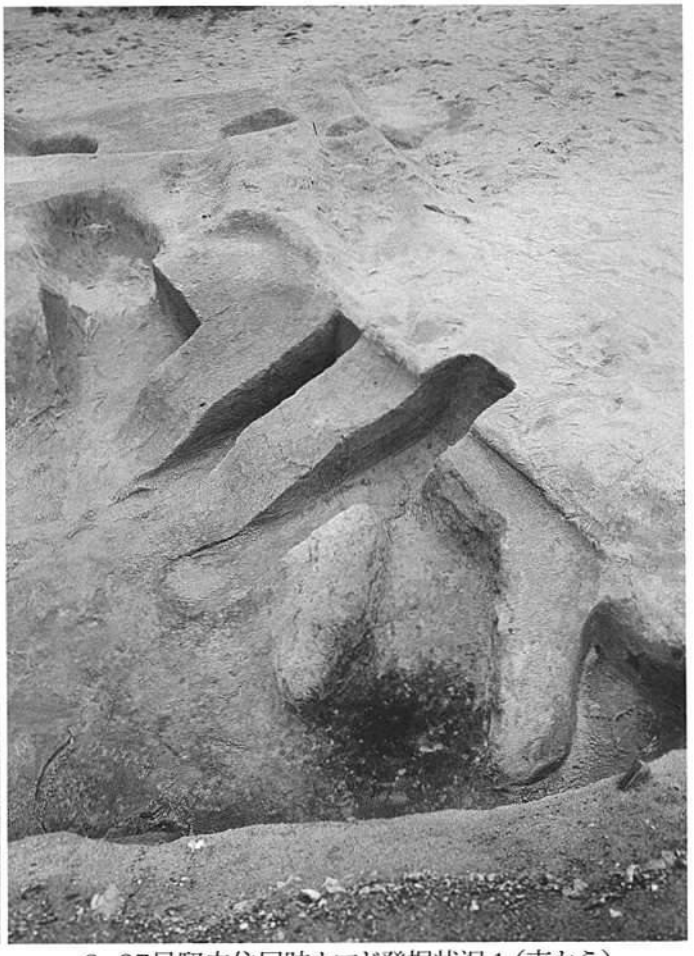
4．37・38号竪穴住居跡（東から）



1．37号竪穴住居跡(南西から)



2．37号竪穴住居跡土器出土状況(南から)

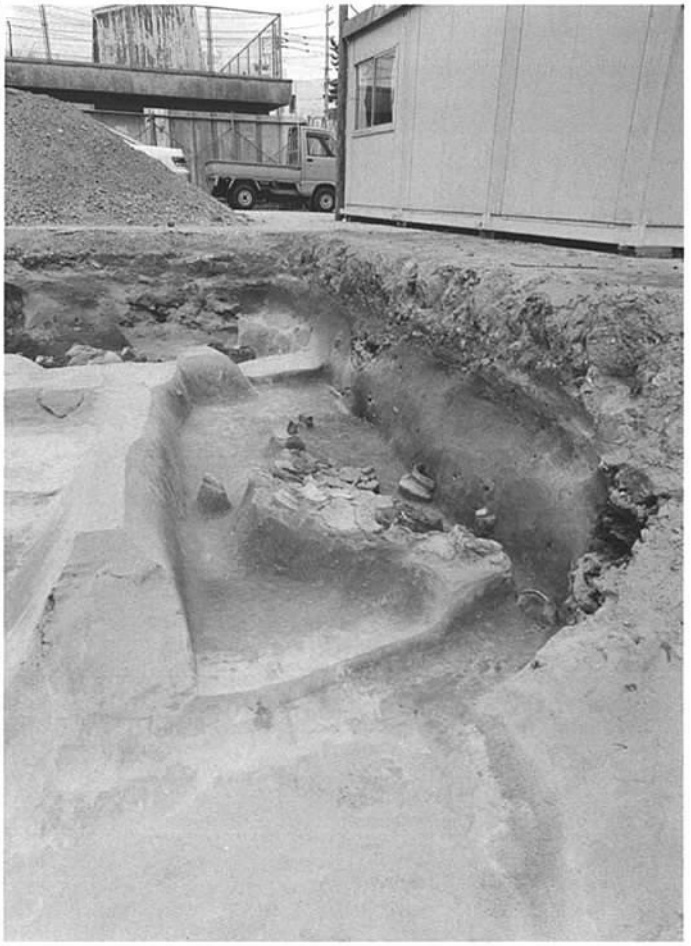


3．37号竪穴住居跡カマド発掘状況１(東から)

図版24



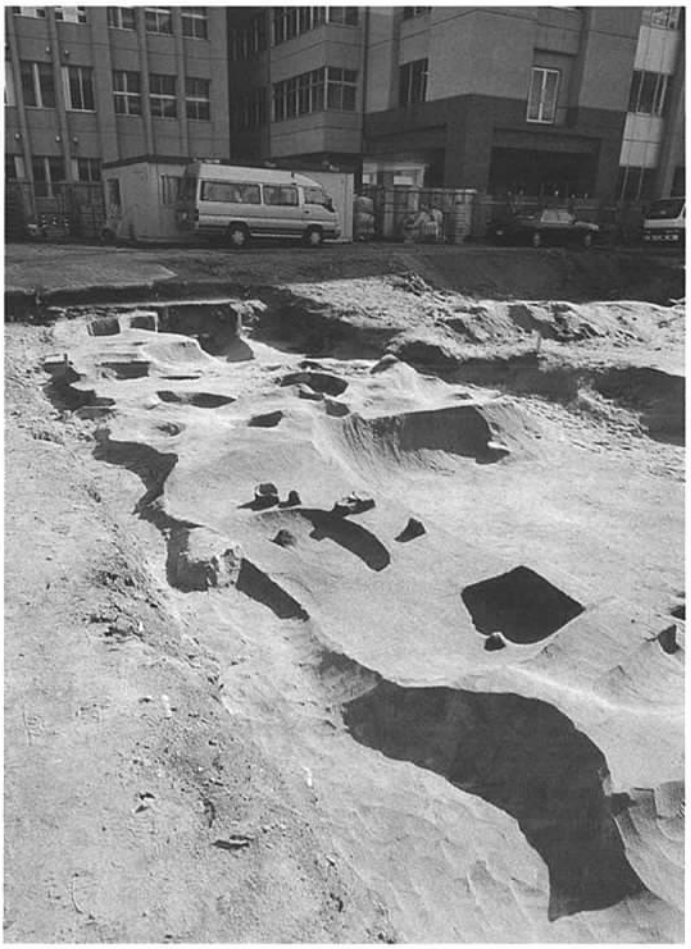
1．37号竪穴住居跡カマド発掘状況２（東から）



2．38号竪穴住居跡（西から）



3．39号竪穴住居跡（北西から）



4．40号竪穴住居跡（北から）



1号竪穴住居跡出土土器集合写真



16-8



16-17



19-71



16-13



19-58



20-91



16-16



20-82



20-94

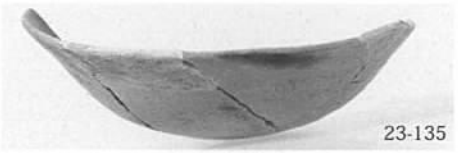
1号竪穴住居跡出土土器(1)


20-84


21-109


22-120


23-133


23-135


24-170


24-172


25-212

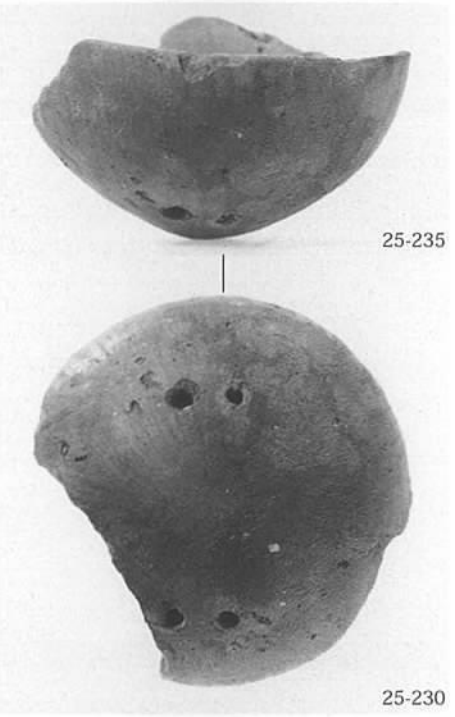

25-219


25-230


25-231


25-233


26-243


25-235
25-230


23-130


23-131

1号竪穴住居跡出土土器(2)


26-250


26-258


30-3


30-5


28-315


27-278


26-257


27-303


31-36

1号竪穴住居跡出土土器(3)・2号竪穴住居跡出土土器(1)


31-29


31-30


31-34


31-35


32-5


32-13


34-4


37-4


34-18


37-3


37-15

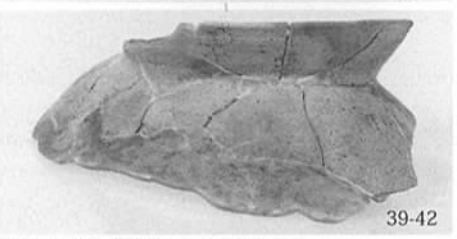

37-5


37-11


38-18


37-7


37-14


39-42

2号竪穴住居跡出土土器(2)・3・4号竪穴住居跡出土土器・5号竪穴住居跡出土土器(1)


38-23


38-36


40-73


38-26


39-49


40-82


39-57


38-35


40-65

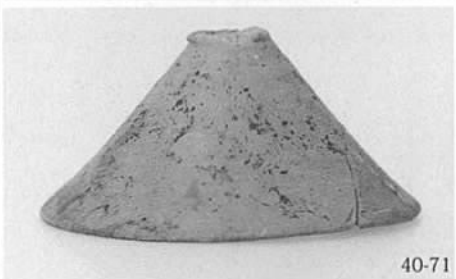

41-85


39-55


40-70


41-98


39-64


40-71


39-58


39-58


42-102

5号竪穴住居跡出土土器(2)


41-89


42-106

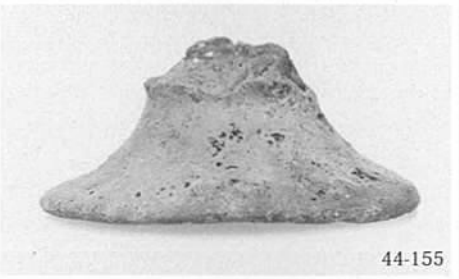

43-120


43-129


44-141


44-146


44-153


44-155


47-1


47-16


47-18


47-10


48-27


48-25

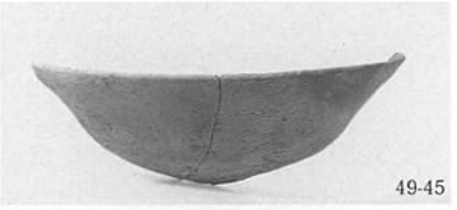

48-28


48-24

5号竪穴住居跡出土土器(3)・6号竪穴住居跡出土土器(1)

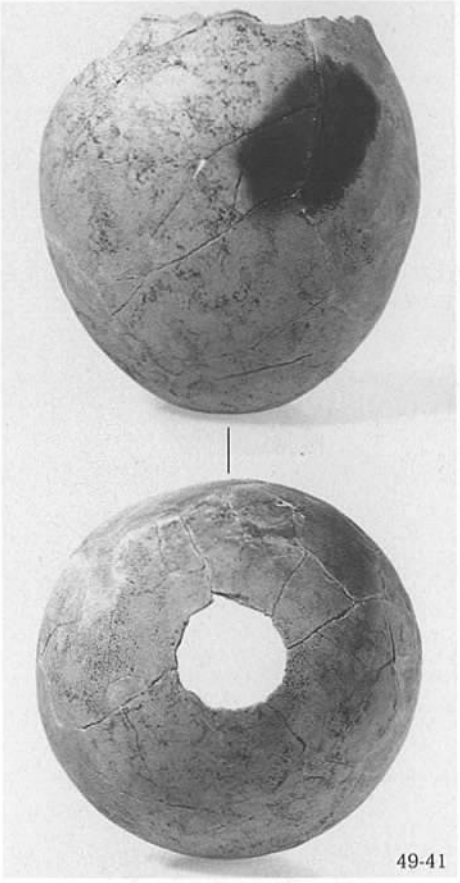

48-29


48-36


49-45


50-60


49-38


49-41


50-65


49-39


50-54


54-22


50-64


50-67


50-69


50-68

6号竪穴住居跡出土土器(2)・7号竪穴住居跡出土土器(1)



7号竪穴住居跡出土土器集合写真



53-6



54-19



55-36



55-38



55-40



55-42



54-23



56-56

7号竪穴住居跡出土土器(2)


54-20


55-37

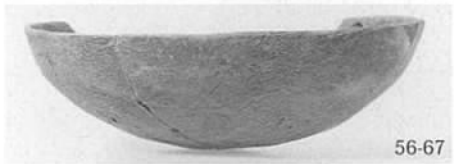

54-24


57-86


56-57


56-71


58-82


56-67

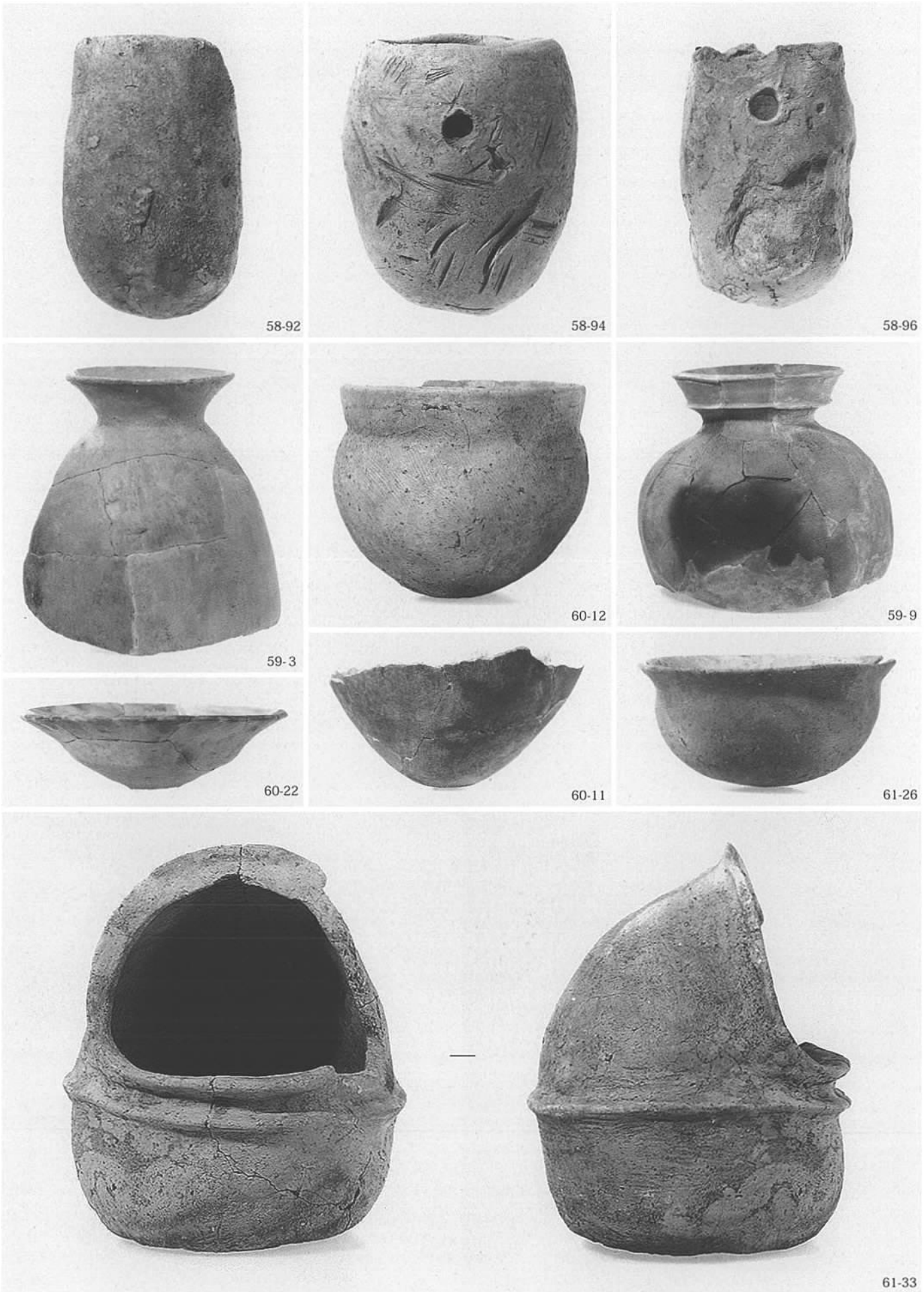

58-78


56-73


58-83

7号竪穴住居跡出土土器(3)

図版34



7号竪穴住居跡出土土器(4)・8号竪穴住居跡出土土器(1)


61-40

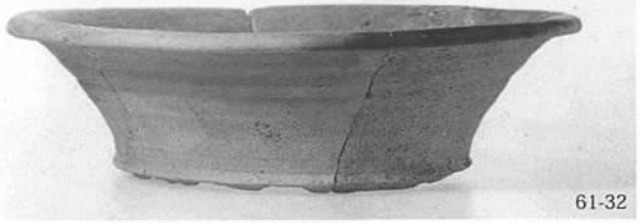

61-37


61-36


61-35


61-41


61-31

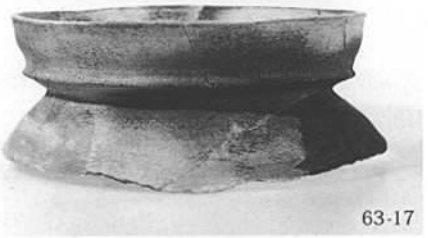

61-32


61-38

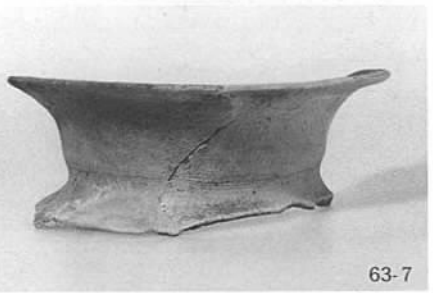

61-39


61-29


63-4


63-17


61-30

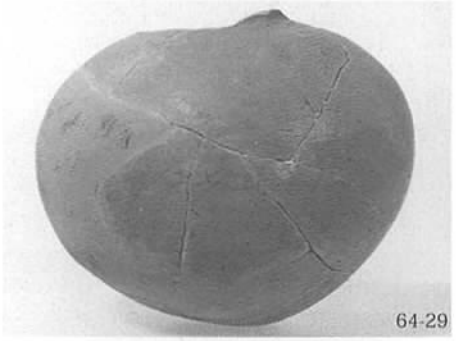

63-7


64-20

8号竪穴住居跡出土土器(2)・9号竪穴住居跡出土土器(1)



9号住居跡出土土器集合写真



64-29



64-31



64-32



64-33



66-73



65-54



66-65



68-112

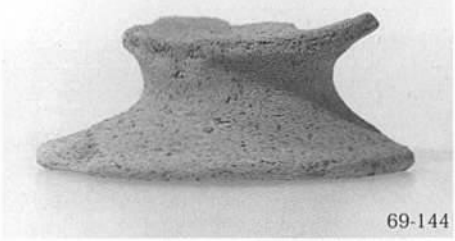
9号竪穴住居跡出土土器(2)


66-74


68-126


68-119


69-136


69-144


69-149


69-150


69-147


69-157


69-145


69-152


70-165


70-168


70-171


70-172


70-173


70-176

9号竪穴住居跡出土土器(3)

図版38


72-14


72-15


72-24


72-28


72-33


75-23


76-30

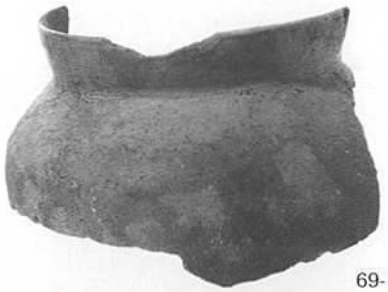

76-31


77-47


77-58


77-70


83-7


69-145


80-11


80-25


81-32


83-12

10～13号竪穴住居跡出土土器・14号竪穴住居跡出土土器（1）


84-19


84-20


84-21


84-22


84-27


84-28


87-4


89-1


89-3


89-10


90-3


90-4

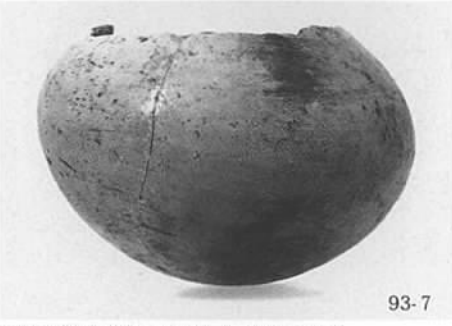

93-23


90-5


90-11


92-1


92-13


93-7

14号竪穴住居跡出土土器(2)・15・17～19号竪穴住居跡出土土器・21号竪穴住居跡出土土器(1)



21号竪穴住居跡出土土器集合写真



93-9



93-11



93-12



93-10



93-15



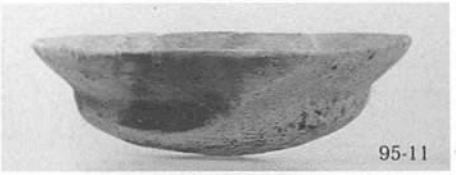
93-24



93-26

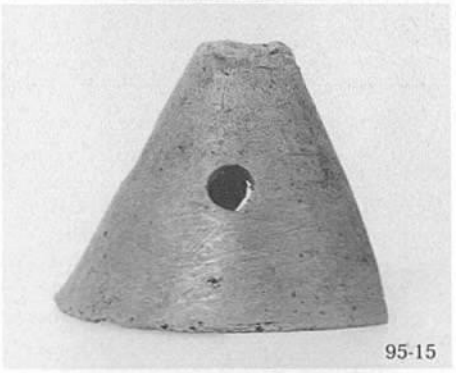
21号竪穴住居跡出土土器(2)


95-3

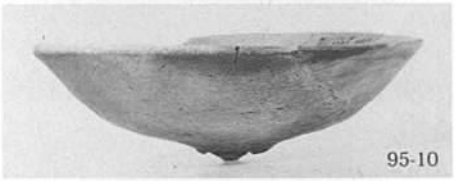

95-11


97-8


95-5


95-15


100-4


95-10


99-11


100-5


95-16


100-7


100-16


95-20


95-18


95-19


99-15


99-17


99-18

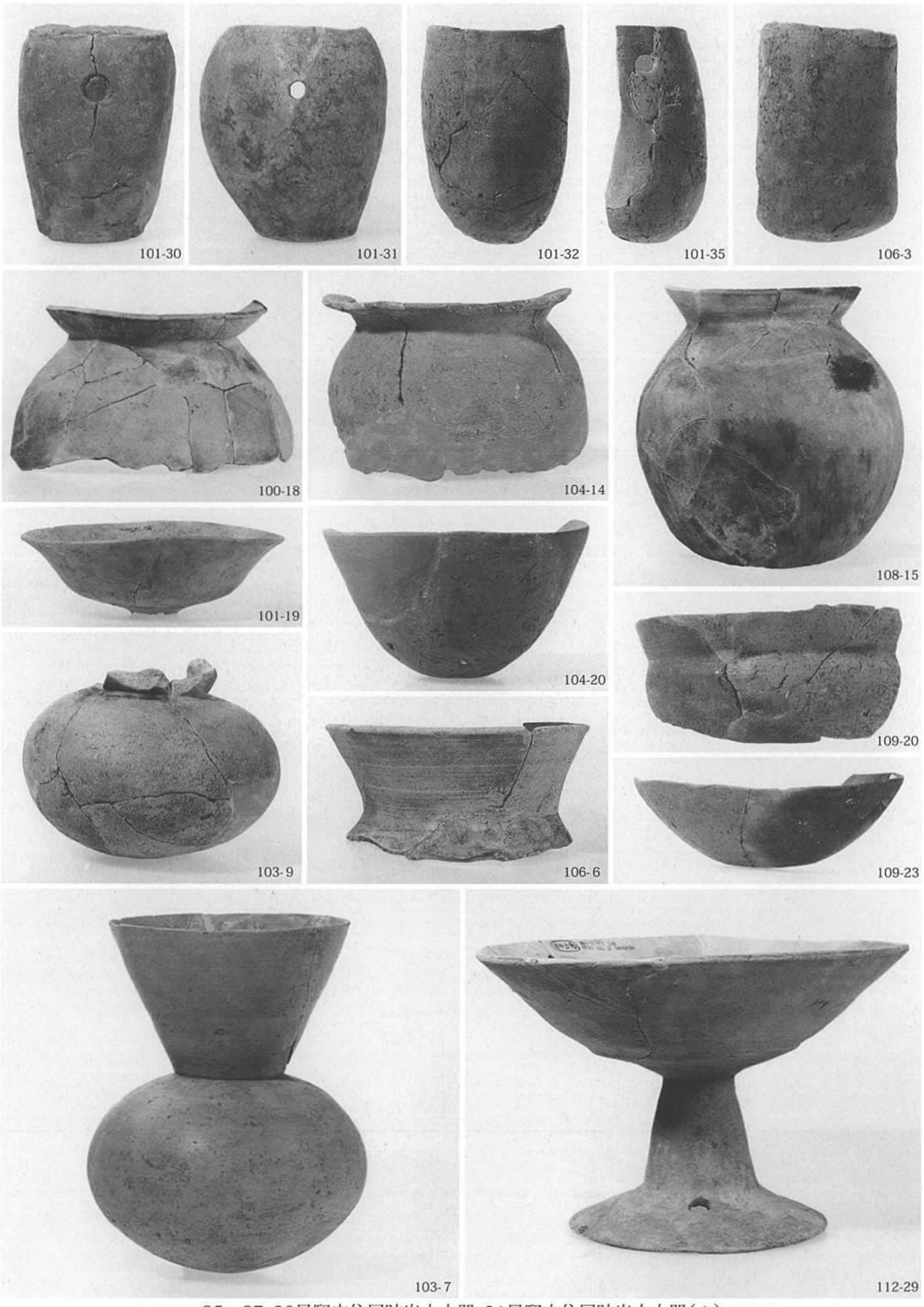

99-19


99-20


99-23

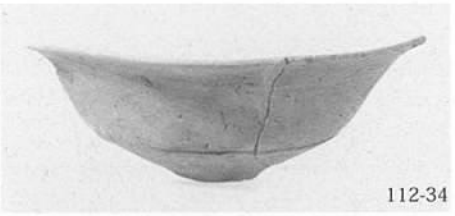

99-22

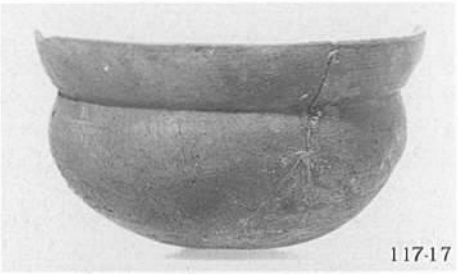
22～25号竪穴住居跡出土土器

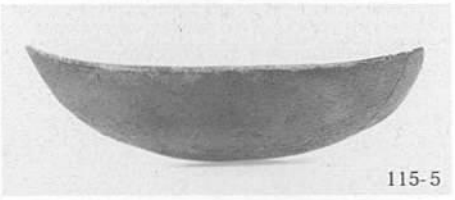


25～27・30号竪穴住居跡出土土器・31号竪穴住居跡出土土器（1）


111-24


112-34


117-17


115-5


120-11


112-44


120-10


120-8


113-61


113-86


117-10


120-15


120-14

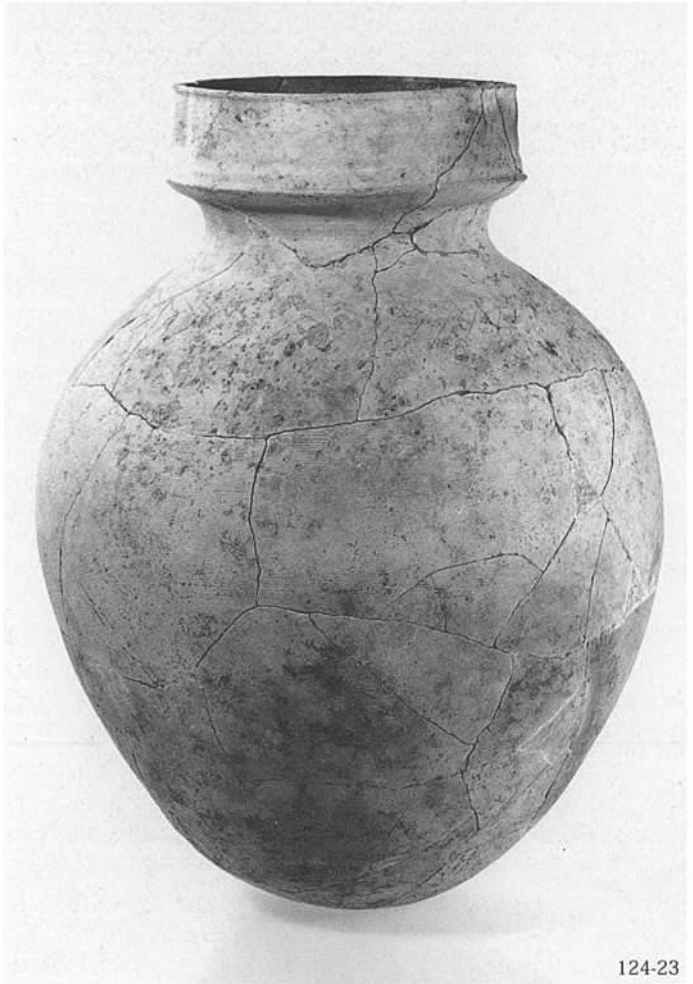

120-7


120-5

31号竪穴住居跡出土土器(2)・32・34～36号竪穴住居跡出土土器



37号竪穴住居跡出土土器集合写真



124-23



127-75

37号竪穴住居跡出土土器（1）


123-14


123-19


123-22


123-18


124-24


124-33


124-35


124-36


125-51


125-49


124-40


124-41


125-47


125-53


125-52

37号竪穴住居跡出土土器(2)

図版46


126-57


125-54


126-67


126-68


127-71


127-73


127-74

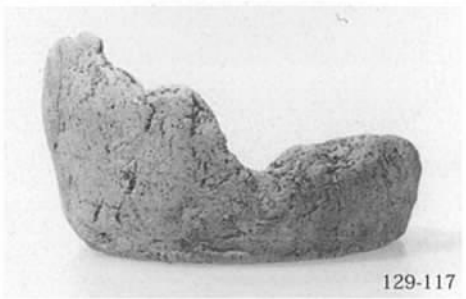

128-87


129-102


128-86


129-96


129-98


129-117

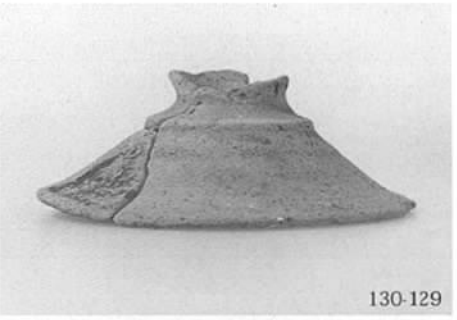

129-107

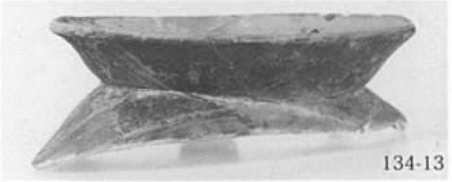

130-123

37号竪穴住居跡出土土器(3)


130-135


130-132


130-129


134-13


136-47


136-38


131-145


131-149


131-146


131-151


130-138


133-2


134-3

37号竪穴住居跡出土土器(4)・38号竪穴住居跡出土土器(1)


134-6


135-22


135-23


135-19


135-25


136-38


134-18


136-31


136-45


135-20

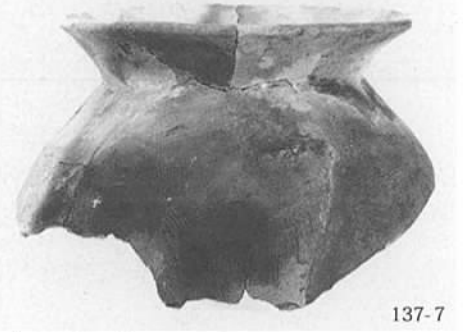

136-37


136-48

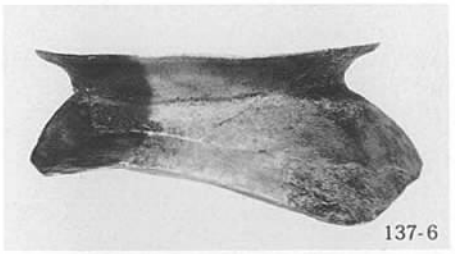

136-50

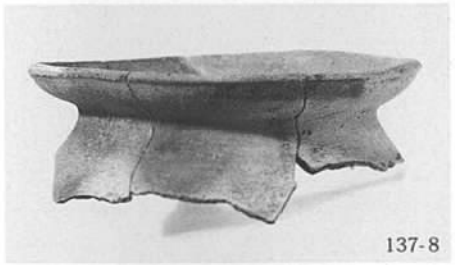

135-21


136-42


137-7

38号竪穴住居跡出土土器(2)・39号竪穴住居跡出土土器(1)


137-6


137-8


138-18

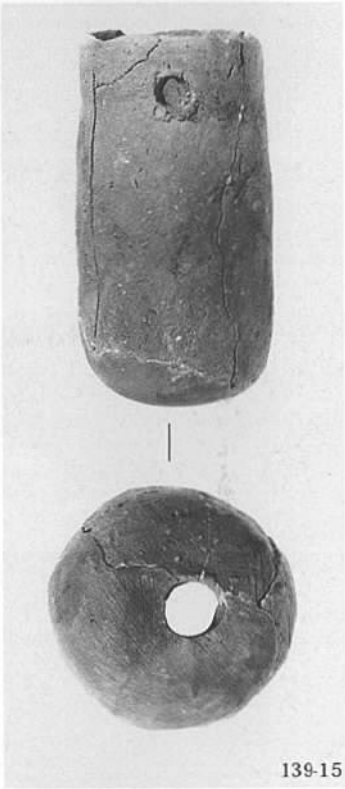

138-22


139-12


138-40

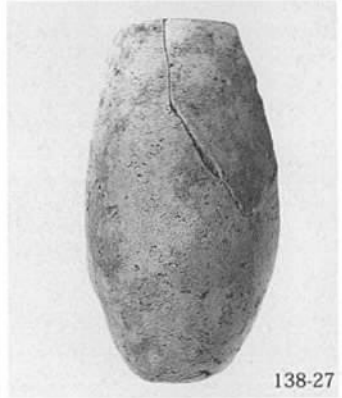

138-30


138-33


139-15


138-36


138-37


138-27


138-24


139-5

39号竪穴住居跡出土土器(2)・40号竪穴住居跡出土土器(1)


144-148


144-147


144-143


144-142


139-11


141-50


140-21


141-61


141-62


140-14


142-72


142-69

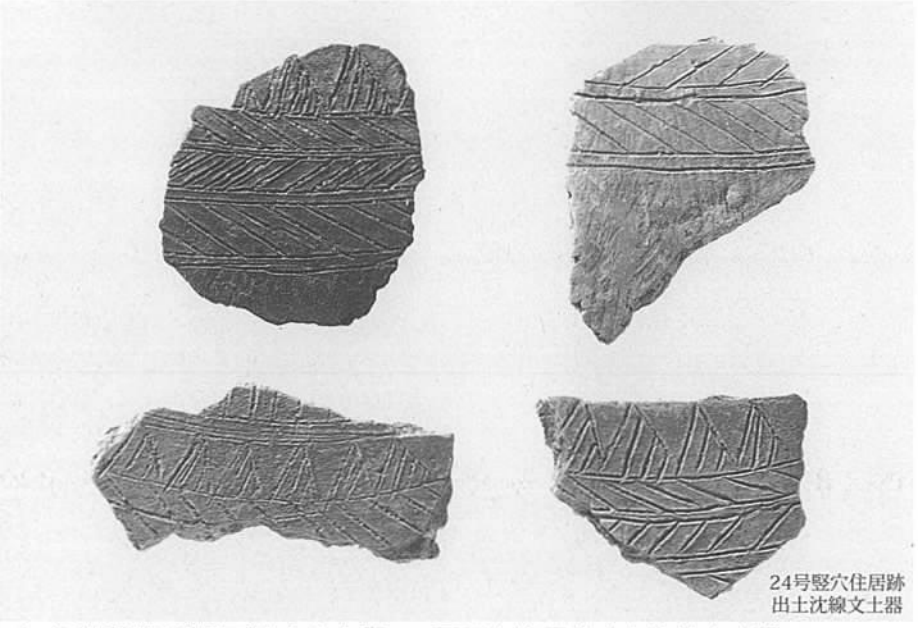

140-16


142-66


142-70


140-17

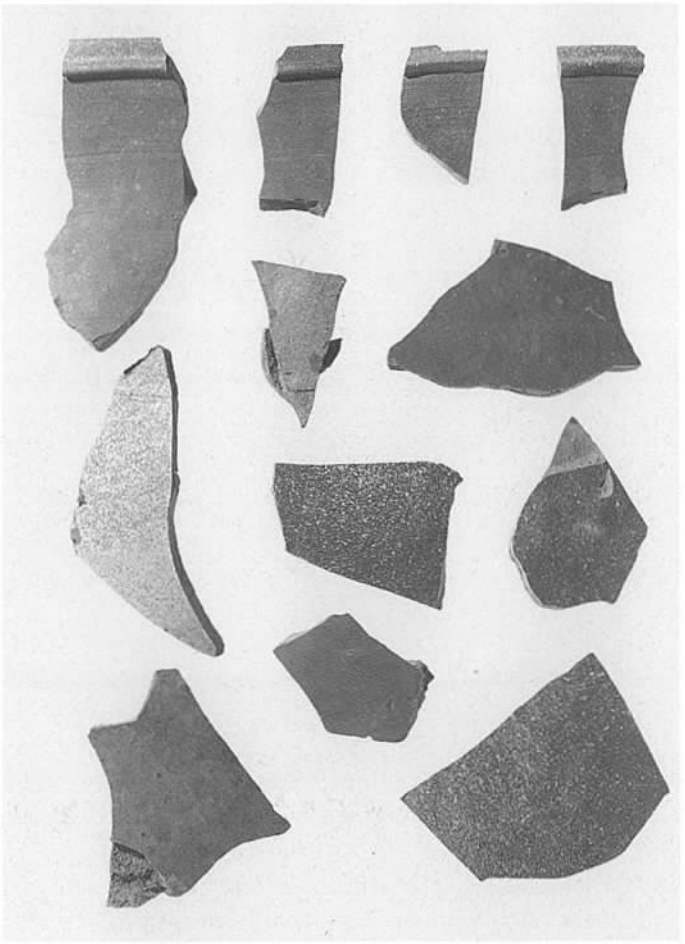

141-32


24号竪穴住居跡
出土沈線文土器

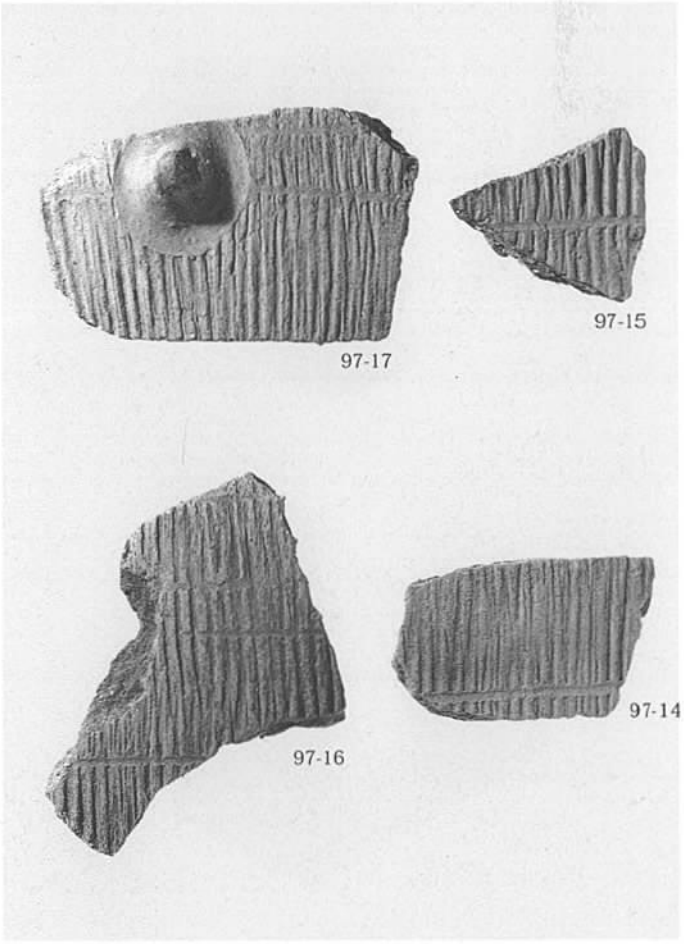
40号竪穴住居跡出土土器(2)・近世遺構・遺構面等出土土器・24号竪穴住居跡出土沈線文土器



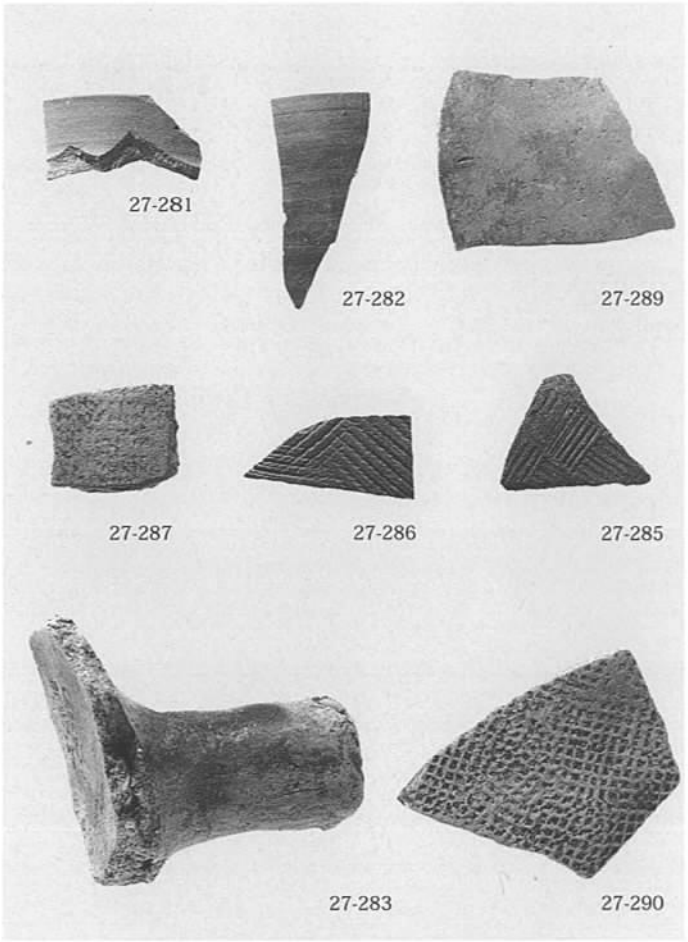
1．17次出土朝鮮半島系土器



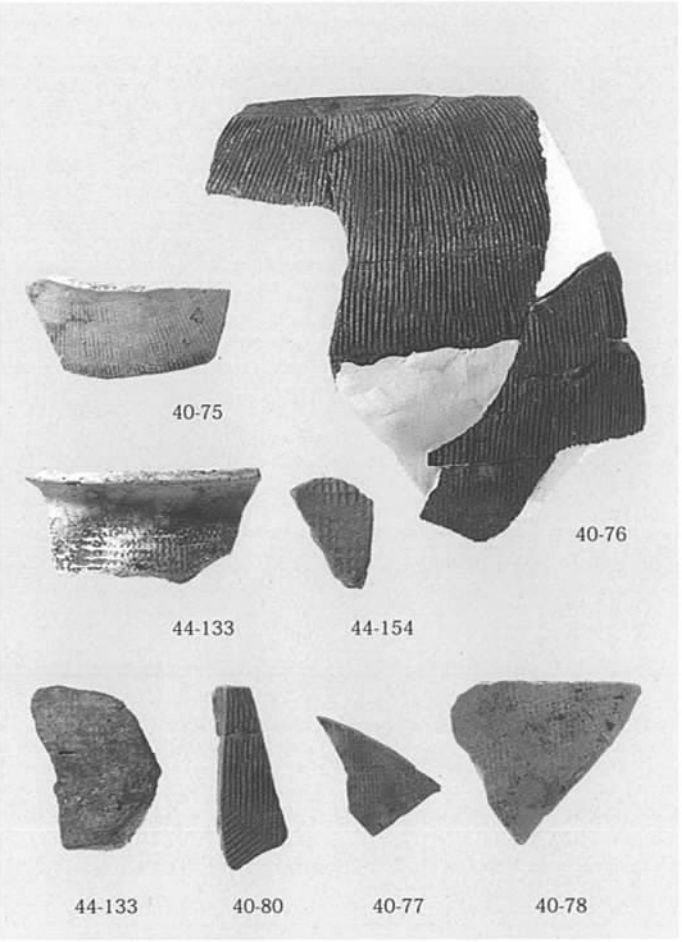
2．5号竪穴住居跡出土陶質土器



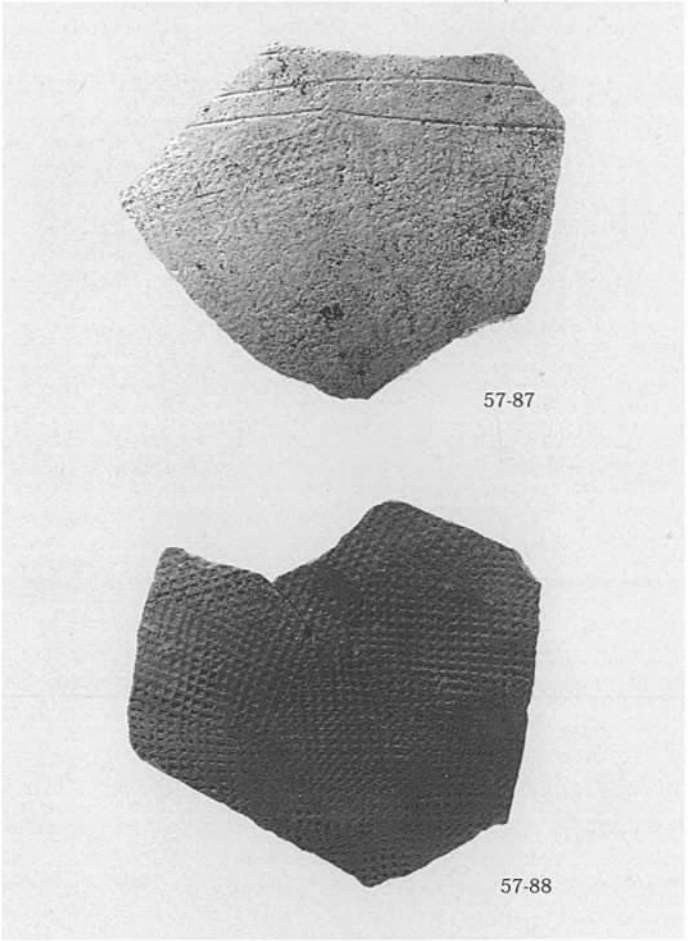
3．23・25・26号竪穴住居跡出土軟質土器



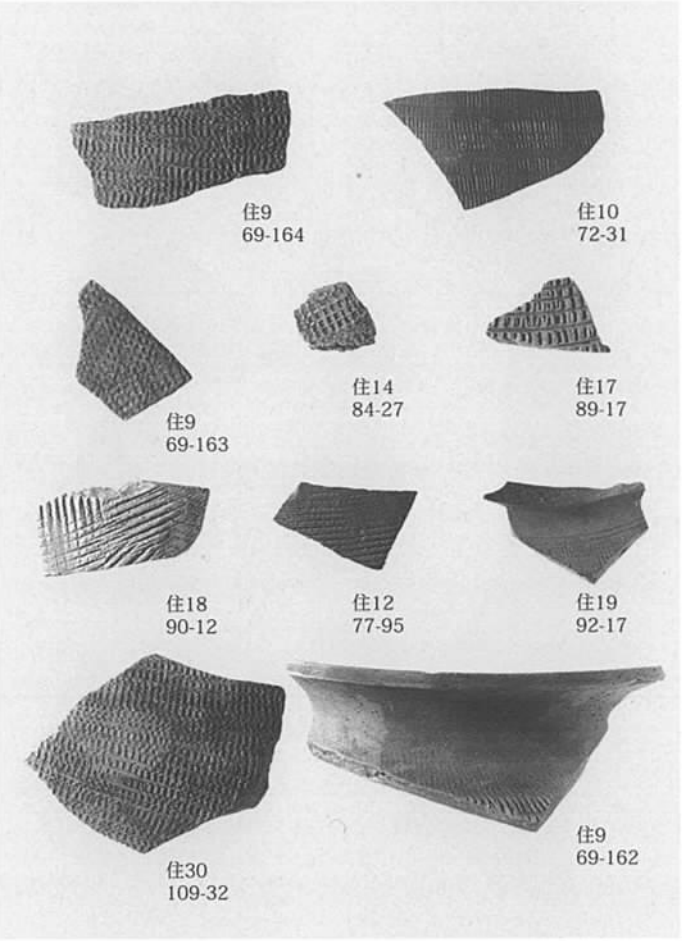
1．1号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器



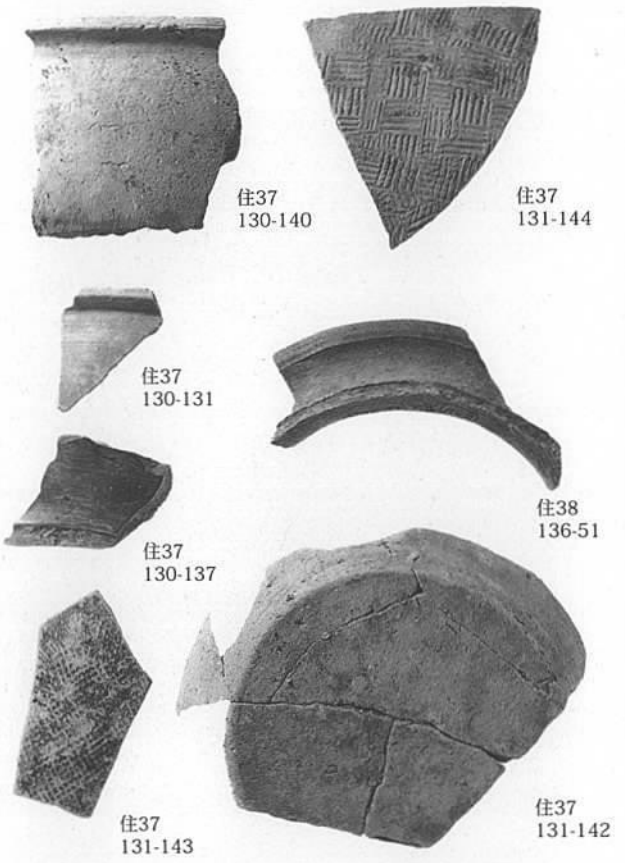
2．5号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器



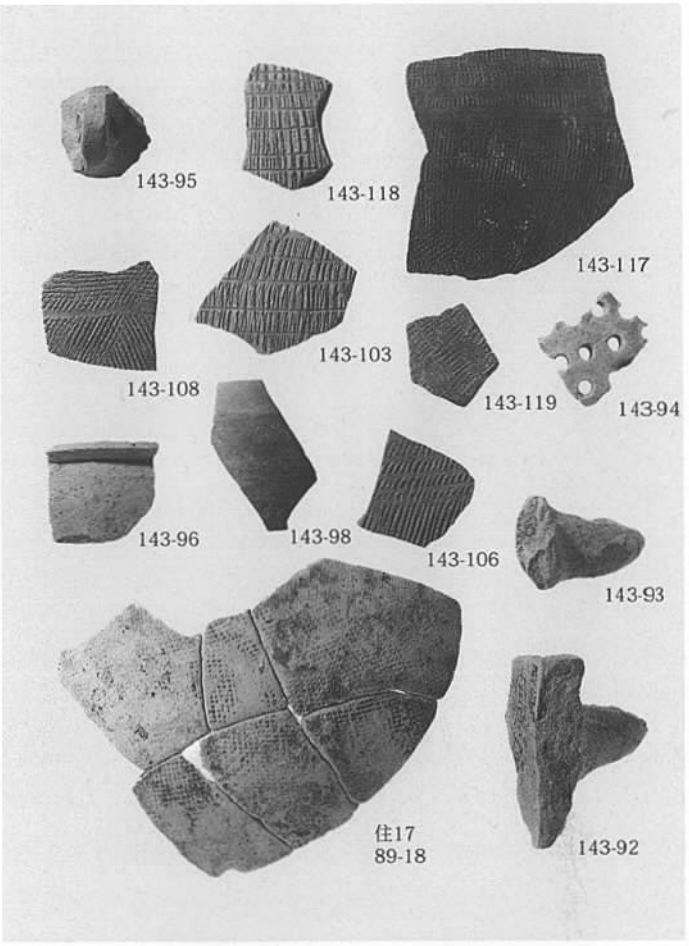
3．7号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器



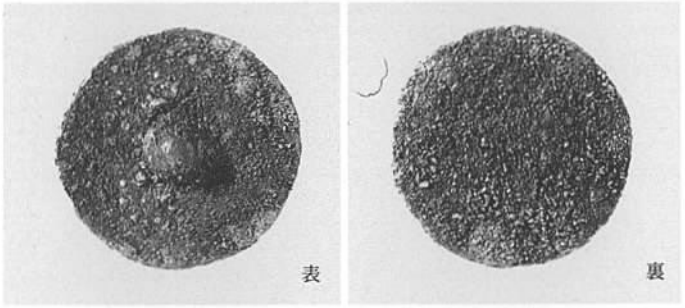
4．9・10・12・14・17～19・30号竪穴住居跡出土
朝鮮半島系土器



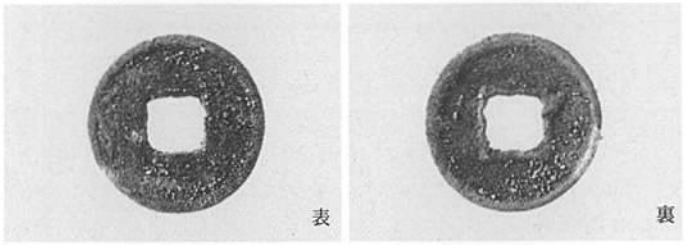
1．37・38号竪穴住居跡出土朝鮮半島系土器



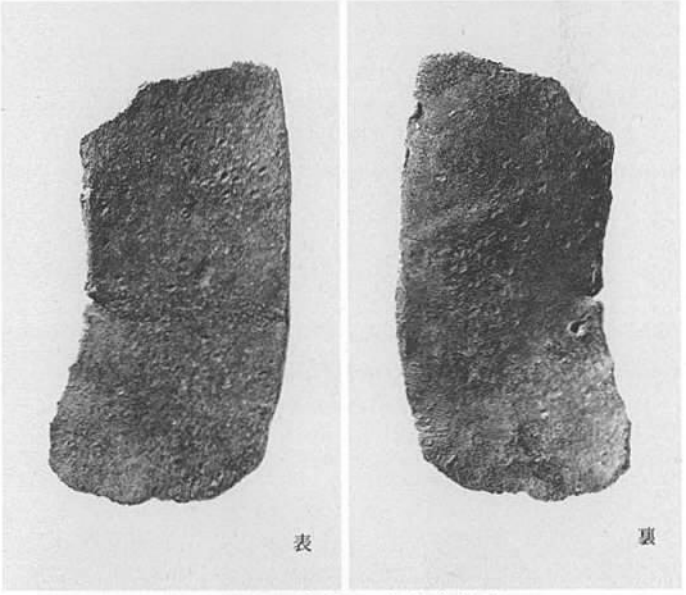
2．近世遺構・遺構面等出土朝鮮半島系土器



3．1号竪穴住居跡出土無文銅鏡



4．38号竪穴住居跡出土貨泉

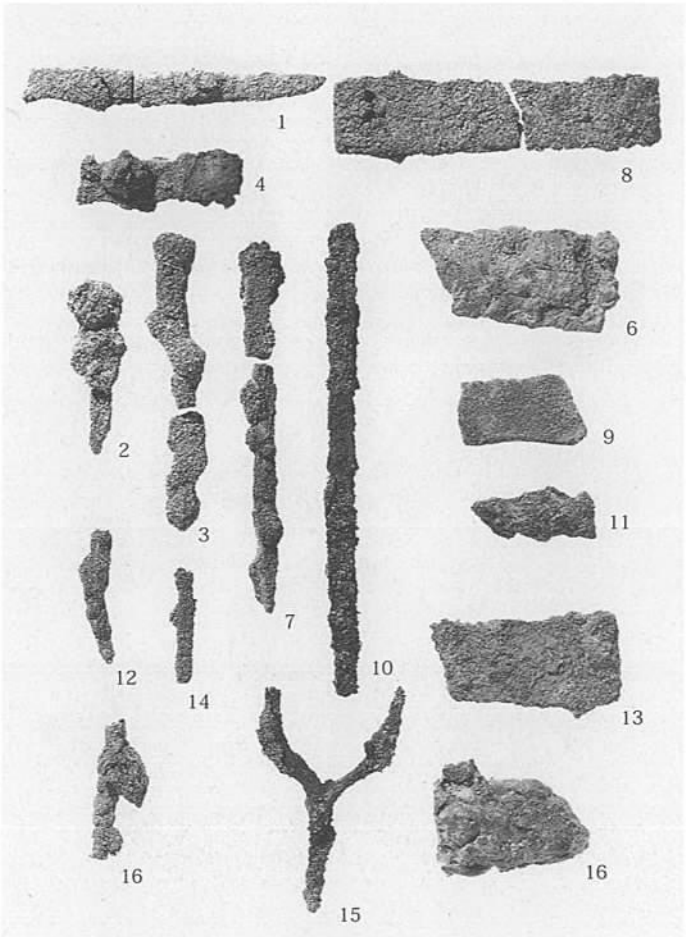


5．5号竪穴住居跡出土鉛片

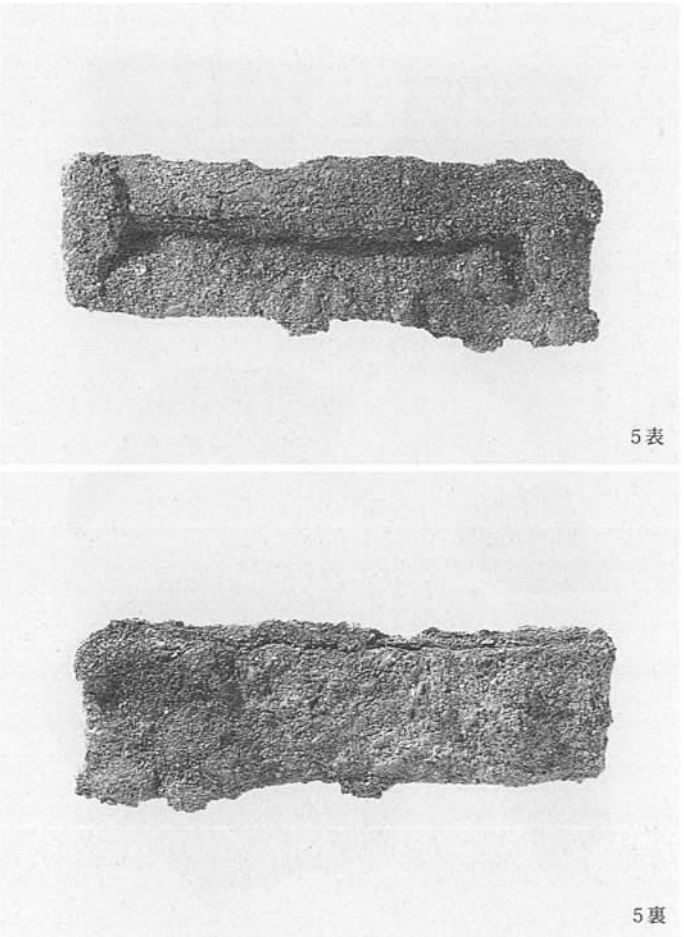


6．31号竪穴住居跡出土管玉・37号竪穴住居跡出土土製模造鏡

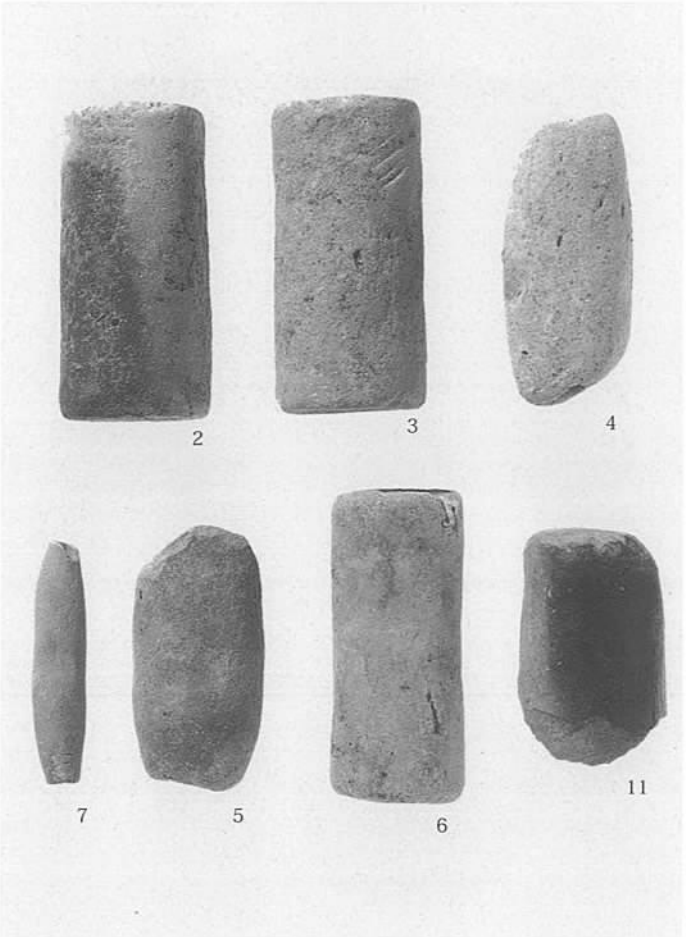
図版54



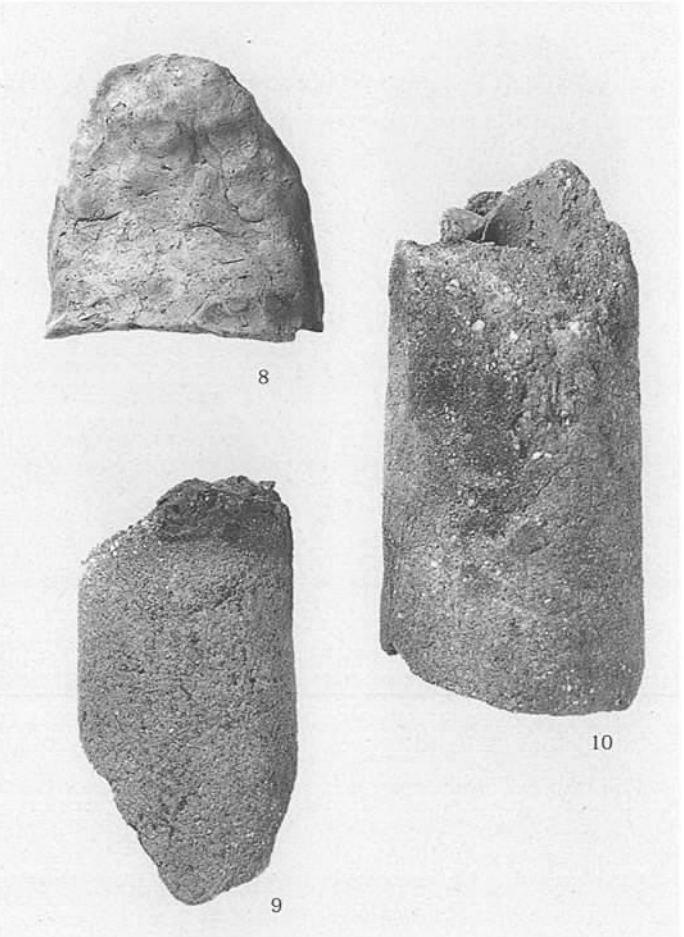
1．竪穴住居跡出土鉄器



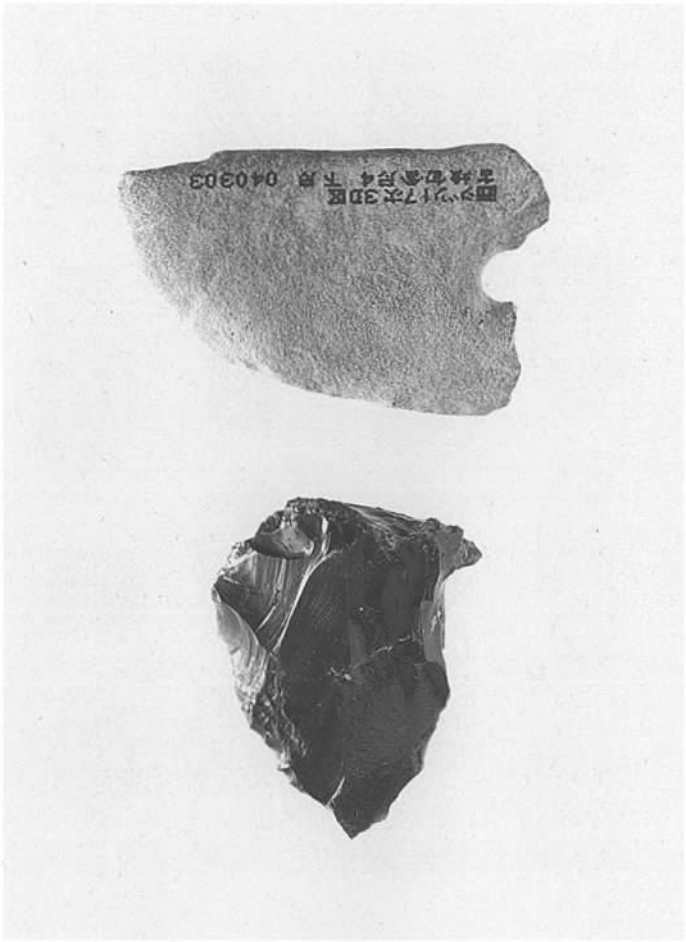
2．7号竪穴住居跡出土手鎌



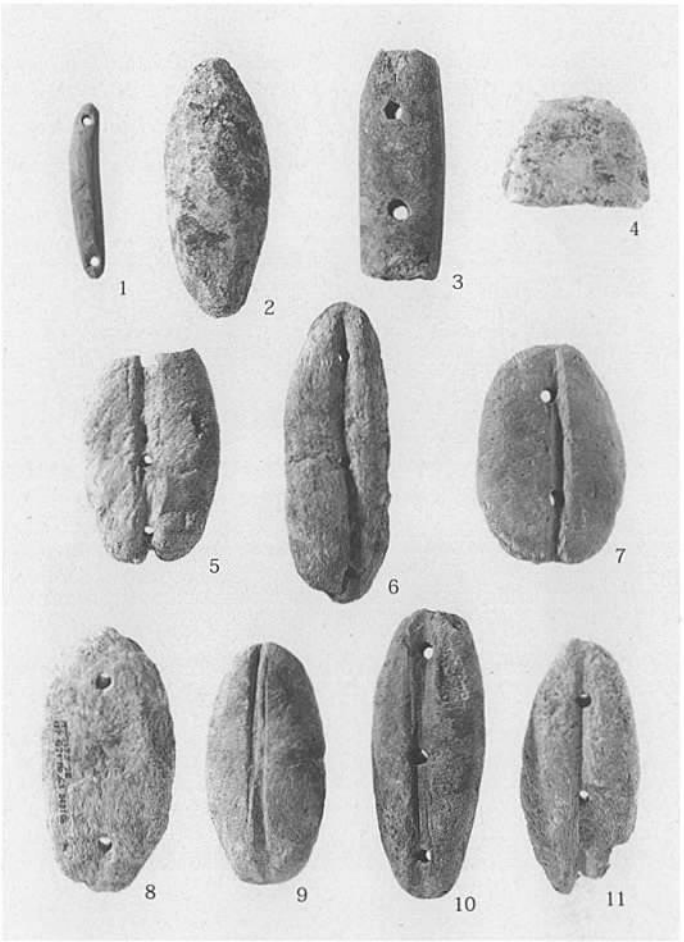
3．土製品(1)



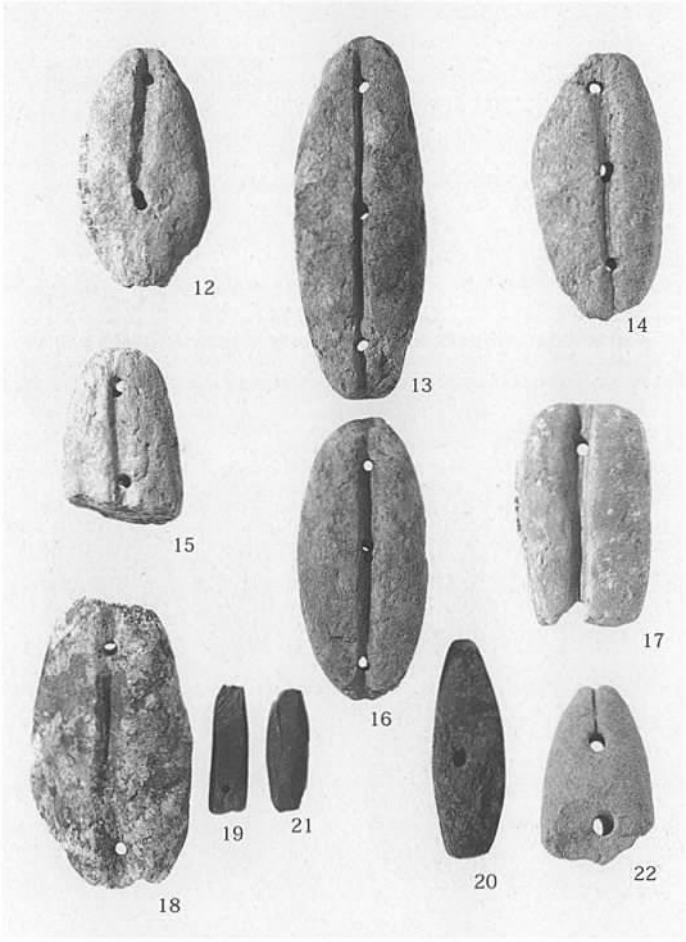
4．土製品(2)



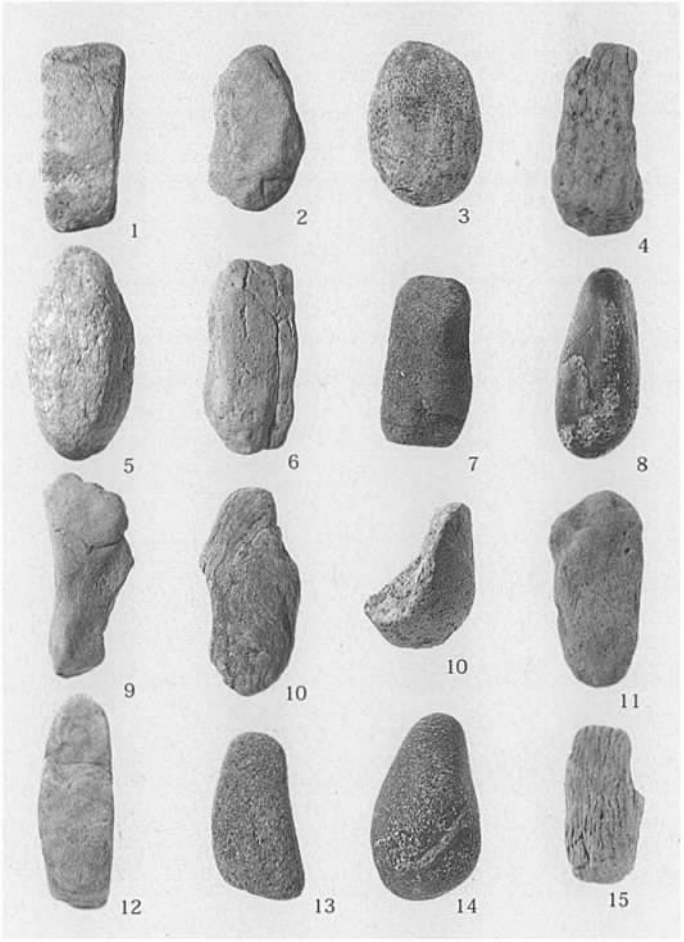
1．弥生時代以前の石器



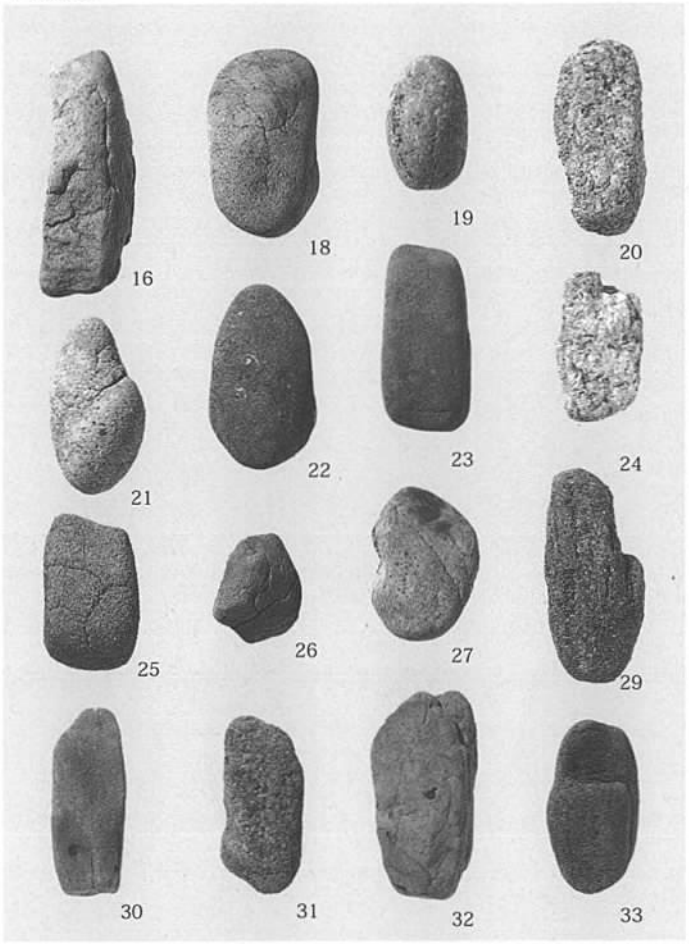
2．石錘（1）



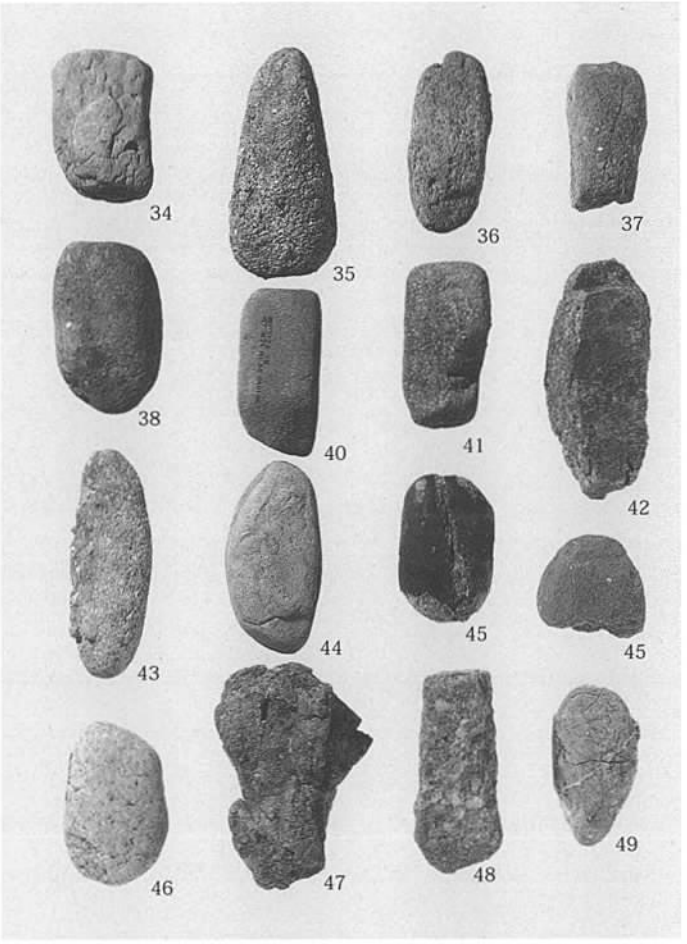
3．石錘（2）



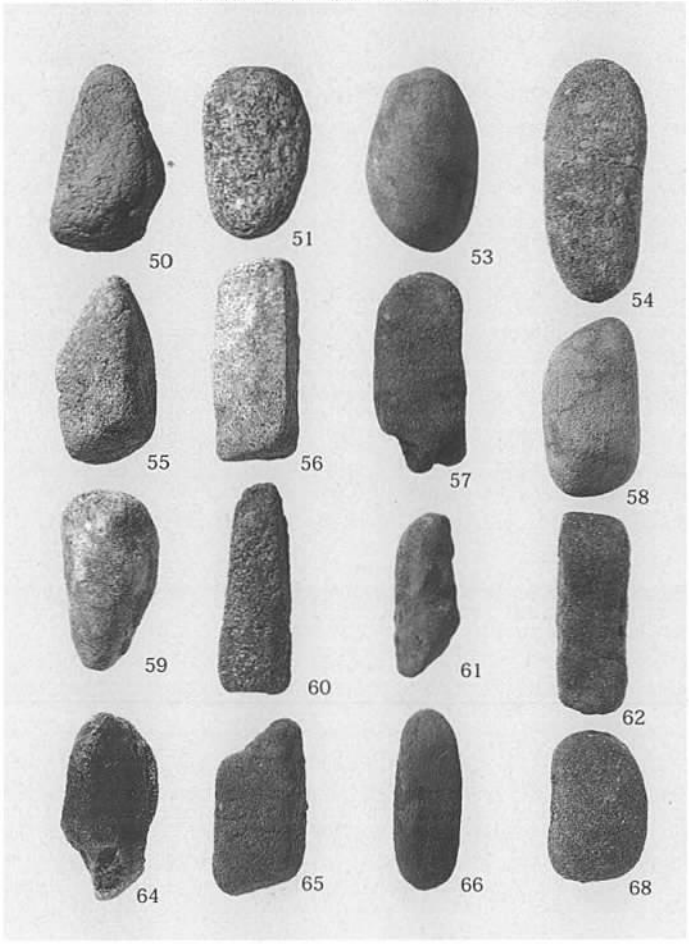
4．7号竪穴住居跡出土自然石石錘（1）



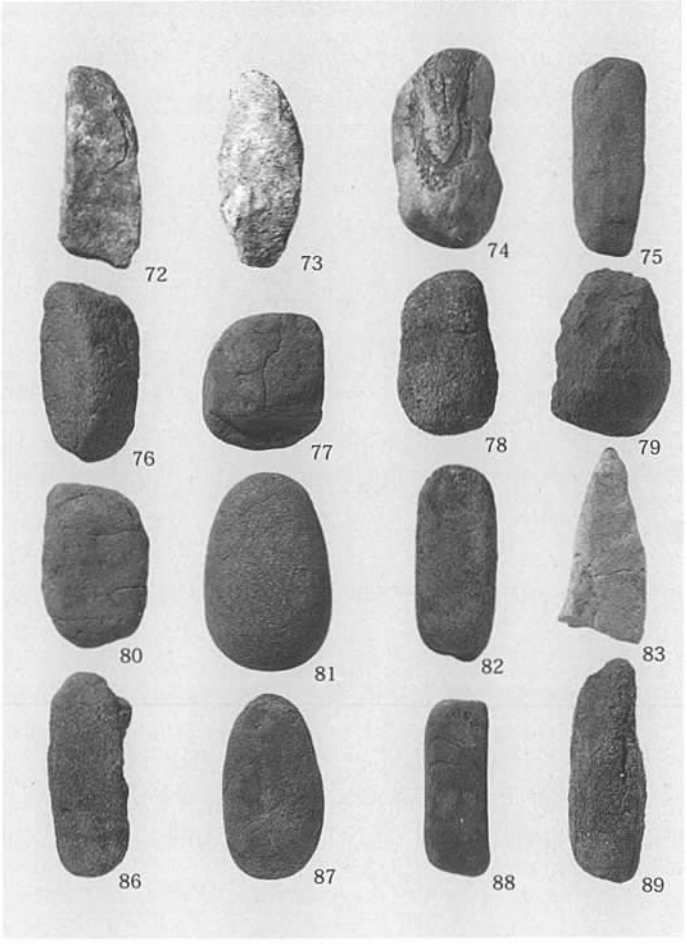
1．7号竪穴住居跡出土自然石石錘（2）



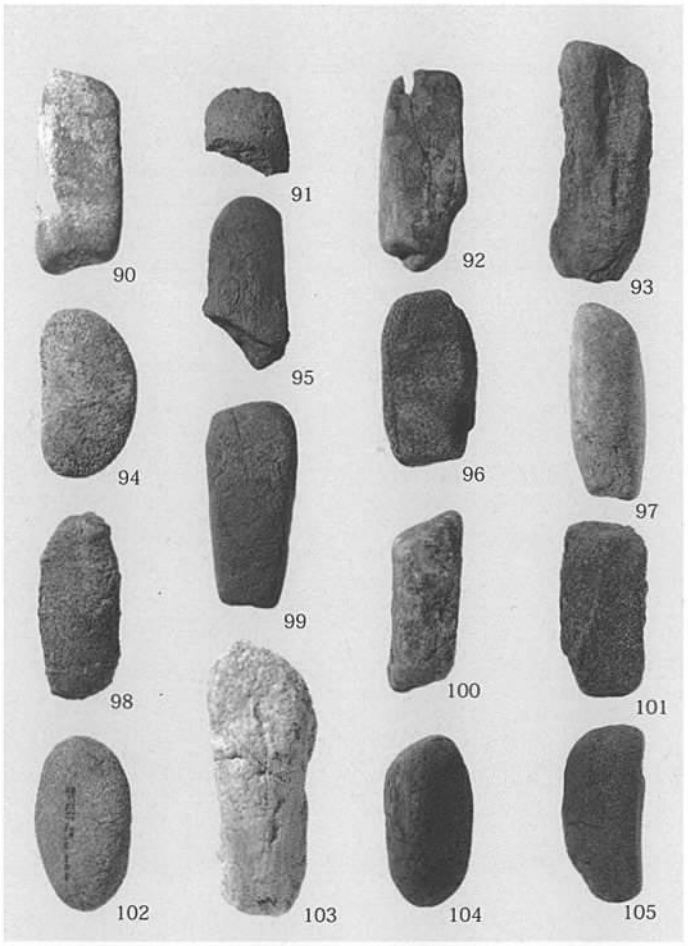
2．7号竪穴住居跡出土自然石石錘（3）



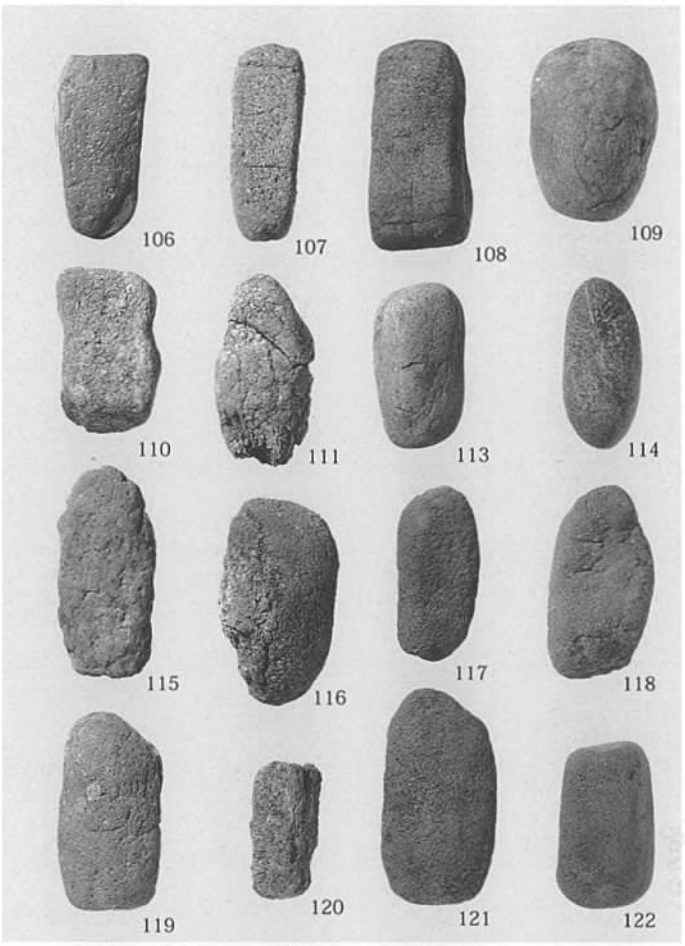
3．7号竪穴住居跡出土自然石石錘（4）



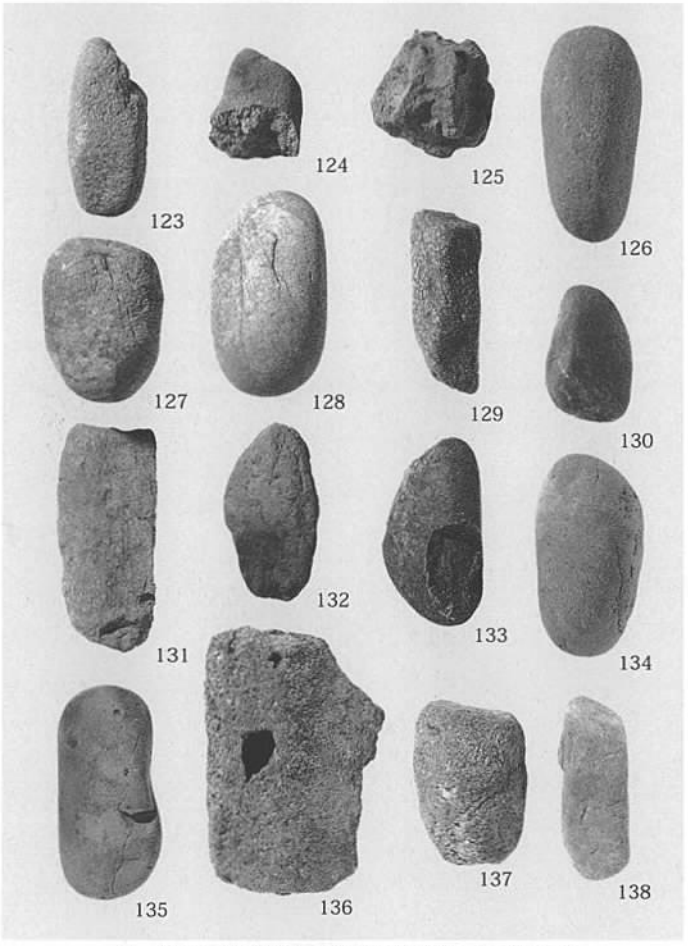
4．7号竪穴住居跡出土自然石石錘（5）



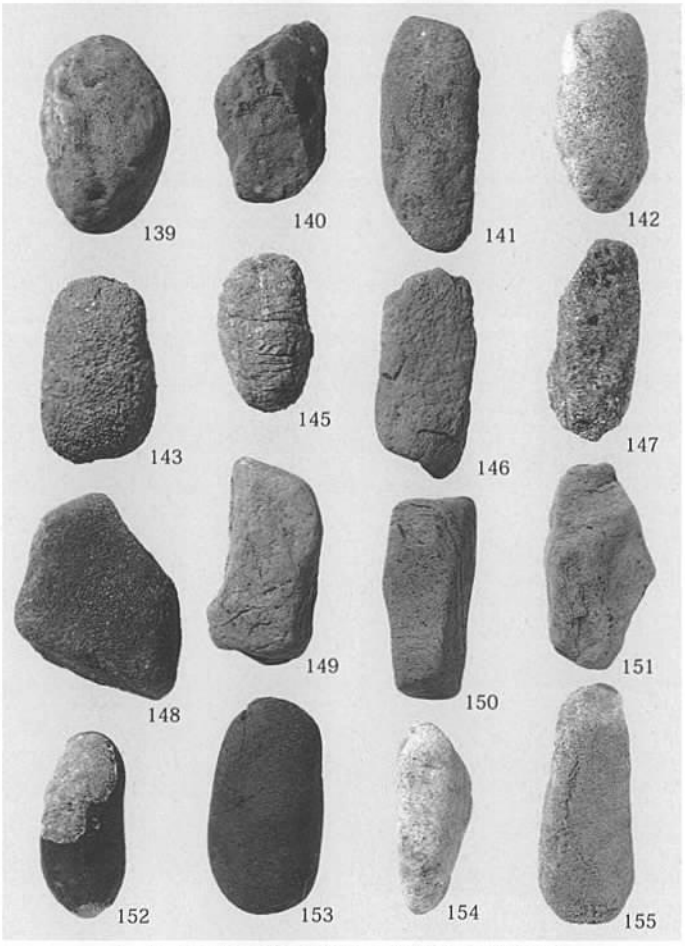
1．7号竪穴住居跡出土自然石石錘（6）



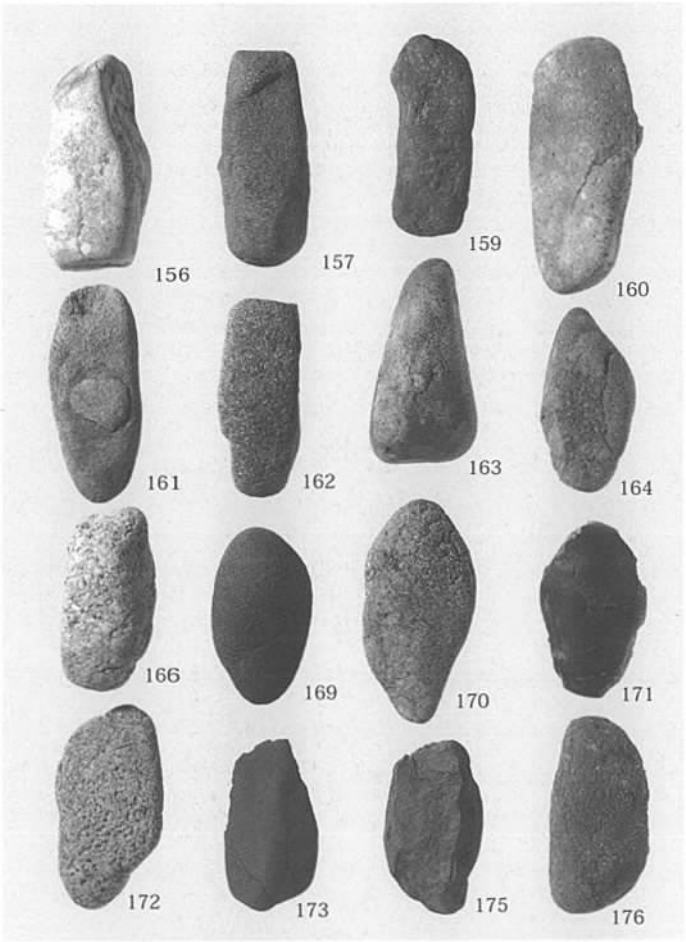
2．7号竪穴住居跡出土自然石石錘（7）



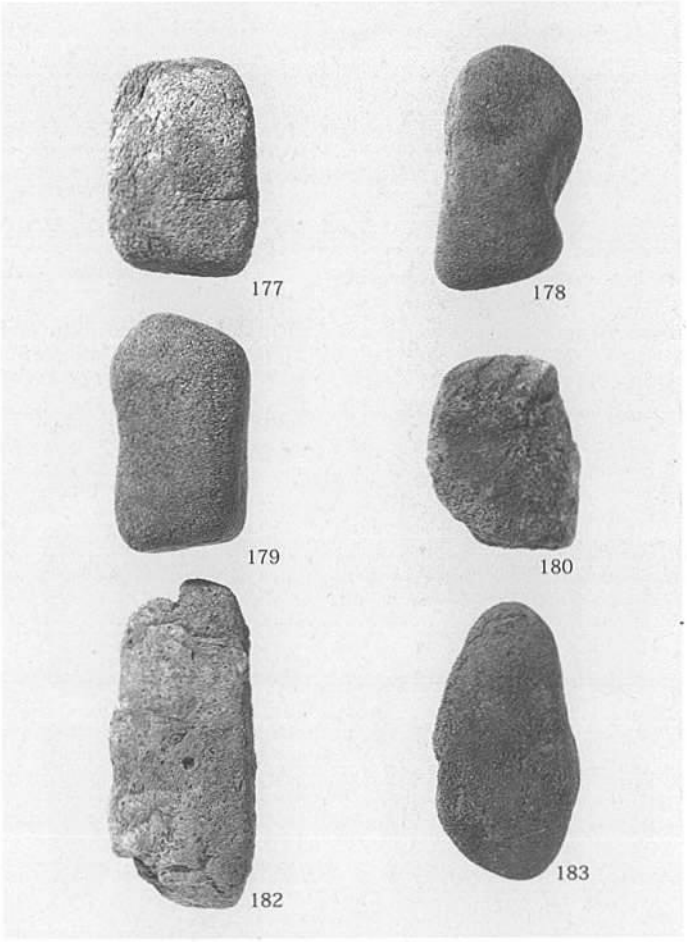
3．7号竪穴住居跡出土自然石石錘（8）



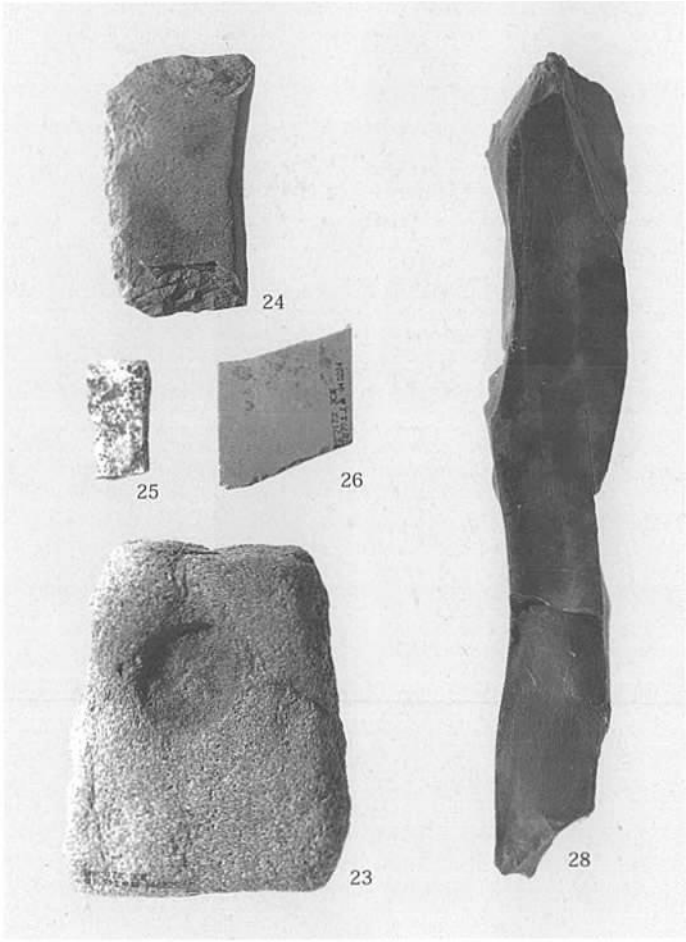
4．7号竪穴住居跡出土自然石石錘（9）



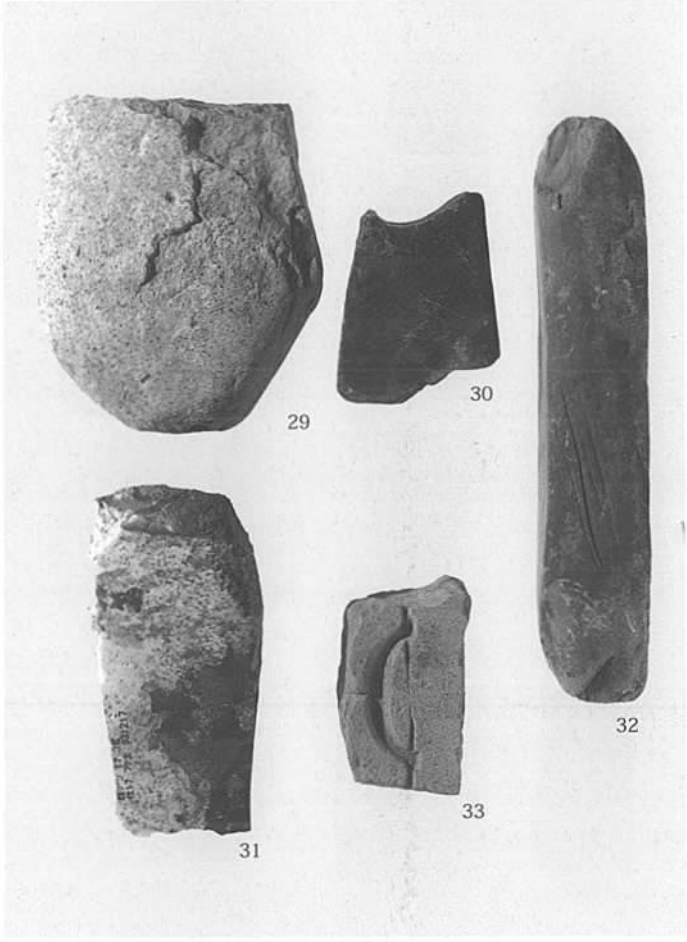
1．7号竪穴住居跡出土自然石石錘(10)



2．7号竪穴住居跡出土自然石石錘(11)



3．石器(1)



4．石器(2)

報告書抄録

ふりがな	にししじんまちいせき
書名	西新町遺跡Ⅶ
副書名	県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告書6
巻次	
シリーズ名	福岡文化財調査報告書
シリーズ番号	第208集
編著者名	重藤 輝行　坂本 真一
編集機関	福岡教育委員会
所在地	〒812-8575　福岡市博多区東公園7番7号
発行年月日	2006年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東緯 °′″	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
西新町遺跡 17次 (にししじんまち いせき)	福岡市 (ふくおかし) 早良区西新 (さわらくにししん) 6-1-10	401307	020240	33° 34′ 50″	130° 21′ 30″	20030826 ～ 20040315	2,000	学校 (県立修猷館高等学校改築)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
西新町遺跡 17次	集落跡	古墳時代前期	竪穴住居跡　39棟	土師器・鉄器・石器	
		近世	土坑	陶磁器・瓦・窯道具・土人形	

福岡県行政資料	
分類番号 ＪＨ	所属コード ２１３３０５１
登録年号 17	登録番号 8

西新町遺跡Ⅶ

福岡県文化財調査報告書　第208集

平成18年3月31日

発行　福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園７番７号

印刷　久野印刷株式会社

福岡市博多区博多駅前2丁目17－1